

新・旧優生学とナチ断種法批判に関する日独比較史

——平塚らいてうの優生思想の再考から

(課題番号 17530422)

平成17年度～平成19年度 科学研究費補助金(基盤研究(C))
研究成果報告書

平成20年2月

研究代表者 岡田 英己子 (おかだ えみこ)

(首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 社会学コース 教授)

首都大学東京図書情報センター
☎ 042(677)2404



10001231811

新・旧優生学とナチ断種法批判に関する日独比較史
——平塚らいてうの優生思想の再考から

(課題番号 17530422)

平成17年度～平成19年度 科学研究費補助金(基盤研究(C))
研究成果報告書

平成20年2月

研究代表者 岡田 英己子 (おかだ えみこ)

(首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 社会学コース 教授)

首都大学東京図書館情報センター
10001231811

はしがき

本研究は「新・旧優生学とナチ断種法批判に関する日独比較史——平塚らいてうの優生思想の再考から」と題し、平成17年度から平成19年度までの3年間にわたり、科学研究費補助金(基盤研究(C))の交付をうけて行ったものである。ここに研究成果を報告する。

史資料収集に際してお世話になった、日本とドイツの関係各位に謝意を表す。

【平成17年度～平成19年度の経過、成果・活動】

研究組織

研究代表者 岡田英己子(首都大学東京)

研究協力者 Prof. Sieglind Luise Ellger-Rüttgardt(フンボルト大学リハビリテーション研究所)

交付決定額(配分額)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|----------|--------|----------|
| 平成17年度 | 1,200 千円 | 0 千円 | 1,200 千円 |
| 平成18年度 | 1,100 千円 | 0 千円 | 1,100 千円 |
| 平成19年度 | 1,100 千円 | 330 千円 | 1,430 千円 |
| 合計 | 3,400 千円 | 330 千円 | 3,730 千円 |

研究発表

- (1) 雑誌論文：岡田英己子(2006)「優生学と障害の歴史研究の動向——ドイツ・ドイツ語圏と日本との国際比較の視点から」『特殊教育学研究』 日本特殊教育学会 第44巻3号 2006年9月 179-190. (本稿ではⅢ部年表・Ⅲ部文献リストに一部収録)
- (2) 学会発表：岡田英己子(2005b)「平塚らいてうの優生思想を考える——『社会的なるもの』の制度化を求めた第一波フェミニズム運動の挫折?」『社会事業史学会第7回大会要旨集』(於：長野大, 2005年5月14日) 44-45.
- (3) 図書：岡田英己子(2005c)「コラム X：ドイツの福祉に社会(sozial)の冠が付く時——社会事業の登場」(若尾祐司・井上茂子編著『近代ドイツの歴史——18世紀から現代まで』ミネルヴァ書房) 2005年5月 219-220.

※岡田英己子(2005a)「平塚らいてうの母性主義フェミニズムと優生思想——『性と生殖の国家管理』断種法要求はいつ加筆されたのか」『人文学報』 東京都立大学人文学部 第361号(社会福祉学21) 2005年3月 23-97. (これは2005年3月刊の論文であるが、本稿はこの続編であるので付記する。本稿では主に註で説明・要約として含めた)

学習会・関連テーマでの講演会などの開催と作業経緯

市民女性史の学習会を年に数回、定期的に学内で開催し、院生なども参加する時があった。1年目には、「平塚らいてうの優生思想を考える」資料刊行研究会として講演会を3回開催した(2005年6月5日石崎昇子氏、7月17日折井美耶子氏、10月30日米田佐代子氏)。2年目は1回(2006年12月20日:永原紀子氏)設定し、情報交換と専門知識の補填も行った。4名の講師は全員が平塚らいてうと日本近現代女性史の専門家である。

平塚らいてうの優生思想の再考に関しては、仮説検証も、その他の作業も、準備期間が長かったこともあり、比較的スムーズであった。

その一方で、「私は断種法の効果に疑問であった」式の弁明(いわゆるナチ断種法批判言説)のためのドイツの障害当事者団体調査は難航し、計画は1年目終結時から変更を余儀なくされる。戦後に国連関係者が当該団体を創設したというのは表向きの筋書きで、実質的にはドイツ人精神医学者の主導権で設立準備がされた。その中心者がナチ断種法・安楽死計画に関与したことが1950年代末に判明、警察司法の尋問を受け、直後に彼はスイス山岳地帯で転落死する。その経緯はドイツでもほとんど知られていない。現時点まで関係者への筆者の聴取申し込みに対する明確な回答はない。この間、国内外で史資料収集は続行。2年目からは主にベルリンで行った。州立図書館、フンボルト大学リハビリテーション研究所、医学部図書館、ドイツ社会問題研究所、アリス・ザロモン大学図書館が主であった。

この3ヵ年の期間は、ドイツ関連機関の調査の困難さが、1年度目末から早くも予見されたために、ナチ断種法の日本への影響力を、平塚らいてうと永井潜の優生思想から読み解くことに比重を置いた。2年度目は、永井潜の足跡を求めて、ゲッチンゲン他の調査を行った。彼の住まいは発見できたが、大学在学中の個人記録は残っていなかった。つまり、平成18年度からは科研申請時から予定していたとはいえ、副題に時間の大半を費やした。

優生学の歴史研究に目立つのが初めに結論ありき式の論述の展開である。ひとたび誤れる結論が先行するや、そこに向かって史資料の操作が生じ、さらに孫引きも加わりでの悪循環が続く。そうした歴史研究方法論の是正の意味も込めて、史資料収集・整理と、年表・著作解題の作成を優先し、そこから仮説を浮上させ、検証をし、うまくいかなければまたそれを繰り返すという、かなりの根気を要する年月であった。

年表・註、著作・人物解題、年譜などが相当な枚数に達したために、ここでは岡田論文([2005a])、岡田学会報告(岡田[2005b])、並びに2006年の日独の優生学研究のレビューなどの(岡田[2006])、既刊されていて参照可能なものは、本稿に収録する形をとらなかった。むろん註や本文中に必要なに応じて引用・説明はする。

本稿と岡田論文([2005a])によって、平塚らいてうの優生思想形成過程については、8割程度まで明らかにされたと判断する。平塚の好敵手で、日本の断種法制定運動のリーダー永井潜については、彼が多弁・多作であるにもかかわらず、不思議な位に生身の自己を語る文章はなく、その生涯と活動を辿るには、3~4年の年月を費やさねばならないだろう。

なお以下は、概要というよりは、本来は「あとがき」にくる部分であるが、優生学の歴史研究に入るまでの準備期間、この3ヵ年での解明事項、残された課題などを、「はしがき」にまず示しておきたい。

【準備と本稿の概要】

戦前日本の優生運動と障害者問題を扱った卒業論文から数えて、36年の歳月が経つ。平塚の優生思想研究にテーマを絞り込んでからでも、8年目を迎えている。

大学生時代(1967年～1971年)とその後の数年、当時ブームになる高群逸枝著作を夢中で読み、その関連で平塚らいてう自伝他も愛読していた。その反動からか、やがて田舎暮らしのせいもあり、女性史/フェミニズム論の著作をほとんど読まなくなった。似たような見解ばかりと錯覚し、早い話が飽きたのである。そこで2000年代に入り、平塚理解のために読まざるをえない文献は、膨大な数にのぼった。この間、東京都立大学時代に担当した都民カレッジの受講生の要望で始めた「平塚らいてうの優生思想を考える」学習会(永原紀子・篠宮芙美・清水和美)は支えにもなり、刺激にもなった。学習会を始めてまもなく、ドイツのラディカル・フェミニズム運動の代表格ヘレーネ・シュテッカーと平塚との関係を紡ぐ山本宣治見解を、双方が都合のいいように解釈していたことが判明、作業仮説は難航する。丁寧に史資料に当たらないと、仮説が一人歩きする。怖さを感じた瞬間でもあった。

が、それも今となっては楽しい思い出である。一市民として純粋に学ぶ集いは、束縛されず、期限もなくで、歴史研究の醍醐味を感じさせてくれた。

さて、ヘレーネ・シュテッカーから距離を置き、平塚の優生思想のルーツ探しを再開する。それはジグソーパズルのような、とろとろした作業であった。仮説の方向性が見え始めるのは2004年頃である。平塚の意図せざる好敵手、永井潜と対比させる分析視点を確保したことで、研究は少し楽になった。科研費による2005年夏からの史資料収集・読み込みで、断種法制定を要望する東京帝国大学医学部教授群の虚像も少しずつ明るみにされる。「白い巨塔」で垣間見られるのは、ナチ断種法制定を境に時勢になびく医学者の群れであった。ドイツ断種法情報のご都合主義的な操作、戦後の「私は断種法の効果に疑問であった」「拙速な断種法(国民優生法)制定には賛同していない」式の弁明(いわゆるナチ断種法批判言説)、優生関連教科書類の書きかえ等が、芋づる式に出てくる。

とりわけ断種法制定運動のリーダー永井を通して、「研究論理とは何か」を考えさせられる場面に遭遇する。東京帝国大学医学部長にまでなる永井が、還暦退職記念会で「狭義の生理学者として私は最近全く墮落の道を歩んだ」と堂々と述べて、恥じない¹⁾。就職や研究資金の厚遇をうけた弟子たちは、師をただただ褒め称える。彼らの擁護を見越したかの如き発言。ここでも永井は处世術を発揮する。

¹⁾記事(1937.5.1)「送る長与 送られる永井……」『医事公論』1293(22)から。

戦後も性教育の第一人者を自負し、分厚いキンゼイ報告の翻訳書を、拙速に出す。老いた彼はどこまで翻訳に携さわったのか。山本宣治の好評を博していた性教育論文を京都帝国大学医学部に圧力をかけ、掲載中止に追い込む永井。30年の歳月を経て、なおも彼に負けじとキンゼイ報告の監訳をする永井。

鮮烈な記憶を残し、壮絶な死を遂げる二人の好敵手、山本宣治と橋田邦彦²を、訳書を前にして彼は思い浮かべたのだろうか。

自立・自己決定を絶対視し、同時に「女性性」を武器に差異を強調するフェミニズムは、その危うい綱渡りの戦略の故に、優生思想を誘引しやすい。しかし、永井の権力保持のための優生運動と、フェミニズムを基盤にする優生思想との落差もまた大きい。「母性主義フェミニズムと優生思想」の関係を紐解くための課題は、本論のまとめに列挙したように、なお多い。日独の敗戦直後は特にそうだ。永井潜と東大生理学教室の「反」フェミニズムと優生学との関係解明も、途半ばだ。

史資料こそが、「優生思想の持ち主とは誰のことか」を雄弁に語る。隠蔽された過去を手繰り寄せ、忘却の彼方に追いやられた人々の声を聴く手がかりは、それしかない。ここに常に立ち戻り、歴史研究方法論の糧としたい。

(2008年2月20日 研究代表者 岡田英己子)

²橋田邦彦(1882-1945)は東大生理学教室の永井の後輩。スイスから1918年に帰国し、ドイツ流の実験生理学を導入したことで教室の雰囲気は一変。橋田によって日本の生理学研究は欧米水準になったと評される。欧文専門誌を刊行し国際的にも知名度を上げ、生命論・科学哲学にも長けていた後輩橋田に、永井は屈折した感情を持ち続ける。生理学教室初代教授大澤謙二は、後継者問題に苦慮し、死の間際に橋田への支援を同僚に頼む程であった。還暦退職記念会の席の永井挨拶にも、それは伺える。ろくな研究はなくと、自嘲気味に退職祝い場で永井は自己を語る。にもかかわらず、自分の社会貢献度は高いとの自画自賛の言葉を添えて、であるが。ここでの社会貢献とは、断種法定運動を指す。橋田は1940年から1943年、近衛内閣・東条内閣文部大臣を務め、1945年9月12日にA級戦争犯罪人として指名され、米軍召還を機に9月14日、青酸カリで服毒自殺。なお橋田の思想に関しては金森修が詳しい(金森[2004]2-48/III-3文献リスト参照のこと)。

新・旧優生学とナチ断種法批判に関する日独比較史

——平塚らいてうの優生思想の再考から

目次

はしがき

| | |
|-------------------------------------------------------|----|
| 序 問題の所在と研究対象 | 1 |
| 序1 問題の所在 | 1 |
| 序1-1 なぜ、平塚らいてうの優生思想の再考を行うのか | 1 |
| 序1-2 優生学の歴史研究方法論の問題 | 6 |
| (1) 平塚は「優生思想の持ち主」論をめぐる 先行研究批判と現在の到達点 | 6 |
| (2) 「いか程の優生思想の持ち主か」の査定のために | 8 |
| 序2 研究対象と構成・手順 | 9 |
| 序2-1 研究対象 | 9 |
| 序2-2 構成・手順 | 10 |
| 付記：概念の定義他 | 11 |
| I部 平塚らいてうの優生思想形成過程—— | |
| 大澤謙二・永井潜の「反」フェミニズムとの対比を通して | 19 |
| 冒頭年表 | 20 |
| はじめに | 24 |
| I-1 平塚らいてうの優生思想の起点——「反」フェミニズムの潮流下での 優生結婚・結婚制限情報の摂取 | 25 |
| 1-1 若き日の平塚らいてうに与えた大澤謙二の影響—— 生理学テキスト分析から | 25 |
| 1-2 大澤謙二・永井潜の「反」フェミニズムへの 静かなる抗議の始まり | 38 |
| 小活 「性と生殖の自己決定」とフェミニズムとの危うい綱渡り | 43 |
| I-2 平塚らいてう年譜と著作リスト | 47 |
| I-3 永井潜年譜と著作リスト・解題 | 63 |

| | |
|----------------------------------|-----|
| Ⅱ部 断種法(国民優生法)制定に至る動き—— | |
| 日本における結婚制限・ナチ断種法の情報ルートを探る | 115 |
| はじめに | 117 |
| Ⅱ-1 Ⅱ部年表：主流と傍系の系譜から見る | |
| 「断種法(国民優生法)制定に至る動き」 | 119 |
| Ⅱ-2 註 | 138 |
| Ⅱ-3 文献リスト | 156 |
| Ⅲ部 戦後優生思想の読みかえと隠蔽・忘却 | 175 |
| はじめに 家族設計の起点となる優生保護法—— | |
| 「性と生殖の自己決定」の亜種か | 176 |
| Ⅲ-1 優生保護法制定時の平塚らいてうと永井潜 | 178 |
| 1-1 平塚らいてう「民族の未来のために」 | |
| (『女性改造』1949.4)について | 178 |
| 1-2 永井潜『民族の運命』(1948.3 村松書店)と | |
| 「近時公布の二つの重要法律について」(『厚生時報』1949.1) | 179 |
| 1-3 平塚らいてうと永井潜・永井門下生の戦後優生思想 | 185 |
| 小活 「反」フェミニズムへの静かなる抗議の結末 | 187 |
| Ⅲ-2 Ⅲ部年表：「戦後優生思想の読みかえと隠蔽・忘却」の軌跡 | 189 |
| Ⅲ-3 文献リスト | 232 |
| 結 まとめと残された課題 | 257 |
| 結1 まとめ | 259 |
| 結2 残された課題 | 261 |
| 資料編 人物解題 | 269 |

<キーワード>

平塚らいてう、優生思想、新婦人協会、花柳病男子結婚制限法、国民優生法、優生保護法、ナチ断種法、大澤謙二、永井潜、青木延春、荒川五郎、氏原佐蔵、内村祐之、古屋芳雄、杉田直樹、瀬木三雄、三宅鉦一、八木逸郎、吉益脩夫、山本宣治、橋田邦彦、矢吹慶輝、日本女子大学校、民族衛生学会、母性主義フェミニズム、「反」フェミニズム、ドイツ女性団体連合(Bund Deutscher Frauenvereine, BDF)、

序 問題の所在と研究対象

序 問題の所在と研究対象

序1 問題の所在

日本フェミニズム運動の旗手である平塚らいてうは、「優生思想の持ち主」であった³。平塚を限りなく尊敬し、彼女の死後も著作集の刊行準備に勤しむ女性達の間でも、それはかなり知られていた。しかし、平塚の優生思想が批判的的にされ、それが第一波フェミニズムの誤謬の一つとされるのは、1990年に入ってからにすぎない。

筆者は平塚「優生思想の持ち主」論の先行研究分析を始める平成13年～14年の時点で、日本と欧米の代表著作を通して、優生学の歴史研究方法論の荒さにまず気づく。著作数の多くない日本では、同じ見解が繰り返されるのも気になった。以来、史実をできるだけ明確にすることに力を注いできた。「あの人も、この人も優生思想の持ち主」式の見解が蔓延する1990年頃からの風潮に対して、「いか程の優生思想の持ち主か」を詳細に検討すること。それでしか歴史研究方法論の確立はありえないと考えたからである。

むろん20世紀前半のフェミニズム運動や産児制限運動のリーダー格の女性の優生学的言説を断罪する手法は、優生思想への大いなる警告にはなろう。だが、それは歴史研究方法論としては、はなはだ不十分なのである。戦前日本の女性主導の組織が、いか程の権力を有し、断種法制定の論議に参画できたのかの、肝心の問いが抜け落ちているからだ。この問題意識は現在に至っても大枠は変化していない。

よって以下の序1-1は、2005年3月刊行の岡田論文「平塚らいてうの母性主義フェミニズムと優生思想——『性と生殖の国家管理』断種法要求はいつ加筆されたのか」の序/I章(岡田[2005a]23-33)の一部を掲載する形をとる。ただし、「母性主義フェミニズムと優生思想」の相関については、本科研の開始期から重点的に取り組んでいて、概念それ自体の見直しを迫られた。その箇所は大幅に加筆修正している。

序1-1 なぜ、平塚らいてうの優生思想の再考を行うのか

優生学の歴史研究の世界で、「みんなが優生思想の持ち主」論が流行っている。

特に日本のフェミニズムの旗手である平塚は、母性主義フェミニズムという命名でもって⁴、エレン・ケイ、ヘレーネ・シュテッカーのような著名なフェミニズムの旗手とともに、

³平塚が「徹頭徹尾、優生思想の持ち主」なのかどうか。その手がかりは早くも、「元始、女性は太陽であった——『青鞥』発刊に際して」に見出せる。冒頭の一文「元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった」に引き続き、青鞥創設の意義が語られ、「心の総てを尽くしてそして産み上げた子供がこの『青鞥』なのだ。よし、それが低脳児だろうが、奇形児だろうが、早生児だろうが仕方がない、しばらくこれで満足すべきだ」とある。青鞥発刊時のこうした障害観は、後の平塚の娘の生き方を見ると意味深い。娘は戦後日本の代表的な知的障害者施設である近江学園の職員家族として、園内に住むからである。ただし明治末に「低脳」という人間を測る言葉づかいを比喻として用いたことと、障害差別とを直結させるのは短絡的でもある。

⁴母性主義フェミニズムは、和製連結語ある。母性主義+フェミニズムを、いつ、誰が唱えたのかは『女性学事典』でも記されていないが(加納[2002]440)、日本では1990年初頭から定着していく。筆者はドイツ女性史文献に散見される Mütterfeminismus がヒントと考える(例えば Stoehr[1989])。ただし Stoehr 自身は母性+フェミニズムに込められたラディカルさを評価しており、日本とは異なる。これは言葉づかいの

あるいは三田谷啓、川田貞次郎、海野幸徳、賀川豊彦・市川源三という戦前障害者施設や社会事業・高等教育界を代表する人々と一緒にされて、批判の矢面にたたさされている。

1980年代末から持続する「あの平塚が、実は優生思想の持ち主」論は、今や通説であるかのように第二波フェミニズムや、社会史関係者間で語り継がれている。この研究系譜では、母性保護や産児制限運動に携わった女性たちの著作は自説を追認する格好の宝庫になる。典拠とされる文献は復刻版もシリーズで近年刊行されているから、通常はものの数分で彼らが言うところの「優生学的言説なるもの」を見つけることもできる。

こうして確かに優生学の歴史研究は、1990年代初頭から日本でもちょっとしたブームになっていく。そこでの論の立て方は、これもまたよく似ていて、「戦前日本の障害児教育・福祉の第一人者が障害差別の言辞を」「進歩的なある人も、左派のこの人も」「ナチ・ドイツだけでなく、アメリカもそうだし、あの北欧でさえも」という意外性がやけに強調され、そうした拡大解釈は問題の所在を曖昧にするのではと問うと、「現在を生きる私（我々）もまた優生思想の持ち主であるとの内省が大切」との、至極もつともな回答が返ってくる。

そうした意外性や「内なる優生思想」への気づきといった研究の初期段階は⁵、しかし過

錬金術である。この語用法に持ち込まれた政治性こそが、二級市民のままの「女性の国民化」の進展を促し、21世紀の今も錬金術の効果を発揮する。この連結語を1990年頃から日本の第二波フェミニズムは好んで用い、「母性主義フェミニズムは優生思想と結合してきた」（藤目[1999]14）とあっさり結論づける傾向がある。いわゆる第一波フェミニズムの旗手たる平塚は、ここでは格好の批判対象であった（藤目[1999]319-320, 352-354等）。

そもそも筆者は第二波フェミニズムが台頭する前から、すなわち1970年代後半からドイツ福祉職/ソーシャルワーク教育史に細々と取り組んできた経緯（だからドイツ語文献の中から言葉を翻訳することしかできなくて、母性主義的フェミニズムや初期フェミニズム/中期フェミニズムの表記を主に用いてきた）もあって、いわゆる第一波フェミニズムなる命名にとすれば違和感を覚え、「波」なる表記統一の背景自体に関心を持っていた。この点では、竹村の次の指摘は的を射ている。「思えば第一波フェミニズムも、最初からその名前と呼ばれていたのではなく、第二波フェミニズムの登場と共に、それと差異化するためにつくられた言葉です。したがって少なくとも現在までのところでは、『波』の語を使って言い表せるのは第二波のみで、第一波も第三波も、『波』と言うには適切ではないように思われます」（竹村[2003]3）。つまり第二波フェミニズムの正統性の強化のために、いわゆる第一波フェミニズムとの差異化が運動論拡大（運動拡大ではない、理論の拡大）のための不可欠の戦略となり、その格好の標的にされたのが日本では平塚であったのではないか。平塚に冠せられる母性主義フェミニズムという和製連結語も、平塚に体现される「女性性」イメージにはピッタリと当てはまる。こうして「性と生殖の自己決定」の代表格として、海外でも高い評価を受けていた平塚が、「優生思想の持ち主」であるとの説が1990年代に定着していく。

なお和製連結語の母性主義フェミニズムの語用法についての検討はここでの概観に留めるが、第一波/第二波フェミニズム史研究は、「なぜ第二波フェミニズムは、波と自己主張したのか」「なぜその言葉づかいが速やかに定着するのか」の問いを立て、第一波との意図的な差異化それ自体の政治性、あるいは意図せざる結果としてのフェミニズムの非政治化の傾向を、検討すべき時期にあると考える。例えばドイツの緑の党は、時に地方選挙では母子政策でカトリック系政党との政策提携も厭わない。ここでの母性再考・母権復活を促すフェミニズムは、平塚のフェミニズム論にも通じる。平塚研究は、水田論文の神秘主義・ドイツ観念哲学からの考察によって、新たな可能性が開かれたと筆者は考える（水田[2007a][2007b]）。

⁵それではさすがにもう古いからと、欧米の近年の研究を導入して、植民地政策/人種主義や恋愛結婚を例にとって、20世紀文明論として優生思想/優生学を語るのも流行りそうである。論の立て方としてはおもしろいし、帝国主義と宗教/ミッションの連携プレーもよく見える視点であるだけに、今後の研究成果が期待できる。しかし、欧米にあっても人種概念を持ち込めば、優生学概念は果てしなく広義化され、研究方法論の混乱は避けがたい。ましてや日本では難しい。人種主義や能力主義と優生学歴史研究の組み合わせは、それ自体は魅力的なテーマではあるが、これも曖昧な「みんなが優生思想の持ち主」論に加担するだけで、旧来の「遺伝か、環境か」論争とは位相を異にする「遺伝も、環境も」の21世紀の争点はますます見えにくくなるのではないか。

ぎ去ろうとしているのではないか。目前に迫るのは、21世紀の新優生学/リベラル優生学の台頭であり、「遺伝も、環境も」の論争である。「氏か、育ちか」「遺伝か、環境か」の二極化しがちであった過去の争点と、これとは位相が異なる。

ここより1990年代に台頭した歴史研究動向に、どんな意味があるのかとの問いも出てくる。新優生学/リベラル優生学に対処せねばならないからこそ、「みんなが優生思想の持ち主」の自覚をもってとの反論が来そうだが、本当の問いはここから始まる。なぜならば「〇〇分野の著名な先駆者も優生思想の持ち主」式の著作には、そうした概念の拡大適用が共通認識になっているかのように叙述され、他方で少しだけ説明される概念規定の箇所では、「自分も内なる優生思想を持つ」式の、実にナイーブな見解が披露され、おおむねそれで終わっているからである。

こうして優生学概念は、能力主義・競争原理と同じ土俵にまで誘導されていく。現代社会批判の道具へと優生思想/優生学が祭り上げられる時、危惧されるのは、それではますます「我が意を得たり」と、「優生学の何が悪いのか」との開き直り族が出てくるのではないか、という点である。

そもそも何のために優生学の歴史研究をするのか。一億総懺悔の結論が戦争責任を曖昧にし、加害者に煙幕を張り、空虚な平和主義を助長した経験は過ぎ去った出来事なのだろうか。生命至上主義が論議の場で線引きを全否定し、結果的には思考停止を増幅し、「健康で、賢い子どもを産みたいのは当たり前ではないか」「前もって防げるのならば、障害や疾病はないにこしたことはない」の個々人の欲求の歯止めにはならずという現状がある。

では、何が20世紀優生学の主たる批判対象になるのか。まずここで先行研究の特徴を概括しておく。1990年代に台頭する優生学の歴史研究の特徴として、肝心の概念規定に立ち入らないままに、「優生思想の持ち主」と断定する叙述が多い点を、である。

戦前から高度経済成長期に入るまでの障害児教育・福祉や産児制限運動の著作類には、障害差別や優生思想/優生学の言葉づかいは相当数あるだけに、その書き手や語り手を「優生思想の持ち主」と断定する作業は、さほど難しくはない⁶。

同じ脈絡でいわゆる第一波フェミニズム批判の系譜が、平塚の優生思想を語る。これは鈴木([1989])が口火を切り、同じ説がほぼ孫引きに近い形で、今日まで繰り返されている(最近では吉川[2004])。この趨勢の中で、そこまでは言い切れないのではないかとの含みは、江原([1996]345)や市野川([1996]212)にはあるものの、第二波フェミニズムと社会史の系譜で「みんなが優生思想の持ち主」論の先例に平塚を持ち出す者は相も変わらず多い⁷。

⁶研究視点を逆にして、障害差別を触発しかねない「この哀れな子に」という言葉づかいはなく、肯定的(積極的)優生学の「優生の言語」も微塵もなく、「天皇の赤子」といった国体関連発言もないと、誰もが納得する戦前産児制限運動のリーダーを探すとすると、とたんに言説を拾い出す作業は困難を極める。これは研究方法論に近視眼的なボタンの掛け違いがあることを物語る。この場合、柴原浦子や山本宣治でさえも評価に困るのではないか。また個々人の言説ではなくて、産児制限運動自体を批判する立場をとるにせよ、例えば次の註7の重たい課題を回避はできない。

⁷優生思想絡みでのこうした第一波フェミニズム批判は誇張されすぎているとの危惧は、すでに加藤秀一が

ここで危惧されるのは、似通った批判があり、それが繰り返され、いつの間にか通説と
思いこまれていっても、検証がほとんどされない点である。そしてこれが意図せざる結果
として、新優生学/リベラル優生学に対峙できる論理も倫理も見失う事態を、招来している
のではないか。少なくとも筆者は、そう考える。

ここに 20 世紀優生学の歴史研究の目的と方法論とが、まずは問われることになる。

序 1-2 優生学の歴史研究方法論の問題

以上の問題意識に基づき、ともすれば思考停止や堂々巡りの議論に陥りやすい優生学の
「何が問題なのか」を、歴史研究の方法論的な原則に立ち戻って解明していく。平成 13 年
から開始された本研究の題材になるのは、「フェミニズムの旗手である平塚は優生思想の持
ち主」論であり、その是非が以下で詳細に検証される。

(1) 平塚は「優生思想の持ち主」論をめぐる先行研究批判と現在の到達点

さて、平塚は「優生思想の持ち主」との証拠によく引き合いに出されるのが、二つある。

一つは平塚が執筆した「避妊の可否を論ず」稿での断種法要求であり、もう一つは 1919
年に平塚が創設する新婦人協会による花柳病男子結婚制限法案の議会提出である。これも
近年はよく引き合いに出される(松原[1997]他)。通例はこの 2 点を組み合わせて、平塚批
判の論拠にされる。が、ここで注意を要するのは、「避妊の可否を論ず」の原稿が実は 3 種
あり、平塚らいう単著は 4 つある点である。初出原稿(1917 年)には断種法要求はなく、
加筆された最終稿にのみ記載されている。

「避妊の可否を論ず」稿については、岡田英己子(2005a)「平塚らいうの母性主義フェ
ミニズムと優生思想——『性と生殖の国家管理』断種法要求はいつ加筆されたのか」(『人
文学報』東京都立大学人文学部社会福祉学, 21, 23-97)で、結婚後に慣れない家事や育児で
勉学条件が確保しにくくなる平塚が生計のためにメディアに旧原稿を焼き直して出す癖に
着目し、3 種の原稿の修正過程を辿り、断種法制定要望は 1917 年初稿ではなく、国民優生

指摘している。加藤は産児制限協会の柴原浦子の指摘する「多産と病弱と貧困」を例に取り、「人口の質と
量の問題を別個に考えることは非現実的であった」(加藤[2004]182)とし、さらに「フェミニズムに対する
ねじまがった憎悪が蔓延し……ている現在」「できるかぎり過去の女性解放運動の達成のポジティブな意義
に照明をあて」「性差別の克服のために苦闘してきた先人たちを好きこのんで批判したくない」(加藤
(2004)221)のだと、心情を吐露する。とするならば、やはり優生学の歴史研究方法論を緻密にするべきで
はないか。「かれらの過ちについてもまた正確に見極め、それを批判しなければならない」(加藤[2004]221)
との思いがあるならば、「あの人も、この人も優生思想の持ち主とは」の指摘だけでは不十分であろう。逆
に曲解されて平塚も海野も日本優生学の頂点に立つ永井と同格にされ、「自然的不平等」の克服を「社会契
約」によって「社会的平等」に読みかえようとしたフェミニズムや社会事業を、揶揄する結果に繋がるの
ではないか。そもそも現下の言語体系でもって、産児制限運動の論者を「優生思想の持ち主」に仕立てる
こともないか。しかも簡単だ。しかし、「多産と病弱と貧困」と「人口の質と量」とを、「別個に考えることは非現
実的」という、重たい課題がある(廣嶋[1981])。平塚は日本の産児制限運動が後進国から中進国に入る段
階で、運動戦略として母子保護の「権利の言語」と対の関係性にして、「優生の言語」を語った。そして今
も多くの国で多産と貧困のサイクルが女性差別を産出し、家族計画が愁眉の的にされている。

法制定前後に加筆された可能性が高いことを明らかにした。

後者の新婦人協会に関しては意外なことに空白部分が多く、まとまった研究成果は、折井美耶子・篠宮芙美・清水和美・永原紀子他（2003）『女性解放運動のさきがけ 新婦人協会の研究——特集・花柳病男子結婚制限法制定の運動』が最初である。ここでは当初平塚が意図した結婚制限対象が花柳病男子に限定されていて、単なる性病予防法ではなく、性のダブル・スタンダード是正を目ざす運動であった点が明らかにされた。花柳病男子結婚制限法案の議会提出の経緯から、平塚によるフェミニズム論の独自性に迫る好著である。

上記の二つの最新の研究成果は、平塚が「優生思想の持ち主」であるとしても、彼女等が戦前の断種法制定運動の音頭をとるのではないことを、側面から論証した。共に史資料に裏打ちされたものである。これは1990年頃から多発し、いまだに続く平塚批判に再考を迫るものではなからうか。ここより議会活動向けに法案修正を余儀なくされ、花柳病男子結婚制限法案から男子が削除された法案になる点をいかに評価するのか、性のダブル・スタンダード是正を目ざす法案がフェミニズム運動の戦略として効果があったのか、という新たな問いも出てくる。

ちなみに先行研究批判として、1990年代に流布する「平塚は優生思想の持ち主」論を代表する2つの著作にも言及しておこう。藤野（[1998]）と松原（[1997ab, 1998]）がその例になる。

藤野はかねてより「優生政策を『断種法』、具体的には『国民優生法』に限定せず、フェミニズム期の医療・衛生政策、および人口政策全体のなかで検討していく」立場を鮮明にしているが、彼は「もちろん、『断種法』は優生政策に重要な位置を占める」とも述べてもいる。むろん同じ著書のすぐ後で、「そのみが優生政策ではない」とするものの、断種法が戦前の歴史研究の中心概念になる点はおおむね認めている（藤野[1998]47）。とすれば、平塚が断種法を述べた時期の典拠には、これが第一波フェミニズムの評価にも関わる事項であるだけに、注意を要するのではないか。

同じく松原もまた断種法を重視し、「日本の優生法の系譜」を、「非ナチス断種法系」と「ナチス断種法系」に分け、「非ナチス断種法系」は平塚の新婦人協会による法案提出、すなわち「花柳病男子結婚制限法から民族優生保護法案第1案に至る系譜」だとするが（松原[1997a]47; [1997b]13）、「優生法の系譜」の概念を「結婚制限」にまで拡張したい立場ならばともかく、「二つの民族優生保護法案」の関係を論じるのが松原論文の分析視点であるならば、起点に花柳病男子結婚制限法を出すのは避けるべきではないか。というのは、本報告書のⅡ部年表が示すように、荒川に始まる民族優生保護法案がナチ断種法を意識していたことは明らかだからだ。また「結婚制限」を優生法と見なす立場をとるならば、広義の概念になる肯定的（積極的）優生学の定義がどこかで必要になる。20世紀優生学の歴史研究がそこまで手を広げられないのであるならば、今はまず「その都度この言葉が使われる文脈を吟味」することが、先決になるのではないだろうか。

科学史専攻の松原著作には、さらに20世紀後半から生じる新たな難問も描かれている。

福祉国家体制下で整備される障害発生予防システムの評価をめぐってである。障害新生児の早期発見・早期診断が、優生政策の延長線上に「どの程度に、どのように」重なるのかの難問は、21世紀新優生学/リベラル優生学が抱え込むジレンマに直結する。それだけに障害発生への仕組みの専門知識を持つ者ほど、慎重に対処せざるをえない現実がある。

藤野・松原両名の著作に学ぶことは多かった。だが、その平塚批判の典拠は史実に則ったものではない。戦後日本の方でも、障害発生予防システムと優生学的言説との拮抗関係を示す要の箇所に年代・記載の誤りがある⁸。その結果、「あの人も、この人も優生思想の持ち主」式の批判を、意図せざる結果として増幅させている。これは欧米の著作にも散見される優生学の歴史研究が陥りやすい罠であり、筆者にはその点が危惧されるのである。

(2) 「いかなる程度の優生思想の持ち主か」の査定のために

つまり問われるのは歴史研究方法論になるのだが、史実の徹底した解明に重きを置く本研究の性格上、ともすれば机上の空論になりやすい安易な方法論の枠組み提示は避けたい。

まず研究方法論の再考のために、事典類からの例を引き合いに出してみよう。市野川編『生命倫理とは何か』平凡社(2002)である。そこに所収された「優生学」項目(松原洋子)には、優生学が政治的多義性を持ちやすいとの適切で、かつ簡潔な指摘がある。

「優生学という概念の定義には困難をともなう。なぜならば、1980年代以降の優生学史研究の増大……によって、優生学という言葉がその語り手たちによって極めて多義的に用いられたこと、全体主義者や人種差別論者だけでなく自由主義者、社会主義者、平和主義者、人種平等論者にも優生学は支持されていた」(松原[2002]140)。

優生学概念の定義の困難さは、歴史研究を紐解けば、通例は分かる。こうして優生学歴史研究は、今、揺れている。第一波フェミニズムや平和運動にも優生思想があったとし「現在では優生学という概念により幅広い性格を付与せざるを得なくなった」(松原[2002]140)とする拡大解釈に汲みするのか、狭義概念に該当する(と、とりあえず腑分けしておく 傍註筆者) ナチ断種法・遺伝性強調の系譜の解明こそが現下の「遺伝も、環境も」論議では要に来るのではないのか、という狭間で揺れている。

20世紀の歴史研究に関しては、筆者は後者の狭義概念の遺伝性強調の系譜の立場を重視する。「障害胎児の生存」をめぐる争点で、結局は「遺伝も、環境も」論議でも線引き問題に回収されてしまう傾向があるからこそ、優生学の概念規定の曖昧さという実態をふまえて、批判対象の腑分けをすること、何よりもナチ断種法批判を隠れ蓑にしてきた20世紀後半からの優生学の政治性の解明こそが、不可欠の課題になると筆者は考える。

つまり「優生学はそれを論じた原典や理論によって一義的に定義を確定できるものではなく、極めて状況依存的かつ政治的な概念であり、その都度この言葉が使われる文脈を吟

⁸これはⅢ部の戦後年表作成時に気づいたものにすぎない(米本・松原他[2000])。ただ筆者も年表に詳細な註を付ける段階ではない。改めて戦後史の困難さを感じている。

味する必要がある。『優生学』の何が批判されるべきなのか、……問いの建て直しが迫られている」(松原[2002]140)。

そうであればこそ、何を基準にして優生思想/優生学と見るのかの、ミニマムな共通認識が求められているのではないか。ここでの指摘を本稿に引きつけて言えば、そのまま「平塚は優生思想の持ち主」論式の概念規定の曖昧さと、短絡的に結論を急ぐ研究姿勢への反論になろう。

以下、岡田が「避妊の可否を論ず」で初めて用いた「状況依存的かつ政治的な概念」を、「その都度この言葉が使われる文脈を吟味する」言説分析の手法を駆使して、日本フェミニズムの旗手と自他共に認める平塚が、何をもって「優生思想の持ち主」と見なされ、「いか程の優生思想の持ち主か」の査定のための検証に入っていこう。

序2 研究対象と構成・手順

つまり日本フェミニズムの旗手は「いか程の優生思想の持ち主」かを、欧米情報ルートを開拓した主流の系譜と比較させ、考察を深めることが、今回の目的になる。

序2-1 研究対象

平塚の「避妊の可否を論ず」稿や花柳病男子結婚制限法を、「優生思想の持ち主」論の証拠にしたがる先行研究に対する筆者の問いかけはシンプルである。「優生思想の持ち主とは誰のことを言い、その査定基準は何か」である。

日本フェミニズムの旗手として、「性と生殖の自己決定」の代表格として、海外でも高い評価を受けていた平塚が、「性と生殖の国家管理」断種法要求へと暴走していく経緯は、平塚執筆の「避妊の可否を論ず」稿に記された断種法要求が起点になる。断種法要求の一文は後で加筆されたもので、いつ、どのようにして書かれたのかは、すでに検討を済ませている(岡田[2005a]71-74)。断種法要求の加筆は、早くても1940年3月26日に制定され、5月1日に公布される国民優生法が、1941年7月1日に「施行」されるまでの時期に行われたと推察される。その詳細については今回の報告書には収録せず⁹、平塚が「いつ」から断種法制定を要望したのかは、I部冒頭の年表とII部に示すにとどめた。

本報告書では、平塚が「いか程の優生思想の持ち主なのか」、それが「女性の国民化」の

⁹1990年頃から「平塚らいてうは優生思想の持ち主」論が通説として流布している。その典拠とされるのが、平塚執筆の「避妊の可否を論ず」稿に記された断種法要求であるが、実は原稿は3種類あり、刊行時期も食い違う。では、フェミニズムの旗手である平塚は、いつ、どのようにして女性の「性と生殖の自己決定」から、「性と生殖の国家管理」断種法要求にまで暴走していくのか。平塚著作の検討を通して、新婦人協会の花柳病男子結婚制限法案の修正経緯を概観し、同時に民族衛生学会の永井潜やドイツ社会事業に精通する海野幸徳との比較から、「いか程の優生思想の持ち主なのか」を査定した。これは優生学歴史研究方法の再考であり、また第一波フェミニズムの最初の敗退の背景解明にも繋がるものである。

ために妥協を重ねすぎたフェミニズムの旗手の顛末なのかどうかを、設問の最初に置き、平塚が「なお優生学的立場から……断種法の施行を命じたりすることは我国でも今すぐにも望ましいことです」と記すに至るまでの、優生思想形成過程に眼を向ける(平塚著作集[1983]2 巻 340)。とりわけ若き平塚が優生思想に関心を持つ契機に着目し、それがフェミニズム運動の戦略にもなる点が、ここで解明されよう。

今回の主眼は平塚の優生思想形成過程である。若き平塚が優生思想の影響を受ける日本女子大学時代を起点と見なし、I部でそれを検討し、さらにその影響力が第二次世界大戦後の優生保護法制定時にも持続していたことを、III部で立証する。また平塚が「いか程の優生思想の持ち主か」を査定するためには、平塚と多様な他者見解との比較を行うことが不可欠であり、これはII部年表で試みている。優生政策に直に関わるエリート男性集団と平塚との距離が、II部年表から読みとれるであろう。①「いつ頃から、誰が」日本に結婚制限・断種法情報を持ち込み、断種法法制定化の気運を盛り上げていくのか。②内務省官僚はいかなる反応をするのか。③ナチ断種法情報に対して厚生省官僚はどう動くのか等が、II部年表で概観できるだろう。平塚を筆頭にフェミニズム運動は蚊帳の外に置かれていたことが確認できる年表であり、この3ヵ年で最も時間をかけた作業である。

I部からIII部の全体を通して、「優生思想の持ち主」平塚の優生思想形成過程と晩年に至るまでの優生思想の持続力が把握できるであろう。

序2-2 構成・手順

全体はIII部構成である。

I部ではまず見開き2枚の冒頭年表を置く。年表の初期の時代がI部論文で扱われる。日本女子大学校・大澤謙二の講義を手がかりにして、若き平塚の優生思想形成過程を検討する。大澤謙二の優生結婚・結婚制限を説く生理学講義を介して、日本フェミニズムの旗手と断種法制定運動のリーダーが、いかにして優生思想形成をしていくのかが明らかにされよう。結論を先んじて言っておくと、ここで発生するのが平塚のフェミニズム vs 大澤の「反」フェミニズムである。

II部は年表の形式ではあるが、「平塚が優生思想の持ち主」の通説の流布に対して、平塚が「いか程ほどの優生思想の持ち主」であったのかが検討される。時期は戦前国民優生法制定に至るまでに絞る。多様な系譜・人脈との比較ができるように年表項目を時期毎に変えている。I部と同様に欧米の結婚制限法や断種法情報の日本への紹介・導入期から、国民優生法制定に至るまでが把握できる。優生政策に実行力を持つエリート男性集団の動きが中心に来る。彼らが入手する欧米の優生結婚・結婚制限情報、とりわけドイツの情報源との関連も検討される。平塚が「いか程の優生思想の持ち主」かが、これによって査定されよう。

III部では、(戦後)優生思想の読みかえとナチ断種法の隠蔽、そして忘却が、描かれる。ただし戦後調査ははなはだ不十分なものである。戦後年表は作成したものの、註を付けるに

は至らず、かつ年表項目の選択基準の妥当性も今後の課題になる。

なお全編を通じて、日本人側から見た欧米情報の摂取を重んじた。ドイツ側から見れば、情報内容やルートに偏りあるのは否めない。それをふまえて、今回の日独比較の記載に関しては、日本人が記録したドイツ情報を、その表記法も含めて再現することを優先し、誤解が及ぶ箇所だけの修正に留めた。またこの3ヵ年間で最も時間を費やした箇所である平塚に体现される「母性主義フェミニズムと優生思想」の親和性に関しては、ドイツ発の結婚制限・断種法関連情報はⅡ部年表に記載しているが、日独フェミニズムの優生思想の比較は論文掲載するには至らず、次の機会に回す。

なお序論とⅠ部とⅢ部の「はじめに」から「小活」までの引用文献は重複が多い。煩雑さを避けるために、本論部分での主要参考文献の提示(原則として初出文献は入る)を除けば、Ⅲ-3文献リストに一括記載した。

付記：概念の定義他

(1) 優生学の用語と概念の定義の困難さ

優生学で定番となるような用語や概念の定義は、こなれたものでも、確定したものでもないようだ。「フェミニズムと優生思想」の組み合わせの概念となると、さらに曖昧さは増す。先行研究を概観しても明確な定義があるわけではない。あると主張する先行研究ほど、史資料に基づく研究を看過し、結論を急ぐ傾向がある。これは欧米でも優生学の歴史研究には多発する、歴史研究としてはやや奇妙な現象である。優生学的言説は時代の文脈の中で生成し、変化し、新たな言葉づかいを産出する。

それだけに、「何が優生学なのか」の概念定義の困難さは際立つ。むろんこれは、優生学の歴史研究方法論にも及ぶ困難さである。

そもそも、知的障害の歴史が専門である筆者にとっては、劣等者が対象になる否定的(消極的)優生学はなじみやすい。他方、近年は優生結婚や性教育も含める肯定的(積極的)優生学から見て「優生思想の持ち主」を査定する研究が、急増している。この場合はその広義な概念の故に、必然的に人種主義や反ユダヤ主義も、優生学の範疇に入れやすくなる。しかし、優生思想史ならばともかく、優生政策史となると、どうだろうか。というのは、こうした広義概念は、競争社会の能力至上主義と紙一重であるからだ。際限なき広義化解釈に入ることの是非が、やはり歴史研究に際しては問われるだろう。

加えて、福祉国家体制で整備された障害予防や早期発見・早期診断システムも、しばしば優生政策として批判を受けてきた。ここでも「何が優生学なのか」に即答はできかねる悩みが生じる。むろんその困難さが、このテーマに筆者を向かわせる動機にもなるのだが。

そこでジャングルに入るかのような優生学の用語・概念の定義には深入りはせず¹⁰、史資

¹⁰例をあげよう。日本断種法制定運動のリーダー永井潜が率いる民族衛生学会機関誌でさえ、ナチ断種法制定まで、「断種」表記すら一致していない(岡田[2005a]75-76)。さらにこの種の作業をここで繰り返すよりもという判断も、今回はあった。むろん用語・概念の検討を疎かにしたいわけではない。

料と年表から 20 世紀に優生学が蔓延っていく様を示すことを主眼にした。史資料分析を徹底させ、年表を作成し、それを註と比較検討して考察するという、研究方法の基本に忠実であろうとした。これでしか、「誰が、いか程の優生思想の持ち主」かの論証はできないと考えたからである。

(2) 「フェミニズムと優生思想」に関わる本稿の表記

フェミニズムの表記は、フェミニズム論の門外漢である筆者には自信がない部分である。が、本稿の論述と優生学の歴史研究方法論のために、概念化をせざるをえないので、以下に記す。

1) 母性主義フェミニズムと「女性性」

まず、母性主義フェミニズムからイメージされるものに、注意したい。母性神話に彩られた平塚像が平塚のフェミニズム論を代表するとはいえ、それが全てではないからだ。差異を強調する「女性性」や母性のシンボルとするだけでは説明できない側面が、若き日の平塚にはある。「差異か、平等か」で振り分けられない、時代を超える普遍性を持つ平塚のフェミニズム論は、母性・家族政策の再考の素材にもなろう。それ故に、平塚の優生思想を論じる際に用いる母性主義フェミニズムは、本当は括弧で括りたい。が、煩雑になるので、本稿ではそのまま記す。「女性性」なるものも歴史的概念と捉え、フェミニズム論が差異を過剰に強調した時代の所産と解する立場をとる。これらについては、岡田論文([2005a])との概念関連の記述との重複は避けるが、本稿の註 4 を参照されたい。

2) 「反」フェミニズム/フェミニスト

平塚を母性主義フェミニズム/フェミニストと見なすだけの通説に対して、別のフェミニズム論の系譜からの影響も検討されねばならない。これは神秘主義・ドイツ観念論と平塚のフェミニズム論との関係を指摘する水田論文([2007a][2007b])から、触発を受けた¹¹。ここより日独双方で勢いを増す「反」フェミニズム/フェミニストと優生運動との親密性に注意しながら¹²、平塚の優生思想形成過程を辿るべきとの仮説を持つに至るが、検証は時間が足りずできていない¹³。I 部・III 部の論文で部分的に指摘するに留まっている¹⁴。

¹¹フェミニズム運動の機関誌の販売力の弱さが、戦前日本では目立つ。既存メディアの要望にのりしかない状況では、売れ行きが優先され、目立つ女性が繰り返し登壇する。与謝野晶子等との華々しい女性同士の論争もメディアが仕掛けている。それが悪いのではむろんない。問題は平塚や与謝野晶子の結婚後の劣悪な勉学条件が、全般的なフェミニズム論の水準低下を招いた点である。フェミニズム論の進展を支える研究基盤が、これほど脆弱な先進国は他になく、ここより「反」フェミニズムの潮流も勢いを増している、筆者は見ている。

¹²R. Evans の BDF の歴史評価 (Evans [1976][1978]) を筆頭にフェミニズム運動家側をターゲットにする批判が多いが、優生思想と「反」フェミニズムとの関係や、政策決定過程に参加できる保守系優生運動の検討はドイツでも看過されたままである。

¹³ソーシャル・フェミニズムという概念もありうる。母性主義フェミニズムと同様に括弧を付けるべき表記である。社会政策・社会事業にコミットするフェミニズム/フェミニストの著作・運動から導かれる概念がソーシャル・フェミニズムであり、イギリスでは労働組合運動で、アメリカでは主にユダヤ女性の社会事業・教育活動で使用されるが、日本はもとより、イギリス・アメリカでも、フェミニズム論の系譜とし

先に筆者は平塚著作を網羅的に検討し、1917年初出の「避妊の可否を論ず」稿に依拠する「優生思想の持ち主」論の誤りを指摘し、同時に平塚に代表されるいわゆる第一波フェミニズムの敗退の原因も探った(岡田[2005a])。「優生思想の持ち主」論は1990年代に入って流布するのだが、そこでは1919年に平塚と市川房枝が設立する新婦人協会(1922年解散)の花柳病男子結婚制限法の議会請願活動も槍玉に挙げられる。平塚執筆の花柳病男子結婚制限法案が、1934年以降の一連の民族優生保護法案や国民優生法制定への「議論の起点」となったとの見解が出されるのだが、それらは結果的に、「フェミニズムに対するねじまがった憎悪」(加藤[2004]221)という、意図せざる副産物をもたらした。

ここから気づかされたのは、フェミニズム運動が盛り上がる時、「反」フェミニズム/フェミニストもメディアに出没する点である。ジェンダー・バッシングの昨今の動きは、過去の似姿でもある。日本での「反」フェミニズムの潮流は、河田嗣郎が「私が『婦人問題』を著して婦人解放論を唱え当局の忌憚に触れて絶版するの已むなきに至つたのは、明治四十三年のこと」と(河田[1924]1)、回顧するように、平塚の初期フェミニズム論と優生思想形成過程を検討する際には看過できない要因になる。ちなみに平塚は父への対応と同様に、河田嗣郎・森鷗外・永井潜とのコンタクトを避けたようだ。皆、似たタイプである。欧米近代主義を先駆的に学び、女性の地位向上に一定の理解を示すものの、女性を人形と見なす「反」フェミニズム/フェミニストを、平塚は最も手強い相方と感知していたからで

ての市民権は得ていない。ただし、母性主義フェミニズムの言葉づかいが一人歩きし、進取性と保守性とが混在されたり、母性主義を「優生思想の持ち主」論に重ね合わせる悪しき傾向が目立つので、平塚のフェミニズム論を検討する場合は、こうした枠組みは必要だろう。本テーマとは稿を別にしたいので、仮説的概略に留める。

14平成13年から平塚の優生思想研究を始める筆者は、平塚のフェミニズム論が90年代の定説「母性主義フェミニズム」に集約できるのかとの疑問を、今は持つ。平塚のフェミニズムが「女性性」が起点点としても、母性主義フェミニズムで日本人がイメージするものとは相当かけ離れているのではとの素朴な疑問である。ドイツでは母性イデオロギーと母性主義フェミニズムは異なるとの認識はある。後者のルーツがフレーベル幼稚園運動の成果であり、「精神的母性」を「社会的母性」と読みかえる動きが19世紀末からあるとはいえ、実質的にはフレーベルの意図した母性は、女性の職業開拓に援用するという、フェミニズム運動の下地になるからだ。「反」フェミニズムのキャンペーンや、ましてやナチが駆使する母性イデオロギーとは一線を画する。母性主義フェミニズムの権化のように見られる平塚だが、新婦人協会という平塚の最初にして、最後のといえる果敢に全責任を背負う社会運動は、母性主義フェミニズムではない、別の「社会的なるもの」への関心の広がりを示す表記が必要ではないか。そう判断される材料の一つが、果敢な社会事業界への宣伝にある。新婦人協会が花柳病男子結婚制限法案を提起する平塚は、市川と組んで、社会事業関係者の支援を求め、新婦人協会側から積極的に働きかけるからである。それは1920年6月に各誌で報道されている。まず『報知新聞』1920年6月4日で「会は原首相以下、床波内相等各大臣祝辞があつて……生江、矢吹慶輝両氏の講演に移る」と報道。次いで『朝刊やまと新聞』1920年6月6日には『社会事業は婦人の力に待たねばならぬ』との標語の下で大会は5日午後4時から開会され……平塚雷鳥女史は『政治と婦人』と題し、市川房江女史は『婦人の組織的知識を向上せしめ、内務省の社会事業課などを婦人の為に明け渡さすべきものだ』などと怪気焰をあげ……参政権獲得後の婦人代議士会を見るような観があった。さらに『中外商業新報』1920年6月7日では「平塚雷鳥女史が新婦人協会の治警第五条の改正と花柳病男子との結婚制限の議会建議案に就いて賛成を求め……市川……が『婦人の社会事業に発展し内務省の児童係の生江氏の株を譲って貰ふ』と叫んで喝采を博す」と報道されている。肝心の新婦人協会と社会事業関係者との連携は成立しなかったが、市川の発言「内務省の社会事業課などを婦人の為に明け渡さすべきものだ」は、社会政策・社会事業とフェミニズム運動が連携し、行政組織の要職に就くという戦略を欧米情報から知っていたと見てよい。新婦人協会が社会事業活動をすることは実態としてはない。が、この運動戦略は1990年代から流布し、保守的と曲解されやすい単なる母性主義フェミニズムではない。平等派のフェミニズム論の系譜で、「社会的なるもの」を目ざしていた証拠と考えてもよい。

はないか¹⁵。

(3) その他

- 1) 新優生学、新優生学/リベラル優生学の概念は、岡田論文([2005a]24-25, 56-57, 62-63)に記載したもの以上の進展はなく、今回は定義事項としない。
- 2) 引用・参照は婦人解放・婦人運動等と表記。岡田の論述箇所では、現代表記として女性を用いる(例：女性運動、フェミニズム運動)。
- 3) 東京大学医学部生理学教室はこの間の数回の改称を考慮して、東大生理学教室で原則として記載。東京医学校、帝国大学医科大学、東京帝国大学医学部、東京大学等の名称変遷がある。
- 4) 障害関連の用語では文脈に応じて精神薄弱を歴史用語として使用。また脳性マヒ者協会青い芝の会については史資料に即して、東京青い芝の会と全国青い芝の会には「」を付けず、神奈川県「青い芝の会」神奈川連合会は「」付き記載。
- 5) その他の関連人名・地名・組織名
引用箇所や解題・年譜の人名・地名のカタカナ表記は邦語著作の記載を、原則として用いる。同一の大学・機関所属の系譜の場合は、その邦訳が踏襲されやすいからである。明らかな誤植のみ修正した。なお大澤著作には文献リストがない。当時はそういう著作も多く、書き手が会おう欧米の研究者や引用著作が、現時点から見て分野の代表作とはいえない場合もあり、原文との比較照合作業は難しい。版を重ねる「反」フェミニズム著作は、ドイツ語圏でも数冊あるが、どの版を入手したかの同定はほぼ不可能であろう。また組織名は現在定着している邦語を優先して用いる。当初は外国人名・組織名の索引を巻末に付ける予定であったが、上の事情と、時間配分の不手際で出せなかった。
- 5) 議会記録他は、旧漢字を新漢字に、カタカナはひらがなにした。
- 6) 文中下線は強調したい箇所、文中ゴシックは要約的な強調。

¹⁵フェミニズム思想・運動史研究は、いつの時代も、どの国・地域でも、女性史部門として扱われがちで、しかも対抗勢力との対決には過剰なまでに敏感な書き手が多い。男性と女性の世界が二分割されたかのような歴史叙述・記録類には事欠かない。他方、意外な程に同時代を生きる「反」フェミニズム/フェミニストの旗手への研究関心は薄い。むしろ本稿でもって、「反」フェミニズムの全容は示すことはできないが、I部-1で扱う「反」は、女性に理解ある態度を示しつつも、フェミニズム運動に歯止めをかける勢力に注目する。ここでは花柳病予防に関心が高い大澤謙二を筆頭に、永井潜・荒川五郎等がその役回りを果たす。なお平塚は父親のようなタイプの男性を避けたがる節がある。花柳病男子結婚制限法の請願で著名人の賛同を得るキャンペーン活動中でも、森鷗外の自宅には市川を送る。結婚後も平塚を経済的に支援してくれた父に対する記述は驚くほど少ない。後述する永井とのコンタクトがない理由も見えてくる。外見は近代主義者でありながら、女性を飾り立てるのを好み、家庭に封じ込めるタイプの男性。平塚にとっての最も手強い「反」フェミニズム/フェミニスト像は、身近な父の生き方から形成されたのかもしれない。

【序の主要参考文献】

※主要参考文献であり、他は全編を通して原則としてⅢ－3の文献リストに一括記載

1. 邦語文献

1) 平塚関係の主要文献

- 平塚らいてう(1917) 「避妊の可否を論ず」『日本評論』 第2巻9号 1917年9月
平塚らいてう(1919) 『婦人と子どもの権利』 天佑社 1919年12月
平塚らいてう(1926) 『女性の言葉』 教文社 1926年9月
平塚らいてう(1977) 『むしろ女人の性を礼拝せよ 平塚新性道徳論集』 人文書院 1977年7月
平塚らいてう著作集編集委員会(1983～1984) 『平塚らいてう著作集』 (全7巻・補巻1巻) 大月書店 1983年6月～1984年6月
平塚らいてう(1971) 『元始、女性は太陽であった』 下巻 大月書店
小林登美枝(1977) 『平塚らいてう——愛と反逆の青春』 大月書店
米田佐代子(1985) 「平塚らいてうの国家観——国家と女性についての一考察」 『歴史学研究』 第542号 31-41.
米田佐代子(2002) 『平塚らいてう——近代日本のデモクラシーとジェンダー』 吉川弘文館

2) 新聞

- 『報知新聞』 1920年6月4日
『朝刊やまと新聞』 1920年6月6日
『中外商業新報』 1920年6月7日

3) 1945年まで

- 河田嗣郎(1924) 『家族制度と婦人問題』 改造社
記事(1937.5.1) 「送る長与 送られる永井……」 『医事公論』 1293, 22.

4) 1945年以降

- 市野川容孝 (1996) 「性と生殖をめぐる政治——あるドイツ現代史」 (江原由美子編『生殖技術とジェンダー』) 勁草書房 163-217.
江原由美子 (1996) 「生命・生殖技術・自己決定権」 (江原由美子編『生殖技術とジェンダー』) 勁草書房 309-373.
江原由美子(1990) 「フェミニズムの70年代と80年代」 (江原由美子編『フェミニズム論争——70年代から90年代へ』 勁草書房) 2-46.
江原由美子 (1997) 「生殖技術の可能性/不可能性——錯綜するリプロダクション」 『談』 No. 57. 14-25.
大橋由香子(1998) 「女のからだへの国家管理と優生思想」 ——墮胎罪・優生保護法への対抗論理を求めて」 (近藤和子編著『性幻想を語る』 三一書房) 42-74.
岡田英己子(2004) 「福祉職の職業倫理にみるドイツ優生学・優生思想の特徴——『否定的(消

- 極的)優生学 vs 肯定的(積極的)優生学』の二項対立図式の内面化」(中村満紀男編著『優生学と障害者』明石書店) 346-434.
- 岡田英己子(2005a)「平塚らいてうの母性主義フェミニズムと優生思想——『性と生殖の国家管理』断種法要求はいつ加筆されたのか」『人文学報』東京都立大学人学部 第 361 号(社会福祉学 21) 2005 年 3 月 23-97.
- 小熊英二(2002)『〈民主〉と〈愛国〉——戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社
- 折井美耶子・篠宮芙美・清水和美・永原紀子他(2003)『女性解放運動のさきがけ 新婦人協会の研究——特集・花柳病男子結婚制限法制定の運動』女性の歴史研究会 第 3 号
- 加藤秀一(2004)『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか——性道徳と優生思想の百年間』ちくま新書
- 加納実紀代(2002)「母性主義フェミニズム」(井上輝子/上野千鶴子/江原由美子/大沢真理/加納実紀代編『女性学事典』岩波書店) 440-441.
- 鈴木裕子(1989)『女性史を拓く』1 巻, 2 巻 未来社
- 竹村和子縮(2003)『“ポスト” フェミニズム』作品社
- 廣嶋清志(1981)「現代日本人口政策史小論(2)——国民優生法における人口の質政策と量政策」『人口問題研究』第 161 号 61-77.
- 藤野豊(1998)『日本ファシズムと優生思想』かもがわ出版
- 藤目ゆき(1999)『性の歴史学』不二出版
- 松原洋子(1997a)「民族優生保護法案と日本の優生法の系譜」『科学史研究』第 II 期第 36 巻(No. 201) 42-52.
- 松原洋子(1997b)「〈文化国家〉の優生法——優生保護法と国民優生法の断層」『現代思想』第 25 巻 4 号 8-21.
- 松原洋子(1998)「戦時下の断種法論争——精神科医の国民優生法批判」『現代思想』第 26 巻 2 号 286-303.
- 松原洋子(2002)「優生学」(市野川容孝編『生命倫理とは何か』)平凡社 135-141.
- 水田珠枝(2007a)「平塚らいてうの神秘主義(上)——成瀬仁蔵・ドイツ観念論・禅との関連で——」『思想』996, 4-33.
- 水田珠枝(2007b)「平塚らいてうの神秘主義(下)——成瀬仁蔵・ドイツ観念論・禅との関連で——」『思想』997, 128-146.
- 水戸部由枝「ヘレーネ・シュテッカーと帝政ドイツの墮胎論争」『西洋史学』第 198 号 44-61.
- 吉川豊子(2004)「産めよ殖やせよ/産児調節運動から国民優生法へ——母性の奨励と優生思想」『わたちの戦争責任』東京堂出版 34-49.

2. 欧米文献

- Evans, Richard J. (1976) *The Feminist Movement in Germany 1894-1933*. London: SAGE Publications.
- Evans, Richard J. (1978) *Liberalism and Society: The Feminist Movement and Social*

London : Croom Helm, 186-214.

Greven-Aschoff, Barbara (1981) Die bürgerliche Frauenbewegung in Deutschland 1894-1933. Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht.

Schröder, Ihris (1994) Soziale Frauenarbeit als bürgerliches Projekt: Differenz, Gleichheit und weiblicher Bürgersinn in der Frauenbewegung um 1900. In: Tenfelde, Klaus/Wehler, Hans-Ulrich (Hg.) Wege zur Geschichte des Bürgertums. Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 209-230.

Stoehr, Irene (1989) Mütterfeminismus-ein alter Hut? Die Frauenbewegung und die Mütterfrage seit der Jahrhundertwende. In : Pass-Weingartz, D. / Erlert, G. (Hg.) Mütter an die Macht. Die neue Frauen-Bewegung. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt, 73-99.

I 部 平塚らいてうの優生思想形成過程

——大澤謙二・永井潜の「反」フェミニズムとの対比を通して

冒頭年表

| 断種関連 | | | | | |
|------|--------------------------------|------------------------------------------------------------|------|-------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 年 | 平塚らいてう | 荒川五郎 | 八木逸郎 | 政府関係 | 永井 潜 |
| 1902 | | | | | 1.大澤謙二生理学教室助手 |
| 1903 | | | | | 2.ヨーロッパ留学、ドイツのゲッチェン大学(1906 帰国) |
| 1904 | | | | | |
| 1914 | | | | | 3.「結婚と健康診察」『新真婦人』:「去勢」 |
| 1915 | | | | | 「人種改善学の理論」『人性』:「生殖防止ノ手術」 |
| 1916 | | | | | 『人性論』:「輸精管切断法」「輸卵管切断法」により「受胎不能に」 |
| 1917 | | | | | |
| 1918 | | | | | |
| 1919 | | | | | |
| 1920 | 10.「花柳病者と善種学的結婚制法」『女性同盟』:「絶産法」 | | | 第 42 議会答弁「滅種法」 | |
| 1921 | | | | 6.内務省保健衛生調査会で民族衛生論ず | |
| 1926 | | | | | |
| 1927 | | | | | |
| 1928 | | | | | |
| 1929 | | | | | |
| 1930 | | 第 58 議会で中馬興丸提出の「帯患者結婚制限法制定ニ関スル建議案」賛成者となる(外科手術により子孫繁殖の途を絶つ) | | 3. 保健衛生調査会、民族衛生の特別委員会設置 | 7. 民族衛生学会創立相談会 ⇒ 11. 日本民族衛生学会創立し理事長に就任 |
| 1931 | | | | 7. 特別委員会で、永井「滅種法」講話 12. 特別委員会で、三宅「断種法と精神病学…」 | 10. 民族衛生学会講演「断種法の過去及び現在」 3. 『民』創刊: 雑報欄米国情報として「絶種法」制定 5. 『民』: 編集後記「断種」 8. 『民』: 「独逸国内の去勢」 |
| 1932 | | | | | 4. 『民』: 「英国の滅種法案」 8. 『民』: 「断種法罰すべきか」 |
| 1933 | | | | | 6. 優生結婚相談所開設 10. 断種法建議案 12. 『民』: 「断種法案を今議会に提出する手筈」 |

| 結婚制限関連 | | その他 | 年 |
|--------------------------------------------------|---------|----------------------------------------------------------|------|
| 平塚らいてう | 荒川五郎 | | |
| | | | 1902 |
| 4.日本女子大学校家政学部入学.生理学を大澤謙二に、衛生学を三宅秀に学ぶ(1906年卒業) | | | 1903 |
| | (衆院初当選) | 10.大澤謙二『社会的衛生 体質改良論』 | 1904 |
| | | | 1914 |
| | | | 1915 |
| 10.「男女性的道德論」『婦人公論』:「花柳病男子から何等かの方法で結婚資格を奪ふ」 | | | 1916 |
| 9.「避妊の可否を論ず」『日本評論』:「国家の力によって、結婚資格を制限」(A) | | | 1917 |
| 1.2.「我が現行法上の婦人」『法治国』:「花柳病男子に対する結婚禁止の法律」 | | | 1918 |
| (B) | | 6.田代義徳「花柳病に関する男子の取締」『婦人之友』 | 1919 |
| 2.第 42 議会「花柳病男子の結婚制限に関する請願」(荒川は代理で提案説明) | | 2.穂積重遠「優生学と婚姻法との関係」『廓清』(10・2)「生殖を不能ならしめる手術…之は人道から議論もあらう」 | 1920 |
| 6.第 43 議会「花柳病男子の結婚制限に関する請願」(荒川は紹介議員のひとり) | | 11.大澤謙二「花柳病男子結婚制限法否決の不条理」『性』 | |
| 1.第 44 議会「花柳病者に対する結婚制限並に離婚請求に関する請願」(荒川は紹介議員のひとり) | | | 1921 |
| | | 12.三宅驥一「遺伝と人種改良」『キョク』:「絶産」 | 1926 |
| | | 3.花柳病予防法成立(1928.9 施行) | 1927 |
| | | | 1928 |
| 1.「花柳病予防法の修正を望む」『婦人公論』:「花柳病男子結婚制限法案」を参考とせよ | | | 1929 |
| | | | 1930 |
| (5.日本産児調節連盟加入) | | | 1931 |
| (7.墮胎法改正期成同盟委員となる) | | 2.『精神衛生』第2号:ドイツの「断種の問題」について | 1932 |
| | | 7.遺伝病子孫防止法(ナチ断種法)制定(1934.1 施行) | 1933 |

| 年 | 平塚らいてう | 荒川五郎 | 八木逸郎 | 政府関係 | 永井 潜 |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------|
| 1934 | 1.「本議会で何を期待するか」で、「何の期待も持たなくなっていた」と断種法案に全く触れず、無視している | 1.第 65 議会で「民族優生保護法案」提出(荒川・池田秀雄)審議未了 | 5.30 断種法協議会：断種法案をもち、八木を介して内務省衛生局長らと会合。政府案として、提出することになる。その後局長交代もあり、この計画は一時頓挫 | | 10. 永井、民族衛生学会大阪、福岡、熊本各支部発会式出席 |
| 1935 | | 2.第 67 議会で「民族優生保護法案」を提出(荒川・池田・八木・青木亮貫)審議未了 | | | 6.『婦人之友』対談「優生学的に見た結婚と遺伝」：断種法制定推進 12.日本優生結婚普及会発会、会長 |
| 1936 | | | | | 2.断種法案の骨子できる 12.『読売』断種法案発表。「今議会提出の運び」 |
| 1937 | | 3.第 70 議会で「民族優生保護法案」提出議題とならず終わる 4. (衆院選落選) | 8. 第 71 議会で優生課に関わる建議 | | 八木、荒川両代議士と協議の上、協会草案修正して提出 3. 東京帝大退官し、台北帝大に医学部設立 |
| 1938 | | | 1.第 73 議会で「民族優生保護法案」提出。委員会送付 12.第 74 議会で「民族優生保護法案」提出。委員会送付 | 1.厚生省優生課 4.優生課、「民族衛生協議会」招集断種法本格始動 11.民族衛生研究会設立 | 北京大学北京医学院院長 民族衛生協議会委員となるが4月欠席 |
| 1939 | 2.「民族優生保護法案に関連して」掲載紙不明：「優生保護法(断種法)」断種法の如きは…決して好ましいものではありません」「断種を必要とするような精神薄弱者や精神病者、その他悪質遺伝病者などをも治せるほどの今後の医術の進歩こそ願わしいこと」 4.「今議会と婦人」『全人』：「『民族優生保護法』(断種法)」何れにしても問題の多い断種法 | | 3.民族優生保護法案、衆議院通過。貴族院送付。審議未了 | 7.家系調査 | |
| 1940 | | | 3.第 75 議会で政府案として「国民優生法案」提出し、可決成立 5.1 国民優生法公布 | 5.優生結婚相談所 | |
| 1941 | | (1944.8.5 死去) | 2.国民優生連盟 | 7.1 国民優生法施行 | 1942.7. 永井、三女急逝 |
| 1945 | | | (1945.1.4 死去) | | |
| 1946 | | | | | |
| 1947 | | | | | 引き上げ帰国 |
| 1948 | | | | 6.優生保護法成立 7.公布 9.施行 | 『民族の運命』(民族衛生叢書第一巻) |
| 1949 | | | | 6.優生保護法改正 経済条項 | 1952 日本性学会設立、会長に |
| 1977 | (C) (1971.5.24 死去) | | | | (1957.5.17 死去) |
| 1983 | (D) (A)に断種を加筆したもの | | | | |

| 平塚らいてう | 荒川五郎 | その他 | 年 |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|
| | | 7. 小泉丹「優生学と現代」『中央公論』 独の強制断種法紹介 11. 竹内茂代「人類の向上のために行ふ断種とはなにか」『婦女新聞』「簡単な手術に拠って日本民族の向上進歩を図らうといふ断種が一日も速く制度化する様祈らずには居られません」 | 1934 |
| | | 2. 古屋芳雄「断種法とその民族生物学的背景」『改造』 断種法について「内務省で委員の手に銚衡されつゝあるが、恐らく近き将来の議会で提出さるゝに到るであらう」 4. 安田徳太郎「断種法への批判」『中央公論』 | 1935 |
| | | 10. 金子準二「強制的断種法の制定反対」『社会事業研究』 | 1936 |
| | | 2. 政府、母子保護法案を第70議会で提出、成立 3. 公布。(1938.1.施行) | 1937 |
| | | 1. 厚生省の創設 4. 国家総動員法公布。 5. 施行 7. 『精神衛生』「断種問題に関する理事懇談会」金子準二: 「他に精神病者に子供を生まさぬやうにする方法は幾らでもある」 7. 菊地甚一『断種問題小論』: 精神病は、まず療病処置が考慮されるべき | 1938 |
| 11. 「優生座談会」『婦人運動』2~3頁 厚生省予防局長の高野六郎が「断種法も悪質遺伝をなくするためぜひ必要」と水をむけても、平塚は「性病者は結婚してならないといふ法律」を作ろうと新婦人協会で運動したが、「今でもそれだけは必要だ」と、性病者の結婚制限のみを主張し、断種法には言及しない。 (出席者: 奥むめお、田中孝子、赤松常子、木内きやう、東京職業紹介所長糸井譲治、人口問題研究所企画部長北岡寿逸) | | 4. 成田勝郎「断種論」葬送譜『脳』: 命をあらかじめ断つ断種は生命のための医学ではなくて死学、殺学である、国策要求からの断種論議は謝絶せよ 6. 齋藤茂吉「断種法問題解決のため」『東京朝日新聞』 6. 齋藤茂吉「断種その他」『東京日日新聞』: 断種は民族衛生の「一つの方法」にすぎないのであって「唯一の方法」ではない | 1939 |
| | | 吉益脩夫『優生学の理論と実際』: 断種の方法、各国の現行断種法、断種問題に対する論議の検討 | 1940 |
| | | 青木延春『優生結婚と優生断種』 | 1941 |
| | | | 1945 |
| | | | 1946 |
| 春、疎開先より帰京 | | | 1947 |
| | | | 1948 |
| 4. 「民族の未来のために」『女性改造』: 「性病者の結婚制限法案…今こそ制定の必要」 | | | 1949 |
| | | | 1977 |
| | | | 1983 |

I部 平塚らいてうの優生思想形成過程——大澤謙二・永井潜の「反」フェミニズムとの対比を通して

冒頭年表¹⁶(前頁に記載)

はじめに

I部では、平塚らいてうの優生思想形成過程が検討対象になる。

これまでの研究で(岡田[2005a])、平塚の優生思想の核をなすのは、よく指摘される1917年脱稿の「避妊の可否を論ず」ではないことが解明されている。「避妊の可否を論ず」稿に記された断種法制定要望は、書き直し癖があった平塚が後年になって加筆したものであった。故に1919/20年の、花柳病男子結婚制限法案に見られる性病患者の結婚制限・健康証明書提出案にこそ、平塚を「優生思想の持ち主」と見なすのかどうかの査定の核があると見てよからう¹⁷。

では、平塚はどこからその情報源を得たのであろうか。平成13年の研究開始時からの最大の疑問は、この点にあった。誰でもまず思い浮かべるのは、エレン・ケイ著作の影響であろう。そこで1911/12年前後の時期に調査対象を絞り、無為に年月を費やす羽目になるのだが¹⁸、やがてI部「冒頭年表」とI部論文、およびII部「年表：主流と傍系の系譜から見る『断種法(国民優生法)制定に至る動き』」第一期にも示されているように、大澤謙二の生理学講義が契機で、優生結婚・結婚制限情報を知ったと考えるに至る。平塚はまだ二十歳前である。欧米で、特にドイツや北欧で、フェミニズム論に優生思想が浸透し始める時期と大差はない。きわめて早い時期である。1912年にエレン・ケイの翻訳に入る前に、すでに優生思想には親近感を持っていた点は、重視されるべきであろう。

以下のI-1では、二点が明らかにされよう。日本女子大学校時代に生理学講義で欧米の優生結婚・結婚制限情報を聞くこと、しかもそれが日本の断種法制定運動のリーダーである永井潜の師による講義であること、である。日本を代表する「優生思想の持ち主」著名人リストがあるとすれば、双璧をなすはずの平塚と永井。その両者に同根の優生思想を植え付けるのは東大生理学教室の初代教授であった。

なお冒頭年表は本稿の概観には便利なので、岡田([2005a])の年表を一部加筆・修正して掲載。より詳細な年表は、戦前がII部、戦後はIII部に配置する。

¹⁶冒頭年表は岡田旧稿の誤植を修正、一部加筆して掲載(岡田[2005a] 78-81)。ABCDは平塚「避妊の可否を論ず」稿が繰り返し、書き直されて出てくる時期を指す。参照用に残す。

¹⁷新婦人協会の花柳病男子結婚制限法案の経緯を通して、「性と生殖の国家管理」断種法要求はいつ加筆されたのかを検討した。特に、いわゆる遺伝性強調の系譜であるはずの否定的(消極的)優生学に限定し、「いか程の優生思想の持ち主なのか」の査定基準に十分になりうる断種法要求に、平塚がいつ入るのを検証。「社会的なるもの」に疎いと述懐する平塚が(岡田[2005b])、自宅を事務所を提供するほどの情熱でもって、花柳病男子結婚制限法制定に邁進する運動戦略の是非も検討済み(岡田[2005a])。

¹⁸当初は1911年9月『太陽』掲載の金子筑水「現実教 人間改造論」でエレン・ケイの名を知り、翌1912年12月『帝国文学』掲載の石坂養平「自由離婚説」で著作にふれることが契機であり、1913年2月『青鞥』に「恋愛と結婚」訳を連載し、自分の課題を「婦人問題」に置く決心をするという、通説に即して調査を開始。これについてはI部の平塚らいてう年譜参照。

I 部論文部分の構成は以下の通り。

I-1 平塚らいてうの優生思想の起点——「反」フェミニズムの潮流下での優生結婚・結婚制限情報の摂取

1-1 若き日の平塚らいてうに与えた大澤謙二の影響——生理学テキスト分析から

1-2 大澤謙二・永井潜の「反」フェミニズムへの静かなる抗議の始まり

小活

I 部論文関連の資料は次の二種類からなる。すでに予定枚数を超過しているために、兩名の生涯・活動はこれで代替する。永井に関する経歴調査は今後も継続を要す。

I-2 平塚らいてう年譜と著作リスト

I-3 永井潜年譜と著作リスト・解題

I-1 平塚らいてうの優生思想の起点——「反」フェミニズムの潮流下での優生結婚・結婚制限情報の摂取

若き平塚が優生結婚・結婚制限情報を知るのとは、日本女子大学校に入学した一年目のことと考えてよい。点と点を繋ぎ合わせる史資料分析からの仮説ではあるが、ほぼ間違いはないだろう。まず平塚が受講したはずの、大澤講義の内容がテキスト分析から明らかにされる。次いで大澤謙二・永井潜の系譜による優生学の欧米情報、特に優生結婚・結婚制限の情報ルートの起点が示される。

これによって平塚が、日本の断種法制定運動のリーダーと誰もが認める永井と優生思想形成過程の初期に、同じ講義内容を聴いたことが明らかにされよう。

1-1 若き日の平塚らいてうに与えた大澤謙二の影響——生理学テキスト分析から

東京帝国大学医科大学生理学教室の初代教授であり、1891年から5年間医科大学長を務めた大澤謙二(1852-1927)は、1901年に開校した日本女子大学校の教授を兼務し、1921年までの20年間家政学部で生理学を担当する。1903年に同校家政学部に入學した平塚らいてう(1886-1971)は、第一学年で大澤の生理学を受講している¹⁹。

二度の渡独経験を持つ大澤は、1901年にも欧米各国に派遣され、当時の最新情報や資料を入手して帰国、それらをもとにして1904年刊の『社会的衛生 体質改良論』(東京開成館)や1909年刊の『通俗結婚新説』(大倉書店)を著し、花柳病者の結婚禁止や花柳病伝染への厳罰・損害賠償を紹介し、「去勢術」(断種)にまで言及している。1908年には新聞連

¹⁹『日本女子大学校四十年史』(中村政雄編 1942年)によると、家政学部では第一学年で生理学と衛生学を履修している。担当は生理学が大澤、衛生学が三宅秀である。

載をまとめた『生理学上ヨリ見タル婦人ノ本分』（大倉書店）も刊行している。以下で分析される講義録と推定される内容も、ほぼ似た項目が列挙されている。平塚はこうした欧米直輸入の最新情報を、第一学年で耳にした可能性が高い。というのは、最初の一年目だけは、真面目に教室で授業を受けていたからだ。二年目からは、大学校に行っても、図書室で本を読む日々であった。それだけに生理学講義の内容は、記憶に残ったことであろう。

つとに知られているように平塚は、1919年11月に市川房枝とともに新婦人協会を設立し、花柳病男子結婚制限法制定の請願運動を始める。1920年3月の第42帝国議会衆議院で「参考送付」となった同請願は、しかし同年7月の第43帝国議会では不採択となっている。この経緯について大澤は、雑誌『性』（1920年11月）で「花柳病男子の結婚制限法に就て」と題して、「医師の健康診断は不可能ではない」から「請願委員会が否決した理由は正当の理由ではない」と、医師の立場から同請願否決の不条理を指摘している。平塚・市川の運動を脇で支援していると解される。ちなみにこの大澤の原稿は、新婦人協会の機関誌『女性同盟』3号（1920年12月）にも、「花柳病男子結婚制限法否決の不条理」と題名を一部修正して、転載されているから、ある種の連帯感が、大澤と平塚の間にあったと見てよい。事実、花柳病男子結婚制限法案を議会提出する前に、平塚は大澤には相談にしている。多くの助言も受けた模様だ。

このように優生結婚・結婚制限情報ルートを共有し、花柳病男子結婚制限法でも共闘スタイルを組む二人ではあるが、フェミニズムとの関連では、「優生思想の持ち主」として両者を同一には括れないだろう。大澤をモデルにしたと思われる批判めいた戯曲も、平塚は後に書いている。しかし、なのである。だからといって両者は真っ向から対立するわけでもない。この辺の微妙な距離感から、逆に若き日の平塚への大澤生理学講義の影響力が読み取れるように思う。若き平塚は、何かおかしいという気持ちを大澤にも抱きながら、反発を表立って示すことはない。早い話が無視するわけで、これは父親や森鷗外にとった対処法とよく似ている。

以下、日本女子大学校での生理学の講義内容を知る唯一のものと想定できる日本女子大学に現存する『日本女子大学講義[9]生理学／大澤謙二[著]』（このように記載 傍註筆者）と、上述の1904年から1909年にかけて刊行された大澤の三つの著作を通して、平塚への優生思想の影響力を検証する。

（1）『日本女子大学講義[9]生理学』について

大澤の生理学の講義に関する著作で日本女子大学図書館に現存するものは、『日本女子大学講義[9]生理学／大澤謙二[著]』のみである。『女子大学講義』は1909年から開始された日本女子大学校の通信教育の教科書として配布されたもので、一冊に複数の科目を部分的に掲載し、最終的には分割して科目ごとにまとめることを意図して発行されたものである。この著作は大澤の「生理学」部分をまとめて製本したものと思われ、自家製本されている

ため発行年等の記載はなく不明である²⁰。

日本生理学教室史編集委員会編『日本生理学教室史(上巻)』(日本生理学会 1983年)の中、「東京大学医学部生理学教室史」で、初代教授大澤謙二の論文を紹介した最後に「生理学に関する大澤謙二の遺著は見出し難いが、教授が日本女子大学校に於て生理学を講じたその講義要目があり、大正三年 大澤謙二述生理学(講義要目)524頁 編者桜楓会 神田精美堂発行となっている」とある。

つまり、大澤生理学講義の内容を知る手がかりとなるものは、上記の著作のみである。しかも、目次の末尾に「第一篇終」と記されているが、テキスト構成・内容から判断して少なくとも「第三篇」までであるようなのだが、一編しか入手できていない。つまり史資料的にはテキストは不備なものではある。が、これを手がかりにし、大澤がこの時期に相次いで刊行する類似著作を参照しながら、平塚が受講した1903年当時の講義内容を推測していきたい。

この『日本女子大学講義 [9] 生理学』の構成を目次からみると、「生理学 講義要目」とあり、まず「生理学誘導篇」として「生理学とは如何なる学問であるか」に始まる生理学の定義を述べ、ついで「生理学総論」として520頁余の本書のほぼ半分を占めている。そして「生理学各論」の「第一篇 物質交換論」を述べて本書は終わっている。構成は教科書用のテキストなので当然のことであるが、生理学入門としての基本を盛り込んでいる。後年、平塚は大澤生理学講義について、次のように述懐している。

女子大時代、大沢先生の生理学の時間、「受精」についての講義で、人間の見える代りに、ウニの生殖について説明されたことがありました。ウニの卵細胞に向って、精虫がいくつも進んでいるのを顕微鏡で見せられて、これはウニの精虫だが、人間の精虫はもう少し形がどうかと、大沢先生が説明してくれるのですが、わたくしには、人間の卵細胞と精虫が、どういうふうにして出逢うかということがまるでわからず、よほど立って質問しようかと考え、思いとどまったことを覚えています。のちに偶然春画を見て、人間のそうした行為を知り、ウニの交配を思い出して、あとき質問に立たないでよかったと、胸をなでおろす思いをしたものでした(平塚 [1971] 286)。

この平塚の受講した内容に符合するものを本書の中であたってみたところ、「生理学総論」中の「受精」のところで、「卵子の中へ精体(精虫又は精糸とも云ふ)の進入するのを受精と云ふ」としてウニの卵子の図を掲げている。そして、「受精と云ふ事は男性の細胞と女性の細胞が合体するのである」として、平塚のいう顕微鏡で見た図がいくつか示されている。「是は『うに』の卵などでもさうであります、吾々人類の卵でもおなじことです」と、

²⁰日本女子大学図書館には『女子大学講義』(女子大学通信教育会編 精美堂)は1909年刊行の「第一学年第三号」から「第一学年第七号」、「第二学年第七号」、「第二学年第九・十号」、「第二学年第十一・十二号」など数冊が現存するのみである。国会図書館には「第一学年第二十一号」(精美堂1910年)がある。衛生学講義は『日本女子大学講義[10]衛生学』とある。(2006年同図書館での永原氏の聴取による)

記されている。平塚はこの大澤の通信教育講義録が刊行される 6 年前に受講している。同じような内容の講義であったと解してよかろう。

「生理学総論」の中で注目されるのは、「遺伝」「進化論」の講義である。メンデルの法則が「メンデル氏の間種分離則」という小見出しで詳述され、「進化論」についても「進化論の正しい証拠」が示され、「人為淘汰」「生存競争」まで講じられている。遺伝については「^{かたわ}畸形なども遺伝する」とか、「善い性質も悪しき性質も其儘伝はる」と述べる。また「後天的性質の遺伝」は「遺伝せぬと唱へて居る」、「ワイスマン」の説と生殖細胞に影響を及ぼすものはその限りではない、としている。

つまり、平塚は日本女子大学時代、大澤講義を通して遺伝や進化論の基礎知識を得ていたと考えてよかろう。

(2) 『社会的衛生 体質改善論』と『通俗結婚新説』について

さて、大澤は 1901 年から 1902 年にかけて、欧米各国に派遣される。日本代表として出席したイタリアのトリノで開催の第五回万国生理学会では「右利と左利」について、ベルリンの万国動物学会では「イトノの群遊」について講演している。

彼の渡欧前後には、種々の関連国際会議がヨーロッパで開催されている。1899 年にはロンドンで第一回国際遺伝学大会、ベルギーのブリュッセルでは第一回万国花柳病予防会議が開催され、1902 年にもブリュッセルで第二回万国花柳病予防会議が開かれている。第一回万国花柳病予防会議については『通俗結婚新説』で、「千八百九十九年には医家、衛生家は勿論、宗教家、道德家、教育家、法学家等の社会のあらゆる方面の人々が白国ブリュッセル府に集って第一回万国花柳病予防会議を開設したのを手始めに、次いで佛国には佛国衛生及道德予防会が起り、独逸には独逸花柳病撲滅会(原文のまま 傍註筆者)が起り、^{デンマーク}唎馬、伊太利亦た同一の企てを為し」と(大澤[1909]435-436)、欧州の状況と共に紹介をしている。

このように大澤は、この出張で花柳病や結婚制限関連の最新情報と資料を入手し、帰国の途に着く。上記の『社会的衛生 体質改善論』では、1900 年 4 月にプロシヤで実施された花柳病患者に関する医事統計や²¹、1902 年のドイツを中心とした結核予防・施策情報²²な

²¹「普国政府は千九百年四月三十日を期し、全国の医師に命じて、その一日に治療せる花柳病者の数を調査せしめ……普国における花柳病患者を一日平均十万人、即ち人口千人に付き、およそ三人なりと見做すとも、なほ実際よりは少数ならんと推算せり」、「伯林における同日の統計が人口一万人に対し痲病患者八十三人、梅毒患者三十六人」で、一年に換算して「大都会にありては、二十歳より三十歳に至る青年の中にて、毎年千人に対する二百人(即ち五分の一)は痲病に、二十四人は梅毒に罹る」などあり、「これに由りて文明国における花柳病蔓延の程度を知るべし」としている(大澤[1904]61-63)。さらに本「統計に由り、伯林大学の学生の二十五%即ち四人毎に一人は花柳病に罹れることを発見」した文部大臣は、1903 年に各大学に「生殖器官が健康に危険」であること、これの防御法と道德面からの指導のために「医科の職員」と「哲学または神学」部の「代表者」とによる、全大学の学生への公開講義開催の「論達を為せり」と記している(大澤[1904]67-68)。ここにすでに大学生向けの性教育情報が紹介されている点で、1924 年に山本宣治が大学生に行った調査に基づく論文「若い男の性生活」が好評を博した際に、「本来は我らが先なのに」式の妬みで、掲載中止に永井が権力行使をする背景も見えてくる。これについては本稿Ⅲ-1 参照。

²² 大澤([1904]2-3)は、ドイツの結核の「貧民」の救療所数(57ヶ所と建設中 25ヶ所)の衛生局調査も掲載。

どを取り入れた論述がなされ、米国結婚制限法²³も紹介されている²⁴。

1) 『社会的衛生 体質改善論』(東京開成館、1904年10月)

本書は1904年10月の刊行で、平塚の日本女子大学校在学中(1903~1906年)のことであり、この前年度の第一学年では大澤の生理学を受講しているの、目を通した可能性は高いと考えられる。また平塚受講の時期は、大澤の執筆時期と重なると思われ、講義の中で本書の内容にふれたことも考えられよう。

以下で、その主な内容を紹介していくこととする。

「婦人が頻々分娩」して死亡する「母なき子の不幸」は「一家の不幸のみならず、実に国家の損耗なり」と最後は「国家」に帰結するものの、大澤は「社会学の泰斗グンプロウィッツ」の『配偶及び自由恋愛』と題する著書から引用して、『今の如き婚姻制度を廃し、これに代ふるに自由恋愛を以てすべし。女子が独立自営の道を得て、男子の保護を要せざるに至れば、この事必ず成就すべし』と言へり。この論は女子の地位を高め、社会の幸福を増進する目的に出たるもので、「欧州にてさへ、男子の圧制に^{けんえん}嫌焉たる者あるは明白なり」として、「婦を尊重すべし」と主張する。欧米フェミニズム論の著作から、一定の影響を受けた内容になっている(大澤[1904]51-52)。

同時にまた、「交接に由つて生ずる弊害を防圧する方法」として「法律の必要」を唱え、「個人及び一家の権利に深く立入ることは、及ぶ限避くべきことなれども、個人の被害、負傷及び死亡を防御する為には止むを得ざるなり。……国家は未だ生まれざる者をも保護する義務あり。これ、健全にして強壯なる後継者を得るは、国家の利益なれなり」と、個人の権利よりも「国家の義務」「国家の利益」を優先することはやむをえないとしている(大澤[1904]47-48)。上の欧米フェミニズム論の引き写しに近い内容との齟齬が出てくる箇所でもある。

結婚制限については次のように説明する。人口過多になれば食料不足となつて、「人民の体質不良となり」、「小児の死亡数殊に大」となる。そのための良策を論じても「他に方法なきときは、人口過殖を制限せざるべからず」「佛国におけるが如き二児制を採用すべきか、又は近時の学者が唱道するが如き人工淘汰法を行ふべきかは、深く考ふべき点にして、……これを人類に施して、心身の強健なる者のみに結婚を許すが如き、個人の自由に深く立入ることが実際行はるべきか。篤と熟考すべき問題ならん」と「人工淘汰法」に慎重な姿勢を示しながらも、結婚制限の方法を以下のように述べている(大澤[1904]3-6)。

「ネッケ氏が『許婚者の医師的検査』と題せる著書の中に、米国ダコタ州にては医師が心身に異状なきことを証明せし後にあらざれば結婚を許さざる法律を定めたりとあり」と

²³『社会的衛生 体質改善論』ではノースダコタ州(引用では「ダコタ州」とあるがノースダコタのまちがい)とミンガン州を、後述する『通俗結婚新説』ではインディアナ州のものをとりあげている。

²⁴以下、下線は筆者。

ネッケ氏の本を引用して、大澤は「米国の如き自由国がこれを実施せるは、一見奇なるが如くなれども改良に熱心なる一徴として見るべきものならん。後日或は婚嫁不適者に去勢術を施して、世界を驚かすことの必しも無しとは言ひ難からん」と予見する(大澤[1904]6-7)。米国の結婚制限法紹介としては、かなり早い時期に属すると思われる。1907年にインディアナ州が世界初の断種法を制定する3年前にこれを予見していることから、大澤は米国の結婚制限に関して豊富な情報を有し、米国断種法制定前夜の状況分析をしていたことがうかがえる²⁵。

花柳病伝染への損害賠償についても言及している。「害を起せる者に現行刑法を嚴重に適用し、適當の条項なきときは、これを新設し、なほ民法によりて、損害賠償の途を開き、且つ不適者の婚姻を禁ずべきなり」と、結婚制限の法律の適用と創設を主張し、損害賠償請求にまで言及している(大澤[1904]48-49)。「伝染性生殖器病即ち梅毒及び麻病毒を患ふ者には、交接を嚴禁し、犯す者は嚴罰に処するのみならず、これが為に相手方が害を受けたる場合には損害を賠償せしめざるべからず。現今の如く損害賠償の盛に行はるゝ世の中にて、他人をして、終生不具とならしめ、甚しければ早世せしむるが如き罪人を不問に置くは、解すべからざることなり。況や病あるを知りつゝこの罪を犯す者、稀ならざるにおいてをや」と、伝染性の花柳病の患者には「交接を嚴禁」し、これを「犯す者は嚴罰」に処し、損害賠償請求の対象たる「罪人」とし、遺伝性の疾患とは区別している(大澤[1904]60-61)。

ちなみに平塚は、新婦人協会の花柳病男子結婚制限法の条項に「夫より病毒を感染したる場合は妻は離婚後も男子に対し全治迄の生活費と治療費と相當の慰謝料とを請求する事を得」と、損害賠償請求の内容を盛り込んでいる。

さらに続く。「米国ミチガン州は癲狂・痴呆・梅毒及び麻病を患ふる者の結婚を嚴禁し、犯す者は罰金・禁獄または両者を科するの法制を定め、なほ關係者は一方の請求により、健康証を提出せざるべからず、醫師もまた證明書の交付を拒むこと能はざることとなせり」と健康証明書提出を高く評価し、「酒精中毒者、癲癇及び他の遺伝性不全をこの制限中に加へざりしことと、花柳病者の交接を禁ずる制度を欠くこと」を遺憾としている。大澤は結婚禁止だけでなく、「花柳病者の交接」禁止を重視していることがわかる(大澤[1904]78)。この点については後に、1920年11月の雑誌『性』掲載の「花柳病男子の結婚制限に就て」でも、大澤は新婦人協会の請願に内縁者への視点・言及が欠けている点を指摘している。

このように本書では、「人工淘汰法」については「個人及び一家の權利に深く立入ることは、及ぶ限避くべきこと」とし、結婚制限についても「心身の強健なる者のみに結婚を許すが如き、個人の自由に深く立入ることが實際行はるべきか。篤と熟考すべき問題ならん」と、権利侵害については慎重な姿勢を示しているが、米国のノースダコタ州、ミシガン州などの結婚制限法を紹介している。

一方、花柳病についてははっきりした姿勢を大澤は示す。とりわけ梅毒患者は、「疑なき

²⁵ この時期の大澤の本には、結婚制限法についてはアメリカのみで、去勢についてはドイツ・スイス情報もあるが、北欧情報は無い。

生殖の不適者」として、梅毒のために胎児が「奇形、^{はいじやく}羸弱、死亡、流産に陥る」ために、「花柳病者の結婚を禁ずべし」、「花柳病を患ふる者の婚姻を厳禁すべきは勿論のことなり」と繰り返し断言している。そして、花柳病患者には「交接を厳禁し、犯す者は厳罰に処」し、「相手方が害を受けたる場合には損害を賠償せしめ」るよう力説している。

生理学テキストや、この『社会的衛生 体質改善論』が、平塚の優生思想形成の起点と解される。平塚は花柳病患者に対しては法的制裁が可能であることの示唆を講義や本書から受け、それを脳裏におきつつも、まずは青春の模索の旅路に入っていくのである。

2) 『通俗結婚新説』(大倉書店、1909年11月)

1909年に『報知新聞』に「幸福なるべき結婚法」として連載したものに校訂を加えたのが本書である。これは、前掲書に比して発言がエスカレートしている。とりわけ「去勢術」については顕著である。前掲書では結婚制限についてさえ「篤と熟考すべき問題」として慎重であり、米国の「後日或は婚嫁不適者に去勢術を施して、世界を驚かすことの必しも無しとは言ひ難からん」と予見していただけであるが、本書では「去勢術」是非の論議を通り越して、「去勢術の必要」を事例を示して詳述している。

したがって、ここでは「去勢術」に関する言説をとりあげていく。

①個人の自由よりも国家の利益へ

大澤は、「社会主義」の説として「結婚当事者の心身に不良の部分があることを発見する場合は、単に其の当事者の婚姻を禁止するのみならず、直に去勢術を行うて生殖機能を奪却し、斯くて不良の子孫を算出して国家を害する事なからしむると云ふ説である、即ち国家の利益の為には個人の自由を犠牲に供するを厭はぬ主義であるから、これは社会主義中の一説と云はんよりも寧ろ国家主義と名けた方が適當である、吾輩も亦国家主義を奉ずるものである……身を殺して仁を為すのである、一身全体の為めに犠牲となるのである」としており、「国家の利益の為には個人の自由を犠牲に供するを厭はぬ主義」を「国家主義」と定義し、自身を「国家主義を奉ずるもの」として、この「去勢術を行う」ことを「仁を為す」と美化し肯定している(大澤[1909]564)。

この延長で更に「国家の構成成分たる国民が其の邦家の危急存亡に際して、各自其の義務を尽くす可きは論のないことである、併し国民の一部に結婚を禁ずるとか、或いは去勢術を行ふとか云ふ事を始めて聞いた者の耳には定めし残酷であるとの感を催ほすかも知れない」が、「人類は共棲動物の一種」であるから、「共同の利益の為めには自己の自由の一部を犠牲に献げなければならぬのみならず場合に依つては生命をも擲つ可き覚悟がなければならぬ……結婚問題に其の考を及ぼして貰ひ度い、其処で心身の不良な者が結婚すると其子供は此の悪質を遺伝するが故に、産んだ父母も生れた子供も共に難儀な目に逢ひ、且他人にも迷惑をかけるから……結婚しないのが得策である」と、「共同の幸福の為に犠牲となる」ことを求め、「此の理屈の分らぬ者もないとも限らぬから止むを得ず法律を以て婚姻

を禁ずるのである」としている(大澤[1909]565-567)。

この記述からわかるように、大澤は前掲書では「個人の自由に深く立入ること」「個人及び一家の権利に深く立入ること」に慎重な態度を示していたが、本書では「一身全体の為に犠牲」を、「共同の利益の為に……犠牲」を、「共同の幸福の為に犠牲」を、と全体のための犠牲を強いて「去勢術」を認知させようとしている。

ちなみに、大澤の東大生理学教室の最初の後継者である永井は、日本の断種法制定運動の中心人物になっていくのであるが、1934年に次のような発言をしている。「大我のために惜なく小我を犠牲に供する……社会大衆の生活を安寧幸福なからしめんがため」と(永井[1934]39-51)。むろん永井の後輩橋田も「小我を犠牲に供する」タイプで、大学自治を守る最後の盾として、火中の栗を拾うが如き役目を担う。誰もが回避したがる時期に第一高等学校長になり、さらに文部大臣に就任する。歴代教授が押し並べて社会活動派であるのは、偶然ではないだろう。総じてこれが大澤の教えであり、戦前の生理学教室の雰囲気であったと推察できる。

②「去勢術」の必要とその実例

1909年書での大澤の予防策の論旨は明快だ。「法律を以て或る心身病弱者の婚姻を禁ずる」としても、「心身不良者が盛んに私生児を製造」すれば、「社会の厄介者が益々多くなる訳である、其れ故結婚を禁ぜらるゝ者は同時に子を作る可き能力をも奪却されねばならぬ、是れ去勢術の必要なる所以」としており、この時点ですでに、結婚禁止対象者へ「去勢術」を受けることを条件に結婚を許可するという、断種法の基本的枠組みを示している(大澤[1909]567)。なお永井潜が最初に「去勢」に言及するのは、1914年3月刊の雑誌『新真婦人』での「結婚と健康診察」であった。

大澤は「去勢術」の実施例として、スイス²⁶と米国インディアナ州を紹介している。まず、スイスについては、「去勢術は今新たに取らんとする非常手段でないのみならず、最早之を法律として実行して居る国もある」として、「ネッケ氏」が「本年三月の神経学雑誌に瑞西国で実施した四例を掲げてある」と、その4例を詳細に示し(次頁の表1参照)、この4例に関する「ネッケ氏」の見解である「去勢の理想は低能の生殖機能を奪却し、之に由つて社会が直接又は間接に受く可き害を除去するにある、法定去勢の最大目的は人種改良である」を紹介している(大澤[1909]569-571)。

26 青木延春『応用優生学としての断種』(龍吟社[1948]34-35)では、スイスはヨーロッパで最も早く断種法をもつ国で、「一九二八年九月三日に一九〇一年制定の精神病者法」に「精神低格者に対する断種を規定している」が、「可成り以前から法律に基かず断種又は去勢が行はれて居た事は屢々文献に報告されて居る……殊にチューリッヒ市収容所にては一九〇五年以来精神病遺伝予防の為の断種の記録が残されて居る」とあり、本表の4例はそれに該当。日本の断種法制定運動史上での、大澤の1909年書のスイスでは非合法的な実施事例があるとする紹介ぶりから、その影響力は永井一人に留まらず、保健衛生分野にもあった類推されるが、その解明には至らず、今後の課題にしたい。

[I部表1 スイスで実施の断種・去勢術]

| 処置対象者 | 処置法 | 処置理由 |
|------------------------------------------------------------------|-------------------------|---------------------------------------------------------------|
| 癲癇、ヒステリー、色情狂の 25 歳女子 | 2年「癲狂院」入院後、 卵巣切除して退院 | 子どもは二人とも癲癇で痴呆、退院後「候子の出来るのを防ぐ」ため (施術勧告) |
| 「生来精神耗弱」で「淫欲は旺盛」な 36 歳未婚女子 | 3年「癲狂院」入院後、 卵巣切除して退院 | 二人の私生児がおり、退院後「又々私生児を産まれては堪らない」ため (施術勧告) |
| 「精神は小児の時代から常人と異なり」、「淫情は亢進し」、「酒客譫妄に陥り」、「幼女を強姦」して入監した精神的変調の 31 歳男子 | 去勢術をして出獄 | 入監後他の諸種の状態は快復したが「淫欲のみは依然として亢進」し、種々の方法がいずれも無効で、本人希望による施術後出獄のため |
| 「同性姦を好み、幼童に対して猥行を働」き「責任無能力者と見做されて癲狂院に入院」32 歳男子 | 去勢術をして退院 | 4年後「良心が快復」で退院させたが、1年半後再犯入院、再度退院後3ヵ月で三犯入院により、本人希望による施術後退院のため |

※この表は本書の 569 ～571 頁の文章から作成した。

次にインディアナ州については、「去勢術を法律で規定して居るのは米国のインディアナ州である、千九百七年三月九日に去勢法案が通過した、この法に由て去勢さるゝのは改善の見込みなき犯罪者 (Confirmed criminals)、痴呆、強姦者 (Rapists)、精神耗弱者で鑑定官が不治と鑑定した者に限る」と 1907 年の最新情報を紹介し、上記のスイスの 4 例 (I 部表 1 参照) を「共同の利益の為に去勢術を実行した例」としている (大澤 [1909] 572)。

そして、「去勢術」は「今日の世界の大勢に坐」すものとして、「国家をして他より一頭地を擡んで為せやうとするには、……国民各自は其の体質状態の如何に依ては……店此の術を受る覚悟がなげにやならぬ、斯くして足手纏ひなる病弱者や変質者が次第次第に少なくなり、他方には施療院や育児院や貧民院や監獄杯の費用が減少し、其の減少した費用を国家有用の資に利用してこそ甫めて真に富国強兵の実を挙げ得ることになるから、国民たる者は……邦家の為に尽力せねばならぬ」と、「去勢術」を行うことが富国強兵につながると説く (大澤 [1909] 573-574)。

「去勢術」は「生命に危険の無い」もので、「性交にも故障が無いから術後の結婚は各自の自由である」から、「吾輩は国家が医師と法律家とを委員とせる調査会を開いて一日も速やかに本件を調査せん事を希望する」と具体的方向まで示している。この大澤の考えを継承したのが永井潜である。I 部冒頭年表と II 部年表に記しているが、1916 年に発足する内務省保健衛生調査会の委員となる永井は、第 3 回会議で「ユーゼニックス」に関する調査事項を設けたいと提議する。このとき採用はされなかったが、これが公的機関で優生問題が提起された最初である。

このように前掲書から 5 年を経て、大澤が「去勢術の必要」を唱え、わが国への導入を

調査する機関を設置するよう主張するのは、自身も本書中で紹介しているように1907年3月に「米国のインジアナ州」で「去勢法案が通過」し、実際に「去勢術を法律で規定」したところが現われ、一気に現実味をおびてきたからであろう²⁷。

平塚自身が新婦人協会での請願運動では結婚制限の対象を花柳病に限り、「断種」については全く言及しておらず、1939年の時点でも「断種法の如きは……決して好ましいものではありません」とか「何れにしても問題の多い断種法」と発言していることから考えても(岡田[2005a]34)、本書の平塚への影響は疑問である。

だが、本書は当時は自分が後継者と思い込んでいたはずの大澤の弟子第一号、永井には受け継がれ、実践されていく。大澤の関心に寄り添う律儀さを示しつつ、永井が大学での生き残り方と断種法制定運動という社会貢献を組み合わせる転機になった書と推測される。

(2) 『生理学上ヨリ見タル婦人ノ本分』について

1) 『生理学上ヨリ見タル婦人ノ本分』(大倉書店、1908年10月)

本書は、1908年3月23日から5月4日まで31回にわたって『報知新聞』に「生理学上より観たる婦人の根本問題 医学博士 大澤謙二氏談」として連載したものを一冊にまとめて1908年10月に大倉書店から刊行されたものである。内容としては、生理学上より見て、男女分業は明確であり、「男子は国家社会公私の職務に勤労する処の良民」となり、「女子は家政を整理し、子女の養育に^{執掌}する処の良妻賢母」となり「分業が明確になつて行く可き筈であるのに男女同権とは何事である」と喝破し、「婦人の本分」は妻たり母たることであって、生殖(養育を含む)と家事が「二大天職」であるとし、「男女同権の下に男と同じ方面に活動しやうと思ふのは根本的の大誤解である」という論旨である。

大澤は1904年刊の前掲書『社会的衛生 体質改善論』では、「社会学の泰斗」の著書から「目今の如き婚姻制度を廃し、……自由恋愛を以てすべし。女子が独立自営の道を得て、男子の保護を要せざるに至れば、この事必ず成就すべし」を引用し、「この論は女子の地位を高め、社会の幸福を増進する目的」のものだと解し、女性の地位向上を目ざす点では、フェミニズム論に対して、一定の理解は示す論調であった。

しかしながら、1908年刊行の本書では、上述のように男女同権を否定し、独身の女性は「種族に対する不忠実者」で「女性たる自己の天分に背く」ものだとし、このような考えを持っているのは「吾輩一人ではない」として、世界の「著名なる学者の婦人観」という「反」フェミニズム論を31回中8回連載している。

いくつか掲げてみると、「女子開放論を否認……今日の社会に於て婦人を開放するは其の実婚姻の否決なり」(奥国のローレンツ・フラン・スタイン)、「女子開放の結果は独り婚姻の廃止に了る」(独国月沈原大学婦人科教授)、「女子の幸福の爲めにも、国家保全の爲めに

²⁷大澤が一気に国家介入の方向になるのは、日露戦争後のナショナリズムの台頭と共に、永井のドイツ情報が影響したと考えられる。永井留学の時期(1903~1906)のドイツは、社会事業への国家介入による組織化が盛んになっていて、その情報も大澤に知らせたであろう。むろん後述する『生理学上ヨリ見タル婦人ノ本分』にみられる「反」フェミニズムの潮流を大澤が受け入れたことも関係する。

も、人生全般の福祉の為に、女子固有の性質を保護し維持すべきであり「女子の本分は婚姻」である（伯林大学解剖学教授ワルダイエル）、「独立して安心立命の出来る婦人ありとすれば、其の婦人は最早婦人にあらず、……解放は婦人に取りての一大不幸たり」（独逸のラット・ワイニングル）、「婦人も男子と同じやうに教育さへすれば、男子の如く堪能な女子を養成することが出来ると主張された方があって……この主張に反対……犠牲的の愛に於ては男子に女子に及ばざる如く……男子の精神の様に理解力を要する教育には耐えませぬ……理解力は男子に及びませぬ……女子は男子の様に鋭利確実に術と学とに進入することが出来ませぬ、……男子のやうに凍結した頂点に達することが出来ませぬ、吾れ吾れ婦人が『ヨリ深く』『ヨリ広き』精神的教育を要求するのは女子の本分に関するにに限る」（教育家ペスタロッチの第百回誕生日を祝ふ為め婦人の会合した席上に於て、イダ・クルーグといふ婦人）などと、前掲『社会的衛生 体質改善論』の文脈から外れる方向で論が展開され、女性の独立自営、女性解放に否定的で、「女子の本分」に戻るべきとの結論を導き出している²⁸。

とりわけこの女性の側から発せられた「反」フェミニズム論を、意図的に大澤は強調する。大澤は「女学者の口から斯様自白された処を見ると、婦人に関する吾輩等の意見も決して間違つて居らないことゝ信ずる」と、自己の「反」フェミニズム論への転換の正当性を誇示している。

さらに、「独逸の現皇帝は女子の本分は三つのKである即ちKu k che(台所) Kinder(小児) Kirche(寺院即ち宗教)であると申されたさうであるが、吾輩は深く其の意味の在る処に感じた……この三Kに賛成である」とし、「貞操は……婦道の第一義である」として、ついに前掲書で肯定していた「自由恋愛」については、「自由恋愛主義を行ふことになつては、数千年代に渉る貞女節婦烈女の心血を注いで鍛へあげた美風が滅茶々に打ち毀はれる」と全否定となっている。

「三Kに賛成」する論調は、同時期のドイツの「反」フェミニズムの論旨展開と似ている（Planert[1998]）。19世紀末/20世紀初頭、欧米で女性の社会進出が急激にはじまったかのように見える時代状況が出てくる。いわゆる第一波フェミニズム/フェミニストの活躍が目立つ時期である。欧米先進国より少し遅れてではあるが、ドイツ・フェミニズムの主流派は、「三K」の論調への対抗文化として、母性主義フェミニズムを強調する戦略に入っていく。

フェミニズムは好むと好まざるとに関わらず、様々な分野に影響を与え始め、多様な見解が輩出する。世紀転換期に特有の、時代に対する危機感も加わり、社会主義者・マルクス主義者からのフェミニズム批判も出てくるし、むろん生物学・生理学・心理学などの男

²⁸ その他掲載の「反」フェミニズム論を示すと、「男子的の施行を有する女子は異常の生物」（英人アルラン）、「女子の教育に最も必要なるものは……家事向きに適せしめるに在る」（クラフトケーピング教授）、「文化の進につれて両性には差異を生ずる」（仏国のドロニー）、「知識応用の段に至れば女学生は全然駄目」（瑞西の人類学者カール・フラーグト）

女の差異からのフェミニズムへの反論も勢いを増す。こうして「反」フェミニズムの潮流は、新たなうねりを見せていく。大澤はこの時期に日本にも紹介される、「反」フェミニズムの最新情報を摂取し、1904年から1908年の間に、「反」フェミニズムへと傾斜して行くのである。

しかし、それだけが、大澤著作が短期間で「反」フェミニズムに転化した理由ではなさそう。注意したいのは、この大澤の欧米「反」フェミニズム論の紹介が、4月23日から8回連載が初出原稿になる点だ。直前の3月21日に、平塚と作家・森田草平との「情死未遂」事件が、センセーショナルに報道(25日)されていた。その影響も大きいのではなかろうか。いわゆる塩原事件は、平塚にとっては自我の脱皮、フェミニズムの旗手への起点になるのだが、それはおそらくは大澤にとっても、平塚流の生き方は容認しがたいと結論づける契機になったのではないか。女性は情におぼれやすく、愚かと、当時の「反」フェミニズム的な生理学的知見を納得させてくれる好例に、平塚はなったのではないか。かつて熱心に講義を聴いてくれた美貌の女子大生、平塚の記憶は鮮明であっただろう。それだけに、大澤は「生理学上ヨリ見タル婦人」の生きたモデルとして、アンチ・テーゼ的に日本女子大学で「良識」ある女性育成に努めるのではないか。それは大澤講義を引継ぐ永井にも継承される「良識」であった。

2) 「反」フェミニズム/フェミニストへの平塚の反発

ここで話題を平塚に戻そう。平塚は『生理学上ヨリ見タル婦人ノ本分』を熟読している。平塚が1909年3月の雑誌に発表した三幕劇の脚本「退京」(『活動』5-4)の中で、本書の初出になる新聞の連載記事を素材に取り上げているからである。その場面を紹介しよう。

退職軍人である父と、娘とその友人が登場する場面である。

父が語りかける。「此論文を読んでおいでかね? (机の上の新聞を取出し……)」と。そして新聞に掲載された「医学博士、西澤謙次、生理学上の根拠より婦人の天職を論ず」を指し示す。「婦人の天職と云ふものが余程よく論じてある」から、「服従する義務がある筈」という父の見解に対して、平塚は娘たちにはっきりと語らせている。「お医者様が只生理学上の立場から一般に論じたことなどに対して私共異存などは御座いません」、「これはこれによろしく御座いますけれど、私共を量る物差にはなりませんですから」と。

ここで、新聞に掲載の「医学博士、西澤謙次、生理学上の根拠より婦人の天職を論ず」というのは、『報知新聞』連載の「生理学上より観たる婦人の根本問題 医学博士 大澤謙二氏談」をモデルにしたことは、まず疑いはあるまい。平塚が「大澤謙二」の新聞連載に目を留め、熟読していたことを実証するものであり、大澤の著作に平塚が反発も含めて常に関心をもっていたことが伺える。

本書の内容については、上でも紹介しているように、急速に国家主義となっていく大澤に対して、平塚は幼少期の父への苦い思いを重ね合わせたのではなかろうか。鹿鳴館舞踏会に代表される皮相的な女性の地位向上の熱気が冷め切り、冬の時代に入っていく時期に

若き平塚は人生を模索し始める。伝統的な日本の家風と「反」フェミニズムとの合体が、平塚の身边にも満ち満ちていた。医者として、科学的な物の見方を教えてくれたかつての大澤に対して、平塚ははっきりと「私共を量る物差にはなりません」と答えている。

女性に理解あると思われていた大澤ですら「反」フェミニズムに転じる日本社会の閉塞感は、若き平塚にとって耐え難いものであった。脱皮を求めて決行し、塩原事件と揶揄されてからは、さらに自身を排除しようとする男性優位の日本社会への批判は強まる。

父や大澤に代表される「反」フェミニズムを標榜する男達への反発は、平塚の中に静かに、しかし確実に芽生えていくのである。

3) 日本女子大学時代への回想とその後の平塚の歩み

平塚は回想している。

「一年生時代のわたくしは、……学びとることにひたむきな学生でした。……講義を聴いたあと、わたくしはかならずノートを整理し、「あとで図書室に入って、もっと詳しく書いたものはないかと参考書をあさり……ノートに書き入れたりした」(平塚 [1971] 148-149)と。平塚が大澤の生理学の講義を熱心に受けたことは事実であろう。

さらに上述のように、大澤が『報知新聞』に連載した文章に目を留めて脚本にとりいれていることをみると、同時期の大澤著作にもほぼ目を通していただろう。またこの時点では平塚には「社会」はまだ関心なきことであつたとしても、山田嘉吉から社会学を学び、「社会的なるもの」にも目覚めていく。

後日、花柳病男子結婚制限法制定の請願運動に着手しようとしたときには、大澤の花柳病に関する情報、すなわち『社会的衛生 体質改善論』(1904)からの触発を受け、案を練り、相談にも赴くのである。このようにみていくと、『生理学上ヨリ見タル婦人ノ本分』(1908)のあたりが、断種へと繋がる大澤たちの国家主義的な結婚制限と平塚のようなフェミニズムからの結婚制限へと繋がるものとの分岐点と考えられる。

平塚が最初に花柳病男子への結婚制限を取り上げるのは、1916年の「男女性的道德論」(『婦人公論』10月号)であり、「男子に対して行う婦人の選択力」という「性と生殖の自己決定」の立場からの主張であつた。永井も同年から、『婦人公論』で執筆活動を展開する。

平塚はここより1918年の花柳病男子に対する結婚禁止の法律を求めた「我が現行法上の婦人」(『法治国』1,2月号)を経て、1920年新婦人協会による花柳病男子結婚制限法制定の請願運動へと、力強く、歩を進めていくのである。

1-2 大澤謙二・永井潜の「反」フェミニズムへの静かなる抗議の始まり

(1) 東京大学生理学教室の情報ルート

1) 大澤・永井の渡独の時期の重要性

では、大澤自身はそうした情報をどこから得たのだろうか。

以下に、記すのはなお仮説の域に留まる。というのは、初期大澤の優生結婚・結婚制限関連著作には、何を彼が読み、参照・引用したのかの出典が、当時の書き方に倣って銘記されておらず、情報ルートの特定ができにくいからである。また大澤の情報ルートは、ドイツに限定されず、むしろアメリカ・北欧からのものが初期は多く、筆者にはそこまでは追えない。

ただ幸いなことに、大澤が東大教授の地位にあったことで、彼が読む定期購読雑誌や、欧米留学中の東大医学部関係者からの耳学問的な情報を得ていたとの類推はなりたつ。加えてヨーロッパで人口問題への政策的関心が出てくる頃に、すなわち 1903 年から 1906 年に若き永井は後継者ポストを約束されるような形で渡独する。それは生理学教室初代教授の大澤にとっても、引き続き情報がタイムラグがなく入手できる点で好機であった。

すでに二度のドイツ留学をしていた大澤は、さらに先述のように 1901 年から 1902 年にかけても海外出張をし、花柳病・結核関連の最新情報を入手している²⁹。1902 年 10 月に設立されるドイツ性病撲滅協会 (Deutsche Gesellschaft zur Bekämpfung der Geschlechtskrankheiten, DGBG) 情報に関心を持ち、永井と語ったことであろう。また永井の渡独の時期に人種衛生協会 (Deutsche Gesellschaft für Rassenhygiene, DGfR) や母性保護連盟 (Bund für Mutterschutz, BfM) の目立つ活動も始まる。DGBG は男女協働で性病撲滅に立ち向うことを目指し、女性の活躍機会は多かったし (Epple[1996]79-93)、社会 (民主) 主義者も参加している。BfM はラディカル・フェミニストの拠点で、平塚と近似する優生結婚・結婚制限の提唱をリーダー格が担う³⁰。

当時のドイツ生理学は人間測定の新興諸学の一派をなしていた。19 世紀末までにエミール・クレペリンによるドイツ精神医学体系は完成し、それに依拠して心理学や治療教育学も能力特性の記述を重んじて、「学」的な権威性を確保したがる時期であった (岡田[1993]41-102)。ここに生理学も加わり、生物学的知見から性差の強調が「学」の名において広まる。性差の強調は能力特性と同一視され、女性の高等教育機関や市民層家庭で、教員・親がそれを伝達する。現時点で読めば「女」の愚かさを強調する余り、おかしい説もメデイ

²⁹ むろんドイツに留まらない。20 世紀初頭はヨーロッパ主要国で結婚前の健康証明書交付が話題に登場し、母子保護事業や性教育ではフェミニストが優生学団体と結びつく例は多かった (Allen[2005]87-109)。アメリカ・イギリス・北欧ではドイツ以上に女性に活躍の場が提供され、1920 年代から 1933 年までフランスやスイスも巻き込んで、肯定的 (積極的) 優生学の優生運動は一定の勢力を持続する (Allen[2005]173-181)。

³⁰ ドイツのラディカル・フェミニズム派で「優生思想の持ち主」の代表格とされがちな H. シュッテカーと母性保護連盟の運動も、平塚の花柳病男子結婚制限法と同様に拙速な査定はしにくい。H. シュッテカーについては、水戸部論文 ([2000]) が活動の特徴を知るよき手がかりになる。ただし、BDF 主翼を担う穏健派リーダーは社会政策・社会事業教育に参入していた分、左派・右派の優生学的言説には批判的であった。特に優生思想のユートピア性には、である。

アに流布し、軽度・境界線級の「精神薄弱」特性と、女性の劣等性を繋げる著作が結構な売れ行きを見せる(Möbius[1900]; Rosen[1904][1910])。1904年には人種衛生学雑誌の決定版となる Archiv für Rassen- und Gesellschaftsbiologie, Berlin 1(1904)も刊行される。

つまりフェミニズム運動側も、「反」フェミニズム運動側も、双方で戦略として差異が大々的に提唱される時期であった。差異の強調による男女の役割分担・棲み分けは、この時期から女性向けの社会政策・社会事業制度に言説として埋め込まれ、同時に 19 世紀末/20 世紀初頭のドイツの新興の対人(援助)サービスの諸学の理論にも影響を与えていくのである。

要するに永井渡独の 1903 年から 1906 年の時期は、優生結婚他の関連情報の入手には、最適であった。優生政策の動き自体は、日本では第一次世界大戦期から始まる。永井が希望していた活躍の場が初めて出てくるのであるが、それは II 部年表に詳しい。ここでは彼が情報ルートを真っ先に独占できる幸運な場にいたことが、確認できれば十分であろう。

2) 華やかな永井の経歴と研究意欲の欠如

永井もまた平塚と同様に、大澤に触発されて優生結婚・結婚制限に関心を持ち、情報収集も渡独に際して課せられたと考えられる。約束された助教授ポストは魅力的だし、律儀な性格だから、永井は熱心に情報を集めたことだろう。当時、注目を浴びつつあった青少年の性教育や、優生学諸団体設立ニュースにも敏感であっただろう。この時期から生涯を通して、断種対象は遺伝に限定すべきとの自説を永井は保持し、ナチ断種法に先立って、断種法制定運動に全身全霊を賭ける。

しかし、なのである。医学部教授というエリートに就いても、劣等感を持たざるをえない環境に、永井は置かれていた。というのは、そもそも彼は医学を本当にしたかったのではなく、成り行きから大澤の最初の弟子になり、帰国後の助教授ポストも約束された上でドイツ留学をするからだ。

後に大澤は後継者問題で苦悩をするのだが、当初は弟子第一号である永井に期待を寄せていた。その永井は蛙の解剖も、実験器具もろくに扱えない技能のままに、将来を嘱望された官費留学生としてドイツに渡る。そのドイツでも、彼は実質的に専門の勉学はできてはいない。失恋の痛手があったと後に弁解はするのだが、実験器具も扱えない技能では、受け入れ先のゲッチンゲン大学生理学教室・教授も当惑したのではあるまいか。大澤もどうも永井帰国直後から永井の専門研究業績の欠如と、若手への指導力に失望した節がある。自分が基礎医学・生理学研究に適さないことを、永井はゲッチンゲンで思い知らされたといえよう。この時点で永井は、帰国後に約束された母校の助教授にふさわしい主専攻を探す。それが医哲学と優生学であった。うがった見方ではあるが、プライドを守ってくれるのは、その選択しかなかったのではないか。

それだからこそ大澤は、実質的な研究活動は永井の後輩である橋田邦彦に託すようになる。永井は表向きは予定通りに 1915 年に、大澤の後任として生理学教室の第一講座教授就任を果たすが、引き続き大澤は第二講座の講義を担当し、橋田を実質的な生理学教室の後

継にする準備を整えていく。橋田は永井帰国直後の1908年に卒業、1909年から1914年まで助手を勤め、1918年にスイスから帰国する。

そういう事情もあつてか、永井は大澤やゲッチンゲン大学の指導教員 M. フェルボルン教授には、終生過剰なくらいに律儀であつた。第一次大戦期から研究費の工面に困るフェルボルンへの金品提供に最大限尽力している。だが、それは研究交流とは程遠い。やがてこの間に、後輩の橋田が欧文専門誌を刊行し、国際的に日本生理学を代表する研究者として名を知られていくのとは(Fischer[1932]584 ; Fischer[2002]595)、違う。名実ともに、橋田こそが生理学教室の大澤の跡継ぎと目されつつあつた。つまり永井には身の置き場がなかった。肝心の生理学の業績はないに等しく、狭い医学部内で永井が面子をかけて動く姿は、人間臭い。ドイツで博士論文に懸命に取り組んだ気配はなく、日本での博士号取得もそれを短期間に寄せ集めた論文にすぎない。教授昇格してからは本業での研究成果はない³¹。

優秀な橋田が帰国すれば教室主任教授の地位は保持しがたい。永井は早々と予感した節がある。だからこそ、大学での生き残り策として優生学の第一人者をみざすのではないか。目立つ社会貢献で、エリートがひしめく医学部内で体面を保とうと考えたのではないか。やがて妻も動員して優生結婚相談活動の組織化をし、内務省にも弟子を送り込みと、断種法制定運動に身を挺していくのは、劣等感を払拭してくれるものが他になかったからではないか。カリカック家研究で著名になったアメリカの H.H. ゴッダードが、実は博士号候補申請を却下されており、その後に優生学の第一人者として自己を売り込むのと似ている。

これは同じ生理学教室に属する橋田とは好対照といえる生き方だ。一本気な橋田は、基礎医学は就職に不利だがその覚悟で研究するか否かを、弟子入りに際して問う。永井は逆に、就職口を世話してやる式の発言が多く、地方大学赴任を躊躇する弟子をも強引に送り出す面があつた。赴任はまず拒否できなかつた。研究意欲を喪失した者が東大医学部で自尊心を保ち、学部長にまでなるにはどうすればいいのかを、熟知していたといえる³²。

(2) フェミニズム vs 「反」フェミニズムの母性イデオロギ——平塚と永井の違い

平塚批判もいいだらう。だが、本来の優生運動は、フェミニズム/フェミニストではなく、「反」フェミニズムが率いる。平塚と永井の優生思想が同根であることが分かった今、その違いもまた検討されねばならない。なお仮説に域は出ないが、Ⅱ部年表やⅢ部に入る前にそれに言及しておこう。

³¹永井はある意味で良心的研究者でもあつた。というのは、少し遅れて留学する世代には、三田谷啓や谷口弥三郎のように最短距離でドイツで医学博士号取得をした一群がいるからだ。ミュンヘン大学のクレペリンはこの種の日本人に嫌悪感を持ったと言われる。

³²教授になっても同郷の県人会関連の会合に毎月のように通っている。まともに医学研究・教育活動をしていなければ、そんな暇はないはずなのだが、会終了後の夜の飲食にも付き合っていた。人脈づくりには熱心であつたといえる(永井『芸備医事』39-10[1934.10]204-208他)。後輩橋田が研究と若手育成に没頭しているのとは対照的だ。

1) 「反」フェミニズム/フェミニストへの平塚の対応ぶり

賢く、若く、健康であり、しかも良家の出身。美しい容貌としなやかな身体を持ち、エリートと誰もが認める。両名はまた、己が断種対象になることはありえないと思う込む強者側にいる点でも、共通する。

では、どこが違うのか。それは同じ母性の標榜であっても、フェミニズムか、「反」フェミニズムかの拠って立つ基盤の違いがあるのではないか。この視点で若き日の平塚・永井を対比すると、興味深いことが分かる。両名は決して交流することはないし、相手に反論を挑むこともない。メディアにとっては、両名は最適の組み合わせであったはずである。

平塚が彼との誌上論争をする気がなかったのか、それとも永井が意識はするが「新しい女」との論争を好まなかったのか。いずれにせよ、本稿 I-3 の永井著作解題にある『婦人公論』誌上の両名の優生学的言説の比較一覧からは(永井著作リスト解題参照のこと 傍註筆者)、近似する言説が繰り返されていることがよく分かる。むろん時代が戦時体制に入ると永井の口調は過激になり、平塚は躊躇する様子が読み取れるのだが。

平塚のフェミニズム論も、保守主義者が掲げる母性イデオロギーも、言説だけを並べれば、母性の尊重＝生命礼賛は似ている。後者は名士の妻・娘が動員され、女子高等教育から日常生活の場まで幅広い人脈を駆使して、母性イデオロギーを浸透させる。ここでの「反」フェミニズムの啓蒙活動の怖さは、物腰が柔らかで、上品な振る舞いをするタイプが男女を問わず、女性雑誌や講演会の表舞台に出やすい点である。「母の品格」を説く者が理想の家族像を自己体験として同時に売り込むことで、母性イデオロギーは受け手を魅惑する。その効果は雑誌メディア関係者は熟知していただろう。

永井は平塚について、何も語ることはない。大澤はやや事情は違う。I 部論文で記したように、日本女子大学校の生理学講義の美貌の受講生であり、後に塩原事件で悪名を馳せ、青鞥でさらに著名になる平塚に関心がないはずがない。一時期は戯曲・小説で自活したかった平塚も、脚本に「西澤博士」を登場させる程である。花柳病男子結婚制限法案の作成途上でも、平塚は大澤を訪ねる。大澤－永井の系譜が優生運動をしたがっている動きを、平塚が早々と感知した可能性もある。

だが、永井とは名指しでの論争や批判をしない。『婦人公論』発刊時の常連執筆者である二人に、企画上手な編集部が誌上論争を打診しなかったとも思えない。何故なのか。スキャンダラスな「女」平塚が、花柳病男子結婚制限法を提起する一部始終に、日本女子大学校で講義している大澤・永井は強い関心を持ったはずだ。にもかかわらず、平塚への言及がない。平塚も永井も共に、『婦人公論』にしばしは原稿を寄せる。共に人気執筆者であった。にもかかわらず、誌上論争テーマで二人が相対することもない。『婦人公論』編集部は優生結婚をテーマに、母子保護論争的な企画を組んでいた可能性はある。だが、それは実現に至らなかった。推測の域を出ないのだが、永井側が平塚との論争を避けたのだと思う。

「反」フェミニズム/反フェミニストの永井のねらいは、優生結婚を『婦人公論』読者に伝達することにあつた。平塚のような「女」は、永井の理想とする優生結婚と家庭にふさわしくはないと嫌悪したのではないか。似た論調でありながら、両者が『婦人公論』誌や類似雑誌で論争を交わすことはなかったのである。

2) 花柳病男子結婚制限法の請願運動と社会事業界との繋がり

平塚は比較的早い段階で優生思想に関心を抱く分、「性と生殖の国家管理」には敏感であり、国家介入による優生政策には一定の距離を置きながら、しかし国家社会による母子保護の重要性を説く。この点では、女性向けの社会政策分野として母性保険・母子保護事業の国家・自治体介入を求めたドイツ女性団体連合(Bund Deutscher Frauenvereine, BDF)のフェミニズム運動と社会事業とを連結する戦略は、平塚構想と似た面がある³³。むしろそこに優生思想が浸透しやすい点も、である。

平塚が求めた母子保護事業への国家介入がユートピアの域に留まるのは、戦前日本社会事業界が男性主導であった点も影響している。女性に期待されたのは男性の上司・施設長を支える役割であり、実権を譲る発想法はなかったからだ。1919年に平塚と市川房枝が設立する新婦人協会(1922年解散)の支持を増やすべく、社会事業大会・懇親会に出席し、そこで平塚は花柳病男子結婚制限法の議会請願活動に賛同を求め、市川は「内務省社会事業は女性の手にと」気炎をあげるが、単発的なものに終わる。ただ、その場に居合わせた矢吹慶輝には花柳病男子結婚制限法の本来の意図は、すなわち性道德のダブルスタンダードの是正であり、フェミニズム論の系譜の運動である点は伝わっていた³⁴。後に刊行される矢吹・谷山著『社会事業概説』で(矢吹・谷山[1926]83)、それは分かる³⁵。

平塚が新婦人協会で開催する議会請願運動は、政治参加と「性と生殖の自己決定」との同時要求の戦略であり、国際フェミニズム運動史から見ても評価される戦略である。治安警察法第五条改正と、花柳病男子結婚制限法がそれである。にもかかわらず、日本では平塚の擁護派も、批判派も、「女性性」や母性主義フェミニズムを過剰に強調してきた。

花柳病男子結婚制限法制定運動の目標は、「性と生殖の自己決定」であり、運動戦略は「女

³³平塚の構想と記したのは実態がないからだ。新婦人協会創設時の社会事業関連要望は机上の空論の域をでない。ハル・ハウスのような活動をしたとの願いはあった。が、それに取り組んだ形跡は全くといっていいほどない。ただ平塚も、市川も、社会事業界に新婦人協会の運動の真意を伝えてはいる。内務省の社会事業政策の一部を「婦人の占有」にとの気炎も上げる。しかし、男性主導のパターナリズムの強い日本社会事業界に、それを受け入れる余裕はない。BDFの社会政策・社会事業とフェミニズム運動との連結の所産、いわゆるソーシャル・フェミニズムと比べれば、格差は余りにも大きい。むしろ、アメリカとは比較にならない。

³⁴矢吹社会事業論は当時としては欧米社会事業紹介の域を超える水準である。欧米女性運動の趨勢も彼は熟知していたと解される。

³⁵フェミニズムと社会事業/ソーシャルワークとの関係では、翌1921年に内務省の支援も受けて設立される日本女子大学の社会事業学部の存在は貴重。カリキュラム水準と就職意欲は同時代のドイツ・ソーシャルワーク教育と比べても高い。単一学部に所属する教師陣のレベルも日本女子大学の方が優れている。ただし、これはソーシャルワーク校の創設期に欧米でも生じがちな一過性の現象。

性性」覚醒に置かれる。「性と生殖の国家管理」の査定基準になる断種法要求は、1939年時点でも平塚は拒絶していた。また「新性道徳」として「恋愛・結婚・母性」の三位一体を提唱する平塚ではあるが、それは「国家のための恋愛結婚」に特化はしない。エレン・ケイ同様の未だ現存しない社会国家要求をしたのであって、既存の国家に過剰な期待は抱かない。さりどて国家権力に向けての要求も放棄はしない。政策立案過程への方途が阻まれ、しかし現実の母子保護政策は速やかに施行されねばならない。このジレンマは日本の第一波フェミニズムが背負う宿命性であった³⁶。

小活 「性と生殖の自己決定」とフェミニズムとの危うい綱渡り

まとめよう。序の概念の定義でも指摘しているが、「反」フェミニズムの潮流は、1910年の河田嗣郎『婦人問題』の絶版が象徴的である。平塚がエレン・ケイを知るのは、翌1911年である。この時期の重なりは注意すべきだろう。「反」フェミニズムへの対抗軸としての生命礼賛と「女性性」賛美は、実は人権思想・平等論が一定の成熟を見ていない場合は、歪な形をとりがちになるからだ³⁷。

女性の政治活動は禁止されているが、しかし近隣のフェミニズム論もタイムラグなく流入する国・地域では特にそうだ。ここではドイツが日本や東欧諸国の先駆例になる。閉塞状況の打開のために、過剰に男女の差異を強調し、女性固有の限定的役割を示すことで、公的部門で参加権を得ようとする戦略に走りがちだからで、これは諸刃の剣になる。若き平塚が人生を模索し、手当たり次第に本を読む時期は、水田も指摘するように差異を強調する欧米フェミニズム論だけが日本ではよく知られていた。またすでに「反」フェミニズ

³⁶社会国家ドイツにおける母性主義的社会政策・社会事業理論でもこの傾向は際だつ。ただし、日本で1990年頃に台頭する母性主義フェミニズム批判は、ドイツ・フェミニズム運動論批判にそのままでは適用できない。アングロ・サクソン系の「差異か、平等か」の対立軸を際立たせる戦略を回避し、一定の「成功」を収めてきた歴史性をドイツ・フェミニズムは背負うだけに、「母性」と対「フェミニズム」は、一卵性双生児か、折れ合うことの難しい姉妹か」の結論は容易には出せない。なお平塚や高群の「女性性」「女性原理」イメージは、J. J. バッハオーフェンの母権論や、F. エンゲルス/A. ベーベルの父権制(家父長制)の概念が、19世紀末～20世紀初頭のドイツ・北欧のフェミニズム論に影響を及ぼすことと無関係であったわけではない。欧米フェミニズム論は、戦前日本では翻訳紹介中心のレベルに留まるとはいえ、平塚や高群はそれとは別に感性でフェミニズムの本質を掴み取っている。ここに彼女らのフェミニズム論の普遍性もある。1990年代に流布する母性主義フェミニズムのイメージだけでは、その理解はできにくい。

³⁷確かに母性主義フェミニズムと優生思想とを直結させる思考回路は、ドイツの女性運動では一定の支持を得ていた。しかし、だからといってフェミニズム/フェミニストが優生思想になびきやすかったわけではない。大勢としては逆である。フェミニズム運動の拠点にもなるBDFの主翼は、優生思想と距離をおく女性の方が多い。BDFと保守系女性運動との見解の相違も大きい。後者は男性主導の優生運動に利用されやすく、かつ結託して「反」フェミニズム・キャンペーンを流す傾向があった。フランスから輸入された女性解放論を、19世紀後半に具体的な職業自立・女性高等教育要求に絞り込み、着実に女性の地位向上で成果をあげていたドイツ・フェミニズム穏健派は、冷徹な戦略をたてる力量も備えていた。ユートピア的な母権論や優生思想に幻惑されずに、現実の社会改良運動に女性を参画させ、公的部門での男女同権を獲得することをねらった。穏健派は現実主義者でもあった。妥協もするが、女性の地位向上の機会は見逃さなかった。このBDFの戦略と平塚の議会請願運動とは、対極的な位置にあった。日本のフェミニズム運動の遅れが原因である。平塚がやがて「女性性」の強調とユートピア社会国家構想に走るのも、政策立案過程から完璧に排除され、現実主義的な路線がとれなかった悲劇の一例ではなからうか。

ム論は、強固に論陣を張っていた。この情勢下では、若き平塚の対抗軸は「女性性」の神秘化しか選択肢はなかった。神秘主義と生命礼賛の下地は日本女子大学校時代に準備され、そこに大澤生理学講義の知見も含まれ、優生思想形成へと平塚を誘っていくと考えられる。

他方、永井はどうか。上述のように永井渡独の時期は、フェミニズム vs 「反」フェミニズムがメディアでも目立つ活動を展開している。「反」フェミニズムが精神薄弱論とも結びつくような生理学著作も刊行され、一定の読者・支持を得ていくだけに、専攻に迷いを抱えていた永井は当然これらの論文・著書を読んだことであろう。加えて、永井がゲッチンゲンに学ぶ時期は女子高等教育制度改革や女性の政治参加をめぐる論議が沸騰していて、ラディカル・フェミニズムと穏健派という区別が出始める時期であった。対抗勢力となる保守系女性運動は男性主導の「反」フェミニズム論に路線としては同調していくし、青少年向けの性教育・性科学にも教育界が関心をもつ時期でもあった。生理学研究に不向きな永井が、それでも東大助教授・教授の地位を保っていくためには、目立つ仕事が必要であった。そのテーマとなる材料は、永井渡独の時期に出揃っていたことになる。

むろん本業とすべき生理学研究に不適格な永井が、師である大澤の優生結婚テーマに飛びついたのか、それとも若き永井が自発的な研究動機を持っていたのかは、未だに不明である。ただ、当初は精神医学を希望していたから、優生学に何らかの関心を持っていた可能性は高い。いずれにせよ、永井にとっては 1902 年の渡独準備から 1906 年の留学終結までの時期が、晩年まで衰えることのない断種法要求の決定打になることは確かだ。

ここより「性と生殖の自己決定」を絶対視し、同時に差異を過剰に強調するフェミニズム戦略の危うい綱渡りが、優生思想を誘引させる背景が見えてくる。ジェンダー・バッシングに似た、「反」フェミニズム・キャンペーンに抗すべく「女性性」の優位さが提起され、それが強者の思想に転化し、優生運動にも浸透しやすくなる構造も浮かび上がる。

それを支える潮流は、「学」的な装備にも余念がない。生理学・心理学が精神医学の知見に依拠しつつ、生物学的・心理学的な性差を強調し始め、治療教育学が軽度障害の特性を列記し、「反」フェミニズムが生命礼賛を歌いながら女性を劣る存在と規定し、それへの対抗文化としてフェミニズムは「女性性」を優位に置きという潮流は、20 世紀初頭の社会政策・社会事業にも色濃く反映される。この「社会的なるもの」に優生思想が浸透していく経緯は、すでに本稿テーマを大きく超える。ここでは仮説的な指摘に留めておく。

【I部主要参考文献】

※I部「はじめに・I-1・小活」の主要参考文献。序との重複文献は略す。

※全編で用いるものはIII-3の文献リストに一括記載

1. 邦語文献

1) 1945年まで

青木延春(1948)『応用優生学としての断種』龍吟社

大澤謙二(1904)『社会的衛生 体質改善論』東京開成館

大澤謙二(1908)『生理学上ヨリ見タル婦人ノ本分』大倉書店

大澤謙二(1909)『通俗結婚新説』大倉書店

大澤謙二(刊行年不明)『日本女子大学講義 [9] 生理学』

永井潜(1934)「断種法に対する反対の反対」『民族衛生』第3巻4,5号 1934年6月

中村政雄(1942)『日本女子大学校四十年史』日本女子大学校

矢吹慶輝・谷川恵林(1926)『社会事業概説』(長谷川良信編『社会政策体系』第2巻 大東出版社)

2) 1945年以降

岡田英己子(1993)『ドイツ治療教育学の歴史研究——治療教育学理論の狭義化と補助学校教育学の体系化』勁草書房

岡田英己子(2005b)「平塚らいてうの優生思想を考える——『社会的なるもの』の制度化を求めた第一波フェミニズム運動の挫折?」『社会事業史学会第7回大会要旨集』(於:長野大,2005年5月14日) 44-45.

岡田英己子(2005c)「コラム X:ドイツの福祉に社会(sozial)の冠が付く時——社会事業の登場」(若尾祐司・井上茂子編著『近代ドイツの歴史——18世紀から現代まで』ミネルヴァ書房) 2005年5月 219-220.

小畑清剛(2002)『法の道徳性』勁草書房

小畑清剛(2007)『近代日本とマイノリティの〈生-政治学〉』ナカニシヤ出版

金森修(2004)『自然主義の臨界』勁草書房

永原紀子「花柳病男子結婚制限法制定の請願運動とその本質」折井美耶子・女性の歴史研究会編(2006)『新婦人協会の研究』ドメス出版 68-96.

日本生理学教室史編集委員会(1983)『日本生理学教室史(上巻)』日本生理学会

平塚らいてう(1971)『元始、女性は太陽であった』上巻 大月書店

2. 欧米文献

1) 雑誌

Archiv für Rassen- und Gesellschaftsbiologie, Berlin 1(1904) iii-vii.

2) 著書

Allen, Ann Taylor(1991.3) Feminismus und Eugenik im historischen Kontext.

In:Feministische Studien,1/91 46-68.

- Allen, Ann Taylor(2005) *Feminismus and Motherhood in Western Europe, 1890-1970*. New York : Palgrave Macmillan.
- Bock, Gisela(1999): *Frauenwahlrecht-Deutschland um 1900 in vergleichender Perspektive*. In:Grüttner, Michael/Hachtmann, Rüdiger/Haupt, Heinz-Gerhard(Hg.) *Geschichte und Emanzipation*. Frankfurt/New York : Campus Verlag, 95-136.
- Epple, Angelika(1996)*Henriette Fürth und die Frauenbewegung im deutschen Kaiserreich*. Pfaffenweiler : Centaurus-Verlagsgesellschaft.
- Fischer, Isidor(Hg.)(1932) *Biographisches Lexikon der hervorragenden Ärzte der letzten fünfzig Jahre*. Erster Band (Aaser-Komoto) Berlin/ Wien : Urban & Schwarzenberg.
- Fischer, Isidor(Hg.)(2002) *Biographisches Lexikon der hervorragenden Ärzte der letzten fünfzig Jahre*. Bände III-IV : Nachträge und Ergänzungen(bearbeitet und herausgegeben von Peter Voswinkel) Dritter Band(Aba-Kom) Hildesheim/Zürich /New York : Georg Olms Verlag.
- Möbius, P. J. (1900) *Über den physiologischen Schwachsinn des Weibes*. Halle : Marhold Verlag.
- Planert, Ute(1998) *Antifeminismus im Kaiserreich : Diskurs, soziale Formation und politische Mentalität*. Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht.
- Rosen, Katinka von(1904) *Über den moralischen Schwachsinn des Weibes*. Halle : Marhold Verlag.
- Rosen, Kathinka von(1910) *“Deutsche Frauen in die Front “* Berlin: Verlag des Vaterländischen Schriftensverbandes.
- (著者名 Rosen 綴りは原本に即した)

I—2 ① 平塚らいてう年譜

| 年月日 | 年 譜 |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1886. 2. 10 | 東京市麴町区三番町で、父平塚定二郎、母光沢の三女として生まれる。本名は明 ^{はる} |
| 1887. 5. ~ | 会計検査院判任官の父は、会計検査法制定のための先進諸国調査で、渡辺昇院長に随行して |
| 1888. 12 | 欧米各国をまわる（渡辺は石井筆子の叔父、同行の小鹿島果は筆子の最初の夫） |
| 1894. 4. | 女子高等師範学校付属高等女学校入学。修身の授業を拒否 |
| 1903. 4. | 日本女子大学校家政学部入学（第三回生）。校長成瀬仁蔵の「実践倫理」に心酔。1学年で、 生理学を大澤謙二に、衛生学を三宅秀に学ぶ |
| 1904~5 | 「成瀬宗」への懐疑から、哲学書や宗教書を読みあさる一方、本郷教会へも出入り。日暮里 の両忘庵に参禅に通いはじめる。自活のために速記術を習得 (1905. 10 大澤謙二『社会的衛生 体質改善論』刊行) |
| 1906. 3. | 女子大学校家政学部を卒業。女子英学塾、二松学舎に通う |
| 7. | 見性し、慧薫（えくん）の安名をうける。浅草の海禅寺の青年僧中原秀嶽を知る |
| 1907. 1. | ユニヴァサリスト教会内の成美女子英語学校へ転校する |
| 6. | 生田長江主宰の閨秀文学会に参加。講師：生田、与謝野晶子、馬場胡蝶、森田草平ら。 |
| 1908. 1. | 森田草平からの「愛の末日」（平塚の書いた短編小説）批評の手紙で、急速に親しくなる |
| 3. 21 | 森田と家出し塩原温泉奥の尾頭峠に向かう。これが「情死未遂」の「塩原事件」として世に 「悪名」を伝えられ、さらに森田の小説「煤煙」（1909年『東京朝日新聞』連載）の女主人 公のモデルとして世間の好奇の目を集めることとなる（3. 25 新聞報道される） |
| 3~5 | 『報知新聞』連載の大澤謙二「生理学上より観たる婦人の根本問題」を読む |
| 1909. | 神田の日本禅学堂に参禅。正則英語学校に入学 |
| 1910. 夏 | 青年僧中原秀嶽と結ばれる |
| 1911. 9. | 『青鞥』創刊。発刊の辞「元始、女性は太陽であつた」。ペンネーム「らいてう」を名乗る 『太陽』9月号掲載の金子筑水「現実教 人間改造論」でエレン・ケイの名を知る |
| 1912. | 個の自覚、自我の尊重という立場をとる「新しい女」たちへの非難、揶揄、中傷、攻撃 |
| 8. | 茅ヶ崎で奥村博と出会う |
| 12. | 『帝国文学』12月号掲載の石坂養平「自由離婚説」でエレン・ケイとその著作を知る |
| 1913. | 『青鞥』にエレン・ケイの「恋愛と結婚」の訳を連載し、課題を婦人問題に置く |
| 2. | 『青鞥』3-2が発禁処分 |
| 3. | 『青鞥』3-3が警視庁高等検閲関係から注意処分（「世の婦人たちに」が家族制度破壊） |
| 5. | 『円窓より』発売と同時に発禁処分 |
| 6. | 「世の婦人たちに」を抜き『肩ある窓にて』と改題し発行 奥村博と再会（ケイの説を体験） |
| 10. | 大杉栄の仲介で、山田わか・嘉吉夫妻と出会う |
| 1914. 1. | 家を出て、府下巢鴨町で奥村博と「共同生活」を始める |
| 1. | 「私ほど社会というものを念頭におかずにきたものはない」（著作リスト[29]） |

| | |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 5. | 『青鞥』5月号より編集者・経営者となり、発行に苦勞する |
| 1915. 1. | 『青鞥』5-1より、発行権を伊藤野枝に譲る |
| 2. | 山田嘉吉宅へ通い、ウォードの社会学の勉強を始める |
| 4. | 『時事新報』連載中の長編小説「峠」を重い悪阻のため中断 |
| 7. | 嘉吉のもとで勉強のため四谷伊賀町の山田宅の裏隣へ転居し、ケイやウォードの著作を学ぶ |
| 9. | 博、肺結核を発病し、茅ヶ崎の南湖院へ入院 |
| 11. | 「明治より大正に至る我邦の婦人問題」『新日本』:「科学的知識」を得て「科学的研究」を |
| 12. 9 | 第一子 ^{あけみ} 曙生を出産 |
| 1916. 2. | 曙生とともに南湖院付近の貸間に移る。『青鞥』は6-2で無期休刊 |
| 10. | 「男女性的道德論」『婦人公論』:「花柳病男子から何等かの方法で結婚資格を奪う」 |
| 1917. 6. | 「矢島楫子氏と婦人矯風会の事業を論ず」『新小説』:「客観的な、現実に対する広い考察を、冷静な社会研究を欠いてある」などと批判しながら社会運動団体のあり方を論じている |
| 夏 | 茅ヶ崎を引き上げて東京府下滝野川上中里に住む |
| 8. 10 | 『避妊の可否を論ず』を脱稿(『日本評論』9月号掲載) |
| 9. 24 | 第二子 ^{あつみ} 敦史を出産 |
| 12. | 締め切り迫る原稿を徹夜で書き続け乳が出なくなる。授乳期の幼児をもつ母の生活は社会がもっと考えねばならないことを痛感する |
| 1918. 1. | 「婦人の眼に映じたる法律—我現行法上の婦人—」『法治国』:「花柳病男子に対する結婚禁止の法律の一日も早い制定を要求すべきである」 |
| 4. | 両親と和解し、援助を受けて田端にアトリエ付の家を買い引越す ※1918年は、長い間の夫の看護から解放され、「ようやく自分というものを取り戻しかけた年」であり、それに一家がおちつける住居を得て、心の安定となって仕事への熱意が高まる。この2,3年の「母としての女の生活を通じての体験」が、「個人的な立場では解決のつかない、 <u>婦人、母、子供の、多くの社会的な問題があること</u> 」を深く考えさせた(著作リスト[267]17-18) |
| 5. | 「母性保護の主張は依頼主義か—与謝野晶子氏へ」を機に「母性保護論争」へ |
| 1919. 8. 1~8 | 名古屋新聞社主催夏期婦人講習会に講師として名古屋へ。市川房枝の案内で繊維工場を視察 |
| 9月初 | 仮称・日本婦人協会創立の具体案をつくる 友愛会を辞任した市川に声をかけ、協会創立の計画への協力を依頼 |
| 11月初 | 計画の具体化につとめる。大阪朝日新聞社主催の関西婦人大会への出席依頼があり、計画を発表することとし、創立趣意書等を起草し、団体名を新婦人協会とする |
| 11. 24 | 大阪で開催の第一回婦人会関西連合大会に出席して協会の計画を発表。新婦人協会創立 関西滞在中に神戸「新川の貧民窟」に賀川豊彦を訪れ新婦人協会への協力を依頼(1919. 12. 3付『東京朝日新聞』の見出しに「南京虫に責められて貧民窟の雷鳥女史」とある) |
| 12. 7 | 『婦人と子供の権利』(天佑社)発刊:1917年末~1919年8月に発表の著作を収載 |
| 12月中旬 | 第一の事業として、第42回帝国議会への請願運動を決定 |
| ~末 | 花柳病男子結婚制限法制定の請願を出すにあたり、明治医会 <small>（東京帝大医学部教</small> |

| | |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1920. 1. 6 | 授)を訪問して相談。請願文の起草にとりかかり、請願運動へむけて奥むめおを参加を誘う 田端の自宅で協議会開催。治安警察法第五条修正及び花柳病男子の結婚制限に関する請願書の草案を審議。発起人は平塚、市川、奥 |
| 2. | 治警法第五条修正、花柳病男子結婚制限に関する請願書を衆議院・貴族院に提出 |
| 2. 23 | 衆議院請願第二分科会で審議され、両請願ともに政府への参考送付となる |
| 26 | 議会解散で、貴族院提出の請願は審議されずに終る |
| 3. 28 | 新婦人協会発会式 |
| 4. 8 | 明治医会総会で、「婦人の立場」から花柳病について述べる予定が、「発熱の為」不参加 |
| 6. 5 | 全国社会事業大会に出席し、大会後の懇親会(生江孝之、矢吹慶輝、田子一民ら参加:矢吹は1926年刊の「社会事業概説」で協会の花柳病運動を紹介)で両請願運動に賛成を求める |
| 7. 1 | 第43回帝国議会、二種の請願書を衆議院に提出 |
| 7. 12 | 衆議院第一分科会で花柳病男子結婚制限法制定の請願は審議され、不採択 |
| 10. 9 | 新婦人協会の機関誌『女性同盟』創刊 |
| 11. | 支部設立のため北陸から関西をまわり、名古屋、大阪、神戸と広島県内に3支部設立 |
| 1921. 1. 29 | 第44回帝国議会に衆議院議員選挙法改正、治安警察法第五条改正、花柳病者の結婚制限並離婚請求に関する請願書を衆議院に提出 花柳病者の結婚制限並離婚請求に関する請願書を花柳病予防法案起草中の内務省衛生局保健衛生調査会にも提出 |
| 2. | 花柳病者結婚制限は請願第二分科会で2回討論されるが不採択となる |
| 1921. 2. 12 | 協会主催の覚醒婦人大会を大阪中之島公会堂で開催し、「婦人の時代が来ました」を講演 |
| 7. 29 | 渡米する市川を横浜埠頭へ会員たちと見送りに行く |
| 8月初 | 体調不良で、静養のため上総の竹岡海岸～栃木県那須へ転地生活へ |
| 1922. 1. | 栃木県那須郡佐久山町に初秋まで住む |
| 3. 18 | 協会主催でマーガレット・サンガーの歓迎茶話会を開催。サンガー「婦人と自由」を講演 |
| 3. 25 | 議会最終日、貴族院本会議に治安警察法第五条改正法律案が上程され可決成立 |
| 5. 10 | 治安警察法第五条第二項改正施行:女性発起による政談演説会の開催と会同が可能となる |
| 5. 15 | 協会東京本部主催の祝賀記念政談演説会に、佐久山からメッセージを送る |
| 初冬 | 曙町の平塚家に一家で寄寓 |
| 12. 8 | 臨時総会で新婦人協会の解散が決定し、12月末付の解散の声明書を関係方面へ送る |
| 1923. 4. 4 | 東京千駄ヶ谷の借家に住む。曙生、牛込原町の成城小学校に転入 |
| 9. | 関東大震災のあと災害救済婦人団の仕事をする 敦史、成城小学校へ秋組として入学 |
| 1924. 6. 7 | 父定次郎、会計検査院次長を最後に退官 |
| 1925. 2. | 山本宣治の産児制限アンケート(「産児調節はか非か」『性と社会』2月号)に賛成と回答 成城学園の砧村移転にともない、京王沿線の千歳村烏山の借家へ移る 博史、成城学園の絵画と演劇部の教師となり、子どもの月謝が無料となる |

| | |
|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1925. 10. | 満月会から出版『婦人問題の諸相』（現代諸家 40 余人の婦人問題に関する評論集）を編集 |
| 1926. 2. | 母子扶助法制定促進会成立し、会員となる |
| 秋 | 東京府下北多摩郡砧村喜多見 415 の成城学園住宅地に、家の新築をはじめ |
| 1927. 4. 1 | 小田急線開通の日に砧村の新居に移る |
| 1928. 2. | 総選挙に際し、『東京日日新聞』、『婦女新聞』、『婦人運動』に「無産政党をためらうことなく応援せよ」と書く |
| 4. | 曙生、自由学園中等部に入学する ※クロボトキン『相互扶助論』から協同組合について考え、闘争によらず、資本主義組織を切り崩しながら民衆自身の協同自治による新社会組織をめざす協同組合運動に共感し加入 |
| 1929. | 消費組合運動への関心が高まる |
| 1930. 1. 26 | 高群逸枝の杉並の借家での無産婦人芸術連盟結成に参加する |
| 5. 28 | 読売講堂での『婦人戦線』と『農民』（全国農民芸術連盟）の合同講演会に参加する 母性教育協会に加わる。高良とみ、山田わか、竹内茂代ら |
| 7. 19 | 「消費組合 我等の家」の店舗落成記念会（一切の経営が「平塚女史が総指揮で」、女性の手によって独立の組合と同じ形式で経営） |
| 1931. 1 | 石本静枝、馬島欄らと日本産児調節連盟を結成し、理事となり活動 |
| 7. | 安部磯雄らの墮胎法改正期成会（「精神的社会的適応症」による人工妊娠中絶の合法化要求運動）の趣旨書呼びかけ人となる |
| 夏 | 東京医療利用組合（協同組合病院）の創立に賛成、参加 |
| 10. | 関西婦人連合会主催の婦人経済大会に関東消費組合の無産者組合代表として出席 |
| 1932. 4. 3 | 消費組合連合大会に東京共働社成城支部所属の大会代議員として出席「消費組合に於ける婦人役員地位に関する件」を説明 |
| 1932. 5. | 日本産児調節婦人連盟を石本静枝らとつくる。はっきりと女性をターゲットにした運動展開のため女性ばかりを結集する |
| 7. 20 | 墮胎法改正期成同盟の委員となる |
| 1933. 1. | 『婦選』の記者より「鳥潟静子結婚解消事件」についてのインタビューを受ける。「平塚らいてう女史にきく 性病者の結婚制限運動」（『婦選』7-1、1月号） あらたに任意組合の「消費組合 我等の家」をつくり組合長となる |
| 1934. 春 | 博史、大阪心齋橋天賞堂画廊で油絵と銀指環の個展を開く ※博史製作の銀指環にたいする世評が高まり、このころから一家の経済状態が好転 |
| 9. | 母性保護法制定促進婦人連盟(翌年母性保護連盟と改称)結成に際し、連盟の宣伝委員となる |
| 1936. 4. | 曙生、東洋英和女学院保育専門部を卒業。敦史、早稲田高等学院に入学 |
| 8. | 博史、中国へ(～1937. 1)。上海で魯迅の急逝にあい、デスマスクを描いて妻の許広平に贈る |
| 1938. 3. 24 | 曙生、築添正二と結婚。正二は「小さいときに小児麻痺にかかった足のわるい貧しい学生で発達心理学を専攻する教育家はだのクリスティアン」と記す（著作リスト[256]177） |
| 10. 3 | 文芸春秋社の座談会「戦時下の婦人問題を語る」に出席 |

| | |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 12. | 3月に国家総動員法が成立し、軍事優先の統制経済となり、家庭購買組合と折衝を重ねて併合が成立し、任意組合「我等の家」を閉鎖 |
| 1939. 2. 4 | 『東京朝日新聞』に「母の現役に望む数々」として、「日本を学び、皇道を知り、また支那大陸をはじめアジア一般を教える母の再教育」を提言 |
| | ・ 中山貞子を識り、掌波療法による治療を受ける。これを機に掌波療法を修得 |
| 11. | 「優生座談会」に出席（『婦人運動』11月号掲載）断種法には言及せず：出席者は厚生省予防局長高野六郎、人口問題研究所北岡寿逸、奥むめお、田中孝子、赤松常子、木内きやう |
| 1941. 2. 18 | 父定次郎、脳溢血で急逝（83歳） |
| 8. 14 | 奥村博史との婚姻届を渋谷区役所に提出 |
| 1941. 12 | 敦史、早稲田大学理工学部繰上げ卒業し、三菱重工名古屋航空機製作所へ赴任 |
| 1942. 2. 1 | 敦史、応召、千葉県柏の東部 102 部隊入隊 |
| 3. | 成城の自宅を知人に貸し、茨城県北相馬郡小文間村宇戸田井（現・茨城県取手市小文間）の姉の別荘のそばの家を借りて疎開することを決める |
| 3. 19 | 疎開先の戸田井に到着 |
| 1943. 3. | 敦史、陸軍技術中尉となり、陸軍航空本部付となる |
| 1944. 1. 23 | 敦史、掌波療法の中山貞子の娘、綾子と結婚。曙町で結婚生活をはじめ |
| 12 月末 | 曙生、綾子が相次いで男児を出産 |
| 1945. 8. 15 | 疎開先で敗戦をむかえる |
| 11. | 11.3 結成の新日本婦人同盟参加を促す便りが市川房枝から届くが、メッセージのみ送る 戦後初の衆議院総選挙で女性参政権行使であるが、疎開の故か投票せず |
| 1946. 4. 10 | 日本国憲法公布にあたり、母性の権利の規定が入っていないことに一抹の不满を抱きつつ、 |
| 11. 3 | 主権在民、基本的人権の尊重、男女平等と戦争放棄、平和の精神に深く共感する |
| 1947. 3. | 疎開地より成城の家に戻る。敦史夫婦との同居生活（敦史は早稲田大学工学部助教授） |
| | ・ 平和関係の書物を読み、戦争の原因は何かを探求する日々 |
| | ・ 雑誌『一つの世界』を知り、「国家あれば戦いあり」「民衆の声こそ破局を防ぐ」から世界連邦主義にひかれる |
| 1948. 1. | 市川房枝の公職追放取消運動に協力、追放取消申請書を GHQ 民政局ケージス大佐宛に提出 |
| 1949. 4. 10 | 労働省婦人少年局の呼びかけで「第二回婦人の日」大会開催。これを機に 40 余団体で婦人団体協議会をつくる。この大会で、選挙権獲得者として表彰される |
| | ・ 世界連邦建設同盟に入会。理事として、のちに常任理事として働く |
| 1950. 4. 10 | 婦人週間のこの日、NHK「朝の訪問」で談話が放送される：婦人の解放と平和問題を結びつけた話をし、「婦人運動は平和運動で完了する」というエレン・ケイの言葉をひいて、日本婦人の解放された力を、世界平和運動に結集したい、と結語する |
| 6. 26 | 講和条約締結を前に、「非武装国日本女性の講和問題についての希望事項」を起草し、ガントレット・恒子、上代たの、野上弥生子、植村環らと連名で、来日中のダレス特使に提出 |
| 1951. 12. 19 | 再軍備反対婦人委員会を結成し、委員長となる（副委員長は上代たの、市川房枝） |

| | |
|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1952. 7. | ソビエト、中国に初渡航した高良とみ帰国歓迎会に出席し、歓迎の挨拶 |
| 1953. 4. 5 | 日本婦人団体連合会結成、会長となる |
| 11. | 婦人界の功労者として山田わかとともに天皇主催の戦後最初の園遊会に招待されたが、欠席 |
| 12. | 第二回日本婦人大会に出席し、国際民主婦人連名副会長就任を発表 |
| 年末 | 曙生は、夫の築添正二の近江学園勤務に子どもと共に同行し、58年秋まで5年間過ごす |
| 1954. 7 | 日本青年館で開催の日本労働組合総評議会（総評）第5回大会に出席し、来賓挨拶 |
| 12. 11 | 母光沢死去（91歳） |
| 1955. 1. 1 | NHK国際放送「中華人民共和国のみなさんへ」 |
| 11. 11 | 下中弥三郎主唱による世界平和アピール七人委員会のメンバーとなる |
| 12. | 婦団連会長辞任、名誉会長となる |
| 1956. 1. 30 | NHK婦人の時間「一すじの道」で、簡単な伝記が放送される |
| 8. 26 | 来日中の許広平（魯迅の妻）が丸岡秀子の案内で自宅に来訪 |
| 1957. 1. 15 | 曙生の紹介（このころ、夫の正二が近江学園勤務）で、辻信彦の営む片瀬の特殊児童教育私塾のさくら塾の二階に避寒。3ヵ月滞在して、子どもたちに経絡の電気治療器を使って治療し、効果をあげて、子どもたちとも仲よくなる |
| 1960. 1. 1 | 各界25名の女性と「完全軍縮支持、安保条約破棄を訴える声明」を発表 |
| 4. 16 | 安保批准阻止全国婦人大会へ激励電報を送る |
| 1962. 3. 17 | 軍縮のための日本婦人集会 ウィーン世界大会への歓送会に出席し挨拶 |
| 4. 16 | 姉の孝、死去 |
| 10. 19 | 新日本婦人の会結成、代表委員となる(1967辞任) |
| 11. 15 | 婦選会館開館式に出席し、理事となる |
| 1963. 11. 24 | 全国身体障害者連絡協議会発会式へメッセージを送る |
| 1964. 2. 18 | 博史、死去。二葉保育園の徳永恕が弔問に訪れ語り合う。平塚は同園を訪ねたことはなかったが、博史も曙生も何度も訪れている（山崎朋子『光ほのかなれども』1980朝日新聞社） |
| 11. | 知友百人で『奥村博史素描集』を平凡社より刊行 |
| 1965. 10 | 博史作品集『わたしの指環』を中央公論美術出版より刊行 |
| 1966. 5. | 「ベトナム侵略戦争をやめさせるための全日本婦人への訴え」を発表 |
| 9. 13 | 曙生の夫、築添正二、死去 |
| 1968. 12. | 成城の家で、曙生一家と同居 |
| 1970. 6. 22 | 「全国の婦人に安保破棄を訴える」声明を、市川房枝、住井すえ、丸岡秀子らとともに行う |
| 6. 23 | 安保破棄を訴えて、櫛田ふきらと成城の町をデモ |
| 7. | 世界婦人大会（ヘルシンキ）で、婦人の国際共同行動として決まった「ベトナム母と子保健センター」設立運動の国内へのよびかけをする |
| 8. 23 | 千駄ヶ谷代々木病院へ入院。いったん退院するが11月10日に再入院する |
| 1971. 4. 10 | ベッドの上で東京都知事選挙の不在者投票 |
| 5. 24 | 午後10時36分死去 85歳 |

I-2 ② 平塚らいてう著作リスト

◇備考欄の◎は優生思想、☆は花柳病の記述がみられるもの。⊙?は優生と言い切れるか疑問なもの。

| No. | 論文・資料・図書名 | 誌名・出版社 | 発行年月 | 備考 |
|-----|------------------------------------------|-----------------------|----------------|----|
| 1 | 愛の末日 (短編小説) | 閨秀文学会の回覧雑誌 | 1907 | |
| 2 | わがまなこ | 趣味 | 1909.1 | |
| 3 | 退京 (三幕劇脚本) | 活動 5-4 | 1909.3 | |
| 4 | 偽らざる告白 | 女学世界 9-7 | 1909.5 | |
| 5 | 元始、女性は太陽であった—『青鞆』発刊に際して | 青鞆 1-1 | 1911.9 | |
| 6 | ヘッダ・ガブラー (翻訳: ムジコフスキー) | 青鞆 1-1 | 1911.9 | |
| 7 | ヘッダについて | 青鞆 1-2 | 1911.10 | |
| 8 | 編集後の雑感想 | 青鞆 1-3 | 1912.11 | |
| 9 | 高原の秋 (随想): 書いたのは 1908.9 | 青鞆 1-3, 4 | 1911.11, 12 | |
| 10 | ノラさんに | 青鞆 2-1 | 1912.1 | |
| 11 | 心象事実 | 青鞆 2-2 | 1912.2 | |
| 12 | 降神 | 青鞆 2-3 | 1912.3 | |
| 13 | 円窓より | 青鞆 2-4 | 1912.4 | |
| 14 | 四月の評論二、三 | 青鞆 2-5 | 1912.5 | |
| 15 | 読んだマグダ | 青鞆 2-6 | 1912.6 | |
| 16 | 田中王堂氏の『哲人主義』 | 青鞆 2-7 | 1912.7 | |
| 17 | 円窓より—茅ヶ崎へ、茅ヶ崎へ | 青鞆 2-8 | 1912.8 | |
| 18 | 閑人の多い世の中 | 女学世界 12-12 | 1912.9 | |
| 19 | 女としての樋口一葉 | 青鞆 2-10 | 1912.10 | |
| 20 | 靄の帯 | 青鞆 2-12 | 1912.12 | |
| 21 | 新しい女 (1.11 ジャパン・タイムズに全文掲載) | 中央公論 1月号 | 1913.1 | |
| 22 | 『恋愛と結婚』(エレン・ケイ著)連載にあたって | 青鞆 3-1 | 1913.1 | |
| 23 | 恋愛と結婚 (翻訳: エレン・ケイ) | 青鞆 3-1, 2, 3, 4, 6, 7 | 1913.1-4, 6, 7 | |
| 24 | 世の婦人たちに | 青鞆 3-3 | 1913.3 | |
| 25 | 『肩ある窓にて』(発禁となった『円窓より』掲載の「世の婦人たちに」を抜いて改題) | 東雲堂書店 | 1913.6 | |
| 26 | 性的道徳発展の過程 (翻訳: エレン・ケイ) | 青鞆 3-8 | 1913.8 | |
| 27 | 恋愛の進化 (翻訳: エレン・ケイ) | 青鞆 3-9, 10 | 1913.9, 10 | |
| 28 | 諸名士の所謂「婦人問題」に就いて | 第三帝国創刊号 | 1913.10 | |
| 29 | 私には親しまれぬ現代社会 | 生活 1月号 | 1914.1 | |
| 30 | 独立するに就いて両親に | 青鞆 4-2 | 1914.2 | |

| | | | | |
|----|-----------------------------------|-----------------|--------------|-----|
| 31 | 恋愛と結婚制度 | 第三帝国 | 1914. 2. 10 | |
| 32 | 伊藤野枝訳エマ・ゴールドマン『婦人解放の悲劇』序文 | 『婦人解放の悲劇』東雲堂書店 | 1914. 3 | |
| 33 | エレン・ケイ小伝(翻訳:H. エリス) | 『婦人解放の悲劇』東雲堂書店 | 1914. 3 | |
| 34 | 男女恋愛の差別(翻訳:エレン・ケイ) | 青鞥 4-5 | 1914. 5 | |
| 35 | 婦人の生活を重んじない社会 | 青鞥 4-6 | 1914. 6 | |
| 36 | 恋愛の自由(翻訳:エレン・ケイ) | 青鞥 4-6, 7, 8 | 1914. 6-8 | |
| 37 | 母権(翻訳:エレン・ケイ) | 青鞥 4-9, 11 | 1914. 9, 11 | |
| 38 | エレン・ケイ女史—新婦人観・新恋愛観 | 新日本 9月号 | 1914. 9 | |
| 39 | 『現代と婦人の生活』 | 日月社 | 1914. 11 | |
| 40 | 『青鞥』と私—『青鞥』を野枝さんにお譲りするについて | 青鞥 5-1 | 1915. 1 | |
| 41 | 小倉清三郎氏に—『性的生活と婦人問題』を読んで | 青鞥 5-2 | 1915. 2 | |
| 42 | 処女の価値(目次:処女の真価値) | 新公論 3月号 | 1915. 3 | |
| 43 | 峠(小説) | 時事新報 | 1915. 4/1-21 | |
| 44 | 個人としての生活と性としての生活との間の争闘について(野枝さんに) | 青鞥 5-8 | 1915. 8 | 優? |
| 45 | 断片(翻訳:エレン・ケイ) | 青鞥 5-9 | 1915. 9 | |
| 46 | 母の愛(翻訳:ウォード) | 青鞥 5-10 | 1915. 10 | |
| 47 | 明治より大正に至る我邦の婦人問題 | 新日本 11月号 | 1915. 11 | |
| 48 | 女性中心説(翻訳:ウォード) | 文章世界 1月号 | 1916. 1 | |
| 49 | 母となりて | 婦人公論 2月号 | 1916. 2 | |
| 50 | 南湖より(1) | 婦人公論 4月号 | 1916. 4 | |
| 51 | 貞操論(翻訳:スペンサー) | 早稲田文学 5月号 | 1916. 5 | |
| 52 | 母性の主張に就いて与謝野晶子氏に与ふ | 文章世界 5月号 | 1916. 5 | 優 |
| 53 | 現代の女学校教育に対する女学生としての不平 | 婦人公論 7月号 | 1916. 7 | |
| 54 | 南湖より(2) | 文章世界 7月号 | 1916. 7 | |
| 55 | 南湖より(3)有島生馬氏の『陳子へ』を読み | 文章世界 9月号 | 1916. 9 | |
| 56 | 南湖より(4)岩野泡鳴氏に—『国法と生活との合致』について | 文章世界 10月号 | 1916. 10 | |
| 57 | 男女性的道德論 | 婦人公論 10月号 | 1916. 10 | ☆優? |
| 58 | 産児数制限の問題 | 初出不明(内容から9~12月) | 1916. | 優 |

| | | | | |
|----|--------------------------------------|---------------------|-------------------------|-----|
| 59 | 厄年 (小説) | 中央公論 12月号 | 1916.12 | |
| 60 | 所謂自由恋愛と其制限 (大杉・野枝事件と自由恋愛) | 大阪毎日新聞 (婦女新聞に再録) | 1917.1.4 (1917.1.12) | |
| 61 | 女もし参政権を持たば—婦人・労働者・ 子供の擁護者を | 新小説 4月号 | 1917.4 | |
| 62 | 母としての一年間 | 婦人公論 5月号 | 1917.5 | |
| 63 | 青年男女交際論—いかなる困難と危険 の前にも | 婦人公論 6月号 | 1917.6 | |
| 64 | 矢島楯子氏と婦人矯風会の事業を論ず | 新小説 6月号 | 1917.6 | |
| 65 | 伊藤野枝さんの歩かれた道 | 新日本 7月号、8月号 | 1917.7-8 | |
| 66 | 婦人の自由解放と個人的修養 | 婦人公論 8月号 | 1917.8 | |
| 67 | 避妊の可否を論ず | 日本評論 9月号 | 1917.9 | ㊦ |
| 68 | 『現代の男女へ』 | 南北社 | 1917.12 | |
| 69 | 婦人の眼に栄じたる法律—我現行法上 の婦人 | 法治国 1,2月号 | 1918.1,2 | ☆㊦? |
| 70 | 女を誤らしむる教—井上哲次郎氏の良 夫賢父— | 婦人公論 4月号 | 1918.4 | ☆ |
| 71 | 母性保護の主張は依頼主義か—与謝野、 嘉悦二氏へ | 婦人公論 5月号 | 1918.5 | |
| 72 | 母性保護の問題に就いて再び与謝野晶 子氏に寄す | 婦人公論 8月号 | 1918.8 | ㊦? |
| 73 | 老死 (小説) | 中央公論 9月号 | 1918.9 | |
| 74 | 『死と其前後』を見て、他 | 雄弁 12月号 | 1918.12 | |
| 75 | 結婚の道徳的基礎 | 初出不明 | | ㊦ |
| 76 | 婦人労働問題と種族問題 | 初出不明 | | |
| 77 | 世界大戦に関する善種学(翻訳:ハベロッ ク・エリス 1918.5) | 初出不明 | | |
| 78 | 戦後の婦人問題 | 大阪朝日新聞 | 1919.1.2 | ㊦ |
| 79 | 現代家庭婦人の悩み | 婦人公論 1月号 | 1919.1 | |
| 80 | 婦人再婚論 | 中外新論 3月号 | 1919.3 | |
| 81 | 「例の会」のことと「燕」といふ名の起 り | 新小説 4月号 | 1919.4 | |
| 82 | 我が国の婦人参政権問題に就いて | 中外 4月号 | 1919.4 | |
| 83 | R夫人の生活 (小説) | 中外新論 5月号 | 1919.5 | ☆ |
| 84 | 『母性の復興』(翻訳:エレン・ケイ) | 新潮社 | 1919.5 | ㊦ |
| 85 | 女工国日本 | 初出不明 | | |

| | | | | |
|-----|---------------------------------------------|--------------|--------------|------------------|
| 86 | 日本（我国）に於ける女工問題 | 婦人公論 6月号 | 1919. 6 | |
| 87 | 男女同一賃金の要求に就いて | 初出不明 | | |
| 88 | 母の労働と幼児の死亡率（翻訳：メイ・テナント） | 労働世界 8, 10月号 | 1919. 8, 10 | |
| 89 | 名古屋地方の女工生活 | 国民新聞（10回連載） | 1919. 9/8-24 | |
| 90 | 婦人の団結を望む（11. 24 開催の婦人会 関西連合大会で代読された講演草稿） | 大阪朝日新聞 | 1919. 11. 30 | |
| 91 | 『婦人と子供の権利』 | 天佑社 | 1919. 12 | |
| 92 | 治安警察法第五条の撤廃と花柳病の男子の結婚禁止 | 大阪朝日新聞（5回連載） | 1920. 1/7~11 | ☆ |
| 93 | 新婦人協会の事業に就て | 早稲田文学 2月号 | 1920. 2 | ☆ |
| 94 | 女から見た男の改造—婦人に対する態度の改善 | 婦人公論 4月号 | 1920. 4 | |
| 95 | 新婦人協会の議会活動に就いて与謝野晶子氏に御答へします | 中央公論 4月号 | 1920. 4 | ☆ |
| 96 | 婦人自身にかへれ | 婦人公論 10月号 | 1920. 10 | |
| 97 | 第二回婦人会関西連合大会へのメッセージ | 大阪朝日新聞 | 1920. 10. 25 | |
| 98 | 宣言 | 女性同盟創刊号 | 1920. 10 | |
| 99 | 社会改造に対する婦人の使命—『女性同盟』創刊の辞に代へて | 女性同盟創刊号 | 1920. 10 | |
| 100 | 花柳病男子結婚制限法制定に関する請願運動 | 女性同盟創刊号 | 1920. 10 | ☆ ^⓪ ? |
| 101 | 花柳病者に対する結婚制限並に離婚請求に関する誓願書 | 女性同盟 2号 | 1920. 11 | ☆ ^⓪ ? |
| 102 | 花柳病と善種学的結婚制限法 | 女性同盟 2号 | 1920. 11 | ☆ ^⓪ ? |
| 103 | 花柳病者結婚制限に関する欧米諸国の現行法令 | 女性同盟 3号 | 1920. 12 | ☆ |
| 104 | 波紋（雑感） | 女性同盟 5号 | 1921. 2 | |
| 105 | 「拒婚同盟」の企図に就いて | 婦人公論 2月号 | 1921. 2 | ☆ |
| 106 | 花柳病に対する結婚制限法と拒婚同盟に就いて | 改造 2月号 | 1921. 2 | ☆ |
| 107 | 波紋（感想）婦人の時代が来ました—大阪覚醒婦人大会に於て— | 女性同盟 6号 | 1921. 3 | |
| 108 | 波紋（感想）武力偏重の思想を排す | 女性同盟 9号 | 1921. 6 | |
| 109 | 第一回総会に臨み過去一年半を回想し | 女性同盟 10号 | 1921. 7 | |

| | | | |
|-----|---------------------------------------------------------------------|------------------------|---------------|
| 110 | つゝ 軍備縮小問題—ハーディング氏の提議 に就いて | 女性同盟 10 号 | 1921. 7 |
| 111 | 治安警察法修正案通過祝賀演説会に寄 せて(協会東京本部主催の演説会 1922. 5. 15 に佐久山から送ったメッセージ) | 初出不明 | (1922. 5. 15) |
| 112 | 女性として生活する上に於て我が現行 法に対し感じたこと | 女性改造創刊号 | 1922. 10 |
| 113 | 離婚しえない悩み | 初出不明 | |
| 114 | 家庭改造の根本義 | 婦人公論 1 月号 | 1923. 1 |
| 115 | 新婦人協会の回顧 | 婦人公論 3~7 月号 | 1923. 3-7 |
| 116 | 震災雑記 後日子供達に見せるために | 女性改造 10, 11 月号 | 1923. 10, 11 |
| 117 | 都市経営に繋る女性の分け前 | 女性 11 月号 | 1923. 11 |
| 118 | 私の見た野枝さんといふ人 | 婦人公論 11 月、12 月合併号 | 1923. 12 |
| 119 | 生活難失業難と貞操問題 | 女性 1 月号 | 1924. 1 |
| 120 | 我が婦人参政権運動の将来 | 女性改造 1 月号 | 1924. 1 |
| 121 | 私の母としての生活 | 婦人之友 3 月号 | 1924. 3 |
| 122 | 一昔前の婦人界 | 婦人公論 3 月号 | 1924. 3 |
| 123 | 寧ろ性を礼拝せよ『女人の性礼拝』を読 みて河田嗣郎氏に | 女性改造 5 月、7 月号 | 1924. 5, 7 |
| 124 | 生命から見放されつゝある現代の女性 | 女性 9 月号 | 1924. 9 |
| 125 | おのれと語る | 婦女新聞 1/18, 25, 2/1, 22 | 1925. 1, 2 |
| 126 | 家庭の仕事を職業とみる | 婦人之友 4 月号 | 1925. 4 |
| 127 | 断髪になるまで | 婦人公論 4 月号 | 1925. 4 |
| 128 | 所謂長髪に就いて | 婦人公論 8 月号 | 1925. 8 |
| 129 | 虐げられたる現代の母性と其の保護 母性とその玉座を取返すのは何時の日 か | 婦人の国 11 月号 | 1925. 11 |
| 130 | タゴールの婦人論を讀みて | 初出不明 | |
| 131 | 「産児調節是か非か」のアンケートへの回答 | 性と社会 第 12 号 | 1926. 2 |
| 132 | 子供を成城小学校へ入れたことに就て | 婦人之友 3 月号 | 1926. 3 |
| 133 | 鳥山より：母子扶助法制定促進会 | 婦女新聞 5/23 | 1926. 5 |
| 134 | 鳥山より：妻の俸給 | 婦女新聞 6/6 | 1926. 6 |
| 135 | エレン・ケイ女史の思想よりうけた大き な暗示 | 婦人運動 4-5 | 1926. 6 |
| 136 | 『恋愛創生』に就いて | 解放 5-6 | 1926. 6 |

| | | | | |
|-----|-----------------------------------------------------------------------|---------------------|------------|---|
| 137 | 母の感謝 | 初出不明 | 1926 | |
| 138 | 『女性の言葉』 | 教文社 | 1926. 9 | |
| 139 | アンケート「一家の経済上多数の子女を教養し得ない場合には産児を調節した方がよいでせうか」「我国現時の状態より見て産児の調節は必要でせうか」 | 太陽 32-13 | 1926. 12 | |
| 140 | 社会事業に働く若き友へ | 文化生活 4-12 | 1926. 12 | |
| 141 | エレン・ケイ女史の死 | 初出不明 | | |
| 142 | 女性の立場から生田長江氏の婦人非解放論を評す | 婦人公論 1月号 | 1927. 1 | |
| 143 | 無産政党と婦選運動 | 婦女新聞 2/3 | 1927. 2 | |
| 144 | 無産政党と無産婦人団体 | 婦女新聞 2/20 | 1927. 2 | |
| 145 | モダンガールについて | 大調和 4月号 | 1927. 4 | |
| 146 | かくあるべきモダンガール | 婦人公論 6月号 | 1927. 6 | |
| 147 | 青鞥社のこと | 太陽 6月号 | 1927. 6 | |
| 148 | 現下の女子高等教育問題について文部当局に | 教育時論 1521号 | 1927. 9 | |
| 149 | 女子教育に於る母性主義に就て | 婦人公論 12月号 | 1927. 12 | |
| 150 | 量より質 (『婦人』5-2(1928. 2)へ転載) | 東京朝日新聞「女性の描いた理想社会」欄 | 1928. 2 | ㊦ |
| 151 | 相続法改正案について、その他 | 婦人公論 2月号 | 1928. 2 | |
| 152 | 知識婦人の立場とその悩み | 都新聞 6/30, 7/1, 2 | 1928. 6, 7 | |
| 153 | 汎太平洋婦人会議と日支問題 | 婦人公論 9月号 | 1928. 9 | |
| 154 | 二業地許可問題 | 婦人公論 10月号 | 1928. 10 | |
| 155 | 救護法・母子保護法・其他 | 婦人公論 1月号 | 1929. 1 | ☆ |
| 156 | 母性愛が要求する産児制限 | 婦人公論 3月号 | 1929. 3 | ㊦ |
| 157 | バーナード・ショウの社会主義解説 | 東京朝日新聞 3/23 | 1929. 3 | |
| 158 | 新性道德のカオス | 婦人公論 8月号 | 1929. 8 | |
| 159 | 婦人の緊縮運動とその収穫 | 東京朝日新聞 10/22-24 | 1929. 10 | |
| 160 | 『婦人の隷属』(翻訳:ミル) | 平凡社『社会思想全集』36巻 | 1929. 11 | |
| 161 | 婦人戦線に参加して | 婦人戦線 4月号 | 1930. 4 | |
| 162 | 砧村雑草:産児制限についての内容 | 婦女新聞 6/22, 8/31 | 1930. 6, 8 | |
| 163 | 寧ろ母子保護法を制定せよ | 婦人倶楽部 8月号 | 1930. 8 | |
| 164 | 儲けない商売—消費組合に就て | 女性新聞 74号 | 1930 | |
| 165 | 本能としての協同心の発展 | 初出不明 | | |
| 166 | 母性へ注ぐ涙 | 婦人公論 12月号 | 1930. 12 | |

| | | | | |
|-----|-------------------------------------|--------------------------|----------|---|
| 167 | 石女と多産婦の産調問答 | 初出不明 | | |
| 168 | アンケート「明日の女性に要求される一つの資格」 | 婦人之友 1月号 | 1931. 1 | |
| 169 | 産児調節相談所—通経剤や不良器具の問題 | 初出不明 | | |
| 170 | 協同組合組織による病院の設立—医療制度の改革 | 初出不明 | | |
| 171 | 育児社会化の思想を吟味せよ | 婦人之友 11月号 | 1931. 11 | |
| 172 | [婦人の立場から満州事変を観る]人類の立場で婦人は観よ 無自覚からさめ | 東京朝日新聞 11/18 | 1931. 11 | |
| 173 | 満州事変と婦人たちの態度 | 都新聞 12/27 | 1931. 12 | |
| 174 | 男性の古い感情 | 婦人運動 2月号 | 1932. 2 | |
| 175 | 母よ手を取れ、悲嘆の嵐の中で—村々に医療組合を持たう | 都新聞 8/19, 20 | 1932. 8 | |
| 176 | (談話) 再録『壬申日記』第8巻 出口王仁三郎 | 人類愛善新聞 8月上旬号 (大本教機関紙) | 1932. 8 | |
| 177 | 消費組合と婦人の位置 | 婦人之友 10月号 | 1932. 10 | |
| 178 | 祖先を語る | 初出不明 | | |
| 179 | ニュースの中から問題を拾って—女性共産黨員への抗議 | 東京朝日新聞 1/21 | 1933. 1 | |
| 180 | 女性共産黨員とその性の利用—主義貞操の問題 | 婦人公論 3月号 | 1933. 3 | |
| 181 | 『雲・草・人』(随筆集) | 小山書店 | 1933. 7 | |
| 182 | 近く母となる若き友へ | 初出不明 | | |
| 183 | 結婚する娘に与へる手紙 | 婦人公論 10月号 | 1933. 10 | |
| 184 | 母の感謝 (137と同じ/内容からいくと1926年にかかれたもの) | 婦人運動 11-9 | 1933. 11 | |
| 185 | 本議会に何を期待するのか—相互の言論に世紀人あれ | 掲載紙不明 1/24 | 1934. 1 | |
| 186 | 青鞥社と新婦人協会の運動 | 歴史公論 4月号 | 1935. 4 | ☆ |
| 187 | 私の娘時代 | 婦人公論 5月号 | 1935. 5 | |
| 188 | ニュースから問題を拾って—顔がみた い優良国民 | 東京朝日新聞 6/3 | 1935. 6 | |
| 189 | 公民教育の徹底—今度の選挙粛清運動 にちなんで | 初出不明 | | |
| 190 | 母の務めを終へた寡婦の生き方 | 婦人公論 10月号 | 1935. 10 | |

| | | | | |
|-----|---------------------------------------------------|---------------------------|------------|-----|
| 191 | 窪川稲子さんへー「恐ろしき矛盾を読み て」ー | 婦人公論 11月号 | 1935. 11 | |
| 192 | 眼と力を内へー三六年の女性への待望 | 初出不明 | 1936. 1. 7 | |
| 193 | 孤独か、再婚か | 読売新聞 2/15「女の立場から」 | 1936. 2 | |
| 194 | 声のみでは帰れない | 読売新聞 3/28 | 1936. 3 | |
| 195 | 結婚と離婚ー中川善之助氏の新著『妻妾 論』を読む | 婦人公論 4月号 | 1936. 4 | |
| 196 | まず万教和協せよ | 時事新報 4/26 | 1936. 4 | |
| 197 | 女性の感激 | 読売新聞 5/7 | 1936. 5 | |
| 198 | 最近の婦人雑誌を見て | ホーム・ライフ 7月号 | 1936. 7 | |
| 199 | 『母の言葉』 | 刀江書院 | 1937. 2 | |
| 200 | 母である喜び | 白鳩 2月号 | 1937. 2 | |
| 201 | 娘に母の遺産を語る | 新女苑 3月号、4月号 | 1937. 3, 4 | |
| 202 | 『新生』の主人公長谷川こま子さんに就 いて | 東京日日新聞 3/17 | 1937. 3 | |
| 203 | 「母子保護法」に寄す | 女性展望 4月号 | 1937. 4 | |
| 204 | 一つの解決策 | 東京朝日新聞 6/17 | 1937. 6 | |
| 205 | 女の感想 | 女性日本 7月号 | 1937. 7 | |
| 206 | 皇軍慰問号を読む | 輝ク 11月号 | 1937. 11 | |
| 207 | たべもの | ホームユニオン（家庭購買組合 機関紙）4月号 | 1938. 4 | |
| 208 | 「坐ること」と「歩くこと」 | 東京日日新聞 5/31 | 1937. 5 | |
| 209 | 民族優生保護法案に関連して | 掲載紙不明 | 1939. 2? | |
| 210 | 今議会と婦人 | 全人 4月号 | 1939. 4 | |
| 211 | 戦争と産児 | 婦女界 5月号 | 1939. 5 | ㊦ |
| 212 | 悲しい事実 婦人運動(1938. 7. 15)に転載「悲しい事実 結婚の理想と性道徳」 | 東京日日新聞 7/15 | 1939. 7 | ☆㊦? |
| 213 | 美宗元の雷鳥 | 東京日日新聞 6/28, 29 | 1940. 6 | ☆㊦ |
| 214 | 新政治体制と婦人ー近衛公の新政治体 制に対して婦人としての要求 | 女性展望 8月号 | 1940. 8 | |
| 215 | 日記抄 | 婦女新聞 10/27 | 1940. 10 | |
| 216 | 結婚・家庭・子供 | 初出不明 | | ㊦ |
| 217 | 中国の若き友へ | 輝ク 2/17 | 1941. 2 | |
| 218 | 亡き父を偲びて | 婦人公論 5月号 | 1941. 5 | |
| 219 | 母娘の会話 | 婦人公論 9月号 | 1941. 9 | |

| | | | | |
|-----|---------------------------------------|--------------|-------------|----|
| 220 | 婦人代議士に | 初出不明 | | |
| 221 | あなた自身を知れ | 令女界 2月3月合併号 | 1947. 3 | |
| 222 | 曙生と共著『母子随筆』 | 桃李書房 | 1947. 3 | |
| 223 | わたくしの夢は実現したか | 女性改造 10月号 | 1948. 10 | |
| 224 | 雷鳥の軸 | 婦人民主新聞 1/3 | 1949. 1 | |
| 225 | 民族の未来のために | 女性改造 4月号 | 1949. 4 | ☆㊦ |
| 226 | 昔の女学生と今の女学生 | 女性改造 1月号 | 1950. 1 | |
| 227 | 平和のつばさ | 婦人タイムス 1月号 | 1950. 1 | |
| 228 | 日本の母の立場 | サンデー毎日 8/13 | 1950. 8 | |
| 229 | 朝鮮の動乱と私たちの女性の覚悟 | 新女苑 9月号 | 1950. 9 | |
| 230 | 晶子先生とわたくし | 短歌研究 5月号 | 1951. 5 | |
| 231 | 昭和婦人解放運動史—太平洋戦争に突 入するまで | 女性改造 5月号、6月号 | 1951. 5, 6 | |
| 232 | 婦人少年局の廃止反対声明 (草案) | | 1951. 8. 26 | |
| 233 | 榎田ふきと共編『われら母なれば』のま えがき | 青銅社 | 1951. 12 | |
| 234 | 危機の新年に立つ | 初出不明 | 1952. 1 | |
| 235 | 戦争放棄と日本の婦人 | 新女性 3月号 | 1952. 3 | |
| 236 | 働く女性への 1952 年の課題 | 平和への誓い 3月号 | 1952. 3 | |
| 237 | 母こそ平和の力 | 世界政府 3月号 | 1952. 3 | |
| 238 | 予備隊と婦人部隊 | 社会タイムス 8/30 | 1952. 8 | |
| 239 | 平和を望む全女性に訴える—総選挙を 前に | 南日本新聞 10/1 | 1952. 10 | |
| 240 | 1954 年の婦人運動の方向 | 人類愛善新聞 1/1 | 1954. 1. 1 | |
| 241 | 近ごろおそろしいことの一つ | 婦人公論 1月号 | 1954. 1 | |
| 242 | 女性と政治 | 草月 9月号 | 1954. 9 | |
| 243 | 世界によい政治を一文化の日の思う | 読売新聞 11/3 | 1954. 11 | |
| 244 | 『わたくしの歩いた道』 | 新評論社 | 1955. 4 | ☆ |
| 245 | 主婦解放論—石垣・福田両氏の婦人論を めぐって | 婦人公論 10月号 | 1955. 10 | |
| 246 | 念頭の所感 | 平和ふじん新聞 1/1 | 1956. 1 | |
| 247 | 庶民のなかに生まれる力 | 婦人公論 1月号 | 1956. 1 | |
| 248 | 日本婦人 10 年の歩みを語る—国際民婦 連 10 周年記念によせて | 婦人画報 2月号 | 1956. 2 | |
| 249 | 婦人参政の成果 | 婦人九州 6/6 | 1956. 6 | |
| 250 | “将来”を選ぶ重大な機会 | 北日本新聞 6/29 | 1956. 6 | |

| | | | | |
|-----|----------------------------------|--------------------------|------------|---|
| 251 | 青鞞運動の背景—明治のおんな | 随筆 1月号 | 1957.1 | |
| 252 | 子どもの世紀 | 愛育 7月号 | 1957.7 | |
| 253 | ウィーン集会の成功を祈って | 女性よ太陽であれ | 1958.4 | |
| 254 | 昔は産制さえ罪悪—いまの母親の考え は | 東京新聞 5/23 | 1961.5 | |
| 255 | 婦人運動 50周年をかえりみて—『青鞞』 創刊のころ | 婦人公論 11月号 | 1961.11 | |
| 256 | 「明生への手紙」築添明生『みそっかす 学園』 | 雪華社 | 1962.8 | |
| 257 | 鷗外先生について | 文学散歩 10/1 | 1962.10 | |
| 258 | 自我の確立へのたたかい | 婦人公論 11月号 | 1965.11 | |
| 259 | 憲法を守りぬく覚悟 | 憲法会議通信 2月号 | 1966.2 | |
| 260 | 私の履歴書 | 日本経済新聞 10/17~11/10 | 1967.10~11 | |
| 261 | 中立の明かし、朝鮮人の帰国協定 | 朝日新聞 10/27(「声」欄への投 書) | 1967.10 | |
| 262 | ふたたび悔いをのこさぬために | 婦人通信 1月 | 1970.1 | |
| 263 | 71年の新春を迎えて | 婦人通信 1月 | 1971.1 | |
| 264 | 元始、女性は太陽であった 上巻 —平塚らいてう自伝 | 大月書店 | 1971.8 | |
| 265 | 元始、女性は太陽であった 下巻 —平塚らいてう自伝 | 大月書店 | 1971.9 | |
| 266 | 続 元始、女性は太陽であった —平塚らいてう自伝(戦前編) | 大月書店 | 1972.10 | |
| 267 | 元始、女性は太陽であった —平塚らいてう自伝(完結編) | 大月書店 | 1973.11 | ☆ |

I—3 ① 永井潜 年譜

| 年月 | 年譜 | 著作 | 備考 |
|--------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|-------------------|
| 1876. 11. 14 (明治9) | ・広島県賀茂郡竹原(現竹原市)で、商家に生まれる。9男4女の第二子で次男。父は敬介。母シゲは、実業家馬越恭平の妹 | | |
| 1882. 1 | ・竹原小学校入学 | | |
| 1884 (明治17) 5 | ・9歳の時、漢学塾俊明館で長谷川俊平(桜南)に陽明学(漢籍)を学び、「本立而道自生」の精神に、少なからぬ影響を受けた ・高島平三郎の勧めで、県立尋常師範学校附属小学校に入学 | | |
| 1885. 7. 8 | ・竹原小学校中等科第3級に入学 | | |
| 1887. 5. 30 | ・広島県尋常師範学校附属小学校高等科第3年に入学 | | |
| 1889. 9 | ・小学校高等科卒業 ・広島県福山尋常中学誠之館に入学 | | |
| 1894. 7 10 | ・誠之館卒業 ・上京、神田小川町の独逸協会でドイツ語を習得 | | |
| 1895. 7 | ・第一高等学校第三部(医師志望)に入学 | | |
| 1898. 7 9 | ・第一高等学校卒業 ・東京帝国大学医科大学に入学 | | |
| 1902. 12 | ・東京帝国大学医科大学卒業 | | |
| 1903. 1 (明治36) 3. 21 | ・大澤謙二の生理学教室で助手を務める(27歳) 永井は東大医科大学を卒業後、その後の研究の専攻を生理学か精神病か迷った。 <u>生理学を選んだ理由は、ブンゲの医科学と、ヘルトウィッヒ(進化に関し、獲得形質の遺伝を認めている)の生物学総論を愛読し、生命問題に関する小論文を大澤謙二に提出していたこと</u> で、生理学に進んだ ・文部省官費留学生としてヨーロッパ留学、主にドイツゲッチンゲン(Göttingen)大学のMax Verworn(1863—1921)、『生理学総論』の著者に師事、「冬眠動物の代謝生理について」など研究、生理学、生命論、哲学を考える必要を学ぶ。その後、英国、仏国にも学ぶ | | |
| 1906. 9 9. 29 | ・帰国(30歳) ・生理学教室の助教授になり、第一講座で生理学総論を担当する | | |
| 1907 (明治40) | | | ・インディアナ州で最初の断種法制定 |
| 1908 | | ・『医学と哲学』 | |
| 1911 | ・医学博士号取得(「冬眠動物の新陳代謝に就いて」)(35歳) | | |
| 1913. 2 | ・高等官4等 | ・『生命論』 | |
| 1914 | | ・「結婚と健康診察(二)」『真新婦人』 | ・第一次世界大戦勃発 |
| 1915. 1. 25 (大正4) 2 | ・大澤の後任を受け主任教授になり、生理学第一講座を担当、第二講座でも生理学総論と植物性機能を講じる。大澤は講師として第二講座の講義を担当(39歳) ・高等官3等、従5位 | ・『生命論』改版 | |
| 1916. 6. 28 | ・保健衛生調査会の委員になる(40歳) | ・『生物学と哲学の | ・6、内務省、保健衛 |

| | | | |
|-------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| 7. 15 | ・保健衛生調査会第2回会議出席 | 境 | 生調査会設立 |
| 7. 22 | ・保健衛生調査会第3回会議の調査事項の決定で、ユーズニックスに関する調査事項を設けたいと提言するが採用されなかった | ・『人性論』 | |
| 12 | ・叙勲6等 瑞宝章 | | |
| 1917 | | ・「乳児の保護」『婦人公論』2-1 ・「民族衛生より観たる結婚の改良」『婦人公論』2-10 | ・2、安部文夫ら大日本優生会設立、会報を3号(1919.7)まで発行、約3年余りの活動で消滅 |
| 1918. 3. 11 | ・私立大日本婦人衛生会例会で「民族衛生の治」を講演 | ・「戦争と婦人」『婦人週報』4-1 | |
| 7. 12 | ・保健衛生調査会第7部の都市及農村衛生状態も担当 | ・「遺伝学上より観たる感化事業」『社会と救済』2-2 | |
| 7 下 | ・山形、長野等に旅行、8月上旬一旦帰京 | | |
| 8. 13 | ・公用で北海道に出張 | | |
| 11 | ・永井が第一講座の担任、第二講座は大澤に変わり、留学から帰国した橋田邦彦(助教授、1922年教授に)の担当になった。 | | ・11、第一次世界大戦休戦協定 |
| 12. 23 | ・保健衛生調査会第7部会、第2回委員会に出席 | | |
| 1919. 2. 15 | ・日本主食改良会発会式(大日本衛生会会堂)、柳沢伯爵、滋賀、佐伯矩、遠山椿吉らと創設 | ・「民族の衰亡」『監獄協会雑誌』31-2 | |
| 10. 4 | ・第2回結婚問題講演会(婦女新聞社、神田美土代町青年会館)で「青年男女と性的生活」を講演、参加者1600名 | ・「花柳病者の結婚を禁止せよ」『婦人公論』4-7 | |
| 10. 26 | ・第32回東京医学会総会開催(東大生理学医科学教室) | ・「人類の再生と民族の盛衰」『婦人衛生雑誌』348 | |
| 11. 26 | 開会の辞 会頭 田代義徳、幹事 永井潜 ・保健衛生調査会第3部会の花柳病第1回委員会で、委員増員を決定、永井も指名される | | |
| 12. 4 | ・保健衛生調査会第三部会第2回委員会に出席 | | |
| 1920. 4. 10 | ・芸備医学会主催の通俗講演会(広島市内立町崇徳教社)で、「生物学上より見たるデモクラシー」を講演 | ・「優生学講和」『婦人公論』5-4 | ・東京帝国大学医科大学が医学部になる |
| 4. 11 | ・芸備医学会第25年総会並びに25年祝賀式(広島県会議事堂)で、「戦後の人種衛生」を特別講演 | ・『青年男女と性的生活』 | ・9 保健衛生調査会本会議で、第二号議案の「根本的癩予防策要綱」で、「生殖中絶方法を施行し得ること」の案 |
| 9. 14 | ・保健衛生調査会、本会議出席 | ・「バースコントロールをコントロールせよ」『婦人公論』5-8 | |
| 11 | ・学術研究会の議員になる ・宮中某重大事件に関与、宮内省の保科侍医から、皇太子の婚約者長子の色盲遺伝について相談される | | |
| 1921. 3 | ・花柳病講習会で外科講義 | ・「優生雑話」『文化生活』1-1 | |
| 4 | ・大澤の後任で、日本女子大学校で生理学を講義(1939年3月まで) | ・「性の問題」『婦人問題講演集』6 | |
| 6. 22 | ・保健衛生調査会総会で部会制を廃止し特別委員会制を採用、衛生思想普及に関する件、運動、武術、協議等に関する件、花柳病予防に関する件の特別委員に指名される。各国の法令制度事例の参考資料の「優生学及優境学と結核問題」も調査審議中 | ・「乳児の保護」『文化生活』1-3 | |
| 7. 14 | ・衛生思想普及に関する特別委員会、『衛生読本』編集に関する準備委員に推薦される | ・「配偶者選択の根本問題」『婦人画報』 | |
| 7. 22 | ・『衛生読本』編集準備委員会で、編集に関する特別委員会の委員にもなる。本の内容は、中等学校若くは高等女学校卒業程度にする | ・「恵まれたる性のために」(一)-(四) | |
| 9. 20 | ・『衛生読本』の編別と執筆分担決定。永井は、「生命と自然界」を | 『改造』 | |

| | | | |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------|---------------------------------------------------|
| | 執筆 | | |
| 1922 . 7 | ・第1回大日本生理学会を橋田邦彦とともに東京帝国大学医学部教室で開催、永井：開会の辞、橋田：報告、石川日出鶴丸（京大）ら講演 ・高等官一等になる | ・「国家と生殖」『文化生活』2-3・4 ・「婦人解放と遺伝学」『文化生活』2-10 | |
| 9 | ・愛知医科大学で生理学講義のため出発、名古屋に一ヶ月滞在予定 | | |
| 9. 18 | ・保健衛生調査会総会に出席 | | |
| 11. 24 | ・保健衛生調査会、衛生思想普及に関する特別委員会で、『衛生読本』の執筆編集の依頼報告、永井は第一編「生命と自然界」を担当 | | |
| 12. 26 | | | |
| 1923. 6. 11- | ・摂政官の要請により、栄養問題、体育問題について講演（摂政官御殿）、「頗る名誉の次第なり」 ・勲三等瑞宝章を受ける 住所 東京市外野方村上沼袋中通り 70 ・阿蘇夏期大学で講演 ・上海の日本人倶楽部で講和 | ・「婦人性学講座」『女性改造』 ・「婦人貞操の危機」『婦人公論』 | |
| 21 | | | |
| 1924. 12. 12 | ・調査会、衛生思想に関する特別委員会に出席、『衛生読本』の永井分担の「生命と自然界」は執筆終了の予定。新たに第四編「活動と休養」、第五編「健康と鍛錬」を担当 | | ・1 後藤龍吉、日本優生学会設立、『ユーゼニックス』→『優生学』を発刊（1943. 4で廃刊） |
| 1925. 4. 8 | ・芸備医学会第30年総会で、「開会の辞」 ・後藤龍吉の要請で、海野、田中ら75名と日本優生学協会設立に応じるが財団法人にはならなかった ・体育講演会（東京市主催）で「スポーツ精神学」を講演 ・『生理学研究』（石川日出鶴丸主幹の国民生理研究会の機関雑誌）に掲載された、山本宣治の「若い男の性生活」の掲載打ち切りを要求。（1924. 4~1925. 2で打ち切られた） | ・『叛逆の息子』 ・『質』と『数』と普選『文化生活の基礎』5-2 | |
| 1926. 3. 28 | ・父敬介、岡山の自宅で逝去 | ・「優生問答の半日」『体性』7-1 | ・9 池田林儀、日本優生運動協会の設立を構想、『優生運動』を発刊（1930. 1 5巻1号で廃刊） |
| 6. 18 | ・保健衛生調査会、花柳病予防に関する特別委員会に出席 | | |
| 9. 1 | ・熊本医科大学へ生理学講義のため3週間出張 | | |
| 11. 18 | ・保健衛生調査会、衛生思想普及に関する特別委員会に出席、小冊子の執筆で、永井は「優生学の話」を担当 | | |
| 1927 | ・人口食糧問題調査会臨時委員となる ・母性及小児保健講習会（内務省衛生局）で「母性及小児と遺伝との関係」を講義 | ・『生理学総論』 ・『性の生理』（上下） ・『人及び人の力』 | ・日本梅毒学会創立、第1回総会を京都で開催の予定 |
| 3. 8 | | | |
| (昭和2) | | | |
| 1928. 1. 20 | ・人口食糧問題調査会第11回人口部特別委員会出席（首相官邸） | ・「産児制限は危険」『文化生活』6-2 ・「優生学に就て」『医政』3-7 | |
| 4. 4 | ・保健衛生調査会衛生思想普及特別委員会で、『衛生読本』の永井担当の第一篇「生命と自然」は本月中に執筆完了の了解を得たと、氏原が報告。小冊子「優生学の話」は、未稿 | | |
| 4. 18 | ・第13回人口部特別委員会に出席 | | |
| 7. 13 | ・第15回人口部特別委員会出席、「本日ハ優生運動産児制限問題ニ付社会局側幹事ノ説明ヲ聴取シ審議セムガ爲ニ会合セリ」、永井、永井亨、福田徳三の3委員が小委員に指名され、更に審議を進めることとなった（首相官邸） | | ・12 「今日に医師総会で人間濫造を防げと内務大臣へ勸説 |
| (昭和3) | | | |

| | | | |
|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 10.11 | ・芸備医学会東京部会例会で、「医学の過去及び将来」を論ず（東洋ビル地階レストランパリ） | | 断種、生産の新法律も設けよ ※「優生学は永井博士…のご意見を伺って答申案を作成した」「断種という言葉は今度のはじめて新しく訳したもの」と瀬川が語る 『朝日新聞』 |
| 10.30 | ・人口食糧問題調査会小委員会出席、「優生問題産児制限問題ニ付テ協議セムガ爲ノ会合」（首相官邸） | | |
| 12.7 | ・人口食糧問題調査会小委員会出席、「 <u>優生問題に対する答申案</u> 」で「 <u>人口統制B案</u> 」が永井により提出され、 <u>絶種的手術の容認が盛り込まれる</u> （社会局） | | |
| 2.19 12 | ・人口食糧問題調査会小委員会出席（首相官邸） ・日本医師会第7回総会で答申を発表、「 <u>悪質遺伝の虞ある遺伝病患者、低脳者、変質者及び常習犯罪者</u> 」に対する強制的断種にまで踏み込んだ内容。意見を求められた永井の影響大 | | |
| 1929. 1.18 | ・人口食糧問題調査会小委員会出席、「人口統制E案」（首相官邸） | ・『科学的生命観』 ・『生物学概論』 ・「生死を左右する種々の事実」『母と子』10-8 ・「两性問題と遺伝及び優生学」『健康増進叢書 性篇』 | |
| | ・第17回人口部特別委員会に出席（首相官邸） | | |
| 1.25 | ・第18回人口部特別委員会に出席（首相官邸） | | |
| 5.16 | ・保健衛生調査会の衛生思想普及に関する特別委員会に出席 | | |
| 6.13 | ・永井、坂本恒夫の送別会（東洋ビル地階レストラン）で、渡欧の日程を述べる | | |
| 7.19 | ・渡欧 | | |
| 8.17 | ・万国生理学会に出席（ボストン） | | |
| 9初 | ・英国に約一ヶ月滞在後、仏、伊、独を巡遊し、特にスカンジナビアを見学、特に各国の優生学的問題を調査し、ウプサラの世界最初の国立民族衛生研究所を訪問。日本に於ける同種の研究機関の必要性を痛感 | | |
| 12.29 30 | ・永井帰国の報 ・帰国 | | |
| 1930. 1.23 | ・第22回人口部特別委員会出席（首相官邸） | ・「婦人の体質」『母と子』11-6 ・「血族結婚は有害か無害か」『公衆衛生』48-7 ・「日本民族衛生学会の主張」『医事公論』952『芸備医事』35-12 | |
| 1.27 (昭和5) | ・芸備医学会東京部会で永井の欧米視察談あり（レストランパリ）、 <u>「米国の医学会の誠に恐るべきものあるを示し吾々を鞭撻せられ、更に英獨仏伊諸国の主として医学の現状を述べて」</u> | | |
| 3.8 | ・調査会総会出席、北島多一より「 <u>民族衛生ニ関スル特別委員設置ノ件</u> 」の提案があり、永井、栗本、赤木の賛成で可決され、永井ら委員に指名される。提案の内容は、「 <u>国民ノ量ト質トノ問題、殊ニ質ノ改善ト云フコト……民族素質上ニ不良ノ影響ヲ与フル諸般ノ事情ヲ刈除スルコトモ亦緊要</u> 」 | | |
| 3.27 | ・第25回人口部特別委員会出席（首相官邸） ・芸備医学会東京部会で、永井、佐々木貞夫、野津謙入会の「歓迎の辞」 ・勲二等瑞宝章を受ける | | |
| 7.10 | ・東京帝国大学医学部生理学教室で、民族衛生学会創立のための最初の相談会。主席者は永井のほか、古屋芳雄、八木秀二と芦田均。 | | |
| 11.26 | ・保健衛生調査会総会に主席 | | |
| 11.30 | ・日本民族衛生学会発会式（日比谷公園市政講堂）。理事長に就任、挨拶。発会式記念講演「 <u>優生学と人生の樹直し</u> 」を講演 ※常務理事：古屋芳雄 田宮猛雄 斎藤茂三郎 理事：石川千代松 市川源三 三宅鉦一 三宅驥一ほか12名 | | |

| | | | |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------|
| <p>1931. 3. 23 4 5 7 7. 22 7. 27 9. 5 10. 11 12. 10 (昭和6)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・民族衛生学会、機関紙『民族衛生』を創刊 ・東京帝国大学評議員となる ・歯科試験委員となる ・警視庁東京府市の三団体主催の健康習慣で特別講演 ・ロスウエル・ヒル・ジョンソン（米国ピッツバーグ大学教授）来日、優生学宣伝のため日本全国講演。東大生理学教室にも来校、永井と会見 ・保健衛生調査会、民族衛生に関する特別委員会第4回委員会に出席（内務省会議室）、永井は、「滅種法(Sterilization) 二関スル海外文化国ノ現況、滅種ノ身体並精神両方面ニ及ボス影響、滅種ヲ必要トスル社会上ノ理由、滅種ニ対スル非難等ニツキ講話」をした ・保健衛生調査会、衛生思想普及に関する特別委員会に出席 ・ジョンソンの帰国を横浜に見送り ・日本民族衛生学会第1回学術大会（東大医学部第1号館大講堂）開催。（来会者約300名中数十名は大学生及女子大学生）で、永井は、「断種法の過去及び現在」と題して特別講演。「劣種の繁殖」を軽減する手段のうち「断種法 Sterilization が最も優越せる方法」であるとして、「民族の将来に適切なる該法案の制定の一日も速かならんことを望む」と、断種法の制定を主張。 ・警視庁、東京府市の三団体主催の健康習慣で、特別講演 ・保健衛生調査会、民族衛生に関する特別委員会第6回委員会に出席。三宅秀、精神病の遺伝に関し、「断種法と精神病学との関係」などを述べる ・昭和7年度医師試験委員になる <p>※「人口問題研究国際大会会長ギーニ教授より永井理事長宛書簡二通」</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・「民族衛生の使命」『民族衛生』1-1 ・「民族衛生の使命」『民族衛生』1-3 | |
| <p>1932 4. 15 9 末 10. 29 10. 30 11. 2 11. 20 11: 21</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・芸備医学会の会長になる ※芸備医学会：明治29年創立、初代会長：呉秀三 ・愛知県方面委員総会で講演 ・北海道帝国大学、京城帝国大学での講演 ・民族衛生学会の大分支部発会式（大分市公会堂）で、「精神と遺伝」、約3時間に及ぶ講演 ・大分県医師会総会（大分市県会議事堂）で、特別講演 ・民族衛生学会、大阪市中ノ島会館で講演会、「精神と遺伝」を演説 ・民族衛生学会、第2回学術大会（東大医学部新館大講堂）で挨拶、「民族の混血に就て」を講演 ・人口問題研究会（東京會館）の発起人会で、民間側委員11名のひとりになる | <ul style="list-style-type: none"> ・「民族衛生学上より観たる母と子」『婦人之友』 ・「民族優生学上から観た血族結婚」『婦人公論』 | <ul style="list-style-type: none"> ・『日本生理学文献』日本生理学文献調査会 |

| | | | |
|---------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|--------------------------------|
| 1933. 1. 7 (昭和8) | ・保健衛生調査会衛生思想普及に関する特別委員会、永井の「衛生読本」第一篇「生命と自然」が執筆終了の報告、小冊子「優生学の話」は未稿 | ・「家族・民族及人類を語る」『婦人之友』 | ・4 東京市結婚相談所開始（茅場町の市営食堂の二階） |
| 2 | ・芸備鐵門会を再興 | ・「民族衛生より観たる結核、性病及び精神病」『社会事業』17-2 | |
| 3. 11 | ・民族衛生学会の支部設立のため名古屋で講演 | ・『自然観より人生観へ』 | |
| 3. 26 | ・呉秀三の一周忌追悼会出席、田代義徳も出席（神田東京医師会館） | | |
| 4. 21 | ・芸備医学会と芸備鐵門会、合同会合 | | |
| 5. 6 | ・民族衛生学会の広島支部発会式（広島市医師会館）で、「結婚と民族衛生」を記念講演。「荒川代議士など臨席…広島女専、その他女性が多数来会して人目を引いた」 | | |
| 5. 7 | ・芸備医学会第37年総会で、会長として式辞を述べ数日滞り後帰京（広島医師会館） | | |
| 5. 10 | ・民族衛生学会の愛知支部発会式（名古屋市議事堂）で、「民族衛生上より見たる結婚」を講演。永井の講演により優生学的断種運動を開始する必要性を感じさせ、名古屋支部設立を決意 | | |
| 5. 26 | ・「著者（ボルデイレフ）より永井博士への書簡」 | | |
| 6. 20 | ・民族衛生学会、優生結婚相談所の開設（白木屋の二階） 「開所とともに…来るもの多数あり…盛況にある」 | | |
| 7. 中 | ・永井の四女慶子、疫痢で危篤状態になるが快復する | | |
| 7 | ・芸備医学会第37年総会で、式辞を述べる（広島医師会館） | | |
| 9. 5 | ・三女多寿子、突如蟲様突起炎に罹り手術、経過は良好 | | |
| 9. 30 | ・芸備医学会役員会（『芸備医事』編集会を兼ねる）に出席、（東洋ビル4階中山文化研究所） | | ・ナチ断種法制定 |
| 10. 6 | ・芸備鐵門会10月例会に出席（帝大山上御殿） | | |
| 10. 28 | ・日本学術大会通俗講演会で「精神の遺伝」を講演（広島高等工業学校講堂） | | |
| 11. 11 | ・民族衛生学会、結婚衛生強調日で、「配偶者選択の標準」を講演（赤十字博物館講堂） | | |
| 11. 14-12. 17 | ・民族衛生学会、日本赤十字社と共済で、結婚衛生展覧会開催（芝公園赤十字博物館） ・民族衛生学会、アイヌの民族生物学的研究開始。永井、台湾から帰国後北海道行き予定 ・民族衛生学会、映画「結婚十字街」を製作 ・永井の「結婚の衛生と配偶者の選択を」『民族衛生叢書第1巻』として刊行 | | |
| 12. 4 | ・芸備鐵門会第5回例会で、12月3日に台湾から帰国した永井の「台湾土産話」に「大和民族の南方に発展すべき根拠としての台湾の重大なる意義に鑑み感銘深きものあり」（帝大山上会議） | | |
| 1934. 1. 31 | ・芸備医学会東京部会1月例会で、「台湾旅行雑感」を2時間に互り話す（東洋ビル地階レストランつくば） | ・『結婚読本』 | ・荒川五郎ら「民族優生保護法案」を第65議会に提出→審議未了 |
| 4. 2 | ・民族衛生学会、第3回学術会議（東大工学部新館）は、第9回日本医学会の第12分科会として開催、開会の辞と「断種法の反対に反対する」を講演。これは、同年二月に民族衛生学会名古屋支部で開かれたナチス断種法批判座談会の席で、名古屋控訴院長、弁護士、医学博士らの断種法に対する批判意見に対し反論したもので、永井 | ・『科学の今昔』 | |
| -3 | | ・「結婚と人性」『赤十字博物館報』12 | |
| | | ・「斯くして民族は滅び行く」『現代』創刊号 | |

| | | | |
|----------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------|--|
| (昭和9) | は、「国家が、其の絶大の権力によつて、国民の生活基準を示し、個人の我利勝手を抑圧して、民衆の社会生活をして、安寧幸福ならしめんが為に……法律の前には、国家社会が第一義であり、個人は第二儀的存在であらねばならない。 <u>断種手術は、恰も種痘の如く、強制さるべきもの……被手術者に取つて、多少の犠牲を余儀なくされる場合でも、民衆の永遠の寿命の為に、社会大衆の福祉のために、国家が法令を制定し、審議機関を設置して、慎重なる態度の下に之を励行すべき</u> 」であると反論している。 | ・「断種法に対する反対の反対」『民族衛生』3-4・5 ・「『民族衛生』の使命」『民族衛生』4-1 | |
| 5. 25 | ・芸備医学会、芸備鐵門会合同の卒業生、新入生の歓送迎会開催。永井は歓送迎の辞として「日本の精神を最も深く理解しているラフカジョ・ハーン」について語り、「語学に於ける日本精神にも貴いものある事を強調」（帝大山上御殿） | | |
| 5. 30 | ・民族衛生学会の断種法定小委員会（晩翠軒）が断種法案を起草し、昨年の議会に提出予定だったが、政府案として提出するほうが実現可能ということで、八木逸郎代議士を介して内務省衛生局長らと会合を持った | | |
| 7. 1 | ・「ガスネー氏から永井理事長に来簡」 | | |
| 7. 11~29 | ・民族衛生学会のアイヌ調査会、第1回調査開始（日高國沙流郡平取村） | | |
| 9. 28 | ・芸備医学会、芸備鐵門会合同の9月例会で、永井は日本精神を説いて日本民族の起源におよび日本民族の祖先たる『アイヌ』人に就いて詳述する（中山文化研究所） | | |
| 9. 29 | ・慈恵会医科大学の広島県出身学生25.6名が、芸備医学会に合流、入会し、その発会式に「永井先生も痛く御満足の様子で、『若き命を寿かむ』との書を戴き五十銭の料理にうまいとの賛辞を呈された」（芝区御成門戌辰館） | | |
| 9. 27-12. 5 | ・第1回~4回、民族衛生学会の東京支部例会 | | |
| 10. 19 | ・民族衛生学会の大阪支部発会式（中ノ島朝日会館）で、「民族衛生の使命」を講演 | | |
| 10. 21 | ・民族衛生学会の福岡支部発会式（福岡市記念会館）で、式辞、「民族衛生の使命」を講演 | | |
| 10. 22 | ・民族衛生学会の熊本支部発会式（偕行社）で、「遺伝と教育」を講演 | | |
| 10. 25 | ・台湾各地に出張中のところ帰京、住所が町名変更になり中野区大和町70 | | |
| 10. 26 | | | |
| 11. 7 | ・「コルラード・ギニ氏より永井理事長への書簡」 | | |
| 11. 11 | ・「L. T. リード氏より永井理事長への書簡」 | | |
| 11. 22, 12. 21 | ・民族衛生学会の第2回結婚衛生強調会の夕べ（時事新報社）で挨拶 | | |
| 12. 8 | ・保健衛生調査会の民族衛生に関する特別委員会は、内務省会議室 | | |
| 12. 20 | で、優生法案を審議 | | |
| 12. 27 | ・東京帝国大学医学部教授会出席 ・東京帝国大学医学部臨時教授会で、東大医学部長に当選 ・長興又郎の後任として東京帝国大学医学部長になる | | |

| | | | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|
| <p>1935 . 1 . 30 (昭和10)</p> <p>2 . 9</p> <p>2 . 9</p> <p>2 . 12</p> <p>2 . 27</p> <p>2 . 28</p> <p>4 . 1-2</p> <p>5 . 9</p> <p>5 . 10</p> <p>7 . 10</p> <p>7 . 29</p> <p>9 . 27</p> <p>10 . 11-13</p> <p>10 . 19</p> <p>12 . 7</p> | <p>・永井の医学部長就任の祝賀を兼ね、芸備医学会東京部会新年会開催「近年稀に見る盛会」(上野池之端雨月荘)</p> <p>・東京歯科広島県人会の送別会と永井の祝賀会(内幸町レインボーグリル)</p> <p>・石川千代松の葬儀で弔意</p> <p>・民族衛生学会の東京支部第5回例会(法政大学特別講堂)</p> <p>・芸備鐵門会2月例会に出席(山上御殿)</p> <p>・芸備医学会東京部会2月例会で「医学歴史の回顧」を講演(中山文化研究所)</p> <p>・民族衛生学会、第4回学術大会(大阪帝国大学医学部衛生学教室第一講堂)で、「日高平取アイヌの生理学的調査」の講演と閉会の辞</p> <p>・民族衛生学会、日本優生結婚普及会」の準備として発起人会(白木屋)を開く</p> <p>・5月10日開催予定の総会と記念会に就いての具体案協議(中山文化研究所)</p> <p>・東京帝国大学医学部講演会の講習科目の発表と申し込み募集、永井の科目は、「疾病の遺伝」</p> <p>・芸備医学会総会、四十周年記念会開催、永井の「式辞」</p> <p>・日本民族衛生協会に改組</p> <p>・「アイヌ」研究のため、北海道に向け出発、8月25日帰京</p> <p>・第9回から11回の民族衛生協会の東京支部例会</p> <p>・九州医学会で「人類遺伝学最近の進歩」を特別講演(鹿児島市)</p> <p>・民族衛生協会の石川支部発会式(金沢氏教育会館)で記念講演</p> <p>・民族衛生協会の付属団体として、日本優生結婚普及会発会式と結婚衛生強調の集い(九段軍人会館)</p> <p>会長：永井 副会長：竹内茂代、永井花江(永井の妻)</p> <p>・「ハリー H. ラウリン氏より永井理事長への書簡」</p> <p>※「永井先生断片」根城書夜</p> | <p>・「優生学的に見た結婚と遺伝」『婦人之友』</p> <p>・「優生学の必要と世界の優生運動」『婦人公論』</p> | <p>・2 荒川五郎ら「民族優生保護法案」を第67議会に提出→審議未了</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|

| | | | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1936</p> <p>1</p> <p>1. 15</p> <p>4. 9-11</p> <p>5. 14</p> <p>7. 6-7</p> <p>7. 11-末</p> <p>8. 8-9</p> <p>8. 26</p> <p>10. 13</p> <p>10. 31</p> <p>11. 11</p> <p>11. 13</p> <p>11. 20</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 体育運動審議会委員となる ・ 民族衛生協会、優生学団体国際連盟への加入具体化 ・ 放送局の依頼により「優生学上より見たる日本民族の優秀性」を講演放送（AK） ・ 禁酒教育講習会（神田 YMCA 会館、禁酒禁煙法運動中央委員会主宰）で、「生理学上より見たる酒」を講演 ・ 京都医師会主催特別講演会で、「衛生学上より見たる断種」を講演 ・ 民族衛生協会、第 5 回学術大会（北海道帝大医学部細胞学教室第一講堂）は、日本衛生連合会第 8 回大会と共催。永井、開会の辞とアイヌ調査報告 ・ 日本学術振興会（1932. 8. 20 設立）第 8 委員長として、樺太阿寒地方アイヌの各部落で調査 ・ 青島（チンタオ）病院で開催の第 1 回同仁会医学大会に出席 ・ 北支と満州の視察を終え帰京 ・ 国民体育増進会議（水交社、日本学術振興会主催）で、国民の体力増進を計る問題に関し対策を協議。優生、体育、食糧、衣料の四分科会で、永井は優生を担当 ・ 生理学総会に出席のため出発し、帰途、大阪で大阪民族衛生学会に出席し講演 ・ 芸備医学会東京部会 10 月例会で、永井の満支旅行談あり（中山文化研究所） ・ 日本優生結婚普及会講演会、映画会（ドイツ映画「禍たる羞恥」性病もの）開催（九段軍人会館） ・ 永井の還暦祝賀会（日比谷山水楼） ・ 民族衛生協会大阪支部の通俗講演会で「断種法に就て」を講演 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 『道と自然』 ・ 『優生学概論（上）』 ・ 「断種法を急いで実行せよ」『母と子』17-3 ・ 「民族衛生振興の建議」『民族衛生』5-3・4 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 1. 15 「悪質の遺伝病者に子を産ませぬ法律 健全なる日本人を作る 断種法・愈よ議会へ」『読売新聞』「民族衛生学会は語る」永井の写真入 ・ 12. 12 「悪血の泉を断つて護る民族の花園 研究三年、各国の長を取った “断種法” 愈よ議会へ」『読売新聞』 「悪質者の根を絶やして民族の正しき血を護れ」の久しい叫びを “断種法” として実践に移すべく日本民族衛生協会（理事長東大医学部長永井潜博士）が中心となり」 |
| <p>1937</p> <p>(昭 12)</p> <p>3. 31</p> <p>4. 13</p> <p>4. 15</p> <p>4. 20</p> <p>5. 8</p> <p>5. 25</p> <p>7. 7</p> <p>10. 12</p> <p>10. 25</p> <p>11. 9</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本学術振興会の中に、国民体力問題調査委員会優生学部委員会が設けられ委員長になる ・ 定年退官 ・ 民族衛生協会、第 6 回学術大会（東北帝大医学部衛生学教室）で開会の辞、「双生児の研究成績から見て」「結婚が遺伝的目標として、極めて重要」と追加 ・ 永井の還暦退職記念会（東京帝国大学医学部第二号館講堂） ・ 「東大医学部を退職するに際して」（退職記念会謝辞） ・ 北平大学名誉教授に推薦され出発 ・ 台北帝国大学医学部長になり、医学部を設置 ・ 北平大学名誉教授に就任 ・ 東京帝国大学名誉教授になる ・ 北京大学で生理学の講義をする ・ 北平大学での任務を終える ・ 北平を出発、12 日ごろ東京着との報 ・ 第 179 回日本小児科学会東京地方会（東大医学部）で演説 ・ 「東京駅発台北帝大医学部に赴任の途に着く、妻、娘 3 人も同道、永住せらるるご予定の由」 ・ 台北帝大教授兼中央研究所技師に被任、医学部長及び附属医学専 | | <ul style="list-style-type: none"> ・ 八木、荒川ら「民族優生保護法案」を第 70 議会に提出→議題にならず |

| | | | |
|------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 11. 13 12. 8 | <p>門部主事事務取扱並に中央研究所衛生部長を命ぜられる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・台湾医学会の会長に就任 ・台北帝大着任の歓迎会が広島県人により行われる（鉄道ホテル） <p>※台湾医学興隆、南方文化開発の使命を持って、台北帝大医学部長、同医学専門部主事、総督府中央研究所衛生部長の要職に就く</p> | | |
| 1938. 1. 19 2. 17 6. 20 7. 1 7月-8月 | <ul style="list-style-type: none"> ・学術振興会会議に出席するため上京、25日に帰湾 ・教科書調査会委員になる ・中華民国河北省に出張 ・北京大学名誉教授に就任 ・二ヶ月間、北京大学で講義 ・北京大学医学院長になり、中国人医師の養成に尽力 | | <ul style="list-style-type: none"> ・1 八木ら「民族優生保護法案」を第73議会に提出→委員会送付 ・1 厚生省設置、予防局中に優生課が設置される。優生課の主幹業務は「民族衛生」、「精神病」、「慢性中毒」、「慢性病」、「花柳病」、「癩」など ・11 優生課、民族衛生研究会設置 ・12 八木ら「民族優生保護法案」を第74議会に提出→委員会送付 |
| 1939 | <ul style="list-style-type: none"> ・台湾帝大の医学部長依願本官を免ぜられる | | |
| 1940. 3末 | <ul style="list-style-type: none"> ・公用で来京、4.12 帰湾 <p>※永井公館住所 北京西城前毛家？五号</p> | | <ul style="list-style-type: none"> ・国民優生法施行 |
| 1942. 7. 26 | <ul style="list-style-type: none"> ・三女多寿子、喘息性狭心症のため逝去（21歳） | | |
| 1945. 8. 30 | <ul style="list-style-type: none"> ・敗戦により自然解職 | | <ul style="list-style-type: none"> ・8 第二次世界大戦終結 |
| 1946 | <ul style="list-style-type: none"> ・引き上げ帰国 | | |
| 1948 11. 14 | <ul style="list-style-type: none"> ・日本性学会設立 ・日本性教育協会設立 ・九州大学医学部講師 | | <ul style="list-style-type: none"> ・国民優生法廃止、優生保護法成立 |
| 1950. 2. 4-5 3. 14 | <ul style="list-style-type: none"> ・広島医学会総会で、「万病一毒」の講演をする ・昭和22年勅令第1号により公職適格と確認される | | |
| 1952 | <ul style="list-style-type: none"> ・日本人口衛生協会設立発起人になる ・人口問題研究会顧問になる | | |
| 1953. 6. 30 | <ul style="list-style-type: none"> ・人口問題研究会人口対策委員会第1回総会に出席 | | |
| 1954. 6 | <ul style="list-style-type: none"> ・「生命に関する十講」をNHKで10回にわたり放送 | | |
| 1955. 11 | <ul style="list-style-type: none"> ・竹原教育会館で講演 | | |
| 1957. 5. 17 S32 81歳 | <ul style="list-style-type: none"> ・脳軟化症で逝去（神奈川県藤沢） | | <ul style="list-style-type: none"> ・6 「広島医学会名誉会頭 永井潜博士逝去」（『広島医学』10-6） |

| | | | |
|-----------|-----------------------------------|--|-------------------------------------------------------|
| | | | ・7 「永井先生追悼号」(『広島医学』10-7) |
| 1962 | | | ・「巻頭語 … 芸備—広島医学会創立65周年 先哲際」(『広島医学』15-2.3) |
| 1963.1 下旬 | ・1903~1906 にドイツ留学中に下宿した家屋に、永井の記念額 | | ・7 「故永井潜先生の記念額 (Gedenktafel)」(『医学のあゆみ』46-1、『広島医学』6-9) |

永井潜年譜作成のための文献リスト

- 「第一章 本会の設立」『保健衛生調査会第一回報告書』1917.5 (1-17)
- 「第二章 委員」『保健衛生調査会第一回報告書』1917.5 (9)
- 「第三回」会議の「議案 保健衛生調査会調査事項」『保健衛生調査会第一回報告書』1917.5 (29-39)
- 「第四節 本会議事要領」『保健衛生調査会第三回報告書』1919.4 (14-29)
- 「第三部会」『保健衛生調査会第四回報告書』1920.4 (17-18)
- 「第四節 本会議事要領」『保健衛生調査会第五回報告書』1921.5 (15)
- 「民族衛生に関する建議」『保健衛生調査会第六回報告書』1922 (23-24)
- 「第一 本年度ヨリ新ニ着手スヘキ事項」『保健衛生調査会第七・八回報告書』1924.4 (10、20-24)
- 「二、衛生思想普及ニ関スル特別委員会」『保健衛生調査会第七・八回報告書』1924.4 (31)
- 「一、衛生思想普及ニ関スル特別委員会」『保健衛生調査会第九回報告書』1925.6 (10-13)
- 「三、花柳病予防ニ関スル特別委員会」『保健衛生調査会第十一回報告書』1927.4 (22)
- 「一、衛生思想普及ニ関スル特別委員会」の「衛生読本ニ関スル件」、「小冊子ニ関スル件」『保健衛生調査会第十一回報告書』1927.4 (16-17)
- 「二、衛生思想普及ニ関スル特別委員会」の「一、衛生読本ニ関スル件」、「小冊子ニ関スル件」『保健衛生調査会第十三回報告書』1929.4 (18)
- 「第三節 総会議事大要」の「民族衛生ニ関スル特別委員設置ノ件」『保健衛生調査会第十四回報告書』1930.4 (9-11)
- 「二、衛生思想普及ニ関スル特別委員会 (小委員会)」『保健衛生調査会第十四回報告書』1930.4 (47)
- 「第三節 総会議事大要」『保健衛生調査会第十五回報告書』1931.4 (11)
- 「第三節 衛生粗相普及ニ関スル特別委員会」『保健衛生調査会第十六回報告書』1932.4 (12)
- 「二、民族衛生ニ関スル特別委員会 第4回」、「第六回」『保健衛生調査会第十六回報告書』1932.4 (14、17)
- 「(別項) 衛生読本編纂ノ件」、「小冊子刊行ノ件」『保健衛生調査会第十七回報告書』1933.4 (22-24)

「優生学について」『医政』3-7 1928.3 (19-37)

「日本医師会第五回総会経過」『医政』3-4 (発行年欠落で不明3-1が1927.9) (5-6)

「日本医師会第七回総会経過」『医政』4-4 1929.1 (20)

「長い間忘れられて居た生理学会組織さる 創立総会には各教授の名論卓説が沢山現れる」『二六新報』1922.7.5 (2)

「けふの医師総会で人間乱造を防げと内務大臣へ勸説 断種、制産の新法律も設けよ」『東京朝日新聞』1928.12.11 (7)

「ナチスの向ふを張つて来議会に“断種法”を出す」『大阪朝日新聞』1933.10.14 (2)

「悪質の遺伝病者に子を産ませぬ法律 健全なる日本人を作る 断種法・愈々議会へ」『読売新聞』1936.1.15 (7)

「悪血の泉を断つて護る民族の花園 画期的な法の産声 研究三年、各国の長をとつた“断種法”愈々議会へ」『読売新聞』1936.12.12 (7)

雑報「日本民族衛生学会の創立」『民族衛生』1-1 1931.3 (94-95)

雑報「発会式並に記念講演会概況」『民族衛生』1-1 1931.3 (95-96)

雑報「会員名簿(第一回)評議員(次第不動)」『民族衛生』1-1 1931-3 (98-101)

雑報「人口問題研究国際大会々長ギーニ教授より永井理事長宛書信二通」『民族衛生』1-2 1931.5 (122-123)

「瑞典国立民族衛生学研究所」『民族衛生』1-2 1931.5

「編輯後記」『民族衛生』1-2 1931.5 (124)

雑報「ジョンソン博士の来朝」『民族衛生』1-3 1931.8 (152)

雑報「ジョンソン博士慰労送別会開催」『民族衛生』1-4 1931.10 (112-113)

雑報「日本民族衛生学会第一回学術大会」『民族衛生』1-4 1931.10 (113-115)

雑報「英国優生学会名誉会長ダーウィンより永井理事長宛書信」『民族衛生』1-5 1932.1 (82-83)

雑報「大阪に於ける日本民族衛生学会講演会」『民族衛生』2-3 1932.11 (105-106)

雑報「大分市に於ける民族衛生学会支部発会式」『民族衛生』1932.11 (106-107)

雑報「日本民族衛生学会総会」、『編輯を終へて』『民族衛生』2-3 1932.11 (107)

雑報「日本民族衛生学会総会」『民族衛生』2-3 1932.11 (107)

雑報「日本民族衛生学会第二回学術大会」『民族衛生』2-4 1933.1 (83)

雑報「人口問題研究会の創立」『民族衛生』2-4 1933.1 (80)

雑報「本会名古屋支部設立運動」、『本会附属結婚相談所開始準備成る』『民族衛生』2-5 1933.4 (110)

雑報「本会附属優生結婚相談所開始」2-6 1933.7 (87-89)

雑報「民族衛生学会広島支部発会式及び記念講演会」『民族衛生』2-6 1933.7 (89)

雑報「結婚衛生展覧会の開催」『民族衛生』3-1 1933.9 (74-75)

雑報「日本民族衛生学会愛知支部発会式並彙報」『民族衛生』3-1 1933.9 (75)

雑報「独逸に実施せらるゝ断種法及び結婚助成法」『民族衛生』3-1 1933.9 (76-77)

雑報「本会附属結婚相談所事業の経過」『民族衛生』3-1 1933.9 (77-78)

雑報「結婚衛生強調日」『民族衛生』3-1 1933.9 (78)

雑報「結婚衛生展覧会の行事概況」『民族衛生』3-2 1933.12 (95-96)

雑報「赤十字博物館講堂に於ける講演」『民族衛生』3-2 1933.12 (96)

雑報「広島支部の結婚衛生講座」、『民族衛生叢書の刊行』、『映画『結婚十字街』製作』『民族衛生』3-2 1933.12 (99)

雑報「アイヌ研究」『民族衛生』3-2 1933.12 (100)

雑報「日本民族衛生学会第三回学術大会々報(第九回日本医学会第十二分科会)」『民族衛生』3-4・5 1934.6 (88-89)

雑報「断種法協議会」『民族衛生』3-4・5 1934.6 (89)
 雑報「アイヌ調査会の一回調査」『民族衛生』3-6 1934.9 (101-102)
 雑報「ガスナー氏より永井理事長へ来翰」『民族衛生』3-6 1934.9 (102頁)
 永井潜「ボルダイレフ教授『恋愛と家庭』掲載に際して」『民族衛生』4-1 1934.12 (4)
 雑報「優生委員会」『民族衛生』4-1 1934.12 (75)
 雑報「大阪支部発会式記念講演会」『民族衛生』4-1 1934.12 (79-80)
 雑報「日本民族衛生学会福岡支部発会式」「民族衛生の使命」『民族衛生』4-1 1934.12 (80-83)
 雑報「熊本支部発会式及記念講演会」『民族衛生』4-1 1934.12 (83)
 雑報「日本民族衛生学会第一回東京支部例会」、「第二回東京支部例会」、「第三回東京支部例会」、「第四回東京支部例会」『民族衛生』4-1 1934.12 (83-84)
 雑報「本会主催第二回結婚衛生強調の集い」『民族衛生』4-1 1934.12 (84)
 「L. T. リード氏より永井理事長への書翰」『民族衛生』4-2 1935.3 (47)
 雑報「石川千代松博士の逝去」『民族衛生』4-2 1935.3 (78)
 雑報「コルラード・ギニ氏より永井理事長への書翰」『民族衛生』4-2 1935.3 (81)
 雑報「日本民族衛生学会第四回学術大会開催」『民族衛生』4-3・4 1935.7 (157)
 雑報「本会記事」、「日本優生結婚衛生普及会の設立」、「第三回結婚衛生強調の集い」、「東京支部例会」『民族衛生』4-5・6 1935.12 (188)
 雑報「日本民族衛生協会の優生学団体国際連盟への加入」『民族衛生』5-1・2 1936.4 (245)
 雑報「日本民族衛生協会石川支部誕生」『民族衛生』5-1・2 1936.4 (245-248)
 雑報「国民体力増進会議」『民族衛生』5-5・6 1936.12 (113-114)
 雑報「日本民族衛生協会第五回学術大会会報」『民族衛生』5-5・6 1936.12 (114-115)
 雑報「本会理事長永井潜博士北平大学名誉教授に就任」『民族衛生』6-2・3 1937.7 (171)
 雑報「民族衛生協会学術大会四月十三日仙台で開催」『民族衛生』6-2・3 1937.7 (173)
 雑報「永井本会理事長」『民族衛生』6-2・3 1937.7 (174)

優生だより「日本優生結婚普及会発会式の景況」「永井氏の優生問題放送」『優生』1-1 1936.3 (26)
 日本優生結婚普及会の第四回結婚衛生講演会で永井潜の「挨拶」『優生』1-10 1936.12 (4-9)
 「断種法制定への機運」『優生』2-12 1938.2 (17-18)

「動静報告」『芸備医事』28-7 1923.7 (434)
 雑報「芸備医学会第三十年総会」『芸備医事』30-5 1925.5 (132-134)
 雑報「母性及小児保健講習会」『芸備医事』32-1 1927.1 (28-29)
 雑報「芸備医学会東京部会例会記事」『芸備医事』33-10 1928.10 (263)
 「動静報告」『芸備医事』34-5 1929.5 (118)
 雑報「芸備医学会東京部会」『芸備医事』34-6 1929.6 (143)
 永井潜「欧米見聞所感〔上〕」『芸備医事』35-4 1930.4 (91-94)
 永井潜「欧米見聞所感〔下〕」『芸備医事』35-5 1930.5 (120-124)
 「動静報告」『芸備医事』34-8 1929.8 (185)
 「動静報告」『芸備医事』35-1 1930.1 (27)
 雑報「東京部会一月例会」『芸備医事』35-3 1930.3 (86-87)
 永井潜「歓迎の辞」『芸備医事』35-7 1930.7 (192-195)
 「動静報告」『芸備医事』35-7 1930.7 (198)
 「動静報告」『芸備医事』37-12 1932.12 (260)
 雑報「民族衛生学会支部発会式」『芸備医事』38-4 1933-4 (117)
 雑報「芸備医学会総会」『芸備医事』38-4 1933.4 (118-119)
 雑報「芸備医学会並に芸備鐵門会例会」『芸備医事』38-4 1933.4 (119-120)

- 雑報「故呉会長追悼会」『芸備医事』38-4 1933.4 (120-121)
 「動静報告」『芸備医事』38-4 1933.4 (121)
 雑報「日本民族衛生学会附属優生結婚相談所」『芸備医事』38-7 1933.7 (167)
 永井潜「第三十七回芸備医学会総会式辞」『芸備医事』38-8 1933.8 (177-181)
 「動静報告」『芸備医事』38-9 1933.9 (220)
 雑報「芸備鐵門会十月例会」『芸備医事』38-10 1933.10 (236)
 「動静報告」『芸備医事』38-11 1933.11 (253)
 雑報「芸備鐵門会十二月例会記事」『芸備医事』38-12 1933.12 (273)
 雑報「東京部会一月例会」『芸備医事』39-2 1934.2 (41)
 雑報「芸備医学会、芸備鐵門会」『芸備医事』39-7 1934.7 (138)
 雑報「芸備医学会、芸備鐵門会九月例会」『芸備医事』39-10 1934.10 (204-205)
 雑報「慈大芸備医学会発会式記録」『芸備医事』39-10 1934.10 (205-208)
 「動静報告」『芸備医事』40-1 1935.1 (13)
 雑報「東京部会新年宴会兼永井博士東大医学部長就任祝賀会」『芸備医事』40-2 1935.2 (30-31)
 雑報「東京歯科医専広島賢人会、永井先生医学部長就任祝賀会並びに昭和十年卒業生送別会」『芸備医事』40-2 1935.2 (31-32)
 雑報「芸備鐵門会二月例会」『芸備医事』40-3 1935.3 (49)
 雑報「東京部会二月例会」『芸備医事』40-3 1935.3 (49-50)
 雑報「幹事会」『芸備医事』40-4 1935.4 (73)
 雑報「東京帝国大学医学部第二十回医学講習会」『芸備医事』40-5 1935.5 (95-96)
 雑報「総会及創立四十周年記念会」『芸備医事』40-6 1935.6 (126)
 「動静報告」『芸備医事』40-9 1935.9 (198)
 「動静報告」『芸備医事』40-11 1935.11 (244)
 根城晝夜「永井潜先生断片」『芸備医事』40-12 1935.12 (251-254)
 雑報「東京部会十月例会」『芸備医事』41-11・12 1936.11,12 (223)
 雑報「永井会長還暦祝賀会」『芸備医事』41-11・12 1936.11,12 (223-224)
 永井潜「東大医学部を退職するに際して」『芸備医事』42-5 1937-5 (105-109)
 雑報「永井教授還暦退職記念会」『芸備医事』42-5 1937.5 (109-111)
 「動静報告」『芸備医事』42-5 1937.5 (112)
 「動静報告」『芸備医事』42-11・12 1937.12 (213)
 『芸備医事』43-1 1938.1 「会報」(11)
 雑報「永井会長歓迎会」『芸備医事』43-2 1938.2 (29-30)
 「動静報告」『芸備医事』43-2 1938.2 (30)
 『芸備医事』43-6 1938.6 「会報」(30)
 「動静報告」『芸備医事』45-4 1940.4 (72)
- 「広島医学会名誉会頭 永井潜博士逝去」『広島医学』10-6 1957.6 (51)
 「永井先生追悼号」『広島医学』10-7 1957.7 (1-16)
 「巻頭語」『広島医学』15-2・3 1962.2 (3-4)
 「故永井先生の記念額 (Gedenktafel)」『広島医学』16-9 1963.9 (95-97)
- 「大澤先生追悼会演説」『鐵門』6 1927.10 (23)
- 「民族の血を科学的に浄化せんと断種法建議案今議会にいよいよ提出」『優生学』117 1933.11 (2)
 「民族衛生協会金沢支部設立」『優生学』141 1935.11 (24)
 「断種法案愈よ議会へ」『優生学』144 1936.2 (24)

- 「永井教授の講演」『優生学』135 1936.5 (24)
「民族衛生協会講演会」『優生学』153 1936.11 (26)
- 「芸備医学会」『広島衛生医事月報』256 1920.4 (160-161)
永井潜「戦後の人種衛生」『広島衛生医事月報』257 1920.5 (194-199)
永井潜「戦後の人種衛生(承前)」『広島衛生医事月報』258 1920.6 (224-231)
- 「会員動静」『台湾医学会雑誌』392 1937.11 (164)
「会告」『台湾医学会雑誌』393 1937.12 (186)
「会員動静」『台湾医学会雑誌』395 1938.2 (145)
「本会第33回総会記事」『台湾医学会雑誌』405 1938.12 (108)
「会員動静」『台湾医学会雑誌』414 1939.9 (146)
「会告」『台湾医学会雑誌』415 1939.10 (117)
- 芦田均「新時代の厚生行政」『日本医事新報』1175 1946.1 (2)
座談会「永井先生を偲ぶ」『日本医事新報』1792 1958.8 (23-50)
- 「故永井先生の記念額(Gedenktafel)」『医学のあゆみ』46-1 1963.7 (26-29)
- 「民族衛生振興の建議」『東京医事新誌』60-2994 1936.8 (54)
永井潜「北支旅行談(一)」『東京医事新誌』60-3000 1936.9 (113-120)
永井潜「北支旅行談(二)」『東京医事新誌』60-3001 1936.11 (41-44)
会報「第百七十九回日本小児科学会東京地方会演説要旨」の「北平滞在中の所見」『東京医事新誌』60-3055 1937.12 (30-32)
「春風秋雨月沈原(欧米旅日記より)」『東京医事新誌』70-1 1953.1 (41-54)
- 「(6) 第十一回人口部特別委員会」『人口食糧問題調査会人口部答申説明』(『性と生殖の人権問題資料集成』第17巻 不二出版 2000.9 (238))
「(10) 第十五回人口部特別委員会」『人口食糧問題調査会人口部答申説明』(『性と生殖の人権問題資料集成』第17巻 不二出版 2000.9 (240-241))
「(15) 小委員会」『人口食糧問題調査会人口部答申説明』(『性と生殖の人権問題資料集成』第17巻 不二出版 2000.9 (242-243))
「(16) 小委員会」『人口食糧問題調査会人口部答申説明』(『性と生殖の人権問題資料集成』第17巻 不二出版 2000.9 (243))
「人口問題研究会人口対策委員会第1回総会議事速記録」『性と生殖の人権問題資料集成』第26巻 不二出版 2002.12 (240-252)
- 今井清一、高橋正衛『現代史資料4 国家主義運動1』みすず書房 1963.5 (460)
中村政雄『日本女子大学校四十年史』日本女子大学校 1942.4 (238)
- 岡田靖雄「永井潜—断種法上の人びと(その三)」『日本医史学雑誌』第46巻第4号 2000 (672-675)
鈴木善次『日本の優生学』三共出版 1983.11
大林道子「産児調節運動と優生思想」『日本婦人問題懇話会会報』46 1987.8 (2-26)
小熊英二『単一民族神話の起源』新曜社 1995.7
加藤秀一『<恋愛結婚>は何をもたらしたか?』ちくま新書 2004.8
高木雅史「1920~30年代における優生学的能力観—永井潜および日本民族衛生学会(協会)の見解

- を中心に―』『名古屋大学教育学部紀要』38, 1992.3 (161-171)
- 野間伸次『健全なる大日本帝国 ―国民優生法制定をめぐって―』『ヒストリア』第120号 1988.9 (43-65)
- 平田勝政『日本における優生学の障害者教育・福祉への影響とその克服過程に関する研究』2005.5
平成14~16年度科学研究費・補助金基盤研究(C)(2) 研究成果報告書
- 藤野豊『日本ファシズムと優生思想』かもがわ出版 1998.4
- 松原洋子『日本における優生政策の形成 ―国民優生法と優生保護法の成立過程の検討』 1998.3
お茶の水女子大学人間文化研究科 博士論文
- 横山利明『日本進化思想史 ―人間を捜し求めた人々の記録(二)』新水社 2003.4
- 米本昌平 松原洋子 櫛島次郎 市野川容孝『優生学と人間社会』講談社 2000.7
- 日本生理学教室史編集委員会編『日本生理学教室史(上巻)』日本生理学会 1983.4
- 日本科学史学会編『日本科学技術史大系・全25巻』第一法規出版 1967.3
- 『近代日本哲学思想家辞典』東京書籍 1982.9
- 『新潮日本人名辞典』新潮社 1991.3
- 『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会 2002.5
- 『日本人名大事典』平凡社 1986.3
- 佐々木敏二、小田切明憲編「若い男の性生活―現代の日本人に就いて調べた統計の研究―」『山本宣治全集』第一巻 汐文社 1979.2 (206-289)
- 筑波常治「山本宣治と永井潜」『文芸春秋』44巻1号 1996.1 (308-314)
- 小田切明憲「解説」『山本宣治全集 第二巻』小田切明憲 1979.3 汐文社 (508-520)
- 山本直英『性のタブーに挑んだ男たち』1994.7 かもがわ出版

I-3 ② 永井潜著作リスト

備考欄の記号㊦は優生思想、☆は花柳病の言説を現している

| No | 書名・論文名 | 誌名・出版社 | 頁 | 発行年 | 言説・備考 |
|----|----------------------|------------|---------|----------|------------------------|
| 1 | 『医学ト哲学』 | 吐鳳堂 | | 1908. 10 | ※大澤謙二の在職 25 年記念の出版書 |
| 2 | 「冬眠動物の代謝生理」 | 『医学中央雑誌』7 | | | |
| | | -1 | 1-22 | 1909. 6 | |
| | | 2 | 13-29 | 7 | |
| | | 3 | 1-13 | 8 | |
| | | 4 | 10-31 | 9 | |
| | | 5 | 15-32 | 10 | |
| | | 7 | 13-23 | 12 | |
| | | 8 | 44-84 | 1910. 1 | |
| | 「冬眠動物の代謝生理」 上 | 『教育時論』 931 | 22-23 | 1911. 2 | ※医学博士号取得 |
| | 下 | 932 | 23-25 | 3 | |
| 3 | 「一代形質の変化は果たして遺伝せざるか」 | 『普通教育』 3-1 | | 1912. 1 | |
| 4 | 『生命論』 | 洛陽堂 | | 1913. 2 | 人種改良学と記述 |
| 5 | 「手と人生」 | 『第三帝国』 1 | 50 | 1913. 10 | |
| 6 | 『健康論』 | 東亜堂書房 | | 1913 | |
| 7 | 「結婚と健康診察 (二)」 解題 1 | 『新真婦人』 | 22-23 | 1914. 3 | 人種改善学と記述 ※第一次世界大戦勃発 |
| 8 | 「人種改善学の理論と実際」 解題 2 | 『日本及日本人』 | | | 人種改善と記述 |
| | | 646 | 215-223 | 1915. 1. | |
| | | 647 | 37-40 | 1 | |
| | (三) | 648 | 47-59 | 1. 1 | |
| | (四) | 650 | 39-44 | 5 | |
| 9 | 『生命論』 第 3 版 (改版) | 洛陽堂 | | | 人種改善学と記述 |
| 10 | 「人種改善学の理論」 解題 2 | 『人性』 11-5 | 149-156 | 2. 1 | 生殖防止ノ手術ニ 関スル法律と記述 |
| | (二) | 6 | 189-194 | | |
| | (三) | 7 | 235-249 | 3. 1 | |
| | (四) | 9 | 309-315 | 1915. 2 | |
| 11 | 「青年の厭世自殺に就いて」 | 『第三帝国』 47 | 9 | 1915. 6 | ㊦ ※大澤の後任で教授 になる |
| | | | | 7 | |
| | | | | 8 | |
| | | | | 10 | |
| | | | | 1915. 7 | |
| 12 | 「内分泌と精神作用」 | 『新理想主義』 58 | 66-67 | 1916. 1 | |

| | | | | | |
|----|--------------------------------------------|--------------------------------|------------------------------|-----------------------------------|----------------------------|
| 13 | 「良い子供を産むために (一)」 解題 3 (二) (三) (四) | 『婦人公論』 | 5-9 8-10 13-16 7-11 | 1916. 2 3 4 5 | 人種改善学と記述 |
| 14 | 『生物学と哲学との境』 解題 2 | 洛陽堂 | | 916. 4 | 人種改善学と記述 |
| 15 | 「生物学上より見たる貞潔の徳」 | 『婦人週報』2-24 | 3-4 | 1916. 6 | |
| 16 | 『人性論』 | 実業之日本社 | | 1916. 7 | 輸精管の切断法、 輸卵管の切断法と 記述 |
| 17 | 「大切なる種性血統」 | 『婦人衛生雑誌』 324 | 8-14 | 1916. 11 | ㊦ ※保健衛生調査会で |
| 18 | 「文明の重荷を負ひ得る民族」 | 『婦人週報』2-49 | 3-5 | 1916. 12 | 「ユーゼニックス」 |
| 19 | 『新編生理衛生教科書』 | 洛陽堂 | | 1916 | 発言 |
| 20 | 「乳児の保護」 解題 3 (その二) (その三) | 『婦人公論』 | 46-48 31-35 28-35 | 1917. 1 2 3 | 人種改善学と記述 |
| 21 | 「人種問題と国民衛生」 解題 4 (2) | 『廓清』7-2 3 | 18-22 6-9 | 1917. 2 3 | ㊦ |
| 22 | 「科学的人生観と哲学的人生観」 | 『第三帝国』84 | 38-39 | 1917. 5 | ㊦ |
| 23 | 「民族衛生より観たる結婚の改良」 解題 3 | 『婦人公論』 | 50-60 | 1917. 10 | 人種改善学と記述 |
| 24 | 「遺伝学上より観たる感化事業」 | 『救済研究』5-11 | 114-116 | 1917. 11 | ㊦ |
| 25 | 「遺伝と保育」 | 『婦人と子供』17 -12 | | 1917. 12 | |
| 26 | 「病と遺伝」 | 『日本学校衛生』6 -1 | 53-55 | 1918. 1 | |
| 27 | 「戦争と婦人」 | 『婦人週報』4-1 | 3-5 | 1918. 1 | |
| 28 | 「悪質者の遺伝 (上)」 (下) | 『児童』2-1 2 | | 1918. 1 2 | |
| 29 | 「戦争と人種衛生」 | 『向上』12-3 | | 1918. 3 | |
| 30 | 「生理学的立場から」 解題 3 | 『婦人公論』 | 38-44 | 1918. 4 | ㊦ |
| 31 | 「遺伝学上より観たる感化事業」 | 『社会と救済』2 -2 | 5-18 | 1918. 5 | 人種改良学と記述 |
| 32 | 「優種学上より観たる遺伝と環境」 解題 | 『廓清』8-9・10 | 13-16 | 1918. 10 | 人種改善と記述 |
| 33 | 4 「臨床家ニ必要ナル血圧ノ知見纂奪」 | 『芸備医事』269, 270, 271 | | 1918. 10 , 11, 12 | ※第一次世界大戦休 戦 |
| 34 | 「栄養と食糧経済 (一)」 (二) (三) (四) | 『家庭週報』500 502 503 504 | 4 5 4 4 | 1919. 1 2. 5 2. 14 2. 21 | |

| | | | | | |
|----|------------------------------|-------------------------|---------------|----------------|-------------------|
| 35 | (五) 「民族の衰亡」 | 505 『監獄協会雑誌』 31-2 | 6 5-27 | 2.28 1919.2 | 悪種を剪滅、生殖 不能と記述 |
| 36 | (承前) 「花柳病者の結婚を禁止せよ」 解題3 | 31-3 『婦人公論』 | 8-26 33-34 | 3 1919.7 | ㊦ |
| 37 | 「人類の再生と民族の盛衰」 | 『婦人衛生雑誌』 348 | 1-37 | 1919.7 | 悪種を剪滅、生殖 不能と記述 |
| 38 | 「筋肉と神経」 | 『変態心理』22 | 154 | 1919.8 | |
| 39 | 「満蒙を我倉廩たらしめよ」 | 『斯民』14-10 | 28-30 | 1919.10 | |
| 40 | 「戦争と人種衛生 (一)」 | 『日本之医界』306 | 4 | 1919.10 | ㊦ |
| 41 | (二) 「青年男女の性的生活 (一)」 | 307 『婦女新聞』1019 | 7 4 | 11 1919.11 | ㊦ |
| | (二) | 1020 | 4 | 12.7 | |
| | (三) | 1021 | 4 | 12.14 | |
| | (四) | 1022 | 4 | 12.21 | |
| | (五) | 1023 | 3 | 12.28 | |
| | (六) | 1026 | 4 | 1920.1 | |
| | (七) | 1027 | 4 | 1.25 | |
| | (八) | 1028 | 4 | 2.1 | |
| 42 | 『保健衛生一日二食論』 | 文会堂書店 | | 1919 | ※保健衛生調査会で |
| 43 | 『歯科生理学』贈呈第3版 | 歯科学報社 | | 1919 | 花柳病担当委員にな る |
| 44 | 「最近の大戦争と人種衛生」 | 『東洋学芸雑誌』 462 | 1-7 | 1920.3 | ㊦ |
| 45 | 「優生学講和」 解題3 | 『婦人公論』 | 105-119 | 1920.4 | ㊦ |
| 46 | 「運動生理の理論と其適用」 | 『体育学理講演 集』1 | | 1920.4 | |
| 47 | 「運動と栄養」 | 2 | | 1920.10 | |
| 48 | 「女子体育に就て」 | 3 | | 1921.3 | |
| 49 | 「生理学上より見たる児童教育」 | 4 | | 1922.3 | |
| 50 | 『青年男女と性的生活』 | 婦女新聞社 | | 1920.5 | ㊦ |
| 51 | 「戦後の人種衛生」 | 『広島衛生医事月 報』257 | 194-199 | 1920.5 | ㊦ |
| | (承前) | 258 | 224-231 | 6 | |
| 52 | 「バースコントロールをコントロールせ よ」 解題3 | 『婦人公論』 | 51-52 | 1920.8 | ㊦ |
| 53 | 『臨床上必要ナル神経生理及病理』 | 克誠堂書店 | | 1920.9 | |
| 54 | 「戦後の人種衛生」 | 『婦人衛生雑誌』 355 | 1-20 | 1920.9 | ㊦ |
| 55 | 「戦後の人種衛生 (上)」 | 『大日本衛生会』 | | | |

| | | | | | |
|----|--------------------------------|-------------------------|---------|---------|-------------------|
| | | 447 | | 1920.9 | ㊦ |
| | (中) | 448 | | | |
| 56 | 「斯くして民種は滅び行く」 | 『現代』創刊号 | 66-70 | 1920.10 | ㊦ |
| 57 | 「栄養問題に就きて」 | 明治聖徳記念学会 | 71-105 | 1920.11 | |
| 58 | 「性別の根本儀」 | 『芸備医事』 | | 1921.3 | |
| 59 | 「優生雑話」 | 『文化生活』1-1 | 19-23 | 1921.6 | ㊦ |
| 60 | 「性の問題」復刻『婦人問題講演集』6 | 民友社 日本図書 センター2003.10 | 107-199 | 1921.8 | 人種衛生と記述 |
| 61 | 「乳児の保護(上)」 | 『文化生活』1-3 | 14-19 | 1921.8 | ㊦ |
| | (下) | 4 | 21-28 | 9 | |
| 62 | 「配偶選択の根本問題」 | 『婦人画報』188 | 18-19 | 1921.9 | ㊦ |
| 63 | 「恵まれたる性のために」(一) | 『改造』 | 156-159 | 1921.9 | 人種改善と記述 |
| | (二) | | 214-220 | 10 | |
| | (三) | | 141-148 | 11 | |
| | (四) | | 129-139 | 12 | |
| 64 | 「世界の老嬢」 | 『文化生活』1-6 | 15-22 | 1921.11 | ㊦ |
| 65 | 「社会衛生と宗教」仏教連合会編『第四回 講習会講演集』 | 鴻盟社 | | 1921.11 | ㊦ |
| 66 | 「新式栄養学説」 | 『芸備医事』 | | 1921.11 | ㊦ |
| 67 | 「生殖と寿命」 | 『変態心理』49 | 534 | 1921.11 | ㊦ |
| 68 | 「国家と生殖」 | 『文化生活』2-3 | 9-14 | 1922.2 | 受胎不能にならし むると記述 |
| | (承前) | 4 | 10-12 | 3 | |
| 69 | 「生理学者フェルボルン氏の弔文を紹介 す」 | 『医学及医政』9 -5 | 9-10 | 1922.5 | |
| 70 | 「恩師フェルボルン先生ヲ丁ス」 | 『芸備医事』 | | 1922.6 | |
| 71 | 「婦人解放と遺伝学」 | 『文化生活』2-10 | 9-14 | 1922.10 | ㊦ |
| 72 | 「癩病はどうしたら直るか」 | 『良婦之友』 | | 1923.2 | |
| 73 | 「婦人性理学講座」 | 『女性改造』 | 128-131 | 1923.2 | |
| 74 | 「ボックスに捧げられたる誤れる礼賛」 | 『文化生活』3-5 | 8-16 | 1923.5 | ㊦ |
| 75 | 「地獄の煙」 | 『文化生活』3-6 | 12-16 | 1923.6 | ㊦ |
| | 「地獄の煙(承前)」 | 7 | 7-10 | 1923.7 | |
| | 「地獄の煙(承前)」 | 8 | 10-15 | 1923.8 | |
| | 「地獄の煙(承前)」 | 9 | 47-49 | 1923.9 | |
| 76 | 「日常生活の基礎」 | 『文化生活の基 礎』3-8 | 37-44 | 1923.8 | |
| 77 | 「上海だより」 | 『文化生活の基 礎』3-9 | 405 | 1923.9 | |
| 78 | 「遺伝と人生」 | 『日本学校衛生』 11-9,10 | 145-152 | 1923.10 | 種性の改善と記述 |

| | | | | | |
|-----|----------------------|--------------------------|---------|------------------------|------------------------------------------------------|
| 79 | 「婦人貞操の危機」 解題3 | 『婦人公論』 | 38-41 | 1923.12 | 種性の改善と記述 |
| 80 | 「反逆の息子」 | 『文化生活の基礎』4-1 3.4.7-12 | 2-13 | 1924.1 3.4.7-1 2 | 優 |
| 81 | 『インシュリン』の生理作用 | 『芸備医事』329 | 31-46 | 1924.2 | |
| 82 | 「清蔭緩語」 | 『文化生活の基礎』4-6 | 2-11 | 1924.6 | 優 |
| 83 | 「男女の脳髓の比較」 | 『変態心理』81 | 682-685 | 1924.12 | |
| 84 | 「遺伝学上より観たる男女」 | 『日本教育』4-1 | | 1925.1 | |
| 85 | 『反逆の息子』 | 文化生活研究会 | | 1925.1 | 優 |
| 86 | 「遺伝と精神」 | 『文化生活の基礎』5-1 | 38-41 | 1925.1 | 優 |
| | (承前) | 2 | 19-21 | 2 | |
| 87 | 『質』と『数』と普選 | 『文化生活の基礎』5-2 | 巻頭 | 1925.2 | 優 |
| 88 | 「車上吟」 | 『文化生活の基礎』5-5 | 26-27 | 1925.5 | |
| 89 | 芸備医学会三十周年記念総会の「閉会の辞」 | 『芸備医事』30-5 | 132-134 | 1925.5 | |
| 90 | 「生命問題より観たる精神」 解題3 | 『婦人公論』 | 38-48 | 1925.10 | 優 ※『生理学研究』に 連載中の、山本宣治 「若い男の性生活」 掲載を打ちらせる |
| 91 | 「優生問答の半日」 | 『体性』 | 2-7 | 1926.1 | 生殖無能ならしむ る手術と記述 |
| 92 | 『スポーツ』の精神 | 『芸備医事』 | 254-258 | 1926.10 | |
| | (承前) | | 292-299 | 12 | |
| | (承前) | 『芸備医事』32-1 | 15-20 | 1927.1 | |
| 93 | 「母性及小児と遺伝との関係」 | 『社会事業』11-1 | 23-27 | 1927.4 | 優 |
| 94 | 『生理学総論』 | 歯科学法社 | | 1927.6 | |
| 95 | 「性の生理」(上)『家庭科学体系』58 | 文化生活研究会 | | 1927.8 | 人間の品質を改善 と記述 |
| | 「性の生理」(下)『家庭科学体系』58 | | | 9 | |
| 96 | 『内分泌』 | 興学会出版部 | | 1927.9 | |
| 97 | 「遺伝と教育」 | 『日本学校衛生』5 -10 | 1-11 | 1927.10 | 人間ソノ物ノ体質 ノ改善と記述 |
| 98 | 「大澤謙二先生の伝」 | 『鐵門』6 | 1-8 | 1927.10 | |
| 99 | 「大澤先生追悼会演説」 | 『鐵門』6 | 23 | 1927.10 | |
| 100 | 『人及び人の力』 | 人文書院 | | 1927.11 | 人種改善学と記述 |

| | | | | | |
|-----|--------------------------------------------|------------------|---------|---------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 101 | 「眠りについて」 | 『文化生活』5-12 | 49 | 1927.12 | |
| 102 | 「恋愛と結婚」 | 『体性』 | 2-8 | 1927.10 | |
| 103 | 「科学総論」『万葉科学体系』1 | 万葉科学体系刊行 | | 1927 | |
| 104 | 「食物と栄養」『万葉科学体系』6 | 会 | | | |
| 105 | 「産児制限は危険」 | 『文化生活』6-2 | 32 | 1928.2 | 優 |
| 106 | 「優生学に就て」 | 『医政』3-7 | | 1928.3 | 優 |
| 107 | 「人口問題の解決に国民体質の改善」 | 『教育週報』162 | 19-37 | 1928.6 | |
| 108 | 「航空生理について」『日独文化講演集』2 | 日独文化協会 | | 1928.12 | |
| 109 | 『科学的生命論』 | 春秋社 | | 1929.2 | |
| 110 | 『生理衛生教授備考』 | 明治書院 | | 1929.2 | |
| 111 | 『人性論』改訂版 | 人文書院 | | 1929.6 | 優 |
| 112 | 『アリストテレスよりニュートンまで』 | 春秋社 | | 1929.6 | |
| 113 | 「生物学概論」復刻『社会事業体系』1 日本図書センター(2003.4) | 中央社会事業協会 | | 1929.8 | |
| 114 | 「生死を左右する種々の事実」 | 『母と子』10-8 | 43-44 | 1929.8 | |
| 115 | 「両性問題と遺伝及び優生学」(『性と生殖 の人権問題資料集成』32 不二出版) | 大阪毎日、東京日 日新聞社 | 210-242 | 1929.9 | 優 ※英、仏、伊、独、 スカンジナビアを訪 れ、優生学的問題を 調査、ウブサラの世 界最初の国立民族衛 生研究所を訪問、日 本における同種の研 究機関の必要性を痛 感。 |
| 116 | 「生命と自然界(五)」 | 『公衆衛生』48-2 | 18-22 | 1930.2 | |
| 117 | 「欧米見聞所感(上)」 | 『芸備医事』35-4 | 91-96 | 1930.4 | |
| | (下) | 35-5 | 120-124 | 1930.5 | |
| 118 | 「婦人の体質」 | 『母と子』11-6 | 22-25 | 1930.6 | 優 |
| 119 | 「逝ける恩師」 | 『鐵門』9 | 28-31 | 1930.6 | |
| 120 | 「血族結婚は有害か無害か」 | 『公衆衛生』48-7 | 67-69 | 1930.7 | 優 |
| 121 | 「日本民族衛生学会の主張」 | 『医事公論』952 | 32 | 1930.10 | 優 |
| 122 | 「畏友尼子四郎君を憶ふ」 | 『芸備医事』35-11 | 290-293 | 1930.11 | |
| 123 | 「日本民族衛生学会の主張」 | 『芸備医事』35-12 | 308-310 | 1930.12 | 優 |
| 124 | 芸備医学会東京支部例会の「歓迎の辞」 | 『芸備医事』35-7 | 192-195 | 1930.7 | ※日本民族衛生学会 発会式、理事長に就 任 |
| 125 | 「優生学と人生の樹直し」『現代医学百科事 典(生理学の部)』 | 『日本医事新報』 24 | | 1930 | |
| 126 | 「母よりの精神的遺伝」 | 『母と子』12-1 | 14-16 | 1931.1 | 優 |
| 127 | 「巻頭語」 解題 8 | 『民族衛生』1-1 | | 1931.3 | 優 |

| | | | | | |
|-----|-----------------------|------------|---------|--------|-------------------------------------------------------------------------|
| 128 | 「民族衛生の使命」 解題 8 | | 2-14 | | 優 |
| 129 | 「ゴールトンの伝記」 | | 52-54 | | |
| 130 | 「両性と死亡」 | 『民族衛生』1-2 | 62-68 | 1931.5 | |
| 131 | ウブサラ訪問文 | | | | 優 |
| | 「民族衛生の使命 (二)」 解題 8 | 『民族衛生』1-3 | 59-68 | 1931.8 | 優 |
| 132 | 「巻頭語」 | 『民族衛生』1-5 | | 1931 | ※学会機関誌『民族衛生』創刊 |
| 133 | 「グレゴアメンデルの伝」 | | 63-68 | | |
| | 「グレゴアメンデルの伝 (承前)」 | 『民族衛生』1-6 | 72-77 | 1931 | ※保健衛生調査会、民族衛生に関する特別委員会第4回委員会で、「滅種法」発言 ※民族衛生学会第1回学術大会で「断種法の過去及び現在」を講演 |
| 134 | 「民族衛生学上より観たる母と子」 | 『婦人之友』 | 98-102 | 1932.4 | 優 |
| 135 | 「呉会頭に捧ぐる詞」 | 『芸備医事』37-5 | 100-101 | 1932.5 | |
| 136 | 「民族衛生学上から見た血族結婚」 解題 3 | 『婦人公論』 | 140-145 | 1932.9 | 優 |
| | 「グレゴアメンデルの伝」 | 『民族衛生』2-1 | 113-118 | 1932 | |
| 138 | 「結核性病因の遺伝因子」抄録 | | 126-127 | | |
| 139 | 「日本と満州」 | | 129 | | |
| | 「グレゴアメンデルの伝 (承前)」 | 『民族衛生』2-2 | 61-64 | 1932.8 | |
| 140 | 「断種法罰すべきか、レント教授」抄録 | | 74-76 | | 断種法と記述 |
| 141 | 「英国に於ける最近の民族衛生鳥瞰」抄録 | | 76-79 | | 断種と記述 |
| 142 | 「民族の混血に就て」 | 『民族衛生』2-4 | 55-56 | 1933.1 | 優 |
| 143 | 「家族・民族及人類を語る」 | 『婦人之友』 | 42-56 | 1933.4 | 優 |
| 144 | 「民族衛生より観たる結核、性病及び精神病」 | 『社会事業』17-2 | 52-70 | 1933.5 | 優 |
| 145 | 「第三十七回芸備医学会総会式辞」 | 『芸備医事』38-8 | 177-181 | 1933.8 | 断種と記述 |
| 146 | 「糖尿病の遺伝」 | 『民族衛生』2-6 | 74-77 | 1933 | |
| 147 | 「アメリカ合衆国に於ける離婚の統計的開設」 | | 77-78 | 1933.7 | |
| 148 | 「英国に於ける貧民救護」 | | 78 | | 優 |
| 149 | 『自然観より人生観へ』 | 人文書院 | | 1933.7 | 優 |
| 150 | 「巻頭語」 解題 8 | 『民族衛生』3-1 | | 1933.9 | 優 |
| | 「グレゴアメンデルの伝 (V)」 | | 46-50 | | ※民族衛生学会優生結婚相談所を開設、日本赤十字社と共催 |

| | | | | | |
|-----|----------------------------|-------------|---------|---------|-----------------------------------------|
| | | | | | で結婚衛生展覧会開催、映画「結婚十字街」製作 |
| 151 | 『結婚読本』 | 春秋社 | | 1934.1 | ㊦ |
| 152 | 『科学の今昔』 | 春秋社 | | 1934.2 | |
| 153 | 「結婚と人生」 | 『赤十字博物館報』12 | 9-14 | 1934.2 | ㊦ |
| 154 | 「台湾旅行雑感」 | 『芸備医事』39-5 | 79-84 | 1934.5 | |
| | (承前) | 39-9 | 164-166 | 9 | |
| | (承前) | 39-10 | 192-194 | 10 | |
| 155 | 『巻頭語』 解題8 | 『民族衛生』3-4・5 | | 1934.6 | ㊦ |
| 156 | 「断種法に対する反対の反対」 解題8 | | 39-51 | | 断種と記述 |
| 157 | 「第3回学術大会「開会の辞」 | | 6 | | 断種と記述 |
| 158 | 「人類改善財団と其の創立者ガスナー」 解題8 | | 72-76 | | 断種と記述 |
| 159 | 「強靱なる後裔のための戦火（新しき独逸断種法）」前文 | | 52-54 | | 断種法と記述 |
| 160 | 「兎唇及び狼咽の遺伝」抄録 | | 77-78 | | |
| 161 | 「アルコールと遺伝」抄録 | | 78-80 | | |
| 162 | 「民族の母」抄録 | | 80 | | |
| 163 | 「グレゴアメンデルの伝(VI)」 | 『民族衛生』3-6 | 67-70 | 1934.9 | |
| 164 | 「精神薄弱者の管理に関する和蘭の新法案」抄録 | | 88-89 | | ㊦ |
| 165 | 「巻頭語」 | 『民族衛生』4-1 | | 1934.12 | ※保健衛生調査会、民族衛生に関する特別委員会は、内務省会議室で、優生法案を審議 |
| 166 | 『『民族衛生』の使命』 | | 82-83 | | ※東大医学部長になる |
| 167 | 「長寿と遺伝」『民族衛生叢書』1 | 日本民族衛生学会 | | | |
| 168 | 「医学上より観たる偉人」『偉人伝全集』第24巻 | 改造社 | | 1935.1 | |
| 169 | 「ギロチンもなほ絶つ能はざるもの」 | 『時事新報』 | 3 | 1935.4 | |
| 170 | 芸備医学会四十周年総会の「式辞」 | 『芸備医事』40-6 | 127-130 | 1935.6 | |
| 171 | 「優生学的に観た結婚と遺伝」 | 『婦人之友』 | 84-89 | 1935.6 | 断種法と記述 |
| 172 | 「優生学の必要と世界の優生運動」 解題3 | 『婦人公論』 | 333-337 | 1935.8 | 断種法と記述 |
| | 「グレゴアメンデルの伝(VII)」 | 『民族衛生』4-2 | 43-47 | 1935.3 | |
| 173 | 「法曹界に於ける優生学の支持者ワンデ | | 81 | | |

| | | | | | |
|-----|---------------------------|----------------------|---------|----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 174 | ル・ホームズ博士逝く」 「巻頭語」 解題 8 | 『民族衛生』 4- 3・4 | | 1935. 7 | 断種法と記述 |
| 175 | 「アイヌの生理心理学的調査」 | | 52-53 | | ㊦ ※荒川五郎ら「民族優生保護法案」を第67 議会に提出→審議未了 ※民族衛生協会の付属団体として、日本優生結婚普及会の発会。会長に永井、副会長竹内茂代、永井花江(永井の妻) |
| 176 | 『道と自然』 | 人文書院 | | 1936. 1 | 断種法と記述 |
| 177 | 『優生学概論(上)』 解題 5 | 雄山閣 | | 1936. 2 | 断種法と記述 |
| 178 | 「断種法を急いで実行せよ」 | 『母と子』 17-3 | 16-20 | 1936. 3 | 断種法と記述 |
| 179 | 「学校身体検査規定改正要綱ニ就テ」 | 『日本学校衛生』 24 | 62-66 | 1936. 6 | |
| 180 | 「学校身体検査規定改正要綱ニ就テ(承前)」 | 25 | 41-51 | 7 | |
| 181 | 「北支旅行談(一)」 | 『東京医事新誌』 3000 | 113-120 | 1936. 9 | |
| | (二) | 3001 | 41-44 | 1936. 10 | |
| 182 | 「東洋文化と日本民族」 | 『社会事業の友』 96 | | 1936. 4 | |
| 183 | 「巻頭語」 解題 8 | 『民族衛生』 5- 1, 2 | | 1936. 4 | 断種と記述 |
| | 「グレゴアメンデルの伝(VIII)」 | | 225-230 | | |
| 184 | 「民族衛生振興の建議」 解題 8 | 『民族衛生』 5- 3, 4 附録 | 附録 | 1936. 9 | 断種と記述 |
| 185 | 「巻頭語」 | 『民族衛生』 5- 5, 6 | | 1936. 12 | |
| 186 | 「優生学の使命」 | 『優生』 1-1 | 2-7 | 1936. 3 | ㊦ |
| 187 | 「偉人と血統」 | 『優生』 1-3 | 2-10 | 5 | ㊦ |
| 188 | 「結婚と人生」 | 『優生』 1-9 | 2-7 | 11 | ㊦ |
| 189 | 「挨拶」 | 『優生』 1-10 | 4-9 | 12 | ㊦ |
| 190 | 「東大医学部を退職するに際して」 | 『芸備医事』 | 105-109 | 1937. 5 | |
| 191 | 「日本精神興近代科学」『北京近代科学図書 | | | 1937. 6 | |

| | | | | | |
|-----|-----------------------------|---------------------|---------|----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 192 | 館叢書』1 「北平滞在中の所見」 | 『東京医事新誌』 60-3055 | 30-32 | 1937. 10 | ※永井、定年退官 |
| 193 | 「北平大学名誉教授に就任」 | 『民族衛生』6- 2・3 | 171-172 | 1937. 7 | 台北帝国大学に医学 部を設置、医学部長 になる |
| | 「グレゴアメンデルの伝 (IX)」 | 『民族衛生』6-4 | 47-50 | 1937. 11 | |
| 194 | 「日本民族の優越性」 | 『教育学会』76 -5 | | 1938. 2 | |
| 195 | 「断種法の検討 強制的たれー優生学の立 場から」 | 『帝国大学新聞』 | 5 | 1938. 7. 11 | 断種と記述 |
| 196 | 「断種法問題」 | 『教育学会』78 -2 | | 1938. 11 | 断種法と記述 |
| 197 | 「優生結婚に就いて1」 | 『優生』2-11 | 2-14 | 1938. 1 | ㊦ |
| 198 | 「優生結婚に就いて2」 | 12 | 2-16 | 1938. 2 | ㊦ |
| 199 | 「結核と結婚」 | 『優生』3-6 | 2-7 | 1938. 8 | ㊦ |
| | | | | | ※八木ら「民族優生 保護法案」を第73議 会に提出→委員会送 付 ※厚生省設置 ※八木ら「民族衛生 保護法案」第74議 会に提出→委員会送 付 |
| 200 | 『結婚読本』 | 春秋社 | | 1939. 11 | |
| 201 | 『科学と道徳』 | 目黒書店 | | 1940. 7 | ※国民優生法施行 |
| 202 | 『新生命論』 | 春秋社 | | 1940. 9 | |
| 205 | 「湯爾和先生を憶ふ」 | 『日本医事新報』 979 | 26-7. | 1941. 6 | |
| 206 | 『ガーベラの花』(私家版) | | | 1943. 11 | |
| 207 | 『東の風西の波』 | 日支問題研究会 | | 1944 | |
| | | | | 1945 | ※第二次世界大戦終 結 |
| 208 | 「巻頭語」 解題8 | 『民族衛生』13- 2, 3 | | 1946. 12 | 断種と記述 |
| 209 | 『優生学概論』第三版 解題5 | 雄山閣 | | 1947. 4 | 断種法と記述 |
| 210 | 「現代生物哲学問題」『哲学講座』5 | 近代社 | | 1947 | |
| 211 | 『民族の運命』民族衛生叢書 解題6 | 村松書店 | | 1948. 3 | 断種と記述 |
| 212 | 『自然科学史』 | 春秋社 | | 1948. 8 | ※国民優生法廃止、 優生保護法成立 |
| 213 | 『女の幸をしみじみと思ふ』 | 出雲書房 | | 1948 | |

| | | | | | |
|-----|------------------------------------------------|-----------------|-------|--------------------|-------|
| 214 | 「近時公布の二つの重要法律について」 解題 6 | 『厚生時報』4-1 | 24-25 | 1949. 1 | 優 |
| 215 | 『新結婚読本』 | 出雲書房 | | 1949. 3 | 優 |
| 216 | 「序」(竹内茂代『優生結婚』) | 万葉出版 | 序 1-4 | 1949. 6 | 優 |
| 217 | 『人間における男性の性行為 上』(キンゼイ 永井監訳) | コスモポリタン社 | | 1950. 2 | |
| 218 | 『哲学より見たる医学発達史』 | 杏林書院 | | 1950. 3 | 断種と記述 |
| 219 | 『結婚読本 性生活の経典』(初版 1947. 2. 10) | 春秋社 | | 1950. 3 | |
| 220 | 『第二結婚読本 独身者の為に』 『人間における男性の性行為 下』(キンゼイ 永井監訳) | 春秋社 コスモポリタン社 | | 1950. 3 1950. 5 | |
| 221 | 『性教育講和』上 解題 7 | 万葉出版 | | 1951. 6 | 優 |
| | 『性教育講和』下 解題 7 | 万葉出版 | | 1951. 10 | 優 |
| 222 | 「春風秋雨月沈原(欧米旅日記より)(一)」 | 『東京医事新誌』 | 41-45 | 1953. 1 | |
| | | 70-1 | | | |
| | (二) | 70-2 | 51-55 | 2 | |
| 223 | 『生命に関する十講』 解題 9 | 共立出版 | | 1954. 12 | 優 |
| 224 | 『自助論』 | 平凡社 | | 1955. 3 | |
| 225 | 『性教育』 解題 9 | 雄山閣 | | 1956. 9 | 優 |
| 226 | 「私の養生訓」『精神身体医学講座 心と身体 下』2 | 日本教文社 | | 1957. 9 | |

※上記永井の著作リストは、現時点で判明しているものである。

解題 1 「結婚と健康診察(二)」 『新真婦人』 1914. 3

『真新婦人』は、1913年3月1日に西川文子、宮崎光子、木村駒子により創立された新真婦人会の機関紙で、創刊は同年5月である。「婦人問題研究専門雑誌」として、女性の自覚と職業の奨励、「家庭を立憲的組織となすこと」「婦人倶楽部の設立」「都市と国家と社会を母性化するに努力すること」を目標に、「婦人の修養、家庭の改善、婦人の社会事業等に関する記事、論文を掲載」と記され発行され、恋愛、結婚、職業、育児、産児制限問題などの女性問題などがとりあげられた。当時のジャーナリズムは、『青鞥』の「新しい女の新しい敵」などと青鞥社との対立を煽りたてた。

「結婚と健康診察」は管見の限りでは、永井が女性雑誌に掲載している初めての言説である。ここで永井は、優生思想による結婚問題に言及し下記のように記している。

・「生物学で研究した遺伝の法則を人間に応用して、悪い人間の種を絶滅して立派な人間を

拵へて行かうと云ふのが、人種改善学の目的とする所で」あるが、日本では遺伝に関する調査に着手していない。次の三点で着手しかけているだけである。

- ・「第一は性欲教育で、之を施すのが善いことであると云ふことには、既に議論が一定して居る」が、教育の方法と、開始時期についてはまだ議論の途中である。
- ・「第二は去勢のことで、常習犯の者とか、精神病患者とか、其他の者の遺伝を絶滅するの要ある者に対し、誘卵管とか、誘精管とかを切ることの實行である」。
- ・「第三は結婚前に互に医師をして其の健康を診断せしむることで、両方から信用すべき医者を出して、互に診断せしむることは大変に結構」なことで、「米国では之れを法律で定めて実行しやうとして居る所もあるが、コウ云ふことは法律でやらずと云ふよりは知識を普及して自然に行はれる様にする方が面白いと思ふ」。(22-23頁)

上記のように、第一の性欲教育に関しては、この後、優生思想の根本に関わる問題として性問題に熱心に取り組み啓蒙していく。第二の去勢に関しては、後に断種法制定に向けて運動していく予兆を表している。第三の結婚前の健康診断の実施は、国家が選定した医師による、国家の強制による健康診断の実施を主張し、結婚問題に関し、国家の介入を強く主張する言説から見ると、きわめてソフトであり、国家主義的思考がまだみられない。この第三の言説は、この後の永井の主張を見るとき、一番大きく変わる言説である。

解題2 『生物学と哲学の境』 1916.4 洛陽堂

「人種改善学の理論と実際」『日本及日本人』646. 647. 648. 650 1915. 1. 1~3. 1

「人種改善学の理論(一)~(四)」『人生』11-5. 6. 7. 9 1915. 6~10

人種改善は「一個人一時代に於て為し遂げらるべき者でなくして、学者の努力と政府及び有力者の保護と一般人民の自覚心とが、相待り相扶けて始めて其完成を期す」とむすばれている。「人種改善の理論と実際」『日本及日本人』650 1915. 3) と、「人種改善学の理論」(一)~(四) (『人生』1915. 6~10) の一部が再録されている。内容を一部以下に記す。

「悪性遺伝物質の艾除を完全に成し遂げんが為に、単に結婚の関渉を以て足れりとせず、進みて外科手術を施して悪質者をして生殖不能たらしむることを実行したのも亦、実に亜米利加合衆国を以て嚆矢とする。……一九〇七年三月九日を以てインディアナ州に於て、一の州令が發布さるに至った。夫れによると犯罪性白痴痴愚等に在りては、遺伝は重大なる関係を有する者であるから、……精神状態の回復が到底覚束ない者と断定されたならば、男子に於ては Vasectomie 即輸精管切断法を施し、女子には輸卵管 Oophorectomie を行うべしと云つてある」とアメリカの手術を紹介し、参考のためにと「コンチカット州に於ける之に関する法令」として、「生殖防止ノ手術ニ関スル法律」を挙げて、「新大陸に於ては悪種除の方面に実行を急ぎつゝあるのであつて、其結果の如何は今後吾人の大に瞩目すべき」とし、「欧米諸国に於ける此新科学の勃興と其運用とを想」(『人性』11巻9号(1915. 6) 313-314頁) っていると、アメリカで既に実施されている断種法を紹介している。

『生物学と哲学の境』1916.4

恩師フェルボルンに捧げられている書

「生理学上より見たる人口問題」の「如何に殖やす可きか(人種改善の理論)」(318-327頁)に「人種改善学の理論と実際」(『日本及日本人』646. 647. 648. 650 1915.1.1-3.1)の「三 人種改善の理論」(36-40頁)が収録されている。内容を一部以下に記す。

- ・生理学上より見たる人口問題
自然は死せよと命じ人は活きんと浴すと叫ぶ (309-310頁)
- ・「婦人と独立の問題」は「自覚とか覚醒とか云ふ考が……直接自分が生存競争の渦中に投ずる」と「生産に重大なる影響を及ぼす……独逸の最近の統計」では「流産や早産をしたり、或は病気に罹つたりする」(296-297頁)
- ・輓近の人種改善学で……良種を保護し悪種を殲滅すべし……『殖やすこと』の必要を覚つた吾々は、今や此の輓近の人種改善学(優生学)によりて、更に『如何に殖やすべきか』を教えられた。余す所は唯だ如何にして此の方法を実行すべきかにある。我輩は茲に人口問題を論じて……国家万年の長計の為に、将た人類永遠の幸福の為に……世の有識者に向つて問ふ」(327-328頁)と、人口問題は質の問題であり、人種改善が必要であることを強くなげかけている。

解題3 『婦人公論』に掲載の永井潜の著作

『婦人公論』は、1916年1月に中央公論社から創刊された女性雑誌である。女性の労働問題、参政権、国際問題のほか、家制度、恋愛・結婚問題、さらに当時の社会問題など取り上げ、問題の本質を鋭く追及するとともに、覚醒を目指し知識に燃えた女性の指針となり、オピニオンリーダーの役割を果たした雑誌である。

永井は女性に対する優生思想の啓蒙を、『婦人公論』誌上で積極的に展開したが、同時期、平塚らいてうの著述活動も『婦人公論』が中心であり、二人は創刊の翌2月、同時に『婦人公論』デビューを果たし、永井は優生思想の立場から、平塚はフェミニズムの立場から女性問題を取り上げる。目立つ二人によって、男性主導と女性主導の2種の運動・情報を紙面に打ち出し、読者の興味を喚起するメディア戦略がある。これは優生学が肯定的(積極的)優生学 vs 否定的(消極的)優生学の二項対立図式でもって論争を展開していく、日本における起点にもなると考えられる。ここで永井と平塚の著作を並列して列挙する。

| 年月 | 永井潜 | | 平塚らいてう | | 備考 |
|----|------|----|--------|----|----|
| | タイトル | 言説 | タイトル | 言説 | |
| | | | | | |

| | | | | | |
|------|--------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------|
| 1916 | <p>2-5 良い子を産むために(一)-(四)</p> <p>1-5-9頁 2-8-10頁 3-13-16頁 4-7-11頁</p> | <p>・「一人種改善学(優生学)の話」</p> <p>・大切なのは人間の種性、血統</p> <p>・「配偶者の種性・血統の選択」が「<u>良い子供を産む為に</u>」大切</p> <p>・「腹は借り物にあらず」、「<u>晩近遺伝学の進歩</u>」で「女子の位置は科学的基礎の上に非常に高められた」「婦人たる者は<u>生殖問題に就いて</u>」「<u>自重</u>」しなければならない</p> <p>・「消極的人種改善学に於いては」「<u>悪しき遺伝</u>」が「繁殖せぬ様に」「<u>国家が之に干渉して法令を設けて之を支配することが出来る</u>」</p> | <p>2 母となりて</p> <p>4 南湖より</p> <p>7 現代女学校教育に対する女学生としての不平</p> <p>10 男女性的道徳論</p> <p>1-10頁</p> | <p>・「結婚は善良な子供を得るのが目的だとしても当事者の主観を無視して任意に結合させることの出来ないのは、<u>善種学</u>がその適用にあつては多くの制限を受けなければならない」</p> <p>・結婚生活は「直接種族と深大な関係をもっている、否、種族そのものといふべき婦人にとって実に重大な意義あるもの」</p> <p>・「善種学」初出</p> <p>・「良妻賢母主義でいくのなら、せめて、種族における婦人の重大な位置や其の能力を知らせたり…さしあたり善種学の講座でも設けたらいい」</p> <p>・「新道徳」は「結婚の中心を恋愛におき、恋愛生活によって、相互の人格の完成と種族の改善とを計るのを結婚の目的としている」</p> <p>・「今日の日本の婦人とてもせめて今少し自分自身とその子孫とを重じ、<u>花柳病男子から何等かの方法で結婚資格を奪ふ位な程度</u>のことは実行できないなければならない」</p> <p>・「花柳病男子」から「結婚資格を奪う」の初出</p> | <p>保健衛生調査会委員になり、「ユーゼニックス」発言をする</p> |
| 1917 | <p>1-3 乳児の保護 その一)-(その三)</p> | <p>・「一国民一民族が隆盛になる為には」「一、その民族の多数なることで、其の二は、<u>其の民族の心身上の性質の</u></p> | <p>5 母として的一年</p> | <p>・「自分のライフワークはやはり自分の子供を<u>自分より以上の優れた一個の人間に仕上げる</u>ということなのかしら、次</p> | |

| | | | |
|------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>一 16-18 頁 二 31-35 頁 三 28-35 頁</p> | <p><u>優良なること</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・『如何にして<u>優良なる子孫を造るべきか</u>』即ち<u>人種改善学の一端を</u>」昨年話しておいた ・「如何にして死亡率を減少せしむべきかの問題は、我が民族の増殖を計る上に於て、尤も重要な事」 ・乳児死亡の原因は「一は、内的原因…両親の先天的の体質及び健康状態の不良なることから」で「他の一は外的原因…乳児の栄養、看護等、一般に生後の育て方の良否関係している」 ・「内的原因により死亡する乳児は「生まれながらにして薄弱劣等なる体質を具へて居る者で、必ず早晚死すべき運命を有つて居る者で…社会全体の上から論ずれば、<u>敢えて悲しむべき者ではなく、或は寧ろ喜ぶべきこと</u>」 ・育て方の不良なる<u>佳良な素質</u>を持つ乳児の死亡は、「乳児保護問題に於て、最も留意せねばならぬ大切な」こと ・「乳児は母乳で育てることが最も大切で、人工栄養は害」 | <p>6 青年男女 交際論</p> <p>8 婦人の自由解放と個人的修養 18-27 頁</p> | <p>代を産み次代を教育するということが多くの婦人たちの上に与えられた天職であるように。…何よりも大切にしている自分の仕事も…公平に、冷静に、人類全体という立場から観察するとき、<u>子供を立派な人間に造り上げるという仕事、一種族への奉仕と比較してはたしていずれにより多くの価値をいくべきだろうか</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・エレン・ケイ『母性の復興』の引用 ・新道徳の一つは「新たに生れた倫理上の新主義なる善種学に基いて居り…この善種学の道徳律は…一般からは罪と言はれるやうなこと…子殺しさへ犯させる…倫理的犯罪とも云ふべきもので、何べんとなく繰り返されるうちに、…新権利の観念を植え付け、最後には新法律に出来る…母親が自分の産んだ子供を…到底優良なものにならないと認められた時、敢てその子を自ら殺すこと」 ・「<u>人種の改善進歩は唯一の道</u>として人体の体質を極めて厳正に選択するより外に手段のないことは十分に認める…生産率の減少を来たすことがあるとしても…国家としても憂ふ可き現象では」なく「寧ろ国家として憂ふべきは、<u>最劣等な部類の人間の制限もなく</u> |
| <p>10 民族衛生より観たる結婚の改良 50-60 頁</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・「一国は一家によつて成り、一家は又夫婦によつて始まるのであるから、結婚は実に人間社会生活の源泉であり…一人一家の幸福安危に関するのみならず、一国の盛衰、民族の休戚に繋がる…之を改良を企図し、其の実行を | | |

| | | | | |
|--|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|--------------------------------------------------------------------|--|
| | <p>期待せねばならぬ。決して因循慣例にのみ放任しておくべき者ではない」</p> <p>・「<u>結婚改良</u>を叫ばねばならぬ時代に到達したことを自覚せねばならぬ…民族衛生てふ最新の科学が吾等に下したる覚醒の声である」</p> <p>・「由来一民族の勢力を扶植することは、<u>一面その数と、一面その質</u>とに大関係あることを改めて言ふ迄もない。<u>良佳なる体質を有する者を可及的増加せしめ、不良なる体質を有する者を減少せしむること、是れ即ち民族衛生の二大目的である</u>」</p> <p>・「晩婚の民族衛生に対する第二の重要な弊害は、之に伴ふ花柳病の蔓延で…梅毒は伝染性極めて強く、清浄無垢の新婦人にまで報いられ、加之、先天性梅毒として其の子にまで及ぶに至つては、実に惨の惨たる者…一家は乱離し、一國は疲弊する…梅毒は最も恐るべき国民病」</p> <p>・「所謂新しき女の中毒」</p> <p>・「簡易なる結婚保険」</p> <p>・「避妊と国民の変質」</p> <p>・「母たるべき者を保護し、完全に其の尊き天職を遂行せしむることは、是亦民族衛生上の大問題である。『母の保険』を（設ける）」</p> <p>・「<u>人種改善学の本旨…質の改善である…人種改善学</u>の領域に属すべきことで、如何に此の方面が民族の興亡に大関係を有するか…如何に</p> | | <p>繁殖して行く…最も適した素質を持っている多くの婦人が天職を尽くすことが出来なかつたり…それを欲しなくなつたりすること」</p> | |
|--|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|--------------------------------------------------------------------|--|

| | | | | | |
|------|------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| | | 結婚の改良を行ふべきかに、就ては本紙に於て其大要を述べた…一面法律を以て結婚を制限して、悪種の繁殖を防ぐと同時に、教育によつて、如何に真性の尊ぶべきか、如何に遺伝の理法の重んずべきかを知らしめ、自覚せる配偶の選択を成さしむる(べき)」 | | | |
| 1918 | 4 生理学的の立場から 38-44 頁 | <p>・「幼少より身体の健康を図り…個人の幸福は云ふまでも無く、国家の隆替に関する重大なる意義を有つて居る」</p> <p>・「生殖の重要な意義…青年子女をして、生殖の根本義を適當なる時に、適當なる方法に於て十分に了解せしめる点にある…生殖の根本義例へ売電の法則の如き、変性性の減少の如き、受胎及び胎生の生活の生理的現象の如き、進みては育児と人口問題との重要な意義の如き…女子の教養に携つて居る人々煮…望みたい」</p> <p>・「女子が真に自分の天職の重い事を自覚し、正しい意味における自尊心を得る事は、この生殖の根本義を理解する事に依つて確立される…婦人は、単に撰ばるゝ者ではなくして、又自ら選ぶ者でなくてはならぬ」</p> <p>・「媒介人の廃止…結婚に関する従來の慣習を一新して…国家が之に適當なる干渉を試み、其意義を十分に徹底せしめるやうに助力を與へる事が当然である」</p> | <p>4 女を誤らしむるの数 一井上哲次郎氏の良夫賢夫一</p> <p>4 同性の觀たる売笑婦</p> <p>5 母性保護の主張は依頼主義か 18-23 頁</p> <p>8 母性保護問題に就いて再び与謝野晶子氏に寄す 40-52 頁</p> | <p>※永井花江(永井の妻)あり</p> <p>・(ドイツの母性保護同盟を説明して)「不幸な私生児は…成長したにしても(私生児には一般に死産多く、且つ幼児死亡率も高い)概して健康が劣等である上に、<u>非社会的な人間</u>や、<u>犯罪者</u>、<u>浮浪人</u>、<u>淫売婦</u>の如き<u>社会の厄介者</u>となるものが少なくありません」</p> <p>・「子供といふものは、…自分の私有物ではなく、其社会の、其国家のものです。<u>子供の数や質は国家社会の進歩発展にその将来の運命に至大の関係あるものですから、子供を産み且つ育てるといふ母の仕事は、既に個人的な仕事でなく、社会的な国家的な仕事なのです。—中略—これは子供を産み且つ育てるばかりでなく、</u></p> | |

| | | | | | |
|------|----------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|---------------------------------------|----------------------------|
| | | <p>・「結婚は…凡ゆる婦人が、又凡ゆる男子が己むを得ぬ事情の無き限り、必ず行はねばならぬ普汎的の者…一人一家の幸不幸を招くのみならず…国家の興亡にも密接な関係を有つて居る…国家としては之に対して相当な助言を興へ、之を善導すると言ふことは無くてはならない」</p> <p>・「結婚せんと欲する者は、其心身の健康に関する検査を受けて、其条件を具有する者に非ずんば、国家はそれを許さないといふような制度を設けた丈でも、それが個人の為国家の為如何に重要な効果を挙ぐるかは、殆んど想像の外であろう」</p> <p>・「夫婦が社会的生活に寄与することの尤も大切な点は、<u>良き子供を作るといふこと</u>」</p> <p>・「個人の重んずべきところは、社会的生活の重んずべき事と自覚されて良き婦人たると同時に良き母たらんと様力められんことを切望して止まない」</p> | | <p>よき子供を産み、よく育てるといふ二重の義務となって居ります」</p> | |
| 1919 | <p>7 花柳病者の結婚を禁止せよ 33-34頁</p> | <p>・「我国今日までの結婚媒介法が理想的なものではなく…公設の結婚媒介所を設けるといふことも其一案であろう」</p> <p>・「最後の決定を興ふるものは個人の意思である…厳密に教育の力を以つて個人を養成してかからねばならぬ…自己の為子孫の為延いて</p> | <p>1 現代家庭婦人の悩み</p> <p>2 永遠に夢の世界へ(須磨子について)</p> <p>6 日本に於ける女工問</p> | | <p>保健衛生調査会で、花柳病担当委員になる</p> |

| | | | |
|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|--|
| | <p>は社会のため国家のために進んで最も良い配偶を選ぶやうになつて来なければならぬ」</p> <p>・「政府の力を以て即ち法律の力で結婚に一定の支配力を及ぼしたいと思ふ。結婚は勿論個人と個人、一家と一家との問題であるが、同時に又国家の盛衰興亡に関する大問題である。即ち国家が之に干渉すべき十分の理由がある。即ち結婚せんとする者は互に健康なる心身を有つて居る者たることの認定を受けた者でなければ国家は之を許可せぬことにしたい…花柳病者の結婚を禁ずる丈でも莫大なる利益を民族総ての上に齎す…花柳病の害毒の恐るべきことは今更言ふまでもない…男子の花柳病患者は年々増加する一方で、此等の男子が結婚によつて清浄無垢の子女を損し、延いては害毒を子孫に流して居ることは実に戦慄すべきもの…すでに結婚した者は各自の自省に俟つとして、これから結婚せんとする者だけにでも、予め花柳病の有無を強制的に診断する…政府によつて或特殊の機関を設けて励行せしめるやうにしたい…此種の制裁は、国家が法律によつて之れに干渉せんとするといふことだけで既に十分なる効果が挙がる」</p> | | |
|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|--|

| | | | | | |
|------|----------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|--|
| 1920 | <p>4 優生学講和 105-119 頁</p> <p>8 バースコントロールをコントロールせよ 51-52 頁</p> | <p>・「環境を善くすることによつて、人類を幸福ならしむることが出来るのは、勿論のこと、恰も琢くことによつて、玉に光が顕れると同じことである。然りながら、唯だ環境を善くするのみで人間社会の幸福を企図することができると思ふのは、恰も磨くことによつてのみ、光が現はれると信ずるのと同様である。環境の改善を計る前に、宜しく遺伝の理法を考へ…人間其の物の種性を改善するにあらざれば、環境も改良も亦畢竟徒勞に了る」</p> <p>・「国家生活の拡充を計ると云ふ立場から、断じて避妊に反対する。国家の内容は即ち国民である。国家生活の拡充は即ち国民の拡充である。国民の拡充は即ち<u>国民の質の改良と量の増加</u>なる二代因子によつて、始めて実現される。国家の向上に於て<u>国民の品質の上級</u>であらねばならぬことは固より言を待たない」</p> <p>・「今而の大戦と云ふ大打撃によつて、心ある人をして、此の大なる痛手を癒すべき根本の道は、<u>国民の質の改良と同時に量の増加</u>であることの自覚を益々深からしめた」</p> | <p>4 女から見た男の改造 一婦人に対する態度の改善</p> <p>10 婦人自身にかへれ</p> | | |
| 1921 | | | <p>2 「拒婚同盟」の企図に就いて 33-38 頁</p> | <p>・(拒婚)「同盟会の事業として花柳病に関する一般的の知識、性に関する知識、恋愛結婚、種族奉仕に関する正しい観念等の普及をはかるため」</p> | |

| | | | | | |
|------|------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------|-------------------------------|--------------|
| 1923 | 12 婦人貞操の危機 38-41頁 | ・(関東大震災の被害を受け、一家離散等で身内を無くした場合、生活の保護のための結婚を)「断ぜなくてはならない」「斯る結婚が、結婚の真の意義から遠ざかつて居る」もので「肉に於て此の大災に生き延び」ることは不幸である。 | 1 家庭改造の根本義 3 新婦人協会の回顧 12 私の見た野枝さんといふ人 | | |
| 1924 | | | 3 一昔前の婦人界 | | |
| 1925 | 10 生命より観たる精神 38-48頁 | ・『物と心』の問題は、即ち生命の問題で「生命は『物』であつて同時に『心』である」 ・「自然科学と哲学との協調は大問題で、真正の哲学は、自然科学であり、あらゆる真正の科学は、又自然哲学であらねばならない」 | 4 断髪になるまで 8 所謂長髪に就て | ・女の私を断髪、男なら長髪という | |
| 1927 | | | 1 女の立場から生田長江氏の婦人非解放論を評す 6 かくあるべきモダンガール 10 女子教育に於る母性主義に就て | ・女子教育家の唱える母性主義は封建的良妻賢母主義と大差ない | |
| 1928 | | | 9 汎太平洋婦人会議と日支問題 二業地許可問題 | ・帝国主義的支那政策絶対反対 | 9.1 花柳病予防法実施 |
| 1929 | | | 1月 | ・現行花柳病予防法改正要求 | |

| | | | | | |
|--|--|--|-----------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| | | | <p>1 救護法・母子保護法・其他花柳病予防法の修正を望む 217-220 頁</p> <p>3 母性愛が要求する産児制限 62-64 頁</p> | <p>・「花柳病予防法は、実に不備、片手落ちなもので、婦人のみを厳刑する不公平に対する非難がすでにあげられて…婦人側から…修正を迫ってほしい」</p> <p>・「現行の花柳病予防法は男女不平等どころか、明に 大きな女性虐待であり…女性侮蔑であり…売娼婦そのものがすでに大きな女性虐待であり、女性侮蔑である…新婦人協会の花柳病者の結婚制限法を男女不平等なものであるといふ理由で葬った我が国の男性議会は、何の理由でこれほど男女不平等以上の花柳病予防法案を可決したのでしょうか」</p> <p>・「花柳病予防法を売淫行為の場合の取締りのみ限ったことも物足らなく思われます。伝染の虞ある花柳病男子にして異性に接したものは、結婚の形式に於て成されるものもまたその他のものも絶て適当な方法によって取り締まるべきで、さもなければ、十分な効果はあげ得られない」</p> <p>・「一種の女性虐待であり、女性侮蔑である現行花柳病予防法の改正を要求し、以前新婦人協会が作成、請願した花柳病男子結婚制限法案をも、この際参考とされむことを望みます」</p> <p>・「科学主義的乃至機会主義的産児制限に積極的肯定を与え得るものがあるとすれば、それは優生学的見地からするも</p> | |
|--|--|--|-----------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|

| | | | | | |
|------|--------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| | | | | <p>のだけである…何故なら母性愛は『優種多産』による生命の向上を望むもので、只単に『生めよ、殖えよ、地にみてよ』とのみ願ふものではない」</p> <p>・「本当の価値ある恋愛、人格的な大きな恋愛…をすべての人が結婚の理想とするならば、<u>安っぽい子供が安っぽく多産される筈もなく、自らにて産児は制限される</u>」</p> <p>・「無産階級が…よき社会生活の諸条件を勝ち得、真に新興階級として恋愛主義的産児制限による<u>優児多産、益々生命の向上</u>をもたらし得るであろう如き新社会の出現こそ、母性愛が切に要望するもの」</p> | |
| | | | 新性道德の カオス | | |
| 1930 | | | 12 母性に 注ぐ涙 | 日本民族 衛生学会 創立 | |
| 1932 | 9 民族衛生 上から見た 血族結婚 140-145 頁 | <p>・「劣勢の遺伝病は」「先天的精神薄弱」「早発痴呆」「癲癇」「先天性聾啞、先天性盲目」「結核性体質の如きもの等」</p> <p>・「血族結婚は斯く一面忌むべき劣勢遺伝質を濃厚ならしめて、悪結果を招く危険があると同時に」「優秀なる劣勢遺伝質があるなれば夫れを濃厚ならしめることによつて、優秀なる性能を十分に発揮せしむべき利益がある」</p> <p>・「<u>血族結婚夫れ自体が恐るべきものでなく</u>」「<u>如何なる遺伝質が其の家計に存在し</u></p> | | | |

| | | | | | |
|------|-------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|--|-------------|
| | | <p>て居るかゞ、問題」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「血族結婚の成果の善悪は、一に該家系の遺伝質の良否による」 ・「血族結婚は一種の冒険結婚であつて、良き遺伝質を重ね合わせて、一層、一層優秀にする希望があると同時に」 <p>「防ぎ得る所の弱点を」「暴露する危険がある」「従つて、<u>血族結婚は自己の家系の優良なる遺伝質に関して、十分なる自信ある者のみが、断行すべき結婚形式</u>であつて、通則として、之を避けた方が安全である」</p> | | | |
| 1933 | | | 10 結婚する娘に与へる手紙 | | 優生結婚相談所を開設 |
| 1935 | 8 優生学の必要と世界の優生運動 333-337 頁 | <ul style="list-style-type: none"> ・「<u>優生学</u>は人生のあらゆる根本問題に触れる所の最も大切な学問」 ・「<u>遺伝</u>が第一義であり、環境は第二儀のもの…<u>遺伝質を改善</u>することが、根本の方策で…<u>遺伝質を淘汰</u>する外に道はない…<u>良い遺伝質</u>を有つ者が結婚して、其の<u>優良な素質</u>を国民の間に広げ…<u>劣悪な遺伝質</u>を有つ者は繁殖のことから遠ざかつて、<u>好ましからざる素質</u>の広からぬ様にすること」 ・「<u>優生学</u>の思想が普及徹底する為には…『<u>遺伝と教育</u>と』と申さなくてはなりません、特に、消極的優生学の実現に関しては、国家が、民族の永遠の安寧隆昌の為に、 | <ul style="list-style-type: none"> ・5 私の時代 ・10 母の務めを終へ寡婦の生き方 | | 日本優生結婚普及会発会 |

| | | | |
|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|--|
| | <p>適切なる法令を設けて、或は結婚を制限し（禁婚法）、或は繁殖を不可能ならしめる（断種法）やうに、努力すべきは、当然のこと」</p> <p>・「<u>遺伝的に恵まれない子が</u>生まれ出ること、さらぬだに能力の低劣な為に、生存難に喘がなくてはならない親に、一層の精神的物質的負担を重ねしめ、為に家庭生活を享樂することも出来なくなり…生まれ出る子供は先天的に暗い運命を辿らなくてはならないこと、そして又国家が其の為に多大の迷惑を蒙らねばならないことを考へて見ると、親の為に、子の為に、断種を行ふことは慈悲であつて、却つて之を放任して置くことが、無慈悲であり、国家が国民百年の長計の為に法律によつてこの事を統制するのは、当然のこと」</p> <p>・「断種法を制定するに当たつては、其の適用の範囲、方法、手続、判定等に就いて、慎重の上にも慎重を期し、萬遺漏なきやうに背無ければなりません」</p> <p>・ヒトラ一賛歌</p> | | |
|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|--|

解題4 『廓清』に掲載の永井潜の著作

「人種問題と国民衛生」『廓清』7-2 1917. 2.3

「人種問題と国民衛生（二）」『廓清』7-3 1917. 3.1

「優種学上より観たる遺伝と環境」『廓清』8-9・10 1918. 10.1

『廓清』は1911年7月8日、公娼廃止運動団体として発足した廓清会の機関雑誌である。

「人種問題と国民衛生」1917.2,3

文化と国運とは逆行するか

人類進化の原則

- ・従来の自然淘汰作用は、現に存在せる良種を貽すけれども、新しい立派な者を作る事は出来ない、そこで善良なる種子を殖やすといふ事に考へを致して来たのがユーゼニックスである。(19頁)

進化上より見たる戦争

- ・軍国主義の全国皆兵制度にあつては、之れが従軍其衝に当たる可き士は、何れも国民中枢の最も優良なる壮丁のみである。何れの国何時の代にも弱者が国家に貢献するの大事績をして後代に貽した事はない殊に国家の上から観れば弱者は不生産的とも僞するを得るのに其者が国家を守り強者が可惜戦場に生命を失ふ如きは、何れの方面から考へても生物進化上恐る可き次第である。(19頁)

生物学的非戦論

- ・軍隊には大なる弊害がある。それは軍隊と花柳病との関係の最も密接な事である。(20頁)

進化と質量の問題

- ・人口問題で、此事は何より極めて重大……数さへ増せばそれで可いといふ主義……その主義も皆其数に於て優秀であるなれば甚だ喜ぶ可きであるが、若し劣等であつたなら寧ろ殖えぬ方が適いのである……民族の繁殖率を増して優劣を頓着せぬか又善良なる民族のみを貽す様にするかは極めて重要な問題。(20頁)

生産率の階級別

文明と結婚の厭迫

恐る可き避妊の流行

「人種問題と国民衛生(二)」1917.3

授乳と生産との関係

文明に伴ふ死亡率

- ・死は元来、自然が此人類に下されし所の、極めて大切なる賜物。(6~7頁)
- ・医術進歩の然らしむる所で、幼少の時代に死すべき運命の者をも、暫く生存し得るやうになすが為め、時期来りて結婚を為し生産をするから、勢ひ脆弱なる子孫の生れる事になる……弱い子孫が貽されて行き、其子孫が又た父母の境遇と同一の下に生存して子を生むに依りて益々不健全なる体質となる。(7頁)

進歩と並行する苦痛

強者資格教育の必要

苦痛と闘ふ現代の児童

数よりも質の問題

- ・文明の重荷に堪え得る民族を獲るにあるから、多くの健全なる生産率を得る事が難いならば、即ち生産率が多くして死亡率の多きを望むより、寧ろ生産率が少数であつても夫

れが実質の健全であることを望まなければならない。 (9 頁)

「優生学上より観たる遺伝と環境」1918. 10

- 一
- ・環境の改善を計る前に、宜しく遺伝の理法を考え……人間その物の種性を改善するにあらざれば、環境も改良も亦畢竟徒勞に了る。(13 頁)
- ・この自覚を吾人に促したのは、輒近生物学就中実験遺伝学の進歩に胚胎せる**人種改善学**である。(13 頁)

二

三

- ・環境の改善によつて、到底生物の種性を根本的に改善することは出来ない……遺伝の法則に基きて、悪種を殲滅し善種を保護するより外に方法はない。(14~15 頁)

四

- ・一斉に**種性の改善**に多大の注意を向くるに至つたことは、頗る悦ぶべき現象であるが……極端に環境を無視し、独り種性の改善によりてのみ、最後の目的を達することができるといふ……新しき思想を生み出したことは、大いに考量を費やさねばならぬ。(15 頁)
- ・種性の重んずべきは勿論であるが、特に人間に於て環境の影響の最も重大なる所以を悟ることが出来……玉を選択すると同時に、これが切磋琢磨を怠らず……其の靈光を放たしむべく、凡ゆる努力を怠りてはならぬ。(16 頁)

☆ 削除と書きかえの例

解題 5 『優生学概論』(初版) 1936. 2. 10 雄山閣

『優生学概論』(第3版) 1947. 4 雄山閣

『優生学概論』1936. 2

『優生学概論』は、民族衛生協会が「民族衛生新興の建議」を公にする前に出版された著作である。永井は、優生学、断種法に対する反対意見に対し、「徒らに優生学的実行の困難を説いて、一挙に之を葬り去らんとする、実に誤れるの甚しき者である」(5 頁)と緒論に記し、序で、「ヒトラー-Adolf Hitler が、決然として民族問題を掲げて奮起したのは無理はない……吾等民族衛生学者は、彼れの斯の意気に対して、限り無き敬意を表せざるを得ない」としている(20-21 頁)。

『優生学概論』(第三版) 1947. 4. 15

『優生学概論』第三版は、敗戦により、中国からの引き揚げ後永井が最初に出版した著書である。目次も内容も初版とほぼ同じであるが、「序」と「緒論」に大きな違いがあるのでここにその違いを提示する。

- ・初版の「序」に下記のように書かれていた記述が、第三版では削除されている。

近時日本精神の振作、国体明徴が、八釜しく叫ばれる様になつた。而かも日本国は即日本人であることを考ふる時、克く孝に、億兆心を一にして、金融無欠の国体を擁護し、文に武に、世界の文化を咀嚼し、同化して、二千六百年の久きに互つて、凡ての他の民族に於て絶えて見られざる長い寿命を保ち、一路向上の輝かしい歴史を造り上げたところの、吾等祖先の血管に振動せる貴重なる遺伝質と、其の稟賦の本体とを、民族衛生学の見地より、検討し、愛護し、拡充してこそ、茲に始めて、日本民族としてのハツキリとした自覚が喚び起され、茲に始めて心から日本精神を復興し、国体を正視し得ることを、何人も拒否することは出来ないであらう。其の意味に於て、吾等は、微力をも省みず、曩に日本民族衛生協会を設立して、天下に呼びかけて居るのである。……明治天皇の御製を拝読して、赫々して昇り出づる旭を仰ぐ心地がして、有難涙を禁ずる事が出来ないのである。(5-7頁)

・初版の緒論の最後に書かれていたヒトラー賛美の箇所は消され、第三版は下記のように書きかえられている。

思ふに、凄愴激烈なる近代戦は、民族衛生学上、幾多の危機を包蔵し、その惨害を長く後代に及ぼすもので、世界人類が、今次の大戦によつて蒙りたる一大創痕を癒すために、優生学が重大なる役割を演じなくてはならないのであるが、特に敗戦日本に於ては、さらぬだに地狭くして人多く、その解決に悩んで居た所のその悩が、今や更に倍加されたのであつて、平和日本の建設、文化日本の再生の上に、優生学を基準とせる人口の調節が、最も大切なる根本問題として、取り上げられなくてはならなくなつて来た。(20-21頁)

解題6 『民族の運命』1948.3 村松書店

「近時公布の二つの重要法律について」1949.1 『厚生時報』4-1

この二つの著作は永井が、1948年に成立した優生保護法に関して言及したものである。

『民族の運命』1948.3

永井は、1937年3月に東大を定年退官した後、台北帝国大学に赴任した後中国に渡り、北京大学医学院長として中国人医師の養成に携わった。国民優生法が公布された1940年には日本にいなかった。帰国したのは戦後1946年である。1948年に国民優生法が廃止され、代わって優生保護法が成立した。優生保護法成立に直接的な関与をしていない永井にとって、それは大きな関心事である。この著作は、明らかに消極的(否定的)優生学、即ち、断種法制定を促すことを目的に書かれているので、その内容を示す。

・『民族の運命』は民族衛生叢書の一冊である。「民族衛生叢書創刊の辞」(2-6頁)で「人文の向上、国家興隆の方策として、教育、宗教、法律、衛生等、各般の社会的現象も勿論必要であるが、尚一層大切なのは、国民の中に於て素質の劣悪なる者の数を制限するとともに、優秀なる者の数を増加させ」「数と質との調和を計り」「国民素質の水準を高めること」が民族衛生学(優生学)の使命だとする。さらに「文化が爛熟すると、烈しい

生存競争のための晩婚や、経済的厭迫乃至自己享楽に基づく産児制限や、これら種々なる原因が錯綜して、この大切な数と質との調和が破れ、素質的に劣悪なる者の数が増加し、優秀なる者の数が減少し、所謂『逆淘汰』の現象が起こつて荒廃を招く。よって、「広く国民の間に優生思想の普及徹底することが、絶対に必要な条件」だとするこの主張は、戦前から一貫したものである。

- ・「文化日本、平和日本の再建に当たっては、或は食糧問題の解決、経済産業の復興等々焦眉の急を要する重要問題が多々あるとともに、文化の根本に培ひ、平和の源泉を湧出する大本の存することを忘れてはならない」として、政治家と「学者経世家の当為でなくてはならない」ともしている。
- ・「戦争と言ふ最も露骨な逆淘汰によつて、今次我邦が蒙つた劇甚なる痛手を癒し平和と文化に輝く国家再建の長計を樹立するためには」「民族衛生がその根基と」なり、「學術奉仕の一端として、この書を刊行した」と記している。
- ・「思想の動きは振り子の如し」では、「敗戦日本が、懊悩のドン底にあつて、仰ぎ得る唯一の希望の光明、悲痛の極みにあつて、持ち得る唯一の歓喜は、この契機を逸しては、到底できないであらうところの庶政一新を断行し、旧弊一掃が実現」（40 頁）できることだとする永井は、敗戦を優生社会実現を目指す絶好の機会だと捉えたのである。
- ・「思想の振子が、極端なる統制から、極端なる解放に飛躍し、放埒と自由とを混同し」権利には責任が伴うとし、『質』の、如何に尊ぶべきものであるかを、無視することのないやうにすること」（40 頁）だと警告も発している。
- ・「民族の花園から、雑草の繁茂を芟除するのが消極的優生学の任務であり、その方策として、国家は断種法を制定して、法の力によつて、著々大規模にこれを実行して、人口の調節を計らなければならない」（90-91 頁）「今や敗戦日本に於ては、食糧難、経済難が日一日と民生を圧迫し、人口の調製は、焦眉の急を告ぐるの秋に当つて、正しき優生法案の強化実施は、寸時も弛せにすべからざるもの」（92-93 頁）と、断種法、優生法の強化を示唆する。
- ・最後に「サンガー主義を基調とせる法案が、某々代議士の手によつて、近く議会に提出されようとしているのが真実なら、「日本百年の前途に暗澹たる永遠の闇あるのみ」とし、これに関わつた議員、容認、実行した関係者、「我等現代日本人は」その「罪を世界に負い」「国体を傷けたる我等現代日本人は、何の面目あつて地下に祖先の霊に見えんとするか。百年、千年の後、達識なる我等の子孫は、我等の墓に向かつて怨恨し、嘲罵し、慟哭する日のあることを、今から覚悟しなくてはならない」（100-101 頁）と批判し、「永遠に日本を愛し、日本民族を愛し、心から新日本の再建を希求する同胞諸君に」（101 頁）奮起していただきたいと結んでいる。

ここより永井の優生思想とそれに関連した国家観や断種法制定を求める姿勢は、戦前のそれと何ら変わってはいないと解される。

「近時公布の二つの重要法律について」（『厚生時報』4-1 1949.10 24p-25）

ここにいう二つの重要法律とは、「優生保護法（昭和二十三年七月十三日法律第百五十六号）と、性病予防法（昭和二十三年七月十五日法律第百六十七号）とを指す」とし、

- ・優生保護法に関して「国民優生法」では「遺伝性悪質者の増加を防圧すると共に、健全優秀なる素質ある者の増加を図り「国民素質の向上」を「目的とする旨が相当ハッキリと強調されて」いたが、優生保護法では「不良な子孫の出生を防止するとともに、母性の生命健康を保護することを目的とすると述べられてある。即ち旧法では、民族永遠の政策という点に重きを置いているのに新法では、その点を遠慮して、人権（特に婦権）尊重の気分を先に立てて、母性の生命健康の保護を云爲し、時勢に追随せんとしたと見のは僻目か若しさうでありとすれば、これはいらざる遠慮」であると批判している。
- ・また、優生保護法で優生手術の対象になっている癩疾患に関し「結核と同様に、特殊の病原菌による慢性伝染病たることは、天下周知の事実である」のに「精神病や畸形等々の各種の遺伝疾患と同列に、優生保護法の対象とすることには、大いに議論の余地がある」と苦言を呈した。だが、優生手術の実施に強制力が強まったことには賛意を表明し、「敗戦日本の再建に当つて『数』と『質』との正しき調節を、民族の上に施すこと……広く一般民衆に、この思想の普及浸透せんこと……新法律が……思ひ切つてその威力を発揮せんことを祈願して止まない」
- ・「優生結婚相談所設置」が制定されたことに喜びを表し、性病予防法に関しては、「結婚当事者間」の「健康証明書」の交換の法制を見られたのは限りない喜びだとし、「この二大重要法律の出現を契機として、優生学と共に、性教育の普及徹底絶叫せんとするものである」と記した。そして、「本年7月、新たに日本性教育協会を設立し、この方面に向かつて」「微力を致さんと期している次第」だと結んでいる。

解題7『性教育講話 上巻』 1951. 6. 30 万葉出版社
 『性教育講和 下巻』 1951. 10. 25 万葉出版
 『生命に関する十講』 1954. 12. 20 共立出版
 『性教育』 1956. 9. 25 雄山閣

『性教育講和』上下を一冊にした著作が『性教育』であり、その内容はほぼ同じものである。また、『性教育講和』、『性教育』に記されたエレン・ケイについての著述は、『生命に関する十講』でもほぼ同じである。平塚らいてうに大きな影響を与えたとされるエレン・ケイを永井はどのように見ていたかを記す。

- ・女史は、一面偉大なる理想主義者であると同時に、他面偉大なる現実主義者（『性教育講話 上』15頁）。
- ・夜となく昼となく、神に向かつて近づかんとするのが、人間の人間たる道……生命の向上発展が顕現するのであり、この生命の顕現に向かつて、熱烈なる拝跪を捧げ、この純一なる使途となつたのが、エレン・ケイ女史であつた（『性教育講話 上』16頁）。
「エレン・ケイ女史の生殖至上主義」（『生命に関する十講』121～124頁）として
- ・性教育といえは、私は、直ちにエレン・ケイ Ellen Key 女史を思い起こす……しかも全世界に於ける最もよい「夫人」であり、一人の子供も持たないで、しかも全人類の最

も好い母となり、『恋愛と結婚』、『児童の世紀』等々幾多の名著を公にして、性問題について不朽の教訓を垂れ、北欧の一女流思想家にして、名声全世界に轟き、「愛」と「光」とに満ち満ちた・清らかな一生を終わったエレン・ケイ女史を憶い起こす。

- ・彼女にとっては……命は神聖であるという信仰。生命は無限に発展し、向上し、進化するという信仰。この二つの信仰の基盤の上に、彼女の「性」に関する偉大な思想的建築が、打ち立てられた。
- ・生命は、何が故に神聖であるのか。それは真・善・美に懂かれる「実在」であり、自由と、平和と、幸福とに浸り得る「可能性」そのものである。どうして生命の進化向上を主張し得るか、それは、アメイバーから、今日の人間が出来上がる迄の、幾百億年に亘る生物進化の歴史が、それを立証し、この神聖なる実在を認識し、尊重し、その限りない発展を助成するものでなくてはならない。
- ・生殖よりも、より高貴な、より神聖な、より尊厳な、より道徳的なものは、他にないというのが、エレン・ケイ女史の信念であった……キリスト教に於ても……禁欲主義によってのみ、純潔が保たれると信じたに反して、女史は、容赦なく反対の叫びを挙げ……女史にあつては、女性は、「母」であつて始めて貴い。
- ・女史によれば、人生の現実¹は生命の歩みによって跡づけられてゆく大道であり、生命なるものが、進化向上して止まないもの……その生命が跡づけていく大道もまた、向上の一路を辿るべき……判然たる生命礼賛、人生肯定によって、その主張が一貫されている。
- ・貴い生命を創造する生殖の仕事を、限なく礼賛し、その為の力強い紐足るべき恋愛を、……性欲をさえ、非常に重く見る……優れた生命を創造する時にこそ、始めて礼賛に値する……生殖は、享樂でなくして努力であり、恋愛は、悦樂でなくして、厳肅でなくてはならない……生殖は神聖であるというこの自覚の手綱によって、性欲の力強い悍馬を制御するところに、始めて人間としての面目が発揮される……この自覚に基いて、子孫の問題が考慮される時に、人生の平和と、社会の幸福とが、限りなく増進されてゆく。
- ・かくて「生殖」は、至上の使命をもつものでありまして、産むということは、両親の当然の権利ですが、産むに先だつて、如何なる子供が産まれるかを、予め検討することは、両親たる者の義務でなくてはならないのです。恋愛の結合によって、個人の幸福を享けることも、さることながら、個人の幸福が、懸民族の改善、社会の平和に役立つことが、更らに一層大切……この理論の裏づけとして、女史は、生物学、就中最近の遺伝学・優生学の知識を呼び……優良な子供を産み得る者にして、始めて、親としての尊敬を受くるに値する。

「正即ち性」(『生命に関する十講』124~125頁)で

- ・性問題について、私の最も尊敬し、我が意を得たるエレン・ケイ女史の意見を紹介……女史の思想の中軸をなすものは、『性は生なり』Sex is life という一語に尽きている。
- ・至高至大の生命を尊重し、熱愛し、その生命を創造すべき「性」の真相を、哲学的の、深淵名頭脳によって考察し、その考察を、科学者の精密な事実によって裏づけ……真剣な宗教家の、態度を以て宣伝すること、これが性教育及び性教育者の在り方でなくてはならない。

解題 8 永井潜『民族衛生』の言説

「巻頭語」『民族衛生』1巻1号 1931.3

「民族衛生の使命」『民族衛生』1巻1号 1931.3

「民族衛生の使命(二)」1巻3号 1931.8

「巻頭語」『民族衛生』3巻1号 1933.9

「巻頭語」『民族衛生』3巻4・5号 1934.6

「断種法に対する反対の反対」『民族衛生』3巻4・5号 1934.6

「人類改善財団と其の創立者ガスナー」『民族衛生』3巻4・5号 1934.6

「巻頭語」『民族衛生』4巻3・4号 1935.7

「巻頭語」『民族衛生』5巻1・2号 1936.4

「民族衛生振興の建議」5巻3・4号 1936.9

「巻頭語」13巻2・3号 1946.12

「巻頭語」1-1 1931.3

- ・吾等の求むる所のものは、至高至純の生命であり、吾等の擁護せんとする方法は、最も徹底的である。人生のあらゆるものゝ源泉たる生命、そしてその生命の根本を浄化し培養せんとするのが、吾が日本民族衛生学会の使命。
- ・生命の浄化こそ、人類を浄化する所似であり、人類の浄化は、即ち政治を浄化し、経済を浄化し、法律を浄化し、) 宗教を浄化し、芸術を浄化し將に学問を浄化する所似でなければならない。

「民族衛生の使命」1-1 1931.3

- ・人が、あらゆる人間生活の源泉で……一家の興亡も、一國の盛衰も、世界の平和も、皆夫れを構成せる人の如何によつて決定せられる……人生を向上せしめ、幸福ならしめ、安寧ならしめん為の根本策は、何よりも先づ、人間そのものを改善しなければならない。民族衛生学の使命は、民族としての人間本質の改善にほかならない。(2頁)
- ・『氏よりも育ち』か、『育ちよりも氏か』、換言すれば、自然か、教養か。遺伝か環境か。是こそ実に人間生活に於ける根本問題でなければならない……メンデル Mendel の研究によつて……ワイズマン Weismann を始めとし、多くの遺伝学者の実験的研究によつて……ヨハンセン Johannsen の純系に関する研究によつて、遺伝因子なるものが、如何にも頑強であつて、夫れに対しては、環境の影響が、如何にも無力であらねばならぬかが、最も明晰に支持された。(3~4頁)
- ・内的遺伝が第一義であり、外的環境は第二義でなければならない……遺伝因子に於いては、環境の力によつて、思うが俥に之を変化せしめやうと云ふが如きことは、殆んど望むべからざることであるから、人間を始め、生物の種性を改善せんとするに当たつては、何れの点から見ても、環境の力に希望を繋ぐことは出来ない。(7~8頁)
- ・一民族の生物的勢力は、その数と質とによつて決定され……数の減少は、屢々質の低下を来すことの事実である。(10頁)

「民族衛生の使命（二）」1-3 1931.8

- ・民族の将来を数の上から論ずるにしても、質の上から考えるにしても、その基準をなすものは、先づ如何なる生産数があれば現在の人口を維持し得べきか、即ち一夫婦乃至は生産年齢樹にある一婦人が平均幾らの子供を持てば、現在の人口を維持するに足るやと云ふ問題である。(59頁)
- ・現在の文明國に於いて、生産の減ると云ふことが、民族の中の優秀なる素質を有する者に於いて起こり、而して劣等なる者にそれが起こらないと云ふのであるならば、それは非常に心配すべき事である。若しそれに反して、優秀なる素質を持つて居る階級に於いては、生産力が旺盛であり、主として劣等階級に於いて生産の減退が起こると云ふことであれば、数に於いて減ることの心配を質の上に於いて補ふことが出来て、多少とも樂觀することが出来る。(61頁)
- ・文明國に於いて文化の爛熟すると共に、生産率の減退を起し、而かも夫れが専ら優秀なる素質を有する者の階級に於いて行はれることは、確かに明らかなる逆淘汰 Contra-selection である……逆淘汰の最も顯著なる一例を挙げれば、夫れは現在の戦争である。(66~67頁)

「巻頭語」3-1 1933.9

- ・よきたねを選び選びて教草 うゑひろめなむ 野にもやまにも 明治大帝の御製であり……優生学の思想は、炬火の如く輝ぎ、民族衛生の精神は、金鐵の如く響き互る。

「巻頭語」3-4・5 1934.6

- ・「善良なる遺伝的精神的遺産の如何に貴重なるかを深く心に銘記し、子々孫々に伝え、長く我家の守りとせよ」は、友鶴艇長岩瀬少佐の遺書である……遺伝の如何に重んずべく、稟賦の精神的遺産の如何に尊重すべきかを、諄々として後代に誨へた。

「断種法に対する反対の反対」3-4.5 1934.6

(2.17 名古屋支部のナチス断種法の批判座談会での批判に対して)

- ・立石謙輔 (名古屋控訴院長)
盲者、啞者、聾者、その他の不具者が、社会に其の生存を続け得て、其の天寿を全うし得るのみならず、其の子孫の繁栄をさえ期待し得ることは、人類社会に於いてのみ見ることの出来る仕合な現象。
- ・永井
(立石の意見は)麗しい世相の一で夫れがあることをや何人も否定することは出来ない。さりながら、『現に在ると云ふことと』、『将来無からしめやう』と云ふこと々とは、判然と区別しなくてはならない。現在世の中に生まれ来た聾啞や不具者を労はることが、人間の徳性の誇りであるとして、さて未来に斯る不憫な者が産れることを防圧せんとすることに反対すべき理由が、何処にあるだろうか。産れたものは仕方がない、十分に之を庇護しなくてはならない。併し夫れだからと云つて、斯る可憐な者が生まれ出づるのを、防圧すべき道があるにも関わらず、空しく手を拱いて成り行きに放任することは、断じ賢明なる人の取るべき道ではない。

優秀なるもの々出生が減退するに反比例して、劣悪なる者が遠慮会釈なく蔓る……断種と云ふことも……此の逆淘汰を是正せんとする大切な努力に外ならない。

・立石

今の医学の知識や、経験や、力では、精神病者の子孫に同様な遺伝の禍害を受けさせない様にすることが出来ないと云ふことは、如何にも情けない気がする……遺伝性を弱めるとか……絶無にすると云ふ様な事が出来ないものであろうか。人間として何とどのう惨忍なことの様に思われてならぬ。

・永井

研究が、着々として成就して行けば……遺伝の改善が思う儘に出来て……**断種法案**と云ふことは、歴史的の異物となると云ふ様な時代が来ないとは云へない……現在の知識の最高のレベルで準拠して、現在のことを捌いて行くより外、仕方がないではないか。而して現在吾等の有てる遺伝学の知識は、**断種の合法性**を十分に物語って居る。大河のために惜なく小我を犠牲に供する……社会大衆の生活を安寧幸福ならしめんがため。

現代遺伝学・優生学の知識を根拠として、此旧思想によつて閑却されつ々ある所の法律上の欠陥を満たすべく、新に**断種法の制定**を待望し、人文向上の大精神と、現在の法律的形式との間に介在する矛盾を取り除き、民族百年の長計を樹立せんことを期せんとして居る。

・齋藤最(弁護士)

強制的断種法には反対なるも、**任意断種法**には賛成

断種手術は、被手術者の治療若くは健康増進を目的とするものに非ず、唯単に被手術者の性行為により手出生することあるべき遺伝病者の禍害を防止する為、可憐なる、罪なき患者の身体にメスを加へ、各人、添付の生殖機能を剥奪するもので、到底これを、前述の治療行為及び予防行為と同一視して、強制断種の正当性を理由づけることが出来ない。

・永井

断種法を制定するに当たつて、これを強制的のものとするか、任意的のものとするかに就いては、種々議論があつて……**断種法の根本精神**を徹底せしめる為には、どうしても強制的でなければならぬ

法律が、個人の自由を尊重し、其の生命財産の保護に任することは勿論でなければならぬ、併しながら、夫れと同時に、法律は、社会を見、國家を見なくてはならない。

國家が、其の絶大の権力によつて、國民の生活基準を示し、個人の我儘勝手を抑圧して、民衆の社会生活をして、安寧幸福ならしめんが為に外ならぬのであつて、其の意味から云へば、法律の前には、國家社会が第一義であり、個人は第二義的存在であらねばならない。断種手術は、恰も種痘法の如く、強制さるべきもの……被手術者にとつて、多少の犠牲を余儀なくされる場合でも、民衆の永遠の寿命の為に、社会大衆の福祉の為に、國家が法令を制定し、審査機関を設置して、慎重なる態度の下に之を励行すべき。

断種法を以て、残酷なものとなし、隔離法によつて外界と遮断し、其の出生を不可能ならしめることを以て、理想と信じている……多数の精神病者や低脳者を隔離し、監視することは、非常に困難なことであり……夫れは國家にとつて非常なる負担であつて、

経済上到底行はるべきでことでない……程度の如何によつては、どうにか生業を営み得る者があるにも関わらず、凡て斯等の人々を缶詰にして、性の自由を奪ふことは、夫れこそ非常に残酷な仕打ちと云はなくてはならない。之に反して、**断種法**を施されて後、産児、育児の負担より免れて、安んじて家庭生活を営み、人生を味わうことが出来るのは、無能者低脳者に対する一大恩恵でなくてはならない。そして又、この事が、独り無能劣弱な当事者にとつて幸せであるばかりでなく、先天的に悪質の遺伝による暗い運命を以て、この世に生れ出で、親も悲み子も泣くと云ふ惨劇を省略することができるのは、最も大なる幸せと言はなくてはならない。**断種**を行ふことが残忍なのではなく、これを行わないで放任して置くことこそ、却つて残忍である。

優生学の使命は、人間をして最高最善の理想である所の神と、合一せしめんとする道しるべたるにある。 (39～51 頁)

「人類改善財団と其の創立者ガスナー」3-4・5 1934.6

- ・ **断種法**は……幾多喫緊切実なる社会問題の中、最も重要なものとして、各文化国の政府並びに民衆の関心を牽き、合衆国・加奈陀・瑞典・丁抹を始めとして、最近に於てはナチス政府に於ても、本年一月一日より其の実施を見たのみならず、英国・瑞典に於ても、其の**法案の通過は、今や時の問題**とならんとして居る。(75 頁)
- ・ 民族衛生学会は、茲に、会誌として、**断種法特集号**を刊行するに際し、巻頭にガスナー氏の小照を掲げ、人類の幸福と、民族の向上の為に、全世界に於る断種法の健全なる発達を祈る。(76 頁)

「巻頭語」4-3・4 1935.7

- ・ 近頃は、癩の問題や、**断種法の問題**が、盛んに話題に上がる様になつた……民族衛生の思想が、時と共に社会人の脳に滲透したことを物語るもので、寔に喜に堪えない。
- ・ 癩患者の激減等が、何れも隔離法によつて成功した実績を思ひ、並に確実に癩菌なるもの々存在が証明されたことから考へて、癩が、一種の伝染病であり、其の伝播を防ぐ為に、隔離法が、如何に有効であるかに関しては、一点疑う余地がないのであつて、吾等は医学及び人道の見地より、極力旧来の瞑妄誤謬を匡正し、天刑病と云ふが如き汚名から、憐れむべき癩患者を解放すべく、あらゆる努力を捧げなくてはならない。
- ・ 癩病と体質の問題で……癩は伝染病だと云ふ觀念に捉はれて、癩と遺传的体質との根本的調査を等閑に附することは断じて策を得たものではない……癩に於て、体質がどれだけ大切な役割を演ずるかを解決しなくてはならない。
近き将来に於ける本邦断種法の制定に際して……非合法に行はれつ々ある此癩患者の断種法適用をして、合法的ならしめることが出来る。之を要するに癩患者に対することも亦た、確に医家の一大責任でなくてはならない

「巻頭語」5-1・2 1936.4

- ・ 質の劣悪なるものが増加し、優秀なる者が逡滅して、逆淘汰が行はれるなれば、夫れは即ち国家の滅亡である。
- ・ 合衆国が始めて断種法を制定してから、正に三十年になる。而も**断種を實行した数**は、

まだ僅々二方に満たない。ナチス政府が此の法案を実施して以来、而も**断種を實行せし数**は既に十数万に達し、一昨年だけでも、五万六千二百四十四人に實行されている。盛んなる哉。ハイル ヒットラーを叫ばざるを得ない。

「民族衛生振興の建議」5-3.4 1936.9

よきたねを 選び選びて 教草 うゑひろめなむ 野にも山にも
この貴き三十一文字の中に、優生学の思想は炬火の如く輝き、民族衛生の精神は金鐵の如くひびき亘つて居る

大切なのは、国民の中、素質の劣悪なる者の数を制限すると共に、優秀なる者の数を増加せしめ、斯くして「数」と「質」との調和を計り依りて以て、国民素質の水準を高めること……これが民族衛生の使命。

第一 日本民族衛生研究機関の設立

速に、我日本民族の素質の改善向上の指針となるべきところの研究所の設立されること
が最も緊急事

第二 断種法の制定

断種とは生殖を不可能ならしめる手術のこと、断種法の主なる目的は、勿論民族の質の低下を防ぐのみならず、惹いては民族改善の実を挙げやうとするものであつて、現在の優生学的処分として最も有効なもので……近き将来に於て、世界中の何れの文化國にも、断種法が出来るだろうと予想せられます

第三 結婚相談所の設置

断種のみによっては、到底十分に満足な効果を収めることは不可能……断種される人は、病者当人だけで……自身病者でなくても、病的の遺伝因子を子孫に伝える人が多数あり……劣勢遺伝の場合……生殖細胞に病的因子を有つ為……之を未然に防がうとするのが結婚の統制

民族衛生協会によつて、優生結婚相談所が創立せられて今日に及んで居りますが……多くの人によつて利用せらる々には到つて居ません……官立の結婚相談所を設け、一般國民にその重大な意義を悟らしめ、人生の源泉たる結婚生活を浄化し合理化することが必要。

第四 民族衛生学的思想の普及徹底

第五 各種社会政策の民族衛生学的統制

「巻頭語」13-2・3 1946.12

- ・今次の惨敗を……皇国二千六百年の光輝ある歴史を汚し、一億の生民を塗炭の苦に陥れたことは……科学の精神を閑却した所に、最後の敗因があつた……退いては平和にほんの復興の上に、進んでは文化日本の建設の上に……民族衛生学の役割は、頗る重要なものであり、優生学者の責務は、非常に重大……現代の苛烈なる消耗戦は……由々しき逆淘汰。
- ・地狭くして……人口過剰……人口の合理的調節こそは、今後の日本國民に課せられたる一代問題……今ぞ、敗戦の一大創痕を癒やし、平和日本、文化日本の建設に邁進せんとする多端、多難、多望の曙に当り、我が協会の任務の愈々重且つ大なるものあることを自覚。

Ⅱ部 断種法（国民優生法）制定に至る動き

——日本における結婚制限・ナチ断種法の情報ルートを探る

Ⅱ部 断種法（国民優生法）制定に至る動き——日本における結婚制限・ナチ断種法の情報ルートを探る

はじめに

Ⅱ部では平塚は「いか程ほどの優生思想の持ち主」であるのかを、政策決定過程に関わった系譜と対比させることで査定される。

1. 構成は以下の通りである。

Ⅱ部 断種法（国民優生法）制定に至る動き——日本における結婚制限・ナチ断種法の情報ルートを探る

はじめに

Ⅱ-1 Ⅱ部年表：主流と傍系の系譜から見る「断種法（国民優生法）制定に至る動き」

Ⅱ-2 註

Ⅱ-3 文献リスト

2. Ⅱ部は、Ⅱ-1の年表がメインになるが、これを作成した目的は次の二点にある。

一点目は政策決定過程に関与したエリート男性主導の優生運動と対比させることで、平塚の優生思想との違いを読み取れるようにすることである。

二点目は欧米の優生学情報を「誰が、どの時期に、どのような立場で入手するのか」で、各人の役割・影響力を査定しやすくすることである。

I部冒頭に掲載した年表をたたき台にしつつ、I部に引き続き、欧米の結婚制限法や断種法情報の日本への紹介・導入期から、国民優生法制定までの時期が、Ⅱ部年表と註で詳細に検討される。

岡田論文では年表は以下のような①～⑤に区分にしていた(岡田[2005a]43-44)。

- ①1903/04年頃に大澤の生理学講義を聴いた若き日の平塚と永井。彼らは「結婚制限関連」の最新の外国事例を概要レベルであっても大澤を介して知っていたと考えられる。
- ②1920/21年の新婦人協会の請願提出において荒川の賛同を得る時期
- ③断種法制定気運が高まる1930年代前半の荒川と永井の法案提出に関する齟齬や協議が見られる時期
- ④1940/41年頃の国民優生法施行の時期の平塚と永井の活動
- ⑤1948/49年の優生保護法成立と改正の時期の平塚と永井の活動

Ⅱ部では①～④までが扱われるが、日本の断種法（国民優生法）制定に至る動きは六期に分けている。断種法制定運動に関する重要情報はほぼ網羅的に記載した。

Ⅱ部年表と註によって、個々人の優生情報の摂取の仕方、法案提起のための協働、優生学団体の立ち上げ方、厚生省官僚との繋がり等がかなり見えてくるであろう。

主流と傍系の「断種法(国民優生法)制定に至る動き」を概観し、日本における結婚制限・ナチ断種法の情報ルートを探ることを主目的として、Ⅱ部年表は作成されている。Ⅱ部年表はそれ自体が、優生学の歴史研究方法論の道標になると考える。断種法(国民優生法)制定に至るまでの主流と傍系が、自ずと峻別されよう。男性主導の優生運動だけが政策決定過程に関与できたのであり、戦前日本の女性運動は、とりわけ少数派であるフェミニズム/フェミニストは、蚊帳の外にいた。傍系という表記自体がためらわれるほどである。

作成作業を通して、改めて第一次世界大戦の予想外の長期化が優生運動・優生政策への関心を異様に高める契機になることを納得させられた。これは欧米優生学の歴史では常識とはいえ、戦時下の人口問題・食料問題の経験がない日本が、この時点で欧米情報から前倒し的に優生政策に関与していく背景と、「誰が」主導権を握るのが、年表から読み取れるであろう。

1920年代、日本でも人口政策・家族政策と優生思想との癒着が出てくる。むろん内務省官僚は人口政策にはダイレクトには熱意は示さない。が、それは人口政策の舵取りの難しさへの躊躇であって、人口政策そのものに消極的であったわけではない。人口が恒常的に保持される限りは、国家介入はしないという方針にすぎない。平塚の花柳病男子結婚制限法案の請願運動もそうだが、こうした時代思潮の下で人口政策の一環で優生運動が盛り上がりを見せていく。永井のここでの活躍ぶりは他を圧していた。東大医学部教授という地位が、彼の啓蒙活動と断種法制定運動に、「学」的な刻印付けをしたし、彼もそれを研究業績代わりにした。

なおⅡ部での考察結果を先に要約して示しておこう。

結婚制限に関してはドイツ・アメリカ・北欧の情報が等しく影響力をもつが、政策としての強制断種はナチ断種法制定が決定的な影響を日本に与えたことが立証された。「日本国民一億のうち、一千万位は断種しても」という極端な提案が1939年に出ている。いわゆる低脳は全部断種しろという案である(座談会[1939]179)。

断種法(国民優生法)制定の決定打になるのは、ナチ断種法であり、東大医学部出身者による運動・政策提言であった。永井がその中心人物であった。女性主導の運動は永井が仕切るものには言及するが、ここでも永井は平塚に代表されるフェミニズムの影響は無視を貫く。永井と平塚が再び同じ舞台上、似たような優生学的言説を披露するのは、敗戦直後のことであった。それはⅢ部で検討される。

【Ⅱ部主要参考文献】

(人口問題と断種法)座談会(1939)「人口問題と断種法座談会(古屋, 青木, 三宅鉦一, 下村宏, 上田貞次郎, 齊藤茂三郎, 三宅驥一ほか)」「科学知識」19-9, 172-182.

II - 1

II 部年表：主流と傍系の系譜から見る「断種法（国民優生法）制定に至る動き」

| 区分 | 期間 | 区分の説明 | 関連人物 |
|-----|--------------------|-----------------------------------------|--------------------------------|
| 第一期 | 1873～1915 | 初期海外情報紹介期 ※内務省設置から大澤謙二退官まで | 内務省、大澤謙二、氏原佐蔵、永井潜 |
| 第二期 | 1916～1926 | 海外情報を具体的に検討する時期 ※保健衛生調査会設置と永井始動 | 内務省、氏原、永井 |
| 第三期 | 1927～1929 | 国家介入が始まる時期 ※永井の内務省と医師会への影響力 | 内務省、氏原、永井、日本医師会、精神医学者 |
| 第四期 | 1930～1933.6 | 官民一体の断種法論議の時期 ※民族衛生特別委員会設置と民族衛生学会の成立 | 内務省、議員、永井、古屋芳雄、精神医学者 |
| 第五期 | 1933.7～1937 | 断種法草案作成、提出の時期 ※断種法成立で加速される動き | 内務省、青木延春、荒川五郎、八木逸郎、永井、古屋、精神医学者 |
| 第六期 | 1938 ～1945.8.14 | 厚生省が断種法制定へ驀進する時期 ※厚生省優生課設置から断種法成立まで | 厚生省、青木、古屋、八木、精神医学者、平塚らいてう |

◇ 時期ごとで、とりあげる人物等が異なるため、年表の横の表区分の項目が各期で異なっている。

断種法（国民優生法）制定に至る動き [第一期 初期海外情報紹介期]

| 年 | 内務省 | 氏原佐蔵 | 永井 潜 | 大澤謙二 | その他 |
|------|-------------|------|----------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| 1873 | 11.内務省設置 | | | 1.ベルリン大学入学 | |
| 1874 | | | | 8.ドイツより帰国 12.東京医学校二等教授 | |
| 1875 | 6.内務省に衛生局設置 | | | 来日したドイツ人教師・生理学者 Tiegel の助手を兼務 | |
| 1876 | | | | ドイツへ私費留学ストラスブルグ大学入学 | |
| 1878 | | | | 帰国し東京大学医学部正教授 | |
| 1879 | 7.中央衛生会設置 | | | 2.大日本私立衛生会幹事 | |
| 1882 | | | | 東京帝国大学医科大学長就任 貴族院議員に勅撰される | |
| 1883 | | | | | 2.大日本私立衛生会発会 |
| 1891 | | | | | 富士川游、ドイツのイェナ大学に入学し、ドクトル・メデイチーネを取得して1900年帰国 |
| 1898 | 保健衛生調査室設置 | | 9.東京帝国大学医科大学入学 | | |
| 1901 | | | | 日本女子大学校教授を兼務 欧米各国に派遣され最新資料や情報を入力 ※1 | |
| 1902 | | | 12.東京帝大医科大学卒業 | 帰国。生理学の2講座担当 | |
| 1903 | | | 1.大澤の生理学教室で助手 3.文部省官費留学生で欧州へ、独ゲッツェンゲン大学入学 | | 平塚らいてう、日本女子大学家政学部入学し大澤に生理学を学ぶ ※2 |
| 1904 | | | | 10.『社会的衛生 体質改善論』：「去勢術」の紹介 ※3 | 三宅鈺一、ドイツなど欧州留学。1907年帰国 |
| 1905 | | | | 1.「体質改良と社会政策」『東京医事新誌』：「人種を改良し国民を強健ならしめん」 4.日本花柳病予防会副会長 | 4.日本花柳病予防会発会 4.富士川游、雑誌『人性』創刊(～1918.12)：ドイツ語タイトル <i>Der Mensch</i> で、ドイツ最新情報を提供 |

| | | | | | | | |
|------|----------|--|--|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|---------------------------------|---------------------------------------------------------------|
| 1906 | | | | 試験合格-専門は衛生学 | 9.帰国。生理学教室助教授 | | 米国インディアナ州世界初の断種法を制定 |
| 1907 | 3.癩予防法公布 | | | | | | |
| 1908 | | | | | 1.『医学ト哲学』:大澤の在職25周年記念出版 | | 『報知新聞』「生理学上より観たる婦人の根本問題」連載※4 |
| 1909 | | | | | | | 11.『通俗結婚新説』「去勢術の必要」説く ※5 |
| 1910 | | | | 内務省衛生局技師 | | | 平塚らいてう「退京」『活動』 ※6 |
| 1911 | | | | | 医学博士号取得 | | 三田谷啓、ドイツのゲッチンゲン大学でドクトルの学位取得、ミュンヘン大学で学び1914年帰国第1回国際優生学大会(ロンドン) |
| 1912 | | | | | | | |
| 1913 | | | | | 7.『生命論』人類改良学 | | |
| 1914 | | | | 4「民族衛生の勃興を促す」『大日本私立衛生会』※7 5「民族衛生学発達史」同上 6「民族衛生学の職責」同上※11 『民族衛生学』:「滅種法」を紹介 ※8 6/9『読売新聞』「癩病と結婚」 | 3.「結婚と健康診察(二)」『新真婦人』:「去勢」 ※9 | 日本医学会会頭 『日本女子大学講義【9】生理学』 ※10 | 7.第一次世界大戦勃発 |
| 1915 | | | | | 1.大澤の後任で主任教授に 6.「人種改善学の理論」『人性』:「生殖防止ノ手術」 ※11 | 1.教授職を退官 | 日本初、ハンセン病患者への「輸精管切除術」実施 ※12 |

断種法(国民優生法)制定に至る動き [第二期 海外情報を具体的に検討する時期]

| 年 | 内務省 | 氏原佐蔵 | 永井 潜 | その他 |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1916 | 6.保健衛生調査会設置(専従職員なし) ※13 | 5.海外出張(米国と思われ。ヨーロッパは第一次大戦中で不可) | 6.保健衛生調査会委員となる 7.調査会で「ユゼニツカス」発言※14 7.『人性論』:「輸精管切断法」[輸卵管切断法]により「受胎不能に」※15 11.「大切な種姓血統」[婦人衛生雑誌]:「或る外科手術」で「悪質者をして生殖不能に」 ※16 | 1.1『婦人公論』創刊 10.平塚「男女性的道徳論」[婦人公論]:「花柳病男子から何らかの方法で結婚資格を奪うくらい程度のことではできなければならぬ」 |
| 1917 | | | | 2.大日本優生会創立 |
| 1918 | 4.保健衛生調査会に専任職員8名を任命 | 1.海外出張(米国か) 4.保健衛生調査会専任技師となり、結核予防法・精神病院法の原案作成 | 1.2「悪質者の遺伝」(上)(下)『児童』 3.「戦争と人種衛生」『向上』 5.「遺伝上より観たる感化事業」[社会と救済] | 11.第一次世界大戦終結 |
| 1919 | 2.第41議会で杉山衛生局長の答弁:アメリカの「遺伝的精神病者を発生せしめないやうな方法」紹介 ※17 3.結核予防法、精神病院法公布 | | 2,3「民族の衰亡」[監獄協会雑誌] ※18 7.「花柳病者の結婚を禁止せよ」[婦人公論] ※19、「人類の再生と民族の盛衰」[婦人衛生雑誌] | 暮れ、平塚は花柳病男子結婚制限法制定請願の草案をまとめる |
| 1920 | 2.第42議会で潮衛生局長の答弁:新婦人協会「花柳病男子結婚制限法制定」請願の請願委員会で7月カ「滅種法」の紹介 ※20 | 2.「保健調査実績及計画」[大日本私立衛生会] 4.第一次世界大戦後の欧米各国を官命により回り資料蒐集 ドイツ運動競技展覧会を見学 | 4.「優生学講話」[婦人公論] 4.講演「戦後の人種衛生」 11.宮中某重大事件に關与(皇太子婚約者の色盲遺伝について) | 2.穂積重遠「優生学と婚姻法との關係」[廓清]:「生殖不能ならしめる手術…人道上から議論もあらう」 6.5 平塚、全国社会事業大会出席。 矢吹慶輝、生江孝之、田子一民ら参加の懇親会で花柳病男子結婚制限等の請願運動に賛意を求める。 11.平塚「花柳病と善種学的結婚制限法」[女性同盟] ※21 |
| 1921 | 大正10年度の保健衛生事業の新規調査として「優生学及優境学と結核問題」盛り込まれる 6.保健衛生調査会総会で永井潜ら提出の「民族衛生に關する建議」が全会一致で可決→「民族衛生」が正式に公で論議 ※22 | 欧米視察より帰国 6.保健衛生調査会花柳病予防に關する特別委員会の委員となる。欧米視察の要項を報告する ※23 | 4.日本女子大で大澤の後任で生理学、民族衛生を講義(~1939.3) 6.保健衛生調査会総会で三宅秀、林春雄、北島多一、矢作栄蔵、栗本庸勝、唐沢光徳らと提出の「民族衛生に關する建議」が全会一致で可決 | 2.暉岐義等「民族衛生の理想と優生学的種族改善の理想」[改造] 4.内村鑑三の友人として来日の米国籍精神病学者マツンバー(ハンツルバニョ州立「白痴院々長」)が東京精神病学会で断種法について講演。通訳は杉田直樹。吳秀三東大教授は慎重に |

| | | | | |
|------|--------------------------------------|-------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | | | 考えるべき、と否定的発言(内村祐之[1940.5.27]5) 5. マーチン・パー(ペンシルヴェニア州立エルウィン低脳児教育学校主任医長)「低脳児発生の社会的予防」『社会事業』: 4月の講演の抄録・第2回国際優生学大会(ニューヨーク) |
| 1922 | 調査会、「運動、協議、武術其の他積極的体力増進施設奨励に関する建議」 | 『妊産婦及児童保健に関する社会的施設』 | 7. 第1回日本生理学会を東京大学で開催 6. 摂政宮の要請で栄養問題、体育問題を講演 12. 『衛生読本』の「活動と休養」、「健康と鍛錬」執筆担当 | 3.10 マーガレット・サンガー来日 12. 大原社会問題研究所編『日本社会衛生年鑑』で「民族衛生」の項目が独立 ※24 ・アメリカ優生学協会(American Eugenics Society)設立 9. 関東大震災 |
| 1923 | | 3. 「独逸民族衛生協会の声明書を読み」『公衆衛生』※25 | 6. 日本公衆保健協会設立に参加し、理事に | 1. 後藤龍吉、日本優生学会設立し『ユゼニク』→『優生学』発刊 3. 杉田直樹『異常児童の病理』: 米国の強制的「絶産手術」を紹介するが、実際上の「効果を挙げるまでにはゆきませぬ」 ※26 7. 大澤、第3回日本生理学会で「性学に関する統計」講演 ※27-1 ・カール・ピアソン(Karl Pearson)英国で雑誌 <i>Annals of Eugenics</i> を創刊 |
| 1924 | | 『国民保健と運動奨励』で積極的優生論 | 11. 調査会発行の小冊子で「優生学の話」担当 | |
| 1925 | | 6. 日本公衆保健協会設立に参加し、理事に | 3. 『奨健行政の興振を提唱す』『日本公衆保健協会雑誌』: 積極的優生学の提唱「衛生行政の大本は……生まれながらに強健なる素質を有せしめ、更に之を鍛錬し積極的に其の増進を図ること」 12. 『売笑婦及花柳病』 | |
| 1926 | 関東東北医師大会で山田衛生局長が講演: 粗製乱造的な多産主義の根本的改善 | | | 9. 池田林儀、『優生運動』発刊 9. 矢吹慶輝は「社会事業概説」で、新婦人協会の花柳病運動を紹介 12.25 大正天皇没 昭和と改元 |

断種法 (国民優生法) 制定に至る動き 【第三期 国家介入が始まる時期】

| 年 | 内務省 | 氏原佐蔵 | 永井 潜 | 日本医師会 | 精神医学者 | その他 |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------|
| 1927 | <p>・予算編成期に衛生局が民族衛生の基礎的調査のため施設調査費として3万円要求するが議会解散</p> <p>3.花柳病予防法成立</p> <p>4.5.花柳病予防法公布</p> <p>7.人口食糧問題調査会設置 (首相が会長・所管は社会局・法制学者主導)</p> <p>10.同会第1回人口部特別委員会</p> <p>10.28内務大臣から日本医師会へ「民族衛生施設二閣スル意見如何」諮問 (所管は衛生局) ※28-1</p> | <p>2.「日本農村住民発育の研究」で学位を受く</p> <p>11.「人口問題と産児制限及優生論」『大調和』</p> | <p>3.内務省衛生局主催の母性及小児保健講習会で「母性及小児と遺伝との関係」を講義</p> <p>・人口食糧問題調査会臨時委員となる：同会には医者が一人もななく、下村宏の推薦で永井のみ入る。当初永井は産児制限論者だと難色を示されたが「永井は悪質者を生ませないといふだけで寧ろ人口増加論の方」だと弁明 (下村談[1939.9])</p> | <p>10.29 日本医師会第5回総会で内務大臣諮問「民族衛生施設に関する意見如何」が提示され、山田衛生局長より説明：「優良な子供を生むことに依つて将来の民族を改造…悪い体質、精神の子供を多くして民族の改善、社会負担を少なくし、幸福を増進」するための参考に諮問。医師たちは「民族」という言葉に違和感</p> | <p>11.5 杉田直樹、日本医師会医政調査会で「精神病者の断種実施に就いて」講演：断種手術の変遷、外国の断種法、断種実施の学術的根拠</p> <p>↓</p> <p>講演が『医政』11月号に、『東京医事新報』12月に掲載</p> | <p>3.蔵相失言により金融恐慌</p> |
| 1928 | <p>6.衛生局は人口問題解決に国民体質の改善を計る必要ありとして、基礎的調査費として約1万円の予算を要求</p> <p>7.人口食糧問題調査会人口部特別委員会の調査事項の中で優生問題に対して、永井潜、永井亨、福田徳三の3委員からなる小委員会が審議を進める</p> <p>9.1 花柳病予防法施行</p> <p>10.人口食糧問題調査会人口部特別委員会の小委員会「優生問題産児制限問題二付テ協議セムガ為ノ会合」開催</p> | <p>5.日本赤十字社主催民族衛生展覧会で「民族衛生上の社会施設」を講演 ※29</p> | <p>1.人口食糧問題調査会「結婚に関して健康法証明書を必要とする法規」、「絶種的手術を必要に応じて認容する法規」の制定を主張</p> <p>3.日本医師会医政調査会で「優生学に就て」講演</p> <p>講演：ユゼベニックス関連の研究所設置、優生学教育と宣伝の機関設置、国家が結婚に規定を設ける</p> <p>7.人口食糧問題調査会人口部特別委員会で優生問題審議の小委員会となる</p> | <p>3.6 永井潜、日本医師会医政調査会で「優生学に就て」講演</p> <p>6.医師会方針：国費を以て民族衛生思想の設置、民族衛生思想の普及を計ること</p> <p>11.5 杉田直樹、日本医師会医政調査会で「精神病者の断種実施に就いて」講演</p> <p>11.5 東京帝大法学部教授小野清一郎、医政調査会で「断種に関する法律家の所見」講演：強制的断種立法の必要を説く</p> | <p>9.スイスでヨーロッパで最初の断種法制定</p> <p>労働争議、小作争議頻発</p> | |

| | | | | | |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>12.7 社会局で永井潜、永井享、福田徳三、社会部長、職業課長ら関係官出席で、小委員会案を審議し「優生問題」に対する答申案を作成し、人口食糧問題調査会、人後部特別委員総会に附議決定し、「絶種的手術を必要に応じて認容する法規制定」が盛り込まれる</p> <p>12.11 日本医師会総会で山田衛生局長が答申に対する御礼の挨拶</p> <p>12.19 人口食糧問題調査会、人口部特別委員総会に永井ら作成の小委員会案案提出</p> | | <p>12.7 小委員会で私案提出し審議し、特別委員総会への答申案作成</p> <p>12.11 日本医師会の内務大臣への答申は、「優生学は永井潜博士…の御意見を伺つて答申案を作成」(東京朝日)とあり、強制断種にまで踏み込んだ内容への影響大</p> <p>12.19 人口部特別委員総会で小委員会案を提出：「民族衛生に関する調査宣伝機関の設立」「実行的施設」「法規の制定」</p> | <p>12.3 日本医師会医政調査会総会で、内務大臣への答申案について特別調査委員会から報告があり原案通り可決</p> <p>12.11 日本医師会第7回総会で答申発表 「断種し得るやう法規を制定」断種対象者は「悪質遺伝の憂ある遺伝病者、低脳者、変質者、及常習犯罪者」 ※28-2</p> | <p>12.11 東京朝日「けふの医師総会で人間濫造を防げと内務大臣へ勸説 断種、制産の新法律も設けよ」の見出し。「断種といふ言葉は今度はじめて新しく訳したものの」、日本医師会答申は、「優生学は永井潜博士、精神病学は杉田直樹博士…の御意見を伺つて答申案を作成」と作成担当者瀬川医博の談話</p> |
| 1929 | <p>12.人口食糧問題調査会の答申「人口統制に関する諸方策」：人口部特別委員会の「優生運動に関する調査」担当の小委員会の永井潜が答申の中に「優生学的見地よりする諸施設に関する調査研究を為すこと」という一項目を入れさせた ※30</p> | <p>「婦人体格の改善」「同仁」</p> | <p>人口部特別委員会小委員会に出席 保健衛生調査会出席 7.19 欧米視察へ出発 8.万国生理学会(ボストン) 9.英、仏、伊、独を巡遊し各国の優生学的問題を調査。スウェーデンのウツラの世界初の国立民族衛生研究所を訪問し、日本に於ける同種の研究機関の必要を痛感 12.30 帰国</p> | | <p>1.平塚らいてう「花柳病予防法の修正を望む」『婦人公論』：現行法の不備を追及 1.北村兼子「優生学、ちよつと待つて」『社会事業研究』 ・第7回優生学団体国際連盟に出席した阿部文夫ら、優生学会の設立を主張 ・デモンマークで断種法制定(「生殖不能化許容に関する法律」)</p> |

断種法（国民優生法）制定に至る動き [第四期 官民一体の断種法論議の時期]

| 年 | 内務省 | 議員 | 永井 潜 | 古屋芳雄 | 精神医学者 | その他 |
|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1930 | <p>3.人口食糧問題調査会廃止</p> <p>3.保健衛生調査会に「民族衛生に関する特別委員会」設置し、「滅種法」を論議 ※31</p> | <p>2.20 総選挙</p> <p>5.第 58 議会へ中馬興丸「帯患者結婚制限法制定に関する建議案」提出；外科手術により子孫繁殖の途を絶つ法の制定要求 [賛成者 32 名に八木逸郎、荒川五郎あり] ※33</p> <p>11.日本民族衛生学会評議員：金杉英五郎、一宮房次郎</p> | <p>3.保健衛生調査会に設置の民族衛生に関する特別委員会の委員となる断種法を調査研究</p> <p>7.10 東京帝大生理学教室で民族衛生学会創立の相談会（永井、古屋芳雄、芦田均、八木秀二） ※34</p> | <p>1.「民族衛生学（優生学）の社会医学的使命」『優生学』</p> <p>8.「中産階級は絶滅か新マカス主義浸潤の危機」『優生学』：逆淘汰論</p> <p>11.30 日本民族衛生学会発会式で常務理事就任。記念講演「産児調節と社会的貧困」を講演</p> | <p>11.30 日本民族衛生学会発会式で三宅鉦一は理事就任。記念講演：杉田直樹「遺伝と犯罪」、三宅鉦一「社会問題としての精神低格者」</p> | <p>・世界恐慌、日本に波及</p> <p>11.日本民族衛生学会評議員：三宅秀、建部遯吾、新渡戸稲造、土肥慶蔵、高野岩三郎、穂積重遠、鳩山一郎、洪沢敬三、富士川游、竹内茂代、吉岡弥生、田子一民、矢作栄蔵、栗本庸勝、川上理一、川田貞次郎、久保良英、石川亮一</p> |
| 1931 | <p>7.保健衛生調査会民族衛生に関する特別委員会第4回会議で、永井が「滅種法」の講話</p> <p>12. 同調査会民族衛生に関する特別委員会第6回会議で、三宅鉦一が「断種法と精神病学との関係」など精神病学の遺伝に関する講話</p> | <p>3.日本民族衛生学会機関誌『民族衛生』創刊</p> <p>7.日本精神衛生協会臨時総会で顧問となる</p> <p>7 保健衛生調査会民族衛生に関する特別委員会第4回会議で「滅種法」の講話 ※35</p> <p>7.東京帝大生理学教室を訪れた R. H. Johnson と会見</p> <p>9. Johnson の慰労送別会を開催</p> | <p>・「優生学原理と人類遺伝学」</p> <p>4.日本女子大学校講師となり民族衛生担当（～1932.3）</p> | <p>吉益脩夫『社会防衛としての断種の問題』：任意断種は可</p> <p>6.日本精神衛生協会発会式（三宅鉦一会長）</p> <p>7.25 日本精神衛生協会主催の歓迎晩餐会で R. H. Johnson が「米全国各地に於いて実施しつつある精神薄弱者に対する断種の状況」について講演</p> | <p>1.17 日本産児調節連盟結成（馬島欄、石本静枝ら）：平塚も理事となり活動</p> <p>7.平塚、安部磯雄らの随胎法改正期成同盟会の趣旨書呼びかけ人となる</p> <p>7～8.『応用優生学』（1929）の著者で米国民優生協会の Roswell H. Johnson が来日し全国各地で優生学講演、座談会、各種視察を行う</p> | |

| | | | | | | |
|--------------|----------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|
| 1932 | 11.内務省発起のもとに官民有志による人口問題研究会を内務省社会局福利課内に設置 ※37 | | 10.学会第1回学術大会特別講演「断種法の過去及び現在」：一日も早い断種法制定を主張 ※36 9.学会総会で民族衛生相談所開設を申合せ 11.学会第2回学術大会で「民族の混血に就て」を講演 11.人口問題研究会発起人会で委員となる | 4.金沢医科大学教授(衛生学教室) 就任 8.「人類遺伝病講座I」「民族衛生」 | 10.同協会『精神衛生』創刊 4.同協会評議員吉益、同協会の前橋市での精神衛生講演会で「変質並に優生学的断種に就て」講演 9.吉益、民族衛生学会編集幹事就任 11.日本医師会医政調査会総会で内務大臣へ提出の答申承認：「不良素質者及異常的或は強制的断種の研究調査をなす」 | 9.「満州事変」始まる ・不況さらに激化 ・日本学術振興会の設立 ・「非常時・国難・挙国一致体制」などの言葉の使用目立つ |
| 1933. 1-6 | | 3.第64議会在荒川提出「少年救護法」が可決成立 5.日本民族衛生学会広島支部発会式に荒川五郎出席し、永井は「結婚と民族衛生」を講演 | 4.「人類遺伝病講座II」「民族衛生」2-5 ・『民族生物学概論』 6.学会、優生結婚相談所を白木屋に開設：幸福な家庭と優良な子孫 ※38 | 4.「人類遺伝病講座II」「民族衛生」2-5 ・『民族生物学概論』 | | 3.日本、国際連盟に脱退を通告 |

断種法 (国民優生法) 制定に至る動き [第五期 断種法草案作成、提出の時期]

| 年 | 内務省 | 青木延春 | 荒川五郎 | 八木逸郎 | 永井 潜 | 古屋芳雄 | 精神医学者 | その他 |
|--------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------|----------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|
| 1933.7 | 10.人口問題研究会、財団法人となる。人口問題に関する各種調査研究と政府に対する諮問答申、建議等を行う 11.11 日本民族衛生学会「結婚強調日」を文部省、警視庁、東京市と共に後援 | 9.内務省衛生局予防護勤務健全協会に入会し、『日本公衆保健協会雑誌』編集委員に | | | 9.「独逸に実施せらるゝ断種法及結婚助成法」『民族衛生』 10.14『大阪朝日』「ナチの向ふを張つて来議会に”断種法”を出す」：第65議事に学会建議案提出予定の永井談話「荒川五郎代議士には話してあります」、ナチ断種法の詳細な紹介記事 11.4~学会、日本赤十字社と共催で結婚衛生展覧会開催 11.11 結婚衛生強調日として「配偶者選択の標準」を講演。映画「結婚十字街」製作 | 7.「人類遺伝病講座Ⅲ—全国之母なる人にさゝぐ—」『民族衛生』 12.「人類遺伝病講座Ⅳ」『民族衛生』 | | 7.14ナチ断種法(遺伝病子孫防止法)制定 |
| 1934 | 5.30 永井らとの断種法協議会に大島衛生局長ほか4課長が出席 11.22,12.21 保健衛生調査会の民族衛生に関する特別委員会、優生法案を審議 | 4.論文「大脳皮質各小域出生後の発達に就て」により学位を受く(東京帝大三毛鉦一門下) | 1.第65議会に民族優生保護法案提出(荒川、池田秀雄)：ドイツの「劣性人絶種法」を紹介 →審議未了 ※39 | 5.30 断種法協議会：断種法案をもち、八木を介して内務省衛生局長らと会合。政府案として提出することとなるが、その後局長交代もあり、この計画は一時頓挫 ※41 | 4.学会第3回学術大会で「断種法に対する反対の反対」を講演 ※40 | 『医学統計法の理論と其応用』 3.「人類遺伝病講座Ⅴ」『民族衛生』 | 5.30 吉益、断種法協議会に永井らと出席 6.吉益、「優生学的断種の精神病学的適応」、「アウェー」断種法草案の批判」『民族衛生』 | 1.平塚らについて「本議会に何を期待するか」に「何の期待も持たなくなつていった」と荒川の断種法案に全く触れず無視 ・スウェーデン、ノルウェーで断種法制定 |
| 1935 | | | 2.第67議会に民族優生保護法案提出(荒川・八木・池田・青木亮貴)→審議未了 ※42 | 6.『婦人之友』対談「優生学的に見た結婚と遺伝」 ※43 | | 2.「断種法とその背景」『改造』：断種 | 4.安田徳太郎「断種法への批判」『中央公論』 | ・フィランドで断種法制定 |

| | | | | | | | | |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------|----------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|
| 1936 | [内閣調査局] 10. 専門委員の南岩男「保健国策の体系」公表する私見」公表『東京医事新誌』:「日本国家の完成、大和民族の発展」のため「優生的方面」として「結婚相談」「断種法」を政策立案の対象に揚げる | 10. 「北米合衆国に於ける断種法の現状」『日本公衆保健協会雑誌』 | 7. 全国医師大会で衛生省新設宣言可決(金杉、八木) | 1.15 『読売』「悪質の遺伝病者に子を産ませぬ法律 健全なる日本人を作る断種法愈々」:荒川、八木、永井の写真あり | <p>「優生学上断種法の制定を待望してやまない」</p> <p>7. 財団法人日本民族衛生協会に改組</p> <p>12. 第3回結婚衛生強調の集い: 日本優生結婚普及会発会し会長就任、講演・映画 ※44</p> | <p>法は「内務省で委員の手に銓衝されつつ、あるが、恐らく近き将来の議事に提出される、に到るであらう」</p> <p>10. 民族衛生協会設立石川支部を設けし支部長となる『民族問題をめぐりて』</p> | <p>7. 吉益、「スキャンダル」イ三國の断種現行法、「結婚相談と結婚相談所の機構に就いて」『民族衛生』</p> <p>12. 吉益、「臨床精神病学と優生学」(1934年) 独逸精神病学会総会の講演抄訳『民族衛生』</p> <p>4. 三宅敏一、東京帝大内に脳研究室を開設</p> <p>8.23 「精神病対策確立に関する陳情書」内務大臣宛に日本精神衛生協会展長・公立及代用精神病院協代会理事長三宅敏一、救済会理事長内村祐之:「断種法の制定」断種法を制定して出来る限り遺伝性病者の発生を予防せられたし ※46</p> <p>10. 金子準二「強制的断種法の制定反対」『社会事業研究』</p> | 3.5 国民純潔同盟結成: 廢娼連盟の人びとを中心に公娼廃止後の風紀対策を目的 |
| | | | | <p>1. 放送局の依頼により「優生学上より見たる日本民族の優秀性」を講演放送</p> <p>2. 協会の断種法案の骨子でさる ※45</p> <p>7. 協会代表して政府へ「民族衛生振興の建議」提出: 日本民族衛生研究機関の設立、断種法の制定、結婚相談所の設置等</p> <p>7. 国民体力問題調査委員会となる</p> <p>10. 国民体力増進会議の4分科会(優生・体育食糧・衣料)で優生担当</p> | | | <p>1.14 『読売』「親も泣く低脳の子へ明るい"陽春・東大脳研究所開く」</p> <p>3.11M. サンガ一、インドより婦米の途、神戸に立寄る(1922年)以来の来日)</p> <p>6. 陸相発言: 徴兵検査で体質体力の劣弱化傾向</p> <p>6. 参謀本部「国防国策大綱」</p> <p>7. 陸軍省「衛生省設立の急務」閣議提出</p> <p>7. 日本學術振興会(学派)内に国民体力問題調査</p> | |

| | | | | | | | | | |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1937 | <p>12. 母子保護法案要綱発表</p> <p>2. 政府は母子保護法案を第70議会に提出成立。3.31公布</p> <p>7. 保健社会省新設閣議決定：「支那事変」で国民体力向上</p> <p>8. 内相、日本医師会へ諮問「国民体力向上具休策」の医師会答申：「断種法の制定」※47</p> <p>12.24 厚生省設置閣議決定(省名を厚生省)</p> <p>12.29 厚生省設置を枢密院本会議で決定</p> <p>11.(財)人口問題研究会主催第1回人口問題全国協議会開催：国立人口研究機関設置の建議</p> | <p>1. 「精神病者の早期退院と院外保護」『日本公衆保健協会雑誌』</p> <p>11. 「事変と精神衛生」『日本公衆保健協会雑誌』</p> | <p>12.2 荒川、八木、永井、三宅鉦一、吉益ら第70議会へ断種法提出の会合：協会では、たとえ通過しなくても議会に出して社会の関心を高めたいとして、八木、荒川と懇談の上協生保護法案として提出することになる</p> <p>12.12 読売「悪血の泉を断つて護る民族の花園 研究三年各国の長をとつた『断種法』 愈よ議会へ」：協会の断種法草案起草の経緯と草案の全文が掲載。これが八木、荒川により第70議会へ提出される</p> | <p>国民体力問題調査委員会に優生学部委員設置で委員長就任</p> <p>3. 第70議会に民族優生保護法案を提出(八木、荒川、池田、青木)→議事日程に上るが議題とならず ※48</p> | <p>12.2 第70議会へ断種法提出の会合に、三宅鉦一、吉益が出席</p> | <p>委員会発足</p> <p>10. 学振内に国民体力増進会議設置</p> <p>10. 第8回全国社会事業大会：精神衛生国策案10項中に「断種法制定」あり</p> <p>・学振内の国民体力問題調査委員会に優生学部委員設置→優生学的機構の設置を求め、建議案を内閣に提出し、翌年厚生省に優生課が設置</p> <p>5. 陸軍提案の「衛生省案要項」に「優生課」設置盛り込まれる</p> <p>5. 第8回全国方面委員大会で「精神病者保護救済の徹底」を協議。道府県の意見書に断種法要求もある</p> <p>7. 日中戦争開始</p> <p>10. 国民精神総動員中央連盟結成</p> | <p>6.(財)日本少年指導会幼年教化研究会編『少年不良化の原因と其対策』：「少年不良化予防対策としての断種」※49</p> <p>7. 吉益、翻訳「合法的断種の本質、意義及び安全性に就いて」(ベルリン大学教授オトワ)『民族衛生』</p> <p>11. 内務大臣諮問「精神病の発生を防止する方策如何」への精神病院協会の答申：「断種…徹底的に之を行ふべからざれば殆んど効果無き」に近づくべき」協理事長三宅鉦一の名で答申</p> | <p>8. 第71議会に優生課に関わる建議提出</p> <p>3. 東京帝大定年退官：退職記念会での長と東京帝大総長祝辞「断種法案の通過に努力されてゐることも周知の通り…此の人類改良運動は博士の畢生の事業で医学で取扱ふ最も大きな仕事…今後は国家社会の為此の民族改良の大事業に益々御精進あらんことを希望する」永井「最近長と総長が文相の交渉を拒絶されたのは近來の痛快事…狭義の生理学者としての私は最近全く墜落の道を歩んだ」4. 北平大学名誉教授に推薦され赴任</p> <p>5. 東京帝大名誉教授就任</p> <p>11. 台北帝大医学部に赴任し医学部長に就任</p> | <p>3. 東京帝大定年退官：退職記念会での長と東京帝大総長祝辞「断種法案の通過に努力されてゐることも周知の通り…此の人類改良運動は博士の畢生の事業で医学で取扱ふ最も大きな仕事…今後は国家社会の為此の民族改良の大事業に益々御精進あらんことを希望する」永井「最近長と総長が文相の交渉を拒絶されたのは近來の痛快事…狭義の生理学者としての私は最近全く墜落の道を歩んだ」4. 北平大学名誉教授に推薦され赴任</p> <p>5. 東京帝大名誉教授就任</p> <p>11. 台北帝大医学部に赴任し医学部長に就任</p> |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

断種法 (国民優生法) 制定に至る動き [第六期 厚生省が断種法制定へ邁進する時期]

| 1938 | 厚生省 | 青木延春 | 古屋芳雄 | 八木逸郎 | 精神医学者 | 平塚らいてう | その他 |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| <p>1.11 厚生省設置予防局に優生課設置:断種法成立への向けての国の決意</p> <p>3.国立公衆衛生院設置(ロックefeller-財団の寄付で)</p> <p>4.1 国民健康保険法・社会事業法公布各7.1 施行</p> <p>4.20 優生課が民族衛生協議会開催:断種法制定問題を協議:議題「断種法実施の可否如何」「実施する場合の方法如何」</p> <p>6.18 第2回民族衛生協議会開催:満場一致の賛成で断種法の制定が可決され、制定準備が進められることとなる</p> <p>10.第2回人口問題全国協議会に厚相が人口政策について諮問</p> <p>11.16 民族衛生研究会優生課内に発会:趣意書で「民族衛生の使命」は「遺伝素質の改善」による「国民の平均素質</p> | <p>1.11 厚生技師として厚生省予防局優生課に配属</p> <p>5.日本精神衛生協会「断種問題に関する理事懇談会」出席</p> <p>7.「我国に於ける断種立法運動の経緯」『精神衛生』:「断種法が民族立法として価値多い」民族優生を指す法律が激しい反対を受ける理由を発見するに苦む。厚生省は目下断種法制定について慎重に調査研究中としながら断種法私案を掲載</p> <p>10.第2回人口問題全国協議会で「断種制度の遺伝学的基礎」を報告</p> <p>10.11「優生断種法上下」『日本公衆保健協会雑誌』</p> | <p>金沢医科大学教授(衛生学)</p> <p>1.「結婚と遺伝」『婦人公論』</p> <p>4.民族衛生協議会委員となり断種法の積極的断行論をリード</p> <p>6.第2回民族衛生協議会出席</p> <p>『遺伝病の概念』 『民族生物学』</p> <p>10.第2回人口問題全国協議会での木戸幸一厚相の諮問「我が国人口政策上事変下に於て特二留意すべき点」に対する答申起草委員6名に加わる↓ 国立人口研究機関設置を答申</p> | <p>1.第73議會へ民族優生保護法案提出 →委員会送付は盛ん →審議未了 ※50</p> | <p>2.日本医師会、日本精神衛生協会共催「断種に関する懇談会」</p> <p>3.日本精神衛生協会、断種に対する意見を全会より求める事に決定</p> <p>4.日本学術振興会は厚生省の動向に呼応して三宅鉞一を委員長とする優生遺伝研究委員会を設置。吉益も委員</p> <p>4.三宅鉞一、内村祐之、吉益脩夫、民族衛生協議会委員となり断種法制定問題を協議</p> <p>5.日本精神衛生協会「断種問題に関する理事懇談会」開催:金子準二「他に精神病者に子供を生まさぬやうにする方法は幾らでもある」吉益「ある程度の断種は出来た方がどうしようもない」</p> <p>5.吉益「アメリカ合衆国の断種法に就て」『民族衛生』</p> <p>6.29 第1回全国公立精神病院長会議開催:遺伝濃厚な場合断種法制定極めて望ましい(内村は松沢病院長として出席) ※52</p> | <p>平塚らいてう</p> | <p>第4回全ドイツ精神神経学会総会でリユナーデインは「精神病学者が軒を並べた」</p> <p>「精神的に思惟し感情し意欲し行動する必要がある」</p> <p>4.国家総動員法公布</p> <p>4.永井潜、川上理一、正木亮、小野清一郎ら民族衛生協議会委員となる</p> <p>6.川上理一「断種の遺伝学的起訴」『日本評論』:「断種の問題は…遺伝学上から…既に解決済」で「断種の実行が当然」</p> <p>6.20 三藤寛「断種法の検討【上】男性断種方法に残される問題」『帝国大学新聞』:科学的根拠に多くの問題があり軽々しく取扱うべきではない</p> <p>6.27 三宅鉞一「【中】理想と実際の開き:断種法は理想としては賛成だが実際問題難し</p> | |

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|--|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|-------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>の向上」と明言</p> <p>11. 『民族衛生研究会資料』1号「優生断種法トハ何力」を発行</p> <p>12.17 民族衛生研究会 座談会開催：衆議院議員安部磯雄を囲む座談会で高野六郎、川上理一、三宅敏一、正木亮、八木逸郎ら出席。安部が「癩病患者」の断種合法化を提案するが、厚生省側は「癩病」は感染症であり断種の対象としな</p> | <p>7. 民族衛生短期講習会で「遺伝健康方策」を講義</p> | <p>5.6 勅任技師として厚生省入省。体力局へ</p> <p>5.9 衛生局予防局社会局兼務へ</p> <p>予防局中心で進行中の国民優生法案の作成に参加</p> <p>6. 医療制度調査会幹事</p> <p>7. 民族衛生短期講習会で講義</p> | <p>12.17 民族衛生座談会出席</p> <p>12.第74議会へ 民族優生保護法案提出 →委員会送付 ※51</p> | <p>6.30 第7回日本精神病院協会総会開催：特別委員会に断種法調査委員「大体の空気は…断種法の制定を希望」内村は専門委員となる</p> <p>7. 吉益「外国に於ける断種の沿革及現況」『精神衛生』</p> <p>9. 三宅敏一「民族優生と断種法」『帝国教育』：「悪族を遺伝すべきものは、皆之れを絶滅すべきこととの必要は争ひなきことであり、且つこれを悉く断種するは絶対必要」</p> <p>11.16 三宅、内村、吉益、民族衛生研究会発会式出席</p> <p>12.17 三宅敏一、民族衛生座談会出席</p> | <p>2. 「民族優生保護法案に關連して」掲載紙不明：「断種法の如きは…決して好ましい者ではありませぬ」「断種を必要とするような精神薄弱者や精神病者、その他悪質遺伝病者などを治せるほどの今後の医術の進歩こそ願わしいこと」</p> | <p>く、任意か強制かは当事者の賢慮に</p> <p>7.4 藤本直「【下の一】任意か強制か」：断種法を制定施行する以上強制断種を認めるべき</p> <p>7.11 永井潜「【下の二・完】強制的たれ=優生学の上から」：逆淘汰は正には断種法が必要で、徹底させるには強制断種でなければならぬ</p> <p>8. ヒットラーユングント来日・瀬木三雄、文部省在外研究員としてドイツへ留学し1939年帰国</p> | <p>1939</p> | <p>5. 吉岡弥生、文部・厚生両省委嘱によりドイツへ：各種社会事業施設・母子に關する保健衛生施設見学</p> <p>7. 民族衛生短期講習会開催：病的遺伝三千家系調査員全国講習会（各府県の衛生担当者対象）</p> <p>7. 家系調査実施</p> | <p>7. 民族衛生短期講習会</p> | <p>3. 民族優生保護法案→衆議院通過→貴族院送付→審議未了</p> | <p>4. 成田勝郎『断種論』葬送譜『脳』：命をあらかじめ断つ断種は生命のための医学ではなくて死学、殺学である。国策要求からの断種論議は謝絶せよ</p> <p>6.14 厚生省の日本精神病院協会への諮問「断種法制定の可否」について、内村祐之委員長の特別委員会が「断種法制定に關する決議」を同協合理事会に報告し、満場一</p> | <p>2. 「民族優生保護法案に關連して」掲載紙不明：「断種法の如きは…決して好ましい者ではありませぬ」「断種を必要とするような精神薄弱者や精神病者、その他悪質遺伝病者などを治せるほどの今後の医術の進歩こそ願わしいこと」</p> | <p>3. 第5回全ドイツ精神神経学会総会でのリユネーデインの開会挨拶：断種の強制により精神病学者の仕事は「無価値、無益、無意味」との見解発生で「精神病学の意義が…葬り去られようとする危機が迫つた」</p> <p>9.1 ドイツ、ポーランドへ進撃開始し、第二次世界大</p> | <p>く、任意か強制かは当事者の賢慮に</p> <p>7.4 藤本直「【下の一】任意か強制か」：断種法を制定施行する以上強制断種を認めるべき</p> <p>7.11 永井潜「【下の二・完】強制的たれ=優生学の上から」：逆淘汰は正には断種法が必要で、徹底させるには強制断種でなければならぬ</p> <p>8. ヒットラーユングント来日・瀬木三雄、文部省在外研究員としてドイツへ留学し1939年帰国</p> |
|--|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|-------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

| | | | | | | | |
|--|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | <p>8. 国立人口問題研究所設立</p> <p>8. 『民族衛生資料』</p> <p>9号「民族優生トハ何力」：この時点から厚生省では「民族衛生」に代えて「民族優生」を使用</p> <p>9. 「民族優生方策」を内閣情報部発行の『週報』で発表</p> <p>9. 民族衛生研究会主催「優生結婚座談会」開催：優生結婚思想啓発、宣伝、優生結婚法制定の有無について</p> <p>10. 国民優生法の原案「民族優生制度案要綱」が厚生大臣から国民体力審議会に諮問され、第二特別委員会で審議</p> <p>↓</p> <p>12. 特別委員会の修正案「優生制度案要綱」を答申※53</p> <p>11.3～12.3「日本民族優生展」の後援</p> | <p>11.12. 「優生断種に就いて①②」『優生物学』</p> <p>11.3～12.3「日本民族優生展」の実行委員</p> <p>12. 「遺伝健康に留意せよ」『日本公衆保健協会雑誌』</p> | <p>10. 厚生省「民族優生方策」実施の基本認識に古屋の調査例を示す（「逆淘汰」論）</p> <p>11.3～12.3「日本民族優生展」の実行委員</p> | | <p>致で承認：「断種制度の確立は…何人と雖も是を否認する理由なし…断種報国の思想」</p> <p>6. 斉藤茂吉「断種法問題解決のため」『東京朝日』</p> <p>6. 斉藤茂吉「断種その他」『東京朝日』：断種は民族衛生の「一つの方法」にすぎないのであつて「唯一の方法」ではない</p> <p>7. 内村、吉益、民族衛生短期講習会で講義（吉益は「犯罪生物学」）</p> <p>11.3～12.3 三宅敏一、 「日本民族優生展」の実行委員</p> | <p>4. 「今議会と婦人」『全人』：「何れにしても問題の多い断種法」</p> <p>11. 優生座談会で、性病者の結婚制限のみ主張し、断種法には言及していない</p> | <p>戦勃発</p> <p>9.1 ドイツ、断種中止の政令が出され、より徹底的な安楽死へ政策転換</p> <p>9. 座談会「人口問題と断種法」『科学知識』：古屋芳雄、三宅敏一、下村宏、青木延春、三宅驥一ら</p> <p>11. 「優生座談会」『婦人運動』：厚生省予防局長高野六郎「断種法も悪質遺伝をなくするためにはぜひ必要」出席者：平塚、奥むめお、田中孝子、赤松常子、木内きやう、東京職業紹介所長糸井譲治、人口問題研究所企画部長北岡寿逸</p> <p>11.3～12.3「日本民族優生展」赤十字博物館で、厚生省、東京府、東京市後援で、日本学術振興会、日本民族衛生協会、日本精神衛生協会、日本赤十字社の共同主催</p> |
|--|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

| | | | | | | |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1940 | <p>1. 国民体力審議会第3回総会：諮問「民族優生制度に關する件」を議題とし民族優生制度特別委員会(第二特別委員会)に於ける審査経過、結果を委員長より報告し、修正案を可決し「優生制度案要綱」を大臣へ答申</p> <p>2. 国民体力審議会の答申に基き立案の「国民優生法案」閣議決定</p> <p>3. 12第75議会に政府案として「国民優生法案」衆議院本会議上程→委員付託</p> <p>3. 13 委員会第1回八木逸郎が委員長</p> <p>3. 14, 15, 17, 19 委員会</p> <p>3. 20 委員会第6回で修正され可決。衆議院本会議で可決し貴族院へ送付</p> <p>3. 22 貴族院本会議特別委員付託</p> <p>3. 22, 23 特別委員会</p> <p>3. 24 第3回特別委員：厚生大臣が第6条凍結を言い、強断制断種から任意断種へ</p> | <p>3. 15 衆議院委員会第3回出席</p> <p>3. 19 衆議院委員会第5回出席</p> <p>3. 24 貴族院特別委員会に出席</p> | <p>2. 国立人口問題研究所参与として入所し館稔らと人口政策要綱案の作成に關与</p> <p>3. 「人口政策要綱古屋試案」作成し、確立案要綱立案過程での「縁の下の力持」となる</p> | | <p>1. 秋元波留夫は1938年と1939年の全ドイツ精神神経学科会でのリユナインの演説の大きな変化から「断種法の實施が独逸の精神病学及び精神病医にとつて一つの危機ともいふべき甚だ心外な事態をもたらした原因であることを知る」(秋元[1940.1.6] 55~56)</p> <p>5. 27 内村祐之「断種法の過去と将来 国民優生法への期待」『帝國大學生新聞』「断種や妊娠中の如き施術が法律の上で許されなかつた現在迄の事情は、確かに不合理であつた…行き届いた法律の内容であるから何人と雖もこの法文に全面的反対をなすものはあるまい…確かに我が国厚生施策の一進歩であるに相違ない」</p> | <p>1. 海野幸徳「社会行政の新標準として朝の優生政策」『朝鮮社会事業』</p> <p>2. 28『読売』「遺伝と犯罪 優生法近く議会上程」、「宿命の家系三千「優生法」の議会上程を控へて厚生省の調査完成」</p> <p>3. (財)人口問題研究会、「優生政策確立に關する建議」を議決</p> <p>4. 瀬木三雄「ドイツに於ける母子保護事業の現況」『日本婦人科学会雑誌』</p> <p>5. 海野幸徳「人口減少と産兒政策(上)一人的資源の増加策」『朝鮮社会事業』</p> |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

| | | | | | | | | | | |
|--|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------|--|-----------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|
| | <p>3.26 第4回特別委員会で可決し、貴族院本会議へ：「国民優生法」可決成立 ※54</p> <p>4.人口問題研究所、『人口問題研究』創刊</p> <p>4.8 「国民体力法」制定</p> <p>4.予防局、「国民優生法に就て」発行：国民優生法の解説</p> <p>5.1 「国民優生法」公布</p> <p>8.1 「基本国策要綱」閣議決定：国民資質・体力の向上、人口増加</p> <p>11.3 厚生大臣による優良多子家庭表彰：多産報国思想の啓発を意図</p> <p>11.14 第4回人口問題全国協議会開催</p> <p>12.5 厚生科学研究所創設：公衆衛生院と栄養研究所統合</p> <p>1.22 「人口政策確立要綱」閣議決定</p> <p>2.国民優生連盟結成</p> <p>5.15 予防局編国民優生連盟刊『国民優生図解』</p> <p>6.7 国民優生法施行</p> | <p>6.日本公衆保健協会理事就任</p> <p>6. 「国民優生法」「日本公衆保健協会雑誌」</p> <p>8. 「優生手術について」「人口問題研究」</p> | <p>11. 「国土計画と人的資源」「医事公論」</p> <p>11. 「民族科学への要請」「日本公衆保健協会雑誌」</p> | | <p>9.吉益『優生学の理論と実際：特に精神医学との関係に於て』：断種の方法、各国の現行断種法、断種問題に関する討議の検討</p> <p>10.内村、三宅島で精神病患者調査を実施</p> | <p>6.梅野幸徳「人口減少と産児政策(下)——人的資源の増加策」『朝鮮社会事業』</p> | 1941 | <p>1. 「新日本文化建設と医学」『医事公論』</p> <p>2. 「国土・人口・血液」(朝日新聞社)：「人口政策要綱 古屋試案」、 「国民優生法意義」掲載</p> <p>2. 『体力向上と優生断種』</p> <p>3. 第40回日本精神経学会で特別講演「国民優生法」</p> | <p>2.吉益、厚生科学研究所に入る(～1942.2)</p> <p>7.内村、東京池袋で精神病患者調査を実施</p> <p>7.12 民族科学協会発足：総裁は宇垣一成陸軍大將、会頭は杉田直樹</p> | <p>3.瀬木三雄、嘱託として厚生省入省(東大産科婦人科学教室助手兼務) 妊産婦手帳創案</p> <p>4.生活科学研究会主催の生活科学学</p> |
|--|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------|--|-----------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|

| | | | | | | | |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|--|-------------------------------|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1942 | <p>令公布 6.11 国民優生法施行規則公布 7.1 「国民優生法」施行 8.1 人口局創設 予防局優生課が廃止され、国民優生法に関する業務が新設の人口局総務課へ移管 ・人口局母子課設置 10.20～25 国民優生法講習会開催 11.14 第5回人口問題全国協議会開催 題：人口対策審議会(仮称)設置を含む建議</p> | <p>7. 「国民優生法と人口妊娠中絶(附. 不妊手術)」『日本医事新報』 11. 『優生結婚と優生断種』</p> | <p>3. 「人口政策と東亞共栄圏」『医事公論』 8.1. 厚生省の人口局創設とともに同局技師となる 8. 「統後の人口問題」『日本公衆保健協会雑誌』</p> | | <p>9. 内村、長野県小諸町で精神病者調査を実施</p> | | <p>シ-14に「民族優生問題研究」が開設(川上理一担当) 6. 日本民族国策研究会発足 11.29 瀬木三雄、第1回厚生技術研究会で「妊婦登録制に就て」を発表 12. 瀬木三雄「妊婦届出と妊婦診察の必要性」『日本公衆保健協会雑誌』 12.8 米・英に宣戦布告、太平洋戦争始まる</p> |
| | <p>1. 人口局母子課内に結婚報国懇話会 7.1 妊産婦手帳規程公布 7.13 妊産婦手帳規程実施 11.1 厚生省研究所設立：人口問題研究所、厚生科学研究所、産業安全研究所が統合 11.1 人口局総務課が担当していた国民優生法に関する業務が人口局母子課へ移管</p> | <p>3.27～29 日本婦人科学会総会後の官民合同協議会に高野局長と出席：国民優生法運用の円滑のための会議 5. 『優生結婚の話』</p> | <p>・日本民族衛生協会会長となる(大会制年度のため毎年会長は交替する) 5. 「臨戦体制下ノ人口問題」『日本婦人科学会雑誌』 12. 厚生省研究所技師となる(厚生科学部長)</p> | | <p>5. 内村、東大附属脳研究室所長に就任</p> | <p>3. 茨城県に疎開</p> | <p>1. 谷口弥三郎「医人は須らく人口増強政策に協力すべし」『医界週報』 5. 瀬木三雄「母性保護の前進と妊婦届出制の意義」『東西医学』 6. 瀬木三雄「優生法と産婦人科学」『日本医事新報』</p> |

| | | | | | | | |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|--|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | | | | | | 7.8~10 民族科学 講座開設(読売新 聞社講堂) |
| 1943 | 11.13 第6回人口問 題全国協議会開催: 民族人口政策と結 婚促進に関する建 議 4.8 健民運動組織要 綱を通牒 11.人口局が健民局 となり、健民局母子 課に | 7.座談会「健全なる 結婚」『婦人公論』 12.座談会「人的戦 力増強と精神厚生」 に出席 1~2「国民優生法の 意義と其の実施状 況に就いて」『日本 臨床』 | ・日本民族衛生協会 会長となる ・学術研究会議員 「民族と淘汰」『医事 公論』4回連載 8.「厚生科学動員会 議に就て」『日本公衆 保健協会雑誌』 | | | | 4.瀬木三雄『ナチ スの人口医学―特 に母性保護の医学 的基礎に就て』 12.瀬木三雄『ドイ ツの健民政策と母 子保護事業』 8.15 第二次世界大 戦終結 |
| 1944 | | | | | | | |
| 1945 | 5.母子課一時廃止、 健民課に合併 | | | 1.4 死去 | | | |

Ⅱ－２ 註

- ※ 1 大澤謙二は1901年に欧米各国に派遣され、当時の最新情報や資料を入手して帰国し、それらをもとにして1904年刊の『社会的衛生 体質改良論』や1909年刊の『通俗結婚新説』を著し、花柳病者の結婚禁止を紹介し、特に後者では「去勢術」の必要とその実例を示しており、断種関連の海外情報の紹介では最も早いものではないかと思われる。なお、この時、イタリアのトリノで開催の第5回万国生理学会に日本代表として出席し「右利きと左利き」を、ベルリンでの万国動物学会では「イトノの群遊」を講演している。※1～6の詳細については、本稿第Ⅰ部第1章を参照のこと。
- ※ 2 平塚らいてうは、1903年4月に日本女子大学校家政学部に入学生、第一学年で大澤謙二に生理学を、三宅秀に衛生学を学ぶ。これが、平塚と大澤の最初の接点である。大澤の生理学の授業については、後年平塚が自伝で紹介している。
- ※ 3 『社会的衛生 体質改善論』（東京開成館、1904年10月）：フェミニズムに発した女性観、恋愛観、結婚観を紹介し、米国の花柳病伝染への損害賠償についても言及している。また、「人工淘汰法」、結婚制限の実行については、個人の権利、自由に深く立入ることに熟考が必要であるとしている。
- ※ 4 「生理学上より観たる婦人の根本問題」：1908年3月23日から5月4日まで31回にわたって『報知新聞』に連載されたものである。1908年10月にはこれをまとめて『生理学上ヨリ見タル婦人ノ本分』として大倉書店から刊行されている。前掲『社会的衛生 体質改善論』から一転して、女性の独立自営、女性解放を否定し、「反」フェミニズムの論調を強めている。ヨーロッパでは、特にドイツでは、「反」フェミニズムの潮流が高まっており、それに影響されたのであろうか。
- ※ 5 『通俗結婚新説』（大倉書店、1909年11月）：1909年に『報知新聞』に連載した「幸福なるべき結婚法」を改訂したものである。※4の新聞連載の最終回に「尚題を改めて『婦人と結婚との関係』に就て有益なる博士の卓見を続載するを得るのは、吾が社の光栄」とあるからだ。前掲書(※3)に比して発言がエスカレートし、特に「去勢術」について顕著で、前掲書では結婚制限についてさえ「篤と熟考すべき問題」として慎重であったのが、本書では「去勢術」是非論を通り越して、「去勢術の必要」の事例を示して詳述している。これは1907年に米国インディアナ州で世界初の断種法が制定されたことが影響していると思われる。
- ※ 6 「退京」：雑誌『活動』第5巻4号に掲載された平塚の三幕劇の脚本。この中で※4の新聞連載をとりあげ、そこでの男の論理、「反」フェミニズムの論調に反発する。前掲書(※3)の段階では、大澤はフェミニズムに発した女性観を提示し、女性の地位向上にも理解があるような記述をしていただけに、「反」フェミニズムを唱え始めることに平塚は幻滅したのであろう。

※ 7 「民族衛生の勃興を促す」『大日本私立衛生会雑誌』第 372 号 214—220 頁：この論文は無記名であるが、1914 年 11 月刊行の氏原佐蔵の『民族衛生学』（南江堂書店）第 1 章、2 章、4 章とほぼ同じ内容であり、同上の雑誌第 373、374 号につながるものであることから、氏原の論文とした。なお、藤野豊の「この論稿は無記名論文であるが、以後の『大日本私立衛生会雑誌』の氏原の論稿と連続する内容となっているので、これも氏原の論稿と判断できる」（藤野 [1998] 471）を参考にして、上記の検討をおこなった。

※ 8 『民族衛生学』：1914 年 4 月から 6 月にかけて『大日本私立衛生会雑誌』（第 372—374 号）掲載の氏原の論文を中心にまとめて、同年 11 月に南江堂書店から刊行された。本書で、氏原は「民族衛生学 Rassenhygiene」の目的は「優良なる子孫の繁殖と民族の向上」であるとしている。また、「一般衛生学は個人の自由を重んずるも民族衛生学に至りては個人の自由は民族なる大団体の為めには時に犠牲に供せざるべからざることある」と、民族衛生学とは国家のために個人の犠牲を求めるものだと定義している。第 2 章では、「国際民族衛生学協会」規約を紹介し、同会の目的が「白人種間に於ける民族衛生学の理論及び實際を普及発達せしむる」にあることをみて、「民族衛生学の現状は眼中白人種あるのみにして黄黒人種は除外す、蓋し彼等は白人種を地球上に於ける最優良人種と自認するが故に此の種族を更に改良せしめんとする」と危機感をつのらせ、「吾人日本帝国民族」は「白人種と同一の希望を有す、否現状を打破し更に彼等を凌駕せんが為めに一層切実に優良なる子孫の繁殖を謀り益民族の向上発展を期する必要あり」と、ますます向上発展する「白人種」に取り残されぬよう、民族衛生学の必要を訴えている（4—7）。

第 4 章では、「民族衛生学の目的は……目下の所白人種間に於ける優良種族の生産を計らんとせるもの」で、「人種上よりする排他的色彩を帯べるは明かなり」として、先ずドイツの例をあげている。「ケーニツヒスベルヒ大学教授クルート、ゴールドスタイン博士の如きは最近の著『民族衛生学に就て』なる書中に於て(Dr.Kurt Goldstein ; Über Rassenhygiene, 1913, S. 95.)其九十五頁に明かに黄禍 Die gelbe Gefahr. に就て論ぜる所あり、科学的立場に於ける黄禍論は其根底を深く民心に附殖せしむること或は政治的議論以上に恐るべきもの」と白人種中心の民族衛生学の立場からの黄禍論を警戒している。つぎに、「看過すべからざる一事」として「米国に於ける民族誘善論の勃興」をあげ、「同国に於ける東洋人排斥問題」の底流には「根拠あるユーゼニツクの思想」が「民心に浸潤しつつあるを忘るべからず」とし、米国の「多数の州にはたとへ未だ実行の緒に就かずとは雖も、……滅種法を施行して不妊症たらしめんとする法律の制定を見るもあり。国内の人民に対してすら敢て此の手段に出でゝ怪まず」なのだから、「異人種、外国人に対しては民族誘善論上如何に過酷なる手段に出づべきやは略ぼ想像するに難からず」と、「民族衛生学の発展を見ざる」我が国は「一層寒心に堪えざるものあり」と恐れられている。「吾人は不幸黄色人種に属す」と嘆き、「白禍」を切実に味ひつつあるものなり。彼等が白人種間のみ民族誘善を目的とする民族衛生学の勃興をすれば、「早晚圧迫感を感ずるの時来るべき」と考え、「吾人は黄色人種の盟主となりて其民族衛生学を鼓吹せん」と、氏原は「我邦に於ける民族衛生学の勃興を促さんとする」理由を述べている。（11—14）

このように白人種から差別されてる黄色人種に生まれたことを嘆きつつ、民族衛生学、優生学を信奉することについて、小熊英二は次のように述べている。

彼らが信奉した欧米出自の人種思想は、「白人」が「黒人」や「黄色人」を差別するには適しても、「黄色人」が「黄色人」を差別するには使いやすいものとは言い難かった。そもそも欧米の人種思想家からすれば、自分たちが劣等と位置づけている「黄色人」の国である日本で人種思想が取り入れられるということ自体、およそ奇異に映ったにちがいない（小熊 [1995] 240）。

結婚禁止については米国の例を紹介し、氏原は「精神病者或は遺伝の恐ある精神耗弱者、常習犯罪者及び身体著しく虚弱なるものの結婚禁止を要請」している（30-33）。また、妊婦保護については「妊婦の保護は児童に良結果を及ぼし、国家将来の運命に関する所甚だ大」として、ドイツの『母親保護協会』Vereinigungen für Mutterschutz、「母親ムツテルベラーツングスステルレー保 険」、シヤフツヘルジツヘルング「母親相談所」を紹介している（46-47）。「滅種法 Sterilization」については米国の例を紹介している。「後裔繁殖の価値を認めざる人々をば人為的方法に訴え生殖不能たらしめんとする」もので、「精系断術による滅種法」は「易々たる小手術」で、「北米合衆国に於ては既に之を実施し、或は民族改善に関する此の手段を法規として制定せんとする傾向となれり」と詳しく紹介し、その必要性を説いている（73-79）。そして、最後に「民族衛生的結婚禁制は単純の滅種法行はるゝに至れば将来之を排除し得る時期に到達すべし」と述べている（79-80）。このように断種することにより結婚できるようになる、ということについては1909年に大澤謙二が『通俗結婚新説』（567）ですでに述べており、次々と継承されて、後の「断種法」につながっている。

※9 『真新婦人』（1914.3）23頁「結婚と健康診察」：管見の限りでは、人種改善に関して永井潜が女性雑誌に掲載する初めてのもの。人種改善学の知識実行のために着手しかけていることとして「去勢のことで、常習犯の者とか、精神病者とか、其他の者の遺伝を絶滅するの要ある者に対し、輸卵管とか、輸精管とかを切ることの実行であり、「米国のインヂヤナや、カリフォルニヤなどでは法律で定めて、既に之を実行して居る」「コウ云ふことは法律でやらずと云ふよりは知識を普及して自然に行はれる様にする方が面白いと思ふ」と、この1914年時点で、永井は「去勢」を使用し、法制化には躊躇している。

※10 『日本女子大学講義【9】生理学』：大澤謙二の生理学講義に関する著作で日本女子大学図書館に現存。『日本生理学教室史（上巻）』（日本生理学会、1983年）の中で「東京大学医学部生理学教室史」で、初代教授大澤謙二の論文を紹介した最後に「生理学に関する大澤謙二の遺著は見出し難いが、教授が日本女子大学校に於て生理学を講じたその講義要目があり、大正三年 大澤謙二述生理学（講義要目）524頁 編者桜楓会 神田精美堂発行となっている」（276）とあるが、これと上記日本女子大学図書館所蔵本はおそらく同じものと考えられる。平塚が受講した大澤の生理学講義の内容を推量できるものとして、参考とした。詳細は、本稿第I部第1章を参考のこと。

※11 『人性』11巻9号（1915.6）313-314頁「人種改善の理論（四）」：「悪性遺伝物質

の艾除を完全に成し遂げんが為に、単に結婚の干渉を以て足れりとせず、進みて外科手術を施して悪質者をして生殖不能たらしむることを実行したのも亦、実に亜米利加合衆国を以て嚆矢とする」「一九〇七年三月九日を以てインディアナ州に於て、一の州令が發布されるに至った。夫れによると犯罪性白痴痴愚等に在りては、遺伝は重大なる関係を有する者であるから、……精神状態の回復が到底覚束ない者と断定されたならば、男に於ては Vasectomie 即輸精管切断法を施し、女子には輸卵管 Oophorectomie を行うべし云つてある」とアメリカの手術を紹介し、参考のために「コンチネンタル州に於ける之に関する法令」として、「生殖防止ノ手術ニ関スル法律」を挙げて、「新大陸に於ては悪種艾除の方面に実行を急ぎつゝあるのであつて、其結果の如何は今後吾人の大に瞩目すべき」とし、「欧米諸国に於ける此新科学の勃興と其運用とを想」っている。なおこの「人種改善学の理論」は11巻5, 6, 7, 9と4回連載されている。

※12 当時、公立癩療養所全生病院院長であつた光田健輔(1876-1964)は、ハンセン病患者に「子供さえ生まずにすむなれば、男女の共同生活、或いは夫婦生活は断じてできるようにしてやるべき」(光田 [1950] 52) との考えから、「最も弊害の少い、安全で簡単な方法として、そのころ内務省予防課の氏原佐蔵氏が翻訳してパンフレットで紹介していた優生手術(外科-)が最もいい」(光田 [1950] 53) と考えた。「一九一五年(大正四年)のことである。患者を集めて子供を産むことの誤りについて少し長い話をした……そのとき、すぐ私をやつて下さいといつて申し出た K という三十才の青年があつた。同時に六名の志願者があり、その翌日には二十何名かになつたから志願者を順次手術した」(光田 [1950] 54) と記しており、おそらくこれが我国において断種が行われた最初であろうと考えられる。また「国法で禁じられていることであるから念のために法律の権威者である花井卓造、牧野英一両博士に法律的な解釈をたずねてみた……もし検事に告訴せられたならば、罪に問われても仕方がないと覚悟」(光田 [1950] 54) したと記している。

※13 **保健衛生調査会**は、1916年(大正5)6月内務省衛生局に設置された。目的は、第一次世界大戦の最中であつて、人口の減少と国力の低下を心配するヨーロッパの状態を注視し、日本でも人口の減少が国の弱体化を招くという認識のもと、高死亡率の原因を追究し、対策を立てるためと、国民全体の質の向上を計るというものであつた。調査会委員は、保健衛生調査会官制に「内務大臣ノ奏請ニ依リ関係各廳高等官及学識経験アル者ノ中ヨリ内閣ニ於テ之ヲ命ズ」とある。

※14 『保健衛生調査会第1回報告書』32-34頁：1916年7月に開かれた保健衛生調査会第3回会議は、第2回会議で決まった①乳児、幼児及学齡児童 ②肺結核 ③花柳病 ④癩 ⑤精神病 ⑥衣食住 ⑦農村衛生状態 ⑧統計の調査事項に関する討議であつた。その討議の中で永井は、「『ユーゼニック』ニ関スル調査事項ヲ設ケタシ」と提議する。しかし永井の提議に反応したのは栗本庸勝ただ一人であつた。栗本は、「目下焦眉ノ急ニ要スル實際的ノ事ヲ調査シ著々改善スルヲ可トス『ユーゼニックス』ノ如キハ余リ高尚ニ過クルノ感アリ要スルニ第七、八項ノ調査ヲ進行セハ自然永井委員ノ希望ヲ達

セラルハコト、信ス故ニ該部門ヲ設クルノ必要ナシ」と一蹴した。栗本及び他の委員たちにとっては、優生政策より衛生問題の取り組みの方が、先決を要する問題であり、永井は引かざるを得なかった。この時永井が指名された担当は、第六部会の衣食住の調査であった。

※15 永井潜『人性論』実業之日本社（1916.7）336頁：「亜米利加に於ける消極的人種改善の實行」として、「今や実行の時期に入つたものとなして、着々其の追行に全力を注いで居る。即ち一九〇七年には、合衆国インディアナ州が率先して、一の法令を出し、次で一九〇九年には、コンネクチカッツ州にも之に和し、其他の諸州も、漸次之に習ひ、重罪犯人、常習犯人、白痴、痴愚の者には、男子では、輸精管切断法（ワゼクトミー）を行ひ、女子では、輸卵管切断法（オーフホロトミー）を施して、受胎不能に陥らしむる」としている。

※16 『婦人衛生雑誌』324（1916.11）13頁：「大切なる種性血統」で、「消極的人種改善に於ては、例へば白痴者とか常習性の犯罪者とか、忌むべき病とか、凡て人間の幸福を妨げる様な悪き遺伝を行ふ種性が繁殖せぬ様にする」とし、「或場合には国家が之に干渉して法令を設けて之を支配することが出来」、アメリカでは「精神病結核等其の他忌むべき遺伝性を有つて居る者の間には結婚を禁止し、結婚せんと欲する男女は医師の証明によつて健全なる心身を有する者でなければ国家が之を承認せぬと云ふ法律を發布して居る処もある。又単に結婚の干渉を以て足れりとせず、進みて或る外科手術を施し、悪質者をして生殖不能に陥らしむる様な思ひ切つた手段も実行されて」いると、断種法を連想させる言説で紹介している。

※17 政府は1919年2月22日第41回帝国議会衆議院本会議へ「精神病院法案」を提出。2月26日精神病院法案委員会第2回で横山勝太郎委員の質問「精神病者なる者は、如何なる原因に依つて発作するものであるかと云ふことを探求して、精神病者の多く起らざることを国家は努められねばならぬ」（衆議院 [1983a] 282）に杉山衛生局長は「精神病者の原因として、遺伝……それに付ては亜米利加の如きも最も勇断を以て、遺伝的の精神病者を発生せしめないやうな方法を執つて居ります、現に輸精管切断術、精液を送る管を切断して……子供の出来ないやうにして、精神病者の殖えないやうにする方法を州法を以て実行して居ります」（衆議院 [1983a] 282）と答弁し、アメリカの断種法を紹介した。

※18 『監獄協会雑誌』32-2(1919.2)、32-3(1919.3)26頁：「民族の衰亡」というタイトルで、「欧羅巴就中亜米利加の如きは、非常に熱心に人間の遺伝に関する材料を蒐集し之が関係を研究し……法律によつて結婚の上に色々適當なる制御を加へ、更に進みては悪種を剪滅すべき目的から精神病者常習犯罪者等に就きて或は輸精管を結紮若くは切断し或はX光線に依つて睾丸を照らし之によつて生殖不能に陥らしめて居る」と紹介。

※19 『婦人公論』（1919.7）33-34頁「花柳病者の結婚を禁止せよ」：優生学的立場か

ら花柳病についての対策として、「自己の為子孫の為延いては社会のため国家のために進んで最も良い配偶を選ぶやうになつて来なければならぬ」とし、「政府の力を以て即ち法律の力で結婚に一定の支配力を及ぼしたいと思ふ。結婚は勿論個人と個人、一家と一家との問題であるが、同時に又国家の盛衰興亡に関する大問題で……国家が之に干渉すべき十分の理由が」あり、「結婚せんとする者は互に健康なる心身を有つて居る者たることの認定を受けた者でなければ国家は之を許可せぬことにし…花柳病者の結婚を禁ずる丈でも莫大なる利益を民族総ての上に齎す…男子の花柳病患者は年々増加する一方で、此等の男子が結婚によつて清浄無垢の子女を損し、延いては害毒を子孫に流して居ることは実に戦慄すべき…すでに結婚した者は各自の自省に俟つとして、これから結婚せんとする者だけにでも、予め花柳病の有無を強制的に診断する…政府によつて或特殊の機関を設けて励行せしめるやうにしたい…此種の制裁は、国家が法律によつて之れに干渉せんとするといふことだけで既に十分なる効果が挙がる」と記している。

※20 1920年2月、新婦人協会は、性道德のダブルスタンダードの是正実現と女性自身の性と生殖の自己決定こそが、女性の立場からの社会改造を行うとの趣旨で、「花柳病男子結婚制限法制定」の請願を第42回帝国議会へ提出し、1920年2月23日請願委員第二分科会第4回で審議された。委員長は「是は兎に角或方面の男子に頂門の一針ともなる請願でありまして、殊に平塚明子外一千名の請願でもありますから、慎重に審議する意味に於て政府の意見を聴きたいと思ひます」(衆議院 [1983b] 617) と政府委員の説明を求めた。潮衛生局長は「亜米利加あたりでは、法律を制定して結婚を禁止すると云ふ御話もありましたが、是は単に花柳病のみならず、精神病者或は重罪犯罪者と云ふやうな者に対して、結婚禁止の法も設けてありますし、或は滅種法に依て法律を設けて居るものもあります」(衆議院 [1983b] 617) とアメリカの滅種法を紹介した。請願は政府参考送付となった。

※21 平塚「花柳病と善種学的結婚制限法」『女性同盟』2号(1920年11月)35-41頁：新婦人協会が第42, 43議会に提出した花柳病男子結婚制限法制定の請願については、①「結婚の禁止を特に花柳病のみに限つたこと」、②「男子のみに限つたこと」への非難が集中していた。①について平塚は、「善種学的見地から、結婚を制限すべきものに、花柳病の外、癩病、結核、癲癩、白痴、其他の精神病、神経衰弱、濫酒等のあることは今改めて云ふ必要はありません。併し私は国家が法律をもつて是等の者の結婚を制限するといふことは元来の理論上からは(若しくは理想の上からは)寧ろ大なる反対論者なのであります」と言い、「結婚によつて現に我国の婦人と種族とが蒙りつゝある花柳病の害毒が敢てかゝる法律を要求することによつて一般の注意を喚起する必要を痛切に私共に感ぜしめる」からであるとし、「誰が求めてそれほどの実際的必要に現在せまられてもゐない他の遺伝病や伝染病に対してまでも同時に煩瑣にして不快なる法律的干渉を結婚の上にすることを望みませうや」と花柳病以外に結婚制限を望んでいないことを明言している。そして、「花柳病の害毒は婦人の立場から見て…肉体的苦痛の外に夫の過去並に現在の性的生活に対する種々な疑惑となつて、夫婦生活の根底を脅かすところから、精神的にも苦しまなければならないといふことや、此の病気の性質上男子に対する一種の制裁と

いふやうな道徳的意義をも合せて含むものだから」と、花柳病問題を男の罪とする立場にたつての結婚制限の要求であるからこそ、花柳病以外の病気は一切関係なく、しかも男子であることの必要を主張している。ここで、平塚が要求しているのは花柳病男子の結婚制限法であつて、善種学的結婚制限法ではない。

※22 青木延春『優生結婚と優生断種』龍吟社（1941. 11）74-75頁：「我国に於いて民族衛生方策、殊に断種法制定の問題が真剣に論ぜられるに到つたのは余り古い事ではない。……我国に於いて最初にこの問題が正式に論ぜられたのは大正十年六月に内務省の保健衛生調査会が民族衛生を取り上げた事に始まつたと見て良い。この調査会は昭和五年三月以来特別委員会を設けて各種の具体的方策、就中断種法について慎重に調査研究を続けて今日に到つて居る」と、青木は1920年代から慎重な調査研究を行ったとしている。これをもって断種法制定の論議が始まったと言えるのかは検討の余地があるものの、『保健衛生調査会第六回報告書』（1922年）23-24頁によると、1921（大正10）年6月の総会に永井潜ら（矢作栄蔵、栗本庸勝、三宅秀、林春雄、北島多一、唐沢光徳）が提出した「民族衛生に関する建議」が全会一致で可決されている。この建議は「民族衛生に関する調査」の必要なのはいうまでもないことで、「現下の趨勢は之が解決を希望するは切なり」「当局は速に本問題の調査に関し適當の処置を講ずることを望むというものであり、「民族衛生」が正式に公で論議された年であつたと言えよう。

※23 保健衛生調査会の専任職員（技師）として、1920年から21年にかけて第一次世界大戦後の欧米各国に出張し、視察・調査を行っている。その調査項目の一つに「売笑婦の真相及び花柳病予防施設に関する事」があり、帰国後は同会花柳病予防に関する特別委員会の委員となり、視察報告をする。第42議会での新婦人協会の花柳病男子結婚制限法制定に関する請願審議中の潮衛生局長の答弁「保健衛生調査会ノ調査、或ハ外国ニ派遣ヲ致シマシタル人ノ調査、是等ノ事項ヲ得マシテ、近イ将来ニ更ニ一歩進メダ制度ヲ立タイト考ヘテ居リマス」（1920. 2. 23）があり、この氏原の調査がその後の花柳病予防法制定の端緒となることがわかる。その後、1922年1月の同会花柳病予防に関する特別委員会に提出された「花柳病予防ニ関スル件」の草案は氏原が作成したものである（氏原 [1926] 362）。

※24 大原社会問題研究所編『日本社会衛生年鑑』（大正11年版、1922. 12. 20刊）：この「大正11年版」に初めて民族衛生の項目が「第一章 民族衛生」として独立の章となった。「今次の大戦は、わが国家主義者に対して挙国皆兵、自衛防備の急なるを教へた。即ち量の問題（人口問題）と共に質の問題（優種問題）の甚だ緊切なるを痛感せしめた。……最近、遺伝学説の長足の進歩と相率ゐて民族衛生発萌の沃野は方に培はれつゝあるのである」として、この前年の21年（大正10）に保健衛生調査会で永井潜らによって提出された「民族衛生に関する調査建議の件が満場一致で可決せられた」ことも掲載されており、1921/22（大正10/11）を起点とした断種法制定への永井らの系譜（国家が個人に優先するという民族衛生思想に基く）が認知されてきたことの証左にあげられよう。

※25 氏原「独逸民族衛生協会の声明書を読み」『公衆衛生』41 卷 3 号(1923. 3)「独逸民族衛生協会 Deutsche Gesellschaft für Rassenhygiene」は戦前から「祖国中心思想を以て独逸魂 Deutschtum の高調に努めてゐた」が、敗戦国として戦後の疲弊に苦しみなながらも「気概を示し、独逸民族将来の為に遠大なる抱負を持し」ている団体であるとし、表記の声明書は 1922 年 10 月 14 日ミュンヘンで開催の同協会の総会で発表されたものである。42 箇条からなる声明の要旨が紹介されている。その主なものは、「素質に於て欠陥あるものの後裔繁殖を防ぐことは…民族将来に対し…重大な意義を有つ」、「優良者と思はれる夫婦に付ては…経済的及び社会地位の改善を図」ること、「軽率にして自制心なき素質低劣なる民衆の部類では出産忌避と云ふことは最も行はれ難きが故…身体並精神的に平均以上の優良者である場合にのみ」「子供多き家族に対する経済的奨励」を行うこと、「検診を行ひ斯くて低脳者に対しては結婚禁止を行ふ…は先決問題である」、「精神低脳者若くは退行変質者 Entarteter を強制的に生殖不能となすこと Zwangmässige Unfruchtbarmachung は未だ其時機に達して居ない」が、「低脳者 Minderwertiger を生殖不能者たらしむることは彼自身の発意若くは其の同意ある」時は「既に可能である」こと、「収容隔離」を「行ひ得ること」、ただし、「生殖不能者たらしむべき者の資格決定、強制隔離監置等に付ては特殊の鑑定委員を設置」することとしている。また、「民族衛生学的概念」を教育に取入れることをすすめ、「民族衛生学的学術及研究の振興に関し瑞典の先例に基き国立研究所を設立せねばならぬ」等がある。

※26 杉田直樹『異常児童の病理』[1924] 226—232 頁：「第 16 章 異常児発生の予防」にはアメリカのネバダ州やカリフォルニア州などでは「法律を出しまして重罪者、精神病者或は低能者白痴と云ふやうな者に対しては、専門家の認知に依り単に結婚を禁止する斗りでなく、政府の命令に依り又当人並に親族の承諾を得て絶産手術を強制的に施すことになっています。即ち性交は可能でも生殖の能力のないやうにして了解のであります」とアメリカの「絶産手術」を紹介している。

※27-1 『日本医事新報』1792 号 (1958. 8) 26 頁「座談会 永井潜先生を偲ぶ」：永井の師である大澤が、第 3 回生理学会で「広汎な性の統計をお話になった」（大澤「性学に関する統計」『生理学研究』8 号）ことがあり、これをアメリカの報告よりずっと早い「日本のキンゼー報告」と位置づけ、「永井先生が産児調節に関する著書を割合早く出されたのはやはり」「大澤先生の伝統の一つの流れがあった」と、山形県衛生研究所所長の浦本政三郎は回顧している。性統計調査の手法は東大生理学教室の研究成果との自負を物語る回顧であり、ここから次の註のような動きも出てくる。

※27-2 『生理学研究』に掲載の山本宣治「若い男の性生活」が、永井らの圧力により打切られた。「若い男の性生活」は、山本が性教育の講演会や講座の終了後に実施した「生物学研究資料」と題したアンケート調査を、同志社、東大、早稲田などの大学生に配布して得た回答と、有識者らに郵送して得たアンケートの回答も含め、1200 名ほどのアンケート集計を分析しまとめたもの。『生理学研究』（1924 年 2 月創刊）に、1924 年 4 月から翌年 2 月まで 8 回連載されたが、永井らの要求により連載中止となった。

※28-1 『医政』3巻4号 5-6頁「日本医師会第五回総会経過」：1927年10月28日、内務大臣鈴木喜三郎より内務大臣諮問「民族衛生施設二関スル意見如何 右諮問ス」が日本医師会に提出され、日本医師会第5回総会（1927. 10. 29）で討議された。山田衛生局長の「優良な子供を生むことの依つて将来の民族を改造しやうと云ふ考へは御互ひに有つて居る……悪い体質、精神の子供を少くし、優良なる子供を多くして民族の改善、社会の負担を少くし、幸福を増進することが出来る……将来の施設の参考に致したい主旨で……此諮問を出した」との投げかけに、参加者らの意見は、「普通は国民と」書くのに「民族となつた理由を聞きたい」。「日本の医師会で」あるのに、「民族と云ふ」のはどうかの意見の後、「此問題」に時間はかけられないので「各都道府県に」諮問することになった。医師らが「民族衛生」という言葉に戸惑いを感じていることが伺えるとともに、優生施策そのものに未だ関心がない様子が伝わってくる総会の内容である。

※28-2 『医政』4巻4号（1929. 1）20頁：「日本医師会第七回総会報告」によると、内務大臣諮問「民族衛生施設二関スル意見如何 右諮問ス」は、1928年12月11、12日の両日に開かれた日本医師会第7回総会で、「総会の委託事項に」については、答申をしておいたとの報告のみにとどまり、医師会での関心の低さを表している。『医事公論』855号（1928. 12）21頁：「委員案を鵜呑みの医政調査会総会」によると、山谷委員の「自分は調査主座」ではないので「詳細なる説明」はできないとしたうえで、アメリカ、ドイツ情報などの紹介があり、「子孫を儲けることは個人の権利であると云ふ方針で嚴重なる法規が制定されていない。其他に亘る的確なる事例は報告されていない」という報告の後、栗本の「本案に関しては各専門大家の講演其他により充分調査したる結果……文句其他特殊の問題なき限りは、原案を賛成したし」という提議に「満場異議なく原案可決」したとある。その原案とは、「民族衛生施設は優生学の真理に則り、我民族特有の習性と社会状態とを考慮して実施す可きもの」で、「近時我國民の素質と社会事情とは優生学的施設の一日も忽諾に附す可からざるもののあるを痛感せしむ」とし、「一、悪質遺伝の虞ある遺伝病者、低脳者、変質者、及常習犯罪者に対しては、其増殖を防止せんが為に生産又は断種を勸説奨励す可き手段を講ずること、就中、遺伝の濃厚なるものに対しては、特殊審議機関の審議決定を俟ち、断種し得るやうな法規を制定する」とあり、そのために「二、民族衛生調査機関の設置」と「三、社会的環境特に保健衛生施設の充実に期す」ことが盛り込まれている。

※29 『日本赤十字社参考館報』第3号（1928. 6）によると、日本赤十字社主催の「民族衛生展覧会」は1928年5月1日から21日まで、芝公園第五号地にある日本赤十字社参考館（26年12月に日赤創立50年を記念して建設）で開催された。この開催趣旨は、「結核、性病、神経衰弱、酒精中毒」などは「其暴威を逞しうし」、乳幼児死亡は高率を示し、「低脳、不具、悪質者は、知徳の優れた有識階級に比べ繁殖が盛な為め、劣悪無能の分子は益増加して……我が民族の素質が次第に低下し劣悪化して往くことは、国家の将来に為め洵に寒心に堪へぬ」現状であるから、「民族の劣悪化に対する救済策」として、まず「国民の注意を喚起」し、「之れを指導することが急務」であるので、「衛生思想を養ひ、又遺伝並配偶者選択等に関する知識を普及」させるためである。また、これは「個

人の衛生を対象としたものでなく、一社会一民族なる集団を目標とした新しい本邦に於て初めての試み」としている。この展覧会の付帯事業として、3回の講演会が開催された。牧野英一（法学博士）「無意識的闘争」、市川源三「結婚の自由と優生学」、そして5月9日には氏原が「民族衛生上の社会施設」と題して「国家の前途を想ひ、次代の国民を憶ふ時に、吾民族素質の良否が如何に影響を及ぼす」かについて講演している。「結婚禁止又は制限法」「滅種法（Sterilization 不妊たらしむる方法）」については展示パネルを使用して説明し、22年にスウェーデンのウプサラに創設された国立民族生物学研究所を紹介している。また、この参考館では28年11月には精神衛生展覧会、31年11月には婦人衛生展覧会、そして国民優生法成立直前の39年11～12月には厚生省、東京府、東京市後援で日本学術振興会、日本民族衛生協会、日本精神衛生協会、日本赤十字社の共同主催で日本民族優生展が開催される。なお、この出典である『日本赤十字社参考館報』は、国立科学博物館（新宿区）に所蔵されている。

※30 『人口食糧問題調査会人口部答申説明』（1930.4）40-44頁：1928年12月7日に開催された小委員会で、永井潜の「人口問題ハ、単ニ数ノ問題タルノミナラズ、又実ニ質ノ問題タラザルベカラズ。……優生学ハ、人口問題ト最モ密接ナル関係ヲ有ス」として、「優生問題ニ対スル答申案」が提出され、これは「人口統制B案」とされた。なお、法案は三案出され、「A案」は永井亨起草の「人口調節ニ関スル法案」、「C案」は福田徳三の「人口統制ニ関スル諸法案」である。小委員会でこの三案の協議が重ねられ、1929年1月25日第18回人口部特別委員会に、「人口統制F案」として提出され、同年12月18日人口部会で、12月19日総会で何れも満場一致で可決され政府に答申された。なお、政府に提出された答申案に、永井の案である「優生学的見地ヨリスル諸施設ニ関スル調査研究を為スコト」という項目が盛り込まれた。

※31 『保健衛生調査会第14回報告書』（1930.4）10-11頁：1930年3月8日、内務省会議室で開かれた保健衛生調査会総会で、民族衛生に関する特別委員会設置の件として北島多一が提案し、栗本庸勝、永井潜、赤木朝治の賛成を得て決議された。

※32 『民族衛生』1巻1号（1931.3）95-99頁：民族衛生学会の評議員、会員には、官僚、政治家をはじめとするあらゆる分野の有識者たちが多数名を連ねている。国民優生法が成立した当時厚生大臣であった吉田茂、予防局長であった高野六郎とともに評議員であった。ちなみに、この吉田茂は戦後総理大臣となる吉田茂とは別人である。

※33 中馬興丸は第58回帝国議会へ「帯患者結婚制限法制定ニ関スル建議案」を提出。建議の内容は「病弱者及低能者ノ増加ハ之ヲ防止セサルヘカラス政府ハ速ニ結婚制限ニ関スル法律ヲ制定スヘシ」で、その理由には「花柳病ハ結婚ニ依リ夫婦間ニ伝染シ精神病者酒精中毒症者ノ子孫ハ多ク精神的欠陥ヲ有ス其ノ他結核癩病ノ患者ハ多ク之ヲ子孫ニ伝播ス故ニ優生学ノ命スル所ニ依リ是等ノ患者ハ結婚ノ以前ニ於テ必要ナル外科手術ヲ受ケシメ子孫繁殖ノ途ヲ絶ツヲ必要トス是レ本案ヲ提出スル所以ナリ」とあり、「子孫繁殖ノ途ヲ絶ツ」法の制定を要求している。また、この建議案の32名の賛成者の中には、

荒川五郎と八木逸郎がいる。但し、議題とならずに終わる（衆議院編『第 57-58 帝国議
会衆議院上奏・建議・決議・動議・質問 1929-30』）。

中馬興丸（1871. 2~1936. 3. 14）：兵庫県生まれ。衆議院議員。1898 年東京帝国大学医
学部卒業。1920 年第 14 回衆議院議員選挙で初当選し、第 15 回、17 回と当選（衆議院・
参議院編 [1990] 405）。

※34 1930 年 7 月 10 日、東大生理学教室で民族衛生学会創立のための最初の相談会を開
く。出席者は永井のほか、古屋芳雄、芦田均と八木秀二。永井から民族衛生学会創立
の件を「最初に相談にあずかった者の一人」だという古屋は、「あの時にどういうわけか
芦田均さんが」来ていたと述べている。（「永井潜先生を偲ぶ会」『日本医事新報』1792
1958. 8）。当時外務省の課長であった芦田に、優生学団体国際連盟への加入を視野に入れ
た外国との接触や情報収集を望む永井が声をかけたのであろう。芦田は、1912 年東京帝
国大学を卒業後外務省に入り、1932 年衆議院議員に初当選、戦後厚生大臣時代に、「民
族復興の問題」として、優生思想による「文化国家、健康国家を建設しなければならない
」と延べ（「新時代の厚生行政」『日本医事新報』1175 号 1946. 1）、1948 年 6 月優生
保護法成立時には内閣総理大臣であった。

※35 『保健衛生調査会第 16 回報告書』（1932. 4）14-17 頁：1931 年 7 月に内務省会議室
で開かれたの「民族衛生ニ関スル特別委員会」第 4 回会議で永井潜は、「滅種法
(Sterilization) ニ関スル海外文化国ノ現況、滅種ノ身体並精神両方面ニ及ボス影響、
滅種ヲ必要トスル社会上ノ理由、滅種ニ対スル非難等ニツキ講話」をした。

※36 『民族衛生』第 1 巻 4 号（1931. 10）493-495 頁：1931 年 10 月 11 日に開催された
日本民族衛生学会第 1 回学術大会（来会者約 300 名中数十名は大学生及女子大学生）で、
永井は、「断種法の過去及び現在」と題して特別講演。「劣種の繁殖」を軽減する手段の
うち「断種法 Sterilization が最も優越せる方法」であるとして、「民族の将来に適切な
る該法案の制定の一日も速かならんことを望む」としている。

※37 人口問題研究会は 1932 年 11 月内務省社会局発起の下に、官民合同で「我国人口問
題の解決に資する為諸般の調査及研究を遂げ且つ人口問題諸団体との連絡を図り併せて
政策施設の促進を期する」（厚生省人口問題研究所 [1939. 9] 27-28）目的で創立し、翌
年財団法人となる。会長柳沢保恵、理事 13 名には内務次官、社会局長、社会部長、内閣
統計局長、永井享、那須皓、上田貞次郎、下村海南、井上雅二と貴族院議員らが就き 1935
年には機関雑誌『人口問題』を発行。1933 年 11 月第 1 回人口問題講演会開催、翌年第 2
回人口問題講演会開催、その後も活発に活動した。

※38 『民族衛生』2 巻 5 号（1933. 4）110 頁、2 巻 6 号（1933. 7）87-89 頁：「正しき結
婚によりて後世子孫の素質の向上と純潔なる社会の実現に寄与する」ための「最大緊急
事項の一たる結婚相談所」の準備が進められ 1933 年 6 月 20 日、日本橋白木屋デパート
6 階に日本民族衛生学会附属優生結婚相談所を開設。都下の主要新聞社、雑誌社に開設

を披露し、記念講演会などを開催して宣伝。会の趣旨は、「幸福な家庭と優良な子孫を造つて、国家の隆昌と、人生の向上」としている。相談事項は11項目で、「結婚、育児等に関して、優生学、医学の見地から適切な相談と補導」を目的に。相談料は1件3円で、文書によるものは1円。担当者は、斉藤茂三郎、吉益脩夫、竹内茂代ら11名。顧問は三宅鑛一、永井潜、遠山郁三、徳川義親で、賛助員は市川源三、吉岡弥生、山脇房子、三輪田元道、宮田修ら10名で構成。

※39 「民族優生保護法案」は1934年1月27日荒川五郎と池田秀雄によって第65回帝国議会に提出された。これが帝国議会に於いて「断種」を求めた最初の法案である。2月22日衆議院本会議で荒川は「民族の悪種遺伝を防止して、民族血統の浄化、国民性格の優秀化を図り、是が健全なる発達を助長し、以て雄偉剛健なる国民を長養し確立したいと多年熱心研究の結果、此案を提出した次第であります」と趣旨弁明をした。また米国オハイオ州の結婚制限法、ドイツの「劣性人絶種法」などをここで紹介している（衆議院 [1984] 342）。3月6日健康保険法中改正法律案外一件委員会第8回で「民族優生保護法案」は議題となり、荒川は「男子の睾丸若しくは女子の輸卵管に、結紮術を行ふても、其目的は達せられ、又『レントゲン』深部照射でも、断種を行ふことが出来ますから、それで特に保性断種法と致したのであります……参考材料を得ませぬので、此保性断種法の名称も、私が付けました」（衆議院 [1993] 153）と、自身の独自性を強調し「此案の如きも既に是が研究を思ひ立ってから十年余りを経過します」（衆議院 [1993] 152）というが、新婦人協会の請願との関係については全く触れていない。この議会では提案説明のみで審議はなされなかった。

※40 『民族衛生』3巻4, 5号 (1934.6) 39-51頁: 1934年4月東大で開催された民族衛生学会第3回学術大会は、第9回日本医学会第12分科会として二日間にわたり開催され、最後に永井の「断種法に対する反対の反対」を講演した。これは、同年二月に民族衛生学会名古屋支部で開かれたナチス断種法批判座談会の席で、名古屋控訴院長、弁護士、医学博士らの断種法に対する批判意見に対し反論したもので、永井は、「国家が、其の絶大の権力によつて、国民の生活基準を示し、個人の我儘勝手を抑圧して、民衆の社会生活をして、安寧幸福ならしめんが為に……法律の前には、国家社会が第一義であり、個人は第二儀的存在であらねばならない。断種手術は、恰も種痘の如く、強制去るべきもの……被手術者に取つて、多少の犠牲を余儀なくされる場合でも、民衆の永遠の寿命の為に、社会大衆の福祉のために、国家が法令を制定し、審議機関を設置して、慎重なる態度の下に之を励行すべき」であると反論している。

※41 『民族衛生』第3巻4, 5号 (1934.6) 「雑報」89頁「断種法協議会」: 「本会では予て断種法案制定小委員会を組織して、其研究を進め、成案を得たので、代議士八木逸郎氏の賛助を求めて、昨年の議会に提出せんとしたのであつたが、八木代議士の適切な注意もあり、先づ政府当局と協議を遂げ、政府案として提出する方が、該法案の実施を実現する上に有利なことで五月三十日に同代議士が主人役となられて、芝区晚翠軒に協議会を開催せられ、内務省よりは大島衛生局長他四課長の出席あり、本会よりは、永井・

加用、吉益三氏が連座し、極めて遠慮ない打ち解けた会合が行はれた」とあり、法案が準備できていたにもかかわらず、第65回帝国議会に提出しなかった経緯が分かる。

※42 第67回帝国議会へ荒川、池田秀雄、八木、青木亮貫の4名により提出された「民族優生保護法案」は第65回帝国議会へ提出された「民族優生保護法案」とまったく同じであるが、提出者に八木と青木が加わった。1935年2月21日衆議院本会議で荒川は「遺伝的に異常の精神的身体的の者が社会国家に害悪を来し、社会生活に不相当で、民族の発達を妨ぐる者に対して、国法の力を以て其子孫の蕃殖、生殖を不可能ならしめ、救治、改善することの出来ない悪性分子を、国家将来の爲め、民族の健全な発達の為に根絶しよう」と云ふのが、即ち本案設定の要旨であります（衆議院 [1984b] 309）と法律によって遺伝的異常者の生殖を不可能にすることを要旨と説明している。「民族優生保護法案」は衛生組合法案外四件委員に付託され、2月28日荒川は「独逸の『ヒットラー』の如きは、此法の活用によって世界第一の優秀民族たらしめんと云ふことを揚言して居る」（衆議院 [1994] 139）と説明した。また「実は私此問題を研究致しますと云ふことは、もう二十年になるのであります……然るに我国には民族衛生学会もありますが、其処等で以て御研究になって居ると云ふことであります、其案を聴きたいと言ひましたが、一向其案を見せて貰はれぬ、又他の方面からも実は一つも材料を得ない、是は単独に私が浅薄な知識を以て」（衆議院 [1994] 141）提案したと述べている。この委員会の理事でもある青木は「是は殆ど……断種であります、遺伝的悪病を予防するべき断種法であります……確に遺伝であると云ふことを確実に認めなければ断種は行はれ得ない」（衆議院 [1994] 139）と遺伝に基く断種法であることを強調した。更に青木は「日本政府果して此世界文明各国の行ひつゝある断種制度を御採りになる御意思ありや、之を御尋したいと存じます」（衆議院 [1994] 139）と断種法に対する政府の見解を求めたのに対して大森内務政務次官は「其御趣意に対しましては賛意を表したい……遺伝関係が尚ほ不明である点が少くない……目下保健衛生調査会に於きまして、彼此れ研究的に之を審議致して居る」（衆議院 [1994] 140）などの返答があった。この第67回帝国議会において初めて「断種法」が論議されたといえる。また八木と青木の参加は次回への布石とも考えられる。

※43 『婦人之友』（1935.6）84-89頁「永井博士との一問一答 優生学的に見た結婚と遺伝」：1935年5月2日、東京帝大医学部生理学教室に於ける、永井と羽仁説子の一問一答。羽仁の遺伝とか優生学について「はつきりした理解も自覚もないのが、現状」に対し、遺伝として一番恐るべき疾病は精神病とし、精神薄弱、結核、癌、梅毒、など遺伝の可否をを説明。白木屋デパートの結婚相談所開設を紹介。また、永井は「悪質遺傳を絶やすといふ意味から、年来断種法の実施を唱へ」、「社会及び民族の将来を保護するために、家庭の負担は重くなり、又生まれる子供には闇い運命を負はせることを考えると」、「優生学上断種法の制定を待望して止まない」という。ついで、「各人の優生学的自覚によつて、良き子孫の繁殖に責任を感じずるやうにしたい」と、女性に対して啓蒙を図ろうとしている。

※44 『優生』1巻1号(1936.3)26頁：日本優生結婚普及会は優生結婚相談所の優生結婚指導の第二段階として発足。会長は永井、副会長に竹内茂代と永井花江(永井の妻)、顧問、幹事等も女性で組織。目的は「一般人の結婚衛生思想の向上を計らんがため」。1936年3月、機関紙『優生』を創刊。

※45 『優生学』144号(1936.2)24頁 雑録欄：日本民族衛生協会より「**民族衛生振興の建議**」が政府に提出された。「**断種法安愈よ議会へ**」として、『断種法』の法制化については従来内務省をはじめ学者間に種々の反対があり具体化は困難とされてきたが、日本民族衛生学会(ママ)ではこれ等反対論を斥けて愈々今議会に貴衆両院に提出することになった」と、「**断種法案**」として掲載。しかしながら、「今議会」が第69回帝国議会を指すのなら、この法案が提出された形跡はない。[第68回帝国議会(通常)：1935.12.24～1936.1.21解散、第69回帝国議会(特別)：1936.5.1～5.26]

『社会事業研究』24巻10号(1936.10)4頁：日本民族衛生協会の「断種法案」に「東京地方裁判所正木判事の手により二カ年を費やして作成されたその法案(五十七頁)参照は、過ぐる第69回帝国議会に、衆議院に於ては八木・荒川両代議士によつて、貴族院に於ては松村氏らの肝煎りで議員提出の法案として夫々提出された」とし、最後に「(結果審議未了)」とある。協会の「断種法案」としては、管見の限り、これら1936年のもののみなので、第67回帝国議会(1935.2)に荒川、八木ら4人によって提出されたものとの混同とは考えられない。

※46 『精神神経学雑誌』40巻10号(1936.10)「雑報」69-71頁：1936年8月23日付「精神病対策確立に関する陳情書」を三宅鉦一・内村祐之連名で内務大臣宛に提出した。それは「世代を遂ふて健全正常なる人々が減少し精神異常者が増加する現象は之を民族の変質と称し臆ては其の国力を減退せしむる要因」であるとして10項目を掲げ、その中の「断種法の制定」項目には「精神病者の過半数は遺伝性のものなるを以て断種法を制定して出来得る限り遺伝性精神病者の発生を予防せられたし」と断種法制定を求めた。

※47 『東京医事新誌』3047号(1937.8.28)「日医の『国民体位向上具体策』答申」58-59頁、『東京医事新誌』3048号(1937.9.4)「『国民体位向上具体策』答申(二)」46-48頁：1937年日本医師会は昨年の内務大臣の諮問「国民の体位向上に関する具体的方策如何」に答申した。そこには「優生学的諸施設を漸次実行に移すこと」として「結婚方法に関する衛生的指導改善を図ること、遺伝性精神病者に対する断種法の制定」と断種法制定が答申に盛り込まれた。また「保険社会省」の設置を求め、その期待する第1に「民族衛生の確立」を挙げている。

※48 1937年3月4日「民族優生保護法案」は八木、荒川、池田、青木よつて第70回帝国議会に提出された。法案賛成者は50名で、前回より6名多い。この法案は3月29日、30日と衆議院本会議の日程には上るが議題とならないまま、3月31日議会は解散した。第70回帝国議会への「民族優生保護法案」提出者、名称も前議会提出のものと同じであるが、内容は異なっている。断種の対象者、断種を申請出来る人を規定、断種の適否を

判定する機関、断種以外に婚姻の禁止や婚姻許可制度の規定などに違いが見られる。

※49 (財)日本少年指導会幼少年教化研究部編『少年不良化の原因と其対策 (抄本)』(1937.6)54-55:幼少年教化研究部主任の吉益脩夫が本書をまとめたものと考えられる。本書の結論は「対策の一つは優生学的方法である。即ちそれは低格者発生の源泉を尋ね其出産を未然に防ぐことを意味する。其為には反社会的傾向の有無に拘らず一般に病的遺伝素質の濃厚なものに対し断種の処分、或は妥当な結婚の統制を行ふことが最も必要である。此意味に於ても断種法と婚姻統制法の制定を急がねばならぬ。尚此等少年中にも将来断種の必要を認められるものがある」とあり、不良少年対策としての断種を要望している。なお、関連記事として、1937年5月22日『読売新聞』は「不良少年断種の新提唱」と題して、同研究部が3年にわたって研究調査した「少年不良化の原因と其対策」の結論を「不良は殆んど先天的のものだから、今後国家社会のためには断種、婚姻統制をも行ふべきことを声高らかに叫ぶ」と報じている。

※50 1938年1月25日第73回帝国議会に「民族優生保護法案」は八木逸郎一名で提出された。賛成者は34名である。法案の内容は第70回帝国議会に提出された案と同じであるが、1938年1月厚生省の発足により「内務大臣」の字句が「厚生大臣」と変更されているのみである。これまで一緒に法案を提出していた荒川五郎は、1937年4月の総選挙で落選し、第73回帝国議会では議席を得ていない。また八木が民族優生保護委員会の委員を辞任したため、村松久義が委員となり、3月12日衆議院本会議での趣旨説明は、青木亮貫が簡単に行い、委員に付託された。3月23日委員会第2回で村松は「民族の優秀なる素質を保護して、悪質の遺伝を防圧すると云ふことが、本法の目的……遺伝の明瞭にして且つ其程度の甚しき者に対して、断種の手術を行ふことに依りまして、本法の目的を達せんとする……断種を行ひまする前に慎重なる手続を必要」(衆議院[1996a]273)等と説明した。この日は主に断種することが医者の治療行為に属するか属しないかが問題となり久山司法政務次官は「本人の承諾のある場合は……犯罪にならないのであります、精神病者の場合は、本人の承諾を得ると云ふことが不可能であります……随て精神病者に対する手術は、現在に於きましては犯罪になると考へて居る」(衆議院[1996a]282)と答弁した。3月24日委員会第3回で山本厚生参与官は「成べく早く成案を得たいやうに考へて居るのであります、決して法案の御趣旨に反対して居る訳ではない」(衆議院[1996a]286)と法成立の方向で考えているとし、また民族素質改善のために厚生省新設の機会に予防局に主管する1課を設けたことも明らかにしたが3月26日には会期終了で法案は審議未了となった。

※51 1938年12月27日第74回帝国議会に「民族優生保護法案」は八木と村松の2名により提出された。賛成者は27名である。1939年1月31日衆議院本会議で村松は「劣悪なる素質を持った所の人が徒に殖えて来て、優秀なる人が之に相対的な減少を来して参る……それを防ぎまする唯一つの途は、民族優生学の教ふる所に従ひまして、劣悪なる所の素質を防ぎ、優秀なる民族を保護致して行くと云ふ以外には、途はない」(衆議院[1985a]129)と説明し、法案は委員に付託された。2月14日委員会第2回で提出者八

木は初めて発言した。八木は医者を経験から法案提出に至った動機を説明し「東京に於て此の事に向つて非常に研究をされて居る大学の其の筋筋の専門の方、或は大審院の検事の方、或は東京市に於て精神病に非常に関係のある方、斯う云ふ方の『グループ』があつて、偶然吾々と心を一に致しますので、私は其の仲間に入って、さうして二年も三年も寄つて研究した結果此の案を出したのであります」（衆議院 [1996b] 34）と賛成議員の他に各方面の専門家と協議し賛意を得て提出に至つたと説明している。この日、河合委員の質問「独逸の断種法の条項の中には酒精中毒者も生殖不能者となすことを得と云ふ一項目がある」（衆議院 [1996] 43）に対して八木は「『アルコール』中毒者は実は提案者としては此の中に入れたかつたのであります……医者の方でも『アルコール』中毒が必ず遺伝すると云ふ程の研究も出来て居ないやうに知つて居りますから実は除いたのであります」（衆議院 [1996b] 43）と答えている。2月16日委員会第3回で松阪司法省刑事局長の「司法省と致しましては、趣旨自体には強いて反対はないのでありますが、今少し各国の法制なり、其の断種を行つて居る実績を研究しました上で、何等か態度を決したい」（衆議院 [1996b] 47）と、司法省の考えが示された。山川委員の「断種の技術」と「其の結果」について（衆議院 [1996] 47）の質問に対し高野予防局長は「例へば癩病患者などでは、別に法律がある訳ではございませぬが、今までの制度に於て格別支障なく實際はやつて居りますから、手術を受けました者が、別に異常を慫へない、斯う云ふ実状であります」（衆議院 [1996b] 49）と癩病患者の手術後の実状を述べている。高野はここでは単に「手術」として「断種手術」とは言っていないが、文脈からは「断種手術」と考えられる。2月18日委員会第4回で「民族優生保護法案」は可決し、八木は「本法律案が衆議院を通過しましたとして、又貴族院も通過致すことは望む所ではありますが、若し然らざる場合に於きましても、此の法案の精神には御賛成になつて居るのですから、……政府は此の法律の精神を遂行する為に御研究になつて……次の議会には是非政府案として提出するやう」望んだ（衆議院 [1996b] 60）。3月16日衆議院本会議では民族優生保護法案委員会委員長から法案可決の報告の後、山川委員から「申告制を採りたる為、却て優良人種の断種が行はれ、劣悪人種は其の儘の繁殖に任すと云ふ、反対の結果を見る虞がある」（衆議院 [1985b] 609）と反対意見が出されたが、委員長の報告通りで確定した。3月19日貴族院本会議では衆議院から送付された「民族優生保護法案」が議題となり、直ちに職員健康保険法案特別委員に併託された。3月25日同特別委員会で高野予防局長は「優生断種と云ふ内容になるだらうと思ひます……成るべく近き機会に之を政府案として提案することが出来ますれば結構」（貴族院 [1997b] 189）と政府提案の用意があると答弁している。委員からは精神病の遺伝は確定しているか、梅毒の中にも遺伝はあるかなどの質問があつた。また富小路委員は「『レプラ』は是は伝染病である……現在本人の申出に依つて實際に断種を行っているよう」だと質問、高野は「夫婦生活に入る者は……断種手術を致しまして、同棲はするが子を産まない」（貴族院 [1997b] 191-192）と答弁している。そのあと休憩に入り、そのまま再開されず、議国会期もこの日で終了し、結局貴族院で審議未了となつた。

※52 『内務厚生時報』3巻7号(1938.7)「公立精神病院長会議」66頁：第一回全国公立精神病院長会議は高野予防局長等の出席の下に1938年6月29日厚生省第一会議室で開催され、

断種法と精神病院の構造設備管理について協議された。「当日の会議で最も活発な協議が行われたのは、断種法の問題であるが、結核、遺伝が確實且濃厚な場合に限り、本人又は家族の申請に依つて、断種を行ひ得る様に法律を制定されるのは、極めて望ましい事であるとの意見の一致を見た」と報告されている。

※53 1939年11月厚生省は「民族優生制度案要綱」を発表した(内務省・厚生省[1939.11]12-18、64-66)。その第三には「癩に罹れる者は本制度の規定に依り断種を行ふことを得ること但し断種の申請に付ては命令を以て定むること」(内務省・厚生省[1939.11]64)と癩の断種を認めている。12月4日国民体力審議会では厚生省諮問の「民族優生制度案要綱」を審議、修正し「優生制度案要綱」を答申した。主な修正は①表題から「民族」を削除、②「断種」を「優生手術」に変更、③第一の「目的」を大幅に変更(「国民素質の向上と人口の増加とを図る」を付加)、④癩の規定の第三を削除、⑤婚姻時に「断種を受けたる旨を告知すべきこと」という第十九を削除等である(『性と生殖の人権問題資料集成』第18巻、No.341、No.343)。

※54 国民優生法案は1940年3月12日第75回帝国議会衆議院本会議で議題とされ吉田厚生大臣が説明。村松久義議員は「優生結婚法」を、曾和義弼議員と田中養達議員は日本の家族主義に反するのではないかという意見、田中、杉山元治郎議員からアルコール中毒者を何故入れないかの質問があり、特に杉山はナチスの「遺伝病予防法の中に、明瞭に一項を掲げて『強度のアルコール』中毒患者も優生手術を行ふことを得」(衆議院[1985c]586)とドイツ法を紹介している。3月13日国民優生法案委員会第1回で八木逸郎議員が委員長に推された。3月14日委員会第2回に於ける主な論点は、断種によって家系が断たれるのではないか、健全人口の増加と「健康なる結婚」について等である。3月15日委員会第3回この日三委員から「断種賛成」の発言があった。3月17日委員会第4回で人口問題は多産奨励で解決などの意見が出された。土屋清三郎議員はこの委員会の委員ではないが委員長の許可を得てこの日出席し「今日独逸が国内の『ユダヤ』人を撲滅する一つ的手段として、此の断種法を利用して居ると同じやうに、悪用されないことがないと云ふことはどうも私は断言が出来ない」(衆議院[1997b]186)と懸念を表した。3月19日委員会第5回で田中委員は「此の中へ『アルコール』中毒患者を入れたい……現在独逸も之を入れて居ります」(衆議院[1997b]192)と強調した。

3月20日委員会第6回では江原委員から修正案が提出され可決。

修正案

- 1、第四条第一項中「二十五歳」を「三十歳」に改む
- 1、第五条第一項中「二十五歳」を「三十歳」に改む
- 1、第十四条を削る
- 1、第十五条を第十四条に改め同条中「又は前条の妊娠中絶」を削る
- 1、第十六条を第十五条と改む
- 1、第十七条を第十六条と改め同条第一項中「又は第十四条」を削る
- 1、第十七条、優生手術を受けたる者婚姻せんとするときは相手方の要求に依り優生

手術を受けた旨を通知すべし

1、第十八条中「第十六条」を「第十五条」に改む

1、第十九条第一項中「若は第十四条の妊娠中絶」を削る

1、第二十条中「第十七条第一項又は第三項」を「第十六条第一項又は第三項」に改む

この修正案と修正以外の原案も全員賛成で可決された。次に杉山委員から附帯決議「強度なる酒精中毒者に対し優生手術を為すの可否に付き政府は速に権威ある調査機関を設け調査すべし」(衆議院 [1997b] 212) が提出された。反対意見も出たが、賛成多数で附帯決議も可決。3月20日日本会議で八木委員長に代わり、村松理事が委員会の経過及び結果を報告し、報告通り確定された。

3月22日貴族院本会議で吉田厚生大臣が衆議院本会議での説明と殆ど同じ内容の説明の後、建部遯吾議員が「系統生命の延伸を断絶する」断種は「軽々に取扱ふべきでない」こと、第一条にある「良質と悪質とは程度の差」であること「未完未成の学説を根拠とし」「調査も頗る不十分不完全」(貴族院 [1984e] 329~331) であることなどを質問した。3月22日国民優生法案特別委員会で吉田厚生大臣は「『ドイツ』の如きは四五十万人の悪質者を対象と致しまして、毎年相当数に対して之を施行致しまして好成績を収めて居る」(貴族院 [1997c] 238) と報告した。3月23日特別委員会で高木委員から人口増加策として「『ドイツ』に於ては此の妊婦の補助をする、或は小児補助金を与へる、又多産の家には減税をする」(貴族院 [1997c] 248) と紹介している。

3月24日特別委員会で吉田厚生大臣は「公益上の見地に立ちまして強制して手術を行ふと云ふことに付きましては差当りは之を執行致しませぬで、実施の経験を重ねました上で、其の条文の執行を致したい」(貴族院 [1997c] 276) と答弁した。これにより強制断種の施行が凍結されることとなった。3月26日特別委員会で全会一致で可決され、同日の本会議で特別委員会委員長が報告した。建部議員は「我が国従来^の系統生命尊重観、寧ろ系統生命神聖観と云ふものに新たに一大決裂を与へるものであります」(貴族院 [1984e] 427) などの理由を上げて反対演説をした。下村議員は「『ドイツ』が最も此の優生運動、断種法に於ては各国の中で一番手広くやって居る」(貴族院 [1984e] 428) と言い、ドイツ断種法の理由書の一部を朗読した。最後に吉田厚生大臣が政府の見解を述べた後、採決となり異議なしで可決成立。

国民優生法成立後、断種政策が低調なまま敗戦を迎えた要因の一つが、この第六条の強制断種の凍結であると考えられる。

Ⅱ—3 文献リスト

(1) 雑誌 ◇著者名欄の「・」は記事、雑報など記名のない場合に使用している。

(A)医科学雑誌

| No. | 著者名 | 論文・資料名 | 誌名・巻号 | 頁 | 発行年月 |
|-----|------|----------------------|-----------------|---------|------------|
| 1 | 大澤謙二 | 体質改良と社会政策 | 東京医事新誌 1391 | 21-27 | 1905. 1. 1 |
| 2 | 三宅鉦一 | 三宅鉦一氏の近信 | 神経学雑誌 6-1 | 48-52 | 1907. 3. 5 |
| 3 | 氏原佐蔵 | 民族衛生学の勃興を促す | 大日本私立衛生会雑誌 372 | 2-8 | 1914. 4 |
| 4 | 氏原佐蔵 | 民族衛生学発達の歴史 | 大日本私立衛生会雑誌 373 | 1-8 | 1914. 5 |
| 5 | 氏原佐蔵 | 民族衛生学の職責 | 大日本私立衛生会雑誌 374 | 10-13 | 1914. 6 |
| 6 | 永井 潜 | 大切な種性血統 | 婦人衛生雑誌 324 | 8-14 | 1916. 11 |
| 7 | 永井 潜 | 人類の再生と民族の盛衰 | 婦人衛生雑誌 348 | 1-37 | 1919. 7 |
| 8 | 氏原佐蔵 | 保健調査実績及計画 | 大日本私立衛生会雑誌 441 | 1-7 | 1920. 2 |
| 9 | 永井 潜 | 芸備医学会 | 広島衛生医事月報 256 | 160-161 | 1920. 4 |
| 10 | 永井 潜 | 戦後の人種衛生 | 広島衛生医事月報 257 | 194-198 | 1920. 5 |
| 11 | 永井 潜 | 戦後の人種衛生(承前) | 広島衛生医事月報 258 | 224-230 | 1920. 6 |
| 12 | 大澤謙二 | 結婚と花柳病 (一) | 性 2-1 | 16-19 | 1920. 6 |
| 13 | 大澤謙二 | 結婚と花柳病 (二) | 性 2-2 | 18-23 | 1920. 7 |
| 14 | 大澤謙二 | 結婚と花柳病 (三) | 性 2-3 | 14-18 | 1920. 8 |
| 15 | 大澤謙二 | 酒と花柳病 | 性 2-4 | 6-7 | 1920. 9 |
| 16 | 大澤謙二 | 花柳病と法律 | 性 2-5 | 135-142 | 1920. 10 |
| 17 | 大澤謙二 | 花柳病男子の結婚制限に就て | 性 2-6 | 38-41 | 1920. 11 |
| 18 | 氏原佐蔵 | 独逸民族衛生協会の声明書 を讀みて | 公衆衛生 41-3 | 137-143 | 1923. 3 |
| 19 | ・ | 動静報告 | 芸備医事 28-7 | 434 | 1923. 7 |
| 20 | 山本宣治 | 若い男の性生活 | 生理学研究 1-3 | 30-40 | 1924. 4 |
| 21 | 山本宣治 | 若い男の性生活 | 生理学研究 1-4 | 25-31 | 1924. 5 |
| 22 | 山本宣治 | 若い男の性生活 | 生理学研究 1-5 | 30-37 | 1924. 6 |
| 23 | 山本宣治 | 若い男の性生活 | 生理学研究 1-7 | 27-32 | 1924. 8 |
| 24 | 大澤謙二 | 性学に関する統計 | 生理学研究 1-8 | 1-10 | 1924. 9 |
| 25 | 山本宣治 | 若い男の性生活 | 生理学研究 1-9 | 30-35 | 1924. 10 |
| 26 | 山本宣治 | 若い男の性生活 | 生理学研究 1-11 | 27-34 | 1924. 12 |
| 27 | 山本宣治 | 若い男の性生活 | 生理学研究 2-1 | 29-37 | 1925. 1 |
| 28 | 山本宣治 | 若い男の性生活 | 生理学研究 2-2 | 24-29 | 1925. 2 |
| 29 | 光田健輔 | 簡單なる輸精管切除術 | 皮膚科及泌尿器科雑誌 25-6 | 95-96 | 1925. 6 |
| 30 | 氏原佐蔵 | 運動奨励事業に就て | 日本公衆保健協会雑誌 1-4 | 24-31 | 1925. 12 |
| 31 | 氏原佐蔵 | 奨健行政の興振を提唱す | 日本公衆保健協会雑誌 2-3 | 巻頭言 | 1926. 3 |

| | | | | | |
|----|--------|-----------------------------|-----------------------|---------------|--------------------------|
| 32 | ・ | 雑報：母性及小児保健講習会 | 芸備医事 32-1 | 28-29 | 1927. 1 |
| 33 | ・ | 第五回日本医師会総会々況 民族衛生諮問 | 医事公論 798 | 20 | 1927. 11. 5 |
| 34 | ・ | 日本医師会第五回総会経過 | 医政 3-4 | 5-6 | 1927. 12 |
| 35 | 永井 潜 | 優生学に就て（講演） | 医政 3-7 | 19-37 | 1928. 3 |
| 36 | ・ | 民族衛生展覧会 | 日本赤十字社参考館報 3 | 6 | 1928. 6 |
| 37 | 氏原佐蔵 | 民族衛生上の社会施設 | 日本赤十字社参考館報 3 | 7-21 | 1928. 6 |
| 38 | ・ | 陳列資料 | 日本赤十字社参考館報 3 | 資料 1-46 | 1928. 6 |
| 39 | ・ | 人口問題対策に衛生局近来の発奮 | 医事公論 831 | 22 | 1928. 6. 23 |
| 40 | ・ | 優生運動への展開を示す =国民の質的充実を計る= | 医事公論 831 | 22 | 1928. 6. 23 |
| 41 | ・ | 雑報：芸備医学会東京部例会記事 | 芸備医事 33-10 | 263 | 1928. 10 |
| 42 | 杉田直樹 | 精神病者の断種実施に就いて（講演） | 医政 4-3 東京医事新誌 2602 | 2-11 21-25 | 1928. 11 1928. 12. 15 |
| 43 | 小野清一郎 | 断種に関する法律家の所見（講演） | 医政 4-3 | 11-21 | 1928. 11 |
| 44 | ・ | 医政調査会総会 答申案 | 医事公論 855 | 21-22 | 1928. 12. 8 |
| 45 | ・ | 民族衛生成案 | 医事公論 856 | 19 | 1928. 12. 15 |
| 46 | ・ | 日本医師会第七回総会報告 | 医政 4-4 | 20 | 1929. 1 |
| 47 | 日本赤十字社 | 精神衛生展覧会 | 日本赤十字社参考館報 4 | 6-9 | 1929. 3 |
| 48 | ・ | 動静報告 | 芸備医事 34-5 | 118 | 1929. 5 |
| 49 | ・ | 雑報：芸備医学会東京部会 | 芸備医事 34-6 | 143 | 1929. 6 |
| 50 | ・ | 動静報告 | 芸備医事 34-8 | 185 | 1929. 8 |
| 51 | 永井 潜 | 欧米見聞所感（上） | 芸備医事 35-4 | 91-96 | 1930. 4 |
| 52 | 永井 潜 | 欧米見聞所感（下） | 芸備医事 35-5 | 120-124 | 1930. 5 |
| 53 | ・ | 動静報告 | 芸備医事 38-4 | 121 | 1933. 4 |
| 54 | 日本赤十字社 | 結婚衛生展覧会 | 赤十字博物館報 12 | | 1933. 12 |
| 55 | ・ | 東京部会新年宴会兼永井博士東大医学部長就任祝賀会 | 芸備医事 40-2 | 30-31 | 1935. 2 |
| 56 | ・ | 永井潜先生断片 | 芸備医事 40-12 | 251-254 | 1935. 12 |
| 57 | ・ | 軍部の衛生省新設提案全貌 | 東京医事新誌 60年 2989 | 47 | 1936. 7. 4 |
| 58 | 陸軍省 | 衛生省設立の急務に就て | | 47-48 | |
| 59 | ・ | 衛生省設置促進全国医師大会の盛況 | 東京医事新誌 60年 2990 | 64-65 | 1936. 7. 11 |

| | | | | | |
|----|------|-----------------------------------|------------------|-------|--------------|
| 60 | ・ | 学振の国民体力問題考查委員会委員決定 | 東京医事新誌 60年 2991 | | 1936. 7. 18 |
| 61 | ・ | 精神病対策確立に関する陳情 | 東京医事新誌 60年 2992 | 60-62 | 1936. 7. 25 |
| 62 | ・ | 民族衛生振興の建議 | 東京医事新誌 60年 2994 | 54 | 1936. 8. 8 |
| 63 | 南 岩男 | 保健国策の体系に関する私見 | 東京医事新誌 60年 3002 | 72 | 1936. 10. 10 |
| 64 | ・ | 学振国民体力研究の為め小委員会特設 | 東京医事新誌 60年 3005 | 57 | 1936. 10. 31 |
| 65 | ・ | 精神病対策確立に関する陳情 | 精神神経学雑誌 40-10 | 69-71 | 1936. 10 |
| 66 | 青木延春 | 北米合衆国に於ける断種法の現状 | 日本公衆保健協会雑誌 12-10 | 53-54 | 1936. 10 |
| 67 | ・ | 動静報告 | 芸備医事 42-5 | 112 | 1937. 5 |
| 68 | ・ | 送る長与 送られる永井 | 医事公論 1293 | 22 | 1937. 5. 1 |
| 69 | ・ | 精神病患者保護救済を徹底(一) 第八回全国方面委員会大会協議 | 医海時報 2231 | 41 | 1937. 5. 29 |
| 70 | ・ | 精神病患者保護救済を徹底(二) 第八回全国方面委員会大会協議 | 医海時報 2232 | 29-30 | 1937. 6. 5 |
| 71 | ・ | 精神病患者保護救済を徹底(三) 第八回全国方面委員会大会協議 | 医海時報 2233 | 29-30 | 1937. 6. 12 |
| 72 | ・ | 日医の「国民体位向上具体策」答申 | 東京医事新誌 61年 3047 | 58-59 | 1937. 8. 28 |
| 73 | ・ | 日医の「国民体位向上具体策」答申(二) | 東京医事新誌 61年 3048 | 46-48 | 1937. 9. 4 |
| 74 | 三宅敏一 | 精神病の統計に関する研究 | 精神神経学雑誌 41-10 | 1-22 | 1937. 10 |
| 75 | 青木延春 | 事変と精神衛生 | 日本公衆保健協会雑誌 13-11 | 2 | 1937. 11 |
| 76 | ・ | 会員動静 | 台湾医学会雑誌 392 | 164 | 1937. 11 |
| 77 | 青木延春 | 事変と花柳病 | 日本公衆保健協会雑誌 13-12 | 55 | 1937. 12 |
| 78 | ・ | 会告 | 台湾医学会雑誌 393 | 186 | 1937. 12 |
| 79 | ・ | 動静報告 | 芸備医事 42-11, 12 | 213 | 1937. 12 |
| 80 | ・ | 新省名も「厚生省」として漸く誕生 | 東京医事新誌 62年 3065 | 79 | 1938. 1. 1 |
| 81 | 厚生省 | 厚生省の新設 | 東京医事新誌 62年 3067 | 60-61 | 1938. 1. 22 |
| 82 | ・ | 会報 | 芸備医事 43-2 | 29-30 | 1938. 2 |
| 83 | ・ | 会員動静 | 台湾医学会雑誌 395 | 145 | 1938. 2 |
| 84 | ・ | 各方面の権威を網羅 厚生省の民族衛生協議会 | 医事公論 1345 | 31 | 1938. 4 |
| 85 | 川上理一 | 行き過ぎを警戒して | 医事公論 1346 | 17 | 1938. 5 |

| | | | | | |
|-----|-------|-----------------------------------------------------|------------------|-------------------------|--------------|
| 86 | ・ | 永井会長歓迎会、動静報告 | 芸備医事 43-6 | 29-30 | 1938. 6 |
| 87 | 吉益脩夫 | 外国に於ける断種の沿革及現況 | 精神衛生 12 | 36-38 | 1938. 7 |
| 88 | 青木延春 | 我国に於ける断種法立法化 運動の経緯 | 精神衛生 12 | 39-43 | 1938. 7 |
| 89 | 青木延春 | 優生断種法(上) | 日本公衆保健協会雑誌 14-10 | 3-8 | 1938. 10 |
| 90 | 青木延春 | 優生断種法(下) | 日本公衆保健協会雑誌 14-11 | 3-11 | 1938. 11 |
| 91 | ・ | 本会第 33 回総会記事 | 台湾医学会雑誌 405 | 108 | 1938. 12 |
| 92 | 古屋芳雄 | 衛生問題は精神問題也一厚生 省に入りて一 | 日本公衆保健協会雑誌 15-6 | 1(巻頭言) | 1939. 6 |
| 93 | ・ | 日本精神病院協会で断種法 制定の支持を決議 | 医海時報 2338 | 21 | 1939. 6. 24 |
| 94 | 三宅鉦一 | 国民体位向上問題殊に精神 機能に就て | 日本医事新報 877 | 12-14 | 1939. 7. 1 |
| 95 | ・ | 国民体力審議会生る | 日本医事新報 882 | 47 | 1939. 8. 5 |
| 96 | 三宅驥一 | 日本民族の優秀性と断種法 | 科学知識 19-9 | 巻頭言 | 1939. 9 |
| 97 | 古屋芳雄 | 人口増殖と優生断種・今日の 人口問題 | | 94-100 | |
| 98 | 青木延春 | 人口増殖と優生断種・量と共に 質を一悪質遺伝防止と諸方策・ 特に断種法に就て一 | | 102-110 | |
| 99 | ・ | 生めよ殖やせよ対策(諸名士)・ 産制と断種の賛否 | | 59, 65, 85, 101, 111 | |
| 100 | 座談会 | 人口問題と断種法(古屋、青木、 三宅鉦一、下村宏、上田貞次郎、 斉藤茂三郎、三宅驥一ほか) | | 172-182 | |
| 101 | ・ | 会員動静 | 台湾医学会雑誌 414 | 146 | 1939. 9 |
| 102 | ・ | 会告 | 台湾医学会雑誌 415 | 117 | 1939. 10 |
| 103 | ・ | 国民体力管理制度案成る=断種 法と共に審議会に提案 | 日本医事新報 892 | 59 | 1939. 10. 14 |
| 104 | 斉藤玉男 | 断種法に伴ふ諸問題 | 日本医事新報 893 | 14-15 | 1939. 10. 21 |
| 105 | 植松七九郎 | 断種法制定に就て | | 15 | |
| 106 | 正木 亮 | 断種法に関する諸問題 | | 15-17 | |
| 107 | 金子準二 | 社会問題としての精神病者の優 生学的断種法 | | 17-25 | |
| 108 | ・ | 体力管理制度の審議進む | 日本医事新報 895 | 47 | 1939. 11. 4 |
| 109 | ・ | 断種法は「優生法」と名称決る | 日本医事新報 900 | 67 | 1939. 12. 9 |

| | | | | | |
|-----|---------------|-----------------------------------------------|------------------|-----------|-------------|
| 110 | 秋元波留夫 | 特別委員会で九箇條の注文 断種法と精神病学—所謂ナ チス精神病学の危機— | 日本医事新報 904 | 159—160 | 1940. 1 |
| 111 | 瀬木三雄 | ドイツに於ける母子保護事業の 現況 | 日本婦人科学会雑誌 35—4 | 328—364 | 1940. 4 |
| 112 | 瀬木三雄 | ドイツに於ける人口科学の医学 的諸問題に就て (第一報告) | 日本婦人科学会雑誌 35—6 | 66—85 | 1940. 6 |
| 113 | 瀬木三雄 | ドイツに於ける人口科学の医学 的諸問題に就て (第二報告) | 日本婦人科学会雑誌 36—2 | 71—96 | 1941. 2 |
| 114 | | 会報 | 芸備医事 45—4 | 72 | 1940. 4 |
| 115 | 日本赤十字社 | 日本民族優生展 | 赤十字博物館報 23 | | 1940. 4 |
| 116 | 青木延春 | 国民優生法 | 日本公衆保健協会雑誌 16—6 | 3—11 | 1940. 6 |
| 117 | 古屋芳雄 | 国土計画と人的資源 | 医事公論 1475 | 27—31 | 1940. 11. 2 |
| 118 | 古屋芳雄 | 民族科学への要請 | 日本公衆保健協会雑誌 16—11 | 1 (巻頭言) | 1940. 11 |
| 119 | 古屋芳雄 | 新日本文化建設と医学 | 医事公論 1484 | 13—14 | 1941. 1. 4 |
| 120 | 三宅鉦一 | 断種と酒精中毒 | 日本医学及健康保険 3221 | 29, 32—35 | 1941. 2. 22 |
| 121 | 古屋芳雄 | 人口政策と東亜共栄圏 | 医事公論 1492 | 23—29 | 1941. 3. 1 |
| 123 | 青木延春 | 国民優生法と人口妊娠中絶 (附.不妊手術) | 日本医事新報 983 | 26—27 | 1941. 7. 5 |
| 124 | 古屋芳雄 | 銃後の人口問題 | 日本公衆保健協会雑誌 17—8 | 3—11 | 1941. 8 |
| 125 | 吉益脩夫 | 精神病質の遺伝生物学的考察 双生児研究より見たる犯罪者の 遺伝素質と環境の意義 | 精神神経学雑誌 45—9 | 1—77 | 1941. 9 |
| 126 | 玉村孝三・矢 嶋良一 | 癩患者に対する断種手術に 就て | 日本公衆保健協会雑誌 17—11 | 10—22 | 1941. 11 |
| 127 | 瀬木三雄 | 妊婦届出と妊婦診察の必要性 | 日本公衆保健協会雑誌 17—12 | 17—18 | 1941. 12 |
| 128 | 白木正博 | 如心我言 | 医事公論 1532 | 45 | 1941. 12. 6 |
| 129 | 谷口弥三郎 | 医人は須らく人口増強策に 協力すべし | 医界週報 363 | 16—17 | 1942. 1. 24 |
| 130 | 瀬木三雄 | 妊婦届出制と日本母性保護 会の発足 | 日本医事新報 1019 | 23 | 1942. 3 |
| 131 | 瀬木三雄 | 母性保護の前進と妊婦届出 制の意義 | 東西医学 9—5 | 432—437 | 1942. 5 |
| 132 | 古屋芳雄 | 臨戦体制下ノ人口問題 | 日本婦人科学会雑誌 37—5 | 109—112 | 1942. 5 |
| 133 | 瀬木三雄 | 優生法と産婦人科学 | 日本医事新報 1029 | 23—25 | 1942. 6 |
| 134 | 古屋芳雄 | 民族と淘汰(一) | 医事公論 1614 | 4—6 | 1943. 7. 13 |

| | | | | | |
|-----|-------|----------------------------------|-----------------------|---------|--------------|
| 135 | 古屋芳雄 | 民族と淘汰(二) | 医事公論 1615 | 4-7 | 1943. 8. 7 |
| 136 | 古屋芳雄 | 民族と淘汰(三) | 医事公論 1616 | 4-6 | 1943. 8. 14 |
| 137 | 古屋芳雄 | 民族と淘汰(完) | 医事公論 1617 | 4-6 | 1943. 8. 21 |
| 138 | 瀬木三雄 | 空襲と母性保護 | 医事公論 1622 | 21-22 | 1943. 9. 25 |
| 139 | 青木延春 | 国民優生法の意義と其の 実施状況に就いて(一) | 日本臨床 2-1 | 88-92 | 1944. 1 |
| 140 | 青木延春 | 国民優生法の意義と其の 実施状況に就いて(二) | 日本臨床 2-2 | 77-83 | 1944. 2 |
| 141 | 古屋芳雄 | 厚生科学動員会議に就て | 日本公衆保健協会雑誌 20- 8・9 | 巻頭言 | 1944. 8・9 |
| 142 | 芦田 均 | 新時代の厚生行政 | 日本医事新報 1175 | 2 | 1946. 1 |
| 143 | 瀬木三雄 | 母子保健問題の今日と明日 | 産科と婦人科 13-9・10 | 11-15 | 1946. 10 |
| 144 | 岸本謙一 | 杉田教授の業績について | 名古屋医学雑誌 63-5 | 145-155 | 1949. 10 |
| 145 | 高楠 鶴 | 父の思い出 | 日本医師会雑誌 30-3 | 139-141 | 1953. 8 |
| 146 | 古屋芳雄他 | 女子不妊手術に関する公衆 衛生学的、人口学的研究 | 日本公衆衛生雑誌 1-10 | 11-20 | 1954. 12 |
| 147 | 古屋芳雄 | 世界人口会議の思い出 | 日本医事新報 1651 | 51 | 1955. 12. 17 |
| 148 | 瀬木三雄 | 日本における母子衛生の発達(2) | 産婦人科の世界 9-4 | 10-16 | 1957. 4 |
| 149 | 古屋芳雄 | 永井潜先生と私の連句 | 日本医事新報 1737 | 60-61 | 1957. 8. 10 |
| 150 | ・ | 座談会：永井先生を偲ぶ | 日本医事新報 1792 | 23-50 | 1958. 8 |
| 151 | ・ | 古屋芳雄先生に聞く | 公衆衛生 27-1 | 25-33 | 1963. 1 |
| 152 | 瀬木三雄 | 手帳保健制 35年に際して 第1 回 母子衛生行政の胎生期 | 産婦人科の世界 29-4 | 135-137 | 1977. 4 |
| 153 | 瀬木三雄 | 手帳保健制 35年に際して 第3 回 母子衛生行政の胎生期 | 産婦人科の世界 29-6 | 123-124 | 1977. 6 |
| 154 | 村松常雄 | 日本の精神医学100年を築い た人々⑤三宅鉦一 | 臨床精神医学 8-3 | 55-61 | 1979. 3 |
| 155 | 中田 修 | 日本の精神医学100年を築い た人々⑩吉益脩夫 | 臨床精神医学 8-8 | 81-91 | 1979. 8 |
| 156 | 岡田靖雄 | 永井潜一断種法上の人びと (その三) | 日本医史学雑誌 46-4 | 672-675 | 2000. 12 |
| 157 | 岡田靖雄 | 吉益脩夫一断種法をめぐる 人びと (その四) — | 日本医史学雑誌 47-2 | 413-415 | 2001. 6 |
| 158 | 岡田靖雄 | 断種法上の人びと(その五) —三宅鉦一— | 日本医史学雑誌 48-2 | 306-308 | 2002. 6 |

(B)優生学雑誌

| No. | 著者名 | 論文・資料名 | 誌名・巻号 | 頁 | 発行年月 |
|-----|------|----------------------------------------------|----------|---------|----------|
| 159 | ・ | 財団法人日本優生学協会創立発起人氏名 | 優生学 2-7 | 30-31 | 1925. 7 |
| 160 | ・ | 同人の件、賛成人の件 | 優生学 2-10 | 30-31 | 1925. 10 |
| 161 | 荒川五郎 | アンケート「教育家は産児制限、科目としての応用優生学をいかに考へいかに取扱ふか」への回答 | 優生運動 2-8 | 44 | 1927. 7 |
| 162 | 古屋芳雄 | 民族衛生学(優生学)の社会的使命(二) | 優生学 7-1 | 7-9 | 1930. 1 |
| 163 | 古屋芳雄 | 中堅階級は絶滅か 新マルサス主義浸潤の危機 | 優生学 7-8 | 2-5 | 1930. 8 |
| 164 | 杉田直樹 | 遺伝と犯罪 | 民族衛生 1-1 | 34-38 | 1931. 3 |
| 165 | ・ | 雑報: 日本民族衛生学会の創立 | | 94-96 | |
| 166 | ・ | 雑報: 会員名簿(第一回)、評議員 | | 98-101 | |
| 167 | (潜) | 瑞典国立民族衛生学研究所 | 民族衛生 1-2 | 頁なし | 1931. 5 |
| 168 | ・ | 雑報: 日本民族衛生学会第一回学術大会 | 民族衛生 1-4 | 113-115 | 1931. 10 |
| 169 | 永井 潜 | 断種法の過去及び現在 | | 493-495 | |
| 170 | 佐藤俊三 | 大正年間に於ける優生運動 | 優生学 9-7 | 6-12 | 1932. 7 |
| 171 | 古屋芳雄 | 人類遺伝学講座(I) | 民族衛生 2-2 | 65-73 | 1932. 8 |
| 172 | ・ | 雑報: 日本民族衛生学会総会 | 民族衛生 2-3 | 107 | 1932. 11 |
| 173 | ・ | 雑報: 人口問題研究会の創立 | 民族衛生 2-4 | 80 | 1933. 1 |
| 174 | ・ | 雑報: 日本民族衛生学会第二回学術大会 | | 83 | |
| 175 | 古屋芳雄 | 人類遺伝学講座(II) | 民族衛生 2-5 | 97-99 | 1933. 4 |
| 176 | ・ | 雑報: 本会附属結婚相談所開始準備成る | | 110 | |
| 177 | 古屋芳雄 | 人類遺伝学講座(III) | 民族衛生 2-6 | 69-73 | 1933. 7 |
| 178 | ・ | 雑報: 本会附属結婚相談所開始 | | 87-89 | |
| 179 | 古屋芳雄 | 日本人及「アイヌ」民族に於ける両性出生率の研究 | 民族衛生 3-1 | 3-17 | 1933. 9 |
| 180 | ・ | 雑報: 結婚衛生展覧会の開催 | | 74-75 | |
| 181 | ・ | 雑報: 独逸に実施せらるゝ断種法及び結婚助成法 | | 76-77 | |
| 182 | ・ | 雑報: 本会附属結婚相談所事 | | 77-78 | |

| | | | | | |
|-----|------|---------------------------------------|------------|---------|----------|
| | | 業の経過 | | | |
| 183 | 古屋芳雄 | 人類遺伝学講座(IV) | 民族衛生 3-2 | 84-86 | 1933. 12 |
| 184 | ・ | 雑報：結婚衛生展覧会の行事概況 | | 95-96 | |
| 185 | ・ | 雑報：映画「結婚十字街」製作 | | 99 | |
| 186 | 古屋芳雄 | 人類遺伝学講座(V) | 民族衛生 3-3 | 57-60 | 1934. 3 |
| 187 | 吉益脩夫 | 優生学的断種の精神病的適応 | 民族衛生 3-4・5 | 29-38 | 1934. 6 |
| 188 | 永井 潜 | 断種法に対する反対の反対 | | 72-76 | |
| 189 | 吉益脩夫 | スウエーデン新断種法草案の批判 | | 54-58 | |
| 190 | ・ | 雑報：日本民族衛生学会第三回学術大会々報（第九回日本医師会第十二分科会） | | 88-89 | |
| 191 | ・ | 雑報：断種法協議会 | | 89 | |
| 192 | ・ | 雑：アイヌ調査会の第一回調査 | 民族衛生 3-6 | 101-102 | 1934. 9 |
| 193 | 吉益脩夫 | スキャンディナヴィヤ三国の断種現行法 | 民族衛生 4-3・4 | 131-134 | 1935. 7 |
| 194 | 吉益脩夫 | 臨床精神病学と優生学 | 民族衛生 4-5・6 | 168-174 | 1935. 12 |
| 195 | ・ | 雑報：本会記事、日本優生結婚衛生普及会の設立、第三回結婚衛生強調の集ひ | | 188 | |
| 196 | ・ | 雑録「断種法愈よ議會へ」 | 優生学 144 | 24 | 1936. 4 |
| 197 | ・ | 優生だより：永井氏の優生問題放送 | 優生 1-1 | 26 | 1936. 3 |
| 198 | ・ | 雑報：国民体力増進會議 | 民族衛生 5-5・6 | 113-114 | 1936. 12 |
| 199 | 吉益脩夫 | 翻訳：合法的断種の本性、意義及び安全性に就いて。（ベルリン大学教授オトウ） | 民族衛生 6-2・3 | 162-165 | 1937. 7 |
| 200 | ・ | 雑報：本会理事長永井潜博士北平大学名誉教授に就任 | | 171 | |
| 201 | 吉益脩夫 | アメリカ合衆国の断種法に就いて | 民族衛生 6-5・6 | 13-21 | 1938. 5 |
| 202 | 青木延春 | 優生断種に就いて(一) | 優生学 16-11 | 14-18 | 1939. 11 |
| 203 | 青木延春 | 優生断種に就いて(二・完) | 優生学 16-12 | 11-14 | 1939. 12 |
| 204 | 床次徳二 | 講演：国民優生法に就て | 民族衛生 9-1 | 58-66 | 1941. 5 |

(C)その他の雑誌

| No. | 著者名 | 論文・資料名 | 誌名・巻号 | 頁 | 発行年月 |
|-----|--------|------------------------------|--------------|---------|-------------|
| 205 | 平塚明子 | 退京 (三幕劇脚本) | 活動 5-4 | 98-107 | 1909. 3 |
| 206 | 永井 潜 | 結婚と健康診察 (二) | 新真婦人 | 22-23 | 1914. 3 |
| 207 | 永井 潜 | 人種改善の理論 (四) | 人性 11-9 | 309-315 | 1915. 10 |
| 208 | 永井 潜 | 遺伝学上より観たる感化事業 | 社会と救済 2-2 | 5-18 | 1918. 5 |
| 209 | 永井 潜 | 花柳病者の結婚を禁止せよ | 婦人公論 | 33-34 | 1919. 7 |
| 210 | 永井 潜 | 民族の衰亡 | 監獄協会雑誌 32-2 | 5-27 | 1919. 2 |
| 211 | 永井 潜 | 民族の衰亡 | 監獄協会雑誌 32-3 | 8-26 | 1919. 3 |
| 212 | 永井 潜 | 優生学講話 | 婦人公論 | 105-119 | 1920. 4 |
| 213 | 平塚らいてう | 花柳病と善種学的結婚制限法 | 女性同盟 2 | 35-41 | 1920. 11 |
| 214 | 永井 潜 | 優生問答の半日 | 体性 7-1 | 2-7 | 1926. 1 |
| 215 | ・ | 教育代議士(三) | 教育週報 38 | 2 | 1926. 2. 6 |
| 216 | 荒川五郎 | 仏教と広島県 | 飽薇 17 | 27-30 | 1926. 5 |
| 217 | 平塚らいてう | 花柳病予防法の修正を望む | 婦人公論 | 219-220 | 1929. 1 |
| 218 | 北村兼子 | 優生学、ちよつと待つて | 社会事業研究 17-1 | 86-89 | 1929. 1 |
| 219 | 荒川五郎 | 少年教護法に就いて (一) | 児童保護 3-3 | 30-32 | 1933. 3 |
| 220 | 荒川五郎 | 少年教護法に就いて (二) | 児童保護 3-4 | 39-41 | 1933. 4 |
| 221 | 古屋芳雄 | 断種法とその民族生物学的背景 | 改造 | 38-47 | 1935. 2 |
| 222 | ・ | 永井博士との一問一答 優生学的に見た結婚と遺伝 | 婦人之友 | 84-89 | 1935. 6 |
| 223 | 吉益脩夫 | 少年犯罪の予防と処置 | 児童研究 37-11 | 368-378 | 1935. 7 |
| 224 | 永井 潜 | 優生学の必要と世界の優生運動 | 婦人公論 | 333-337 | 1935. 8 |
| 225 | 永井 潜 | 断種法を急いで実行せよ | 母と子 17-3 | 16-20 | 1936. 3 |
| 226 | 青木延春 | 精神衛生の立場から見た精神薄弱者問題 | 児童保護 6-5 | 7-13 | 1936. 5 |
| 227 | ・ | 「断種法案」日本民族衛生協会 | 社会事業研究 24-10 | 57、62 | 1936. 10 |
| 228 | 川上理一 | 断種の遺伝学的基礎 | 日本評論 13-7 | 207-216 | 1938. 6 |
| 229 | 三宅鉦一 | 民族優生と断種法 | 帝国教育 719 | 59-71 | 1938. 9 |
| 230 | 瀬木三雄 | 戦前の独逸(1) | 櫻蔭 6-1 | 38-44 | 1939. 9 |
| 231 | 瀬木三雄 | 戦前の独逸(2) | 櫻蔭 6-2 | 88-91 | 1939. 11 |
| 232 | ・ | 優生座談会 | 婦人運動 17-10 | 2-3 | 1939. 11. 1 |
| 233 | ・ | 吉岡弥生氏のおみやげ話 | 婦人運動 17-10 | 5 | 1939. 11. 1 |
| 234 | 三宅鉦一 | 本邦に於ける特殊於ける特殊児童保護問題の回顧と一二の希望 | 児童保護 11-1 | 2-10 | 1941. 1 |
| 235 | 高野六郎 | 人口問題と民族優生運動 | 婦人新報 516 | 96-102 | 1941. 3 |

| | | | | | |
|-----|----------------|-------------------------------------------------|------------------------|---------|-------------|
| 236 | 吉益脩夫 | 優生学から見た優生保護法 | 法律のひろば 2-5 | 20-21 | 1949. 5 |
| 237 | 古屋芳雄 | 優生問題としての人口問題 | 婦人の世紀 10 | 8-17 | 1949. 8. 15 |
| 238 | 杉谷 | 明治生まれの O・B 大いに語る 青木延春先生を訪ねて | 非行問題 174 | 106-109 | 1976. 12 |
| 239 | 内村美代子 | 内村家の人びと | みすず 248 | 2-10 | 1981. 3 |
| 240 | 岡田英己子、 津曲裕次 | 三田谷啓の治療教育学研究の形成過程 | 日本特殊教育学会第 22 回大会発表論文集 | 582-583 | 1984. 9 |
| 241 | 藤目ゆき | 戦間期日本の産児調節運動とその思想 | 歴史評論 430 | 79-100 | 1986. 2 |
| 242 | 宮沢 修 | 教護院の戦後を築いた人々 青木延春、石原登岡先生の事ども | 向陵 x x ix No. 1 | 69-73 | 1987. 4 |
| 243 | 大林道子 | 産児調節運動と優生思想 | 日本婦人問題懇話会会報 46 | 2-26 | 1987. 8 |
| 244 | 野間伸次 | 「健全」なる大日本帝国—国民優生法制定をめぐる— | ヒストリア 120 | 43-65 | 1988 |
| 245 | 高木雅史 | 1920~30 年代における優生学的能力観—永井潜および日本民族衛生学会(協会)の見解を中心に | 名古屋大学教育学部紀要 | 161-171 | 1992. 3 |
| 246 | 石崎昇子 | 生殖の自由と産児調節運動—平塚らいてうと山本宣治 | 歴史評論 503 | 92-107 | 1992. 3 |
| 247 | 筑波常治 | 山本宣治と永井潜 | 文芸春秋 44-1 | 308-314 | 1996. 1 |
| 248 | 松原洋子 | 民族優生保護法案と日本の優生法の系譜 | 科学史研究 II-36 | 42-50 | 1997 |
| 249 | 松原洋子 | <文化国家>の優生法 優生保護法と国民優生法の断層 | 現代思想 25-4 | 8-21 | 1997. 4 |
| 250 | 松原洋子 | 戦時下の断種法論争 精神科医の国民優生法批判 | 現代思想 26-2 | 286-303 | 1998. 2 |
| 251 | 松原洋子 | 戦時期日本の断種政策 | 年報 科学・技術・社会 7 | 87-109 | 1998 |
| 252 | 石崎昇子 | 近代日本の産児調節と国家政策 | 総合女性史研究 15 | 15-32 | 1998. 3 |
| 253 | 松村寛之 | 「国防国家」の優生学—古屋芳雄を中心に— | 史林 83-2 | 102-131 | 2000. 3 |
| 254 | 鈴木智さと | 国民優生法制定過程における家族言説 | 社会政策研究 4 | 247-269 | 2004. 2 |
| 255 | 岡田英己子 | 平塚らいてうの母性主義フェミニズムと優生思想 | 人文学報 361 (都立大学人文学部) | 23-97 | 2005. 3 |
| 256 | 石崎昇子 | 日本近代の家族と生殖—一九二〇年代—一九五〇年代— | 総合女性史研究 24 | 1-18 | 2007. 3 |

(2) 議会関連記録

| No. | 資料名 | 復刻出版社・復刻年 | 議会会期 |
|-----|---------------------------------------------|---------------|--------------------------|
| 257 | 第41回帝国議会衆議院委員会議録 21 | 臨川書店 1983a | 1918. 12. 25～1919. 3. 26 |
| 258 | 第42回帝国議会衆議院委員会議録 23 | 臨川書店 1983b | 1919. 12. 24～1920. 2. 26 |
| 259 | 第64回帝国議会衆議院議事速記録 59 | 東京大学出版会 1983c | 1932. 12. 24～1933. 3. 25 |
| 260 | 第64回帝国議会衆議院委員会議録 33 | 東京大学出版会 1992 | |
| 261 | 第65回帝国議会衆議院議事速記録 61 | 東京大学出版会 1984a | 1933. 12. 23～1934. 3. 25 |
| 262 | 第65回帝国議会衆議院委員会議録 昭和編 45 | 東京大学出版会 1993 | |
| 263 | 第67回帝国議会衆議院議事速記録 64 | 東京大学出版会 1984b | 1934. 12. 24～1935. 3. 25 |
| 264 | 第67回帝国議会衆議院委員会議録 昭和編 56 | 東京大学出版会 1994 | |
| 265 | 第70回帝国議会衆議院議事速記録 68 | 東京大学出版会 1984c | 1936. 12. 24～1940. 3. 31 |
| 266 | 第73回帝国議会衆議院議事速記録 71 | 東京大学出版会 1984d | 1937. 12. 24～1938. 3. 26 |
| 267 | 第73回帝国議会衆議院委員会議録 昭和編 98 | 東京大学出版会 1996a | |
| 268 | 第74回帝国議会衆議院議事速記録 72 | 東京大学出版会 1985a | 1938. 12. 24～1939. 3. 25 |
| 269 | 第74回帝国議会衆議院議事速記録 73 | 東京大学出版会 1985b | |
| 270 | 第74回帝国議会衆議院委員会議録 昭和編 108 | 東京大学出版会 1996b | |
| 271 | 第74回帝国議会貴族院委員会議録 昭和編 84 | 東京大学出版会 1997a | |
| 272 | 第75回帝国議会衆議院議事速記録 75 | 東京大学出版会 1985c | 1939. 12. 23～1940. 3. 26 |
| 273 | 第75回帝国議会衆議院委員会議録 昭和編 124 | 東京大学出版会 1997b | |
| 274 | 第75回帝国議会貴族院議事速記録 66 | 東京大学出版会 1984e | |
| 275 | 第75回帝国議会貴族院委員会議録 昭和編 92 | 東京大学出版会 1997c | |
| 276 | 衆議院編『第57-58 帝国議会集銀上奏・建議・決議・動議・質問 1929-1930』 | | |

(3) 保健衛生調査会報告書

| No. | 資料名 | 頁 | 発行年月 |
|-----|-----------------|----------------|---------|
| 277 | 保健衛生調査会第一回報告書 | 1-17、32、37 | 1917. 5 |
| 278 | 保健衛生調査会第三回報告書 | 23 | 1919. 4 |
| 279 | 保健衛生調査会第四回報告書 | 18-19 | 1920 |
| 280 | 保健衛生調査会第五回報告書 | 15 | 1921. 5 |
| 281 | 保健衛生調査会第六回報告書 | 23-24 | 1922 |
| 282 | 保健衛生調査会第七・八回報告書 | 10、20-24、31、42 | 1924. 4 |
| 283 | 保健衛生調査会第九回報告書 | 10-11 | 1925. 6 |
| 284 | 保健衛生調査会第十一回報告書 | 15、22 | 1927. 4 |
| 285 | 保健衛生調査会第十三回報告書 | 18 | 1929. 4 |
| 286 | 保健衛生調査会第十四回報告書 | 9-11、47 | 1930. 4 |

| | | | |
|-----|----------------|----------|--------|
| 287 | 保健衛生調査会第十五回報告書 | 11 | 1931.4 |
| 288 | 保健衛生調査会第十六回報告書 | 12、14、17 | 1932.4 |
| 289 | 保健衛生調査会第十七回報告書 | 22-24 | 1933.4 |

(4) 政府刊行物

| No. | 著者名 | 資料名 | 誌名・巻号 | 頁 | 発行年月 |
|-----|--------------|--------------------------------------|----------------------------------|---------|---------|
| 290 | 厚生省予防局 | 民族衛生協議会 | 内務厚生時報 3-7 | 66 | 1938.7 |
| 291 | 厚生省予防局 | 公立精神病院長会議 | 内務厚生時報 3-7 | 66-67 | 1938.7 |
| 292 | 厚生省人口問題研究所 | 人口問題研究所の概要 | 内務厚生時報 4-9 | 27-29 | 1939.9 |
| 293 | 厚生省予防局 | 優生結婚座談会 | 内務厚生時報 4-10 | 30-33 | 1939.10 |
| 294 | 厚生省予防局 | 民族優生制度案要綱に就て | 内務厚生時報 4-11 | 12-18 | 1939.11 |
| 295 | 厚生省予防局 | 資料：民族優生制度案要綱 | 内務厚生時報 4-11 | 64-66 | 1939.11 |
| 296 | 青木延春 | 断種制度の遺伝学的基礎 | 人口問題研究会編『第2回人口問題全国協議会報告書』人口問題研究会 | 980-990 | 1939 |
| 297 | 厚生省体力局 | 国民体力審議会第三回総会 | 内務厚生時報 5-2 | 13 | 1940.2 |
| 298 | 厚生省体力局 | 国民体力審議会答申 | 内務厚生時報 5-10 | 10-12 | 1940.10 |
| 299 | 厚生省予防局 | 国民優生法実施準備に関する協議会講演会 | | 31-32 | |
| 300 | 青木延春 | 優生手術について | 人口問題研究 1-5 | 1-19 | 1940.8 |
| 301 | 厚生省予防局 | 国民優生図解 | 国民優生連盟 | | 1941.5 |
| 302 | 人口問題研究所 | 妊産婦手帳規程の制定 | 人口問題研究 3-8 | 32-34 | 1942.8 |
| 303 | 厚生省医務局 | 『医制八十年史』 | 印刷局朝陽会 | | 1955 |
| 304 | 厚生省医務局 | 『医制百年史』 | ぎようせい | | 1976 |
| 305 | 厚生省20年史編集委員会 | 『厚生省20年史』 | 厚生省創立20周年記念事業実施委員会(厚生問題研究会) | | 1960 |
| 306 | 国立武蔵野学院 | 『武蔵野学院五十年誌』 | 国立武蔵野学院 | | 1969 |
| 307 | 廣嶋清志 | 現代日本人口政策史小論(2) - 国民優生法における人口の質政策と量政策 | 人口問題研究 160 | 61-77 | 1981.10 |
| 308 | 厚生省五十年史編集委員会 | 厚生省五十年史(記述篇)(財・厚生問題研究所発行) | 中央法規出版 | | 1988 |
| 309 | 人口問題研 | 人口問題研究所創立五十周年 | 人口問題研究所 | | 1989.8 |

| | | | | | |
|-----|----------------|--------------------------------------|-------------------------|---------|---------|
| 310 | 研究所 衆議院・参議院 | 年記念誌 『議会制度百年史衆議院議員名鑑』 | 大蔵省印刷局 | | 1990 |
| 311 | | 「(6)第十一回人口部特別委員会」『人口食糧問題調査会人口部答申説明』 | 『性と生殖の人権問題資料集成』第17巻不二出版 | 238 | 2000.9 |
| 312 | | 「(10)第十五回人口部特別委員会」『人口食糧問題調査会人口部答申説明』 | 『性と生殖の人権問題資料集成』第17巻不二出版 | 240-241 | 2000.9 |
| 313 | | 「(15)小委員会」『人口食糧問題調査会人口部答申説明』 | 『性と生殖の人権問題資料集成』第17巻不二出版 | 242-243 | 2000.9 |
| 314 | | 「(16)小委員会」『人口食糧問題調査会人口部答申説明』 | 『性と生殖の人権問題資料集成』第17巻不二出版 | 243 | 2000.9 |
| 315 | | 「人口問題研究会人口対策委員会第1回総会議事速記録」 | 『性と生殖の人権問題資料集成』第26巻不二出版 | 240-252 | 2002.12 |

(5) 新聞記事

| No. | 記事名 | 新聞名・号 | 面 | 発行年月日 |
|-----|-------------------------------------------|------------|---|------------|
| 316 | 荒川五郎：候補宣言 | 中国 | 1 | 1902.7.2 |
| 317 | けふの医師総会で人間濫造を防げと内務大臣へ勸説 断種、制産の新法律も設けよ | 東京朝日新聞 朝刊 | 7 | 1928.12.11 |
| 318 | 悪質を断つて大和民族の誇りを益々高む ナチスの向ふを張つて来議会に"断種法"を出す | 大阪朝日新聞 夕刊 | 2 | 1933.10.14 |
| 319 | 親も泣く低脳の子へ 明るい"人生の光り"陽春・東大脳研究所開く | 読売新聞 夕刊 | 2 | 1936.1.14 |
| 320 | 悪質の遺伝病者に子を産ませぬ法律 断種法・愈よ議会へ | 読売新聞 朝刊 | 7 | 1936.1.15 |
| 321 | 悪血の泉を断つて護る民族の花園 研究三年、各国の長をとつた"断種法" 愈よ議会へ | 読売新聞 朝刊 | 7 | 1936.12.12 |
| 322 | 不良少年断種の新提唱 | 読売新聞 朝刊 | 7 | 1937.5.22 |
| 323 | 三藤寛：断種法の検討【上】男性断種 方法に残される問題 | 帝国大学新聞 725 | 5 | 1938.6.20 |
| 324 | 三宅鉦一：断種法の検討【中】理想と実際の開き | 帝国大学新聞 726 | 5 | 1938.6.27 |
| 325 | 藤本直：断種法の検討【下の一】任意か強制か | 帝国大学新聞 727 | 9 | 1938.7.4 |
| 326 | 永井潜：断種法の検討【下之二・完】強制的たれ 優生学の上から | 帝国大学新聞 728 | 5 | 1938.7.11 |
| 327 | 興亜議会の本会議に"断種法"愈よ登場 四度目に委 | 読売新聞 夕刊 | 2 | 1939.2.19 |

| | | | | |
|-----|----------------------------------------------|------------|---|-----------|
| | 員会を通過 | | | |
| 328 | 断種法問題解決のため 精神病者の家系 権威者を集めて調査 齊藤博士に聴く"戦時のドイツ" | 東京日日新聞 | 5 | 1939.6.6 |
| 329 | 齊藤茂吉:断種その他(一)まづ"日本民族"が基本的概念 | 東京日日新聞 | 5 | 1939.6.22 |
| 330 | 齊藤茂吉:断種その他(二)勝手な意味をつけ加へる通俗説 | 東京日日新聞 | 5 | 1939.6.23 |
| 331 | 齊藤茂吉:断種その他(三)遺伝からとは限らぬ精神病 | 東京日日新聞 | 5 | 1939.6.24 |
| 332 | 齊藤茂吉:断種その他(四)低すぎる世人の理解の程度 | 東京日日新聞 | 5 | 1939.6.25 |
| 333 | 遺伝と犯罪 優生法近く議会上程 | 読売新聞 朝刊 | 4 | 1940.2.28 |
| 334 | 宿命の家系三千 "優生法"の議会上程を控へて厚生省の調査完成 | 読売新聞 朝刊 | 7 | 1940.2.28 |
| 335 | 内村祐之:断種法の過去と将来 国民優生法への期待 | 帝国大学新聞 813 | 5 | 1940.5.27 |
| 336 | 荒川五郎:日本民族は果して優秀なりや(上) | 国民新聞 | 3 | 1941.9.19 |
| 337 | 荒川五郎:日本民族は果して優秀なりや(中) | 国民新聞 | 3 | 1941.9.20 |
| 338 | 荒川五郎:日本民族は果して優秀なりや(下) | 国民新聞 | 3 | 1941.9.21 |

(6) 図書

◇アイウエオ順とする。

(A) 戦前編

| No. | 編著者名 | 資料名 | 出版社 | 発行年月 |
|-----|------|--------------------------------------------------------|---------|---------|
| 339 | 青木延春 | 体力向上と優生断種(保健衛生協会発行) | 龍吟社 | 1941 |
| 340 | 青木延春 | 優生結婚と優生断種 | 龍吟社 | 1941 |
| 341 | 青木延春 | 優生結婚の話 | 龍吟社 | 1942 |
| 342 | 氏原佐蔵 | 民族衛生学 全 ※1 (『性と生殖の人権問題資料集成』16(不二出版、[2000] 1-23)へ収載) | 南江堂書店 | 1914 |
| 343 | 氏原佐蔵 | 国民保健と運動奨励 | 著者発行 | 1924 |
| 344 | 氏原佐蔵 | 売笑婦及花柳病 | 警察協会 | 1926.7 |
| 345 | 氏原佐蔵 | 保健学講話 | 三光社 | 1930 |
| 346 | 大澤謙二 | 社会的衛生 体質改善論 | 東京開成館 | 1904 |
| 347 | 大澤謙二 | 生理学上より見たる婦人の本分 | 大倉書店 | 1908 |
| 348 | 大澤謙二 | 通俗結婚新説 | 大倉書店 | 1909 |
| 349 | 大澤謙二 | 日本女子大学講義 [9] 生理学 | 日本女子大学校 | 1914 ※2 |
| 350 | 大橋 勲 | 大澤謙二(東三偉傑史伝総合講座) | 東三文化研究会 | 1932 |
| 351 | 小沼宗俊 | 日本医学博士録 明治21年5月—昭和18年8月末 | 東西医学社 | 1944 |
| 352 | 杉田直樹 | 低能児及不良児の医学的考察 | 中文館書店 | 1923 |
| 353 | 杉田直樹 | 異常児童の病理 | 内外書房 | 1924 |

| | | | | |
|-----|-----------|-----------------------------------------------------|-----------|---------|
| 354 | 杉田直樹 | 治療教育学 | 叢文閣 | 1936 |
| 355 | 瀬木三雄 | ナチスの人口医学 特に母性保護の医学的基礎に就て | 南山堂書店 | 1943 |
| 356 | 瀬木三雄 | ドイツの健民政策と母子保護事業 | 北光書房 | 1944 |
| 357 | 中国新聞社 | 「荒川五郎氏」『巨人新人』(35-44) | 中国新聞社 | 1928 |
| 358 | 永井 潜 | 医学ト哲学 | 吐鳳堂書店 | 1908 |
| 359 | 永井 潜 | 生命論 | 洛陽堂 | 1913 |
| 360 | 永井 潜 | 人生論 | 実業之日本社 | 1916 |
| 361 | 永井 潜 | 道と自然 | 人文書院 | 1936 |
| 362 | 永井 潜 | 優生学概論 | 雄山閣 | 1936 |
| 363 | 中村政雄 | 日本女子大学校四十年史 | 日本女子大学校 | 1932 |
| 364 | 矢吹慶輝、谷山恵林 | 「社会事業概説」長谷川良信編『社会政策大系 第二巻』 | 大東出版社 | 1926. 9 |
| 365 | 幼少年教化研究部 | 少年不良化の原因と其対策(抄本) 第1輯 | 日本少年指導会 | 1937 |
| 366 | 吉益脩夫 | 社会防衛としての断種の問題 | 日本犯罪学会出版部 | 1931 |
| 367 | | | | |
| 368 | 吉益脩夫 | 優生学の理論と実際 特に精神医学との | 南江堂 | 1940. 9 |
| 369 | | 関係に於て | | |
| 370 | 藤本 直 | 断種法(京城帝国大学法学会叢書) ※3 (『性と生殖の人権問題資料集成』20、不二出版、へ収載) | 岩波書店 | 1941. 3 |

※1、※3 原本は未見。 ※2 日本女子大学図書館によると、本書は日本女子大学校の通信教育の教科書を科目ごとにまとめて、自家製本されたものであるため発行年等の記載が無く不明である。

(B) 戦後編

| No. | 編著者名 | 資料名 | 出版社 | 発行年月 |
|-----|-------|----------------------------------------------------------------------------------|---------|---------|
| 371 | 青木延春 | 応用優生学としての断種 | 龍吟社 | 1948 |
| 372 | 青木延春 | 「教護事業の課題」全国教護協議会編『教護事業六十年』(253-262) | 全国教護協議会 | 1964 |
| 373 | 青木延春 | 少年非行の治療教育 | 国土社 | 1969 |
| 374 | 石崎昇子 | 母性保護・優生思想をめぐって(189-208) 《レポート》福島貞子と「母性」(209-211) 『婦女新聞』を読む会編『「婦女新聞」と女性の近代』 | 不二出版 | 1997. 6 |
| 375 | 市野川容孝 | 「黄禍論と優生学—第一次大戦前後のハイポリティクス—」小森陽一ほか編『編成される | 岩波書店 | 2002. 3 |

| | | | | |
|-----|-----------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------|---------|
| | | ナショナリズム』岩波講座 近代日本の文化史 5 (119-165) | | |
| 376 | 今井清一、高橋正衛 | 現代史資料 4 国家主義運動 1 | みすず書房 | 1963. 5 |
| 377 | 内村祐之 | 精神医学者の滴想 | 同盟出版社 | 1947 |
| 378 | 内村祐之 | わが歩みし精神医学の道 | みすず書房 | 1968 |
| 379 | 内村祐之 | 鑑三・野球・精神医学 | 日本経済新聞社 | 1973 |
| 380 | 内村祐之 | 精神医学者の滴想 (中公文庫) | 中央公論社 | 1984 |
| 381 | 大澤謙二著・東大生理学同窓会編 | 燈影蟲語 (医海事報社 1928 年刊の複製) | 東大生理学同窓会 | 1974. 4 |
| 382 | 太田典礼 | 日本産児調節史—明治・大正・昭和初期まで— | 日本家族計画協会 | 1969 |
| 383 | 太田典礼 | 日本産児調節百年史 | 出版科学総合研究所 | 1976 |
| 384 | 大西(首藤)美香子 | 育児啓蒙活動家・三田谷啓の研究～1920年代の育児観と子ども観～ | お茶の水女子大学人間文化研究科平成 12 年度博士学位論文 | 2001. 3 |
| 385 | 大原社会問題研究所 | 日本社会衛生年鑑 大正 11 年版 (複製) | 皓星社 | 1997. 5 |
| 386 | 岡崎祐士 | 「臨床遺伝学の発展と東大精神科」東京大学精神医学教室 120 年編集委員会編『東京大学精神医学教室 120 年』(105-112) | 新興医学出版社 | 2007 |
| 387 | 岡田英己子 | わが国の優生運動史—戦前— | 奈良教育大学教育学部卒業論文 | 1971. 9 |
| 388 | 小熊英二 | 単一民族神話の起源 <日本人>の自画像の系譜 | 新曜社 | 1995. 7 |
| 389 | 小田切明憲 | 「解説」『山本宣治全集 第二巻』(508-520) | 汐文社 | 1979. 3 |
| 390 | 小田 晋 | 「吉益脩夫」松下正明総編集『司法精神医学概論』司法精神医学シリーズ第 1 巻 (158-166) | 中山書房 | 2006 |
| 391 | 小俣和一郎 | 「日本の精神医療と優生思想—日本精神医学史の再検討を含めて」優生手術に対する謝罪を求める会編『優生保護法が犯した罪—子どもをもつことを奪われた人々の証言』(134-146) | 現代書館 | 2003 |
| 392 | 折井美耶子・篠宮美美・清水和美・永原紀子他 | 女性の歴史研究会会誌第 3 号：女性解放のさきがけ 新婦人協会の研究—特集・花柳病男子結婚制限法制定の運動 | 女性の歴史研究会 | 2003 |

| | | | | |
|-----|-------------|-------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------|----------|
| 393 | 風祭 元 | 「司法精神医学と東大精神医学教室—とくに精神鑑定について—」東京大学精神医学教室 120年編集委員会編『東京大学精神医学教室 120年』 | 新興医学出版社 | 2007 |
| 394 | 加藤秀一 | 「愛せよ、産めよ、より高き種族のために—夫—婦制と人種改良の政治学」大場ほか編『シリーズ【性を問う】3 共同態』(203—253) | 専修大学出版局 | 1997. 10 |
| 395 | 加藤秀一 | <恋愛結婚>は何をもたらしたか—性道徳と優生思想の百年間— | ちくま新書 | 2004. 8 |
| 396 | 加藤博史 | 福祉の人間観の社会誌—優生思想と非行・精神病を通して— | 晃洋書房 | 1996 |
| 397 | 金子準二 | 伝記叢書 29 三宅鉦一博士事績 [原著『三宅鉦一博士事績』三宅鉦一博士事績編纂委員会 (1963)] | 大空社 | 1988 |
| 398 | Klee, Ernst | 松下正明監訳『第三帝国と安楽死—生きるに値しない生命の抹殺』(原著 1983) | 批評社 | 1999 |
| 399 | 斉藤美穂 | 「女性雑誌にみる優生思想の普及について—国民優生法成立にいたるまで—」近代女性文化史研究会編『戦争と女性雑誌—一九三一年—一九四五年—』(104—125) | ドメス出版 | 2001 |
| 400 | 佐々木敏二 | 山本宣治 上・下 | 不二出版 | 1998. 10 |
| 401 | 鈴木善次 | 日本の優生学 | 三共出版 | 1983 |
| 402 | 鈴木善次 | 「日本における優生思想・優生運動の軌跡」Daniel J. Kevles 著西村総平訳『優生学の名のもとに』(507—517) | 朝日新聞社 | 1993 |
| 403 | 精神薄弱問題史研究会 | 人物でつづる障害者教育史<日本編> [113 (三宅鉦一)、123 (杉田直樹)] | 日本文化科学社 | 1988 |
| 404 | 戦時下日本社会研究会 | 戦時下の日本 | 行路社 | 1992 |
| 405 | 中国新聞社史編纂委員会 | 中国新聞八十年史 | 中国新聞社 | 1972 |
| 406 | 永原紀子 | 「花柳病男子結婚制限法制定の請願運動とその本質」折井美耶子・女性の歴史研究会編著『新婦人協会の研究』(68—96) | ドメス出版 | 2006. 5 |
| 407 | 中村満紀男(代表) | 20世紀優生学が障害者の生存・生活・教育に及ぼした影響に関する総合的研究 | 平成 11~13 年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1) | 2002. 3 |
| 408 | 中村満紀男編著 | 優生学と障害者 | 明石書店 | 2004. 2 |
| 409 | 日本科学史学会 | 日本科学技術史大系・第 25 巻・医学<2> | 第一法規出版 | 1967 |

| | | | | |
|-----|------------------|---------------------------------------------------------------------|--------------------------------------|---------|
| 410 | 日本女子大学 | 日本女子大学学園事典—創立100年の軌跡 (日本女子大学発行) | ドメス出版 | 2001 |
| 411 | 日本女子大学 平塚らいてう研究会 | 女性ジャーナルの先駆け 日本女子大 桜楓会機関紙『家庭週報』年表 | (社)日本女子大学 教育文化振興桜楓会出版部 | 2006.7 |
| 412 | 日本生理学教室史編集委員会 | 日本生理学教室史(上巻) | 日本生理学会 | 1983 |
| 413 | 平田勝政 | 日本における優生学の障害者教育・福祉への影響とその克服過程に関する研究 | 平成14年～16年度 科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) | 2005.5 |
| 414 | 平塚らいてう | 元始、女性は太陽であった 上巻 | 大月書店 | 1971.8 |
| 415 | 平塚らいてう | 元始、女性は太陽であった 下巻 | 大月書店 | 1971.9 |
| 416 | 平塚らいてう | 元始、女性は太陽であった 完結編 | 大月書店 | 1973.11 |
| 417 | 藤野 豊 | 日本ファシズムと医療 | 岩波書店 | 1993 |
| 418 | 藤野 豊 | 日本ファシズムと優生思想 | かもがわ出版 | 1998.4 |
| 419 | 藤野 豊 | 「いのち」の近代史 「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者 | かもがわ出版 | 2001.5 |
| 420 | 藤野 豊 | 性の国家管理 買春の近現代史 | 不二出版 | 2001.10 |
| 421 | 藤野 豊 | 厚生省の誕生—医療はファシズムをいかに推進したか | かもがわ出版 | 2003.8 |
| 422 | 藤目ゆき | 性の歴史学 | 不二出版 | 1997 |
| 423 | 星 新一 | 祖父・小金井良精の記 | 河出書房新社 | 1974.2 |
| 424 | 松原洋子 | 日本における優生政策の形成—国民優生法と優生保護法の成立過程の検討 | お茶の水女子大学 人間文化研究科博士学位論文 | 1998.3 |
| 425 | 松原洋子 | 「解説 優生問題・人口問題」『性と生殖の人権問題資料集成』(1-7) | 不二出版 | 2000 |
| 426 | 松原洋子 | 「解説」『人性』 | 不二出版 | 2001.6 |
| 427 | 松原洋子 | 「優生学の歴史」廣野喜幸・市野川容孝・林真理編『生命科学の近現代史』(199-226) | 勁草書房 | 2002 |
| 428 | 松原洋子 | 「優生学」市野川容孝編『生命倫理とは何か』(135-141) | 平凡社 | 2002 |
| 429 | 松原洋子 | 「日本の優生法の歴史」優生手術に対する謝罪を求める会編『優生保護法が犯した罪—子どもをもつことを奪われた人々の証言』(104-115) | 現代書館 | 2003 |
| 430 | 光田健輔 | 回春病室—救ライ五十年の記録— | 朝日新聞社 | 1950.10 |

| | | | | |
|-----|--------------------------|-------------------------------|------------------|--------|
| 431 | 森岡正博 | 生命学に何ができるか 脳死・フェミニズム・優 生思想 | 勁草書房 | 2001 |
| 432 | 山本直英 | 性のタブーに挑んだ男たち | かもがわ出版 | 1994 |
| 433 | 横山利明 | 日本進化思想史 一人間を捜し求めた人々の 記録(二) | 新水社 | 2003 |
| 434 | 吉益脩夫 | 優生学 | 南江堂 | 1961 |
| 435 | 米田佐代子 | 平塚らいてう—近代日本のデモクラシーとジ ェンダー | 吉川弘文館 | 2002 |
| 436 | 米本昌平、松原洋子、櫛 島次郎、市野川容孝 | 優生学と人間社会 生命科学の世紀はどこへ 向かうのか | 講談社 (講談社現代新書) | 2000.7 |

【辞典・事典】

- 『日本人名大事典』第1巻～第6巻(『新撰大人名辞典』(昭和12年刊)の改題複製)、現代、平凡社、1979.7
- 丸岡秀子・山口美代子編『日本婦人問題資料集成第十巻 近代日本婦人問題年表』ドメス出版、1980.5
- 伊藤友信他編『近代日本哲学思想家辞典』東京書籍、1982.9
- 新潮社辞典編集部編『新潮日本人名辞典』新潮社、1991.3
- 秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会、2002.5
- 金子幸子他編『日本女性史大辞典』吉川弘文館、2008.1

Ⅲ部 戦後優生思想の読みかえと隠蔽・忘却

Ⅲ部 戦後優生思想の読みかえと隠蔽・忘却

はじめに 家族設計の起点となる優生保護法——「性と生殖の自己決定」の亜種か

I部、II部では、平塚や永井、荒川や厚生省関係者が、断種法をいつ構想し、施行を求めてどのような動きをみせるのかを、子細に見てきた。

ここより出てくる疑問は、すなわち「権利としての自己決定」を求め、私生活では見事にそれを貫く平塚が、なぜ「性と生殖の自己管理のすすめ」の域を飛び越し、「性と生殖の国家管理」の最たるものである断種法要求にまで暴走するのか、であろう。そこには女性の自立・自己決定のジレンマが、「個人本位」の優生学が深く関わっているのではないか。

Ⅲ-1では、戦後優生思想との関連でその背景が検討される。日本の断種法制定運動のリーダーと誰もが認める永井潜と、海外でも広くその名が知られる日本フェミニズムの旗手たる平塚らいてう。若き日の優生思想形成過程で、二人は結婚制限では同じ情報源を持つことは、すでにI部で明らかにされた。Ⅲ部でも二人の優生思想は接近する。敗戦直後の優生保護法制定論議が始まる時である。奇妙な位に符合する。時期も、内容もである。むしろI部で指摘しているが、平塚と永井との間に直接的な交流があったわけではない。

どういう時代状況が二人を再びメディアで接近させたのか。まずその新潮流を概観しておこう。

1945年8月15日、日本の敗戦が決まる。経済は壊滅状態にあった。領土が縮小され、海外からの引き上げと復員による人口の急増が、社会的混乱を招く。生活困窮問題が深刻視され、それが売春が巷に横行させているとされ、進駐軍の強姦による「混血児」問題がメディアで頻繁に取り沙汰されていく。

こうして敗戦直後から国土が狭まった上に、次代を担う青年は戦争による「逆淘汰」で激減し、世相は荒れ果て、よって経済再建には幾多の困難が伴うという、時代描写が通説化していく。平和を希求する心性と、過剰人口問題とが奇妙に合体し、階層間も、都市農村の地域差も越えて、「より良き暮らし向き」の家族設計が人々の脳裏に埋め込まれていく。それもきわめて短期にである。早くも1949年を境に出生率は急速に低下する。いわゆる「二人っ子革命」と称される時代が、1950年代半ばに定着するからだ(落合[2004]54-56)。

ここで大きな役割を果たすのが優生保護法である。国民優生法に代わり、1948年に制定される同法は、優生学的見地から「不良な子孫」の出生を防止し、同時に「母体の保護」を目的に掲げていた。が、実際には上述の過剰人口問題への解消策となって、中絶天国と称される事態を招く法となる。「性と生殖の自己決定」とは言いかねるが、しかしその亜種のような役割を担う。中絶がほとんどスティグマを伴わずに、1950年代の生殖コントロールとして、主婦層を軸に日常生活に定着する。

他方、否定的(消極的)優生学といえる断種は対象を「遺伝性疾患」に限定されたものの、「癩疾患」を「任意の優生手術」対象に含める点で、同時期の先進国とは異なる。また同

法は、高度経済成長期の病院・施設拡充策と、奇妙な相互依存体質を形成し、障害や病の隔離保護言説を支える機能も果たす。その一例が、1960年精神薄弱福祉法で登録制度をめぐる論議に見られる。優生保護法を引き合いに出しながら、重度者全員の隔離保護を容認する意見が女性議員を中軸に展開される。中心人物は中山まさ。ほどなく女性初の大臣、それも厚生大臣になる彼女が、精神薄弱福祉法制定論議では戦前の優生学的言説と酷似する発言を繰り返す。誰も、それを奇妙とは感じなかった時代であった。

「二人っ子革命」との命名がピタリと当てはまる、家族設計の自己管理の時代の到来。かくして人口の量の管理は、優生保護法と言う名の断種法によって、世界に例のないスピードで、高度経済成長期のとば口で、まず下から完結を見ていく。むろん言語体系の変化は遅い。敗戦直後のオピニオン・リーダーとして、平塚や永井のような古参の書き手に、メディアがまたもや期待を寄せるからだ。こうして過去の優生学的言説と障害差別を存分に引きずりながら、確たる人口政策・家族政策もないままに、日本はやがて少子化の時代に突入していくことになる。

Ⅲ-2では、戦後のある時期からナチ断種法批判の立場を標榜しながらも、実際は過去に断種法容認をしていたり、戦後優生思想を読みかえていた一群の言説を、年表を通して見ていく。Ⅲ部は当初予定の戦後ドイツの障害者団体の調査ができにくく、国際比較とは程遠い日本に偏った年表であるが、高度経済成長期を境に変化する優生学関連著作の分析結果から、意識的に出される「断種法の効果に疑問であった」式のナチ断種法批判言説の政治性は読み取れるであろう。この点ではドイツもよく似ている。なお表題に記した「読みかえ」には、教科書・テキスト類の「書きかえ」行為もとりあえず含むものとし、年表記載では明確には分けていない。戦後史年表は作成途上のもので、註を付けるには至らなかった。が、類似のものがない状況でもあり、ここに掲載する。

構成は以下の通り。

- Ⅲ-1 優生保護法制定時の平塚らいてうと永井潜
 - 1-1 平塚らいてう「民族の未来のために」(『女性改造』1949.4)について
 - 1-2 永井潜『民族の運命』(1948.3 村松書店)と「近時公布の二つの重要法律について」(『厚生時報』1949.1)
 - 1-3 平塚らいてうと永井潜・永井門下生の戦後優生思想
- 小活 「反」フェミニズムへの静かなる抗議の結末
- Ⅲ-2 Ⅲ部年表：「戦後優生思想の読みかえと隠蔽・忘却」の軌跡
- Ⅲ-3 文献リスト

Ⅲ部－１ 優生保護法制定時の平塚らいてうと永井潜

優生保護法制定前後から、人口政策は密やかに、しかし確実に、皮相的な理解ではあっても人々の「性と生殖の自己決定」の行動様式となって定着していくのであるが、戦前からの著名な論者は、戦後もすぐにメディアに登場してくる。むろん平塚らいてうも、永井潜も、である。

新生日本の国家建設に向けて、永井は個人単位ではなく、国民単位での家族設計関心を膨らます。1930年に民族衛生学会を設立し、断種法制定運動のリーダーとして君臨した永井は、戦後もなお性教育の場で主導権を握り続ける。1920年設立の新婦人協会で、花柳病男子結婚制限法制定運動を展開した平塚も、平和日本の母性主義フェミニズムのシンボルとして、期待を一身に集めていく。その二人が発する優生学的言説を以下で紹介しよう。二人は、何のために、この時期に発信したのであろうか。

1－1 平塚らいてう「民族の未来のために」(『女性改造』1949.4)について

平塚らいてうは、1946年11月に公布された日本国憲法に、母性の権利の規定が入っていないことへの不満はあったが、平和の精神に基づく戦争放棄、男女平等、主権在民、基本的人権の尊重に深く共鳴した。平和に対する希求から世界連邦主義にひかれ、世界連邦建設同盟に入会するなど、世界平和にも関心を示し始める。かくして新生日本への期待が膨らむ中で、平塚はかつて自身が翻訳した、第一次大戦後に書かれたハヴェロック・エリス著『世界大戦に関する優生学』³⁸を読み返し、特に「女性の立場から、未来の民族ということをいろいろ考えさせられる」として、「民族の未来のために」稿を発表する。

「昨年九月に実施された性病予防法といふ、優生保護法といふ……戦後の……社会事情が、この種の法律の必要をのっぴきならぬものにしている……その他児童福祉法や母子衛生対策要綱の実施、労働基準法による年少者と婦人の保護規定、産児制限の公認、薬事法の改正による産制薬や産制器具の合法的発売、純潔教育委員会の設置等々、民族擁護に係のある戦後の動きは、なおいくらか心に浮かんでいきます」(平塚[1949.4]8)。

「新しい法律、新しい運動が、実際にどれだけ行われ、どれだけ大衆に徹底しているか、実績の点を考えると、まことに疑わしい」とし、「性病の撲滅と予防は、新日本建設のためには、今日わたくしたちがもっとも全力をあげてたたかわなければならない重要事のようにおもわれ」るのに、「実施をみた新予防法は、果たして徹底的に行われている」か、結婚の当事者の「医師の診断書」の交換など「案外少なく、また女の立場から、母体の安全と未来の子供のために、すゝんで要求するものもあまりないような現状ではない」か、「この一項こそ、今日家庭のなかまでも容赦なく侵入してきたウイルスを、その入り口において……食

³⁸平塚はエリスの「世界大戦に関する優生学」を「世界大戦に関する善種学」として、その訳文を『婦人と子供の権利』(1919.12 天佑社)に収録している。

いとめるに必要な手段であるのに……妊娠の場合、性病の有無についてかならず健康診断をうけなければならないという他の一項も必要で……結婚の場合の相手方の健康診断も、同様に、いえ、それ以上に必要」だと記している（平塚[1949. 4]8-9）。

「昨年十月に実施された優生保護法が、現在どれだけ運用されているものか……前の国民優生法にくらべて、はるかに幅のあるものであり、社会的必要に答えていろいろな場合の妊娠中絶が認められはしたものの、今日最も多い経済的理由によるものを認めなかったところに問題が残されている……生活苦のためによく育てあげる見込みのない子供を、親の意思に反してまで生まれなければならないものか、とにかく非合法に行われつゝある貧しい女の墮胎のなやみにはそうとう大きなものがあるに相違ありません。……戦後の主として優生関係の性行政……よりももっと重要な根本問題は……女性が性における女性みずからの地位を自覚することであり、その自覚による自主的な態度と行動でなければならない」（平塚[1949. 4]12）。

今、この限られた狭い領土に、平和と文化の理想国としてたちあがろうとしているわたくしたちは、もっとも良質優秀な子供だけを少なく生むことを考えるべきで……出来るだけ能率的でなければならない……社会人として生存するに不適當な、悪質劣等な、非能率的な流れを、その水源においてせきとめることからはじめらるべきで……女性のひとりびとりが、その恋愛と結婚において、そういう子孫を残さないことを先ず決意すること……女性の恋愛本能と民族の幸福、利益とは、もともと矛盾するものではないと信じている」（平塚[1949. 4]12）。

敗戦後の悲惨な社会状況を見聞する平塚は、「平和と文化の理想国」建設のために、「良質優秀な子供だけを少なく生む」、劣悪な「子孫を残さない」という優生学的言説を戦前と同様に繰り返す。ただ一点だけ、平塚の独自性が際立つ。言わずもがなであるが、「性と生殖の自己決定」が最優先された点である。「女性が性における女性みずからの地位を自覚すること」「その自覚による自主的な態度と行動」という「重要な根本問題」を除けば、以下の永井見解と、一般読者が意識しないで読めば、その優生学的言説に大差はない。

1-2 永井潜『民族の運命』（1948. 3 村松書店）と「近時公布の二つの重要法律について」（『厚生時報』1949. 1）

（1）永井潜『民族の運命』（1948. 3 村松書店）について

永井は1937年3月に東大を定年退官した後、台北帝国大学に赴任、次いで中国にわたり、北京大学医学院長として中国人医師の養成に携わる。国民優生法が公布された1940年には日本にいなかった。帰国したのは戦後1946年である³⁹。1948年に国民優生法が廃止され、

³⁹帰国後に『民族衛生』13巻-2.3号（1946. 12）、『優生学概論』3版（1947. 4 雄山閣）で断種と断種法実施を主張する著述を刊行。『優生学概論』3版では、初版（1936年）のヒトラー、ナチ礼賛の文章は削除。

代わって優生保護法が成立した。国民優生法制定に直接的な関与ができなかっただけに、優生保護法は大きな関心事でもあった。

戦後もなお、断種法制定への熱い思いを永井が保持していたことは、優生保護法制定の前後に相次いで刊行する二つの著述からも明らかである。『民族の運命』（1948.3 村松書店）と、「近時公布の二つの重要法律について」（『厚生時報』1949.1）である。

最初に書かれた『民族の運命』は、彼の優生思想・優生学の戦前戦後の連続性と、優生保護法に期待する所見を知る格好の手がかりになる。断種法制定を促すことを目的に、書かれているからである。目次からもそれは読み取れる。紹介しよう。

| | | |
|-----------|-------------|--------------------|
| 第一章 民族と数 | 民族とは何ぞ | 増加率の意義 |
| | 民族興亡の跡 | 維持最小値 |
| | 何故の衰亡ぞ | 二児制の危険 |
| | 民族の数を決定する条件 | 純再生産率の意義 |
| | 死亡率とその推移 | 人口年齢構成の意義 |
| 第二章 民族と質 | 質は力なり | 「数」偏重の弊害 |
| | 変化性の法則 | 数と質の調和 |
| | 差別観と平等観 | <u>思想の動きは振子の如し</u> |
| | 差別観の誤謬 | |
| 第三章 民族の衛生 | 民族衛生学の本領 | マルサスの人口論とその動機 |
| | 遺伝か教育か | 新マルサス主義(サンガー主義) |
| | 淘汰と逆淘汰 | 文化民族の享楽主義 |
| | 逆淘汰の実例 | 産児制限と救貧 |
| | 近代戦と逆淘汰 | 人類の絶対競争 |
| | 逆淘汰の危険 | 貧乏の原因 |
| | 逆淘汰の原因 | 産児制限と教養問題 |
| | 結婚率と出生率 | 新マルサス主義の不合理性 |
| | 結婚年齢と平均産児数 | 正しき産児調節 |
| | 晩婚の不利 | <u>民族衛生の二大方策</u> |
| | 知能作業と出生数 | <u>消極的優生学と断種法</u> |
| | 人口構成と出生数 | 消極的優生学 |
| | 都市と田舎の出生率 | 健全なる人生観の確立 |
| | 生むべき願望の衰へ | <u>サンガー主義の危険</u> |
| | 古代民族の産児制限 | |

上記のような目次に即して、優生思想と優生政策の意義を説くのであるが、まず永井は、本書を含める「民族衛生叢書」のその「民族衛生叢書創刊の辞」で、「人文の向上、国家興

隆の方策として、教育、宗教、法律、衛生等、各般の社会的現象も勿論必要であるが、尙一層大切なのは、国民の中に於て素質の劣悪なる者の数を制限するとともに、優秀なる者の数を増加させ「数と質との調和を計り」「国民素質の水準を高めること」が、民族衛生学(優生学)の使命だと高揚した口ぶりで語る。さらに「文化が爛熟すると、烈しい生存競争のための晩婚や、経済的厭迫乃至自己享樂に基づく産児制限や、これら種々なる原因が錯綜して、この大切な数と質との調和が破れ、素質的に劣悪なる者の数が増加し、優秀なる者の数が減少し、所謂『逆淘汰』の現象が起こつて」荒廢を招く。よつて、「広く国民の間に優生思想の普及徹底することが、絶対に必要な条件」だとする主張する。これもまた戦前から一貫した永井の優生学的言説の定番と言える説である。

先に進もう。「文化日本、平和日本の再建に当たつては、或は食糧問題の解決、経済産業の復興等々焦眉の急を要する重要問題が多々あるとともに、文化の根本に培ひ、平和の源泉を湧出する大本の存することを忘れてはならない」として、政治家と「学者経世家の当為でなくてはならない」と、相変わらず第一人者を気取っている。

「戦争と言ふ最も露骨な逆淘汰によつて、今次我邦が蒙つた劇甚なる痛手を癒し**平和と文化に輝く国家再建**の長計を樹立するためには」「民族衛生がその根基と」なり、「學術奉仕の一端として、この書を刊行した」(永井[1948.3]2-6)と、自らを慰撫しつつ、使命感を記す。

本論の「思想の動きは振り子の如し」という項目では、次のような論が展開される。

「敗戦日本が、懊悩のドン底にあつて、仰ぎ得る唯一の希望の光明、悲痛の極みにあつて、持ち得る唯一の歓喜は、この契機を逸しては、到底できないであらうところの庶政一新を断行し、旧弊一掃が実現」できることだとする永井は、敗戦を優生社会実現を目指す絶好の機会だと捕らえたのである。

「思想の振子が、極端なる統制から、極端なる解放に飛躍し、放埒と自由とを混同し」権利には責任が伴うとし、「『質』の、如何に尊ぶべきものであるかを、無視することのないうやうにすること」(永井[1948.3]40)だと警告も発している。

さらに断種法制定の必要性が説かれる。

「民族の花園から、雑草の繁茂を芟除するのが消極的優生学の任務であり、その方策として、国家は断種法を制定して、法の力によつて、著々大規模にこれを実行して、人口の調節を計らなければならない」(永井[1948.3]90-91)「今や敗戦日本に於ては、食糧難、経済難が日一日と民生を圧迫し、人口の調制は、焦眉の急を告ぐるの秋に当つて、正しき優生法案の強化実施は、寸時も弛せにすべからざるもの」(永井[1948.3]92-93)と、1948年秋を脳裏に置き、優生法案の強化実施を緊急課題と示唆する永井。厚生省の弟子・知己の動きは、随時、中国から帰国した永井の耳に入っていたようだ。

最後に「サンガー主義を基調とせる法案が、某々代議士の手によつて、近く議会に提出されようとしているのが真実なら、「日本百年の前途に暗澹たる永遠の闇あるのみ」とし、「これに関わつた議員諸公は勿論、甘んじてこれを容認し、これを実行し、滔々相率ゐて民族破滅の途に走らんとする我等現代日本人は」その「罪を世界に負い」「国体を傷けたる我等現代日本人は、何の面目あつて地下に祖先の霊に見えんとするか。百年、千年の後、達識なる我等の子孫は、我等の墓に向かつて怨恨し、嘲罵し、慟哭する日のあることを、今から覚悟しなくてはならない」(永井[1948.3]100-101)と批判し、「永遠に日本を愛し、日本民族を愛し、心から新日本の再建を希求する同胞諸君に」(永井[1948.3]101)奮起して頂きたいと結んでいる。

永井の優生思想とそれに基づく内務省への提言、断種法制定を求める要望は、戦前のそれと何ら変化はない。あるのはただ、ヒトラーやナチ礼賛の箇所削除のみ、である。優生思想そのものは、終始一貫して揺るぎのないものとしてあつた。

優生思想の最終目的として掲げられるのは、「平和と文化に輝く国家再建」であるが、それは、平塚の「平和と文化の理想国としてたちあがろう」という言説と、符合する。まるで先の平塚の語用法と事前に打ち合わせをしているかの如き優生学的言説と平和・文化の言葉の連結ぶり。これは敗戦直後の産児制限運動でも多用された合言葉でもあつた。

(2)「近時公布の二つの重要法律について」(『厚生時報』1949.1)について

二つ目の「近時公布の二つの重要法律について」に入ろう。

ここでは、「ここにいう二つの重要法律とは、優生保護法(昭和二十三年七月十三日法律第百五十六号)と、性病予防法(昭和二十三年七月十五日法律第百六十七号)とを指す」とし、優生保護法に関して次のようにまとめている。

「国民優生法」では「遺伝性悪質者の増加を防圧すると共に、健全優秀なる素質ある者の増加を図り「国民素質の向上」を「目的とする旨が相当ハッキリと強調されて」いたが、優生保護法では「不良な子孫の出生を防止するとともに、母性の生命健康を保護することを目的とすると述べられてある。即ち旧法では、民族永遠の政策という点に重きを置いているのに新法では、その点を遠慮して、人権(特に婦権)尊重の気分を先に立てて、母性の生命健康の保護を云爲し、時勢に追随せんとしたと見のは僻目か若しさうでありとすれば、これはいらざる遠慮」であると批判している。

また、優生保護法で優生手術の対象になっている癩疾患に関し「結核と同様に、特殊の病原菌による慢性伝染病たることは、天下周知の事実である」のに「精神病や畸形等々の各種の遺伝疾患と同列に、優生保護法の対象とすることには、大いに議論の余地がある」と苦言を呈した。だが、優生手術の実施に強制力が強まったことには賛意を表明し、「敗戦日本の再建に当つて『数』と『質』との正しき調節を、民族の上に施すこと……広く一般民衆に、この思想の普及浸透せんこと……新法律が……思ひ切つてその威力を発揮せんこ

とを祈願して止まない」とし、「優生結婚相談所設置」が制定されたことに喜びの意を表している。

新たに制定された性病予防法に関しては、「結婚当事者間」の「健康証明書」の交換の法制を見られたのは限りない喜びだとし、「この二大重要法律の出現を契機として、優生学と共に、性教育の普及徹底絶叫せんとするものである」と記している。

そして結びでは、「本年7月、新たに日本性教育協会を設立し、この方面に向かつて」「微力を致さんと期している次第」（永井[1949.1]24-25）だと決意の程を述べる。

戦後、永井は日本性学会、日本性教育協会を自ら設立、性教育問題に力を注ぐ。優生思想に基づく「より良き社会」の実現を目ざしたのである。が、それに先立って、すでに1920年『青年男女と性的生活』、1921年『性の問題』、1922年『国家と生殖』と、性に関する著作を相次いで刊行している。第一次大戦直後のこの拙速な刊行の仕方から見て、自分がこの分野の第一人者になろうと思っていたのではなかろうか。そうした矢先に、1924年4月から『生理学研究』⁴⁰で、山本宣治による「若い男の性生活」の連載が始まる。話し上手で、若者や大衆に圧倒的な人気があり、山宣の愛称を持つ彼の性教育分野への登壇は、永井だけでなく、おそらく大澤にも好敵手と映ったことだろう。事実、読者の評判はよかった。

早速、永井は策をめぐらす。国民生理学研究機関誌『生理学研究』主幹であった京都帝国大学医学部教授石川日出鶴丸に、直に掲載中止を依頼したのである。1925年2月、好評を博していた連載は8回目で打切られる⁴¹。この間の経緯は、永井から「論文掲載中止の要

⁴⁰ 『生理学研究』は、京都大学医学部教授石川日出鶴丸主幹の国民生理学研究会の機関雑誌で、1924年2月創刊。山宣は、創刊号と2号に「性学の使命とその目的」と題して、Iwan Bioch (1914): Aufgaben und Ziele der Sexualwissenschaft. "Zeitschrift für Sexualwissenschaft." Bd. I. を翻訳掲載。

⁴¹ 「若い男の性生活」は、山本が性教育の講演会や講座の終了後に、「人生生物学研究資料」と題したアンケートを同志社、東大、早稲田等の大学生に配布して得た回答と、有識者に郵送して得た回答も含め、約1200名のアンケート集計を分析し、まとめたもの。第一段階として、学生回答を「日本人男学生ノ性生活ノ統計的調査（第1報）」として、1923年の京都医師会10月例会で発表。これを高く評価した石川が、自らが主幹である機関誌『生理学研究』に連載を薦め、有識者回答も含めたまとめを「若い男の性生活」と題して連載。『生理学研究』3号(1924.4)から翌年2月まで8回続く。これは1948年に発表されたキンゼイ報告より、24年も早い。なお『山本宣治全集』の編集者である小田切も指摘するように、当時の山宣は社会主義者らとの交流も頻繁となり、産児制限運動などで労働者教育に力を注いでいたことも掲載中止に繋がっていく。が、それだけが理由の全てではなかろう。性教育・性問題に関して優生学的見地からそれを捉える永井と、人間としての自覚と性の尊厳を主張の中心に置く山宣とでは、決定的な違いがあったといえる。永井にとって山宣の著述は看過、容認できないものであったことも打切らせた理由であろう。山宣は「若い男の性生活」最後の掲載文に、「今日の若い男の性生活に於て試み又之を発表しやうとした著者の企てが、一部の学者及び官憲により或は阻止されやうし或は現に妨害されたのは、……著者の解釈によれば、之等は根本に於て彼此階級意識の相違より来り、此研究の発表が各々属する又属すべき階級のそれぞれに対して与へんとする利害が全く反対なるが故である」と記し、「著者一個人が既に今日まで其研究の発表に際し頻々と物議を醸した事実を徴しても、今後の発表が無難に迎へられるやうとは期待して居らぬ。たゞ無用の誤解と論争を避けたい為に、研究発表の中断を見ても斯く永々と釈明を試みるに至つたのは、著者の本望よりも寧ろ環境の強制と云はねばならぬ。……種々激励を与へられた諸君に対し、著者は万難を排しても研究発表の続行を誓ひたい」と結んでいる。その後、「若い男の性生活」で十分に論じられなかったものを補足し、書き換えて、『アルス文化講座』に「現代の両性問題」（1927.2）を執筆。その中で、『種族保存の目的意識』をブル教授に吹込んで貰わず共、我等人類社会はこゝに迄発展し来つたのだ。不健全な自分とその周囲にクヨクヨせず大衆の歪められてない感情と健全な本能を信じて安心したがよ

求が主幹の石川教授に出されたので、石川は山本に筆を置く前に研究発表の必要性を論ずる主張を展開する余地を与えて、八回目で終わらせた」(佐々木[1998]101)と、記録されている。

打ち切りの表向きの理由は、1924年4月、鳥取水脈社主催で産児制限講演会が開かれ、山宣が「生物学上より見たる性教育と産児制限」と題して講演中、数回警官から注意を受け、会場が騒然となり、警官に壇上から引き摺り下ろされる事件になり、これが原因で1924年5月末に京大を辞めさせられたことが、挙げられている。同年10月、京大社研の資金作りのために開かれた性学講演会で、山宣は性学研究の階級性を論じる。ここでは「東大永井潜氏に答ふ」という形がとられ(佐々木[1998]45)、石川による打ち切り確定の布石となる。だが、それとは別の足引きがあったかもしれない。1926年3月に同志社大学講師を辞めさせられる直前に、京大関係者から山宣が推薦を受けるロックフェラー研究所への招聘話があったのだが、それも立ち消えになるからだ(佐々木[1998]114-115)。理由は不明とされる。が、山宣を危険人物と大学内外で煽る一群は、論文掲載中止だけでは満足しなかったのかもしれない。

ちなみに永井の師である大澤謙二は、研究者としては永井よりも正直であったようだ。1909年10月から40日間にわたり、花柳病講習会の講習生に「性学に関する統計」を得るための調査を行い、その研究報告を第4回花柳病講習会で発表し、「性学に関する統計」と題して後に『生理学研究』1巻8号(1924.9)に掲載するのだが、その中で大澤は、山宣の「若い男の性生活」を「山本宣治氏が『生理学研究』誌上述べられたる表は極めて有益なる」ものと評価している。

大澤の「性に関する統計」は、山宣よりもずっと早い時期に行われているが、後に出てくる山宣論文を率直に大澤個人は優れていると述べる。ならば、「誰が、何のために」好評を博する山宣論文の掲載中止を求めたのかが、問われるべきだろう。

なお戦後になって、山形県衛生研究所所長の浦本政三郎が、「座談会 永井 潜先生を偲ぶ」(『日本医事新報』1792(1958.8)26)で、大澤が第3回生理学会で「広汎な性の統計をお話になった」ことがあり、キンゼイ報告より早くなされた「日本のキンゼイ報告」と位置づけて、それを回顧している。師の功績がキンゼイを凌ぐと予見していたから、大澤のために山宣論文の掲載中止をしたのか。それとも、自らが性教育の第一人者の地位をほしがったのか。答えはまだ出ない。

が、死の間際に、大澤が発した次の言葉の意味は、掲載中止が誰の思惑で起こり、どういう利益が意図されていたのかを、考えさせる素材にはなろう。永井の柔和な外見にはそぐわない内面を知る重要な手がかりにもなる。

い」と記し、『生物・人類』(1927.7)の第一章では、石川千代松の自然淘汰至上主義、丘浅次郎の科学的定命論を「注意警戒が必要」だと促し、「殊に無産者に対して科学の名を濫用して有産者的世界観を押し売す輩、例へば医博永井潜の如きは絶対にボイコットする必要がある」と永井批判を、明確に打ち出すようになる。

それは東大生理学教室の後継者問題である。大澤が死の間際に、わざわざ親友で、東大医学部教授である小金井良精に託さざるを得なかった遺言の内容である。「自分の後継者として橋田(邦彦)を望む、よろしく援助をたのむ」(星[1974]228)と、語る大澤。弟子の橋田邦彦の生理学研究者としての能力・指導力は、誰が見ても際立っていた。国際的にもその名は知られている。永井の唯一の医学書といえるのは、生命論・科学哲学分野であるのだが、橋田はその分野にも長けていた。紛れもなく、生理学教室の看板を背負って恥じない業績を持っていた。それ程の優秀な弟子を残し、しかも大澤自身が橋田を教授ポストにすでに就かせていたにもかかわらず、涙ながらに小金井に橋田への支援を依頼する。一体、何を大澤は危惧したのか。

権力の座に居続ける才覚に富む永井の活動は、戦後も著作を見る限りは目覚しい。

1947年『結婚読本 性生活の経典』、1949年『新結婚読本』、1950年『第二結婚読本 独身者のために』、1951年『性教育講和』の上下、さらに1956年『性教育』と、たて続けに性教育・性問題に関する著作を刊行する。さらに、その間の1950年には、A.C.キンゼイのレポート『人間に於ける男性の性行為』の上下二冊の分厚い本を、慶応大学教授医学博士安藤畫一と共訳で出版している。キンゼイ報告と呼ばれ、話題になるのだが、それよりも24年も早く、性の統計を発表していたのが山本宣治である。絶大なる人気があった彼の講演・著述活動に対して、京大医学部に圧力をかけて、まず性教育論文の掲載中止に追い込むのが、永井その人であった。それなのに、否、それだからこそか。戦後日本で似た内容の翻訳書の監訳をする。

1-3 平塚らいてうと永井潜・永井門下生の戦後優生思想

永井や平塚が発した1940年代末の内容は戦前と変わらない。ナチ断種法が批判に曝される年月ではまだなく、この時点では彼らは無頓着であった。

たしかに永井も平塚も、敗戦直後に国体関連発言は封印をする。が、1948年に永井は『民族の運命』の表題の本で「平和と文化に輝く国家再建の長計を樹立するためには」「民族衛生がその根基」と述べ、翌1949年に平塚もまた『女性改造』誌で「民族の未来のために」を公表。両者はほぼ同じ言葉づかいで「優生の言語」と「平和」「文化」とを繋げて、それを堂々と披露する。

書きかえ・読みかえは書き手がまずこっそりで行うから、余り目立たない。意図的であり、組織的でもある隠蔽が始まるのは、1960年代になってからである。ドイツもこの点では同様である。「私は断種法の効果に疑問であった」式の弁明、いわゆるナチ断種法批判言説の典型的な例は、高度経済成長期に登場する。

平塚の場合は新婦人協会の自己評価の変化に、それが見て取れる。これは隠蔽とまでは

いかない修正・加筆であるが、文脈によって入れ替える点で、書きかえ・読みかえの亜種といえる(岡田[2005a]96-97)。

永井の場合は門下生が画策をする。橋田とは対照的に、その「非政治性」の故に公職追放にもならない位置に、日本優生学研究の嫡子たる永井潜・永井門下生はいた。その人脈は厚生事業期に厚生省衛生行政に影響力を行使し、戦後もなお旧帝国大学医学部・系列大学にポストを持つ永井門下生によって、「人格者」永井像は守られる。かつて留学したドイツ・ゲッチンゲン市から顕彰も受ける。恩義を受けたであろう弟子が尽力して、顕彰の条件になる歳月をさば読みするような形で、である。

永井を称えることで、何かを得ようとしていたのだろうか。むろんエリート意識が特化しやすい医学部で生き残るために、彼らは戦後ドイツと同様に、ナチ断種法を想起させる否定的(消極的)優生学を自主的に封印をする。が、その一方で、永井を筆頭に肯定的(積極的)優生学の方は、性科学・性教育や家族計画として言葉を読みかえていく。ナチ断種法とは意識的に差異化させてである。著作類の書きかえも、戦後の言語体系の変動に敏感にならざるをえない、これら戦前優生学研究の権威によって、密やかに、日立たない程度に行われていく。

やがて彼らが現役を退き、高度経済成長期に入る頃には、悲観的な遺伝性の強調と粗野な優生学は、教科書・論文類からはほぼ一掃されていて、洗練された「優生の言語」のみが、つまり予防のために、「科学」を枕詞にする言説が、公用語的な位置を占拠するようになる。加えて都市人口の急増とテレビという新メディアの普及によって、旧来の言語体系が急激に解体されていくことも、読みかえと書きかえの行為の二重の意味を持つ「犯罪性」を曖昧にし、結果的に粗野な「優生の言語」だけを封印さえすればいいのだろうとするいかげんさに対する違和感を感じさせなかった。

1970年代半ばからの日本社会には、これが該当する。そしてここで大いに効果を発揮していくのが、ナチ断種法批判言説であったことは言うまでもない。これは戦後東西ドイツの双方で形成されるナチ断種法批判に関する言説空間と似ている。むろん日本とドイツでは高度経済成長にタイムラグがあるが、順調な経済復興と大学機構再建の過程で、優生思想の書きかえ・読みかえが始まり、高度経済成長期に隠蔽へと比重が移行し、やがて忘却の彼方に押しやられる経緯は、酷似する。読みかえが敗戦直後に始まらない点も似ている。

さて、戦後の平塚原稿にも相変わらず加筆や修正癖は出てくる。執筆動機も戦前の救護法・母子保護法へのコメントの類と同様であり、日本国憲法・児童福祉法制定前後にメディアの求めに応じた回答ないしは座談会発言の原稿の域を出ていない。過去の名声はあっても、晩年の平塚は健康にも執筆環境にもさほど恵まれず、教師格やブレインも見当たらない。1970年代末/1980年代初頭の平塚らいてう著作集刊行の準備期になっても、「避妊の可否を論ず」最終稿が旧態依然とした断種法という言葉づかいのままで残されてしまう理由は、おそらくここにあると推察される。

平塚はたしかに「性と生殖の国家管理」断種法要求には、加筆行為の時間のとり方から見ても相当に慎重であり続けた。しかし、「善種学」としての肯定的(積極的)優生学に対しては、敗戦後の優生保護法下で、何のためらいもなく語り続ける。

1945 年後半から少しずつ戦後の民主化運動の政治性が平塚に向けていく賛美が、自己像と折り重なっていくのか。平塚の脳裏で、民主化運動と新婦人協会の輝かしい記憶とが、一枚岩的に蘇っていったのか。1950 年代半ばには早くも各人が共有する戦後言説「中絶の大衆化」と、平和と母性を連結する母親運動(1955 年第 1 回日本母親大会開催)とは、いつの間にか違和感なく平塚の中に同居していく。

かくして平塚は、母親運動のスローガン「生命を生み出す母親は、生命を育て、生命を守る権利をもっています」の象徴とされ、神格化された平塚像は一人歩きしていく⁴²。

一抹の「不安」を抱きながらも⁴³、「性と生殖の自己決定」と「個人本位の優生学」のジレンマも、否定的(消極的)優生学と肯定的(積極的)優生学との溝も、平塚には見えてこない。その深淵を彼女は見ようとはしなかったのかもしれない。

小活 「反」フェミニズムへの静かなる抗議の結末

平塚と永井の比較から、「優生思想の持ち主」の査定を簡単にまとめておこう。

断種法制定要望が、それも強制断種を望む例が、「優生思想の持ち主」査定に際しての重要な尺度になろう。そこから見れば、平塚はもとより、あの永井でさえも、断種を求める否定的(消極的)優生学よりも、いわゆる肯定的(積極的)優生学とされる優生結婚・優生教育への発言回数の方がはるかに多い。ただし、両者の関連著作を分析するならば、永井はエリート志向の他者排除が目立つが、平塚には排他性は少ない。弱い他者に想いをはせる思考回路は生き方から見る限り、平塚は存分に持つ。方や、東大医学部で権力のトップにたつ永井は、著述に散見される生命礼賛とは別に、自己保身と権力欲が先立つ。少なくとも今までの永井著作分析では、そういう査定になる。

にもかかわらず、『婦人公論』誌上の著述に代表されるように、両名が紹介・記述する優生結婚・結婚制限関連情報が、第一波フェミニズムと医学教育界に及ぼす波及効果はやはり際立つ。大正中期から占領期までの産児制限運動や性科学・性教育分野で、両名は紛れもなくスターであり続けた。特に永井は戦後になっても、性科学・性教育の欧米最新情報の紹介には熱心であり、分厚いキンゼイ報告の監訳者になる。

これは I 部論文の主題でもあったのだが、永井と平塚の優生学的言説との大きな違いは、

⁴²母親運動はやがて環境保護や消費者グループの「いのちと暮らしを守る」運動とも繋がる。「生命を生み出す」のスローガンは、母体管理を女性の自己責任に集中させる戦後日本の文化風土とマッチした。ここより、一方では公害反対運動で先天性異常や奇形への過剰反応が生じ(小畑[2007]53-54, 57-58)、他方では障害当事者団体による「母よ！殺すな」のフェミニズム運動への抗議が登場した。共に意図せざる結果として、母性礼賛と女性の自己責任論をかきたてた。

⁴³平塚の優生思想が、それ以上語ることへの「不安」に満ちたものであった点は注目してよからう。「不安」からのある種の思考停止・沈黙に至る経緯は、岡田論文参照のこと(岡田[2005a]39-41)。

フェミニズムに関する箇所だ。前述しているが、「近時公布の二つの重要法律について」(『厚生時報』1949.1)で、「人権(特に婦権)尊重の気分を先に立てて」、「母性の生命健康の保護」を最重要視しないのは、「いらざる遠慮」だと決め付け、「時勢に追随せんとした」と人権(特に婦権)尊重派を揶揄する永井がいる。

ここにこそ彼の優生学研究の本質が、優生運動の啓蒙の到達目標が、如実に示されている。女性に理解ある素振りを見せつつ、しかし女性の人権を無用と見る永井。「反」フェミニズムの真骨頂ともいえる永井に対して、若き日から戦後に至るまで、始終、同じ雑誌や同じ時期に似たテーマを発表しながらも、生涯を通して平塚は一度の交流もせず、彼の論稿に反論すらしない。女性の自立・自己決定において警戒すべきタイプとは、誰なのか。彼の柔和な表情と穏やかな口調と、しかしそれだけに論争しても無駄なことを、直観力に優れた平塚は感じ取っていたのかもしれない。

Ⅲ—2

Ⅲ部年表：「戦後優生思想の読みかえと隠蔽・忘却」の軌跡

| 区分 | 期間 | 区分の説明 |
|-----|-----------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第一期 | 1945.8.15 ～1960年代半ば 「第一の戦後」 | 戦前の優生学的言説の連続性と読みかえの始まり ※戦前の優生学教科書・テキスト刊行の続行 優生学批判研究の空白 |
| 第二期 | 1960年代末 ～1980年代末 「第二の戦後」 | 優生学的言説が禁句になっていく時期、いわゆるナチ断種法 批判言説の始まり ※ナチ断種法を素材に優生学批判が1972/73年前後に急に活発となり、 同時に削除や隠蔽が恒常化し、過去の忘却が加速される |
| 第三期 | 1990年頃 ～現在 「第三の戦後」 | ナチ断種法批判言説の定位と新・旧優生学の二項対立図式の 到来 ※優生学の歴史研究の多様化で、優生学研究への関心高まる |

- ◇ 時期ごとで、とりあげる事項が異なるため、年表の横の区分項目が各期で異なる。
- ◇ 第一期では、前述の永井、平塚のような優生保護法制定をめぐる読みかえが活発になる。戦前の優生学関連文献もなお多く出回る。
- ◇ 第二期では、旧来の優生学的言語が残存しているが、優生学批判が研究方法論のベースとなる。ナチ断種法批判言説は、第二期以降、現在まで持続。ドイツを筆頭に他国も同じ傾向。1985年から1987年の岡本著作一部削除が第二期から第三期への移行期のメルクマールといえる。
- ◇ 第三期では、旧来の優生学的言説は公的には消滅。拙速な1996年母体保護法成立がそのメルクマールになる。『民族衛生』誌上でも学会の改称の議論が活発化する。国内外で優生学の歴史研究の著作は増え、しかも科学史・医学史・フェミニズム/女性史・教育史・障害学等の多様なアプローチがみられる。

Ⅲ-2 Ⅲ部年表：「戦後優生思想の読みかえと隠蔽・忘却」の軌跡

優生政策・人口政策において女性が抜擢される機会は、占領期によりやうやく出てくる。むしろ男尊女卑・官僚体質の強固な日本では、「性と生殖の自己決定」の主役たる女性は、政策決定過程では飾り物的なポジションに置かれる。優生保護法が大量中絶を許容し、急速な「二人っ子革命」が進み、女性だけの家政科教育や純潔教育キャンペーンが貼られる。国際的に見てもいまだ先進国の中で、日本は公的領域への女性進出は最下位グループに属す。優生運動においても、人口政策においても政策決定は常に男性主導で進められた。その過去を引きずったままで、今も少子化対策が声高に語られる。

Ⅲ部年表ではその概要が把握できよう。表題の「読みかえ」は、繰り返しておくとして広義には「書きかえ」行為も含むが、年表では明確には分けない。というより、始点は同一人物の行為になりやすいからである。また既述のように時間と能力の不足から、戦後史年表は限定された内容にすぎない。本来のナチ断種法批判言説の日独比較と言う目標には程遠いものである。が、このレベルのものさえない研究状況では、まず掲示することに意義はあろう。限定された年表ではあるが今後の作業課題は次のように整理される。

Ⅲ部年表の作業課題①：「第一の戦後」「第二の戦後」の言語体系の変化に着目

Ⅲ部では当初予定しながら、取り組めなかった課題の一つがナチ断種法批判の言説分析の事例提示である。すでに「優生の言語」と「権利の言語」とを対にして、平塚の著作分析・資料解題を行ってはいるが、戦後民主化の過程での日独のナチ断種法批判の言説分析では、「優生の言語」と「権利の言語」が組み合わせられる時期・背景に着目し、特に意図的に封印されたり、培養される過程で交叉する両言語の関係性が重視されねばならない。しかし、まず史実が明らかにされる必要があり、とりあえずⅢ部では戦後優生思想の書きかえや読みかえを、主に年表から見ていく。断種法制定に権力介入できた主流の系譜が、戦後に発するナチ断種法批判の言説も幾つか例を挙げている⁴⁴。

日本フェミニズムの旗手として、「性と生殖の自己決定」の代表格として、海外でも高い評価を受けていた平塚が、いつ、どのようにして、「性と生殖の国家管理」断種法要求へと暴走していくのか。それは岡田([2005a])で分析済みである。その際の言説分析の時期区分は、小熊による「第一の戦後」の言語体系と、「第二の戦後」の言語体系の識別に従ったが(小熊[2002]11-13)、本稿Ⅲ部年表でも小熊見解に依拠して時期区分を試みた。

小熊が指摘するように、言説が歴史的社会的に構築され、「同じ言葉でも、その響きが異なってい」て、「そうした問題に無自覚であれば、同じ文章を読んでも、当時の『響き』とはまったく異なる解釈を下してしまう危険性がある」(小熊[2002]16)点については、自覚的でありたいと考える。同時に「第三の戦後」への移行期である1990年代から(小熊[2002]

⁴⁴ナチ断種法批判言説の分析は、本家になる戦後西ドイツとの時系列的な比較年表がないと意味はない。ドイツの敗戦直後の史資料の不足、収集条件の不備と、筆者の能力・時間の関係で、Ⅲ部年表は国際比較まではできなかった。

825)、すなわち粗野な「優生の言語」が禁句になっていく「第二の戦後」の終盤から 1990 年頃に始まる「第三の戦後」の時期に、ようやく日本でも優生学の歴史研究が継続的に刊行される点と、それが平塚批判にも少なからぬ影響を及ぼす点にも、今回もまた留意していきたい。というのは、これは「誰が優生思想の持ち主か」解釈の恣意性に深く関わるからである。賞味期限の切れた言葉づかいを、現下の言語体系の高見から批判する行為はいつも容易いが、その行為自体が歴史研究方法論としては負の成果でしかない。

言語体系・言葉づかいの概念も、原則として小熊に依拠し(小熊[2002])、小熊のいう「政治や経済の状況が変動しても、それが社会構成員の生活状況を変え、やがてその言葉づかいが変動してゆくのは、やや遅れる……人びとは、社会や経済の状況が変動しても、過去の社会を支配していた言語体系から容易には脱出できない……多くの戦後思想は戦中思想の言語体系をひきずりながら形成されていた」との視点から(小熊[2002]19)、「優生の言語」が増殖していく経緯を追う。

つまり「状況依存的かつ政治的な概念」を、「その都度この言葉が使われる文脈を吟味する」言説分析の手法を駆使して、日本フェミニズムの旗手と自他共に認める平塚が、何をもって「優生思想の持ち主」と見なされ、戦後もそれがなお継承されていく経緯と内実が、言説分析の歴史研究の成果と照らし合わせることで確認されるであろう。

Ⅲ部年表の作業課題②：戦後優生学的言説と障害差別との関係

Ⅲ部年表では、障害の歴史に関わる法律・制度記載は最低限とどめた。その理由は、Ⅲ部年表がナチ断種法批判言説の概観用に作成されているからである⁴⁵。

ナチ断種法批判言説が登場する数ヶ年前の「優生の言語」をここで、紹介しておこう。「第二の戦後」の言語体系への移行期にあつて、障害差別の中でも底辺に置かれる重度知的障害をどう見ていたのかの、生々しい記録がある。1960 年精神薄弱福祉法制定のための審議過程での発言である。それも女性議員が率先して、である。Ⅲ部年表に一部を記したが、第 34 回国会衆議院社会労働委員会での中山マサや山下春江の「精神薄弱」者への過剰な同情と嫌悪の入り混じった発言は、今なら進退伺いを出さねばならない内容である(桑原他[2005])。それが施設関係者や親の会の要望を錦の御旗にして看過され、あまつさえ同じ年に中山は女性初の大臣として、厚生大臣に就任する所に、障害差別の問題の根の深さがある。他の障害関連法の陳情・審議過程でも似た言説は、1950 年代から 60 年代にかけて、繰り返し登場する。

日本ではこれが「第二の戦後」の言語体系になつてもいわゆる社会的弱者に対しては持

⁴⁵福祉国家成熟期の優生政策の捉えにくさも、記載項目を限定した理由である。高度経済成長期の戦後史叙述で難しい事項は二つある。一つは施設側から提起されたコロニー構想である。60 年代後半からの厚生省施設整備計画で歪められ、全く異なるものになるからだ。また心身障害対策基本法に基づき、70 年代初頭の厚生省心身障害研究事業が障害の発生予防と早期発見・早期治療の研究調査に入る点も評価は分かれる。これは、「どこまでが予防であり、どこからが隔離政策や優生思想なのか」の線引きの難しさを物語る。

続し、「第三の戦後」に移行する時期に、急に上からの官僚主導で公的文書から一掃されていく点に、最大の特徴がある。議論を尽くさずに、時流に乗る形で書きかえ・読みかえが進行していく⁴⁶。

再度、繰り返しておこう。優生学的言説ないしは「優生の言語」に敏感でありたい反面、こうした言語体系のタイムラグと、にもかかわらずには筆者が山下・中山発言を全面的に批判できないのは、一つは筆者が小熊のいう「第二の戦後」に、つまり1955年以降に出現し、1970年代初頭に完成する言語体系の影響を受けて(小熊[2002]18)、知的障害の歴史を学びはじめ、「権利の言語」を駆使して黄金期を築く特殊教育制度の拡充と、入所施設緊急整備計画が突貫工事で始まる時期とを、共に歴史的必然性と当初は思い込んでいた世代に属するからである。福祉国家拡充期の時代を享受・通過してきた障害の歴史研究者の限界は、この辺りにあるのかもしれない。

Ⅲ 部年表の作業課題③：戦後ナチ断種法批判言説の日独の類似性

ナチ断種法批判言説の政治性を見ることを主目的に年表は作成されている。軸は左端の項目で、① 第二期は内村祐之と岡本春一著作が、② 第三期は民族衛生学会(協会)の終わらない戦後が、メルクマールになる。ナチ断種法批判をすることの効果を見越しての発言の初期の例になるのが、1960年代の東大医学部の内村ではなかろうか。批判の立場を標榜し自己正当化を図る典型的なエリートの生き方がそこに見られる。次いで1980年代には岡本著作一部削除が、さらに近年では民族衛生学会(協会)の改称の議論が、各期の言語体系の変化に対応する趨勢として、注目されよう。

なお戦後西ドイツ社会でも、同一人物・組織が画策する隠蔽は、エレガントで、巧妙であった。保健医療・障害児教育・社会事業分野で、ナチ断種法施行に関与しなかった組織はないに等しかったから、医学・司法関係者はもとより、専門分野が生物学や人類遺伝学である研究者は、積極的に優生思想を読みかえていく。と同時に、必要な場合はナチ断種法批判を声高に言って見せ、そうでない場合は沈黙する。この二枚舌的な処世術は、東ドイツでもあったとされるが、ここでの読みかえはソビエト系譜の進化論解釈に倣うものであった。変化の兆しは、ドイツでも日本と同じ時期で1960年代になってからだ。68年世代が医学の犯罪に気づく。だが、それがメディアに受け止められるのは、ハリウッド製作の映画「ホロコースト」放映後の反響の大きさからである。歴史研究の本格的な着手に至っては、それ以降に取り組まれるに過ぎない⁴⁷。

⁴⁶1996年母体保護法制定の迅速さは、それをよく物語る例であろう。「性と生殖の自己決定」に関わる女性にとっての重要事項が、ろくに審議もされないままに、新法に取って代わる。優生保護法は忘却の彼方に放り投げられる。

⁴⁷日本でもマイナーな動きであるが、1960年末～1970年代前半の、朝日ジャーナルのナチ安楽死計画の短報、田中のリヴ宣言(森岡[2001])、青い芝の会の「母よ殺すな」の抗議スタイルが、優生思想とフェミニズムの結託を暴く最初の問題提起になった。筆者自身の課題意識も、この時期に形成されたと思う。さらに1983年『あごら』の斉藤論文([1983])は、いわゆる第2派フェミニズムの高揚期に執筆され、視点の斬

なお優生学の歴史研究の視点の変化も、年表で概観できるようにした。ただし、Ⅲ部年表は註を付けるには至らず、かつ肝心の項目選択基準で、「何が優生学か」の曖昧さが大きな問題として立ち塞がっていて、今後も作業継続を余儀なくされる箇所である。

新さは、同時期のドイツ語圏の問題提起と遜色はない水準である。しかし、ナチ断種法への研究関心が日本で定位するのは1990年頃からである。その動向は、岡田論文「優生学と障害の歴史研究の動向—ドイツ・ドイツ語圏と日本との国際比較の視点から」（岡田[2006]）を参照のこと。

「戦後優生思想の読みかえと隠蔽、忘却」の軌跡 【第一期 戦前の優生学的言説の連続性と読みかえの始まり】

| 年 | 優生学関連文献 加筆・修正・隠蔽 | 雑誌『民族衛生』 | 平塚らいてう・小林登美枝による新婦人協会の位置づけ | 議会・国(自治体)の動き | 時代の状況 |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1945 | | | | | 8.15 敗戦による疲弊と混乱の社会へ |
| 1946 | | 1931.3 創刊～1963.12 英文誌名 <i>Race Hygiene</i> 英文学会名 Official Organ of the Japanese Association of Race Hygiene | | 1. 厚生大臣芦田均「新時代の厚生行政」の筆頭に「民族の復興」を掲げ、「文化国家、健康国家」建設のため「国民の優位、民族形質の向上」を期す 1.30 厚生省、人口問題懇談会を開催：継続審議のため(財)人口問題研究会に人口政策委員会設置 5. 古屋芳雄、国立公衆衛生院長となり産児制限推進 7.20 厚生省衛生局長より地方長官宛「国民優生法第十六条に関する件」：優生手術や妊娠中絶の届出書の様式を簡略化 11. 人口政策委員会「新人口政策基本方針に関する建議」提出：出生調節(産児制限)公認。「現行優生政策の任意主義を強制主義に改める等優生政策の強化拡充を行うこと」 | ・GHQの民主化政策の自由と、政府も個人の自由として産児調節を容認→「逆淘汰」もたらず恐れ→優生政策の強化 ・「健全な」若者を戦争で失い、敗戦後特有の「人口貧賤低下問題」→優生政策の強化 ・戦前の厚生省で人口増強政策推進の役人(古屋、館稔、北岡寿逸)が産児制限を推進 |
| 1947 | 4. 永井潜『優生学概論』(1936年版の再版)：初版のヒトラー、ナチ礼賛部分を削除し、「平和日本、文化日本の新建設」を加筆 4. 内村祐之『精神医学者の滴想』(同盟出版社)に、「断種法の過去と将来 国民優生法への期待」 | | (3. 平塚らいてう、疎開先より成城の家にもどる) | 1.15 厚生省人口問題研究所が産児制限の調査実施対象は厚生省・農林省・商工省・運輸省・東京都の役人と東京大学医学部の役人と | 5. 日本国憲法施行 |

| | | | | | |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|
| 1948 | <p>『帝国大学新聞』813(1940.5.27)を「優生法の過去と将来」と題名変更で収載。内容の変更はなしで、「国民優生法」の制定への高い評価と賛意。「序」：本書で「自分の専門に対する或は医学全般に対する、さらにはまた人生に対する自分の立場を、はっきりと示し得たと思ふ」</p> <p>8.館総『日本人口の将来』((財)世界経済調査会)</p> | | | <p>の教授・助教授など医局員</p> <p>4.第2回調査：対象は日本鋼管・富士電機・味の素の従業員5,072人。企業体への調査依頼は会社側でなく、労働総同盟神奈川県連→日本鋼管では会社ぐるみの新生活運動の始中での家族計画運動を始める</p> <p>8.第1回国会に優生保護法社会党提出：目的は母体の生命健康維持、不良な子孫の出生防止、文化国家建設[女性の窮状を救う]</p> <p>→12.審議未了</p> <p>・文部省通達「純潔教育の実施について」：「男女間の正しい道徳秩序をうち立てることが新日本建設の重要な基礎である」</p> <p>12.12 児童福祉法公布(48.1.1一部施行、4.1全面施行)。児童福祉法制定に伴い妊産婦手帳を母子手帳と改称(48.5.1配布) '65 母子健康手帳と改称)</p> | <p>6.馬島備ら日本産児調節連盟結成 加藤シズエ、北岡寿逸の産児制限普及会発足の 12.改正民法公布(家制度の廃止)</p> |
| 1948 | <p>3.永井潜『民族の運命(日本国民に懇ふ)』民族衛生叢書：「平和と文化に輝く国家再建」のため「民族衛生がその根基」に</p> <p>・吉益脩夫：国民優生施策の實質上の中断を遺憾とし断種推進を要望。優生保護法は母性保護の面が優生断種面を覆うとの危惧を表明</p> <p>7,8.谷口弥三郎「優生保護法解説」『日本医師会</p> | <p>10.平塚「わたくしの夢は実現したか」『女性改造』：新婦人協会を「日本における最初の婦選運動」とし、花柳病男子結婚制限にふれず。児童福祉</p> | | <p>6.12 第2回国会に優生保護法超党派提案提出：目的は優生上の見地から不良な子孫の出生防止[医師の立場から手術を合法化](6.28可決成立)</p> | <p>7.永井潜、日本性学会設立、日本性教育協会設立</p> |

| | | | | | |
|-------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------|
| | <p>雑誌』</p> <p>9. 青木延春『応用優生学としての断種』(1941年『優生結婚と優生断種』等の戦前資料を使用)：「優生学的・医学的適応は人類のある限り常に正しい」</p> <p>10. 谷口弥三郎・福田昌子(優生保護法提出議員)『優生保護法解説』</p> | | <p>法にふれ「妊娠の自由の確保と母の生活の保障、これを欠いては女性の全的解放はむずかしく、児童の眞の福祉も望めない」とするが、優生保護法にも性別予防法にもふれず</p> <p>1. 平塚「雷鳥の軸」『婦人民主新聞』：新婦人協会は「治警法第五条改正にまず手をつけ」とし、花柳病男子結婚制限に触れず</p> <p>4. 平塚「民族の未来のために」『女性改造』：「大正八、九年ごろ…優生学立法として、性病者の結婚制限法の制定運動をおこし」とし、「新婦人協会が旧議者に提出した性病者の結婚制限法案は…今こそ制定の必要を認められる」と全12条を掲げている</p> | <p>7.13 優生保護法公布(9.13 施行)</p> <p>7.15 性病予防法公布(9.1 施行)</p> <p>7.15 少年院法公布</p> | <p>秋、ロックスフェラー使節として米国より人口問題調査団が来日し、各地を視察</p> |
| <p>1949</p> | <p>1.10 永井潜「近時公布の二つの重要法律について」『厚生時報』：この二法は優生保護法と性病予防法。国民優生法(旧法)は「民族永遠の政策」に重点、優生保護法(新法)は「人権(特に婦権)尊重」を先に立て「時勢に追随」と非難。新法で優生手術対象に慢性伝染病の「癩病」があることに不満。優生手術実施に「新法では或る程度の強制が加味」と評価。「敗戦日本の再建に当つて『数』と『質』との正しい調節を、民族の上に施すことが、焦眉の急務を解決」する。優生結婚相談所の制定は「非常な喜び」</p> <p>5. 吉益脩夫「優生学から見た優生保護法」『法律のひろば』：「優生学徒として」「優生学的意味の少ない単なる母性保護の法律となりはしなやかと氣遣われる」</p> <p>7. 中原武夫(参議院法制局第一部第一課長)「改正された優生保護法」『法律のひろば』：「別に悪遊びもしないのに生れながらにヨイヨイであつたり、何か問題が起る度にブクブクと泡をふいてぶつ倒れたりする者—(顕著な遺伝性身体疾患)一別にけんかをしたわけでもないのに生れたときから手や足が割れている者—(顕著な遺伝性畸形)一—などは本人の罪でもないのに、一生を苦しみ耐えつづつ過ぎなれば成らないのである。こういう人達がウヨウヨと巷に満つる光景を描いてみるとゾッとす。本人のためにも、社会の</p> | <p>2. 新マルサス主義の国際的権威 W. トムソンが、マッカーサー司令官部経済科学局顧問として来日し、厚生省人口問題研究所の協力で日本各地で新マルサス主義を宣伝。「日本の人口問題解決は妊娠調節以外にはない」と声明し、在日カトリック団体猛烈反対</p> <p>4. 政府はトムソンの提言で人口対策のため人口問題審議会を設置(古屋、美濃口、館ら)：「人口調節に関する建議」を内閣に提出するが、依然として産児制限反対者が多く、この建議は取上げられず、間もなく審議会は解散</p> <p>4. 厚生省で初めて避妊薬を公認し、避妊法としてのコンドーム産産体制始まる→「受胎調節」「計画出産」の公認</p> <p>5. 厚生事務次官・穴山徳夫「妊娠中絶と産児制限」</p> | <p>・届出ある合法中絶件数…246,140件</p> <p>4.26 日本母性保護医協会(以下日母と略す)設立：会長は谷口弥三郎、理事は福田昌子ら、参与は館総務部長(瀨木三雄(厚生省技官)ら。設立趣意書「我が国は敗戦後…出生の合理的制限が国策の中心課題とな」り「人工妊娠中絶の適用範囲が拡大された」 7.1 会報『母性保護医報』発刊</p> <p>5.15~17「人口問題をどうするか本社主催座談会」『毎日新聞』(古屋、田中耕太郎、岡崎文規、加藤シヅエ、北岡寿逸)での</p> <p>5.17 掲載の北岡の発言：「所得税の家族控除、家族手当といったものを産児制限を奨励するという点で今後生まれたものには出さぬといつたような</p> | | |

| | | | | | | | | | | | |
|-------------|---------------------|--------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|--------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1950</p> | <p>永井潜監訳のキンゼイ報告</p> | <p>古屋芳雄、日本民族衛生学会会長就任</p> | <p>『法律のひろば』：優生保護法中の人工妊娠中絶規定は、あくまでも優生学上医学上の厳重な枠があるので、経済的理由だけで中絶できるのは誤解であり、それは墮胎罪により処罰されると警告</p> <p>6. マッカーサー指令部「人口制限問題は占領業務の範囲外であり、産児制限は個人の判断と決定にまつ問題である」と覚書を発表</p> <p>6.24 優生保護法改正：①中絶に「経済的理由」認める②優生結婚相談所設置を目的として受胎調節方法を普及指導を導入</p> <p>6. 国立遺伝学研究所設立（静岡県三島市）</p> <p>12. 厚生省公衆衛生局が『受胎調節便覧』を発行</p> <p>12. 身体障害者福祉法公布（精薄者は除外される）施行：1950.4.1</p> | <p>『法律のひろば』：優生保護法中の人工妊娠中絶規定は、あくまでも優生学上医学上の厳重な枠があるので、経済的理由だけで中絶できるのは誤解であり、それは墮胎罪により処罰されると警告</p> <p>6. マッカーサー指令部「人口制限問題は占領業務の範囲外であり、産児制限は個人の判断と決定にまつ問題である」と覚書を発表</p> <p>6.24 優生保護法改正：①中絶に「経済的理由」認める②優生結婚相談所設置を目的として受胎調節方法を普及指導を導入</p> <p>6. 国立遺伝学研究所設立（静岡県三島市）</p> <p>12. 厚生省公衆衛生局が『受胎調節便覧』を発行</p> <p>12. 身体障害者福祉法公布（精薄者は除外される）施行：1950.4.1</p> | <p>ことにも、又民族の將來のためにも治せるものから治したいのであるが、これが遺伝性のものでないと今の医学では何とも方法がない。そして子供に伝っていくのをハラハラしながらみているならば、こういふ人達には無条件で優生手術も人口妊娠中絶も認めた。而も優生手術だけは国の費用で行つてやることにしたのである」</p> <p>8. 古屋芳雄（国立公衆衛生院長）「優生問題としての人口問題」、館稔「日本人人口の変遷」、瀬木三雄（厚生省公衆保健局統計課・元児童局母子衛生課長）「母の健康から見た産児制限」、近藤宏二「結婚と優生」『婦人の世紀』10号</p> <p>10. 原田隆『新優生法読本』（推古書院）</p> | <p>1950</p> | <p>永井潜監訳のキンゼイ報告</p> | <p>古屋芳雄、日本民族衛生学会会長就任</p> | <p>『法律のひろば』：優生保護法中の人工妊娠中絶規定は、あくまでも優生学上医学上の厳重な枠があるので、経済的理由だけで中絶できるのは誤解であり、それは墮胎罪により処罰されると警告</p> <p>6. マッカーサー指令部「人口制限問題は占領業務の範囲外であり、産児制限は個人の判断と決定にまつ問題である」と覚書を発表</p> <p>6.24 優生保護法改正：①中絶に「経済的理由」認める②優生結婚相談所設置を目的として受胎調節方法を普及指導を導入</p> <p>6. 国立遺伝学研究所設立（静岡県三島市）</p> <p>12. 厚生省公衆衛生局が『受胎調節便覧』を発行</p> <p>12. 身体障害者福祉法公布（精薄者は除外される）施行：1950.4.1</p> | <p>『法律のひろば』：優生保護法中の人工妊娠中絶規定は、あくまでも優生学上医学上の厳重な枠があるので、経済的理由だけで中絶できるのは誤解であり、それは墮胎罪により処罰されると警告</p> <p>6. マッカーサー指令部「人口制限問題は占領業務の範囲外であり、産児制限は個人の判断と決定にまつ問題である」と覚書を発表</p> <p>6.24 優生保護法改正：①中絶に「経済的理由」認める②優生結婚相談所設置を目的として受胎調節方法を普及指導を導入</p> <p>6. 国立遺伝学研究所設立（静岡県三島市）</p> <p>12. 厚生省公衆衛生局が『受胎調節便覧』を発行</p> <p>12. 身体障害者福祉法公布（精薄者は除外される）施行：1950.4.1</p> | <p>ことにも、又民族の將來のためにも治せるものから治したいのであるが、これが遺伝性のものでないと今の医学では何とも方法がない。そして子供に伝っていくのをハラハラしながらみているならば、こういふ人達には無条件で優生手術も人口妊娠中絶も認めた。而も優生手術だけは国の費用で行つてやることにしたのである」</p> <p>8. 森下春一（労働評論編集長）「産児制限と資本攻勢」『法律のひろば』：産児制限論からいくと、家族排除や家族手当は多産奨励なので削除、という資本家側の極論に注意を喚起</p> <p>・女性雑誌は産児制限や家族計画関連の記事を次々掲載→子どもを少なく「つくる」ことが家族幸福のカギ</p> |
| <p>1950</p> | <p>永井潜監訳のキンゼイ報告</p> | <p>古屋芳雄、日本民族衛生学会会長就任</p> | <p>『法律のひろば』：優生保護法中の人工妊娠中絶規定は、あくまでも優生学上医学上の厳重な枠があるので、経済的理由だけで中絶できるのは誤解であり、それは墮胎罪により処罰されると警告</p> <p>6. マッカーサー指令部「人口制限問題は占領業務の範囲外であり、産児制限は個人の判断と決定にまつ問題である」と覚書を発表</p> <p>6.24 優生保護法改正：①中絶に「経済的理由」認める②優生結婚相談所設置を目的として受胎調節方法を普及指導を導入</p> <p>6. 国立遺伝学研究所設立（静岡県三島市）</p> <p>12. 厚生省公衆衛生局が『受胎調節便覧』を発行</p> <p>12. 身体障害者福祉法公布（精薄者は除外される）施行：1950.4.1</p> | <p>『法律のひろば』：優生保護法中の人工妊娠中絶規定は、あくまでも優生学上医学上の厳重な枠があるので、経済的理由だけで中絶できるのは誤解であり、それは墮胎罪により処罰されると警告</p> <p>6. マッカーサー指令部「人口制限問題は占領業務の範囲外であり、産児制限は個人の判断と決定にまつ問題である」と覚書を発表</p> <p>6.24 優生保護法改正：①中絶に「経済的理由」認める②優生結婚相談所設置を目的として受胎調節方法を普及指導を導入</p> <p>6. 国立遺伝学研究所設立（静岡県三島市）</p> <p>12. 厚生省公衆衛生局が『受胎調節便覧』を発行</p> <p>12. 身体障害者福祉法公布（精薄者は除外される）施行：1950.4.1</p> | <p>1950</p> | <p>永井潜監訳のキンゼイ報告</p> | <p>古屋芳雄、日本民族衛生学会会長就任</p> | <p>『法律のひろば』：優生保護法中の人工妊娠中絶規定は、あくまでも優生学上医学上の厳重な枠があるので、経済的理由だけで中絶できるのは誤解であり、それは墮胎罪により処罰されると警告</p> <p>6. マッカーサー指令部「人口制限問題は占領業務の範囲外であり、産児制限は個人の判断と決定にまつ問題である」と覚書を発表</p> <p>6.24 優生保護法改正：①中絶に「経済的理由」認める②優生結婚相談所設置を目的として受胎調節方法を普及指導を導入</p> <p>6. 国立遺伝学研究所設立（静岡県三島市）</p> <p>12. 厚生省公衆衛生局が『受胎調節便覧』を発行</p> <p>12. 身体障害者福祉法公布（精薄者は除外される）施行：1950.4.1</p> | <p>『法律のひろば』：優生保護法中の人工妊娠中絶規定は、あくまでも優生学上医学上の厳重な枠があるので、経済的理由だけで中絶できるのは誤解であり、それは墮胎罪により処罰されると警告</p> <p>6. マッカーサー指令部「人口制限問題は占領業務の範囲外であり、産児制限は個人の判断と決定にまつ問題である」と覚書を発表</p> <p>6.24 優生保護法改正：①中絶に「経済的理由」認める②優生結婚相談所設置を目的として受胎調節方法を普及指導を導入</p> <p>6. 国立遺伝学研究所設立（静岡県三島市）</p> <p>12. 厚生省公衆衛生局が『受胎調節便覧』を発行</p> <p>12. 身体障害者福祉法公布（精薄者は除外される）施行：1950.4.1</p> | <p>ことにも、又民族の將來のためにも治せるものから治したいのであるが、これが遺伝性のものでないと今の医学では何とも方法がない。そして子供に伝っていくのをハラハラしながらみているならば、こういふ人達には無条件で優生手術も人口妊娠中絶も認めた。而も優生手術だけは国の費用で行つてやることにしたのである」</p> <p>8. 森下春一（労働評論編集長）「産児制限と資本攻勢」『法律のひろば』：産児制限論からいくと、家族排除や家族手当は多産奨励なので削除、という資本家側の極論に注意を喚起</p> <p>・女性雑誌は産児制限や家族計画関連の記事を次々掲載→子どもを少なく「つくる」ことが家族幸福のカギ</p> | |

| | | | | |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1951 | | | 8. 人口問題研究会編『日本人人口白書』刊行：国民経済が発展向上するための産児制限 | 9. サンフランシスコ講和条約締結 |
| 1952 | 9. 谷口弥三郎『優生保護法詳解』：「先天性遺伝者の子孫の出生を防止」が、人口の急速な増加を防ぐ上からも、「民族の逆淘汰を防止」の点からも必要。「国民素質の優劣化と母性健康の保持」強調 | | 5. 優生保護法改正：① 中絶の審査制度廃止→医師の判断と本人と配偶者の同意で実施→中絶、避妊手術自由化 ② 「配偶者が精神病若しくは精神薄弱を有」する者が不妊手術対象に ⇒合法妊娠中絶と避妊の推奨が国策となる | 4. サンフランシスコ講和条約発効→占領軍総司令部GHQ廃止 ・国際産児調節連盟が国際家族計画連盟へ名称変更(初代会長：M.ワガ) 6. 日本人口衛生協会設立(発起人代表：古屋、賛助者：永井潜、谷口弥三郎、賀川豊彦ら)設立記念シンポジウム：厚生省公衆衛生局長山口正義によるWHO報告、ロックフェラー財団マツコイ博士による欧米の受胎調節運動など 8. 1日母、社団法人認可で定款を定める。会の目的「本会は民族の優生化を促進するとともに母子の生命健康を保護増進し、もつて国民の繁栄を図ること」としている 10. マーガレット・サンガー、戦後第1回の来日 |
| 1953 | | | ・厚生省設置法に基いて再び人口問題審議会設置 3.14 らい予防法改正案国会提出(解散で審議未了) 5.26 精神障害者の入院措置要綱を決定 6.12 各都道府県知事あて | ・1953～61年の中絶届出件数100万件突破 ・J.ワトソンとF.クリックがDNAの二重らせん構造を発見 |

| | | | | | |
|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1954 | <p>最初の Francis Galton 研究者である Karl Pearson により 1925 年に英国で創刊された雑誌 <i>Annals of Eugenics</i> の誌名が <i>Annals of Human Genetics</i> に変更：人類遺伝学では權威的な国際雑誌。1954～2002 年まで Cambridge University Press より刊行。2003 年から現在は Blackwell Publishing(UK)より刊行</p> | | | <p>厚生省事務次官通知「優生保護法の施行について」：「強制の方法は…身体拘束、麻酔薬施用又は欺罔等の手段を用いることも許される場合がある」と解しても差し支えない(96 母体保護法改正法で有効)</p> <p>8.15 らい予防法制定公布、即日施行：隔離政策の続行を決定</p> | |
| 1955 | <p>3. 岡本春一「フランシス・ゴルトン—近代心理学史補註(一)」『岡山大学法文学部学術紀要』</p> | | <p>4. 平塚『わたくし歩いた道』新評論社：「花柳病男子に対する、結婚制限法制定の請願…婦人自身の要求として、ことに家庭婦人の立場から男子に要求するもの」</p> | <p>・文部省社会教育審議会が「純潔教育の普及徹底に関する建議」：純潔教育は「あくまでも科学的合理性の上に立って考えなければならない」</p> | <p>4.M.サンガー来日、参議院厚生委員会で「人口問題の解決に受胎調節を」と意見陳述。初の米国女性の国会意見陳述</p> <p>4.18 日本家族計画連盟発会式：M.サンガー出席、会長・下条康麿、副会長・馬島欄、加藤シズエ、古屋芳雄、事務局長・北岡寿逸</p> <p>4. 日本家族計画普及会(のち協会)発足</p> <p>10.24-29 東京で第5回国際家族計画会議開催(主催：サンガー会長の国際家族計画連盟、共催：日本家族計画連盟) 16 カ国、500 名参加。会議の主題は「人口過剰と家族計画」</p> |
| 1956 | | | | <p>5. 売春防止法成立、公布</p> | <p>・第1回国際人類遺伝学会(コペンハーゲン)で開催</p> |

| | | | | | |
|------|-----------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------|
| 1957 | | 古屋芳雄、日本民族衛生学会会長就任 | <ul style="list-style-type: none"> ・古屋芳雄、国立公衆衛生院院長を退官 4. 売春防止法施行 ・古屋芳雄、児童福祉審議会委員、人口問題審議会委員就任 | <ul style="list-style-type: none"> ・古屋芳雄、日本家族計画連盟会長就任 ・東京青い芝の会が発足 | 6. 日本人類遺伝学会創立 初代会長は古畑種基 |
| 1958 | 1. 岡本春一「フランシス・ゴルトン—近代心理学史補註(二)」『岡山大学法文学部学術紀要』 | 6.(24-1 巻頭言) 福田邦三 (日本民族衛生協会理事長・1957年東大生理学教室教授退官)「学会機関誌としての『民族衛生』」 ：創立当時は人種衛生 Rassenhygien 即ち優生運動することであった「民族衛生」という言葉を定義しなおして Volksgesundheitslehre 国民保健衛生の意味に理解で、理事会承認 | <ul style="list-style-type: none"> 1. 国井長次郎「家族計画大会の記」『厚生』 4. 厚生省、受胎調節家族計画普及事業を市町村に移管方針を出す | 9. 日母、優生保護法施行十周年式典開催：「民族優生のための『希望の鐘』を鑄造、法の生みの親谷口会長へ贈る。」 | |
| 1959 | | | 6.M・サンガー来日し、岸総理大臣と会見 | 1. 日母、優生保護法研究部会を設立：「民族優生化、逆淘汰防止を意図、中絶への批判の高まりの中に対処して設置」 ・「青い芝の会」神奈川県に発足 | |
| 1960 | 5. 岡本春一「フランシス・ゴルトン—近代心理学史補註(三)」『岡山大学法文学部学術紀要』 | 11.(26-6) 谷口弥三郎「如何にすれば民族衛生を達し得るか(特別講演)」 11.(26-6) 福田邦三「日本民族素質向上の悲願(公開講演)」 | <ul style="list-style-type: none"> ・高等学校学習指導要領保健体育で「母子衛生・家族計画・国民優生」を 3.30 第34回国会衆議院社会労働委員会での精神薄弱者登録制度についての発言：山下春江「登録制度を推し進め…重症患者というものを厚生省できちんと知って…措置して | <ul style="list-style-type: none"> ・1960年代に入ると障害児の親たちによる施設拡充を求める運動が活発化 | |

| | | | | | | |
|------|--------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|--|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|
| 1961 | 3.吉益脩夫『優生学』(1940年『優生学の理論と実際』の増補改訂版)：国家社会の利益は個人の利益に優先の部分が削除。強制断種賛成から反対へ修正 | 第26回民族衛生学会：東京オリンピックに備えて選手強化中であることから、シンポジウムのテーマ「日本人青少年の体 | | いく」登録制度が「この福祉法を推進していく根本問題」なので「附帯決議でもつけて政府を鞭撻したい」 中山マサ「痴漢…これはぜひ一つ一番きつものだけは早く登録して…治療できるものならやらし、できないものなら一生飼いきれしにでもしていただいで、ほかの国民を守っていただかなかればなるまい」 山下春江「遺伝性の相当重度の者については、断種もしくは優生手術を断行してくれということが父兄の偽らざる告白…登録問題…重度の者に…踏み切っていたただく…いささかも人権問題、人道問題等に問われることのない」 3.精神薄弱者福祉法成立(4.公布、10.施行) 4.1 精神薄弱者福祉審議会設置(69.6 中央児童福祉審議会に統合) 7.19 中山マサ、厚生大臣に就任、初の女性大臣 | ・厚生省、経口避妊薬調査会設置 ・厚生省、小児麻痺ワクチン300万人分緊急輸入決定 | ・合計特殊出生率1.96(1947年は4.54)：過剰人口問題は解消され、経済状態を維持することが人口政策の課題へ |
|------|--------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|--|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|

| | | | | | |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1962 | | 位を向上させるにはどうすればよいか | 10.平塚「鴨外先生について」『文学散歩』 ：「婦人・母・子ども の権利をまもる運動 をおこすため『新婦 人協会』という婦人 組織をはじめた」 | 5.池田内閣は経済成長の 推進力として人的能力開 発と人口資質向上重視の 「人づくり」政策を発表 7.12.厚生省人口問題審議 会が「人口資質向上対策 に関する決議」を建議： 優生政策の必要性を提 案。経済成長政策の前提 として技術革新に即応で きる心身ともに「優秀な 人間」が必要 | ・小児麻痺流行 ・古屋芳雄、国際家族計 画連盟副総裁就任 ・優生政策の目標は「民 族復興」ではなく「経済 成長」へ ・サリドマイド系睡眠薬 による奇形児が問題とな る(サリドマイド事件) |
| 1963 | 1.岡本春一「フランス・ゴルトン—近代心理学 史補註—(四)優生学の建設」『岡山大学法文学部 学術紀要』 1.永井潜が1903~1905年のドイツ留学中に下 宿した家屋に、永井の「記念額」が掲げられる | 第16回医学会総会で英 文誌名 <i>Rassenhygiene</i> を <i>Race Hygiene and</i> <i>Human Ecology</i> に変更 決定。日本語誌名はその ままで異議なし：ナチの 使った <i>Rassenhygiene</i> という言葉の意味のマイ 面をカバーし、 <i>Human</i> <i>Ecology</i> (人類生態学)と 一緒にすれば暗いイメージ が自然に修正される | | 6.厚生省児童家庭局母子 衛生課監修『母親学級指 導者必携—母性編』：家族 計画とは「数が多いとか 少ないとかよりも、健全 な子供を生んで育てるた めの条件をよく」する事。 「奇形児にせよ未熟児に せよ、その心配をなくす ためには卵子和精子のい ずれにも欠陥がなく…胎 内環境を乱さないこと」 | 2.石川達三、小林提樹、 戸川エマ、仁木悦子、水 上勉「奇形児は殺される べきか」『婦人公論』 6.水上勉「拝啓 池田総 理大臣殿」『中央公論』： 重度障害児の父親の立場 から政府の無策を告発 7.黒金泰美「拝啓 水上 勉様」『中央公論』 12.31 全国青い芝の会結 成 |
| 1964 | | 1.第30巻1号より英文誌 名 <i>Human Ecology</i> and <i>Race Hygiene</i> と なる。(前年の総会決定誌名 <i>Race Hygiene and</i> <i>Human Ecology</i> と逆の 順序となっている) 1.30-1 柳沢文徳「日本 民族衛生学会雑誌『民族 | | 6.ピルに関し、厚生省が産 婦人科関係者と特別部会 7.1 母子福祉法公布 11.佐藤内閣は経済開発優 先策ひずみ是正のため社 会開発を掲げる | 6.日本産婦人科学会内分 泌委員会、避妊用低用 量ピルは医師による投与 なら問題なからうと結論 7.日本家族計画連盟は、 古屋芳雄会長名で、ピル 認可は時期尚早との反対 決議文を厚生省、日本医 師会に配布 |

| | | | | | |
|------|--|---------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1965 | | <p>『衛生』の動向：1939～1957年の間を内容的な考から見れば特に区分する必要がない</p> | <p>11.平塚「自我の確立への闘い」『婦人公論』：「大正六、七年頃から、わたくしは母性保護と称して、母となることの自由と合わせて母の生活の社会保障を完全な婦人解放の真の自由と独立のための要件として要求」</p> | <p>2.ピル認可を前提とした新医薬品特別部会の審議会開催が突如中止 6.佐藤首相の私的諮問機関の社会開発懇談会は、重度障害者の「大量収容施設」を各地に建設するコロニー構想を唱える 10.厚生省に心身障害児(者)コロニー懇談会を設置し、第1回開催 8.18 母子保健法公布(66.1.1施行) 12.コロニー懇談会「心身障害者のためのコロニー設置についての意見」を厚生大臣に提出</p> | <p>10.東京オリンピック開催(第一の戦後→第二の戦後へのメルクマール) 2.米軍機による北ベトナムを爆撃(北爆開始) 10.全国純潔教育研究会が宇都宮市で開催：「性の教育を通じてこそ真の男女平等が実現できる」 11.1 日本脳性マヒ者協会「青い芝の会」神奈川県連合会が会報『あゆみ』を発行</p> |
| 1966 | | | | <p>4.兵庫県知事金井元彦が衛生部に「不幸な子の生まれない対策」を指示：びわこ学園見学を契機に岡崎園長に出会っての金井の解釈による</p> | <p>・ 日母の先天性代謝異常研究会だけがフェニルケトン尿症試験紙の取扱い機関となる</p> |
| 1967 | | | | <p>8.1 児童福祉法改正(重症心身障害児施設を追加、肢体不自由児・重症心身障害児の施設入所年齢の延長) ・ 厚生省、副作用を理由にピルの製造許可せず</p> | <p>・ 宗教法人「生長の家」が中心となり、優生保護法改廃期成同盟を結成 2.11 初の建国記念の日 4.美濃部亮吉都知事当選 12.佐藤首相、非核三原則を言明</p> |

※戦前からの優生学的言説は、敗戦直後から「民族の復興」「文化国家、健康国家」の手段として読みかえられ、優生保護法制定の気運を支えてゆく

「戦後優生思想の読みかえと隠蔽、忘却」の軌跡 【第二期 優生学的言説が禁句となっていく時期】

| 年 | 優生学関連文献 (加筆・修正・隠蔽) | 雑誌『民族衛生』 | 優生学研究動向 | 議会・国(自治体)の動き | 時代の状況 |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1968 | <p>9.内村祐之『わが歩みし精神医学の道』：内村は1936年10月三宅欽一と連名で内務大臣宛の「精神病対策確立に関する陳情書」で断種法制定を求め、40年5月『帝国大学新聞』では国民優生法制定に高い評価と期待を表明。しかし本書105頁で「断種法制定の委員会に出席して驚いたことは、法律家や政治家に断種の賛成者が多くて、その主要対象を研究する精神医学者の間に、たぬらぬら風景があつた。前者は、世間に言われている遺伝説を丸呑みにし、あるいは先進国ドイツの断行したことだから間違いないと考えて、断種法に賛成したのであろう」と、あたくも自身も「ためらい」の側にいたかのよう(過去の隠蔽)に書いている。</p> | <p>平塚らいてう・小林登美枝による新婦人協会の位置づけ</p> | <p>優生学概念の転換期：1960年代末からのアメリカを中心とした遺伝決定論や生物学的決定論への批判などの科学批判運動の中で、ナチ断種法を素材に優生学が「否定的に再発見」され、「ナチ＝優生社会＝巨悪」という図式が成立し、優生学の全否定となり、読みかえからさらに削除や隠蔽へと比重がシフト。これによって優生学的実像を見失わせる結果となる</p> <p>9. Christian Bernsdac 『呪われた医師たちくナチ強制収容所における生体実験』野口雄司訳(早川書房 原著 1967)</p> | <p>1.20 自民党大会で、民族意識と国防意識の高揚を強調</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本年度から先天性代謝異常の4疾患(フェニルケトン尿症、先天性クレチン症、ウィルソン病、先天性無ガンマグロブリン血症)に養育医療給付を開始 ・日本で初めて羊水検査(羊水穿刺)による染色体異常の検査が行われる <p>12.『厚生白書』：最近以降の発生原因の究明が学的に行われるとともに、対策も発生予防中心の方向へ積極的に向っている</p> | <p>・国連の国際人権年：テヘランでの人権宣言で子どもを「産む」産まない」の権利は両親に属し、国家は介入すべきでない</p> <p>1.東大医学部学生自治会(医師法改正反対)スト突入(東大紛争の発端)</p> <p>10.18 重宗雄三参議院議員(自民党)らの優生保護議員懇談会結成で、同法の改正、政治の舞台へ(翌年の人口問題審議会中間答申で再生産力低下が問題視される)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「いのちを大切に」する運動連合(鳩山薫子総裁)が優生保護法改正決起大会を開催 |
| 1969 | | | <p>・太田典礼『日本産児調節史』(日本家族計画協会)</p> | <p>4.心身障害児発生原因となる先天性代謝異常4疾患に加え、本年度から血</p> | <p>2.日母、優生保護法改正問題対策で全国支部長会議開催。参議院政策審議</p> |

| | | | | | |
|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------|
| 1970 | <p>1.古屋芳雄『老学究の手帖から』(社団法人日本家族計画連盟):国民優生法について「この法律は終戦後、優生保護法と改められた。そして今は人工妊娠中絶のことで問題はなっていないが、じつは民族の質的向上をめざす、世界的に類のないよい法律だとわたくしは思っている」</p> | | <p>6.松村博雄「優生保護法を改悪させるな」『婦人公論』</p> <p>7.高杉晋吾「増殖する福祉ゲッター」『現代の眼』</p> <p>10.高杉晋吾「医療管理社会への挑戦」『現代の眼』</p> <p>11.高杉晋吾「精神病棟EF2の反乱」『月刊労働問題』</p> | <p>女病に対しても医療給付を開始</p> <p>8.5人口問題審議会中間答申「わが国人口再生産の動向についての意見」:人口資質の向上と出生力の回復が必要</p> <p>12.『厚生白書』:心身障害児や先天異常児問題が社会的に重要視。発生予防が母子保健対策中で重要に</p> <p>5.21 心身障害者対策基本法公布(即日施行)</p> <p>5.優生保護法の意識調査を日本医師会に委嘱</p> <p>5.兵庫県衛生部に「不幸な子どもの生まれない対策室」が設置され、神戸に県立こども病院(指導相談部設置)オープンで、この施策の大きな一翼を担う</p> <p>8.26 自民党社会部会は党内社会福祉施設小委員会で検討の「社会福祉施設の整備および運営に関する改善について」を発表:施設の「緊急整備五カ年計画」を立て重度身障者等を見みややかに収容</p> <p>11.文部省は『高等学校学習指導要領』で「保健体育」のなかで「結婚と優生」の指導を指示</p> | <p>会での法改正公聴会で会長が反論</p> <p>10.全米にベトナム戦争反対運動広がる</p> |
| | | | | <p>・日経連「雇政策研究報告」:労働力人口増加対策の一つとして優生保護法改定をあげる</p> <p>5.日本医師会に優生保護対策委員会設置</p> <p>5.横浜市での母親による重度障害児殺人事件で、母親への減刑嘆願運動</p> <p>7.「青い芝の会」は、この減刑嘆願運動を障害者の生存権否定として反対運動を開始し「殺される立場から」の意見書提出</p> <p>8.日本医師会が「優生保護対策についての見解」を発表し改正反対の立場を表明</p> <p>10.21 国際反戦デーに田中美津ら、初めてウーマン・リブを名乗って街頭デモ:性的主体として「女性」を立ち上げた第二波フェミニズムの世界的潮流に連なるもの</p> | |

| | | | | | | |
|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------|
| 1971 | | | 5.24 平塚らいてう没 | <p>2.5 高杉晋吾「安楽死と強制収用所—巨大身障者コロニー建設の思想基盤—」『朝日ジャーナル』</p> <p>3. 高杉晋吾「拝啓『殺人施設』」『重身障害者医療施設』殿『現代の眼』</p> <p>6. 高杉晋吾『頭脳支配』(三一書房)</p> <p>6. 高杉晋吾「内村祐之／患者を材料に脳支配めざす名譽亡者」『現代の眼』</p> <p>10. 高杉晋吾「保安処分を招くもの 研究至上主義と権力追隨の医療」『新日本文学』</p> <p>9. 岡田英己子「わが国の優生運動—戦前—」(奈良教育大学卒論)</p> | <p>10.21 厚生省人口問題審議会最終答申「最近における人口動向と留意すべき問題点について」:「優生対策と保健教育」の章では「人類の発展に災いするがごとき悪質遺伝病を事前に防止するために優生保護法の活用による遺伝相談の普及」を、「心身障害者の発予防に着眼した大規模研究の推進」を勧奨</p> <p>11.『厚生白書』:「遺伝による先天異常の発生を未然に防止」するため「学校教育や社会教育においても、遺伝をはじめ、生理、解剖、優生結婚、家族計画の意義などについて充分指導を行う必要がある」</p> <p>・厚生省は心身障害児の発生のための研究班を発足の</p> | <p>1. 日本医師会、優生保護法指定医の新指定基準を決定</p> <p>7. 日本医師会、「家族計画指導者用テキスト」作成</p> |
| 1972 | <p>・1922年設立のアメリカ優生学協会 American Eugenics Society (AES) が、The Society for the Study of Social Biology と改名する</p> <p>※1931年夏には前会長 Roswell H. Johnson が来日し、各地で優生学講演を行う</p> | | <p>5.19 高杉晋吾「町をゆるがした”ひとり歩き”—ドキュメント映画『さよならCP』が告発するもの—」『朝日ジャーナル』</p> <p>5.27 村松博雄「優生保護法の改正をめぐって」『朝日新聞』:「胎児条項について「新たな生命論争がおこる可能性」を指摘</p> | <p>7.1 身体障害者福祉法改正で身体障害者療護施設の創設</p> <p>5.23 政府・自民党、優生保護法の一部改正案を閣議決定:「経済的理由」の削除と胎児条項(胎児の障害を中絶理由と認める)の導入</p> <p>5.26 政府は第68国会に同一案提出するが継続審議に</p> <p>→経済的理由削除は女性</p> <p>の猛反発で74年第72国会</p> | <p>・「青い芝の会」の優生保護法改正反対運動:胎児条項と優生思想の結合を明らかにし「不良な子孫の出生を防止」という優生保護法の優生思想はナチ斯種法とどこが違うのかと非難。中絶の自由をめぐってフェミニズム運動と対立</p> <p>6.8 日本家族計画連盟(会長・古屋芳雄)優生保護法改正案は「国民生活を無</p> | |

| | | | | | | |
|------|---------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | 5. 座談会「日本民族改造論」『母子保健』：東京医科歯科大学人類遺伝学教室田中克己「極端に悪いものをへらせば、全体としてのレベルが向上してきます」 | | 11. 平塚『元始、女性太陽であった結婚制限法制定の諸願…母性保護的な立法を要求』 小林「あどがき」『元始、女性は太陽であった』 『先生がこの新しい婦人団体の目的として意企したのは、婦人、母、子どもたちの権利を擁護する法制や制度を要求し、実現すること』 | 6.23 記事「不純な中絶禁止の動き—優生保護法改正に監視を—」『朝日ジャーナル』 | 参議院審議未了で廃案へ→胎児条項導入は、障害児を「不良な子孫」として「優生上の見地から」その出生を防止するためであり、「青い芝の会」が優生思想批判の立場から反対運動展開し、第72国会衆議院で胎児条項削除 | 視する暴挙」と反対声明 6. 田中角栄通産相「日本列島改造論」を発表 ・日本遺伝学会が国民に正しい遺伝の情報と知識を提供するためと、「遺伝相談センター」設置 3.25 日本家族計画連盟、優生保護法改正反対声明 3.26 優生保護法改正案の第71特別国会再提出を阻止する東京集会、20団体参加 5.12 優生保護法改正案に反対するウーマン・リブ団体、厚生省に押しかける 5.12 「青い芝の会」、「優生保護法改正案は障害児と健康児を差別し、重度障害者の生存権を否定するもの」と抗議文を厚相に渡す 6.30～7.1 優生保護法改正案を阻止する全国集会、「産める社会を、産みたくない社会を」28団体参加の実行委員会よびかけ |
| 1973 | | 2.16 野田正彰「偏見に負担する教科書と法—精神科医は訴える—」『朝日ジャーナル』 2. 高杉晋吾「優しい実験者たち—脳研究と精神障害者の悲惨—」『展望』 5.25 「時の動き」宗教票への義理で動く妊娠中絶引締め「朝日ジャーナル」 | 2.5 政府、安全性に疑問、とピル使用を認めず 4. 厚生省人口問題審議会『日本人の動向—静止人口をめざして—』第8章人口資質の諸問題「優生と優境の諸問題」：人類遺 | 6.7 「時の動き 世界の潮流に逆らう時代錯誤ゴリ押しのと腰砕けの優生保護法改正」『朝日ジャーナル』 | 5.11 優生保護法改正案、第71国会に再提出（法案は継続審議） 7.18 優生保護法を改正して赤ちやんの生命を守る全国大会開催（自民党本部主催） 8. 兵庫県衛生部不幸な子どもが生まれない対策室『幸福への科学』：経費を県費で負担する出生前診断の制度により発見された「異常児の処置」は「生まれてくる子どもに満ちた生活をやわらげるための中絶」 | 3.24 優生保護法改悪を阻止する大集会、国会審議再開の動きに講義 4. スウェーデン随胎自由化法案可決 |
| 1974 | | | | | | |

| | | | | | | |
|------|-----------------------------|--|--------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | | | <p>8.2 川上武「現代の『生』と『死』」『朝日ジャーナル』</p> <p>9. 日本学術会議「人類遺伝学将来計画」：新生児スクリーニングによる知的障害発生予防の経済的利点を強調。ここでは「優生」という言葉づかいは回避（遺伝決定論はナチの非人道的行為の延長線上に位置づけられ批判運動展開中の海外動向を敏感に察知して回避したもの）</p> | <p>伝学の分野がゴルトン命名の優生学の系譜に連なるという認識での記述</p> <p>5.16 優生保護法改正案、衆議院社会労働委員会で審議再開</p> <p>5.24 優生保護法改正案、衆議院本会議で修正・可決</p> <p>6.3 優生保護法改正案、参議院審議未了で廃案</p> <p>・厚生省の心身障害児発生予防に関する研究の中に遺伝に関する研究班ができ、遺伝相談カウンセラーの養成を行うことで、遺伝相談の普及発展を図ることが提言される</p> | <p>5.22 優生保護法改悪阻止実行委員会など、衆議院員面会所におしかけ集会</p> <p>7. 第14回日本先天異常学会：「公益上の必要」による強制的な不妊手術の規定に批判的な発言</p> |
| 1975 | | | | | <p>2. 自民党青嵐会の玉置和郎参院議員と歯科医師会長の鹿島俊夫参院議員が先頭に立ち、優生保護法改正を党に働きかける</p> <p>7. 厚生省、サリドマイド児190人を認定</p> <p>11. 厚相、妊娠中絶期を「8ヵ月未満」から「7ヵ月未満」に改正の方針発表</p> | <p>2. 優生保護法改正案、生長の家が国会再提出へ猛運動展開</p> <p>5. 日母は優生保護法改正案再提出の動きを活発として優生保護法対策費計上で</p> <p>6.19~7.2 メキシコで、国際婦人年世界会議が開催</p> |
| 1976 | 2. 岡本春一「ゴルトン」南博編『心理学の名著12選』 | | | <p>5. 太田典礼『墮胎禁止と優生保護法』（経宮者科学協会）</p> <p>9. 太田典礼『日本産児調節百年史』（出版科学総合研究所）</p> | | <p>・76~85年を「国連婦人の十年」と定め各国政府に男女平等施策推進促進</p> |
| 1977 | | | 7. 小林「解題」平塚『むしろ女人の性を礼拝せよ 平塚らいて | | <p>1. 厚生省新規予算で、家族計画特別相談事業（遺伝相談）決定し、日本家族計画</p> | <p>・DNA配列を解読する方法が開発される</p> |

| | | | | | | |
|------|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------|------------------------------------|
| 1978 | | <p>1. 第44巻1号座談会 「Human Ecologyと民族衛生」：英文誌名変更(1964)のいきさつ掲載 福田邦三：日本語名はそのまま 英語での本誌の正式名称だという共通理解もなく雑誌の内容を示すくらしいの認識</p> | <p>てう新性道徳論集』 ：「らいうがこの新しい婦人団体の目的として意図したもの は、婦人、母、子供の権利を擁護する法律や制度を要求し、実現することであつて、……母性主義の立場からの社会改造運動を起すこと」綱領に掲げた命題『国際婦人年』を経た今日なお、私たちにとっての大きな課題である」</p> | | <p>協会に委託 →日本家族計画協会遺伝 相談センターオープン</p> | 7. 世界初の体外受精児 Louise Brown 英国で誕生 |
| 1979 | | | | <p>7. 鈴木善次「日本における優生学運動の一側面 —池田林儀の『優生運動』を中心に—」『科学史研究』 12. Ethel Tobach『科学の名による差別と偏見』本吉良治他訳（新曜社原著 1974）</p> | <p>・文部省『高等学校学習指導要領』で「保健体育」から「優生」に関する項目が削除される</p> | |

| | | | | | | |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1980 | | | | <p>3. 中村桂子、米本昌平「現代社会と遺伝学—第二段階に入る遺伝操作論争」『世界』</p> <p>4. 廣嶋清志「現代日本人口政策史小論—人口質概念をめぐって(1916—1930)—」『人口問題研究』</p> <p>5. ドイツ保健学会がベリンでシンポジウム「ナチス医学、タブーの過去か不可避の伝統か」を敢行(本格的実証研究への突破口)</p> <p>10. 廣嶋清志「現代日本人口政策史小論(2)—国民優生法における人口質政策と量政策—」『人口問題研究』</p> <p>10. 米本昌平「優生思想から人種政策へ—ドイツ社会ダーウエイニズムの変質」『思想』</p> | | <p>9.18 「1カ月の医療費1500万円の『生活保護家庭』大西巨人家の『神聖悲劇』」『週刊新潮』</p> <p>10.2 渡部昇一「『神聖な義務』」『週刊文春』</p> <p>10.15 「『劣悪遺伝の子を生むな』渡部氏、名指しで随筆」『まるでヒトラー礼賛 大西氏激怒』『朝日新聞』</p> <p>→青い芝の会は「障害者抹殺、障害者否定」であるとして抗議行動</p> |
| 1981 | | | | <p>1. 厚生省、国際障害者年推進本部を設置</p> <p>5.25 障害に関する用語整理のための医師法等の一部を改正する法律公布(「つんぼ・おし・盲」を改める)</p> | | <p>国連国際障害者年(テーマ「完全参加と平等」)</p> |
| 1982 | <p>9. 第48巻5号「50周年記念号」:「敗戦後なで、民族衛生なる言葉に抵抗はあった」</p> <p>10. 第47回学会総会で学会と機関誌の英名変更を決定:「和名の民族にかかわるraceが英文の中から消える…raceが人種的偏見や偏狭な民族主義などに結びつく—一種の差別的意</p> | | <p>2. 太田典礼「よたよたの人口政策」『世界と人口』</p> <p>7. 篠崎信男「終戦直後の人口問題事情」『世界と人口』</p> <p>11. 石井美智子「優生保護法による陸胎合法化の問題点」『社会科学研究』</p> <p>11.26 「優生保護法改正」を阻止せよ 戦争</p> | <p>3.15 参議院予算委員会 で村上正邦、玉置和郎議員が優生保護法の「経済的理由」削除を強く迫り、森下元晴厚相(自民党宗教政治研究会監事、会長は玉置)が改正を示唆する答弁</p> <p>・政府が宗教法人「生長の家」の政治団体「生長の家政治連合国会議員連盟」(生政連)メンバーの議員</p> | | <p>6.24 日母は「優生保護法改正に関する日母の見解」を発表し反対表明。日本医師会も日母見解に賛同し全面支持を表明</p> <p>6.26 日母は「優生保護法空前の危機」『日母医報』号外を発行</p> <p>7.13 宗教界代表や改正派国会議員が「生命の尊厳を訴えたい児のいのちを救う国民の集い」を憲政</p> |

| | | | | | | | |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1983 | <p>・須川豊『先天異常の発生予防と母子保健』（日本家族計画協会）：「心身障害は、本人や家族にはもちろん、民族の将来のためにも、その発生予防に努めるべきである」</p> <p>※須川豊は兵庫県衛生部不幸な子どもが生まれない対策室による運動の当事者のひとりであったが、1960年代末に神奈川県に移り、「心</p> | <p>味をもち、学会誌名に取り入れられるのは、特に国際関係を考慮すれば、ふさわしくない…和名と英名との間にあがる種の意味的な乖離が生じたのではないか？」</p> | <p>1. 第49巻1号から英文誌名を <i>The Japanese Journal of Health and Human Ecology</i> へ、学会の英文名を <i>The Japanese Society of Health and Human Ecology</i> へ変更</p> | <p>2. 小林『平塚らいてう・人と思つて』：「花柳病男子の結婚制限法制定については、ちよつと説明が必要から、世の妻と子供とを花柳病の災害から護るため、こつとした病氣をもつ男子の結婚を取り締まるべし」という趣旨」「治警法五条改正という政治的課題とくくれば、こ</p> | <p>準備のための『性』の管理』『朝日ジャーナル』</p> <p>12. 松本恵美子「女たちの手で優生保護法の改善を阻止しよう」『あら』</p> <p>※9.29 討論会講演要旨</p> <p>丸本百合子：わが国では人工中絶の規制と人口政策とは切り離せない関係。今回の改正案も女をいっさい無視し、経済成長のための労働力を増加させる目的で提出された。国民の優生法と同様、国民の生命尊重とはほど遠い法案であるから、今反対しなければならぬ</p> | <p>(玉置和郎、村上正邦ら)の運動により中絶理由からの経済条項削除を目的とする優生保護法改正案上程を図るが、優生保護法「改正」阻止連絡協議会(阻止連)が反対の中核となり女性団体・医師団体・労働組合も参加の強力な反対運動展開で政府は上程を断念</p> | <p>記念館で開催</p> <p>8.2 優生保護法一部改正に対し「女性に対する弾圧」として日本家族計画連盟(会長加藤シヅエ)が反対声明</p> <p>8.5 日母の声明「優生保護法に反対する」を發表：「法の目的である民族の発展と母体の健康を保護する基本を堅持すべき」</p> <p>9.29(財)日本性教育協会主催討論会「人工妊娠中絶を考へる 優生保護法改正は是非か？」玉置、村上両議員と生長の家は欠席。東京大学附属病院分院産婦人科医局長丸本百合子「医師の立場からみた中絶の歴史と現状」</p> <p>12. 日母が日本母性保護医連盟(日母医連)結成</p> |
| | <p>2.25 丸本百合子「優生保護法『改正』に疑義あり 『中絶の自由』を求め悲しみ」、柴谷篤弘「公開質問状 優生保護法『改正』に疑義あり 法的・社会的論議優先で無視される生物学的事実」『朝日ジャーナル』</p> <p>4. 早川紀代「戦時体制・優生思想・人口対策—「優生保護法」改正の動きをめぐって—」『歴</p> | <p>・「生長の家」は優生保護法改正のための署名運動を全国で展開し、700万人の署名を集め、玉置、村上両参議院議員により200人近い国会議員が名を連ねた「生命尊重国会議員連盟」を擁して、優生保護法改正案の国会提出の大運動を展開するが、当時の自民党内には優生保護法改正に反対する「母性の福祉を推進する議員連盟」(日母医連)他の要請を受けて</p> | <p>「生長の家」は優生保護法改正のための署名運動を全国で展開し、700万人の署名を集め、玉置、村上両参議院議員により200人近い国会議員が名を連ねた「生命尊重国会議員連盟」を擁して、優生保護法改正案の国会提出の大運動を展開するが、当時の自民党内には優生保護法改正に反対する「母性の福祉を推進する議員連盟」(日母医連)他の要請を受けて</p> | <p>・「生長の家」は優生保護法改正のための署名運動を全国で展開し、700万人の署名を集め、玉置、村上両参議院議員により200人近い国会議員が名を連ねた「生命尊重国会議員連盟」を擁して、優生保護法改正案の国会提出の大運動を展開するが、当時の自民党内には優生保護法改正に反対する「母性の福祉を推進する議員連盟」(日母医連)他の要請を受けて</p> | | | |

| | | | | | | |
|-------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>身障害児の予防対策」に従事。「青い芝の会」が神奈川県で活動を開始したのと同時期(森岡[2001]465)</p> | <p>花柳病男子の結婚制限法制定というのにはなにか奇妙な印象を与える」 10. 小林「解説」『平塚らいてう著作集3』:「社会改造をめざす『新婦人協会』の運動の根本精神は母性主義の理想にほかならない」「花柳病男子結婚制限法制定の請願運動…などに述べられている『結婚制限』の趣旨…根本にあるのはケイの結婚における優生選択の思想である」「らいてうは(エレン・ケイと同じ見地から優生思想にもとづく結婚制限を提案した)」</p> | <p>史評論』 4.29 米本昌平『優生断種』問題とアメリカの教訓』『朝日ジャーナル』 5. 社会評論社編集部編『女の性と中絶 優生保護法の背景』(社会評論社) 6.17 ドクトル・チエコ「女の戦後史」妊娠中絶 命をかけて得た『産まない自由』『朝日ジャーナル』 6. 斉藤千代「見えないく道」一優生保護法の系譜をたずねて 見たこと、考えたこと一『あごら』 10.7 米本昌平「優生保護法と優生思想を考へる『あごら』28号」『朝日ジャーナル』 11. 鈴木善次『日本の優生学』(三共出版)</p> | <p>森山真弓議員ら(結成)もあり、改正には多くの女性の混乱を恐れ、党内の執行部は改正案の国会提出を送る</p> <p>5. 自民党政務調査会の社会部会・優生保護法等検討小委員会の中間報告「優生保護法の取扱いについて」:「優生という概念自体への疑問、「不良な子孫」という規定を問題視している</p> <p>8. 生長の会政治連合国会議員連盟(生政連)は解散し、優生保護法改正運動を停止</p> | <p>4.29 米本昌平『優生断種』問題とアメリカの教訓』『朝日ジャーナル』 5. 社会評論社編集部編『女の性と中絶 優生保護法の背景』(社会評論社) 6.17 ドクトル・チエコ「女の戦後史」妊娠中絶 命をかけて得た『産まない自由』『朝日ジャーナル』 6. 斉藤千代「見えないく道」一優生保護法の系譜をたずねて 見たこと、考えたこと一『あごら』 10.7 米本昌平「優生保護法と優生思想を考へる『あごら』28号」『朝日ジャーナル』 11. 鈴木善次『日本の優生学』(三共出版)</p> <p>6. 米本昌平「優生学史研究の現代的視点」『歴史と社会』 6. 高杉晋吾『こっぼんのアウシュヴィッツを追って』(教育史料出版会)</p> | <p>10.14 日本初の体外受精児が東北大学病院で誕生</p> | <p>1. 「結婚する前のコモンセンス よい血を残したい」『ヴァンサンカン』: 「健康でよい子を持つための基礎知識」とあり、カリカック家系図紹介「親の素質は子供にどれだけ遺伝するか?」監修/浅香昭雄医学博士(東京大学講師)「女と生まれながらには知っておくべきよい子を生むための常</p> |
| <p>1984</p> | <p>・内村祐之『精神医学者の夢想』中公文庫:47年版をそのまま収録(内村は1980.8.17没)「解説」は内村の弟子加賀乙彦、断種法には一切触れず</p> | <p>3. 宇都宮病院の精神病患者虐待事件を契機に、厚生省は精神障害者の人権問題に敏感になる ・母子保健法改正案提出の動き(翌1985年に法案は結局上程されず)</p> | <p>森山真弓議員ら(結成)もあり、改正には多くの女性の混乱を恐れ、党内の執行部は改正案の国会提出を送る</p> <p>5. 自民党政務調査会の社会部会・優生保護法等検討小委員会の中間報告「優生保護法の取扱いについて」:「優生という概念自体への疑問、「不良な子孫」という規定を問題視している</p> <p>8. 生長の会政治連合国会議員連盟(生政連)は解散し、優生保護法改正運動を停止</p> | <p>4.29 米本昌平『優生断種』問題とアメリカの教訓』『朝日ジャーナル』 5. 社会評論社編集部編『女の性と中絶 優生保護法の背景』(社会評論社) 6.17 ドクトル・チエコ「女の戦後史」妊娠中絶 命をかけて得た『産まない自由』『朝日ジャーナル』 6. 斉藤千代「見えないく道」一優生保護法の系譜をたずねて 見たこと、考えたこと一『あごら』 10.7 米本昌平「優生保護法と優生思想を考へる『あごら』28号」『朝日ジャーナル』 11. 鈴木善次『日本の優生学』(三共出版)</p> <p>6. 米本昌平「優生学史研究の現代的視点」『歴史と社会』 6. 高杉晋吾『こっぼんのアウシュヴィッツを追って』(教育史料出版会)</p> | <p>10.14 日本初の体外受精児が東北大学病院で誕生</p> | <p>1. 「結婚する前のコモンセンス よい血を残したい」『ヴァンサンカン』: 「健康でよい子を持つための基礎知識」とあり、カリカック家系図紹介「親の素質は子供にどれだけ遺伝するか?」監修/浅香昭雄医学博士(東京大学講師)「女と生まれながらには知っておくべきよい子を生むための常</p> |

| | | | | | | |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1985 | 5.岡本春一の死去後、弟子たちにより岡本著作編集作業開始 | | | 4.鈴木善次「日本の優生学にかかわった海野幸徳」『生物学史研究』 5.森毅「悪としての科学」、片山茂「科学—このおぞましきもの」、米本昌平「ナチズムの_cmosロジ—」、いいたも「科学する心のフアンシズム」、吉田忠「アメリカの優生政策」『思想の科学』 | 6.25 女性差別撤廃の基本条約「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」を批准 | 識」監修／真田幸一医学博士(愛育会総合母子保健センター愛育病院長)「よい環境作りは親の義務。おなかからスタート」監修／高橋悦二郎医学博士(愛育会総合母子保健センター保健指導部長) |
| 1986 | | | 2.藤目ゆき「戦間期日本の産児調節運動とその思想」『歴史評論』 | 2.18 厚生省、「経口避妊薬の医学的評価に関する研究班」を設置。臨床試験のガイドラインを発表 | 11.第4回国際家族計画連盟世界総会、東京で開催 | |
| 1987 | 5.岡本春一著、大羽繁纂他編『フランシス・ゴールの研究』出版：1955～63年『岡山大学法文学部学術紀要』に4回連載のうち一部割愛[編者あとがき]著者はこのような問題に対して、特に本稿執筆當時は、批判的認識を持つておられなかったと思 | | 3.荻阪良二「書評『フランシス・ゴールの研究』『基礎心理学研究』」 2.館かおる「日本フェミニズム論—平塚らいてうにおける『母性』とフェミニズムを中心に—」女性学研究会編『女性の目で見ると講座女性学4』(勁草書房) | 1.17 厚生省、国内初の女性エイズ患者(神戸市)認定 9.26 精神衛生法を精神保健法と改称(1988.7.1施行) 10.厚生省「優生手術の適用事由等に関する研究班」設置して抜本的見直し | 低用量ピルの治験が各製薬会社で開始 | |

| | | | | | | | |
|------|------------------------------------------------------|--|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| | う。しかし今日の社会情勢を考慮して「優生学の建設」に関する諸稿については一応これを割愛させていただきます | | | 8.大林道子「産児調節運動と優生思想」、山田真「内なる優生思想を討つために」『日本婦人問題懇話会会報』 | | | |
| 1988 | | | | 1.木畑和子「第三帝国と安楽死問題—いわゆるく中止—」『東洋英和女学院短期大学研究紀要』26 2.石崎昇子「私のらいう、篠宮美「らいうの優生思想を問う」平塚らいうを誦む会編『らいう、そしてわたし』 9.野間伸次『健全』なる大日本帝国—国民優生法制定をめぐって—『ヒストリア』120 11.宮澤浩一『安楽死事件』と西ドイツ刑事司法—ナチス犯罪追及と過去の清算—『世界』 | ・厚生行政科学研究報告書「優生保護法における優生手術の適応事由に関する研究」：「公益上の必要」を理由とする強制的な不妊手術の規定は人権侵害 | ・ドイツで、「断種法はナチの悪法」であると国会宣言（実質的な謝罪） ・ヒトゲノム計画国際協力会議で、「ナチ（の優生政策）のような非道にながらから」、生殖細胞の操作にモロトリアムをかける、受精卵の遺伝子治療の試みを禁止すべきとの提案あり | |
| 1989 | | | | 3.米本昌平『遺伝管理社会—ナチスと近未来』【叢書 死の文化 4】 5.鈴木裕子『女性史を拓く1』：「母性主義と優生思想」と題して新婦人協会を論ず 6.高木雅史「『大正デモクラシー』期における『優生論』の展開と教育」『名古屋大学教育学 | | 1.7 昭和天皇没 (<u>第二の戦後—第三の戦後へのメルクマール</u>) | |

| | | | | | | |
|--|--|--|--|-----------------------------------------------------------------------------------|--|--|
| | | | | 部紀要』36(刊行は1990.3) 9.木畑和子「第二次世界大戦下のドイツにおける『安楽死』問題」井上茂子他編『1989—ドイツ第三帝国と第二次世界大戦—』 | | |
|--|--|--|--|-----------------------------------------------------------------------------------|--|--|

※1960年精神薄弱者福祉法制定論議にみられる優生学的言説は、1970年頃より減少するが、公的報告書では1970代前半、優生学・優生政策を肯定的に解釈しているものがある。1970年代末から国内外で、優生学と障害者の人権侵害が問題として広汎に意識化され始める。

「戦後優生思想の読みかえと隠蔽、忘却」の軌跡 [第三期 ナチ断種法批判言説の定位と新・旧優生学の二項対立図式の到来]

| 年 | 優生学関連文献 (加筆・修正・隠蔽) | 雑誌『民族衛生』 | 優生学研究動向 | 議会・国(自治体)の動き | 時代の状況 |
|------|-----------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------|----------------------|
| 1990 | | | 12.松原洋子「優生学とセクシャリティ」『生物学史研究』 | ヒトゲノム解読の国際計画正式発足 | 90年代に大正、昭和期の雑誌復刻がピーク |
| 1991 | | 誌上で学会名、誌名「民族衛生」への疑問、改名議論が始まる 7.(57-4 巻頭言)田中平三「日本民族衛生学会と人類生態学」：衛生学会と人類生態学の私学公衆衛生学分野の私には馴染みの少ない学会で、「大きな偏見をもっていた。"民族衛生"という言葉から、『大和民族の優れた素因を保持していくことを目的とした学会』というように暗いイメージをいだいていた」が、「本誌の英文題名…を目にして「今までの偏見に反省」本学会を『日本人類生態学会』と改名してはどうか」か 11.(57-6 巻頭言)荒記俊一『行動』研究と民族衛生」：学会綱領での民族衛生学の定義、あるいは過去に定義されたかが不明。「歴史的発展過程を総括することが不可欠」 | 1.鈴木善次、松原洋子他「展望：優生学史研究の動向(1)―イギリス優生学史研究」『科学史研究』 5.斎藤光「優生学史研究覚え書き 三つの視点」『京都精華大学紀要1』 10.古久保さくら「らいてうの『母性主義』をよむ―母性を基軸にしたフェミニズム再考のため―」『女性学年報』 9.館かおる「近代日本の母性とフェミニズム―母性の権利から産育権へ」原ひろ子・館かおる編『母性から次世代育成力へ』(新曜社) 10.高木雅史「戦前日本における優生思想の展開と能力観・教育観―産児制限および人口政策との関係を中心に―」『名古屋大学教育学部紀要』40-1 (刊行は 1993.9) 10.折井美耶子編『論争シリーズ5 資料 性と愛をめぐる論争』(ドメス出版) 12.Frants Lutzius『灰色のバスがやってきた―ナチ・ドイツの隠された障害者「安楽死」措置―』山下公子訳(草思社 原著 1987) | | |
| 1992 | | 5.(58-3 巻頭言)大井玄「名称と内容」：「時代 | 1.加藤秀一「生殖する権利 ジェンダー・主体・新しい優生学」『現代思想』 | | |

| | | | | |
|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|
| | <p>の変化と共に、施設や雑誌の名称が時代の文脈からはずれてしまうならば、誤解を招く恐れが生じはしないか。またその名称を相續することによって、社会の変化に応じた対応をする自由度が拘束される恐れも生じないだろうか。わが『民族衛生』という名称について私はそのような疑問を禁じ得ない。英語誌名を変えても「民族衛生」は直訳すれば racial hygiene である。これは次の世紀に我々が持ち込み難い概念であり、子オロギーであろう。民族衛生という呼称を變える時はすでに十二分に熟している」「『健康と人間生態』といった名称でも良い」</p> <p>11. 第 57 回学会総会で円卓討論会「『民族衛生』をめぐって」開催：丸山博(1959 年会長)『『民族衛生』の名前をはずしていいと思う方、手を挙げて下さい(大井玄、田中平三)。学問の名前がロマンチックなギリシヤの女神ピギーナであることに非</p> | <p>2. 鈴木善次、松原洋子他「展望：優生学史研究の動向(I)」『科学史研究』：イギリス優生学史を通して、優生学史のヒストリオグラフィのあり方を検討。英米優生学史を比較したケヴルズを紹介 Daniel J. Kevles, <i>IN THE NAME OF EUGENICS Genetics and the Uses of Human Heredity</i> (1985)</p> <p>3. 高木雅史「1920～30年代における優生学的能力観—永井潜および日本民族衛生学会(協会)の見解を中心に—」『名古屋大学教育学部紀要』38</p> <p>3. 石崎昇子「生殖の自由と産児調節運動—平塚らいてうと山本宣治」『歴史評論』503</p> <p>4. 岡田靖雄「断種法問題—その広がりを見取り図—」『日本医史学雑誌』</p> <p>6. 鈴木善次、松原洋子、坂野徹「展望：優生学史研究の動向(II)」『科学史研究』</p> <p>8. 鈴木貞美「一九一〇年代の思潮と「生命」の犯濫、＜共同討議＞「一九一〇年代思潮を読み直す」『特集・大正生命主義』『芸芸』秋季号</p> <p>9. 高木雅史「『大正デモクラシー』と優生学」『教育年報 I』『教育研究の現在』(世織書房)</p> <p>12. 木畑和子「第三帝国の『健康』政策」『歴史学研究』</p> | <p>3.18 厚生省中央薬事審議会はピルズの認可を見送り。エイズの広がりや加速させる恐れがあるとして、「公衆衛生上の見地」から継続審議と決定。ピル審査を凍結することに決定(中断は 1995 年まで続く)</p> | <p>3. 日本家族計画協会の医学委員会は「低用量ピルの認可とエイズ蔓延は結びつかない」との見解を発表</p> |
|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|

| | | | | | |
|------|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|
| | | <p>常に心ゆたかな思い出を育てたいと思う方、手を挙げて下さい。…民族衛生学会というのには、永井潜先生の発議です。これは大事なことで。その大事なことを忘れていたり、知らない人は民族衛生学会なんてなくなってもいいから、名前を up To date の流行に便乗して名前を変えようというのには、大塚「気になることは『民族衛生』の民族は race だったということ…race…に対する社会的な認識は非常に微妙なので、使用に際しナイーブになった方がよい」。「民族衛生の英語訳が Health and Human Ecology ではない…将来的には日本語と英語との整合性のある形がいい」</p> | <p>1.Christian Pross/G. Aly 編『人間の価値—1918年から1945年までのドイツ医学—』林功三訳（風行社、原著1989年）</p> <p>1.姫岡とし子『近代ドイツの母性主義フェミニズム』（勁草書房）</p> <p>1.藤野豊『日本ファシズムと医療』（岩波書店）</p> | <p>5.低用量ピルの早期認可を求めて、日本産婦人科学会、日本母性保護医協、日本家族計画連盟、日本家族計画協会が厚相に要望書を提出</p> | <p>・京都、東京で「人間の価値展」開催：1989年ベルリン医師会の若手医師たちが開催した医学犯罪のパネル展示</p> |
| 1993 | | <p>5.(59-3 巻頭言)植松稔「諸民族の衛生」：『民族衛生』を『諸民族の衛生』と理解し、誌名変更については急がず…慎重に決定したい」</p> <p>7.(59-4 巻頭言)豊川祐之「『民族衛生』の名称を支持する」：「大井氏</p> | | | |

| | | | | | |
|------|--|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | <p>の巻頭論文は一連の学会名批判の決定版」大井氏を『民族』を正しく理解しようとはせず…『民族』に対する偏見」『民族衛生学会と同誌は現在 Human Ecology を重視しているが、いつの日にか重点が移って優生学、精神保健や民族学が中心になるかも知れない』</p> <p>11. 第 58 回学会で学術サロン『『民族衛生』の将来』開催：前回と参加者が大部分入れ替わり「現状のままではよろしい」「名前なんか気にしなくていい」「堂々とやっていたらいい」「去年の雰囲気を変えよう」に司会者「司会としてちよつとホッとしてい…ある方向に行きそうである」植松「日本語の名前はそのままにしておいて英文のほうで時々変える」河野(次期学会長)「名前の事は一応これで落着いたらいいこと」</p> | <p>5. 佐藤健生「ドイツの戦後補償に学ぶ(6)ドイツ医学の犠牲者への保証①」『法学セミナー』</p> <p>6. 佐藤健生「ドイツの戦後補償に学ぶ(7)ドイツ医学の犠牲者への保証②」『法学セミナー』</p> <p>7. 斉藤光「＜二〇年代・日本・優生学＞の一局面」『現代思想』</p> <p>9. Daniel J. Kevles『優生学の名のもとに「人類改良」の悪夢の百年』西俣総平訳(朝日新聞社、原著 1985 年) 鈴木善次「日本における優生思想・優生運動の軌跡」D. J. Kevles『優生学の名のもとに』(507-517)</p> <p>10. 河島幸夫『戦争・ナチズム・教会』(新教出版社)</p> | <p>12.3 障害者基本法公布(心身障害者対策基本法の改正による): 障害者のノーマライゼーションを推進</p> | <p>・鹿児島大学が着床前診断(体外受精の受精卵の遺伝子診断)を臨床実施しようとしたところ、優生思想の基づく障害者差別として障害者団体などから激しいクレーム→鹿児島大学は実施是非の検討を日本産科婦人科学会に委ねる</p> |
| 1994 | | <p>11. 第 59 回学会総会学術サロン『『民族衛生』で考えること』開催：「私は『民族衛生』が大好きです…映画『美</p> | <p>6. 三宅義子「近代日本女性史の再創造のために一テキストの読み替え」神奈川大学評論集専門委員会編『社会の発見』神奈川大学評論叢書 4 (御茶の水書房)</p> <p>6. 木畑和子「ナチズムと『医学の犯罪』」神奈川</p> | | <p>5.25 日母(日本母性保護医協会)が日本母性保護産婦人科医学会(以下日母と略す)と改称</p> |

| | | | | | |
|-------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | <p>の祭典』は素敵で忘れられませんか。『民族衛生』は世界の健康の規範を提出すべき保健所勤務者「民族衛生学会だと参加するのとの理解を得るのが難しい現状にある。立場、特徴を明確に、宣伝することを考えて」</p> | <p>大学評論集専門委員会編『医学と戦争』神奈川大学評論叢書5（御茶の水書房） 6.松永英「日本の優生政策—ナチス・ドイツとの比較」神奈川大学評論集専門委員会編『医学と戦争』神奈川大学評論叢書5（御茶の水書房） 6.米本昌平「優生学—日本とドイツの比較」神奈川大学評論集専門委員会編『医学と戦争』神奈川大学評論叢書5（御茶の水書房） 9.岡田靖雄「戦前合衆国に留学した精神学者たち(上)—松原三郎、芥藤玉男、石田昇ほか—」『日本医史学雑誌』 10.岩本美砂子「優生保護法をめぐる政治過程—1980年代の女性主体について」『法の科学』 12.岡田靖雄「戦前合衆国に留学した精神学者たち(下)—松原三郎、芥藤玉男、石田昇ほか—」『日本医史学雑誌』 12.荻野美穂『生殖の政治学 フェミニズムとバースコントロール』(山川出版社) 12.木畑和子『忘れられた犠牲者』との『出会い』の旅—ナチ時代の『安楽死』と断種・不妊手術—(特集：ドイツにみる戦争責任・戦後責任)『季刊 戦争責任研究』</p> | <p>5.19 精神保健法を精神保健及び精神障害者福祉に関する法律と改称（7月施行） 9.厚生省中央薬事審議会・配剤調査会は、「エイズとの関連性が薄い」とピル使用認可の方針を固める 12.厚生省障害者施策推進本部決定の「障害者プラン—ノーマライゼーション—七か年戦略」で、「障害者に対する差別や偏見</p> | <p>9.5~13 カイロで開催の国連国際人口・開発会議のNGO会議で、女性障害者安積遊歩が障害者の不妊化を正当化するものとして、優生保護法の実態を告発し、国際的注目を浴びる カイロ会議でリプロダクティブ・ヘルス/ライツ（性と生殖に関する健康・権利）が人口政策の柱として採用される 12.5 日本人類遺伝学会遺伝相談・出生前診断に関する委員会「遺伝カウンセリング・出生前診断に関するガイドライン」</p> |
| <p>1995</p> | <p>WHOのガイドライン二つの草案(ファイナルバージョンとサブファイナルバージョン)の存在：サブファイナルで優生学と遺伝学との危険な部分がファイナルで削除され、ファイナルでは優生学と関係が注意深く排除されている</p> | <p>11.(61-6 巻頭言)丸井英二(東大留學生センター)「学会の過去と将来を考えると学び、捨てるべきところは学び、捨てるべきところは捨てるという態度で臨むことが必要」</p> | <p>3.中村幸『婦人公論』誌上の産児調節記事を読んだら「近代女性文化史研究会編『婦人雑誌にみる大正期—婦人公論』を中心に」 4.鈴木裕子「母性・戦争・平和—『日本の母性』とフェミニズム」、姫岡とし子「女性蔑視と『母性礼賛』ナチの女性政策」加納実紀代編『母性フィクション—母なる自然の誘惑』(学陽書房) 6.鈴木善次、松原洋子他「展望：優生学史研究の動向Ⅲ—アメリカおよび日本の優生学に関する歴史研究—」『科学史研究』 7.小原英二『単一民族神話の起源—日本人の自画像の系譜』(新曜社) 8.小原和一郎『ナチもひとつの大罪—「安楽死」とドイツ精神医学』(人文書院)</p> | <p>9.15 第4回世界女性会議（北京会議）で、リプロダクティブ・ヘルス/ライツが、女性の性と生殖の自己決定の尊重のためのキーワードとして採られる。随胎罪の見直しが採られる 9.日本人類遺伝学会「遺伝性疾患の遺伝子診断に関するガイドライン」</p> | |

| | | | | | |
|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| 1996 | | <p>9. 木畑和子「ナチス『医学の犯罪』と過去の克服」『世界』</p> <p>10. 近藤和子「女と戦争—母性／家族／国家」『女と男の時空—日本女性史再考V』(藤原書店)</p> <p>11. 川越修『性に病む社会』(山川出版)</p> <p>12.16 毛利子来「優生保護法の廃止を望む」『朝日新聞』: 中絶はとりあえず母子保健法に移行する、との主張に運動内部で議論沸騰</p> | <p>を助長するような用語、資格制度における欠格条項の扱いの見直し」盛り込む→障害者施策と優生保護法に理念上の矛盾頭在</p> <p>12.7 自民党社会部会が優生保護法の優生条項に関する勉強会を開く: 優生条項が国連人権委員会に出されたら障害者差別と非難の対象になる。精神保健課が歴史・内容などを説明した資料には国民優生法から優生保護法になつた過程で「優生思想が強化」となっている</p> | <p>・世界保健機構(WHO)が遺伝医療に関するガイドライン草案『臨床遺伝学および遺伝サービスの提供における倫理的問題に関するガイドライン』(71年付刊「ジェン」)を提起: 優生学の定義を国家による強制に限定し「予防は優生学ではない」と宣言</p> | |
| | <p>1. 加藤博史『福祉の人間観の社会誌—優生思想と非行・精神病を通して—』(晃洋書房)</p> <p>2. 竹前栄治・中村隆英『GHQ 日本占領史 第4巻 人口』(日本図書センター)</p> <p>2. 市野川容孝『『種』から剥がれおちる性フロイトと優生学』『imago』</p> <p>5. 天笠啓祐『優生操作の悪夢—医療による生と死の支配(増補改訂版)』(社会評論社)</p> <p>8. H. G. Gallagher『ナチスドイツと障害者「安楽死」計画』(現代書館 原著1995)</p> <p>9. 市野川容孝「ナチズムの安楽死をどう理解すべきか—小侯和一郎氏への批判的コメント—」『imago』</p> | <p>3. 27 らい予防法廃止: 厚生大臣はハンセン病患者への「優生手術」を人権侵害と明言</p> <p>4.1 優生保護法の「痼疾患」に関する条文削除</p> <p>5.29 自民党社会部会、優生保護法改正案決定: 優生思想を排除し、法律名を母性保護法に変える案</p> <p>6.4 与党厚生調整会議に自民党案提出。社民党、さきがけの厚生部会で自民党社会部会長衛藤晟一議員が自民党案を説明</p> <p>6.5 自民党の森山真弓、南野知恵子、野田聖子議員が「優生保護法」改正を考えるネトワーク」に</p> | <p>・国際人類遺伝学会開催: WHO のガイドライン草案が配布されコメントを求められる</p> | | |

| | | | | |
|--|--|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | | <p>9. 小侯和一郎「安楽死と精神医学」『imago』</p> <p>9. 加藤秀一「女性の自己決定権の擁護—リプロダクティブ・フリーダムのために—」、市野川容孝「性と生殖をめぐる政治—あるドイツ現代史」、江原由美子「優生思想とフェミニズム—市野川川論文をめぐる—」、柘植あゆみ・市野川容孝・加藤秀一「附録『優生保護法』をめぐる最近の動向」江原由美子編『生殖技術とジェンダー』（勁草書房）</p> <p>12. 伊藤伸子、杉山滋郎「F. Galton における統計論と遺伝の問題」『科学史研究』</p> | <p>参加。自民党案に反対の態度表明</p> <p>6.12 女性議員中心に名称変更要望の署名(自民の森山、野田、社民の岡崎トミ子、千葉景子、さきがけの堂本暁子ら 34 名)を自民山崎拓政調会長に名称変更を申し入れ</p> <p>6.13 与党政調会長会議で名称「母体保護法」、付則なし、政調会議直属の「女性の健康の権利等のプロジェクト」作る等で合意</p> <p>6.14 衆議院厚生委員会に「優生保護法の一部を改正する法律案」が提案され、一切審議がなく可決。午後からの衆院本会議も審議なく拍手で可決</p> <p>6.17 参議院厚生委員会に同案が提案され審議なく10分で可決</p> <p>6.18 参議院本会議、7名の女性議員は退席。起立採択で着席1名で可決。母体保護法成立(審議も無くわずか5日間で)：「不良な子孫の出生を防止し」などの優生条項削除。審議なく優生的言説が削除され、問題の所在があいまいにされた</p> <p>6.26 優生保護法の一部を改正する法律が公布(3ヵ月後に施行)</p> |
|--|--|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

| | | | | | |
|------|--|--|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------|
| 1997 | | | <p>3. 藤目ゆき『性の歴史学』(不二出版)</p> <p>3. 松原洋子「明治末から大正期における社会問題と『遺伝』」『日本文化研究所紀要』 優生保護法</p> <p>4. 松原洋子「<文化国家>の優生法 優生保護法と国民優生法の断層」『現代思想』</p> <p>4. 松原洋子「民族優生保護法案と日本の優生法の系譜」『科学史研究』</p> <p>6. 石崎昇子「母性保護・優生思想をめぐって」(1994.9 脱稿)、『《エピソード》福島貞子と『母性』』『婦女新聞』を読む会編『「婦女新聞」と女性の近代』(不二出版)</p> <p>7. 小俣和一郎『精神医学とナチズム 裁かれるユング、ハイデガー』(講談社)</p> <p>8. 松原洋子「優生問題を考える(1) クロロン羊が意味するもの」『婦人通信』</p> <p>9. 松原洋子「優生問題を考える(2) 優生保護法の「消滅」」『婦人通信』</p> <p>9. 岡田靖雄「日本の精神病学における遺伝学的研究の歴史(その一)」『日本医学雑誌』</p> <p>9. 篠崎恵昭・清水寛「アジア・太平洋戦争下の優</p> | <p>7. 母体保護法は、これまで優生保護法を所轄の保健医療局精神保健課が大臣官房障害保健福祉部精神保健福祉課へ改組するため、児童家庭局母子保健課へ所轄が移管</p> <p>12. 内閣総理大臣を本部長とする男女共同参画推進本部が「男女共同参画二〇〇〇年プラン」で、女性の生涯にわたる健康対策と母子保健対策の機軸としてリプロダクティブ・ヘルス/ライツの概念を取り入れる</p> | 2. クロロン羊のドリー誕生 |
|------|--|--|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------|

| | | | | | |
|------|--|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1998 | | | <p>生政策と障害者問題【1】—第75回帝国議会衆議院優生法案委員会の『国民体力管理法案』審議の検討—」『埼玉大学紀要教育学部』</p> <p>10. 松原洋子「優生問題を考える(3) 障害者と優生保護法」『婦人通信』</p> <p>10. 加藤秀一「愛せよ、産めよ、より高き種族のために 一夫一婦制と人種改良の政治学」大庭健他編『共同態 シリーズ【性を問う】3』(専修大学出版局)</p> <p>11. 松原洋子「優生問題を考える(4) 国民優生法と優生保護法」『婦人通信』</p> <p>11. 江原由美子「生殖技術の可能性／不可能性錯綜するリプロダクション」『談』</p> <p>12. 松原洋子「優生問題を考える(5) 出生前診断と優生学」『婦人通信』</p> <p>12. 米本昌平「スウェーデン断種法とナチス神話の成立—戦後精神史から近未来への視程を求めて」『中央公論』:「日本のマスメディアのほとんどは…ナチス=優生社会=巨悪という図式を微塵も疑わず、この解釈の枠組みの理想ゲームとして、オーストリアでもやっていた、スイスでもノルウェーでもやっていたと、ことさらおどろおどろしく書きたてた…ほとんどスキャンダルと言ってよかった」</p> <p>12. 玉井真理子「世界保健機構(WHO)による遺伝医療に関するガイドラインと『優生学』」『信州大学医療技術短期大学部紀要』</p> | <p>中央薬事審議会常任部会で、「ピルは内分泌かく乱物質」との理由から承認反対の声があがり、内分泌かく乱物質とピルとの関係調査を提起(審議が再び後退)</p> | <p>北欧の強制不妊手術問題 : 民主主義国家、福祉国家の手本とされるスウェーデンなど北欧を中心に、戦前から1970年代まで、知的障害者などに対し強制的な不妊手術を行っていた問題が、世界に衝撃を与える (9.4『毎日新聞』「悲劇生んだ『純血保護』」米本昌平は当時これを「ほとんどスキャンダル」とみなす)</p> <p>12. 遺伝医学における倫理的諸問題に関するWHO会議で、ガイドラインが一致で採択</p> |
| 1998 | | <p>2. 高木雅史「優生学の歴史と障害者の生きる権利」『障害者問題研究』</p> <p>2. 松原洋子「戦時下の断種法論争 精神科医の国民優生法批判」『現代思想』</p> <p>2. 市野川容孝+立岩真也「障害者運動から見えてくるもの」『現代思想』</p> <p>3. 松原洋子『日本における優生政策の形成—国民優生法と優生保護法の成立過程の検討』(お茶の水女子大学人間文化研究科博士論文)</p> <p>3. 篠崎恵昭・清水寛「アジア・太平洋戦争下の</p> | <p>中央薬事審議会常任部会で、「ピルは内分泌かく乱物質」との理由から承認反対の声があがり、内分泌かく乱物質とピルとの関係調査を提起(審議が再び後退)</p> | <p>4.18『毎日新聞』「受精卵 遺伝子診断『優生思想を助長』障害者団体など承認の動き警戒」</p> | |

| | | | | |
|------|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | <p>優生政策と障害者問題[II]—第75回帝国議会議院優生法案委員会の『国民体力管理法』審議の検討—」『埼玉大学紀要教育学部』</p> <p>3.石崎昇子「近代日本の産児調節と国家政策」『総合女性史研究』</p> <p>3.上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』(青土社)</p> <p>3.大橋由香子「女からだへの国家管理と優生思想—墮胎罪・優生保護法への対抗論理を求めて—」近藤和子編著『性幻想を語る(近代を読みかえる第2巻)』(三一書房)</p> <p>4.松原洋子「中絶規制緩和と優生政策強化—優生保護法再考—」『思想』</p> <p>4.岡田靖雄「日本の精神病学における遺伝学的研究の歴史(その二)」『日本医学雑誌』</p> <p>4.藤野豊『日本フアンシズムと優生思想』(かもがわ出版)</p> <p>5.Lee M. Silver『複製されるヒト』東江一紀他訳(翔泳社 原著1997)</p> <p>7.Mark B. Adams 編『比較「優生学」史』佐藤雅彦訳(現代書館 原著1990)</p> <p>8.市野川容孝「戦時期日本の断種政策」『年報 科学・技術・社会』</p> | <p>優生政策と障害者問題[II]—第75回帝国議会議院優生法案委員会の『国民体力管理法』審議の検討—」『埼玉大学紀要教育学部』</p> <p>3.石崎昇子「近代日本の産児調節と国家政策」『総合女性史研究』</p> <p>3.上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』(青土社)</p> <p>3.大橋由香子「女からだへの国家管理と優生思想—墮胎罪・優生保護法への対抗論理を求めて—」近藤和子編著『性幻想を語る(近代を読みかえる第2巻)』(三一書房)</p> <p>4.松原洋子「中絶規制緩和と優生政策強化—優生保護法再考—」『思想』</p> <p>4.岡田靖雄「日本の精神病学における遺伝学的研究の歴史(その二)」『日本医学雑誌』</p> <p>4.藤野豊『日本フアンシズムと優生思想』(かもがわ出版)</p> <p>5.Lee M. Silver『複製されるヒト』東江一紀他訳(翔泳社 原著1997)</p> <p>7.Mark B. Adams 編『比較「優生学」史』佐藤雅彦訳(現代書館 原著1990)</p> <p>8.市野川容孝「戦時期日本の断種政策」『年報 科学・技術・社会』</p> | <p>4.21日母は、母体保護法への改正後、定款の「目的」の部分修正：「民族的の優生化を促進」を削除、「国民の繁栄を図る」を「国民の保健の向上に寄与」と修正(社団法人認可の1952年8月の定款に盛り込まれていたものの修正)</p> <p>6.日本産科婦人科学会は、理事会で、事前に個別審査することを条件に着床前診断実施承認を決定</p> <p>・米ベンチャー企業のセラ社がヒトゲノム解読を表明。国際チームの危機感強まる</p> |
| 1999 | | <p>3.藤目ゆき『性の歴史学』(不二出版)</p> <p>3.米本昌平「二十一世紀に遺伝をどう語るか」『中央公論』</p> <p>5.市野川容孝「福祉国家の優生学 スウェーデンの強制不妊手術と日本」『世界』</p> <p>・坂井律子『ルポルタージュ 出生前診断—生命誕生の現場で何が起きているのか?』(NHK出版)</p> <p>7.Ernst Klee『第三帝国と安楽死—生きるに値しない生命の抹殺』松下正明監訳(批評社 原著1983)</p> <p>8.Stefan Kühl『ナチ・コネクション アメリカ</p> | <p>6.2 中央薬事審議会常任部会で低用量ピルを承認</p> <p>6.16 厚生省は低用量ピル認可：94年カイロでの国際人口・開発会議で優生保護法とともに、国連加盟国で唯一ピル未認可が批判されていた</p> | <p>9.2 低用量ピル発売され、一般利用可能となる</p> |

| | | | | | |
|------|--|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2000 | | | <p>の優生学とナチ優生思想』麻生九美訳(明石書店原著 1994)</p> <p>9.岡田靖雄「金子準一—断種史上の人びと(その二)—」『日本医学雑誌』</p> <p>11.B. Appleyard『優生学の復活? 遺伝子中心主義の行方』山下篤子訳(毎日新聞社 原著 1998)</p> <p>・松原洋子「優生問題・人口政策編・解説」『性と生殖の人権問題資料集成』(不二出版)</p> <p>2.松原洋子「優生学」『現代思想』</p> <p>2.市野川容孝「社会的なものの概念と生命」『思想』</p> <p>3.松原洋子「優生学批判の枠組みの検討」『「健康」と「ジェンダー」』『ジェンダーと健康』研究プロジェクト報告書(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター)</p> <p>3.川越修「社会衛生学と優生学」『(同志社大学)経済学論叢』特別号</p> <p>4.石崎昇子「明治期の生殖をめぐる国家政策」『歴史評論』</p> <p>5.市野川容孝「福祉国家の優生学 スウェーデンの強制不妊手術と日本」『世界』</p> <p>7.米本昌平、松原洋子、棚島次郎、市野川容孝『優生学と人間社会 生命科学の世紀はどこへ向かうのか』(講談社現代新書)</p> <p>10.松原洋子「優生学の歴史と現在(特集現代社会と遺伝学)」『遺伝』</p> <p>11.松原洋子「優生学批判の枠組みの検討」原ひろ子他編著『健康とジェンダー』(明石書店)</p> <p>11.斎藤貴男『機会不平等』(文芸春秋社)</p> <p>11.S. Trambley『優生思想の歴史 生殖への権利』藤田真利子訳(明石書店 原著 1988)</p> <p>12.岡田靖雄「永井潜一—断種法上の人びと(その三)」『日本医学雑誌』</p> <p>12.ニ文字理明、椎木章『福祉国家の優生思想—スウェーデン発 強制不妊手術報道』世界人権叢書 88(明石書店)</p> | <p>2.参議院本会議の代表質問で、村上正邦議員が、少子化対策の国策化を追い風に、母体保護法から「経済的理由」削除すべきの持論を蒸しかえす。その背景は 1982 年と状況は似ている</p> | <p>・不二出版より『性と生殖の人権問題資料集成』全 35 巻刊行</p> <p>産児調節編 優生問題・人口政策編 性科学・性教育編</p> <p>3.日母は、母体保護法改正に向けた提言「女性の権利を配慮した母体保護法改正の問題点—多胎減数手術を含む」をまとめる。妊娠 12 週までの中絶については産む・産まないは女性の自己決定に委ねる立場をとる</p> |
|------|--|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

| | | | | |
|------|--|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| 2001 | | <p>2.松原洋子「生殖技術と新優生学」『わたちの21世紀』</p> <p>2.岡田英己子「わが国の優生運動史—戦前—」『戦前日本の優生運動と優生学研究の歴史—知的障害者問題の顕在化と優生思想の影響を考える—』(東京都立大学人文学部社会福祉学科岡田研究室)</p> <p>3.松原洋子「遺伝子操作が生む良い子・悪い子」『諸君!』</p> <p>4.荻野美穂『中絶論争と777社会』(岩波書店)</p> <p>5.藤野豊『「いのち」の近代史』(かもがわ出版)</p> <p>5.江原由美子、足立眞理子、松原洋子「討議 グローバリゼーションとフェミニズム」『現代思想』</p> <p>5.斉藤美穂「女性雑誌にみる優生思想の普及について—国民優生法成立にいたるまで—」『戦争と女性雑誌—1931年～1945年—』(ドメス出版)</p> <p>6.岡田靖雄「吉益脩夫—断種法をめぐる人びと(その四)—」『日本医学雑誌』</p> <p>6.荻野美穂『家族計画』への道—敗戦日本の再建と受胎調節—『思想』</p> <p>7.松原洋子「進化心理学・行動遺伝学と優生学史研究の架橋に向けて」『生物化学』</p> <p>11.森岡正博『生命学に何ができるか 脳死・フェミニズム・優生思想』(勤草書房)</p> <p>12.松原洋子「卵質移植と『遺伝子改変ベビー』」『生物学史研究』</p> | <p>1.省庁再編で、厚生省は厚生労働省へ</p> | <p>・国際チームとセセラ社がゲノム解説概要版をそれぞれ発表</p> <p>11月より日本母性保護産婦人科医会(日母)は日本産婦人科医会と改称</p> |
| 2002 | | <p>2.松原洋子「生体モデルと人体の部品化」『現代思想』</p> <p>2.立岩真也「生存の争い 医療の現代史のために・1」『現代思想』</p> <p>2.米田佐代子「平塚らいてう—近代日本のデモクラシーとジェンダー—」(吉川弘文館)</p> <p>3.中村満紀男『20世紀優生学が障害者の生存・生活・教育に及ぼした影響に関する総合的研究』(平成11～13年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1))</p> | | |

| | | | | | |
|------|--|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------|--|
| | | | <p>3.市野川容孝「黄禍論と優生学—第一次大戦前後のバイオポリテイクス—」『編成されるナショナリズム』岩波講座 近代日本の文化史5</p> <p>4.内井惣七「科学の倫理学」『丸善』</p> <p>6.岡田靖雄「断種法史上の人のびと(その五)—三宅歎—」『日本医学雑誌』</p> <p>夏.松原洋子「科学史入門 優生保護法の歴史像の再検討」『科学史研究』</p> <p>8.松原洋子「優生学」、「遺伝子診断と遺伝子治療」、石井美智子「中絶の権利」市野川容孝編『生命倫理とは何か』(平凡社)</p> <p>9.斎藤有紀子編著『母体保護法とわたしたち—中絶・多胎減数・不妊手術をめぐる制度と社会』(明石書店)</p> <p>10.松原洋子「優生学の歴史」廣野喜幸他編『生命科学の近現代史』(勁草書房)</p> <p>10.中西喜久司『ナチス・ドイツと聴覚障害者—断種と「安楽死」政策を検証する—』(文理閣)</p> <p>10.小熊英二『<民主>と<愛国>戦後日本のナショナリズムと公共性』(新曜社)</p> <p>12.姫岡とし子「女性・ジェンダーの近代」歴史学研究会編『歴史学における方法的転回』(青木書店)</p> | <p>4.14 ヒトゲノム解読完了が宣言される</p> | |
| 2003 | | | <p>5.日本精神神経学会百年史編集委員会編『日本指針神経学会百年史』(日本精神神経学会)</p> <p>6.岡田靖雄「断種法をめぐる人のびと(その六)—成田勝郎・付 菊地甚—」『日本医学雑誌』</p> <p>7.金森修「リベラル新優生学と設計的生命観」『現代思想』</p> <p>9.優生手術に対する謝罪を求める会編『優生保護法が犯した罪—子どもをもつことを奪われた人々の証言』(現代書館) 松原洋子「日本の優生法の歴史」、小俣和一郎「日本の精神医療と優生思想—日本精神医学史の再検討を含めて」、市野川容孝「ドイツはどう向き合ってきたのか—ナチスの強制不妊手術・安楽死計画被害者に対する</p> | <p>4.14 ヒトゲノム解読完了が宣言される</p> | |

| | | | | | |
|------|--|--|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | | <p>る戦後補償」</p> <p>9.折井美耶子・篠宮英美・清水和美・永原紀子他『女性解放運動のさきがけ 新婦人協会の研究—特集・花柳病男子結婚制限法制定の運動』(女性の歴史研究会)</p> <p>11.荻野美穂「反転した国策—家族計画運動の展開と帰結—」『思想』</p> | | |
| 2004 | | | <p>1. 「ナチズムと近代」再考『歴史評論』</p> <p>2. 鈴木智さと「国民優生法制定課程における家族言説」『社会政策研究』</p> <p>2. 中村満紀男編著『優生学と障害者』(明石書店)</p> <p>3. 姫岡とし子『ジェンダー化する社会 労働とアイデンティティの日独比較』(青木書店)</p> <p>6. 岡田靖雄「斎藤茂吉・ほか—断種法史上の人物と(その七)」『日本医史学雑誌』</p> <p>8. 加藤秀一『<恋愛結婚>は何をもたらしたか—性道徳と優生思想の百年間』(ちくま新書)</p> <p>・ 吉川豊子「産めよ殖ませよ/産児調節運動から国民優生法へ—母性の奨励と優生思想」『女性の戦争責任』(東京堂出版)</p> <p>・ 川越修『社会国家の生成—20世紀社会とナチズム—』(岩波書店)</p> <p>11. 市野川容孝『社会的なものと医療』『現代思想』</p> <p>11. J. Habermas 『人間の将来とバイオエシックス』三島憲一訳 (法政大学出版局 原著 2001)</p> | <p>10. 国際チームのヒトゲノム完全解読の最終論文がNature誌に発表され、ヒトの遺伝子は2万2千個</p> | <p>12.20『東京新聞』「染色体異常、神経疾患、白血病…わが子の治療拒む親」:厚生労働省研究班の調査で、病気の子どもにも必要な治療を医師が提案して、親の「治療拒否」を経験した小児系病院は昨年1年間で18%に上る。</p> <p>病名:染色体異常に伴う内臓奇形、水頭症など神経疾患、脳障害等で、ゼロ歳児が58%占める</p> |
| 2005 | | | <p>3. 岡田英己子「平塚らいてうの母性主義フェミニズムと優生思想—『性と生殖の国家管理』断種法要求はいつ加筆されたのか」東京都立大学『人文学報』</p> <p>3. ハンセン病問題に関する検証会議編『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』((財)日弁連法務研究財団)</p> <p>2. 三成美保『ジェンダーの法史学—近代ドイツの家族とセクシュアリティ—』(勁草書房)</p> <p>5. 平田勝政『日本における優生学の障害者教育・福祉への影響とその克服課程に関する研究』(平</p> | <p>・ チンパンジーゲノムが解読され、ヒトとの違いが明らかになる</p> | <p>・ 野田聖子衆議院議員が自らの不妊治療と流産の体験を率直に告白した著書『私は産みたい』を発表</p> |

| | | | | | |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|--|
| | | | <p>成 14 年～16 年科学研究費補助金基礎研究(C)(2)</p> <p>10.清水馨八郎「少子化対策の決め手は『優生保護法』の廃止だ。大和民族が絶滅の危機から脱出するための処方箋」『月刊日本』</p> <p>11.荻野美穂「障害を理由とした中絶とフェミニズム—アメリカの場合、日本の場合—『思想』」</p> | | |
| 2006 | | | <p>5.永原紀子「花柳病男子結婚制限法制定の請願運動とその本質」折井美耶子・女性の歴史研究会編著『新婦人協会の研究』(ドメス出版)</p> <p>6.米本昌平『バイオポリティクス』中公新書</p> <p>9.岡田英己子「優生学と障害の歴史研究の動向—ドイツ・ドイツ語圏と日本との国際比較の視点から—」『特殊教育学研究』</p> <p>10.広瀬玲子「平塚らいてうの思想形成—エレン・ケイ思想の受容をめぐる本間久雄との違い—」『ジェンダー史学』</p> | | |
| 2007 | <p>日本民族衛生学会のホームページによると、学会名、学会誌名は英名、日本名ともに変更なく継続。学会事務局は順天堂大学医学部公衆衛生学教室内。学会誌編集事務局は杏林大学医学部衛生学公衆衛生学教室内。学会について：「本学会は、昭和5年(1930)、永井潜(生理学)らによって創設され、その目的は所謂、社会・文化的背景を考慮した医学研究及び社会啓発を目的とする当時としては先覚的な理念に基づいている……なお、創立当時の世界情</p> | <p>3.石崎昇子「日本近代の家族と生殖—一九一〇年代～一九五〇年代—」『総合女性史研究』</p> <p>3.加藤秀一「性教育弾圧者が真に恐れているものは何か。最高の、それゆえ最も危険な政治とは」『論座』</p> <p>3.東京大学精神医学教室 120 年編集委員会編『東京大学精神医学教室 120 年』</p> <p>4.水田珠枝「平塚らいてうの神秘主義(上)—成瀬仁蔵・ドイツ観念論・禅との関連で—」『思想』</p> <p>5.水田珠枝「平塚らいてうの神秘主義(下)—成瀬仁蔵・ドイツ観念論・禅との関連で—」『思想』</p> <p>6.小畑清剛『近代日本とマイノリティのくせ—政治学—』(シユミット・フーコー・アガンベンを中心に読む—)』(ナカニシヤ出版)</p> | <p>1.27 柳沢厚生労働大臣、松江市での自民党県議後援会集会で、「女性はずどもを産む機械」発言</p> | | |

| | | | | | |
|--|--|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|--|
| | | <p>勢によって本学会が民族主義的優生学の学会と誤解されることがあったが、当時、圧倒的に優勢だった要素還元主義・人体機械論及び決定論的パラダイムから距離を保ち、包括主義・人体有機体論及び確率論的パラダイムを志向する学会であり続けている。学会誌については「本誌『民族衛生』は、人間の生態学的理解を深め、生物と民族の持つ豊かな多様なありかたを考えつつ、現代の人間社会の健康な姿を模索しようとしているものです」としている</p> | <p>9. 平田勝政「1930年代の地方優生運動と障害者・病者の人権(第1報)―1931年夏のジョンソンによる全国優生学講演の地方への影響の検討を中心に―」『日本特殊教育学会第45回大会発表論文集』</p> | | |
|--|--|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|--|

※民族衛生学会内部の論争は、戦後優生思想の読みかえと隠蔽・忘却を代表する事例。同学会は人類遺伝学の研究知見を防波堤のごとく活用。

Ⅲ—3 文献リスト

(1) 雑誌

| No. | 著者名 | 論文・資料名 | 誌名・巻号 | 頁 | 発行年月 |
|-----|--------|------------------------------|----------------|-------|----------------------|
| 1 | 芦田 均 | 新時代の厚生行政 | 日本医事新報 1175 | 2 | 1946. 1. 1 |
| 2 | 記 事 | 人口問題懇談会開催 | 日本医事新報 1178 | 10 | 1946. 2. 15 |
| 3 | 久慈直太郎 | 産児制限説の台頭と国民優 生法の再検討 | 産科と婦人科 13-4 | 7-10 | 1946. 5 |
| 4 | 九嶋勝司 | 人工妊娠中絶適応症及優生 法の再吟味 | 産科と婦人科 13-4 | 10-11 | 1946. 5 |
| 5 | 瀬木三雄 | 母子保健問題の今日と明日 | 産科と婦人科 13-9・10 | 11-15 | 1946. 10 |
| 6 | 安藤晝一 | 死産の届出制及び国民優生 法第十六条に就きての通牒 | 産科と婦人科 13-9・10 | 16-21 | 1946. 10 |
| 7 | 「新報」 | 人口政策委員会建議案 | 日本医事新報 1203 | 10 | 1946. 11. 21 |
| 8 | 永井 潜 | 巻頭言 | 民族衛生 13-2, 3 | | 1946. 12 |
| 9 | 古屋芳雄 | 淘汰による民族変質の速度 | 民族衛生 13-4 | | 1947. 3 |
| 10 | 舘 稔 | 人口問題の現状と対策 | 季刊大学 秋季特大号 3・4 | 28-35 | 1947. 10 |
| 11 | 谷口弥三郎 | 優生保護法解説 | 日本医師会雑誌 22-6・7 | 31-35 | 1948. 7・8 (1948a) |
| 12 | 安倍厚生技官 | 優生保護法について | 日本医事新報 1270 | 17-18 | 1948. 8. 28 |
| 13 | 平塚らいてう | わたくしの夢は実現したか | 女性改造 | 2-9 | 1948. 10 |
| 14 | 平塚らいてう | 民族の未来のために | 女性改造 | 7-12 | 1949. 4 |
| 15 | 永井 潜 | 近時公布の二つの重要法律 について | 厚生時報 4-1 | 24-25 | 1949. 1 |
| 16 | 吉益脩夫 | 優生学から見た優生保護法 | 法律のひろば 2-5 | 20-21 | 1949. 5 |
| 17 | 穴山徳夫 | 妊娠中絶と産児制限 —優生 保護法の二つの論点 | 法律のひろば 2-5 | 21-23 | 1949. 5 |
| 18 | 中原武夫 | 改正された優生保護法 | 法律のひろば 2-7 | 31-34 | 1949. 7 |
| 19 | 森下春一 | 産児制限と資本攻勢 | 法律のひろば 2-8 | 32-33 | 1949. 8 |
| 20 | 大河内一男 | 社会の動きと人口問題 | 婦人の世紀 10 | 2-7 | 1949. 8 |
| 21 | 古屋芳雄 | 優生問題としての人口問題 | 婦人の世紀 10 | 8-17 | 1949. 8 |
| 22 | 美濃口時次郎 | 過剰人口について —今日の 人口問題— | 婦人の世紀 10 | 18-26 | 1949. 8 |
| 23 | 舘 稔 | 日本人口の変遷 | 婦人の世紀 10 | 27-38 | 1949. 8 |
| 24 | 近藤宏二 | 結婚と優生 | 婦人の世紀 10 | 39-43 | 1949. 8 |
| 25 | 木田文夫 | 産児調節と遺伝環境の問題 | 婦人の世紀 10 | 44-51 | 1949. 8 |

| | | | | | |
|----|-------------------------------------|------------------------------|---------------------|---------|----------|
| 26 | 瀬木三雄 | 母の健康から見た産児制限 | 婦人の世紀 10 | 70-80 | 1949. 8 |
| 27 | 中原武夫 | 産児制限と法律 | 婦人の世紀 10 | 139-144 | 1949. 8 |
| 28 | 「綜説」 | 人口問題審議会の人口調節 に関する建議 | 民族衛生 17-1 | 1-6 | 1950. 3 |
| 29 | 吉益脩夫 | アルコールと民族衛生 | 民族衛生 17-2 | 45-54 | 1950. 6 |
| 30 | 岡本春一 | フランシス・ゴルトン (一) -近代心理学史補註- | 岡山大学法文学部学術 紀要 4 | 137-158 | 1955. 3 |
| 31 | 国井長次郎 | 家族計画大会の記 | 厚生 | 20-21 | 1958. 1 |
| 32 | 岡本春一 | フランシス・ゴルトン (二) -近代心理学史補註- | 岡山大学法文学部学術 紀要 9 | 92-113 | 1958. 1 |
| 33 | 岡本春一 | フランシス・ゴルトン (三) -近代心理学史補註- | 岡山大学法文学部学術 紀要 13 | 27-43 | 1960. 5 |
| 34 | 谷口弥三郎 | 如何にすれば民族優生を達 し得るか (特別講演) | 民族衛生 26-6 | 27-29 | 1960. 11 |
| 35 | 福田邦三 | 日本民族素質向上の悲願 (公 開講演) | 民族衛生 26-6 | 84-91 | 1960. 11 |
| 36 | 石垣純二 | 優生保護法批判 | 婦人公論 46-9 | 240-246 | 1961. 7 |
| 37 | 平塚らいてう | 鷗外先生について | 文学散歩 15 | 6-7 | 1962. 10 |
| 38 | 橋本周三 | 優生保護法の変遷 | 厚生 の指標 9-14 | 28-30 | 1962. 11 |
| 39 | 岡本春一 | フランシス・ゴルトン (四) -近代心理学史補註- | 岡山大学法文学部学術 紀要 16 | 47-70 | 1963. 1 |
| 40 | 記 事 | 古屋芳雄先生に聞く | 公衆衛生 27-1 | 25-33 | 1963. 1 |
| 41 | 石川達三、小 林提樹、戸川 エマ、仁木悦 子、水上勉 | 奇形児は殺されるべきか (誌 上裁判) | 婦人公論 48-3 | 124-131 | 1963. 2 |
| 42 | 水上 勉 | 拝啓池田総理大臣殿 | 中央公論 78-6 | 124-134 | 1963. 6 |
| 43 | 黒金泰美 | 拝復水上勉様 | 中央公論 78-7 | 84-89 | 1963. 7 |
| 44 | 石原房雄 | 民族衛生創立時の追憶 | 民族衛生 30-1 | 1-2 | 1964. 1 |
| 45 | 柳沢文徳 | 日本民族衛生学会雑誌「民族 衛生」の動向 | 民族衛生 30-1 | 3-12 | 1964. 1 |
| 46 | 小川 節 | 優生保護法の問題点について | 民族衛生 30-1 | 13-26 | 1964. 1 |
| 47 | 平塚らいてう | 自我の確立への闘い | 婦人公論 | 67-69 | 1965. 11 |
| 48 | 村松博雄 | 優生保護法を改悪させるな | 婦人公論 | 140-145 | 1970. 6 |
| 49 | 高杉晋吾 | 増殖する福祉ゲッター | 現代の眼 11-7 | 162-171 | 1970. 7 |

| | | | | | |
|----|-------------------|-------------------------------------------------|-------------------|---------|-------------------------|
| | | | | | (1970a) |
| 50 | 高杉晋吾 | 医療管理社会への挑戦 | 現代の眼 11-10 | 180-189 | 1970. 10 (1970b) |
| 51 | 高杉晋吾 | 精神病棟E F 2の反乱 | 月刊労働問題 151 | 107-114 | 1970. 11 (1970c) |
| 52 | 高杉晋吾 | 安楽死と強制収容所 —巨大身 障者コロニー建設の思想基盤— | 朝日ジャーナル 13 — 5 | 39-44 | 1971. 2. 5 (1971a) |
| 53 | 高杉晋吾 | 拝啓「殺人施設」[重身障者 医療施設] 殿 | 現代の眼 12-3 | 172-181 | 1971. 3 (1971b) |
| 54 | 高杉晋吾 | 内村祐之/患者を材料に脳支 配めざす名誉亡者 | 現代の眼 12-6 | 234-241 | 1971. 6 (1971c) |
| 55 | 高杉晋吾 | 保安処分を招くもの 研究 至上主義と権力追隨の医療 | 新日本文学 291 | 115-131 | 1971. 10 (1971d) |
| 56 | 高杉晋吾 | 町をゆるがした「ひとり歩き」 —ドキュメント映画「さよなら CP」が告発するもの— | 朝日ジャーナ ル 14-20 | 31-35 | 1972. 5. 19 (1972a) |
| 57 | 「文化ジャー ナル」「保健」 | 不純な中絶禁止の動き —優 生保護法改正に監視を— | 朝日ジャーナル 14— 25 | 79 | 1972. 6. 23 |
| 58 | 高杉晋吾 | 避けて通った戦争責任 —学術 会議総会・要望書流産の背景 | 朝日ジャーナル 14— 46 | 107-111 | 1972. 11. 10 (1972b) |
| 59 | 高杉晋吾 | 優しい実験者たち —脳研究 と精神障害者の悲惨— | 展望 170 | 137-149 | 1973. 2 |
| 60 | 野田正彰 | 偏見に加担する教科書と法 —精神科医は訴える— | 朝日ジャーナル 15-6 | 87-92 | 1973. 2. 16 |
| 61 | 「時の動き」 | “宗教票”への義理で動く妊娠 中絶引締め優生保護法改正案 | 朝日ジャーナル 15— 20 | 106-108 | 1973. 5. 25 |
| 62 | 「時の動き」 | 世界の潮流に逆らう時代錯 誤 ゴリ押しのあと腰砕け の優生保護法改正 | 朝日ジャーナル 16— 22 | 95-96 | 1974. 6. 7 |
| 63 | 川上 武 | 現代の「生」と「死」 | 朝日ジャーナル 16— 30 | 18-21 | 1974. 8. 2 |
| 64 | 記事 | 優生保護法改正案 生長の家 国会再提出へ猛運動 | 日母 医報 297 | 2 | 1975. 2. 1 |
| 65 | 記事 | 日母 50 年度事業紹介 | 日母 医報 300 | 6-7 | 1975. 5. 1 |
| 66 | 記事 | 医報にみる 25 年のあゆみ | 日母 医報 300 | 12-16 | 1975. 5. 1 |

| | | | | | |
|----|--------------|----------------------------------------------|-------------------------|---------|--------------|
| 67 | 村松常雄 | 日本の精神医学100年を築いた人々⑤ 三宅鉦一 | 臨床精神医学 8-3 | 55-61 | 1979. 3 |
| 68 | 鈴木善次 | 日本における優生学運動の側面 —池田林儀の「優生運動」を中心に | 科学史研究 [第Ⅱ期] 18 (130) | 65-73 | 1979. 7 |
| 69 | 中田 修 | 日本の精神医学100年を築いた人々⑩ 吉益脩夫 | 臨床精神医学 8-8 | 81-92 | 1979. 8 |
| 70 | 中村桂子 米本昌平 | 現代社会と遺伝学 —第二段階に入る遺伝操作論争 | 世界 412 | 225-238 | 1980. 3 |
| 71 | 廣嶋清志 | 現代日本人口政策史小論 —人口資質概念をめぐる(1916-1930) — | 人口問題研究 154 | 46-61 | 1980. 4 |
| 72 | 記事 | 1カ月の医療費 1500万円の「生活保護家庭」大西巨人家の「神聖悲劇」 | 週刊新潮 1271 | 156-159 | 1980. 9. 18 |
| 73 | 渡辺昇一 | 神聖な義務 | 週刊文春 22-40 | 134-135 | 1980. 10. 2 |
| 74 | 廣嶋清志 | 現代日本人口政策史小論(2) —国民優生法における人口の質政策と量政策— | 人口問題研究 160 | 61-76 | 1981. 10 |
| 75 | 米本昌平 | 優生思想から人種政策へ —ドイツ社会ダーウィニズムの変質 | 思想 688 | 65-74 | 1981. 10 |
| 76 | 太田典礼 | よたよたの人口対策 | 世界と人口 99 | 2-3 | 1982. 2 |
| 77 | 篠崎信男 | 終戦直後の人口問題事情 | 世界と人口 103 | 66-68 | 1982. 7 |
| 78 | 石井美智子 | 優生保護法による墮胎合法化の問題点 | 社会科学研究 34-4 | 113-173 | 1982. 11 |
| 79 | (勝) | 優生保護法「改正」を阻止せよ 戦争準備のための「性」の管理 | 朝日ジャーナル 24-48 | 113-114 | 1982. 11. 26 |
| 80 | 松本恵美子 | 女たちの手で優生保護法の改悪を阻止しよう | あごら 27 | 68-69 | 1982. 12 |
| 81 | 丸本百合子 | 優生保護法「改正」に疑義あり 「中絶の自由」を求める悲しみ | 朝日ジャーナル 25-8 | 98-101 | 1983. 2. 25 |
| 82 | 柴谷篤弘 | 公開質問状 優生保護法「改正」に疑義あり 法的・社会的論議 優先で無視される生物学的事実 | 朝日ジャーナル 25-8 | 101-103 | 1983. 2. 25 |
| 83 | 早川紀代 | 戦時体制・優生思想・人口政策 —「優生保護法」改正の | 歴史評論 396 | 67-71 | 1983. 4 |

| | | | | | |
|-----|--------------------|------------------------------------|--------------------|-----------|------------------------|
| | | 動きをめぐって一 | | | |
| 84 | 米本昌平 | 「優生断種」問題とアメリカの教訓 | 朝日ジャーナル 25-18 | 82 | 1983. 4. 29 (1983a) |
| 85 | 斉藤千代 | 見えない<道> 一優生保護法の系譜をたずねて 見たこと、考えたこと一 | あごら 28 | 4-73 | 1983. 6 |
| 86 | ドクトル・チエコ (本名・木下和子) | 女の戦後史⑬ 妊娠中絶命をかけて得た「産まない自由」 | 朝日ジャーナル 25-2 | 32-37 | 1983. 6. 17 |
| 87 | 米本昌平 | 優生保護法と優生思想を考える 『あごら』28号 | 朝日ジャーナル 25-42 | 83 | 1983. 10. 7 (1983b) |
| 88 | 浅賀昭雄 (監) | よい血を残したい! 結婚する前のコモンセンス | ヴァンサンカン 44 | 175-181 | 1984. 1 |
| 89 | 台 弘 | 日本の精神医学 100 年を築いた人々/第3部 第7回 内村祐之 | 臨床精神医学 13-10 | 1259-1265 | 1984. 10 |
| 90 | 米本昌平 | 優生学史研究の現代的視点 | 歴史と社会 4 | 133-155 | 1984. 6 |
| 91 | 鈴木善次 | 日本の優生学にかかわった海野幸徳 | 生物学史研究 45 | 29-33 | 1985. 4 |
| 92 | 森 毅 | 悪としての科学 | 思想の科学 62 | 2-7 | 1985. 5 |
| 93 | 中山 茂 | 科学—このおぞましきもの | 思想の科学 62 | 8-13 | 1985. 5 |
| 94 | 米本昌平 | ナチズムのコスモロジー | 思想の科学 62 | 14-19 | 1985. 5 |
| 95 | いいだもも | 科学する心のファシズム | 思想の科学 62 | 20-25 | 1985. 5 |
| 96 | 吉田 忠 | アメリカの優生政策 | 思想の科学 62 | 42-52 | 1985. 5 |
| 97 | 藤目ゆき | 戦間期日本の産児調節運動とその思想 | 歴史評論 430 | 79-100 | 1986. 2 |
| 98 | 苧阪良二 | 書評: 岡本春一著「フランシス・ゴールトンの研究」 | 基礎心理学研究 5-2 | 86 | 1987. 3 |
| 99 | 大林道子 | 産児調節運動と優生思想 | 日本婦人問題懇話会会報 46 | 2-10 | 1987. 8 |
| 100 | 山田 真 | 内なる優生思想を討つために | 日本婦人問題懇話会会報 46 | 21-26 | 1987. 8 |
| 101 | 木畑和子 | 第三帝国と<安楽死>問題—いわゆる<中止>まで— | 東洋英和女学院短期大学研究紀要 26 | 21-37 | 1988. 1 |
| 102 | 野間伸次 | 「健全」なる大日本帝国—国民優生法制定をめぐって— | ヒストリア 120 | 43-65 | 1988. 9 |

| | | | | | |
|-----|-----------------|------------------------------------------------------|-----------------------|----------------|---------------------------------|
| 103 | 宮澤浩一 | 「安楽死事件」と西ドイツ刑事司法 — ナチス犯罪追求と過去の清算 — | 世界 521 | 171-184 | 1988. 11 |
| 104 | 高木雅史 | 「大正デモクラシー」期における「優生論」の展開と教育 — 教育雑誌の内容分析の視角から — | 名古屋大学教育学部紀要 (教育学科) 36 | 167-177 | (1989年度) 1990. 3 |
| 105 | 松原洋子 | 優生学とセクシュアリティ | 生物学史研究 53 | 33-40 | 1990. 12 |
| 106 | 斉藤 光 | 優生学史研究覚え書き 三つの視点 | 京都精華大学紀要 1 | 294-308 | 1991. 5 |
| 107 | 古久保さくら | らいてうの「母性主義」を読む — 母性を基軸にしたフェミニズム再考のために — | 女性学年報 12 | 75-83 | 1991. 10 |
| 108 | 加藤秀一 | 生殖する権力 ジェンダー・主体・新しい優生学 | 現代思想 20-1 | 69-79 | 1992. 1 |
| 109 | 鈴木善次、松原洋子、坂野徹 | 展望：優生学史研究の動向 (I) イギリス優生学史研究 (松原洋子) | 科学史研究 II 30 (180) | 225-233 | (1991. 冬) 1992. 2 (1992a) |
| 110 | 高木雅史 | 1920~30年代における優生学的能力観 — 永井潜および日本民族衛生学会 (協会) の見解を中心に — | 名古屋大学教育学部紀要 (教育学科) 38 | 161-170 | (1991年度) 1992. 3 |
| 111 | 石崎昇子 | 生殖の自由と産児調節運動 — 平塚らいてうと山本宣治 — | 歴史評論 503 | 92-107 | 1992. 3 |
| 112 | 岡田靖雄 | 断種法問題 — その広がりを見取り図 — | 日本医史学雑誌 1466 38-2 | 122-123 | 1992. 4 |
| 113 | 鈴木善次、松原洋子、坂野徹 | 展望：優生学史研究の動向 (II) ドイツ民族衛生学史研究 (坂野徹) | 科学史研究 II 31 (182) | 65-70 | 1992. 6 (1992b) |
| 114 | 鈴木貞美 | 一九一〇年代の思想と「生命」の氾濫 | 文芸 31-3 秋季号 | 245-253 | 1992. 8 |
| 115 | 鈴木貞美他 <共同討議> | 一九一〇年代思潮を読み直す | 文芸 31-3 秋季号 | 254-295 | 1992. 8 |
| 116 | 木畑和子 | 第三帝国の「健康」政策 | 歴史学研究 640 | 1-9, 58 | 1992. 12 |
| 117 | 佐藤健生 | ドイツの戦後補償に学ぶ (6) / (7) ナチス医学の犠牲者 | 法学セミナー 461/462 | 18-22 44-48 | 1993. 5 1993. 6 |

| | | | | | |
|-----|-----------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|-----------------|--------------------|
| | | への補償①/② | | | |
| 118 | 斉藤 光 | <二〇年代・日本・優生学> の一局面 | 現代思想 21-7 | 128-139 | 1993.7 |
| 119 | 岡田靖雄 | 戦前合衆国に留学した精神 病学者たち(上) —松原三郎、 斉藤玉男、石田昇ほか— | 日本医史学雑誌 1475 40-3 | 3-27 | 1994.9 (1994a) |
| 120 | 岩本美砂子 | 優生保護法をめぐる政治過程— 1980年代の女性主体について | 法の科学 22 | 166-174 | 1994.10 |
| 121 | 岡田靖雄 | 戦前合衆国に留学した精神 病学者たち(下) —松原三郎、 斉藤玉男、石田昇ほか— | 日本医史学雑誌 1476 40-4 | 17-37 | 1994.12 (1994b) |
| 122 | 木畑和子 | 「忘れられた犠牲者」との 「出会い」の旅 —ナチ時代 の「安楽死」と断種・不妊手 術— | 戦争責任研究 6 冬季号 【特集】ドイツにみる戦 争責任・戦後責任 | 51-55 | 1994.12 |
| 123 | 鈴木善次、松 原洋子、坂野 徹 | 展望：優生学史研究の動向 (Ⅲ) —アメリカおよび日本の 優生学に関する歴史研究— アメリカの優生学史研究の動向 (鈴木善次) 日本の優生学史研 究の動向 (松原洋子) | 科学史研究 II 34 (194) | 97-106 | 1995.6 |
| 124 | 木畑和子 | ナチス「医学の犯罪」と過去 の克服 | 世界 613 | 280-286 | 1995.9 |
| 125 | 市野川容孝 | 「種」から剥がれおちる性 フロイトと優生学 | imago 7-3 | 216-232 | 1996.2 (1996a) |
| 126 | 市野川容孝 | ナチズムの安楽死をどう< 理解>すべきか —小俣和一 郎氏への批判的コメント— | Imago 7-10 | 7-11 145-150 | 1996.9 (1996b) |
| 127 | 小俣和一郎 | 安楽死と精神医学 | Imago 7-10 | 160-174 | 1996.9 |
| 128 | 伊藤伸子 杉山滋郎 | F. Galton における統計理論 と遺伝の問題 | 科学史研究 II 35 (200) | 251-259 | 1996.12 |
| 129 | 松原洋子 | 明治末から大正期における 社会問題と「遺伝」 | 日本文化研究所紀要 3 | 155-169 | 1997.3 (1997a) |
| 130 | 松原洋子 | 民族優生保護法案と日本の 優生法の系譜 | 科学史研究 II 36 (201) | 42-50 | 1997.3 (1997b) |
| 131 | 松原洋子 | <文化国家>の優生法 優生保 | 現代思想 25-4 | 8-21 | 1997.4 |

| | | | | | |
|-----|------------|-----------------------------------------------------------------|------------------------|---------|-----------------------------|
| | | 護法と国民優生法の断層 | | | (1997c) |
| 132 | 松原洋子 | 優生問題を考える クローン羊が意味するもの (1) | 婦人通信 463 | 36-38 | 1997. 8 (1997d) |
| 133 | 岡田靖雄 | 日本の精神病学における遺伝学的研究の歴史 (その一) | 日本医史学雑誌 1487 43-3 | 56-57 | 1997. 9 |
| 134 | 松原洋子 | 優生問題を考える (2) 優生保護法の「消滅」 | 婦人通信 464 | 38-39 | 1997. 9 (1997e) |
| 135 | 篠崎恵昭、清水寛 | アジア・太平洋戦争下の優生政策と障害者問題 [I] ー第 75 回帝国議会衆議院優生法案委員会の「国民体力管理法」審議の検討ー | 埼玉大学紀要教育学部 46-2 | 29-49 | 1997. 9 |
| 136 | 松原洋子 | 優生問題を考える (3) 障害者と優生保護法 | 婦人通信 465 | 42-43 | 1997. 10 (1997f) |
| 137 | 松原洋子 | 優生問題を考える (4) 国民優生法と優生保護法 | 婦人通信 466 | 42-43 | 1997. 11 (1997g) |
| 138 | 江原由美子 | 生殖技術の可能性/不可能性 錯綜するリプロダクション | 談 57 | 14-25 | 1997. 11 |
| 139 | 松原洋子 | 優生問題を考える (5) 出生前診断と優生学 | 婦人通信 467 | 42-43 | 1997. 12 (1997h) |
| 140 | 米本昌平 | スウェーデン断種法とナチス神話の成立 ー戦後精神史から近未来への視程を求めて | 中央公論 112-14 | 142-150 | 1997. 12 |
| 141 | 玉井真理子 | 世界保健機関 (WHO) による遺伝医療に関するガイドラインと「優生学」 | 信州大学医療技術短期 大学部紀要 23 | 37-61 | (1997. 11 受理) 1998. 2 発行 |
| 142 | 高木雅史 | 優生学の歴史と障害者の生きる権利 | 障害者問題研究 25-4 (92) | 56-65 | 1998. 2 |
| 143 | 市野川容孝、立岩真也 | 障害者運動から見えてくるもの | 現代思想 26-2 | 258-285 | 1998. 2 |
| 144 | 松原洋子 | 戦時下の断種法論争 精神科医の国民優生法批判 | 現代思想 26-2 | 286-303 | 1998. 2 (1998a) |
| 145 | 石崎昇子 | 近代日本の産児調節と国家政策 | 総合女性史研究 15 | 15-32 | 1998. 3 |
| 146 | 篠崎恵昭、清水寛 | アジア・太平洋戦争下の優生政策と障害者問題 [II] ー | 埼玉大学紀要教育学部 47-1 | 11-38 | 1998. 3 |

| | | | | | |
|-----|--------------------------|-----------------------------------------------|------------------------|-----------|----------------------|
| | | 第 75 回帝国議会衆議院優生 法案委員会の「国民体力管理 法案」審議の検討— | | | |
| 147 | 松原洋子 | 中絶規制緩和と優生政策強 化 —優生保護法再考— | 思想 886 | 116-136 | 1998. 4 (1998b) |
| 148 | 岡田靖雄 | 日本の精神病学における遺 伝学的研究の歴史 (その二) | 日本医史学雑誌 1490 44-2 | 86-87 | 1998. 4 |
| 149 | 市野川容孝 | 汚名に塗れた人びと | みすず 40-8 | 14-22, 33 | 1998. 8 |
| 150 | 松原洋子 | 戦時期日本の断種政策 | 年報 科学・技術・社会 7 | 87-109 | 1998. 7 (1998c) |
| 151 | 米本昌平 | 二十一世紀に遺伝をどう語るか | 中央公論 114-3 | 58-67 | 1999. 3 |
| 152 | 市野川容孝 | 福祉国家の優生学 スウェーデ ンの強制不妊手術と日本 | 世界 661 | 167-176 | 1999. 5 |
| 153 | 岡田靖雄 | 金子準二 —断種史上の人び と (その二) — | 日本医史学雑誌 1495 45-3 | 469-471 | 1999. 9 |
| 154 | 松原洋子 | 優生学 | 現代思想 28-3 | 196-199 | 2000. 2 (2000a) |
| 155 | 市野川容孝 | 社会的なものの概念と生命 —福祉国家と優生学 | 思想 908 | 34-64 | 2000. 2 |
| 156 | 川越 修 | 社会衛生学と優生学 ヴァ イマル・ドイツの経験 | (同志社大学) 経済学論 叢 51-1 | 1-37 | (1999. 6) 2000. 3 |
| 157 | 石崎昇子 | 明治期の生殖をめぐる国家政策 | 歴史評論 600 | 39-53 | 2000. 4 |
| 158 | 浅野富美枝 | 優生保護法から母体保護法へ | 歴史評論 600 | 54-66 | 2000. 4 |
| 159 | 松原洋子 | 優生学の歴史と現在 (特集 現代社会と遺伝学) | 生物の科学 遺伝 54- 10 | 31-35 | 2000. 10 (2000b) |
| 160 | 岡田靖雄 | 永井潜 —断種法上の人びと (その三) — | 日本医史学雑誌 1500 46-4 | 672-675 | 2000. 12 |
| 161 | 松原洋子 | 生殖技術と新優生学 | 女たちの 21 世紀 25 | 57-58 | 2001. 2 (2001a) |
| 162 | 松原洋子 | 遺伝子操作が生む良い子・悪 い子 | 諸君! 33-3 | 202-205 | 2001. 3 (2001c) |
| 163 | 江原由美子、 足立真理子、 松原洋子 | 討議 グローバリゼーショ ンとフェミニズム | 現代思想 29-6 | 62-82 | 2001. 5 |
| 164 | 岡田靖雄 | 吉益脩夫 —断種法をめぐる | 日本医史学雑誌 1502 | 413-415 | 2001. 6 |

| | | | | | |
|-----|-------|-----------------------------------------------------|-----------------------------|----------|---------------------|
| | | 人びと (その四) — | 47-2 | | |
| 165 | 荻野美穂 | 「家族計画」への道 —敗戦日本の再建と受胎調節— | 思想 925 | 169-195 | 2001. 6 |
| 166 | 松原洋子 | 進化心理学・行動遺伝学と優生学史研究の架橋に向けて | 生物科学 53-1 | 19-26 | 2001. 7 (2001d) |
| 167 | 松原洋子 | 卵質移植と「遺伝子改変ベビー」 | 生物学史研究 68 | 75-78 | 2001. 12 (2001e) |
| 168 | 松原洋子 | 生体モデルと人体の部品化 | 現代思想 30-2 | 112-115 | 2002. 2 (2002a) |
| 169 | 立岩真也 | 生存の争い 医療の現代史のために・1 | 現代思想 30-2 | 150-170 | 2002. 2 |
| 170 | 岡田靖雄 | 断種法史上の人びと (その五) —三宅敏— | 日本医史学雑誌 48-2 | 306-308 | 2002. 6 |
| 171 | 松原洋子 | 科学史入門: 優生保護法の歴史像の再検討 | 科学史研究 II 41 (222) | 104-106 | 2002. 夏 (2002b) |
| 172 | 岡田靖雄 | 断種法史上の人びと (その六) —成田勝郎・付 菊地甚— | 日本医史学雑誌 1510 49-2 (1510) | 381-384 | 2003. 6 |
| 173 | 金森 修 | リベラル新優生学と設計的生命観 | 現代思想 31-9 | 180-202 | 2003. 7 |
| 174 | 荻野美穂 | 反転した国策 —家族計画運動の展開と帰結— | 思想 955 | 175-195 | 2003. 11 |
| 175 | 特集 | 「ナチズムと近代」再考 | 歴史評論 645 | 1-63, 92 | 2004. 1 |
| 176 | 鈴木智さと | 国民優生法制定過程における家族言説 | 社会政策研究 4 | 247-269 | 2004. 2 |
| 177 | 岡田靖雄 | 斉藤茂吉・ほか —断種法史上の人びと (その七) | 日本医史学雑誌 1514 50-2 | 316-319 | 2004. 6 |
| 178 | 市野川容孝 | 社会的なものと医療 | 現代思想 32-14 | 98-125 | 2004. 11 |
| 179 | 岡田英己子 | 平塚らいてうの母性主義フェミニズムと優生思想 - 「性と生殖の国家管理」断種法要求はいつ加筆されたのか | 東京都立大学人文学部『人文学報』 361 | 23-97 | 2005. 3 (2005a) |
| 180 | 清水馨八郎 | 少子化対策の決め手は「優生保護法」の廃止だ 大和民族が絶滅の危機から脱出するための処方箋 | 月刊日本 9-10 (102) | 56-59 | 2005. 10 |
| 181 | 荻野美穂 | 障害を理由とした中絶とフ | 思想 979 | 85-111 | 2005. 11 |

| | | | | | |
|-----|-------|-----------------------------------------|--------------|---------|-------------------|
| | | エミニズム —アメリカの場合、日本の場合— | | | |
| 182 | 岡田英己子 | 優生学と障害の歴史研究の動向 —ドイツ・ドイツ語圏と日本の国際比較の視点から— | 特殊教育学研究 44-3 | 179-190 | 2006.9 |
| 183 | 広瀬玲子 | 平塚らいてうの思想形成 —エレン・ケイ思想の受容をめぐる本間久雄との違い— | ジェンダー史学 2 | 35-47 | 2006.10 |
| 184 | 石崎昇子 | 日本近代の家族と生殖 —一九二〇年代～一九五〇年代— | 総合女性史研究 24 | 1-18 | 2007.3 |
| 185 | 加藤秀一 | 性教育弾圧者が真に恐れているものは何か 最高の、それゆえ最も危険な政治とは | 論座 142 | 208-215 | 2007.3 |
| 186 | 水田珠枝 | 平塚らいてうの神秘主義 (上) —成瀬仁蔵・ドイツ観念論・禅との関連で— | 思想 996 | 4-33 | 2007.4 (2007a) |
| 187 | 水田珠枝 | 平塚らいてうの神秘主義 (下) —成瀬仁蔵・ドイツ観念論・禅との関連で— | 思想 997 | 128-146 | 2007.5 (2007b) |

※雑誌『民族衛生』は全巻を参考とし、年表における各事項には各巻・号を記した

※雑誌『日母医報』384号(1982.4.1)～390号(1982.10.1)

※雑誌『日母医報』号外(1982.6.26)

(2) 図書 (※アオウエオ順) (卒論・博論も含む)

| No. | 編著者名 | 資料名 | 出版社 | 発行年月 |
|-----|--------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------|----------------------------|
| 1 | 「青い芝の会」神奈川県連合会編 | あゆみ 上・中・下 創立 30 周年記念号 (「青い芝の会」神奈川県連合会 会報) | 川崎「青い芝の会」神奈川県連合会 | 1989. 9 |
| 2 | 青木延春 | 体力向上と優生断種 (保健衛生協会発行) | 龍吟社 | 1941. 2 (1941a) |
| 3 | 青木延春 | 優生結婚と優生断種 | 龍吟社 | 1941. 11 (1941b) |
| 4 | 青木延春 | 優生結婚の話 | 龍吟社 | 1942. |
| 5 | 青木延春 | 応用優生学としての断種 | 龍吟社 | 1948. 9 |
| 6 | 秋元波留夫 監 | 内村祐之 一人とその業績 | 創造出版 | 1982. 9 |
| 7 | 秋元波留夫 | 99 歳精神科医の挑戦 好奇心と正義感 | 岩波書店 | 2005. 9 |
| 8 | Adams, M. B. (Ed.) 著編 佐藤雅彦訳 | <i>The Wellborn science: Eugenics in Germany, France, Brazil, and Russia.</i> (Oxford University Press, 1990) 比較「優生学」史 一独・仏・伯・露における「良き血筋を作る術」の展開一 | 現代書館 | 1998. 7 |
| 9 | Appleyard, B. 山下篤子訳 | <i>Brave New Worlds: Staying human in the genetic Future.</i> (Viking, New York, 1998) 優生学の復活? 遺伝子中心主義の行方 | 毎日新聞社 | 1999. 11 |
| 10 | 安倍雄吉 | 優生保護法と妊娠中絶 | 時事通信社 | 1948. 12 |
| 11 | 天笠啓祐 | 優生操作の悪夢 一医療による生と死の支配 [増補改訂版] | 社会評論社 | 1996. 5 |
| 12 | 荒木精之著 谷口弥三郎伝編 集委員会編 | 谷口弥三郎伝 | 久留米大学 谷口弥三郎 顕彰会 | 1964. 12 |
| 13 | 石井美智子 | 「中絶の権利」市野川容孝編『生命倫理とは何か』(66-71) | 平凡社 | 2002. 8 |
| 14 | 石崎昇子 | 「私のらいてう」平塚らいてうを読む会編『らいてう、そしてわたし』(28-31) | 平塚らいてう を読む会 | 1988. 2 |
| 15 | 石崎昇子 | 「母性保護・優生思想をめぐって」『婦女新聞』を読む会編『婦女新聞と女性の近代』(189-208) | 不二出版 | (1994. 9 脱稿) 1997. 6 |
| 16 | 石崎昇子 | 「〈エピソード〉福島貞子と『母性』」『婦女新聞』を読む会編『婦女新聞と女性の近代』(209-211) | 不二出版 | 1997. 6 |
| 17 | 市野川容孝 | 「性と生殖をめぐる政治 一あるドイツ現代史一」江原由美子編『生殖技術とジェンダー』(163-217) | 勁草書房 | 1996. 9 (1996c) |

| | | | | |
|----|------------------|---------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------|-------------------|
| 18 | 市野川容孝 | 「黄禍論と優生学 ―第1次大戦前後のバイオポリティクス―」小森陽一ほか編『編成されるナショナリズム』岩波講座 近代日本の文化史5 (119-165) | 岩波書店 | 2002.3 (2002a) |
| 19 | 市野川容孝 | 「強制不妊手術の過去と現在 ―ドイツ・スウェーデン・日本」齋藤有紀子編『母体保護法とわたしたち ―中絶・多胎減数・不妊手術をめぐる制度と社会―』(61-75) | 赤石書店 | 2002.9 (2002b) |
| 20 | 上野千鶴子 | ナショナリズムとジェンダー | 青土社 | 1998.3 |
| 21 | 内井惣七 | 科学の倫理学 | 丸善 | 2002.4 |
| 22 | 内村教授還暦 退職記念会編 | 内村祐之教授 還暦記念論文集 | 内村教授還暦 退職記念会 | 1959.7 |
| 23 | 内村祐之 | 精神医学者の滴想 | 同盟出版社 | 1947.4 |
| 24 | 内村祐之 | わが歩みし精神医学の道 | みすず書房 | 1968.9 |
| 25 | 内村祐之 | 鑑三・野球・精神医学 | 日本経済新聞社 | 1973.10 |
| 26 | 内村祐之 | 精神医学者の滴想 | 中公文庫 | 1984.1 |
| 27 | 江原由美子 | 「フェミニズムの70年代と80年代」江原由美子編『フェミニズム論争 ―70年代から90年代へ』(2-46) | 勁草書房 | 1990. |
| 28 | 江原由美子 | 「生命・生殖技術・自己決定権」江原由美子編『生殖技術とジェンダー フェミニズムの主張3』(309-373) | 勁草書房 | 1996.9 |
| 29 | 江原由美子編 | 生殖技術とジェンダー フェミニズムの主張3 | 勁草書房 | 1996.9 |
| 30 | 太田典礼 | 日本産児調節史 明治・大正・昭和初期まで | 日本家族計画協会 | 1969.1 |
| 31 | 太田典礼 | 墮胎禁止と優生保護法 (初版1967.5) | 経営者科学協会 | 1980.9 |
| 32 | 太田典礼 | 日本産児調節百年史 | 出版科学総合研究所 | 1976.9 |
| 33 | 大橋由香子 | 「女のからだへの国家管理と優生思想 ―墮胎罪・優生保護法への対抗論理を求めて―」近藤和子編『性幻想を語る近代を読みかえる』2 (42-74) | 三一書房 | 1998.3 |
| 34 | 岡田英己子 | わが国の優生運動史 ―戦前― (奈良教育大学教育学部養護学校教員養成課程卒論) | | 1971.9 |
| 35 | 岡田英己子 | 「わが国の優生運動史 ―戦前―」岡田英己子他『戦前日本の優生運動と優生学研究の歴史 ―知的障害者問題の顕在化と優生思想の影響を考える―』(5-60) | 東京都立大学 人文学部社会 福祉学科 岡 田研究室 | 2001.2 |

| | | | | |
|----|-----------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|---------|
| 36 | 岡田靖雄 | 「国民優生法・優生保護法と精神科医」齋藤有紀子編『母体保護法とわたしたち —中絶・多胎減数・不妊手術をめぐる制度と社会—』(49-59) | 赤石書店 | 2002.9 |
| 37 | 岡本春一 | 「ゴルトン」南博編『心理学の名著 12 選 名著入門ライブラリー』(10-41) | 学陽書房 | 1976.2 |
| 38 | 岡本春一著 大羽蔡ほか編 | フランシス・ゴルトンの研究 | ナカニシヤ出版 | 1987.5 |
| 39 | 荻野美穂 | 生殖の政治学 フェミニズムとバース・コントロール | 山川出版社 | 1994.12 |
| 40 | 荻野美穂 | 中絶論争とアメリカ社会 | 岩波書店 | 2001.4 |
| 41 | 小熊英二 | 単一民族神話の起源<日本人>の自画像の系譜 | 新曜社 | 1995.7 |
| 42 | 小熊英二 | <民主>と<愛国>戦後日本のナショナリズムと公共性 | 新曜社 | 2002.10 |
| 43 | 小田 晋 | 「吉益脩夫」松下正明総編『司法精神医学 1 司法精神医学概論』(158-166) | 中山書房 | 2006.3 |
| 44 | 小畑清剛 | 法の道徳性 | 勁草書房 | 2002.3 |
| 45 | 小畑清剛 | 近代日本とマイノリティの<生—政治学> —シュミット・フーコー・アガンベンを中心に読む— | ナカニシヤ出版 | 2007.5 |
| 46 | 小俣和一郎 | ナチスもうひとつの大罪 —「安楽死」とドイツ精神医学 | 人文書院 | 1995.8 |
| 47 | 小俣和一郎 | 精神医学とナチズム 裁かれるユング、ハイデガー | 講談社 | 1997.7 |
| 48 | 折井美耶子 | 論争シリーズ5 資料 性と愛をめぐる論争 | ドメス出版 | 1991.10 |
| 49 | 折井美耶子、 篠宮芙美、清 水和美、永原 紀子他 | 女性解放運動のさきがけ 新婦人協会の研究 —特集・花柳病男子結婚制限法制定の運動— | 女性の歴史研究会 | 2003.9 |
| 50 | 折井美耶子・ 女性の歴史 研究会編著 | 新婦人協会の研究 | ドメス出版 | 2006.5 |
| 51 | 懸田克躬 | 病的性格 | 中央公論社 | 1969.6 |
| 52 | 懸田克躬 編集代表 | 現代精神医学大系 別巻《総索引・総目次・主要人物解説》 | 中山書店 | 1982.3 |
| 53 | 加藤シズエ | ある女性政治家の半生 | PHP | 1981.11 |
| 54 | 加藤秀一 | 「女性の自己決定権の擁護 —リプロダクティブ・フリーダムのために—」『女性の自己決定権の擁護』再論 江原由美子編『生殖技術とジェンダー フェミニズムの主張 3』(41-79)(119-160) | 勁草書房 | 1996.9 |
| 55 | 加藤秀一 | 「愛せよ、産めよ、より高き種族のために —一夫一婦制 | 専修大学出 | 1997.10 |

| | | | | |
|----|--------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|----------|
| | | と人種改良の政治学」大庭健他編『共同態 シリーズ【性を問う】3』(201-253) | 版局 | |
| 56 | 加藤秀一 | <恋愛結婚>は何をもたらしたか 一性道徳と優生思想の百年間 | ちくま新書 | 2004. 8 |
| 57 | 加藤博史 | 福祉の人間観の社会誌 一優生思想と非行・精神病を通して一 | 晃洋書房 | 1996. 1 |
| 58 | 金森 修 | 自然主義の臨界 | 勁草書房 | 2004. 6 |
| 59 | 川越 修 | 性に病む社会 | 山川出版社 | 1995. 11 |
| 60 | 川越 修 | 社会国家の生成 一20世紀社会とナチズム | 岩波書店 | 2004. 2 |
| 61 | 河島幸夫 | 戦争・ナチズム・教会 | 新教出版社 | 1993. 10 |
| 62 | Gallagher, H. G. 長瀬修訳 | <i>BY trust betrayed: Patients, physicians, and the License to kill in the Third Reich.</i> (Vandamere Press, Arlington, Virginia. 1995) ナチスドイツと障害者「安楽死」計画 | 現代書館 | 1996. 8 |
| 63 | 木畑和子 | 「第二次世界大戦下のドイツにおける『安楽死』問題」 井上茂子・木畑和子ほか編『1939 一ドイツ第三帝国と第二次世界大戦』(243-283) | 同文館出版 | 1989. 9 |
| 64 | 木畑和子 | 「ナチズムと『医学の犯罪』」神奈川大学評論編集専門委員会編『医学と戦争』神奈川大学評論叢書 5 (122-136) | 御茶の水書房 | 1994. 6 |
| 65 | 木村資生 | 生物進化を考える | 岩波書店 | 1988. 4 |
| 66 | Kühl, S. 麻生九美訳 | <i>The Nazi connection: Eugenics, American racism, and German national socialism.</i> (Oxford University Press, New York. 1994) ナチ・コネクションーアメリカの優生学とナチ優生思想ー | 明石書店 | 1999. 8 |
| 67 | 桑原洋子他編 | 「精神薄弱者福祉法案/第34回通常国会」桑原洋子他編『現代社会福祉法制総覧 15 [国会議事録編(2)]』 | 港の人 | 2005. 2 |
| 68 | Kevles, D. J. 西俣総平訳 | <i>In the name of eugenics: Genetics and the uses of human Heredity.</i> (Knopf, New York. 1985) 優生学の名のもとに 一「人類改良」の悪夢の百年一 | 朝日新聞社 | 1993. 9 |
| 69 | Klee, E. 松下正明監訳 | <i>“Euthanasie” in NS-Staat: Die “Vernichtung lebensunwerten Lebens.”</i> (S. Fischer, Frankfurt am Main, Germany. 1983) 第三帝国と安楽死 一生きるに値しない生命の抹殺一 | 批評社 | 1999. 7 |
| 70 | 小林登美枝 | 「あとがき」平塚らいてう著『元始、女性は太陽であったー平塚らいてう自伝(完結編)』(295-306) | 大月書店 | 1973. 11 |
| 71 | 小林登美枝 | 「解題」平塚らいてう著『むしろ女人の性を礼拝せよ』(198-212) | 人文書院 | 1977. 7 |
| 72 | 小林登美枝 | 平塚らいてう 人と思想 71 | 清水書院 | 1983. 2 |

| | | | | |
|----|-----------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------|---------|
| 73 | 小林登美枝 | 「解説」平塚らいてう著『平塚らいてう著作集』第3巻(367-382) | 大月書店 | 1983.10 |
| 74 | 古屋芳雄 | 老学究の手帳から | 日本家族計画協会 | 1970.1 |
| 75 | 近藤和子 | 「女と戦争—母性/家族/国家」『女と男の時空—日本女性史再考V』(481-515) | 藤原書店 | 1995.10 |
| 76 | 斉藤貴男 | 機会不平等 | 文藝春秋 | 2000.11 |
| 77 | 斉藤美徳 | 「女性雑誌にみる優生思想の普及について—国民優生法成立にいたるまで—」近代女性文化史研究会『戦争と女性雑誌—1931年～1945年—』(104-125) | ドメス出版 | 2001.5 |
| 78 | 斉藤有紀子 編著 | 母体保護法とわたしたち—中絶・多胎減数・不妊手術をめぐる制度と社会 | 赤石書店 | 2002.9 |
| 79 | 坂井律子 | ルポルタージュ 出生前診断—生命誕生の現場で何が起きているのか? | 日本放送出版協会(NHK出版) | 1999.6 |
| 80 | 佐野 誠 | 「幻に終わったナチスの安楽死法—ナチズムの生態と病理—」比較法史学会編『複雑系としてのイエ』(253-274) | 未来社 | 1999.12 |
| 81 | 篠宮美美 | 「らいてうの優生思想を問う」平塚らいてうを読む会編『らいてう、そしてわたし』(32-35) | 平塚らいてうを読む会 | 1988.2 |
| 82 | 社会評論社 編集部編 | 女の性と中絶 優生保護法の背景 | 社会評論社 | 1983.5 |
| 83 | Silver, Lee M. 東江一紀、真 喜志順子、度 会圭子訳 | <i>Remaking Eden: Cloning and beyond in a brave new world.</i> (Avon Books, New York, 1997) 複製されるヒト | 翔泳社 | 1998.5 |
| 84 | 鈴木善次 | 日本の優生学 | 三共出版 | 1983.11 |
| 85 | 鈴木善次 | 「日本における優生思想・優生運動の軌跡」Kevles, D. J. 著 西俣総平訳『優生学の名のもとに—「人類改良」の悪夢の百年—』(507-517) | 朝日新聞社 | 1993.9 |
| 86 | 鈴木裕子 | 女性史を拓く 1 | 未来社 | 1989.5 |
| 87 | 鈴木裕子 | 「母性・戦争・平和—『日本的母性』とフェミニズム」加納実紀代編『母性ファシズム・母なる自然の誘惑』(68-73) | 学陽書房 | 1995.4 |
| 88 | 全日本特殊教育 研究連名他編 | 精神薄弱者問題白書—1967年版— | 日本文化科学社 | 1967.1 |
| 89 | 全日本特殊教育 研究連名他編 | 精神薄弱者問題白書—1968年版— | 日本文化科学社 | 1968.4 |

| | | | | |
|-----|----------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------|--------------------|
| 90 | 全日本特殊教育 研究連名他編 | 精神薄弱者問題白書—1971年版— | 日本文化科 学社 | 1971.10 |
| 91 | 高木雅史 | 『『大正デモクラシー』と優生学』『自由教育』論者の能力観の一側面』森田尚人他編『教育学年報1 教育研究の現在』(303-330) | 世織書房 | 1992.9 |
| 92 | 高杉晋吾 | 頭脳支配 | 三一書房 | 1971.6 (1971e) |
| 93 | 高杉晋吾 | につぼんのアウシュウィッツを追って | 教育史料出版会 | 1984.6 |
| 94 | 竹前栄治 中村隆英 | GHQ日本占領史 4 人口 | 日本図書セ ンター | 1996.2 |
| 95 | 竹村和子 | “ポスト”フェミニズム | 作品社 | 2003. |
| 96 | 館かおる | 「日本のフェミニズム理論 —平塚らいてうにおける『母性』とフェミニズムを中心に—」女性学研究会編集『女の目で見ると講座女性学4』(259-288) | 勁草書房 | 1987.2 |
| 97 | 館かおる | 「近代日本の母性とフェミニズム —母性の権利から産育権へ」原ひろ子・館かおる編『母性から次世代育成力へ 産み育てる社会のために』(3-39) | 新曜社 | 1991.9 |
| 98 | 館 稔 | 日本人口の将来 | (財)世界経 済調査会 | 1947.8 |
| 99 | 立岩真也 | 私的所有論 | 勁草書房 | 1997.9 |
| 100 | 谷口弥三郎、 福田昌子 | 優生保護法解説 | 研進社 | 1948.10 (1948b) |
| 101 | 谷口弥三郎 | 優生保護法詳解 | 日本母性保 護医協会 | 1952.11 |
| 102 | 柘植あづみ、 市野川容孝、 加藤秀一 | 「付録『優生保護法』をめぐる最近の動向」江原由美子編『生殖技術とジェンダー フェミニズムの主張3』(375-409) | 勁草書房 | 1996.9 |
| 103 | 東京青い芝 の会編 | 東京青い芝の会 43年の歩み：年表で振り返る活動の足跡 | 東京青い芝 の会 | 2000.7 |
| 104 | 東京大学精神 医学教室 120 年編集委員会編 | 東京大学精神医学教室 120年 | 新興医学出 版社 | 2007.3 |
| 105 | Tobach, E. [and others] 本吉良治、岡 本和子訳 | <i>The Four Horsemen: racism, militarism, and social Darwinism.</i> (Behavioral Publications, New York 1974) 科学の名による差別と偏見 | 新曜社 | 1979.12 |

| | | | | |
|-----|--------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------|----------|
| 106 | Trombly, S. 藤田真利子訳 | <i>The right to reproduce: a history of coercive Sterilization.</i> (Weidenfeld and Nicolson, London. 1988) 優生思想の歴史 生殖への権利 | 明石書店 | 2000. 11 |
| 107 | 永井 潜 | 優生学概論 (1936年版の再版) | 雄山閣 | 1947. 4 |
| 108 | 永井 潜 | 民族の運命 (日本国民に懇ふ) | 村松書店 | 1948. 3 |
| 109 | 永井 潜共訳 | 人間に於ける男性の性行為 上 | コスモポリ タン社 | 1950. 2 |
| 110 | 永井 潜 | 人間に於ける男性の性行為 下 | コスモポリ タン社 | 1950. 5 |
| 111 | 中西喜久司 | ナチスドイツと聴覚障害者—断種と「安楽死」政策を検証する— | 文理閣 | 2002. 10 |
| 112 | 永原紀子 | 「花柳病男子結婚制限法制定の請願運動とその本質」 折井美耶子・女性の歴史研究会編著『新婦人協会の研究』 (68-96) | ドメス出版 | 2006. 5 |
| 113 | 中村満紀男 (研究代表者) | 20世紀優生学が障害者の生存・生活・教育に及ぼした影 響に関する総合的研究 平成 11~13年度科学研究費補助 金(基盤研究(A)(1))研究成果報告書 | 中村満紀男 (研究代表者) | 2002. 3 |
| 114 | 中村満紀男 編著 | 優生学と障害者 | 明石書店 | 2004. 2 |
| 115 | 中村 幸 | 『婦人公論』誌上の産児調節記事をたどる」近代女性文 化史研究会編『婦人雑誌にみる大正期 —「婦人公論」を 中心に—』(81-93) | 近代女性文 化史研究会 | 1995. 3 |
| 116 | 日本科学史 学会編集 | 日本科学技術史大系 25 医学<2> | 第一法規出 版 | 1967. 3 |
| 117 | 日本精神神経 学会百年史編 集委員会 | 日本精神神経学会百年史 | 日本精神神 経学会 | 2003. 5 |
| 118 | 日本精神神経 学会百年史編 集委員会 | 日本精神神経学会百年史 [資料編] CD-ROM 付き | 日本精神神 経学会 | 2003. 5 |
| 119 | (社)日本母 性保護産婦 人科医会編 | 日母五十周年記念誌 | (社)日本母 性保護産婦 人科医会 | 2000. 3 |
| 120 | 二文字理明、 椎木章編著 | 福祉国家の優生思想—スウェーデン発 強制不妊手術報 道 世界人権問題叢書 38 | 明石書店 | 2000. 12 |
| 121 | 野田聖子 | 私は、産みたい | 新潮社 | 2004. 12 |
| 122 | Habermas, J. | <i>Die Zukunft der menschlichen Natur. Auf dem Weg zu einer</i> | | |

| | | | | |
|-----|------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------|----------|
| | 三島憲一訳 | <i>liberalen Eugenik?</i> (Suhrkamp, Frankfurt am Main, Germany. 2001) 人間の将来とバイオエシックス | 法政大学出版局 | 2004. 11 |
| 123 | 原田 隆 | 新優生法読本 | 推古書院 | 1949. 10 |
| 124 | ハンセン病問題に関する検証会議編 | ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書 | (財)日弁連 法務研究財団 | 2005. 3 |
| 125 | 姫岡とし子 | 近代ドイツの母性主義フェミニズム | 勁草書房 | 1993. 1 |
| 126 | 姫岡とし子 | 「女性蔑視と『母性礼賛』ナチの女性政策」加納実紀代編 『母性ファシズム・母なる自然の誘惑』(62-67) | 学陽書房 | 1995. 4 |
| 127 | 姫岡とし子 | 「女性・ジェンダーの近代」歴史学研究会編『歴史学における方法的転回』(173-189) | 青木書店 | 2002. 12 |
| 128 | 姫岡とし子 | ジェンダー化する社会 労働とアイデンティティの日独比較史 | 岩波書店 | 2004. 3 |
| 129 | 平田勝政 (研究代表者) | 日本における優生学の障害者教育・福祉への影響とその克服過程に関する研究 平成 14～16 年度科学研究費・補助金 基盤研究(C)(2) 研究成果報告書 | 長崎大学教育学部 研究代表者平田勝政 | 2005. 5 |
| 130 | 平田勝政 | 「1930 年代の地方優生運動と障害者・病者の人権 (第 1 報) —1931 年夏のジョンソンによる全国優生学講演の地方への影響の検討を中心に—」『日本特殊教育学会 第 45 回大会発表論文集』(728) | | 2007. 9 |
| 131 | 平塚らいてう | 私の履歴書 第三十二集 | 日本経済新聞社 | 1968. 3 |
| 132 | 平塚らいてう | 元始、女性は太陽であった —平塚らいてう自伝(完結編) | 大月書店 | 1973. 11 |
| 133 | Binding, K. & Hoche, A. 森下直貴 佐野誠訳 | <i>Die Freigabe der Vernichtung lebensunwerten Lebens: Ihr Maß und ihre Form.</i> (Felix Meiner, Leipzig, Germany. 1920) 「生きるに値しない命」とは誰のことか —ナチス安楽死計画の原典を読む— | 窓社 | 2001. 11 |
| 134 | 不幸な子の生まれない対策室 | 幸福への科学 | のじぎく文庫 | 1973. 8 |
| 135 | 藤野 豊 | 日本ファシズムと医療 ハンセン病をめぐる実証的研究 | 岩波書店 | 1993. 1 |
| 136 | 藤野 豊 | 日本ファシズムと優生思想 | かもがわ出版 | 1998. 4 |
| 137 | 藤野 豊 | 「いのち」の近代史 —「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者 | かもがわ出版 | 2001. 5 |
| 138 | 藤野 豊 | 性の国家管理 売買春の近現代史 | 不二出版 | 2001. 10 |

| | | | | |
|-----|-----------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------|---------------------|
| 139 | 藤目ゆき | 性の歴史学 公娼制度・随胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ | 不二出版 | 1999. 3 |
| 140 | Pross, Ch. & Aly, G. (Eds.) 林 功三訳 | <i>Der Wert des Menschen: Medizin in Deutschland 1918-1945.</i> (Edition Hentrich, Berlin. 1989) 人間の価値 —1918年から1945年までのドイツ医学— | 風行社 | 1993. 1 |
| 141 | Bernsdac, C. 野口雄司訳 | <i>Les Medecins Maudits: Les experiences medicales Humaines dans les camps de concentration.</i> (Editions France-Empire, Paris. 1967) 呪われた医師たちくナチ強制収容所における生体実験> | 早川書房 | 1968. 9 |
| 142 | 星 新一 | 祖父・小金井良精の記 | 河出書房新社 | 1974. 2 |
| 143 | Hopper, H. M. 加藤タキ訳 | <i>A new woman of Japan: a political biography of Kato shidzue.</i> (Westview Press, Boulder 1996) 加藤シズエ 百年を生きる | ネスコ | 1997. 3 |
| 144 | 松永 英 | 「日本の優生政策 —ナチス・ドイツとの比較」神奈川大学評論編集専門委員会編『医学と戦争』神奈川大学評論叢書 5 (137-154) | 御茶の水書房 | 1994. 6 |
| 145 | 松原洋子 | 日本における優生政策の形成 —国民優生法と優生保護法の成立過程の検討 (博士論文) | お茶ノ水女子大学人間文化研究科 | 1998. 3 (1998d) |
| 146 | 松原洋子 | 「優生学批判の枠組みの検討」原ひろ子・根村直美編『「健康」と「ジェンダー」』(37-47)「ジェンダーと健康」研究プロジェクト(平成8年度～11年度)報告書(平成11年度教育改善推進費プロジェクト報告書) | お茶の水女子大学ジェンダー-研究センター | 2000. 3 (2000c) |
| 147 | 松原洋子 | 「優生問題・人口政策編・解説」『性と生殖の人権問題資料集成 15』(1-7) | 不二出版 | 2000. 9 (2000d) |
| 148 | 松原洋子 | 「優生学批判の枠組の検討」原ひろ子他編著『健康とジェンダー』(69-88) | 明石書店 | 2000. 11 (2000e) |
| 149 | 松原洋子 | 「遺伝子診断と遺伝子治療」市野川容孝編『生命倫理とは何か』(126-134) | 平凡社 | 2002. 8 (2002c) |
| 150 | 松原洋子 | 「優生学」市野川容孝編『生命倫理とは何か』(135-141) | 平凡社 | 2002. 8 (2002d) |
| 151 | 松原洋子 | 「母体保護法の歴史的背景」齋藤有紀子編『母体保護法とわたしたち —中絶・多胎減数・不妊手術をめぐる制度と社会—』(35-48) | 明石書店 | 2002. 9 (2002e) |
| 152 | 松原洋子 | 「優生学の歴史」廣野喜幸・市野川容孝・林真理編『生命 | 勁草書房 | 2002. 10 |

| | | | | |
|-----|----------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------|----------|
| | | 科学の近現代史』(199-226) | | (2002f) |
| 153 | 三成美保 | ジェンダーの法史学 —近代ドイツの家族とセクシュアリティ— | 勁草書房 | 2005. 2 |
| 154 | 宮城音弥 | 心とは何か | 岩波書店 | 1981. 1 |
| 155 | 三宅義子 | 「近代日本女性史の再創造のために —テキストの読み替え」神奈川大学評論編集専門委員会編『社会の発見』神奈川大学評論叢書 4 (63-128) | 御茶の水書房 | 1994. 6 |
| 156 | 森岡正博 | 生命学に何ができるか 脳死・フェミニズム・優生思想 | 勁草書房 | 2001. 11 |
| 157 | 優生手術に対する謝罪を求める会編 | 優生保護法が犯した罪 —子どもをもつことを奪われた人々の証言 | 現代書館 | 2003. 9 |
| 158 | 吉川豊子 | 「産めよ殖やせよ/産児調節運動から国民優生法へ —女性の奨励と優生思想」岡江幸江他共編『女たちの戦争責任』 | 東京堂出版 | 2004. 9 |
| 159 | 吉益脩夫 | 優生学の理論と実際 特に精神医学との関係について | 南江堂 | 1940. 9 |
| 160 | 吉益脩夫 | 犯罪学概論 | 有斐閣 | 1958. 2 |
| 161 | 吉益脩夫、井上英二、上出弘之、武村信義 | 優生学 | 南江堂 | 1961. 3 |
| 162 | 米田佐代子 | 平塚らいてう —近代日本のデモクラシーとジェンダー | 吉川弘文館 | 2002. 2 |
| 163 | 米本昌平 | 遺伝管理社会 —ナチスと近未来 [叢書 死の文化 4] | 弘文堂 | 1989. 3 |
| 164 | 米本昌平 | 「優生学 —日本とドイツの比較」神奈川大学評論編集専門委員会編『医学と戦争』神奈川大学評論叢書 5 (24-38) | 御茶の水書房 | 1994. 6 |
| 165 | 米本昌平 | 知政学のすすめ：科学技術文明の読みとき | 中央公論社 | 1998. 7 |
| 166 | 米本昌平、松原洋子、棚島次郎、市野川容孝 | 優生学と人間社会 生命科学の世紀はどこへ向かうのか | 講談社 | 2000. 7 |
| 167 | 米本昌平 | バイオポリティクス 人体を管理するとはどういうことか | 中公新書 | 2006. 6 |
| 168 | Lutzius, F. 山下公子訳 | <i>Verschleppt: Der Euthanasie-Mord an behinderten Kindern im Nazi-Deutschland</i> (Populär Verlag, Essen, Germany. 1987) 灰色のバスがやってきた —ナチ・ドイツの隠された障害者「安楽死」措置— | 草思社 | 1991. 12 |

※辞典 金子幸子他編(2008. 2)『日本女性史大辞典』吉川弘文館

※年表 ① 丸岡秀子・山口美代子編(1980. 5)『日本婦人問題資料集成第十巻 近代日本婦人問題年表』ドメス出版 ② 財団法人東京女性財団編(1995. 11)『都民女性の戦後50年——年表』ドメス出版 ③ 「女と男の時空」編纂委員会編(1998. 10)『女と男の時空——日本女性史再考 別巻 年表・女と男の日本史』藤原書店

(3) 新聞記事

| No | 記事名 | 新聞名・朝刊夕刊 | 面 | 発行年月日 |
|----|----------------------------------------------------------|-----------|----|--------------------|
| 1 | 三宅敏一 断種法の検討(中) 理想と実際の開き | 帝国大学新聞 | 5 | 1938.6.27 |
| 2 | 内村祐之 断種法の過去と将来 国民優生法への期待 | 帝国大学新聞 | | 1940.5.27 |
| 3 | 平塚らいてう 雷鳥の軸 | 婦人民主新聞 | | 1949.1.10 |
| 4 | 「社説」産児調節への世論の方向 | 中部日本新聞 朝刊 | 1 | 1949.5.8 |
| 5 | 人口問題をどうするか 本社主催座談会(上)(中)(下) | 毎日新聞 | | 1949.5.15 ～5.17 |
| 6 | 日本の学会へ研究資金 ロックフェラー財団 木原研究所などに | 朝日新聞 朝刊 | 9 | 1957.8.13 |
| 7 | 春の来ない谷間<1>～<5> | 朝日新聞 朝刊 | 5 | 1965.4.8～ 4.13 |
| 8 | 勝手に“女性化手術” 宮崎の保養院 精神病の少年に | 朝日新聞 夕刊 | 8 | 1966.3.7 |
| 9 | 村松博雄「優生保護法の改正をめぐって 長い道のりのほんの一里塚」 | 朝日新聞 朝刊 | 17 | 1972.5.27 |
| 10 | 科学者の戦争責任 | 毎日新聞 朝刊 | 2 | 1972.10.24 |
| 11 | 「劣悪遺伝の子生むな」渡辺氏、名指しで随筆 | 朝日新聞 朝刊 | 23 | 1980.10.15 |
| 12 | 毛利子来「優生保護法の廃止を望む」 | 朝日新聞 朝刊 | 4 | 1995.12.16 |
| 13 | 悲劇生んだ「純潔保護」 検証 北欧の強制不妊手術 | 毎日新聞 朝刊 | 14 | 1997.9.4 |
| 14 | 受精卵遺伝子診断「優生思想を助長」 障害者団体など承認の動き警戒 | 毎日新聞 | | 1998.4.18 |
| 15 | 染色体異常、神経疾患、白血病…わが子の治療拒む親 | 東京新聞 朝刊 | 1 | 2004.12.20 |
| 16 | 純潔の60年 国が始めた「純潔」という名の性教育、潮が引くように消えていった。性のタブー視は遠い昔のことなのか。 | 朝日新聞 朝刊 | 8 | 2005.9.5 |
| 17 | はとこ婚 病気が心配 先天奇形は1.1倍 | 朝日新聞 朝刊 | 28 | 2006.4.24 |
| 18 | 「女性は子ども産む機械」柳沢厚労相、少子化巡り | 朝日新聞 朝刊 | 2 | 2007.1.28 |
| 19 | 少子化対策へ戦略会議 首相地域・家族再生柱に | 朝日新聞 朝刊 | 1 | 2007.1.28 |
| 20 | 厚労相発言を批判 女性例え「産む機械」野党、辞任要求も | 朝日新聞 朝刊 | 3 | 2007.1.29 |
| 21 | 少子化対策が心配だ「産む機械」 | 朝日新聞 朝刊 | 3 | 2007.1.31 |
| 22 | 人口政策？ 家族の形まで押しつけるな | 朝日新聞 朝刊 | 13 | 2007.2.20 |

(4) 政府刊行図書

| No. | 著者名 | 資料名 | 誌名・巻号 | 発行年月 |
|-----|-----------------|----------------------------------|-----------------------------|---------------------|
| 1 | (財)人口問題研究会 | 新人口政策基本方針に関する建議 | 『性と生殖の人権問題資料集 成 25 [405]』所収 | 1946. 11 |
| 2 | (財)人口問題研究会 | 日本人口白書 附最近の主要人口統計 | 『性と生殖の人権問題資料集 成 26 [427]』所収 | 1951. 8 |
| 3 | (財)人口問題研究会 | 財団法人人口問題研究会 人口対策委員会第一回総会議事速記録 | 『性と生殖の人権問題資料集 成 26 [437]』所収 | 1953. 7 (1953a) |
| 4 | (財)人口問題研究会 | 財団法人人口問題研究会 人口対策委員会第二回総会議事速記録 | 『性と生殖の人権問題資料集 成 26 [438]』所収 | 1953. 7 (1953b) |
| 5 | (財)人口問題研究会 | 人口対策としての家族計画に関する参考資料 | 『性と生殖の人権問題資料集 成 26 [439]』所収 | 1953. 11 (1953c) |
| 6 | 厚生省 20 年史編集委員会 | 厚生省 20 年史 | | 1960. 7 |
| 7 | 厚生省編 | 厚生白書 (昭和 43 年版) | | 1968. 12 |
| 8 | 厚生省編 | 厚生白書 (昭和 44 年版) | | 1969. 12 |
| 9 | 厚生省編 | 厚生白書 (昭和 46 年版) | | 1971. 11 |
| 10 | 人口問題審議会 | 日本人口の動向：静止人口をめざして | | 1974. |
| 11 | 厚生省医務局編 | 医制百年史 (記述編・資料編共) | | 1976. 9 |
| 12 | 基本行政通達編集委員会編 | 基本行政通達 | | 1978. |
| 13 | 篠崎信男編集兼発行 | 人口情報 昭和 57 年度 財団法人人口問題研究会 50 年略史 | | 1984. 2 |
| 14 | 昭和 40 年～60 年の複製 | 文部省学習指導要領 告示編 | | 1986. 3 |
| 15 | 厚生省五十年史編集委員会 | 厚生省五十年史 (資料編) | | 1988. 5 |
| 16 | 人口問題研究所編 | 人口問題研究所創立五十周年記念誌 | | 1989. 8 |
| 17 | 内閣府編 | 障害者白書 (平成 15 年版) | | 2003. 6 |
| 18 | 内閣府編 | 少子化社会白書 (平成 19 年度版) | | 2007. 11 |

【Ⅲ部主要参考文献】

※Ⅲ部は「はじめに・Ⅲ-1・小活」の主要参考文献であり重複文献は序とⅠ-1とⅡを参照。他は原則としてⅢ-3の文献リストに一括記載

1. 邦語文献

1) 1945年まで

永井潜(1934)「断種法に対する反対の反対」『民族衛生』第3巻4,5号(断種特集号)1934年6月

山本宣治(1924.4.5.6.8.10.12,1925.1.2)「若い男の性生活」『生理学研究』1-3.4.5.7.9.11
2-1.2

2) 1945年以降

岡田英己子(2006)「優生学と障害の歴史研究の動向——ドイツ・ドイツ語圏と日本との国際比較の視点から」『特殊教育学研究』日本特殊教育学会 第44巻3号 2006年9月
179-190.

岡本春一著 大羽葵ほか編(1987)『フランシス・ゴールトンの研究』ナカニシヤ出版

小熊英二(2002)『<民主>と<愛国>戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社

落合恵美子(2004)『21世紀家族』有斐閣3版

加藤秀一(2004)『<恋愛結婚>は何をもたらしたか——性道徳と優生思想の百年間』ちくま新書

金森修(2004)『自然主義の臨界』勁草書房

桑原洋子他編(2005)「精神薄弱者福祉法案/第34回通常国会」桑原洋子他編『現代社会福祉法制総覧 15 [国会議事録編(2)]』港の人

佐々木敏二(1998)『山本宣治 [下]』不二出版

筑波常治(1966.1)「山本宣治と永井潜」『文芸春秋』44-1

永井潜(1948)『民族の運命』村松書店

永井潜(1949.10)「近時公布の二つの法律」『厚生時報』4-1

中川清(2000)『日本都市の生活変動』勁草書房(8章「日常生活における戦後性——1950年代の人口妊娠中絶」)270-296.

平塚らいてう(1949.4)「民族の未来のために」『女性改造』

星新一(1974)『祖父・小金井良精の記』河出書房新社

結 　まとめと残された課題

結 まとめと残された課題

「優生思想の持ち主とは誰のことか」をめぐって、平塚を軸に、大澤・永井の主流の系譜と比較し、同時に平塚が断種法加筆に至る背景と戦後の影響までを検討した。序の問題の所在に再び立ち、以下でまとめに入ろう。

結1 まとめ

(1) 平塚の優生思想のある種の普遍性

平塚は「否認の可否を論ず」稿だけを見れば、「優生思想の持ち主」である。だが、障害を持つ者への理解度も高い。果たしてこれは矛盾なのか。筆者の平塚への研究関心は、この点にある。これは通例、多くの人を持つ矛盾ではないか。新たな生命の健全な成長を願う親は、同時に子が病や障害を持って出生すれば、迷い、悩みつつも、全力を挙げて支援する。優生思想に傾く己を引き戻すものは、「こうあるべき」式の理念の押し付けではなく、眼前にある病や障害、老いや死への開かれた想いではないか。

そもそも優生学的言説を封印さえすれば問題は解決するのだろうか。巷に溢れる優生思想に抗する術もないままに、過去の「優生思想の持ち主」を糾弾する歴史研究の手法は、いかなる意味を持つのだろうか。むしろ優生思想になびきやすい、ある種の普遍性を常に問う姿勢が大切ではないのか。

それだけに史実に照らして、「いか程の優生思想の持ち主」であり、それは我々の「内なる優生思想」と共通の基盤を持つのかどうかを検証する作業が、優生学の歴史研究に求められていると思う。時間のかかる作業ではあるが、Ⅱ部年表から見えてくるのは、近代主義者でかつ「反」フェミニストである男性主導の運動が本流であり、国家官僚との連携プレーで国民優生法が上程されたという史実の重さである。

平塚等のフェミニズム運動はもとより保守系女性運動も蚊帳の外に置かれた。他の社会事業・教育界のリーダーもそうであった。後藤龍吉や池田林儀の民間レベルの雑誌刊行による優生運動の影響は日本ではないに等しかった。「学」の殿堂である東大医学部関係者のみが、戦前日本の断種法制定で圧倒的な存在感を示したのである。

この権力機構はむろん啓蒙活動は怠らない。「反」フェミニズムのリーダーは、逆説的なのだが女性活用の仕方を心得ていた人が多い。大澤と永井のコンビはその代表格であり、彼等の啓蒙活動の場の一つが、日本女子大学校での生理学講義であった。大澤講義を引き継ぐ1921年4月から、1939年3月までの18年間、永井は目白に通う。近代的なエリート女性に不可欠の教養として、男女の差異と優生結婚・結婚制限の必要を説く。「反」フェミニズム/フェミニストの真骨頂といえる「良識」ある講義であったに違いない。

(2) 二項対立図式化される優生学の概念をめぐる歴史研究の意義

21世紀に入り、いわゆる旧優生学/新優生学の境界が流動的になりつつある。それは肯定的(積極的)優生学と否定的(消極的)優生学の二項対立図式が抱え込む難問と酷似する。それ

だけに、20世紀優生学の歴史研究方法論の吟味と、それをふまえての国際比較史研究が求められる段階に入っている。20世紀初頭から優生学の二項対立図式が強化される政治的背景と、逆に1990年代の「優生思想の持ち主」論が二項対立図式の境界を崩したがる経緯に至るまでの論議から、学び取れるものは多いからだ。

20世紀の福祉国家は、抽象度の高い人権思想を制度・政策化し、「より良き暮らし向き」の設計図を、多くの人々が自由に、思い描ける下地を初めて提供する。その自由さの中に、優生思想も浸透し、強制断種法に代表される人権否定の優生政策も、20世紀に登場する。この優生政策を主導するのは医師・法律家・官僚のエリート男性集団であった。彼等はおおむね保守主義者であり、「反」フェミニストでもあった。そしてドイツでもそうなのだが、日本では特にこの本流というべき系譜の優生学研究は欠落したままだ。

そもそも1990年代の福祉国家「終焉」の潮流の最中に、取り沙汰される「福祉国家と優生思想」の関係で、批判の槍玉に挙がるリベラル派や社会(民主)主義者が、優生運動を率いることは欧米でも稀であった。ましてや政策決定過程に、戦前日本で女性が参入できる余地はなかった。事態はドイツでも同じで、フェミニズム/フェミニストは、政策決定過程から徹頭徹尾、排除された。むろん平塚のように、障害差別・優生学的言説を繰り返す者は、フェミニズム運動家でも、社会(民主)主義者でもいた。

優生学の本流は従来から指摘されているように、保守主義者・国家主義者、そして「反」フェミニズムの陣営に属する一群である。特に日独比較を対象にする場合、この陣営の権力掌握ぶりは重視されねばならない。フェミニストや社会主義者が「優生思想の持ち主」であるとしても、彼/彼女等は第二次世界大戦終結まで政策決定過程に関与はできなかった。日本ではいまだに人口政策・家族政策から、フェミニズム運動や障害関連諸団体は排除されたままだ。フェミニズムの旗手や社会(民主)主義者の優生思想を取り沙汰することの意義を疑ってはいない。しかし、もっと重視すべき課題があるのではないか。優生政策を国策に持ち上げながら、戦後は何食わぬ顔をして教科書・テキスト類を書きかえ、児童健全育成や癌撲滅といった読みかえで、当たりさわりのないテーマに衣替えをし、あまつさえ弁明を図る権力機構の解明にあるのではないか。

今、気づくべきことは、20世紀の優生思想と優生政策は権力を牛耳るエリート男性集団によって、まず世に広まる点である。内務省から厚生省が独立を果たしても、行政官僚と入局した医師との政策決定過程での権限の差は目立つ。この優生政策に内包される排他性と、幾重にも重なる序列への気づきが、優生学の歴史研究の起点であり、その権力機構の解明こそが研究の終結点になると、筆者は考える。

(3) 戦後のナチ断種法批判言説の日独比較について

新・旧優生学を二項目対立図式にし、可能な限り識別を試みようとする手法では、断種・不妊手術が「自己決定」によるのか、否かが、争点にされやすい。通例そこでの議論は、ナチ断種法批判が真っ先に出され、「これはナチ断種法とは違う」との見解が表明される。

同じ図式で、新優生学は最新「科学」に基づくが、旧優生学はそうではなく、そこに問題があったとの見解も出される。むしろ新・旧優生学を共に断罪する見解も、今は一定の支持を得ている。

ここで注意したいのは、どの見解もナチ断種法批判では一致し、歴史に遡及して議論を展開する癖がある点である。ただし、なのである。だからといって歴史研究が深められているわけではない。都合のいい引用・孫引きが横行しているのが、現実なのだ。とりわけナチ断種法の本家本元と自認しているのか、ドイツや日本では「これはナチ断種法」と「これはナチ断種法とは違う」といった二項対立図式の論争が際立つ。

序「問題の所在」でも指摘したが、こうした形でのナチ断種法批判の言葉づかいは、史資料の扱い方によっては、弁明と表裏一体になりやすい。筆者の研究動向の分析では、これが意図せざる結果として、特に日本では優生学批判見解のパターン化を強めたと推測される。それだからこそナチ断種法批判言説が定位する経緯の解明が、歴史研究の重要課題になってくる。解明にはなお多くの時間を要するが、ここでは「誰が、いつ頃から、どのように」批判言説に与するのかの、個別テーマの研究が威力を発揮するだろう。その研究方法論と方向性は、本稿を通してある程度明らかにされたであろう。

優生思想は21世紀の今も強靱な力を持つ。あたりさわりのない、エレガントな言葉づかいでもって、至る所に蔓延っている。過剰な競争社会の渦中に生きる人々の間で、以前にも増して優生思想を容認する人は増えている。

平塚が発する不用意な優生学的言説と、娘の曙生の近江学園生活への理解とは、相反するかに見える。障害児が「産まれるのは不幸」で、「産むのは愚か」と、繰り返し警告を発する平塚が、眼前の障害・病を持つ人々に責任感と優しさをもって手を差し伸べる。これは矛盾なのだろうか。いくら否定をしても、内面にびっしりと蔓延る「我が内なる優生思想」を、平塚のナイーブさは余すことなく我々に見せてくれるのではないか。そこに、平塚らいてうの優生思想形成過程の研究の意義もあると、筆者は考える⁴⁸。

結2 残された課題

以上、I部～III部を通し「いか程の優生思想の持ち主」かの解明は、一定程度できたと思う。以下に、これまでの成果の到達点を整理しつつ、残された課題で3年ないし4年間で区切りを付けたいものを提示することで、本報告書のまとめにかえたい。

⁴⁸平塚個人は、虚弱体質であり、かつ結婚後は生計を一手に支える関係——平塚の母から相当な経済的援助はあったが——で、社会事業活動に関われない。しかし、パートナーの奥村が娘の曙生を連れて、スラム街の保育所を訪問することは喜び、帰宅の度に玄関で虱や蚤退治をすることをさらっと語る。曙生が戦時色の強まる1938年に結婚相手に小児麻痺による身体障害者を選んだことも自然に受け止める(平塚[1962]177)。戦後、曙生の夫は糸賀一雄に請われて近江学園職員として赴任、一家は知的障害児者と共同生活を営むことになる。創設期近江学園に一家で飛び込むという決定と、曙生が書く近江学園の生活記録から(筑添[1955]146-148)、平塚の娘の「社会的なるもの」へのまなざしが見えてくる。

課題1. 「断種法制定運動リーダー」「国民優生法の父」永井像のさらなる検討

「誰が、いつ頃から、どのように」ナチ断種法批判言説に与するのかが、個別研究の筆頭くるのは、やはり永井と東大医学部の関与ぶりであろう。永井こそが日本から発信できる国際比較の歴史研究の、筆頭に來る人物であり、同時に彼と平塚は、若き日に大澤を介して優生思想を形成する点では同じ系譜に属するからである。

しかし、その際に早くも難問が出てくる。永井像の把握の困難さである。平塚の人となりはイメージしやすい。が、永井という人物はどう位置づければいいのか。永井研究を進めていく過程で、高潔な人格者の風貌にはそぐわない側面が見えはじめ、評価は二転三転した。積極的な社会活動への参加、郷里の仲間や同僚・弟子への丁寧な物腰、師への律儀さ、妻を対等に扱う姿勢、子どもに示す深い愛情――。

弟子達はいかに「いい先生」かを繰り返して語る。永井追悼特集号では褒めちぎる弟子の発言が並ぶ(永井先生追悼号『広島医学』10-7 [1957] 1-16)。1963年には功績ある日本人研究者として「故永井先生の記念額 (Gedenktafel)」が、弟子の格別の願いによって永井が住んだゲッチンゲンのアパートの壁に掲げられる(『広島医学』16-9 [1963] 95-97)。瀟洒な住宅街の一角にそれは今も残っている。

だが、本当にそうなのだろうか。永井の心の闇は意外と深いのではないか。残された証言記録を、権力掌握と生理学教室の後継者問題から読み直してみると、別の永井像が浮上する。

これまでの作業で出てきた主要な疑問点を、挙げてみる。

- ① 東大生理学教室の後継者問題である。永井を知る重要な手がかりになりそうなので、再度記す。大澤が「自分の後継者として橋田(邦彦)を望む、よろしく援助をたのむ」との遺言を親友の東大医学部教授である小金井良精に託さざるを得なかった理由である(星 [1974] 228)。橋田は教育熱心で、国際的にも著名な生理学者であった。しかも、橋田はすでに教授ポストに就いていた。にもかかわらず、橋田支援を依頼せざるをえなかったのは何故なのか。これはまだ仮説の域に留まる。が、死の間際の大澤が小金井に見せる涙と懸念は、愛弟子橋田の非業の死をあたかも予感していたかのようだ。
- ② 京大医学部雑誌刊行責任者に永井が圧力をかけ、山宣の好評を博していた性教育論文の掲載中止に追い込む手口である。これは晩年に分厚いキンゼイ翻訳を、短期間で刊行するに至るまでの永井の心の闇を推し量る素材になる。性教育の第一人者と目されつつあった山宣を排除し、キンゼイ翻訳には真っ先に飛びつく。永井がどの程度、どれほど訳業に参加したのかは、疑問である。永井の研究倫理が問われる所以である。

永井の長年の優生思想の啓蒙活動、夥しい数の優生学関連著作、何よりも民族衛生学会の創設者である点で、「日本の国民優生法の父」と見なすことに、異存はないだろう。ただ、それが永井イメージとなり、彼が要望する断種法の中身の検討は看過されたままだし、人物研究もない。実は民族衛生学会(協会)の中で永井個人は、ナチ断種法ではなく、北欧系断

種法により関心を持った節がある。活動を丹念に追っていくと、そうなる。

また肝心の国民優生法制定の場に、彼はいない。東大定年退職後、台湾に、次いで北京に赴任するからで、東大医学部卒の若手に一切を託したと考えいだろう。それだけにその系譜の意向は明確ではない部分がある。そもそも、国民優生法制定以降の低迷する施行状況は、特に強制断種凍結は、運動に関与した人々を失望させるに十分なものであった。さらに台湾・北京での永井の足跡も、困難が予測されるが調査対象になるだろう。引き上げに際しての永井の行動・発言には曖昧さが多分にある。北京で何を目的に医学教育・研究を行おうとするのか。中国側が戦後も彼を褒め称えるのは何故なのか、等々。その心の闇は深い。

今後は、Ⅱ部年表とⅢ部年表にわたる系譜の連続性解明が、調査の主たる対象になる。東大医学部が戦後のナチ断種法批判言説の一拠点であることは看過できないし、生理学以外の他専攻・他教室の国民優生法への関与ぶりも調査を要する。生理学教室から精神医学教室へ、さらに産婦人科教室へと医学部の権限は移るものの、国民優生法制定に直に関わるのは東大医学部卒業生であり、他大学出身者は原則排除されているからだ。ここでも永井医学部長への擁護だけではなく、学内の反発も含めて、永井を意識する動きが、退職後も脳研にいる三宅鉦一や、精神医学教室内村を筆頭に目立つのである。

例えば内村はナチ断種法論議では、精神医学は距離を置き「良識」があったと、自画自賛する。が、ナチ断種法施行後にドイツ精神科医が相次いで懐疑を表明したから、日本でも慎重派が増えたのであって、永井法案を意識して、断種法制定要望を拙速に内村が提出した過去は封印されている。内村自伝『わが歩みし精神医学の道』(1968)は、さほど都合の悪くはないナチ断種法に関する戦前精神医学界の「良識」は、率直に書き綴る。この自伝は東大病院での青年医師の抗議活動が活発な時期に刊行される。腰を低くし、否を率直に認めることが賢明との判断が働いていたのではないかと。「良識」を自ら率いる精神医学教室・研究所の戦後史にも重ね合わせ、ナチ断種法批判言説を駆使する手法。永井と同じく権力を熟知する者の処世術が、ここには垣間見られる。

課題2. 平塚の初期優生思想形成過程：神秘主義と欧米フェミニズム論の影響

平塚の優生思想形成過程においても、新たに検討を要する二つの課題が出てきている。

- ① 水田が指摘するように、禅に代表される平塚の神秘主義は、前近代性として解されるものではなく、ドイツ観念哲学を基底におく欧米近代化そのものであったと考えてよい(水田[2007a][2007b])。とすれば、平塚個人は語るのを避けたがるが、当初は欧米文化に共鳴し、ドイツ情報通でもあった父の、情報源としての役割はもっと注目されてもいいはずだ。「反」フェミニストである父から漏れ聞くドイツ・欧米情報が、逆説的ではあるが山田嘉吉と似た影響力を、平塚が選び取るフェミニズム論に及ぼすのではないかと。これまでの平塚研究は、この点が看過されていた。初期日本フェミニズム論は翻訳中心

とはいえ、意外と高い水準にあった。若き平塚が日本フェミニズムの旗手となっていく際の最初の情報源は、翻訳が主であった。また平塚がこの時期に学んだ身近な人物から入手する欧米情報は、今から見てもよく吟味されたものであった。この点で若き平塚は最新情報の入手に恵まれていた。しかし、大正期末から全般的に日本のフェミニズム論の水準低下が目立つようになる。例えば河田嗣郎への『女性改造』(1924年5月号と7月号)での平塚の反論は、平塚のフェミニズム論の変化と限界を物語る。河田はそれを的確に見破っている。これはメディアが平塚や与謝野晶子という著名な女性だけを、評論家風に登場させていく時期とも符合する。フェミニズム論の低迷が、彼女らによって意図せざる結果として加速されていく。平塚も与謝野も夫に代わって生計を担っていたから、メディアを意識しての文筆業に入ることにためらいは少ない。売文のための執筆に追われる平塚と与謝野。メディアを通して広まる皮相的な戦前日本のフェミニズム論と、翻訳紹介が中心とはいえ一定の水準にあった明治末までの初期フェミニズム論との落差に、平塚が抱え込んだ「母性主義フェミニズムと優生思想」の矛盾も見えてくる。

- ② 西ヨーロッパの急激な少子化は、1880年から1930年の間に生じた。労働者層にも定着する少子化傾向は乳幼児死亡率の減少と対を成していた。それだけに国家レベルでの人口政策の難しさが20世紀になると意識される。個々人のレベルでは子育てへの親の責任と関心が増し、やがて生まれてくる子どもの品質管理にも注意が自ずと向いていく。この子育て文化の到来こそが、経済的要因や医学の進展以上に、20世紀に優生学が台頭する主因になるのだと、フェミニズム史は見なす(Allen[2005]10-12)。筆者も子育ての文化的要因分析を欠いては、20世紀優生学の歴史研究は片肺飛行に終わるだろうと、平塚研究を通して徐々に納得するようになった。平塚の「避妊の可否を論ず」稿は、大正デモクラシー下の新しい子育て文化と密接に関わっており、その原稿査定を仮にすれば、松原の「新優生学の最大の関心は人口ではなく『わが子』であり、そういう意味で、新優生学というのは個人本位の優生学である」との規定が(竹村[2003]11)、当てはまるのではないか。平塚の文章は時に矛盾する言葉づかいが入り混じり、真意が読みとりにくい箇所が結構ある。しかし、平塚が「避妊の可否を論ず」の加筆に迷い、躊躇するのは、「個人本位の優生学」とのジレンマにあったと解するのはさほどうがった見方ではあるまい。平塚は「避妊の可否を論ず」で、自制力のある男女による、生まれてくる「子供に対しての深い責任」を、その目覚めを、高らかに提唱するからである。ここより日本フェミニズムの旗手である平塚の提唱する肯定的(積極的)優生学は、21世紀の新優生学/リベラル優生学とフェミニズムとの関係を紐解く貴重な歴史素材になると、筆者は考える。

つまり、永井と同様に平塚に関しても、欧米の優生学情報とフェミニズム/「反」フェミニズム論との比較によって、その優生思想形成過程がより鮮明になるとの予測がなりたつ、

のである⁴⁹。両者は共に、社会事業実践も障害児者の援助にも関わらないのだが、平塚の娘と娘婿は創設期近江学園に職員として住む生き方をする。永井も推測をでないものの、遺伝性の障害予防のためならばと、使命感を燃やす。彼の優生運動への熱意は異様なほどに際立っている⁵⁰。

I部論文で見たように、若き永井と平塚が「優生思想の持ち主」になるのは、大澤講義に登場する結婚制限情報からであった。むしろ、その後の二人の辿る道は対照的だ。日本フェミニズムの旗手、平塚としては、花柳病男子結婚制限法案や「墮胎の是非」に盛り込む優生思想はフェミニズム運動のための方便であり、優生運動自体にはさほどの関心はない。

これに対して永井は失意のうちにドイツから帰朝、以後も研究に専念できる生活環境を維持できなかった⁵¹。彼はある意味での悲劇を背負った人であった。研究業績がなく、研究意欲も乏しい彼は、にもかかわらず日々、数歳しか年が離れていない後輩橋田の研究への気概を隣室で見ざるをえない。1918年、橋田帰朝後は生理学教室の雰囲気は一変した。大澤も永井に気遣いを見せるとはいえ、橋田への期待感は膨らむ。先輩としての体面を保つために、社会貢献や処世術で補填せざるをえない悲劇。郷里の誇る神童ともてはやされ、早々とエリートコースを用意された彼には、他の選択肢は見えなかったのかもしれない。

課題3 優生政策と権力機構の関係

最後に、ここで人物像をまとめておいてよいだろう。

歴史上の著名な断種法要望者は次のようなタイプだ——己が断種法の対象者になるとの想像力に欠け、エリートの地位にあっても劣等感と強烈な自尊心が混在し、主婦向けの啓蒙にも向く物腰のソフトさを兼備しながらも特定女性には排他的である——と。

障害差別や不妊手術を求める発言が少しでもあれば、即刻「優生思想の持ち主」の断罪するような、つまり「優生の言語」の言葉狩りを繰り返すだけの研究方法では、立ち向かえない強大な権力が機能している。本稿テーマに即して言えば、内務省・厚生省官僚と東

⁴⁹若き日の平塚の優生結婚とフェミニズム論の欧米情報ルーツの筆頭はドイツである。エレン・ケイ情報でさえ、平塚は勘の良さでドイツ流の解釈を正確に受けとめている。エレン・ケイの優生思想は本国よりもドイツで受けがよく、ドイツ・フェミニズム運動と優生思想の親密性はEvans([1976][1978])、通説と見なされるが、実態はそうではないようだ。母性保険・母子保護政策をめぐるフェミニズム各派の争点を整理し、系譜毎の優生学的言説の有無・強弱や特徴を検証したものはない。学生が論議したがる人気テーマの一つとはいえ、ドイツでもまとまった研究成果はなく、今に至る。BDF機関誌『女性(Die Frau)』に代表されるように、ドイツ・フェミニズム論は相当な水準にあった。ナチ断種法支持派の女医から、優生思想はまずない言えるA.ザロモンに至るまで多岐にわたる系譜があるのだが、フェミニズム穏健派は意外と「優生思想の持ち主」は少ない。BDFが母性保険で若きザロモンを論客にたてるが、社会科学・社会調査を身に着けた女性の一群はユートピア的な優生思想を提唱はしない。政策提言で勝負したいと彼女らは考えていたからである。

⁵⁰永井の母方は代々医師の家系であり、永井自身も当初は生理学教室ではなく、精神医学専攻を希望していた。当時、弟子を持つてはいなかった大澤教授に所属相談に行き、生理学教室に入る。その時点で将来も約束されたものと判断される。多弁で、社交家、文章もうまく、ベストセラーといえる啓蒙書も刊行する永井は、にもかかわらず自らの私生活には言及はしない。

⁵¹後に実の弟が、ドイツ帰朝後に兄である永井が家庭の責務を背負い、そのために研究に専念できなくなったと述懐。郷里の家族のために難問を抱えていた可能性がある。

大医学部との権力配分が、断種法制定運動を促したのである。法制定前後の内実も複雑で、行政トップと若手専門官僚の間に人口政策の量と質の比重をめぐる対立もあった。この種の権力集団の提言に対して、平塚の不用意な発言は「どの程度に」にそれに近いのか、遠いのか。その査定には、フェミニズム論と優生思想の密着する関係性に、さらに切り込んでいかねばなるまい。

課題は多い。特に戦後史は、国際的に見てもまともに取り組まれてはいない。これは一人ではできない程の遠大な研究計画になるのだが、優生学の国際比較を始めるに際しては、まずⅡ部年表・註のような水準で、ドイツ・アメリカ・北欧を主軸にする、国別・地域別の戦後史年表作成をし、それをたたき台にすることが基本であろう。また本稿巻末の資料編のような人物解題は、国際比較でも威力を発揮する手法ではなかろうか。

ともあれ、本稿は1990年代初頭から横行している皮相的な「あの人も、この人も優生思想の持ち主」として、フェミニズムの旗手や障害福祉関係者を名指しで批判する、安易な研究方法論への一定の歯止めにはなろう。加えて優生学的言説分析の歴史研究方法は⁵²、「いか程の優生思想の持ち主」かの査定のよきツールであり続けるはずだ。また権力を持つ男性主導の優生運動の系譜と、女性主導の運動との比較考察も、歴史方法論として有効との手ごたえを感じる。

優生結婚・結婚制限情報を日本に体系的に紹介する起点は、Ⅰ部で見たように東大生理学教室と考えてよい。大澤・永井は最新の欧米情報、特にドイツ生理学からの性差の知見に依拠して優生結婚・結婚制限を説く、リーダーとなる。彼等はパートナーとしての良妻賢母像も提示し、女性の近代的役割や高等教育の機会提供に賛同する。が、彼等は同時に手ごわい「反」フェミニストでもあった。この柔らかな「反」フェミニズムの系譜の優生学的言説は、国家が上から押し付ける優生政策や、保守主義者が声高に語る弁よりも、はるかに持続的で効果的である。

加藤秀一はそれをよく見破っている。穏やかな表情と柔らかな口調で優生結婚を語る永井の手強さを、である。「政府が上から押しつけてくる粗雑な事業などよりも、より密やかに人びとの心情に忍び込み、それを下から優生学に浸していくような言葉の作用こそが真に警戒すべきものであるはずだ」と(加藤[2004]205)。

永井流の啓蒙活動の手口は、敗戦後の日本社会に当の永井と門下生を筆頭に継承され、優生保護法の個々人への内面化によって、「下から優生学に浸していくような言葉の作用」

⁵²岡田論文([2005a])で試行した言説分析のための設問は、おおむね以下の通り——①平塚は、いつ、どのように「性と生殖の自己決定」から、「性と生殖の自己管理のすすめ」に入り、さらに「性と生殖の国家管理」断種法要求にまで至るのか、②なぜ否定的(消極的)優生学のあるレベル以上の「優生の言語」を語らずに、長期の沈黙に入り、しかし結局は断種法要求を加筆してしまうのか、③こうした「優生の言語」の発言中断と再開は平塚に固有の態度なのか。また平塚が母子保護で用いる「権利の言語」との組み合わせも、平塚固有のものなのか——。同様の分析視点は、「福祉国家への道」に入る欧米フェミニズム/フェミニストの優生思想に関する個別研究にも援用できると考える。

を完結させていくのだが、過去の否定的(消極的)優生学論議を想起させかねない、新優生学の台頭があるからこそ、歴史研究の意義もある。「平塚らいてうの優生思想を考える」著作は、2年先をめどに刊行する予定である。それとは別に、断種法制定運動のリーダー永井潜の生涯・活動を、東大医学部の役割とそこでのナチ断種法の影響力に絞り込み、検討を続行する。すでに本稿で要所要所、指摘はしているが、生理学教室橋田邦彦・大澤謙二との対比によって、隠されていた永井像も鮮明なものとなろう。永井と永井を取り巻く人々こそが、紛れもなく日本から発信される優生学の国際比較史の中心に来ると、想定される。地道な作業は続く。だが、それなくして概念自体が操作されやすい優生学の歴史には迫れない。

欧米諸国でも本格的な優生学の国際比較史が皆無に近い状態では、課題は山積みであり、どこまで深められるのかは定かではない⁵³。が、岡田論文([2005a])と本稿でもって、平塚の優生思想形成過程は網羅的に把握できるのではないかと考える。

【結の主要参考文献】

※主要参考文献であり重複文献は序とⅠ-1とⅡ参照。他はⅢ-3の文献リストに一括記載

1. 邦語文献

1) 1945年まで

内村祐之(1940.5.27)「断種法の過去と将来 国民優生法への期待」『帝国大学新聞』

2) 1945年以降

内村祐之(1947)『精神医学者の滴想』同盟出版社

内村祐之(1968)『わが歩みし精神医学の道』みすず書房

加藤秀一(2004)『<恋愛結婚>は何をもたらしたか——性道徳と優生思想の百年間』ちくま新書

金森修(2004)『自然主義の臨界』勁草書房

座談会(1958.8)「永井先生を偲ぶ」『日本医事新報』1792, 23-50.

2. 欧米関連文献

※Ⅰ部主要参考文献と重複する欧米文献は省く

ウルリケ・ヴェール(2005)「ドイツ語圏における日本女性・ジェンダー史研究——『女性の視点』、『国家』を本質化もせず、軽視もしない日本女性・ジェンダー史のために」『歴史評論』660, 50-62.

⁵³本来、ある程度は取り組みたいと予定していた課題・手順を要約して示しておく。筆者の仕事スピードではなお7~8年はかかる。①Ⅲ部年表を註をつけて完成させる。戦後日本のナチ断種法批判言説を整理し、さらに戦後ドイツの主要なナチ断種法批判言説と対比させる、②巻末資料編人物解題と似た書式で、ドイツ優生運動の主要人物の活動・著作内容を整理する、③Ⅱ部年表と似た書式で戦前ドイツ・ドイツ語圏年表を作成する、④作業の①②③を終えれば索引もできるし、母性主義フェミニズムの影響が強固な日独フェミニズムによる女性主導の優生運動の役割と限界、並びに「反」フェミニストのエリート男性主導の運動が断種法制定に結びつく背景も見えてくるように思う。

資料編

人物解題

青木延春・荒川五郎・氏原佐蔵・内村祐之
大澤謙二・古屋芳雄・杉田直樹・瀬木三雄
三宅鉦一・八木逸郎・吉益脩夫

青木延春 あおき・のぶはる (1902. 2. 18～1986. 12. 3)

長崎県に生まれる。1927年東京帝国大学医学部卒業後、精神病学教室の三宅鉦一教授に師事、1930年8月非行児童の感化教育施設国立武蔵野学院の院医を勤める。1933年内務省衛生局予防課勤務となり、衛生技術者を中心とする日本公衆保健協会へ入会し機関紙『日本公衆保健協会雑誌』の編集委員となる。「凡そ国運の消長に関係深い疾患としては結核・精神病・花柳病の三者を挙げることが出来る」(青木 [1937] 55)として、それ等に関する記事を寄稿している。

1938年1月厚生省が新設され青木は厚生省予防局優生課勤務となり、優生法案作成に携わることとなった。同年2月優生課は「新しい課で伝染性でない慢性疾病に対してメスを加へて行く事になっておる。断種法案等が出る事も遅い事ではあるまい」(論壇 [1938] 5)と述べられており、法案作成が進んでいることが伺える。1938年10月第2回人口問題全国協議会で「断種制度の遺伝学的基礎」を報告した。厚生省は「民族衛生協議会」「民族衛生研究会」を設置し、優生法案作成に大きく前進、「民族優生制度案要綱」を発表。1940年2月「国民優生法案」が閣議決定され、同年3月政府から第75回帝国議会に提出された。3月12日衆議院本会議で吉田厚生大臣が法案提出理由を説明。青木は厚生技師として衆議院国民優生法案委員会第三回と第五回、貴族院国民優生法案特別委員会へ出席して説明した。1940年3月国民優生法は可決成立、5月公布、1941年7月施行となり、その翌月8月優生課は廃止された。1946年2月国立武蔵野学院長に赴任。学院に教護事業職員養成所が附設され青木は所長を兼任した。養成所では三宅鉦一、内村祐之ら大学教授からも講師となり、青木も「優生遺伝学」を講義した。

1941年2月『体力向上と優生断種』を出版、序文の日付は1939年6月で「寸時も早く」優生断種法が制定されることを「切望」と書いている。その増補改訂版『優生結婚と優生断種』を「国民優生法」成立後1941年11月出版、戦後1948年9月『応用優生学としての断種』を出版。これら三冊の本のタイトルは異なるが、それぞれ出版の目的に応じた部分的改訂のみである。戦前出版の2冊の序文では「遺伝問題の解決は一に国家の力によつて大規模な計画の下に是を追及するに非る限り到底効果を期待できない……民族優生を企図するには是非共国家的制度の確立を必要」と断種法制定を確信。戦後の『応用優生学としての断種』の序文で過剰人口対策は「勿論時の流としてかゝる産児制限はその必要な限度に於いて承認されよう。然し乍らその必要は何よりも先ず優生学的、医学的適応であるべき……優生学的、医学的適応は人類のある限り常に正しい」と戦後も優生を強く主張している。「優生断種を効果的に実施する為には強制の色彩が是非必要」(青木 [1941. 2] 42 [1941. 11] 26 [1948] 20)との記述は戦前戦後とも修正はない。戦後カットされたのは国民優生法の解説とそのコメントである。1976年のインタビューでは「厚生省(内務省)で人口問題やいろんな仕事をしてきた」(記念特集 [1976] 107)とは言っているが優生法に触れていない。「青木延春は国民優生法法案作成のもっとも中心的人物」(廣嶋 [1981] 61)の評がある。1986年12月3日84歳で死去。

【引用文献】

- ① 青木延春 (1937. 12) 「事変と花柳病」『日本公衆保健協会雑誌』13 卷 12 号 (55)
 ② 論壇 (1938. 2) 「厚生省を語る」『日本公衆保健協会雑誌』14 卷 2 号 (3~12)
 ③ 青木延春 (1941. 2) 『体力向上と優生断種』龍吟社 ④ 青木延春 (1941. 11) 『優生結婚と優生断種』龍吟社 ⑤ 青木延春 (1948) 『応用優生学としての断種』龍吟社
 ⑥ 記念特集 (1976. 12) 「明治生まれの O・B 大いに語る」『非行少年』174 号 (106~109)
 ⑦ 廣嶋清志 (1981. 10) 「現代日本人口政策史小論 (2)」『人口問題研究』160 号 (61~77)

青木延春年譜

| 年月日 | 事項 |
|-------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1902. 2. 18 | 長崎県に生まれる |
| 1927. | 東京帝国大学医学部卒業 三宅鉦一教授 (精神病学教室) に師事 |
| 1930. 8. 6 | 国立武蔵野学院院医 |
| 1933. | 内務省衛生局予防課勤務 『日本公衆保健協会雑誌』編集委員 |
| 1934. | 博士学位取得 |
| 1938. | 1 月厚生省予防局優生課勤務 5 月日本精神衛生協会「断種問題に関する理事懇談会」出席 10 月第 2 回人口問題全国協議会で「断種制度の遺伝学的基礎」を報告 7 月「我国に於ける断種法立法運動の経緯」を『精神衛生』に掲載 |
| 1939. 7. | 民族衛生短期講習会で「遺伝健康方策」を講義 |
| 1940. | 3 月第 75 回帝国議会衆議院国民優生法案委員会第 3 回と第 5 回に出席、貴族院国民優生法特別委員会に出席 8 月「優生手術について」を『人口問題研究』に掲載 11 月第 4 回人口問題全国協議会で「国民優生法の対象たる疾患について」を報告 |
| 1941. | 2 月『体力向上と優生断種』出版 3 月第 40 回日本精神神経学会で「国民優生法」を講演 11 月『優生結婚と優生断種』出版 |
| 1942. | 3 月国民優生法運用円滑のため日本婦人科学会総会后、官民合同協議会に高野局長と出席 5 月『優生結婚の話』出版 |
| 1946. 2. 28 | 国立武蔵野学院院長 |
| 1948. 9. | 『応用優生学としての断種』出版 |
| 1953. | 施設運営をテーマに米国出張 (1953 年 11 月~1954 年 5 月) |
| 1957. | 『非行少年』発行 |
| 1969. | 2 月『少年非行の治療教育』出版 4 月『武蔵野学院五十年誌』発行 |
| 1973. 7. 27 | 国立武蔵野学院院長退任 |
| 1986. 12. 3 | 死去 (84 歳)。 |

【年譜作成主要参考文献】

- ① 国立武蔵野学院編 (1969. 4) 『武蔵野学院五十年誌』国立武蔵野学院発行
 ② 宮沢修 (1987. 4) 「教護院の戦後を築いた人々 青木延春、石原登両先生の事ども」『向陵』24 卷 1 号

荒川五郎 あらかわ・ごろう (1865. 6. 17~1944. 8. 5)

広島県に生まれる。1882年広島県師範学校を卒業後県内の小学校で教鞭をとるが勉学の志固く、日本法律学校(現日本大学)へ入学し1893年卒業した。1899年広島中国新聞社長に請われ中国新聞の主筆となるが入社後3年を経ずして1902年総選挙で衆議院議員に立候補した。紙上に「候補宣言」を掲載したが、それは彼の「入社の際」をそのまま転載したものである。入社時から立候補を考えていたと思われる。初回と2回目(1903年)の選挙では落選、3回目(1904年)に初当選した。1907年12月「中央政界で活躍するため」中国新聞社を退社した。

1920年第42回帝国議会へ平塚らいてうらが花柳病男子結婚制限法制定と治安警察法第五条改正を請願したとき荒川が説明した。荒川は「最も放縦なる生活を致して居る男子」の結婚を制限し「家庭婦人を保護し、子供を保護して、国家の根元である国民の改善を計る」(衆議院[1983b]616)ことが急務と説明した。この委員会で潮衛生局長はアメリカの滅種法を紹介(衆議院[1983b]617)している。治安警察法第五条改正について荒川は、「女子にも…活動を希望する者は、其自由を許すと云ふことは、此時代に応ずる必要な事と思ひます、警察法に是等の制限があると云ふことは、甚だしき時代錯誤」(衆議院[1983b]613))と主張した。荒川は翌年の第44回帝国議会へらいてうらが提出したそれら二請願の紹介議員にもなり、議会で説明した。

1928年2月総選挙で荒川は次点で落選した。1929年5月「我が民族の発展の方策研究」などの目的で米国へ出発。1930年2月総選挙で荒川は当選、第58回帝国議会へ「我が民族の海外発展に関する建議案」を提出した。同議会へ中馬興丸が提出した「帯患者結婚制限法制定に関する建議案」の賛成者に八木逸郎とともに名を連ねている。これは「優生学の命する所に依り」結婚以前に「必要なる外科手術を受けしめ子孫繁殖の途を絶つを必要とす」とあり「子孫繁殖の途を絶つ」法の制定を要求している。但し議題とならず終わる。

1933年1月第64回帝国議会へ荒川は少年教護法を提出。「心理学的医学的の鑑別」「少年の義務教育を受くる権利」などを説明し、可決成立させた。

1934年1月荒川は池田秀雄と「民族優生保護法案」を第65回帝国議会へ提出した。「悪種遺伝の防止根絶……民族の浄化強成」(衆議院[1984a]341)の方法としての断種を求めた最初の法案である。本会議、委員会での説明のみで審議はなく審議未了となった。1935年第67回帝国議会へ荒川、池田、八木、青木の4名は同法案を提出、荒川は本会議、委員会で説明、委員会では政府側の答弁もあり、ここで初めて断種法が議会で論議されたと言える。1936年12月民族衛生協会の永井や吉益、八木議員らと会合し、断種法草案を決定し1937年第70回帝国議会へ八木と提出したが、議題とならないまま議会は解散した。法案の名称は前回と同じであるが、断種の対象者、断種を申請出来る人を規定、断種の適否を判定する機関などに違いがある。1937年4月総選挙で落選したが、1941年「日本民族は果して優秀なりや」を『国民新聞』に連載。1942年4月総選挙に立候補していない。

1944年8月79歳で死去。「教育代議士」との評がある。

【引用文献】

- ① 衆議院（1983b）『第42回帝国議会衆議院委員会議録 23』
 ② 衆議院（1984a）『第65回帝国議会衆議院委員会議録 61』

荒川五郎年譜

| 年月日 | 事 項 |
|--------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| 1865. 6. 17 | 広島県に生まれる |
| 1882. | 広島県師範学校中等師範学科卒業 可部尋常小学校訓導 沼田高等小学校訓導 |
| 1890. | 船越衛男爵の知遇を得て上京、日本法律学校（現日本大学）入学 |
| 1893. | 日本法律学校卒業後、同校の事務長兼教務主任 |
| 1899. 5 | 中国新聞主筆 |
| 1902. 8. | 総選挙に立候補し落選 |
| 1903. 3. | 再度総選挙に立候補し落選 |
| 1904. 3. | 総選挙で当選 |
| 1905. 1. | 満州から朝鮮を経て帰国 |
| 1914. | 第2次大隈内閣で逓信省副参政官 |
| 1919. 2. | 第41回帝国議会へ「玄米食奨励に関する建議案」提出 |
| 1920. | 第42回帝国議会衆議院少年院法案矯正院法案委員会委員 第42回帝国議会衆議院で新婦人協会提出の花柳病男子結婚制限法制定、治安警察法第五条修正請願を富田議員の代理で説明 |
| 1921. 2 | 第44回帝国議会衆議院で新婦人協会の花柳病男子結婚制限法制定の請願を説明 |
| 1928. 2. | 総選挙で落選 |
| 1929. | ハワイ・アメリカなど海外視察 |
| 1930. | 総選挙で当選 第58回帝国議会へ中馬興丸提出の「帯患者結婚制限法制定に関する建議案」賛成者となる 「我が民族の海外発展に関する建議案」提出 |
| 1933. | 第64回帝国議会へ提出の「少年教護法」可決成立 |
| 1934. | 第65回帝国議会へ池田秀雄と「民族優生保護法案」提出、審議未了 「国家興隆の根本事業」を『民族衛生』に掲載 |
| 1935. | 第67回帝国議会へ池田、八木、青木と「民族優生保護法案」提出、審議未了 |
| 1936. 12. 2. | 八木議員、民族衛生協会の永井、吉益らと断種法提出の会合。 |
| 1937. | 第70回帝国議会へ池田、八木、青木と「民族優生保護法案」提出、議題とならず 4月総選挙で落選 |
| 1942. 4. 30. | 総選挙に立候補せず |
| 1944. 8. 5. | 死去（79歳） |

【年譜作成主要参考文献】

- ① 中国新聞社編（1928. 12）『巨人新人』中国新聞社（35-44）
 ② 中国新聞社史編纂委員会（1972. 5）『中国新聞八十年史』中国新聞社

内村祐之 うちむら・ゆうし (1897. 11. 12~1980. 8. 17)

東京に生まれる。父はキリスト者内村鑑三。1923年東京帝国大学医学部を卒業、呉秀三教授の精神病学講座に入局。その後松沢病院に勤務。精神医学を選んだ理由について「確かにこれだという決定的な動機はなかった……精神医学は私の性分であったともいえよう」(内村 [1968] 8、18) としており、『魂の医師』鑑三は、その息子が『心の医師』を志したことにいたく満足した」(内村 [1968] 19) と書いている。

鑑三が米国で看護人を勤めた経験のある白痴院院長であり、低能児教育学校主任医長でもあるマーチン・バーが1921年4月来日し「低能児発生の社会的予防」を講演した。後に内村はバーを我国への断種法の最初の提唱者であるとし「老精神医が緒心に断種法の必要を説くのを聴いた一人である」(内村 [1940]) と思い出している。

1924年内村は欧州留学後に北海道大学精神病学講座の助教授への招聘に応じ、1925年ミュンヘンでスピールマイヤーの脳病理学研究室で学んだ。1927年帰国後北大へ赴任し、1928年4月助教授から教授となった。

1934年永井潜委員長の日本学術振興会第8小委員会「アイヌの医学的、生物学的研究」に参加し、精神病学部を担当、調査結果を報告した。アイヌ研究に関しては「何が一番の仕事だったかと、今日、振り返って見ると、それはやはりアイヌの比較精神医学的研究であった」(内村 [1968] 147) としている。

1936年5月三宅鉦一教授の定年退官で内村は東京帝国大学精神病学教授となり、松沢病院院長を兼務した。三宅は定年と同時に脳研究室を設置したことに対して、内村は「予想だにせぬ不愉快さ」(内村 [1968] 167) を感じたと振り返っている。

東大教授の地位は中央官庁から委員などを依頼される機会が多く、内村は「東京赴任後、間もない時期に当面した最初の難題はいわゆる断種法、正しくは国民優生法の制定であった」(内村 [1968] 197) と書いており、厚生省の民族衛生協議会、民族衛生研究会の委員となり、国民優生法の制定に関わった。1936年日本精神衛生協会長三宅鉦一と救済会理事長内村祐之連名で、内務大臣宛「精神病対策確立に関する陳情書」を提出。ここには「精神病者の過半数は遺伝性のものなるを以て断種法を制定して出来得る限り遺伝性精神病者の発生を予防せられたし」(雑報 [1936] 69-71) と断種法制定を要望している。しかしこれに関して『わが歩みし精神医学の道』の「国民優生法の制定をめぐる」の項では何も語られていない。1947年出版の『精神医学者の滴想』では『帝国大学新聞』(1940. 5. 27) に掲載した「断種法の過去と将来 国民優生法への期待」を「優生法の過去と将来」と題名を変更して収載、内容の変更はなく「国民優生法」の制定への高い評価と賛意を表し「序」では「自分の専門に対する或は医学全般に対する、さらにまた人生に対する自分の立場を、はっきりと示し得たと思ふ」と断定している。またこの『精神医学者の滴想』を内村の死後1984年中公文庫から出版されたが1947年版をそのまま収録している。「解説」は内村の弟子の加賀乙彦で、断種法には一切触れていない。内村は1949年松沢病院院長を辞任、1958年東京大学を定年退官した。1980年8月82歳で死去。

【引用文献】

- ① 内村祐之(1968.9)『わが歩みし精神医学の道』みすず書房
- ② 内村祐之(1940.5.27)「断種法の過去と将来 国民優生法への期待」『帝国大学新聞』
- ③ 「雑報」(1936.10)『精神神経学雑誌』40 卷 10 号(69-71)

内村祐之年譜

| 年月日 | 事項 |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1897. 11. 12 | 東京に生まれる 父は内村鑑三 |
| 1923. | 東京帝国大学医学部卒業 呉教授の精神病学講座へ入局 松沢病院院医 |
| 1925. 4 | 欧州留学 |
| 1927. | 帰国後北海道帝大医学部精神病学助教授 |
| 1928. 4 | 医学博士学位取得 助教授から教授となる |
| 1931. 6 | 日本精神衛生協会評議員 |
| 1934. 7 | 日本学術振興会第 8 小委員会永井潜委員長「アイヌの医学的、生物学的研究」に参加 |
| 1936. | 東京帝国大学精神病学講座教授へ転任 松沢病院院長兼務 三宅鉦一と内務大臣宛「精神病対策確立に関する陳情書」(断種法制定あり)を提出 |
| 1937. 4. 3 | 日本精神衛生協会副会長 |
| 1938. | 4 月厚生省民族衛生協議会委員、日本学術振興会第 26 優性遺伝研究小委員会委員 6 月公立精神病院長会議で断種法審議、日本精神病院協会第七回総会で「精神疾患の遺伝に就て」を講演 11 月厚生省民族衛生研究会委員 |
| 1939. | 民族衛生短期講習会で講義 八丈島で精神病者調査 11 月長与又郎・西丸四方と共著『傑出人脳の研究 第 1 輯』出版 |
| 1943. 6 | 政府の海軍航空兵疲労実態調査のためラバウルへ |
| 1947. 4 | 『精神医学者の滴想』出版 |
| 1949. | 松沢病院院長辞任 |
| 1952. | 東大医学部長 (1956 年まで) |
| 1958. 3. 31 | 東大定年退官 |
| 1961. 10. | 国立精神衛生研究所所長 (翌年辞任) |
| 1968. 9. 30 | 『わが歩みし精神医学の道』出版 |
| 1973. 10. 22 | 『鑑三・野球・精神医学』出版 |
| 1980. 8. 17 | 死去 82 歳 |

【年譜作成主要参考文献】

- ① 内村祐之(1947.4)『精神医学者の滴想』同盟出版
- ② 内村祐之(1968.9)『わが歩みし精神医学の道』みすず書房
- ③ 秋元波留夫(監) 内村祐之先生追悼録刊行会編(1982.9)『内村祐之 一その人と業績』創造出版
- ④ 東京大学精神医学教室 120 年編集委員会編(2007.3)『東京大学精神医学教室 120 年』新興医学出版

氏原佐蔵 うじはら・すけぞう（生年月日不詳～1931. 6. 13）

「民族衛生学に関しては之を吾国民に紹介した最初の一人者を以て自任してゐる」という氏原は、内務省衛生局の技師として1914年の『大日本私立衛生会雑誌』に民族衛生学の論文を3回連載し、これらをまとめた『民族衛生学』を11月に出版する。「国力の発展は優良なる民族の奮励に俟つべく、民勢の発達を期せんとするには民族の退化悪変を其未然に防止」することであると述べ、「精系理断術による滅種法」として簡単な小手術で、米国において既に実施されている断種法を詳しく紹介し、その必要を説いている。

また、国際民族衛生学協会の規約が白人種に限定されていることで、「民族衛生学の現状は眼中白人種あるのみにして黄黒人種は除外」されている現実を知り、「彼等を凌駕せんために一層切実に優良なる子孫の繁殖を謀」らねばならないと民族衛生学の重要性を説く。

本書刊行の翌年1915年に日本で初めて、ハンセン病患者への輸精管切除手術（断種）を行った光田健輔は、子どもを生まないための「最も弊害の少ない、安全で簡単な方法」として「そのころ内務省予防課の氏原佐蔵氏が翻訳してパンフレットで紹介していた優生手術が最もいいと考へ」て「志願者を順次手術」する。一方、氏原はこの年6月9日付『読売新聞』に「癩病と結婚」を書いている。「癩病」は遺伝病ではないが、遺伝病の人は結婚を避けるべきという世論に対し「国民の衛生を司る者はかゝる涙の無い処置は行い難い」と述べるのは、結婚禁止ではなく輸精管切除手術後の結婚を示唆しているのであろうか。

1916年5月と1918年1月に「内務技師氏原佐蔵海外出張ノ件」という記録がある。この時期欧州は大戦中であり、アメリカ方面かと思われる。1916年6月には内務省に保健衛生調査会が設置され、1918年4月には同調査会に専任職員8名が充てられ、民族衛生推進者氏原も任命され、1919年3月公布の結核予防法、精神病院法の原案作成にかかわっていく。

1920年から21年には、第一次大戦後の欧米各国を回って資料蒐集を行っている。花柳病についても調査を行っており、帰国後の1921年6月には保健衛生調査会花柳病予防に関する特別委員会の委員となり、欧米視察の報告をし、花柳病予防法に関する審議の草案づくりも担当している。花柳病予防法の成立は1927年であるが、この時期の重要な法案づくりにかかわっていたことがわかる。

また、この出張中の1920年に見学したドイツ運動競技展覧会に敗戦国ドイツの復興を見、「欧大陸に於て運動熱が大」なことに注目する。1924年に『国民保健と運動奨励』という小冊子を自分で発行して運動奨励につとめる。1925年6月の日本公衆保健協会設立に参加して理事となり、同会の『日本公衆保健協会雑誌』の1925年には「運動奨励事業に就て」を、1926年には「奨健行政の興振を提唱す」などを掲載し積極的優生学を展開していく。

1928年5月開催の民族衛生展覧会では「民族衛生上の社会施設」と題して講演を行い、「不良素質者の制限と優良素質者の増加政策」の立法制定の必要を主張している。

1930年11月発会の民族衛生学会では評議員となるが、ほとんど活動のないまま翌1931年6月13日に死去する。氏原は民族衛生学会の活動が本格化するなど官民一体の断種法論議が行われる以前の内務省衛生局の実務面での中心人物であったとことがうかがえる。

氏原佐蔵年譜

| 年月日 | 事項 |
|-----------|----------------------------------------|
| | 生年月日不明。本籍地は東京 |
| 1906 | 「試験合格」（当時の仕組み不明だが検定合格で医学の資格か）専門は衛生学 |
| 1910? | このころ、厚生省衛生局技師となる |
| 1914 | 『結核と社会』医海時報社 |
| 4. | 「民族衛生学の勃興を促す」『大日本私立衛生会雑誌』372 |
| 5. | 「民族衛生学発達の歴史」『大日本私立衛生会雑誌』373 |
| 6. | 「民族衛生学発達の職責」『大日本私立衛生会雑誌』374 |
| 11. | 『民族衛生学』南江堂書店 |
| 1915.6.9 | 『読売新聞』に「癩病と結婚」（内務省衛生局員 氏原佐蔵） |
| 1916.5. | 5月18日付で海外出張の記録「内務技師氏原佐蔵海外出張の件」 |
| 6. | 内務省に保健衛生調査会設置（この時は専任職員なし） |
| 1918.1. | 1月12日付で海外出張の記録「内務技師氏原佐蔵海外へ出張の件」 |
| 4. | 保健衛生調査会に専任職員8名が充てられ、技師として任命される |
| 1920.2 | 「保健調査実績及計画」『大日本私立衛生会雑誌』441 |
| 1920～1921 | 第一次大戦後の欧米各国を官命により回り、資料を蒐集する |
| 1921.6 | 保健衛生調査会花柳病予防に関する特別委員会の委員となり、欧米視察の報告をする |
| 1923.3 | 「独逸民族衛生協会の声明書を読みて」『公衆衛生』41-3 |
| 1924 | 『国民保健と運動奨励』著作兼発行（小冊子） |
| 1925.6 | 日本公衆保健協会設立に参加し理事に。『日本公衆保健協会雑誌』創刊 |
| 12. | 「運動奨励事業に就て」『日本公衆保健協会雑誌』1-4 |
| 1926.3. | 『奨健行政の興振』『日本公衆保健協会雑誌』2-3 |
| 7. | 『売笑婦及花柳病』警察協会 |
| 1927.2. | 論文「日本農村住民発育の研究」で学位を受く（審査大学は「慈大」） |
| 10. | 「布哇及び米本土の医事衛生瞥見」『医科器械学雑誌』5-4 |
| 11. | 「人口問題と産児制限及優生論」『大調和』1-8 |
| 1928.5.9 | 日本赤十字社主催「民族衛生展覧会」で講演「民族衛生上の社会施設」 |
| 6. | 「民族衛生上の社会施設」『日本赤十字社参考館報』3 |
| 11.30 | 日本民族衛生学会発会し、評議員となる |
| 1931.6.13 | 死去 |

【主要参考文献】

- ① 氏原佐蔵「民族衛生学」（1914）『性と生殖の人権問題資料集成 第16巻』不二出版、
- ② 光田健輔『回春病室』朝日新聞社、1950 ③ 日本医学博士録』東西医学社、1944
- ④ 国立公文書館デジタルアーカイブ

大澤謙二 おおさわ・けんじ (1852. 7. 3～1927. 1. 10)

三河国(愛知県)に生まれる。11歳で豊橋藩の侍医大澤玄龍の養子となり大澤謙二と改姓名。1866年江戸に出て医学所に入る。1870年10月に明治政府から文部省の第1回海外留学生としてドイツ留学の命を受ける。約1年間ベルリンでの語学等の準備教育の後、1873年1月ベルリン大学に入学するが、政府の全留学生への突然の帰国命令で1874年8月に学業半ばで帰国し、開校間もない東京医学校の二等教授となる。来日したドイツ人教師E. Tiegelの助手を兼務し、1877年には共同研究を論文にまとめる。1878年2月にはTiegelの紹介状持参でドイツへの私費留学に出発。4月ストラスブルグ大学に入学し、F. L. Goltzに生理学をHoppeseylerに医化学を学ぶ。1882年にドクトル・メディチーネの学位を得て11月帰国。12月には東京大学医学部正教授¹に任命されTiegelに代わって生理学を担当し、同大学初の日本人教授となり、**日本生理学の基礎を築く**。1891年には東京帝国大学医科大学長となり、貴族院議員にも勅撰され激務の5年間を過ごす。

1901年日本女子大学校開校時から教授を兼務し、1921年まで家政学部で生理学を教える。1903年同校家政学部に入學した平塚らいてうは1年生で大澤の生理学を受講。

1901年には日本代表としてイタリアのトリノで開催の第5回万国生理学会に派遣され、講演し、ベルリンの万国動物学会にも出席して講演。その後アメリカをまわって帰国し、このとき欧米各国の最新資料や情報を入手。これら当時の欧米の影響を色濃く受けて1904年に書かれたのが『**社会的衛生 体質改良論**』である。フェミニズムに発した考え方や結婚制限についての個人の自由の侵害を危惧する慎重な態度がみられる。ただし花柳病については明確な姿勢を示し、花柳病者の結婚禁止と交接厳禁、損害賠償請求など法的制裁の可能性を明言している。1905年日本花柳病予防会が発会し、副会長となる。

ところが4年後の1908年3月から5月に31回『読売新聞』に連載された「**生理学上より観たる婦人の根本問題**」は、欧米で始まっていた「反フェミニズムの潮流の影響をうけたものとなっている。1909年に出された『**通俗結婚新説**』では、個人の自由よりも国家の利益優先を、と自ら「**国家主義を奉ずるもの**」と称し、「去勢術」(断種)を行うことが富国強兵につながるとして、インディアナ州で1907年成立の「**去勢法**」(断種法)検討を説く。これは、もっとも早い時期のわが国への詳細な断種法の紹介といえるものである。

1920年新婦人協会の花柳病男子結婚制限法制定の請願に関し、「花柳病男子の結婚制限に就て」で「花柳病を家庭に入れるのは通常男子」とし、「請願は採択すべき」と述べる。

退官後は、女性雑誌への掲載が急増。テーマは花柳病中心ではあるが、「人類改造のため」には「**遺伝素質の善悪調査は最も重要**」であり、「**子孫の精神や身体に遺伝する体質が問題**」であると、「**理想的結婚法**」を説いて女性への持論の浸透を図っている。大澤が生涯に発表した論文は106編である。単なる研究者にとどまらず、優生思想の啓蒙活動では日本の先駆をきった。この点では、永井は大澤の後継者といえる。

¹東京大学医学部名称の変遷：1874.5.7 東京医学校。1877.4.12 東京大学成立し、医学校は医学部と改称(東京大学医学部)。1886.3.2 東京帝国大学医科大学と改称。1919.2.6 東京帝国大学医学部と改称。1947.9.30 東京大学医学部となる。

大澤謙二年譜

| 年月日 | 事項 |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1852. 7. 3 | 嘉永5年三河国(愛知県)の神職大林美濃の4男に生まれる。幼名は右近次 |
| 1863(文久3) | 豊橋藩の侍医大澤玄龍の養子となり、大澤謙二と改姓名 |
| 1866(慶応2) | 江戸に出、医学所に入るが戊辰戦争で廃止。明治2年医学所再興で再入学 |
| 1870. 10 | 明治政府よりドイツ留学を命ぜられ、1871年ベルリン到着し準備教育 |
| 1873. 1 | ベルリン大学に入学するが、12月文部省から全留学生に召還命令 |
| 1874. 8 | ドイツより帰国し、11月から東京医学校の二等教授となる |
| 1876 | 来日したドイツ人教師E. Tiegelの助手を兼務。Tiegelとの共同研究論文 |
| 1878. 2. 11 | 私費でドイツ留学へ(Tiegelの紹介状持参) |
| 4. | ストラスブルグ大学に入学しGoltsに生理学をHoppeseylerに医化学を学ぶ |
| 1882. 11. 18 | ドクトル・メディチーネの学位を得て帰国し、12月東京大学医学部正教授に任命され、Tiegelに代わって生理学を担当。同大学初の日本人教授 |
| 1887 | 学生の研究発表の場として東京医学会を小金井良精と創設し、初代会長となる。『東京医学会雑誌』を創刊 |
| 1891 | 東京帝国大学医科大学長となり、貴族院議員に勅撰される。 |
| 1899 | 東京帝大医学部鉄門倶楽部創立し、初代会頭となる |
| 1901 | 生理学総論を生理学第二講座として独立させ、第一、第二の2講座を担当 開校した日本女子大学の教授を兼務し家政学部で生理学を教える 欧米各国に派遣され、最新資料や情報を入手して1902年帰国 |
| 1903 | 永井潜が生理学教室の助手となりドイツ留学。平塚は大澤の生理学を受講 |
| 1904 | 『社会的衛生 体質改良論』を出版 |
| 1905. 4. 3 | 日本花柳病予防会発会し、副会長となる |
| 1906 | 永井潜が帰国し、生理学教室の助教授となり、生理学第二講座を担当 |
| 1908. 3~5 | 『読売新聞』に「生理学上より観たる婦人の根本問題」を31回連載 |
| 1909 | 『通俗結婚新説』を出版 |
| 1914 | 日本医学会会頭。講義を『日本女子大学講義【9】生理学』にまとめる |
| 1915. 1 | 教授職を退官し名誉教授に。後任に永井潜が教授に就任し第一講座担当。大澤は第二講座を橋田邦彦助教授が留学から帰国するまで3年間担当 |
| 1920. 11 | 「花柳病男子の結婚制限に就て」『性』2-6で請願を採択すべき、とする |
| 1924 | 第3回大日本生理学会で「性学に関する一、二の統計」を発表 |
| 1927. 1. 10 | 胃癌で死去(76歳) |

【主要参考文献】

- ① 大橋勲「大澤謙二」東三文化研究会編・発行『東三偉傑史伝綜合講座第二輯』1932年
 ② 「東京大学医学部生理学教室史」日本生理学教室史編集委員会編『日本生理学教室史(上巻)』日本生理学会、1983年
 ③ 東大生理学同窓会編『復刊 投影蟲語』1979年

古屋芳雄 こや・よしお (1890. 8. 7~1974. 2. 22)

1915年に東京帝国大学医科大学を卒業して衛生学教室に入り、1919年には東京医学専門学校教授となり、1926年には千葉医科大学助教授となって翌年から一年間ドイツに留学した古屋は、一方では白樺派同人として小説も出版し相当に版を重ねていた。留学中もまだ「文学で身を立つべきか、医学で身を立つべきか」悩んでいたが、1928年7月帰国後、白樺派は下火となっていたことから、医学で身を立てることとなった。「出遅れた医学者の焦り」か、衛生学でなく「まだ誰も手つけていないかった民族衛生学をやろう」と決意する。基礎理論から始めようと、生物測定学と遺伝統計学の研究をし、『医学統計法』を書く。

1930年永井潜らと日本民族衛生学会創立に参加し、常務理事となる。11月30日の発会式では記念講演「産児調節と社会的貧困」をおこなっている。1931年3月創刊の機関紙『民族衛生』にも論文を掲載していく。この年『優生学原理と人類遺伝学』を出版する。

1932年には金沢医科大学の衛生学の教授となって金沢に赴く。1935年『改造』2月号の「断種法とその民族生物学的背景」では法令化の動きを紹介している。10月には、日本民族衛生協会（学会を改称）石川支部を永井会長、県知事、金沢市長、医科大学長、医師会長ら臨席のもと設立し、支部長に就任。金沢医大在職中は教室員との民族生物学の共同研究がなされ、1938年には『民族生物学』を刊行している。

1938年1月厚生省の新設とともに、予防局に優生課が設置され断種法制定へむけての動きが加速されていくなか4月に開会された民族衛生協議会の委員となり、6月には断種法制定の問題を中心に協議する。

1939年5月に勅任技師として厚生省に入省する。当時、予防局中心で進行中の国民優生法案の作成に参加する。1940年2月には国立人口問題研究所の参与として入所し、「東亜共栄圏を建設して、其の悠にして健全なる発展を図る」ための人口政策確立要綱立案過程では「人口政策要綱 古屋試案」を作成するなど、国策的研究の中心人物となっていく。1941年8月厚生省の優生政策を担当する人口局創設とともに同局技師となって人口増強政策をすすめる「生めよ殖えよの運動の尖端に立」つ。

ところが、戦後は一転して、国立公衆衛生院院長として家族計画を推進し、第2回国会に超党派で提出の優生保護法案に賛意を示す。官僚は戦争責任を問われず旧体制のままであり、人口増殖政策推進の中核で活躍した官僚であった古屋は、戦後その政策が180度かわっても、1946年5月には国立公衆衛生院院長のとなり、そのまま先頭にたって新たな人口政策、産児制限を推進していった。

1949年8月の『婦人の世紀』掲載の「優生問題としての人口問題」で、古屋は「政府の積極的指導によって」「逆淘汰」とならない家族計画を推進したのであって、産児制限は「低脳低質なる階級に盛んに行われるのであるならば、優生学的にはむしろ歓迎すべきもの」としている。そして、1970年1月に刊行の『老学究の手帳から』では、国民優生法について、「終戦後、優生保護法と改められた。そして今は人工中絶のことで問題になっているが、じつは民族の質的向上をめざす、世界に類のないよい法律」としている。

古屋芳雄年譜

| 年月日 | 事項 |
|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1890. 8. 7 | 大分県に生まれる。父規盛は医師、母も代々医家の出身 |
| 1912 | 第七高等学校(鹿児島)卒業し、東京帝国大学医科大学に入学するが、医学の勉強よりもドイツの Reclam 本の小説ばかり読む。暉峻義等とは同級生 |
| 1915. 12 | 東京帝大医科大学医学科を卒業し、衛生学教室に入る |
| 1916 | 暉峻の住む桜新町に転居。隣家の岸田劉生との交流から白樺派同人となる |
| 1919 | 倉田百三の勧めで小説「地を嗣ぐ者」を岩波書店より出版し、版を重ねる 東京医学専門学校(現、東京医大)教授となる |
| 1926. 3 | 千葉医科大学助教授となる |
| 1927. 3 | ドイツ留学(文部省より)。パリのパスツール研究所に半年滞在後ベルリンへ。Dahlem の Kaiser Wilhelm Institute で Fiseherk 教授に組織培養を学ぶ |
| 1928 | 帰国後、白樺派は下火のため医学に専念することにし、誰も手をつけていない民族衛生学をやろうと決意。生物統計学を研究し『医学統計法』を出版 |
| 1930. 11. 30 | 日本民族衛生学会創立に参加し、常務理事となる。発会式で記念講演 |
| 1931~1932 | 日本女子大学校講師となる |
| 1932. 4 | 金沢医科大学教授(衛生学教室)に就任 |
| 1935. 2 | 「断種法とその民族生物学的背景」『改造』 |
| 10. 19 | 日本民族衛生協会(学会を改称)石川支部設立し支部長となる |
| 1938. 4 | 民族衛生協議会の委員となり、断種法制定の問題を中心に協議 |
| 10 | 第2回人口問題全国協議会での厚相諮問に対する答申起草委員となる |
| 1939. 5 | 勅任技師として厚生省に入省し、民族優生制度案、国民体力法案作成に関与 |
| 10. | 厚生省の「民族優生方策」実施の基本認識に古屋の「逆淘汰」論 |
| 1940. 2 | 国立人口問題研究所(参与)に入所し、「人口政策要綱 古屋試案」を作成して、館稔らと人口政策確立要綱案の作成に関与(1941. 1. 22 要綱が閣議決定) |
| 1941. 6 | 『国土・人口・血液』(朝日新聞社)：「国民優生法積義」掲載 |
| 8. | 厚生省の人口局創設とともに同局技師となる |
| 1942 | 日本民族衛生協会会長となる(1943、1950、1957年度も) |
| 12. | 厚生省研究所(旧公衆衛生院)技師となる(厚生科学部長) |
| 1946. 5 | 国立公衆衛生院(旧厚生省研究所厚生科学部)院長となり、産児制限推進 |
| 1957 | 社団法人日本家族計画連盟会長、人口問題審議会委員 |
| 1974. 2. 22 | 死去 |

【主要参考文献】

- ① 古屋芳雄『老学究の手帖から』社団法人日本家族協会、1979 ② 中村禎里「古屋芳雄と民族生物学」『生物学史研究ノート』12、1967 ③松村寛之『『国防国家』の優生学—古屋芳雄を中心に—』『史林』83-2、2000. 3 ④「古屋芳雄先生に聞く」『公衆衛生』27-1、1963. 1

杉田直樹 すぎた・なおき (1887.9.1~1949.8.29)

東京に生まれる。1912年東京帝国大学医科大学卒業後、呉秀三教授、三宅鉦一助教授の精神病学講座で研究する。1913年10月文部省留学生としてドイツへ留学し、翌年1月からミュンヘン大学クレペリン教授の精神病学教室で学んだ。滞在中は精神病院、精神病患者に関する種々の設備、感化保護事業に関係ある設備などを見る機会を多く持った。

「独逸は先進国であります為か設備の進んだ点が頗る多い……日本に於て雑誌や新聞等で聞き知つて居つた事柄を、直接に見ますると予想外に其設備が完全して居る」(杉田 [1915] 2) と驚いている。またドイツにある設備で日本にはまだないものとして「医学者が関係している所の感化事業の設備」(杉田 [1915] 2) を挙げて、その概要を書いている。

第一次世界大戦戦乱のため8ヶ月ほどの留学で、1914年秋帰国した。翌1915年4月文部省留学生としてアメリカへ留学し、社会問題に対処する精神病学などを学んだ。帰国後1921年1月医学博士学位を取得、4月東京帝国大学医学部助教授となった。このころ低能児、貧民児、感化院収容児などの調査に携わり、これ等の問題に精神病学の立場から1923年『低能児及不良児の医学的考察』を出版した。そこでは「変質者の発生を防ぐには、第一に遺伝の道を塞」(杉田 [1923] 250) ぐこと、優生学的結婚への注意を書き、アメリカの「結婚を禁止する法令」「輸精管や卵巣に手術して絶産せしめる法律」(杉田 [1923] 249、326~327) を紹介している。

1928年11月日本医師会医政調査会で「精神病患者の断種実施に就いて」を講演した。ここでは断種の手術方法(去勢、絶産法、深達レントゲン線照射)を紹介している。さらに「1920年に Binding und Hoche は一論文を公けにし生存の価値なき人間は之を撲滅する必要ありと提唱し、今日の如き独逸の国歩困難な時代には国民は無用の病者や有害な精神病患者等の発生による国家の負担を出来るだけ軽減する必要がある。それには合理的の断種を行ふに如くはないとの意見を出した」(杉田 [1928] 22) とドイツ情報を紹介している。1930年11月日本民族衛生学会発会式では「遺伝と犯罪」を講演した。

1931年5月名古屋医科大学教授に就任し、名古屋に移住した。日本民族衛生学会が提出した「民族衛生振興の建議」には地方理事として名を連ねている。

1933年5月日本民族衛生学会愛知支部を設立、発会式には永井潜の講演もあり杉田は閉会の辞を述べた。6月には愛知支部と名古屋中央放送局との連続講演企画で「知能の遺伝と血族結婚」「犯罪性と断種」を講演した。1931年6月発会式をした三宅鉦一会長日本精神衛生協会の会員となっている。

1936年出版の『治療教育学』では「異常児童を産み出す恐れのある精神異常者、貧困者、無知低能の階級者……さう云ふ階級の方に産児数が多い……安全確実な産児制限の方法としては男子ならば精系結紮、女子ならば輸卵管結紮等の比較的簡単な外科的手術によつて其の受胎の能力を生理的に失はしめることより他ない」(杉田 [1936] 175) と書いている。杉田は治療教育実践化を目的として1937年八事少年寮を開設。1949年8月東京医科大学教授就任が決定したが、8月29日大学へ向う途中狭心症の発作により61歳で急逝。

【引用文献】

- ① 杉田直樹 (1915. 3. 20) 「独逸に於ける感化事業の発達」『国家医学雑誌』338号(1-15)
- ② 杉田直樹 (1923. 2) 『低能児及不良児の医学的考察』中文館書店
- ③ 杉田直樹 (1928. 12. 15) 「精神病者の断種実施に就いて」『東京医事新誌』2602号(21-25)
- ④ 杉田直樹 (1936. 3) 『治療教育学』叢文閣

杉田直樹年譜

| 年月日 | 事項 |
|--------------|-----------------------------------|
| 1887. 9. 1 | 東京に生まれる |
| 1912. 12. 25 | 東京帝国大学医科大学卒業。精神病学講座で研究 |
| 1913. | 文部省留学生としてドイツへ留学 |
| 1914. | 秋、第一次世界大戦のため帰国 |
| 1915. | 文部省留学生としてアメリカへ留学 |
| 1918. | 5月帰国 6月東京帝国大学医科大学講師 |
| 1921. | 1. 12 医学博士学位取得 4. 25 東京帝国大学医学部助教授 |
| 1922. 3. 1 | 「産児制限の問題」を『婦人画報』195号に掲載 |
| 1922. 3. 5 | 下田光造と共著『最新精神病学』出版 |
| 1923. 2. | 『低能児及不良児の医学的考察』出版 |
| 1924. 3. 25 | 『異常児童の病理』出版 |
| 1927. 11 | 松沢病院副院長 |
| 1928. 4. 14 | 「精神異常児の鑑別に就て」を『東京医事新誌』2567号に掲載 |
| 1928. 12. 15 | 「精神病者の断種実施に就いて」を『東京医事新誌』2602号に掲載 |
| 1931. 1. 5 | 『近代文化と性生活』出版 |
| 1931. 3 | 「犯罪と遺伝」を『民族衛生』1巻1号に掲載 |
| 1931. 5. 20 | 名古屋医科大学教授就任 |
| 1933. 5. 10 | 日本民族衛生学会愛知支部発会式で閉会の辞を述べる |
| 1936. | 3. 21 『治療教育学』出版 8. 4 『社会病理学』出版 |
| 1937. 4 | 九仁会を組織し理事長に就任。八事少年寮を開設 |
| 1943. | 名古屋で開催の第42回日本精神神経学会会長をつとめる |
| 1949. 8 | 東京医科大学教授 |
| 1949. 8. 29 | 狭心症の発作により急逝 61歳 |

【年譜作成主要参考文献】

- ① 岸本鎌一(1949. 10) 「杉田教授の業績について」『名古屋医学会雑誌』杉田教授追悼号 63巻5号(145-155)
- ② 堀要(1964. 10) 「精薄教育史上の人々 杉田直樹先生」『精神薄弱児研究』73号 (38-39)
- ③ 精神薄弱問題史研究会編(1988. 2) 『人物でつづる障害者教育史<日本編>』日本文化科学社(122-123)
- ④ 小川英彦(1990. 7) 「杉田直樹の『治療教育』の思想(1)」『障害者問題史研究紀要』33号(27-38)
- ⑤ 伊藤由加里(2000. 3) 『戦前期治療教育思想の研究』名古屋大学(教育学)博士論文

瀬木三雄 せぎ・みつお (1908. 3. 2~1982. 5. 8)

名古屋に生まれる。1936年東京帝国大学医学部大学院卒業後、白木正博教授の婦人科学講座の助手となる。1938年文部省在外研究員としてドイツに留学。瀬木のドイツ留学は瀬木の師である白木教授が厚生省と大蔵省を説得したもので(白木 [1941. 12. 6] 45)、子宮癌の放射線療法と母性衛生施策を視察調査し、翌1939年帰国した。また留学中にも白木から「日本に厚生省という役所ができた。ここで日本として初めての母性衛生の仕事をしたいから……その方面のことを見てくることはできないか」(瀬木 [1977. 4] 137)と書面で知らせがあり、瀬木は母子保健、母性保護行政関係施設も視察。それらを帰国後『日本婦人科学会雑誌』に連載した。白木について「彼の教室ではレントゲン治療の研究が中心であつたが、最近では急角度に社会医学の方向に梶をまげて来た……婦人科医は、母性保護の為に国策の推進力とならねばならぬ」(人物評論 [1941. 8. 16] 25)などと書かれている。

瀬木は1941年3月厚生省に嘱託入省。人口局母子課に勤務し「妊産婦手帳制」制度案作成に携わり、1942年7月妊産婦手帳規程が公布された。妊産婦手帳の「妊産婦の心得」には「丈夫な子は丈夫な母から生まれます。妊娠中の養生に心がけて、立派な子を生みお国につくしませう」などが記載されている。

1940年国民優生法公布された。断種手術、中絶手術などは産婦人科医の協力が欠かせず、1940年8月床次徳次優生課長、青木技師らと日本婦人科学会東京地方会との懇談会が開かれたが、「適応症」の問題は残されたままとなった。青木技師は「妊娠中絶について言へば、医療目的以外は総べて刑法の堕胎罪を構成することになる……従つてその適応症の決定は、直ちに犯罪を構成するや否やの分岐点となつて来る……学会に於いて速かに適応症を決定して、その基準を造られることを切望」(青木 [1941. 7. 5] 26-27)と書いている。瀬木は「優生法は優生学的方面には深き顧慮が払はれているが、産婦人科学的に観察し、その解釈、適用の詳細に多少疑問の余地を残し、従つて産婦人科医として去就に迷ふ点があり、日本婦人科学会に対し、或は厚生省に関係ある産婦人科医として余の許に希望を寄せられる方が少なくない……一産婦人科医の立場に於て医師の希望を紹介し、本法に関与する人々の完全円満なる了解に向つて一步を進めたい」(瀬木 [1942. 6. 6] 23-24)と問題点を挙げ、最後に「殊更に批判を弄せんとするものでは決してない事を附言しておきたい」(瀬木 [1942. 6. 6] 24-25)と書いているが、やはりこれは論議をよんだ。後に瀬木は「産婦人科の立場から国民優生法を批判せる筆者の一文を不満なりとし、警視庁から苦情が持込まれるというようなこともあつた」(瀬木三雄 [1957. 4] 16)と書いている。戦後、産児制限問題と優生法について瀬木は「問題は社会的適応を認めるか否かである……例へば5人も子がある様な家庭では希望に応じて人工流産を許可して宜しい」(瀬木三雄 [1946. 10] 15)としている。1947年瀬木は初代児童局母子衛生課長となったが、翌年退いた。その経緯を『産婦人科の世界』に記載している。1950年7月東北大学医学部公衆衛生学の初代教授に就任。瀬木の父母が創立した瀬木学園を1960年引継いだ。1980年新潟に於いて「瀬木三雄先生を囲むシンポジウム」が開催されたが、その2年後に瀬木は74歳で死去。

【引用文献】

- ① 青木延春 (1941. 7. 5) 「国民優生法と人口妊娠中絶 (附・不妊手術)」『日本医事新報』983号(26-27)
- ② 人物評論(1941. 8. 16) 「白木正博論」『医事公論』1516号(25)
- ③ 白木正博 (1941. 12. 6) 「如心我言」『医事公論』1532号(45)
- ④ 瀬木三雄 (1942. 6. 6) 「優生法と産婦人科学」『日本医事新報』1029号(23-25)
- ⑤ 瀬木三雄 (1946. 10) 「母子保健問題の今日と明日」『産科と婦人科』13巻9・10合併号(11-15)
- ⑥ 瀬木三雄 (1957. 4) 「日本における母子衛生の発達 (2)」『産婦人科の世界』9巻4号(10-16)
- ⑦ 瀬木三雄 (1977. 4) 「母子衛生行政の胎生期<第1回>」『産婦人科の世界』Vol. 29. No4. (135-137)

瀬木三雄年譜

| 年月日 | 事 項 |
|------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1908. 3. 2 | 名古屋に生まれる 父本雄。母せきは戦前戦後名古屋女性のリーダー的存在 |
| 1932. | 東京帝国大学医学部卒業後、大学院入学 |
| 1935. 6. | 「人胎児絨毛に於ける『クローム』親和性細胞集団よりなる特殊構造に就て」を『解剖学雑誌』に発表 |
| 1936. | 東京帝国大学医学部大学院卒業後、婦人科学講座 (主任：白木正博) 助手 12月「人胎児腸上皮に於ける諸種顆粒細胞の発生細胞学的研究 (特に絨毛に於ける『クローム』親和細胞集団に就て)」を『解剖学雑誌』に発表 |
| 1937. 3. | 医学博士学位取得 |
| 1938. 5. | 文部省在外研究員としてドイツ留学 |
| 1939. 8. | ドイツ留学から帰国 「戦前の独逸 (1) (2)」を『櫻蔭』に掲載 |
| 1940. | 「ドイツに於ける母子保護事業の現況」「ドイツに於ける人口科学の医学的諸問題に就て (第1報告)」を『日本婦人科学会雑誌』に掲載 |
| 1941. | 厚生省人口局母子課勤務 第1回厚生技術研究会で「妊婦登録制に就て」を発表 |
| 1943. 4. | 『ナチスの人口医学 —特に母性保護の医学的基礎に就て』出版 |
| 1944. 12 | 『ドイツの健民政策と母子保護事業』出版 |
| 1947. | 児童局母子衛生課長、翌年辞任 統計科勤務 |
| 1950. | 東北大学公衆衛生学初代教授 |
| 1952. 10. | 『幸福な家族計画』出版 |
| 1954. | 第5回国際地理病理学会で「乳癌の地理的・人種的分布」を講演 |
| 1960. | 瀬木学園を継ぐ 共著『新しい家族計画』出版 |
| 1971. | 東北大学退官 同大名誉教授 |
| 1977. | 「手帳保健制 35周年に際して (1) ~ (5)」を『産婦人科の世界』に連載 |
| 1982. 5. 8 | 死去 73歳 |

【年譜作成主要参考文献】

- ① 西内彦彦 (1982. 1-1982. 12) 「日本の母子保健の揺籃」『世界と人口』98号~108号
- ② 大林道子 (1989. 4) 『助産婦の戦後』勁草書房

三宅 鉦一 みやけ・こういち (1876. 3. 24~1954. 7. 6)

東京に生まれる。祖父は良斉、父は東京帝国大学医学部初代学部長の三宅秀で累代医家である。1901年東京帝国大学医科大学を卒業後、呉秀三教授の精神病学講座の助手となる。

1904年から1907年まで欧州に留学、クレペリンの精神病学などを学んだ(三宅 [1907] 48-52)。帰国後「埼玉県の熊谷、浦和の当該児童収容所に出かけ……当該児童の精神、身体の調査を約十日前後に互つて、泊り込んで調べた」(三宅 [1941] 6)と記され、これらの調査発表などにより「私と内務省、殊に社会局との間に或関係が結ばれた」(三宅 [1941] 6)とあり、後の各委員会参加が頷かれる。

1907年東京帝国大学医科大学講師、1909年助教授となり、東京巢鴨病院副院長を兼務した。1925年医学部精神病学教授となり東京巢鴨病院院長となった。

1916年政府の保健衛生調査会委員に任命され、第五部精神病を担当し精神病者の調査などを行った。1931年12月10日保健衛生調査会の民族衛生に関する特別委員会で三宅は精神病の遺伝に関して講話し、断種法の実施と「資格の厳密なること」の希望を延べた(保健衛生調査会 [1932] 18)。1930年11月日本民族衛生学会の理事となり、発会式で「社会問題としての精神低格者」を講演し、学会附属優生結婚相談所の顧問となる。

1931年6月日本精神衛生協会の発会式を挙行し、雑誌『精神衛生』刊行を決定した。

1936年東京帝国大学教授と松沢病院長を退官し、同年東京帝国大学内に脳研究室を開設した。この年『精神神経学雑誌』に「三宅鉦一博士還暦記念論文集」が連載されている。

1936年救治会理事長内村祐之と連名で内務大臣宛「精神病対策確立に関する陳情」を提出した。ここには精神病者の増加を「世代を遂ふて健全正常なる人々が減少し、精神異常者が増加する現象は之を民族の変質と称し臆ては其の国力を減退せしむる要因」とし、10項目の実施を求めた。その中の「8. 断種法の制定」には「精神病者の過半数は遺伝性のものなるを以て断種法を制定して出来る限り遺伝性精神病者の発生を予防せられたし」(雑報 [1936] 69-71)と断種法制定を要望している。1937年11月内務大臣諮問「精神病の発生を防止する方策如何」に対する答申を日本精神病院協会理事長三宅鉦一の名で提出した。そこでは「精神病の遺伝に関し慎重なる研究を行ひ……有効適切なる断種法を制定」と遺伝性精神異常者の発生防止に断種法を要望している。1938年厚生省民族衛生協議会、民族衛生研究会のメンバーとなり国民優生法制定に向けた会議に出席。日本学術振興会第26優生遺伝小委員会委員長となる。三宅は断種法について「理想と実際の開き」を『帝国大学新聞』に寄稿、クレペリン、ガウプ等ドイツ精神病学者を紹介し、「理想より云へば……不健全なる分子は皆断種法を以て防ぐ事が合理的である」(三宅 [1938b])と述べている。1938年雑誌『帝国教育』に「民族優生と断種法」を寄稿、ここには「悪族を遺伝すべきものは、皆之れを絶滅すべきことの必要は争ひなきことであり、且これを悉く断種するは絶対必要である」(三宅 [1938a] 60)と書いている。1939年「国民体位向上問題殊に精神機能に就て」(三宅 [1939] 12-14)ではドイツの断種問題にも触れている。1954年7月6日78歳で死去。『精神神経学雑誌』の同年12月号には内村祐之の弔辞が掲載されている。

【引用文献】

- ① 三宅鉦一 (1907. 3. 5) 「三宅鉦一氏の近信」『神経学雑誌』6巻1号(48-52)
- ② 保健衛生調査会 (1932. 4) 『保健衛生調査会第十六回報告書』
- ③ 「雑報」(1936. 10. 28) 『精神神経学雑誌』40巻10号(69-71)
- ④ 「雑報」(1937. 12. 10) 『精神衛生』11号(58-61)
- ⑤ 三宅鉦一(1938. 9) (1938a) 「民族優生と断種法」『帝国教育』719号(59-71)
- ⑥ 三宅鉦一(1938. 6. 27) (1938b) 「理想と実際の開き」『帝国大学新聞』726号(5)
- ⑦ 三宅鉦一 (1939. 7. 1) 「国民体位向上問題殊に精神機能に就て」『日本医事新報』877号(12-14)
- ⑧ 三宅鉦一 (1941. 1) 「本邦に於ける特殊児童保護問題の回顧と一、二の希望」『児童保護』11巻1号(2-10)

三宅鉦一年譜

| 年月日 | 事項 |
|--------------|------------------------------------------|
| 1876. 3. 24 | 東京に生まれる 祖父は良斎、父は東京帝大医学部長の三宅秀で累代医家 |
| 1901. 12. | 東京帝国大学医科大学卒業 |
| 1902. 2. | 東京帝国大学医科大学精神病学講座助手 東京府巢鴨病院院医 |
| 1904. | 欧州留学 |
| 1907. | 5月帰国 8月東京帝国大学医科大学講師 |
| 1909. | 3月医学博士学位取得 5月東京帝大医科大学助教授 東京府巢鴨病院副院長 |
| 1916. | 保健衛生調査会委員第五部精神病を担当 |
| 1925. 6. | 東京帝国大学医学部精神病学講座教授 東京府松沢病院長 |
| 1930. | 第一回国際精神衛生会議に出席 (5月5日～10日於ワシントン) 8月帰国 |
| 1930. 11. 30 | 日本民族衛生学会理事となり、発会式で講演 |
| 1931. | 6月日本精神衛生協会発会式 |
| 1936. 3 | 東京帝国大学教授退官、東京府松沢病院長退職 医学部脳研究室主任教授 |
| 1936. 8. 23 | 三宅鉦一、内村祐之で内務大臣宛「精神病対策確立に関する陳情書」提出 |
| 1937. 11 | 内務大臣宛「精神病の発生を防止する方策如何」答申に「去勢」「断種法」あり |
| 1938. 2. 19 | 日本精神衛生協会、日本医師会と合同で断種に関する懇談会 (三宅、八木等) |
| 1938. 4. | 日本学術振興会第26優性遺伝研究小委員会委員長 |
| 1938. 4. 22 | 4月厚生省民族衛生協議会委員 11月厚生省民族衛生研究会委員 |
| 1938. 12. 7 | 日本精神衛生協会主催精神薄弱問題座談会 松原優生課長の「精神薄弱と断種法」談あり |
| 1941. 2. 22 | 「断種と酒精中毒」を『日本医学及健康保険』3221号に掲載 |
| 1954. 7. 6 | 死去 |

【年譜作成主要参考文献】

- ① 金子準二 (1963. 10) 『三宅鉦一博士事績』三宅鉦一博士事績編纂委員会 (復刻 大空社 198. 3)
- ② 風祭元 (1994. 11) 「三宅鉦一」『続・精神医学を築いた人びと (下巻)』ワールドプランニング(83-100)
- ③ 岡田靖雄(2002. 6) 「断種法史上の人びと (その五) —三宅鉦一—」『日本医史学雑誌』48-2(306-307)

八木逸郎 やぎ・いつろう(1863.9~1945.1.4)

奈良県に生まれる。東京医科大学別課卒業後ドイツのロストック大学へ留学、帰国後眼科医を開業。奈良市会議員、県会議員を経て1908年5月第10回総選挙で初当選し帝国議会衆議院議員となる。1915年3月第12回総選挙で落選したが、1917年4月総選挙で当選、以降1937年4月総選挙まで連続当選している。1916年11月大日本医師会設立に参画。

1920年第42回帝国議会へ「学校衛生振興に関する建議案」を提出「大戦乱の結果、其波動が世界中の各国に響きまして、世界改造の声が頗る高まって参りまして……民力の発展、国権の拡張……国民の体軀の健全でなければならぬ」(衆議院 [1983b] 629) と説明した。

1930年中馬興丸提出の「帯患者結婚制限法制定に関する建議案」の賛成者の一人となっている。1934年1月第65回帝国議会へ荒川五郎と池田秀雄は「民族優生保護法案」を提出したが、八木はこの案の賛成者になっていない。

1934年5月30日八木が中心となり、内務省衛生局長外四課長、民族衛生学会の永井、加用、吉益が出席し断種法案提出の協議会を開き、政府からの提出などを協議したと思われるが翌年1935年2月第67回帝国議会へは昨年と同じ法案を八木、荒川、池田、青木亮貫、が提出したが、審議未了となる。同議会で八木の発言はない。

1936年12月民族衛生協会の永井が中心となり、三宅、吉益、加用、正木、斉藤、荒川、八木が会合し、第70回帝国議会へ提出する断種法草案を決定し、八木、荒川らが議会へ提出したが、議題とならなかった。1938年1月25日第73回帝国議会へ八木は単独で前回の「民族優生保護法案」を提出したが病気のため民族優生保護法案委員を辞任、本会議では青木が簡単に説明した。法案は委員会で審議未了となる。

1938年12月第74回帝国議会へ八木は村松久義と「民族優生保護法案」を提出。八木は健康上の理由で本会議での説明を村松に託す。1939年2月民族優生保護法案委員会で初めて八木は提出者として説明した。八木は医者を経験から、妻が癲癇の男性から「生まれた子供に向つて非常な苦痛を与へることになり…之を予防して」と要請されたが「医者は…予防すると云ふ権利を持つて居るか否や」と考えていたところ、民族優生についての知識を得「法律を作つて子孫の健全を図る」(衆議院 [1996b] 33-34) ことを考えたと提出の動機を説明。委員会では第14条に「故なく」を挿入して可決したが、八木はこの委員会で、もし貴族院で可決されなかったならば「次の議会には是非政府案として提出するやうに」と発言、政府側は「只今の御発言は諒承致しました」(衆議院 [1996b] 60) と回答した。本会議で可決後貴族院へ送付、貴族院の委員会で審議未了となった。

1940年3月第75回帝国議会へ政府は「国民優生法案」を提出、八木は国民優生法案委員会委員長となり、自らの質問はない。「社会に害を流し、実際誰が見ても認めて居る、此の悪質の『アルコール』中毒患者を入れる」(衆議院 [1997b] 194) と主張する田中委員に八木は「田中さんのは質問と云ふよりは、寧ろ学説です」(衆議院 [1997b] 194) と退けた。国民優生法案は1940年3月26日議会最終日に可決成立した。

1942年4月総選挙に八木は立候補していない。1945年1月81歳で死去。

【引用文献】

- ① 衆議院(1983b)『第42回帝国議会衆議院委員会議録23』
- ② 衆議院(1996b)『第74回帝国議会衆議院委員会議録 昭和編 108』
- ③ 衆議院(1997b)『第75回帝国議会衆議院委員会議録 昭和編 124』

八木逸郎年譜

| 年月日 | 事 項 |
|--------------|------------------------------------------------------------------------|
| 1863. 9. | 奈良県に生まれる 父は重義 |
| 1882. | 東京医科大学別科※卒業後、ドイツのロストック大学へ留学 帰国後眼科医を開業 奈良市会議員、奈良県会議員 奈良市及び奈良県医師会長 |
| 1908. 5. 15 | 第10回総選挙で初当選、衆議院議員となる |
| 1911. 6. 7 | 長男一男生まれる(後に衆議院議員) |
| 1915. 3. 25 | 第12回総選挙で落選 |
| 1917. 4. 20 | 第13回総選挙で当選(以降1937年第20回総選挙まで連続当選) |
| 1920. | 第42回帝国議会へ「学校衛生に関する建議案」を提出 |
| 1930. 5. 1 | 第58回帝国議会へ中馬提出「帯患者結婚制限法制定に関する建議案」賛成者となる |
| 1934. 5. 30 | 永井潜、衛生局長らと断種法協議会に参加 |
| 1935. 2. 9 | 第67回帝国議会へ「民族優生保護法案」を荒川らと提出 |
| 1936. 12. 2 | 永井、吉益、荒川らと会合し、断種法草案を確定、次議会提出を決定 |
| 1937. 3. 4 | 第70回帝国議会へ「民族優生保護法案」を荒川らと提出 |
| 1938. 1. 25 | 第73回帝国議会へ「民族優生保護法案」を八木単独で提出(荒川は1937年4月総選挙で落選) |
| 1938. 12. 27 | 第74回帝国議会へ「民族優生保護法案」を村松と二人で提出 |
| 1940. 3. 13 | 第75回帝国議会衆議院国民優生法案委員会委員長となる |
| 1942. 4. 30 | 第21回総選挙に立候補せず |
| 1945. 1. 4 | 81歳で死去 |

※ 「東京大学精神医学教室120年」編集委員会・編(2007.3)『東京大学精神医学教室120年』(275-276)によると東京医科大学別課は1875年5月「医師速成のため東京医学校に通学生教場(のち“別課”と改称)を置く」とあり、1889年6月「別課医学、最後の卒業生をおくりだして消滅」したとある

【年譜作成主要参考文献】

- ① 記事(1928.3.24)「医薬界新代議士月旦 八木逸郎君」『医事公論』818号(28)
- ① 記事(1942.1.17)「八木逸郎翁 一医家出身の政界長老」『日本医事新報』1009号(70)
- ② 衆議院・参議院編(1990.11)『議会制度百年史 衆議院議員名鑑』(661)

吉益脩夫 よします・しゅうふ (1899. 7. 11~1974. 7. 14)

岐阜県大垣市の代々医家に生まれる。1924年東京帝国大学医学部卒業、呉秀三教授の精神病学講座助手となる。翌年東京帝国大学文学部大学院（心理学専攻）へ入学。在学中司法省から受刑者の精神医学的研究を嘱託され、各地の刑務所で犯罪者の研究する。1931年東京帝国大学文学部大学院（心理学専攻）を卒業、この年に任意断種は可の立場で『社会防衛としての断種の問題』を出版した。

1934年日本民族衛生学会の断種法草案起草のための会合に出席。八木逸郎議員を介して内務省衛生局長らとの断種法協議会にも永井潜らと出席し、日本民族衛生学会の断種法草案起草に深く関わった。1936年三宅鉦一教授主宰の脳研究室に入り、遺伝病理学、優生学、犯罪学、双生児などを研究。1938年厚生省予防局の民族優生協議会委員となり国民優生法制定に向けた会合に出席している。

1940年4月7日日本精神神経学会総会に於いて「精神病質の遺伝生物学的考察 双生児研究より見たる犯罪者の遺伝素質と環境の意義」の宿題報告をした。この研究について吉益は「犯罪者は精神病質研究の好個の資料であり、双生児法は犯罪原因としての遺伝と環境の意義を明かにするために不可欠の手段である。之によつて精神病質の本態も自ら明かとなると云ふことが出来る」（吉益 [1941] 10）と双生児研究を報告した。吉益の「双生児法による遺伝生物学的研究が特記すべきである」（中田 [1979] 85）との評があるが、「戦後長くドイツ精神医学会では極端なまでに双生児研究や遺伝研究が忌避された……いずれこの問題の検討は必要」（東京大学精神医学教室 120年編集委員会編 [2007] 107）との指摘がなされたのは2007年である。

吉益は1931年には「合衆国の如き特別な断種法を制定する必要はなく、寧ろ障害の条項に補足を設け、之によつて優生学的断種を許す……現今の遺伝学の知識では強制的断種を行ふことは不適當……優生学的断種の適応を決定する権利は個々の医師でなく、必ず官庁の指命した二人以上の専門家に与へらるべき」（吉益 [1931] 69~70）としていたが、厚生省の断種法制定に関わり、1940年には「国家社会の利益は個人の利益に先き立たなければならぬ……或る程度の強制も……決して反対ではない」（吉益 [1940] 213）となった。

1961年『優生学の理論と実際』の再版にあたり「優生学の理論において、今日急に大きな転換や修正を余儀なくされるようなところはなかった」（吉益 [1961] 序）とし、1948年の優生保護法は「当面の社会的危機を救済するため」（吉益 [1961] 188）との見解を示し、「強制断種の対象となるものは反社会性の明瞭なものに限らるべき……精神病質者の断種はできるだけ任意に行なうことが望ましい」（吉益 [1961] 199）と任意断種を主張している。さらに「かつてのドイツにおけるごとく、断種法が独裁主義者の恣意に任せられてはならない。そのためにも強制断種は立法さるべきでない」（吉益 [1961] 166）との記述があり、言説が時代によって変化がみられる。

優生保護法に対しは「優生法にさらに母性保護法と優生保護相談所に関する法律とが加えられた」（吉益 [1961] 196）として今後の再考を望んでいる。1974年75歳で死去。

【引用文献】

- ① 吉益脩夫 (1931. 4) 『社会防衛としての断種の問題』日本犯罪学会出版部
- ② 吉益脩夫 (1940. 9) 『優生学の理論と実際』南江堂
- ③ 吉益脩夫 (1941. 9) 「精神病質の遺伝生物学的考察 双生児研究より見たる犯罪者の遺伝素質と環境の意義」『精神神経学雑誌』45 卷 9 号 (1-77)
- ④ 吉益脩夫他 (1961. 3) 『優生学』南江堂
- ⑤ 中田修 (1979. 8) 「第 10 回 吉益脩夫」『臨床精神医学』8 卷 8 号 1979 年 8 月号 (81-92)
- ⑥ 東京大学精神医学教室 120 年編集委員会編 (2007. 3) 『東京大学精神医学教室 120 年』新興医学出版

吉益脩夫年譜

| 年月日 | 事 項 |
|-------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1899. 7. 11 | 岐阜県大垣市に生まれる 家は代々医家 |
| 1924. 3. | 東京帝国大学医学部卒業 呉秀三教授の精神病学講座で研究 |
| 1925. 4. | 東京帝国大学文学部大学院心理学科入学 |
| 1931. | 東京帝国大学文学部大学院心理学科卒業 日本精神衛生協会会員 『社会防衛としての断種の問題』出版 |
| 1932. | 日本精神衛生協会講演会で「変質並に優生学断種に就て」を講演 日本民族衛生学会総会（在京評議員会で代える）で機関誌の編集幹事となる 日本民族衛生学会第 2 回学術大会で「犯罪生物学より見たる教化の問題」を研究発表 |
| 1934. | 1 月日本民族衛生学会の断種法案起草のための第 1 回会合出席 5 月断種法協議会（日本民族衛生学会策定の断種法案をもち、八木逸郎議員を介して内務省衛生局長らと会合）に永井潜らと出席 |
| 1936. | 三宅教授が退官後開設の脳研究室で心理学・精神衛生など研究 |
| 1937. 4. | 日本精神衛生協会常務理事 |
| 1938. | 4 月厚生省予防局主催第 1 回民族優生協議会出席 5 月日本精神衛生協会「断種問題に関する理事懇談会」出席 |
| 1940. | 第 39 回日本精神神経学会で宿題報告「精神病質の遺伝生物学的考察」 『優生学の理論と実際』出版 |
| 1942. | 3 月博士学位取得 東京帝国大学医学部講師 |
| 1956. | 脳研究室脳心理学部門教授 |
| 1960. | 東京大学定年退官 東京医科歯科大学教授 |
| 1961. 3. 1 | 共著『優生学』出版 |
| 1974. 7. 14 | 死去 |

【年譜作成主要参考文献】

- ① 中田修 (1979. 8) 「第 10 回 吉益脩夫」『臨床精神医学』8 卷 8 号 (81-92)
- ② 小田晋 (2006. 3) 「吉益脩夫」松下正明総編集『司法精神医学 第 1 卷 司法精神医学概論』中山書房 (158-166)

新・旧優生学とナチ断種法批判に関する日独比較史
——平塚らいてうの優生思想の再考から

平成 17 年度～平成 19 年度 科学研究費補助金(基盤研究 (C))
(課題番号 17530422)

研究成果報告書

発行 平成 20(2008)年 2 月 26 日

発行者 岡田 英己子 (おかだ えみこ)

住所 〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1

首都大学東京都市教養学部 人文・社会系社会学コース 社会福祉学分野



古紙配合率70%再生紙を使用しています